



BOM for Windows Ver.8.0

ユーザーズマニュアル

免責事項

本書に記載された情報は、予告無しに変更される場合があります。セイ・テクノロジーズ株式会社は、本書に関するいかなる種類の保証（商用性および特定の目的への適合性の默示の保証を含みますが、これに限定されません）もいたしません。

セイ・テクノロジーズ株式会社は、本書に含まれた誤謬に関しての責任や、本書の提供、履行および使用に関して偶発的または間接的に起こる損害に対して、責任を負わないものとします。

著作権

本書のいかなる部分も、セイ・テクノロジーズ株式会社からの文書による事前の許可なしには、形態または手段を問わず決して複製・配布してはなりません。

商標

本ユーザーズマニュアルに記載されている「BOM」はセイ・テクノロジーズ株式会社の登録商標です。また、本文中の社名、製品名、サービス名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

なお、本文および図表中では、「TM」（Trademark）、「(R)」（Registered Trademark）は明記しておりません。

目次

本書について

表記について

使用方法

環境説明

第1章 はじめに

1. BOM 8.0監視ソリューション

- (1) ハードウェア、ミドルウェア、アプリケーションのすべてを監視
- (2) 豊富な監視テンプレートを無償公開
- (3) 自立分散型と代理監視型 選択できる監視モデル

2. 特長と使用方法

- (1) セキュリティ
- (2) 問題の監視
- (3) 障害予兆の監視
- (4) リソースの監視
- (5) パフォーマンスの監視
- (6) 対象コンピューターのセキュリティ監視

3. コンポーネント

- (1) 設定を行うアプリケーション
- (2) バックグラウンドで動作するBOM 8.0のコンポーネント

4. BOM 8.0の構成とコンポーネント間通信

第2章 BOMマネージャー

1. BOMマネージャーの解説

2. BOMマネージャーの起動

- (1) アカウントとパスワード

3. BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル) について

- (1) 動作環境のインポート・エクスポート
- (2) 全般
- (3) SMTP情報の設定
- (4) SNMP情報の設定
- (5) アーカイブデータベースの設定
- (6) 「Oracle接続設定」タブについて
- (7) 「SQL Server接続設定」タブについて
- (8) ヘルプの表示

4. 一覧のエクスポート

5. MMC共通メニューについて

第3章 ローカル監視、代理監視、リモート接続

1. インスタンスの解説

- (1) インスタンスの監視開始と監視終了

2. 監視の方法

- (1) ローカル監視
- (2) 代理監視
- (3) リモート接続

3. ローカル監視の初期スタートアップ

4. 代理監視の初期スタートアップ

- (1) 代理監視用インスタンスの作成手順
- (2) 代理監視設定のポイント

- (3) 代理監視設定が正しく監視できない場合のトラブルシューティング
- 5. リモート接続の初期スタートアップ
- 6. ライセンス管理
- 7. インスタンスのプロパティ
 - (1) 「全般」タブ
 - (2) 「情報」タブ
 - (3) 「アーカイブ設定」タブ
- 8. インスタンスのコンテキストメニュー
 - (1) テンプレートのインポート
 - (2) 監視設定のエクスポートとインポート
 - (3) 監視設定一覧の出力
 - (4) すべてのログのクリア
 - (5) 削除
 - (6) プロパティ

第4章 監視グループ

- 1. 監視グループについて
- 2. 監視グループの作成
- 3. 監視グループのコピー
- 4. 監視グループの有効化/無効化
- 5. 監視グループのIDの変更
- 6. 監視グループのスケジューリング
- 7. 監視項目を作成する際の注意
- 8. 一覧のエクスポート

第5章 監視項目

- 1. 監視項目の解説
- 2. 監視項目の作成・削除
- 3. 監視項目のコピー
- 4. 監視項目の有効化/無効化
- 5. 監視間隔の概念
- 6. 監視間隔の設定
 - (1) 監視項目のプロパティから実施する
 - (2) 監視項目のコンテキストメニューから実施する
- 7. 監視ステータスについて
- 8. インスタンスステータスの表示
- 9. 監視項目のログ
 - (1) ログの表示
 - (2) ログ蓄積量の最大件数の変更
- 10. 監視ログリストのエクスポート
- 11. 監視項目の詳細
 - (1) 監視項目の種類
 - (2) 監視項目の概要
 - (3) ディスク容量監視
 - (4) フォルダー・ファイル監視
 - (5) サービス監視
 - (6) プロセッサ監視
 - (7) メモリ監視
 - (8) ディスク処理待ち行列長監視
 - (9) ネットワークインターフェイス監視

- (10) ネットワークアダプター監視
- (11) プロセス監視
- (12) パフォーマンスカウンター監視
- (13) プロセスリスト監視
- (14) イベントログ監視
- (15) テキストログ監視
- (16) BOMヒストリー監視
- (17) Ping監視
- (18) ポート監視
- (19) インストールソフトウェア変更監視
- (20) Windows Update監視
- (21) AWS S3 ストレージ容量監視
- (22) iLOログ監視
- (23) iRMCログ監視
- (24) RDS セッション監視（セッション数取得）
- (25) RDS セッション監視（ユーザー／クライアント リスト取得）
- (26) RDS プロセス監視（プロセス数取得）
- (27) RDS プロセス監視（ユーザー／クライアント／セッション リスト取得）
- (28) カスタム監視

第6章 カスタム監視補助

- 1. カスタム監視補助用のテンプレート適用方法
 - (1) カスタム監視補助用監視項目の作成
- 2. カスタム監視補助の設定
- 3. カスタム監視補助の詳細
 - (1) SNMP Get 監視
 - (2) 重複ファイル監視
 - (3) 未アクセスファイル監視
 - (4) CsvViewerについて

第7章 アクション項目

- 1. アクション項目の解説
- 2. アクション項目の作成
- 3. アクション項目のコピー
- 4. アクション項目を有効にする
- 5. アクション項目のログ
 - (1) リザルトペイン表示
 - (2) ログの表示
 - (3) ログ蓄積量の最大件数の変更
- 6. アクション項目におけるローカル監視と代理監視の違い
- 7. アクション項目の詳細
 - (1) アクション項目の種類
 - (2) メール送信とSNMPトラップ送信に必要な環境設定
 - (3) アクション項目の概要
 - (4) サービスコントロールアクション
 - (5) シヤットダウンアクション
 - (6) 監視有効/無効アクション
 - (7) メール送信アクション
 - (8) SNMPトラップ送信アクション
 - (9) イベントログ書き込みアクション

- (10) syslog送信アクション
- (11) AWS S3 ファイル送信アクション
- (12) RDS クライアント通知
- (13) RDS セッションログオフ
- (14) カスタムアクション
- (15) HTTPS送信アクション

第8章 通知

- 1. 通知の解説
- 2. 通知項目の作成
- 3. 通知項目のコピー
- 4. 通知項目を有効にする
- 5. 通知項目のログ
 - (1) リザルトペイン表示
 - (2) ログの表示
 - (3) ログ蓄積量の最大件数の変更
- 6. 通知項目におけるローカル監視と代理監視の違い
- 7. 通知項目の詳細
 - (1) 通知項目の種類
 - (2) メール送信とSNMPトラップ送信に必要な環境設定
 - (3) 通知項目の概要
 - (4) メール送信（通知項目）
 - (5) SNMPトラップ送信（通知項目）
 - (6) イベントログ書き込み（通知項目）
 - (7) syslog送信（通知項目）
 - (8) カスタム通知（通知項目）

第9章 ログ

- 1. ログの解説
- 2. 収集されたイベントログ
 - (1) 収集されたイベントログの表示
 - (2) 収集されたイベントログのローテーション
 - (3) 収集されたイベントログ蓄積量の最大件数の変更
- 3. ヒストリー
 - (1) ヒストリーログの表示
 - (2) ヒストリーログのローテーション
 - (3) ヒストリーログ蓄積量の最大件数の変更
- 4. 各種ログのエクスポート
- 5. 各種ログのクリア
 - (1) ログの種類
 - (2) ログの削除手順

第10章 BOMコントロールパネル

- 1. BOMコントロールパネルの解説
- 2. BOMコントロールパネルの起動
- 3. 「監視サービス」タブ
 - (1) BOMヘルパーサービス ステータス
 - (2) BOMヘルパーサービス設定
 - (3) BOM監視サービス ステータス
 - (4) BOM監視サービスの設定
 - (5) リモートコンピューターのBOMヘルパーサービス、監視サービスの制御

4. 「アーカイブサービス」タブ
 - (1) アーカイブサービス ステータス
 - (2) アーカイブサービスの設定
5. 「ツール」タブ
 - (1) バックアップ時とリストア前後のBOM 8.0の構成について
 - (2) バックアップ処理
 - (3) リストア処理
 - (4) パスワードが削除されたバックアップファイルをリストアした場合の注意事項
 - (5) "設定収集配布ツール"で収集した設定ファイルをリストアした場合の注意事項
6. 「設定ユーティリティ」タブ
 - (1) BOM 設定一括配布ツール
 - (2) BOM 設定収集配布ツール
7. 「バージョン」タブ
8. 「集中監視Webサービス」タブ
9. 「SNMPマネージャーサービス」タブ
10. 「BOM バックアップサービス」タブ

第11章 障害リカバリ

1. バックアップとリストア
2. コマンドラインツール
 - (1) BomCmd.exe
 - (2) MxSysConf.exe

第12章 トラブルシューティング

第13章 エラーコード、エラー内容一覧

1. BOM 8.0監視サービスのヒストリー サービスログ記述内容一覧
2. メール送信エラーコード
3. シャットダウンアクション時のエラーコード表
4. SNMPトラップ送信のエラーコード表
5. サービスコントロール時のエラーコード表
6. イベントログ書き込みアクションのエラーコード
7. BomCmd.exeのエラーコード表
8. MxSysConf.exeのエラーコード表
9. エラーメッセージが特殊なもの

第14章 予約済み変数

第15章 ライセンス表記

本書について

表記について

本書では、以下のとおり省略した記載を行う場合があります。

製品名、または省略しない表記	本書での記載（略称）
BOM for Windows Ver.8.0 SR2	BOM 8.0
BOM for Windows Ver.7.0 (SRなし～SR4)	BOM 7.0
BOM for Windows Ver.6.0 (SRなし～SR2)	BOM 6.0
BOM for Windows Ver.5.0 (SRなし～SR4)	BOM 5.0
BOM Oracle オプション Ver.8.0	Oracleオプション
BOM Linux オプション Ver.8.0	Linuxオプション
BOM VMware オプション Ver.8.0	VMwareオプション
BOM 8.0 マネージャー	BOMマネージャー
BOM 8.0 集中監視コンソール	BOM集中監視コンソール
BOM 8.0 監視サービス	BOM監視サービス
BOM 8.0 アーカイブマネージャー	BOMアーカイブマネージャー
BOM 8.0 アーカイブデータベース管理メニュー	BOMアーカイブデータベース管理メニュー
BOM 8.0 コントロールパネル	BOMコントロールパネル
BOM 8.0 ヘルパーサービス	BOMヘルパーサービス
BOM 8.0 アーカイブサービス	BOMアーカイブサービス
Windows Server 2022、Windows Server 2019、Windows Server 2016	Windows サーバー OS
Windows 11、Windows 10	Windows クライアント OS
SQL Server 2019、SQL Server 2017、SQL Server 2016、SQL Server 2014	SQL Server
Microsoft Management Console	MMC
Amazon Web Services	AWS
Amazon Simple Storage Service	Amazon S3
AWS Identity and Access Management	IAM

製品名、または省略しない表記	本書での記載（略称）
HPE Integrated Lights-Out	iLO
integrated Remote Management Controller	iRMC
C:¥Program Files¥SAY Technologies	BOM 8.0 インストールフォルダー

使用方法

本書には、BOM 8.0を使用する際に必要となる詳細な情報と手順が記載されています。

- BOM 8.0のインストールに関しては'BOM for Windows Ver.8.0 インストールマニュアル'を参照してください。本書はインストールが正常終了した後の実際の使用方法について記述しています。
- 本書の使用にあたっては、Microsoft Windowsオペレーティングシステムについての実践的な知識が必要です。
- 本書には外部のウェブサイトへの URL が記載されている場合があります。
PDF 形式のユーザーズマニュアルでは使用する PDF リーダーによってこの URL が自動的にリンク化される場合がありますが、URL に改行が含まれていると正しいリンク先に遷移できません。このような場合は URL をコピーし、ブラウザーに貼り付けて表示してください。
- 本書に更新・訂正などが生じた際は、弊社ウェブサイト上で情報を公開しますので、あわせて参照してください。

環境説明

- 本書では、コンピューターの操作画面として、主にWindows Server 2022で取得した画像を使用しています。お使いの OS によって表示内容が若干異なる場合がありますが、適宜読み替えてください。
- 本書では"ProgramData"フォルダーがCドライブ直下に存在することを前提としています。何らかの理由で移動させている場合は、現況に合わせて読み替えてください。

第1章 はじめに

BOM 8.0は、きわめて強力で豊富な機能を持つシステム監視と管理のためのプログラムです。

従来のサーバー監視プログラムに比べ、導入、設定、運用が容易で柔軟であることを特長としています。

1. BOM 8.0監視ソリューション

(1) ハードウェア、ミドルウェア、アプリケーションのすべてを監視

BOM 8.0は、プロセッサ、メモリ、ディスクといったサーバーのリソースに関する監視に利用することができます。

また、イベントログ、パフォーマンスカウンター、サービスログ、またはテキストログに有効な情報を書き込む製品であれば、ハードウェアをはじめ、サーバー上で稼働するミドルウェア、アプリケーションも監視対象として簡単に設定することができます。

(2) 豊富な監視テンプレートを無償公開

BOM 8.0では、各種のハードウェア、ミドルウェア、アプリケーションの監視に必要な評価を行い、推奨の監視項目としきい値をセットにした監視テンプレートを無償で公開しています。

ご利用予定もしくはご利用中のハードウェア、ミドルウェア、アプリケーションに合致する監視テンプレートをインポートするだけで、面倒な監視設定を行わなくても、すぐに監視がスタートできます。

監視テンプレートのインポート後、数週間程度運用しながら環境に合わせてしきい値を微調整するだけで、お客様の環境に最適な監視ソリューションを実現することができます。

また、新しい監視テンプレートは隨時Webで公開しています。

(3) 自立分散型と代理監視型 選択できる監視モデル

BOM 8.0は、監視対象コンピューターにBOM 8.0を導入するだけで、監視だけではなくさまざまな通知や自動リカバリまでを、すべて自己で完結して実行できる自立分散型監視モデルを採用しています。

コンピューター監視は最小限のシステムリソースで稼働するため、BOM 8.0専用の監視サーバーを構築する必要はありません。

なお、セキュリティポリシーなどで監視対象コンピューターに余計なプログラムを導入できない場合、BOM 8.0を導入した他の監視コンピューターから、リモートで監視を行うことができる代理監視機能を選択することもできます。

(自立分散型監視モデルと同じ監視機能を利用することができます。)

これらのBOM 8.0の監視機能・監視モデルにより、システム管理者はさまざまなシステム環境やネットワーク構成、特殊用途のシステム監視にも柔軟に対応することができます。

2. 特長と使用方法

(1) セキュリティ

セキュリティ確保のため、サーバー管理者が監視設定を行うコンピューターの権限を制限することや、アクセス範囲を特定のコンピューターに限定することができます。

- 管理者モードと参照モード

1台のコンピューターに監視設定変更操作できるのは1人に限定されます（管理者モード）。

1台のコンピューターに複数のサーバー管理者が同時接続する場合には、参照モードで参照することができますが、設定変更は管理者モードのみ実行できます。

(2) 問題の監視

BOM 8.0を適切に設定することで、システム障害の発生を迅速に検出することができます。また、想定されるシステム障害の内容に応じてリカバリを行うためのアクション機能を設定しておくことができます。

(3) 障害予兆の監視

障害が発生する前のシステム動作の不良を検出できるため、今後発生する可能性がある事象に対して早期に対応を行うことが可能になります。

(4) リソースの監視

BOM 8.0は、メモリやハードディスクドライブなど、システムリソースのステータスを監視します。

ダウンしたシステムや、極端にパフォーマンスが低下したシステムに、プロアクティブに対処することが可能になります。

(5) パフォーマンスの監視

BOM 8.0でシステムのパフォーマンスを監視することにより、サービスレベルの低下を防止することができます。

(6) 対象コンピューターのセキュリティ監視

BOM 8.0は、オペレーティングシステム（OS）が生成するイベントログを監視し、不正なアクセスやログオンの失敗を検出します。

3. コンポーネント

BOM 8.0は複数のコンポーネントで構成されています。

これらのコンポーネントは、1台のコンピューターに導入することも、複数台のコンピューターに分散導入することもできます。

- 各コンポーネントはOSのセーフモードでは動作しません。通常モードで動作させてください。
- JIS2004の文字列を使用した監視内容（監視対象名、監視項目名、インストールパス、検索する文字列等）については非対応です。
- BOM 8.0のコンポーネントには、管理者が必要に応じて設定を行うアプリケーションと、バックグラウンドで動作するサービスがあります。

(1) 設定を行うアプリケーション

- BOMマネージャー

BOM 8.0の監視設定や監視ログといった各種ログの確認を行うには、BOMマネージャーが少なくとも1つ必要です。

BOMマネージャーは、監視グループ、監視項目、アクション項目、通知項目などを設定するために使用できますので、監視対象として着目した項目（ステータス、イベントなど）が、どのような状態になったときに、どのような対処を行うのかを設定することができます。また、BOMマネージャーには各種ログビューアー機能が用意されており、設定を行った監視項目、アクション項目、通知項目の実行結果や監視によって検出したイベントログを確認することができます。

BOMマネージャーはWindows 標準のシステム管理インターフェイスである"マイクロソフト管理コンソール (MMC)"のスナップインとして提供され、標準インストールの場合、BOMマネージャーはBOM監視サービスと一緒に導入されます。

リモートにある対象コンピューターの監視項目などの設定や監視ログなどの確認は、そのコンピューターに接続している BOMマネージャーから行うことができます。

- BOM集中監視コンソール

BOM集中監視コンソールを利用することで、個々の対象システムから監視データを収集し、数多くのシステムのステータスを集中監視することができます。

BOM for Windowsの旧バージョンであるBOM 5.0～BOM 7.0の、基本インスタンス、Linux オプションインスタンス、VMware オプションインスタンスでの監視状況を含め、1つの画面で確認することができます。

リモートおよびローカルの対象システムで稼働するBOMヘルパーサービスから集中監視Webサービスに情報を収集し、監視用端末のブラウザーで集中監視Webサービスに接続することで、BOM集中監視コンソールを利用することができます。

詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 集中監視コンソールユーザーズマニュアル'を参照してください。

- BOMアーカイブマネージャー

BOMアーカイブマネージャーはBOM 8.0のアーカイブデータベースに蓄積されたデータを閲覧するためのコンソールです。

BOMアーカイブマネージャーはWindows標準のシステム管理インターフェイスである"マイクロソフト管理コンソール (MMC)"のスナップインとして提供されます。

詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 アーカイブ ユーザーズマニュアル'を参照してください。

- BOMコントロールパネル

BOMマネージャーやBOM集中監視コンソールの起動、インスタンスの開始と終了を行うことができます。また、バックアップとリストアのためのツール、複数のコンピューターを対象とした監視設定内容の収集と配布、一括配布を行うツール、SNMPマネージャーサービスの設定、BOMバックアップサービスの設定、インストールしたBOM 8.0の各モジュールのバージョンの確認を行うツールが含まれています。

詳細は'[BOMコントロールパネル](#)'を参照してください。

(2) バックグラウンドで動作するBOM 8.0のコンポーネント

- BOM監視サービス（インスタンス）

システム監視を実行するにはBOM監視サービスが少なくとも1つ必要です。

BOM監視サービスは監視設定値を使用して実際の監視を行い、取得したデータはテキストもしくはデータベースに格納します。また、BOM監視サービスは同一の監視元コンピューターに複数作成することができます。

BOM 8.0では1つのBOM監視サービスをインスタンス呼び、代理監視の場合、インスタンスが1つ独立して割り当てられます。

- BOMヘルパーサービス

BOMヘルパーサービスは、前述の'[設定を行うアプリケーション](#)'や'[バックグラウンドで動作するBOM 8.0のコンポーネント](#)'間の通信部分の処理を行います。

- 集中監視Webサービス

集中監視WebサービスはBOMヘルパーサービスと通信を行い、インスタンスの監視データを収集/蓄積します。

集中監視Webサービスにブラウザーで接続することで、BOM集中監視コンソールを利用することができます。

詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 集中監視コンソール ユーザーズマニュアル'を参照してください。

- BOMアーカイブサービス

BOMアーカイブサービスはBOM監視サービスごとに動作し、BOM 8.0の監視取得値を定期的にアーカイブデータベースに蓄積します。

詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 アーカイブ ユーザーズマニュアル'を参照してください。

- BOM SNMPマネージャーサービス

BOM SNMPマネージャーサービスはSNMPトラップを受信し、Windowsのイベントログに書き込み処理を行います。

詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 SNMPトラップ受信機能 ユーザーズマニュアル'を参照してください。

- BOM Syslog受信サービス

BOM Syslog受信サービスはSyslogメッセージを受信し、Windowsのイベントログに書き込み処理を行います。

詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 Syslog 受信機能ユーザーズマニュアル'を参照してください。

- BOM バックアップサービス

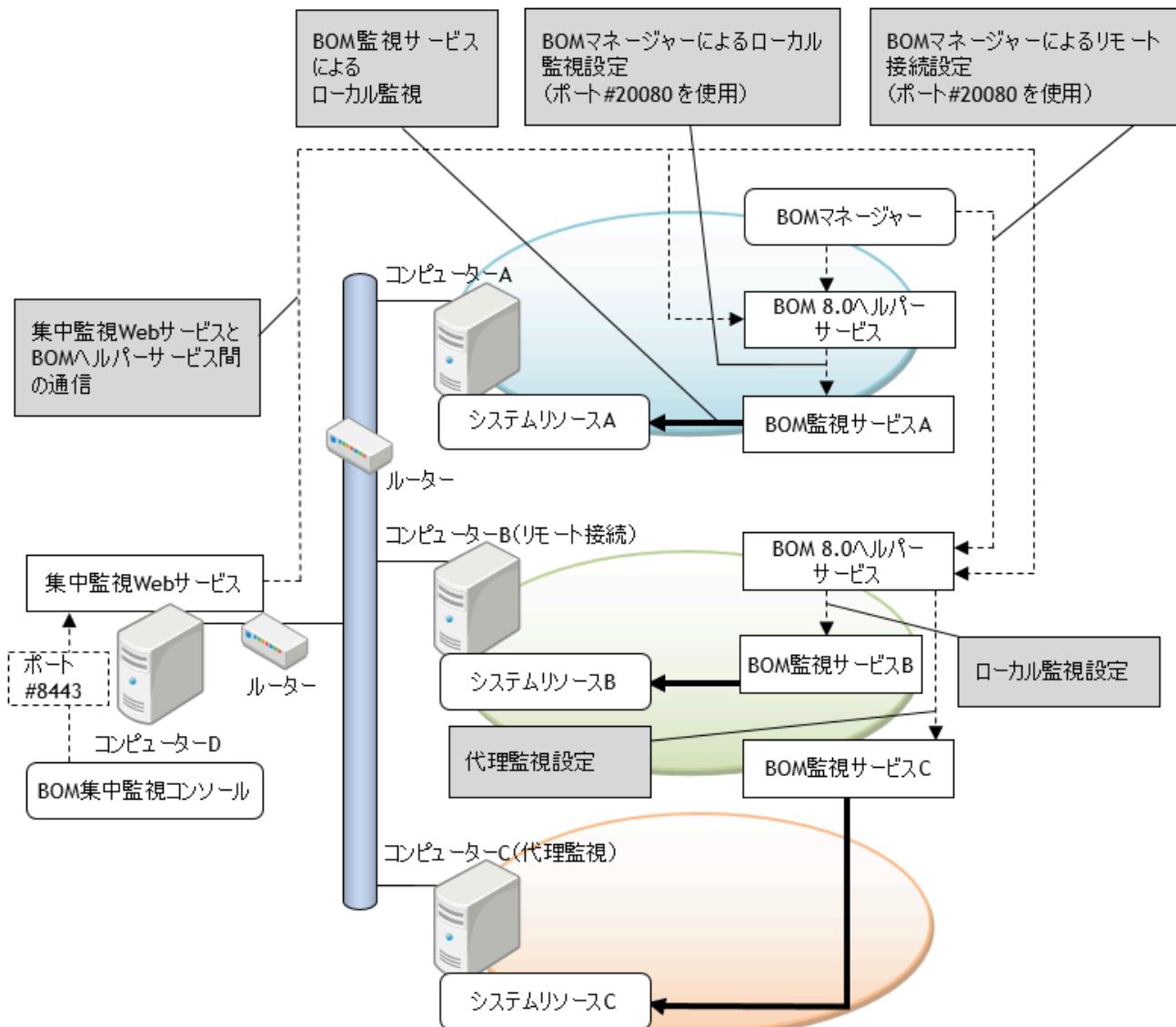
BOM バックアップサービスはBOM バックアップ機能を使用する際にバックグラウンドで動作する、ドライブ単位やフォルダー、ファイル単位でバックアップを行うためのサービスです。

BOM バックアップ機能を使用することで、ローカルマシン、リモートマシンのフォルダー・ファイルを簡単にバックアップできます。

詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 バックアップ機能ユーザーズマニュアル'を参照してください。

4. BOM 8.0の構成とコンポーネント間通信

BOM 8.0のコンポーネント間の通信は、TCP/IPを使用しています。これは、コンポーネントが同じコンピューター上で稼働するスタンドアローン環境でも、別々のコンピューター上で稼働する分散環境でも同じです。



BOM 8.0の構成例と各通信の概略図を上記に示します。この図はBOM監視システムの機能を解説するために、下記のとおり最小限の台数のネットワーク接続されたコンピューターのネットワーク構成図です。

- 図中のルーターは、BOM 8.0環境に必須のコンポーネントではありません。
- コンピューターAはスタンドアローン構成で、コンピューターBはルーターを越えた分散環境にあります。
- BOMヘルパーサービスのインストール時に、BOMヘルパーサービスをWindows ファイアウォールの例外に追加することができます。詳細は、「BOM for Windows Ver.8.0 インストールマニュアル」を参照してください。
- BOMヘルパーサービスのポート番号の変更手順は、「[BOMヘルパーサービス設定](#)」を参照してください。
- BOMヘルパーサービスのポート番号を変更した際には、BOMマネージャーおよびBOM監視サービスの待ち受けポート番号を、「[全般](#)」の手順で変更後のポート番号に合わせる必要があります。
- BOMヘルパーサービスのポート番号を変更した際には、集中監視Webサービスに登録されたインスタンスごとにヘルパーサービスポート番号を変更後のポート番号に合わせる必要があります。変更方法については「BOM for Windows Ver.8.0集中監視コンソールユーザーズマニュアル」を参照してください。

コンピューターDの集中監視Webサービスとブラウザー間の通信は、8443番ポートを使用します。

- 集中監視Webサービスとブラウザー間のポート番号の変更手順については、「[「集中監視Webサービス」タブ](#)」および、「BOM for Windows Ver.8.0集中監視コンソールユーチュアーズ マニュアル」を参照ください。
- 集中監視Webサービスとブラウザー間のポート番号を変更した際には、集中監視Webサービスの接続先URLのポート番号を変更後のポート番号に合わせる必要があります。詳細は、「BOM for Windows Ver.8.0集中監視コンソールユーチュアーズマニュアル」を参照してください。

コンピューターA（BOM監視サービスA、BOMヘルパーサービス、BOMマネージャーを導入）

このコンピューターは、BOM 8.0の標準インストール直後の状態を表しています。

管理者はBOMマネージャーを起動することにより、ローカル接続またはリモート接続で、BOMヘルパーサービスを通じて監視設定を行うことができます。

ローカル接続では、コンピューターAのすべての監視設定が可能です。BOMマネージャーがコンピューターAに導入されているため、BOM監視サービスが稼働するシステムの監視設定は、すべてコンピューターAから設定を行うことができます。この場合、BOM監視サービスAが稼働するコンピューターA、BOM監視サービスBとBOM監視サービスCが稼働するコンピューターBは、すべてコンピューターAから監視設定を行うことができます。

コンピューターB（BOM監視サービスB、BOM監視サービスC、およびBOMマネージャー、BOMヘルパーサービスを導入）

コンピューターAのBOMマネージャーからリモート接続してコンピューターBの監視設定を行います。また、コンピューターBからコンピューターCを代理監視するため、BOM監視サービスBの他にBOM監視サービスCが設定されています。

代理監視とは、BOM 8.0を導入したコンピューターからBOM 8.0を導入していないコンピューターに対して、ネットワークを通じて監視を行う監視方法です。（エージェントレス監視）

コンピューターAからのリモート接続によるコンピューターB、およびコンピューターCの監視設定、また、コンピューターDからのBOM集中監視コンソールのステータス確認は、BOMヘルパーサービスを通じて実施されます。

コンピューターC（BOM 8.0のコンポーネントは未導入）

このコンピューターには、BOM 8.0のコンポーネントが導入されていません。

コンピューターBのBOM監視サービスCが、リモートにあるこの対象コンピューターCを監視するために割り当てられています。

コンピューターBからネットワークを通じてコンピューターCを代理監視していますが、代理監視を行うには管理者権限でコンピューターCにログオン可能なログオンアカウントなどの適切な権限が必要です。

コンピューターD（集中監視Webサービスのみを導入）

このコンピューターには集中監視Webサービスのみが導入されています。集中監視Webサービスは、コンピューターAとコンピューターBのBOMヘルパーサービスを通じて監視ステータスを収集して蓄積するサービスです。

集中監視Webサービスに、コンピューターDのブラウザーで接続することで、収集した監視情報の結果すべてをBOM集中監視コンソールに表示します。

コンピューターDにBOMマネージャーを導入した場合、コンピューターDからコンピューターA、コンピューターB、コンピューターCのすべての監視設定を実施することができます。

第2章 BOMマネージャー

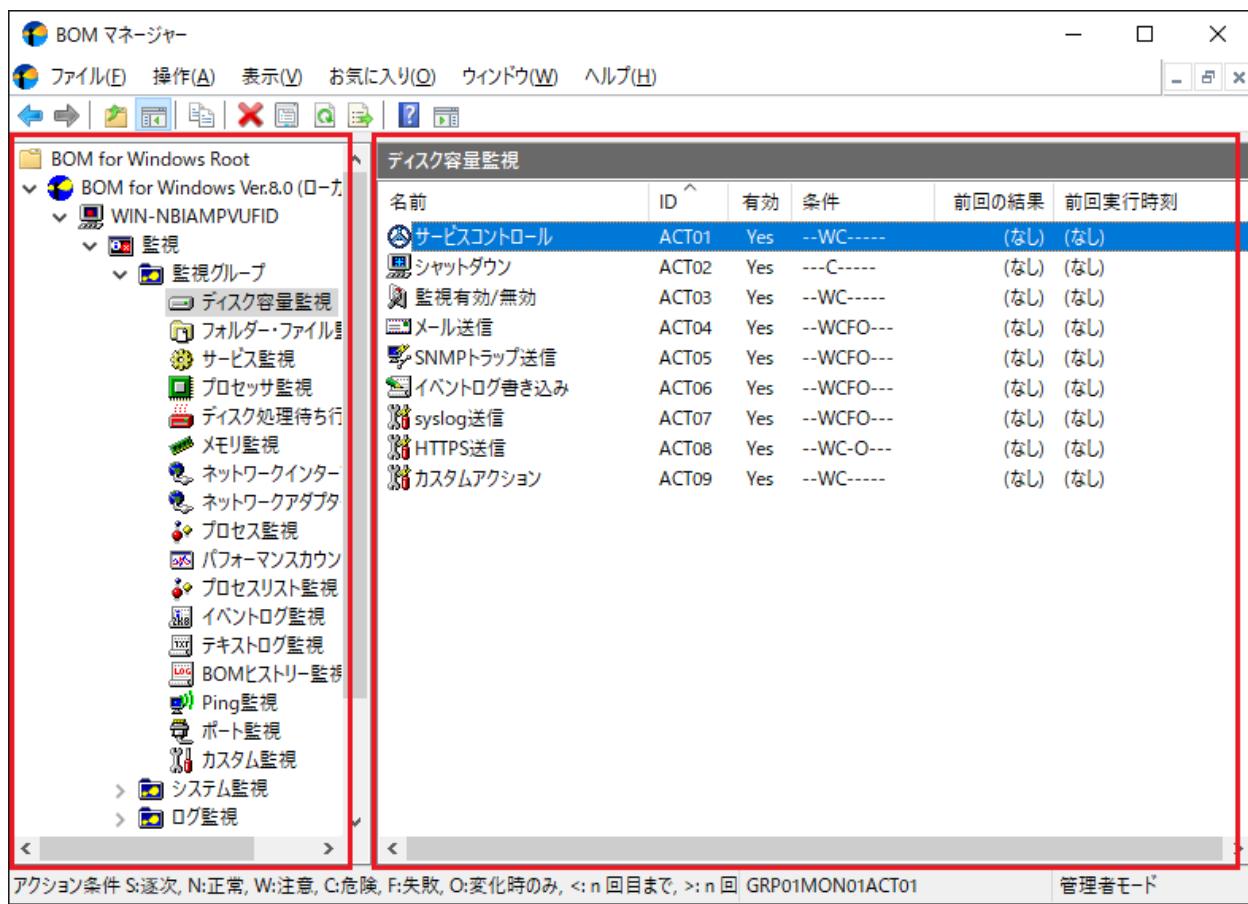
1. BOMマネージャーの解説

BOMマネージャーはWindowsのエクスプローラー画面のように、さまざまな項目がフォルダーツリーのような階層内に設定されています。

本マニュアルでは、BOMマネージャーの左側のペインをスコープペインと呼び、右側のペインはリザルト（結果）ペインと呼びます。

また、スコープペインに表示されるものを"ノード"といい、リザルトペインには"ノード"のもつ情報を表示します。

- スコープペインには、BOM 8.0の監視グループ、監視項目等が配置されています。
- リザルトペインには、スコープペインで選択した項目に属する内容が表示されます。

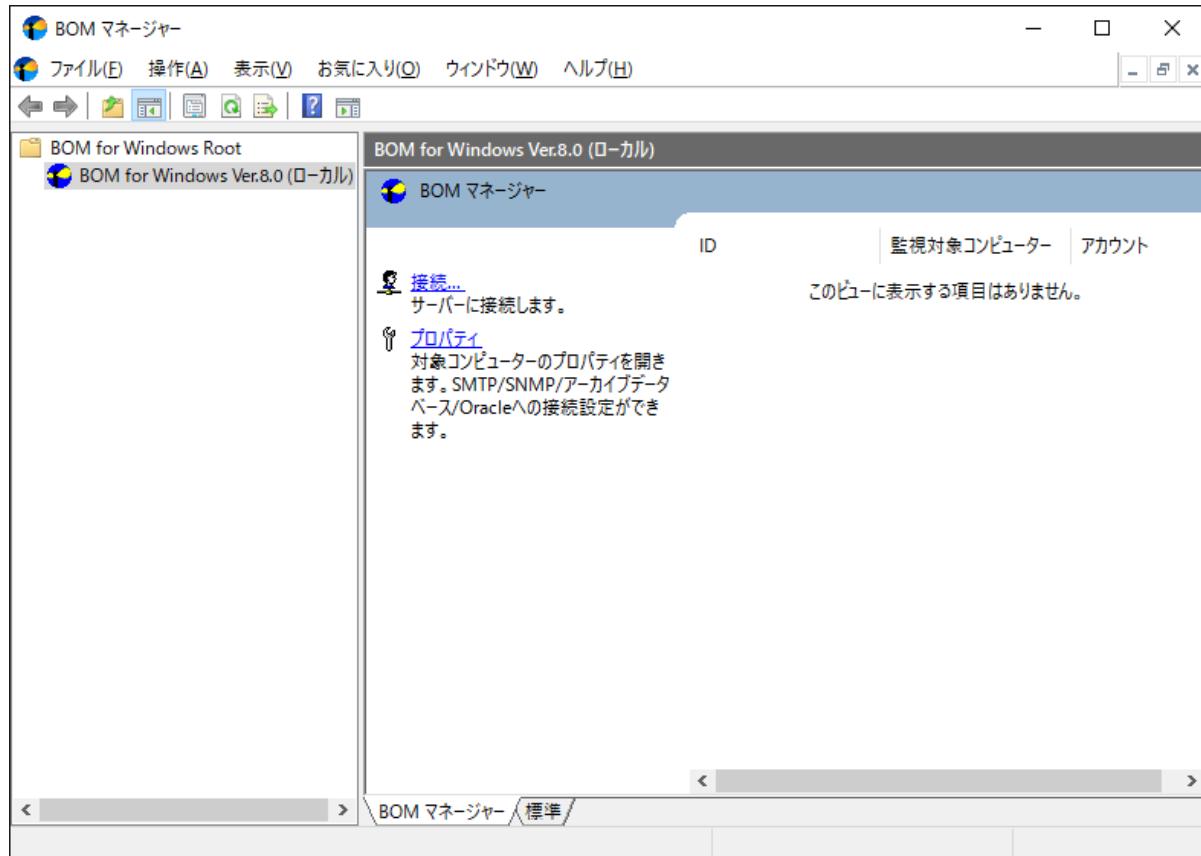


【左枠：スコープペイン、右枠：リザルトペイン】

2. BOMマネージャーの起動

1. BOMマネージャーはOSのスタートメニューからBOM for Windows 8.0の"BOM 8.0マネージャー"をクリックすることで起動できます。

- BOMマネージャーの起動には、管理者権限が必要です。
- BOMマネージャーは、OSのセーフモードでは動作しません。通常モードで起動してください。



2. BOMマネージャーの起動後、リザルトペインにある"接続..."をクリックします。

(1) アカウントとパスワード

BOM 8.0には、管理者モードと参照モードの2つのモードがあります。

管理者モードでは、管理者がBOM 8.0の設定変更を行う時に使用します。

A. 参照モード

参照モードはログインした管理者は監視設定の参照のみに限定され、編集権限はありません。

参照モードの場合、同じ監視インスタンスに対して2台以上のBOMマネージャーから同時に接続することができます。

B. 管理者モード

- 排他制御

管理者モードで同時にログインできる管理者は一人のみです。管理者の1人が管理者モードでログインすると他の管理者は参照モードでのみログイン可能で、監視設定を変更することはできません。管理者モードログイン時に他のマネージャーが管理者モードでログインしようとすると"管理者モードはすでに使用されている"というメッセージが出ます。

- セッションタイムアウト

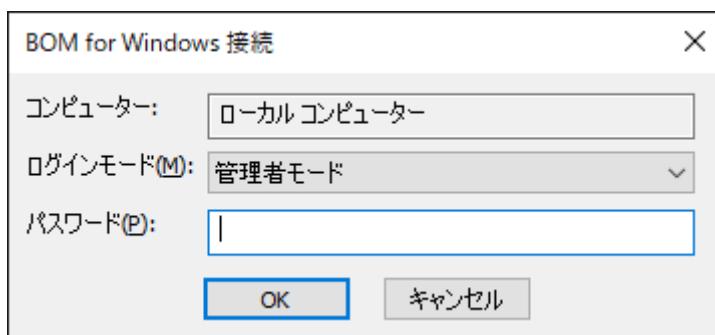
管理者モードでは2つ以上のマネージャーからの同時接続はできないため、BOMマネージャーが管理者モードで切断することを忘れた時に他のBOMマネージャーから管理者モードで接続できなくなることを防ぐことを目的として、BOM 8.0はセッションタイムアウト機能を備えています。管理者モードで接続のまま5分以上無操作状態が続くと、他のBOMマネージャーから管理者モードで接続が可能になります。

(3日以上無操作状態で操作しようとすると"ログオンセッションが無効です"というエラーとなりますので、再接続してください。)

- セッションタイムアウト時間の変更

管理者モードから参照モードに移行するまでの無操作状態の時間は既定値で5分に設定されていますが、この時間を変更したい場合には、秒単位で設定することができます。詳細は、'BOMヘルパーサービス設定'を参照してください。

C. BOMマネージャーの接続



1. 前述の'A.参照モード'、'B.管理者モード'を参考に、使用するモードを選択します。
2. パスワードを入力して、[OK]ボタンをクリックします。
 - BOM 8.0の管理者モードおよび参照モードの既定値パスワードは、「**bom**」（半角英3文字）です。
 - インストール時に、"システム設定ウィザード"をキャンセルした場合、もしくは、システム設定ウィザードの"BOM for Windows マネージャー接続アカウント"画面で何も変更せずに[次へ]ボタンをクリックした場合は、既定のパスワードが設定されています。
 - 管理者モード、参照モードを問わず、BOMマネージャーの起動自体にWindowsの管理者権限が必要です。

D. パスワードの変更

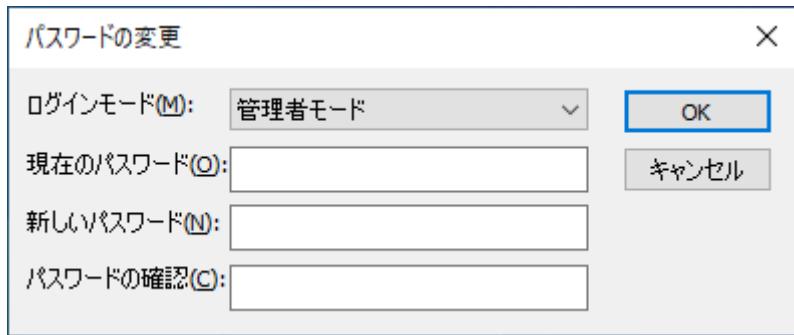
パスワード変更する際は、以下の手順を実施します。

- BOMマネージャーの接続パスワードは、BOMヘルパーサービスに設定されているパスワードです。そのため、BOMマネージャーの接続パスワードを変更することは、BOMヘルパーサービスのパスワードを変更することを意味し、BOMヘルパーサービスへの接続が必要な以下の機能にも影響します。
 - BOM集中監視コンソールのインスタンスパスワード
インスタンスパスワードは参照モードのパスワードが対応しており、変更された場合はポーリングが失敗します。
 - BOM SNMP受信サービスを設定する際のパスワード
管理者モードのパスワードが必要ですので、変更された場合は新しいパスワードを使用する必要があります。

1. BOMマネージャーへ接続します。

- 管理者モードで接続すると、"管理者モード"および"参照モード"のパスワードを変更できます。参照モードで接続した場合は、"参照モード"のパスワードのみ変更できます。

2. "BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"を右クリックし、コンテキストメニューの"パスワードの変更.."をクリックします。



3. 管理者モードで接続した場合は、パスワードを変更したいログインモードを選択します。

4. 選択したログインモードの"現在のパスワード"と、設定したい"新しいパスワード"、確認のための"新しいパスワード"の再入力をおこない、[OK]ボタンをクリックします。

3. BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）について

"BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）"配下の各監視対象（インスタンス）で共通で使用される SMTPメールサーバーの設定、SNMPトラップ先の設定、アーカイブデータベースの設定および、Oracle監視の接続設定は、"BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）"のプロパティ画面より実施します。

また、これらの設定は"動作環境のエクスポート"および"動作環境のインポート"で保存と復元を実施できます。この動作環境のインポートおよびエクスポートも"BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）"から行えます。

- 設定変更はすべてのインスタンスを停止してからでないと実施できません。

(1) 動作環境のインポート・エクスポート

"BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）"を右クリックすると、コンテキストメニューから"動作環境のインポート"と"動作環境のエクスポート"が実行できます。

- 動作環境とは、"BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）"の"プロパティ"画面で設定した、ポート番号、SMTP、SNMP、アーカイブデータベース、Oracleデータベースへの接続設定を示します。

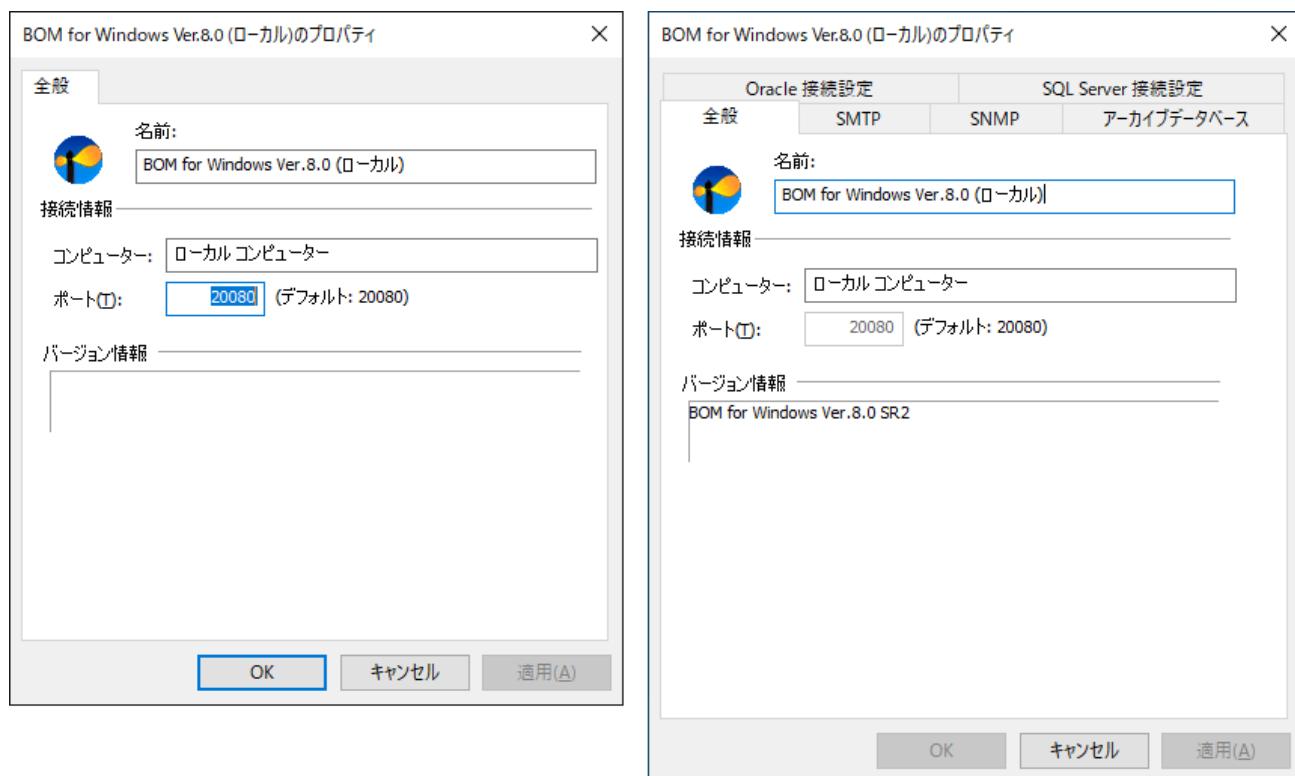
(2) 全般

BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）のプロパティで、最初に開くタブが"全般"です。

BOMマネージャーで"BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）"アイコンを右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックすることで表示されます。

コンピューターの監視区分、BOMヘルパーサービスの待ち受けポート、バージョン情報が確認でき、BOMマネージャーに"接続"していない状態で表示するとBOMヘルパーサービスの待ち受けポート番号を変更できます。

- BOMヘルパーサービスの待ち受けポート番号は、BOMヘルパーサービスのポート番号に合わせて設定してください。
- BOMマネージャーに接続した状態で本画面を表示すると、ポート欄はグレーアウトしており変更できません。
- BOMマネージャーに接続していない状態では、"全般"以外のタブが表示されません。



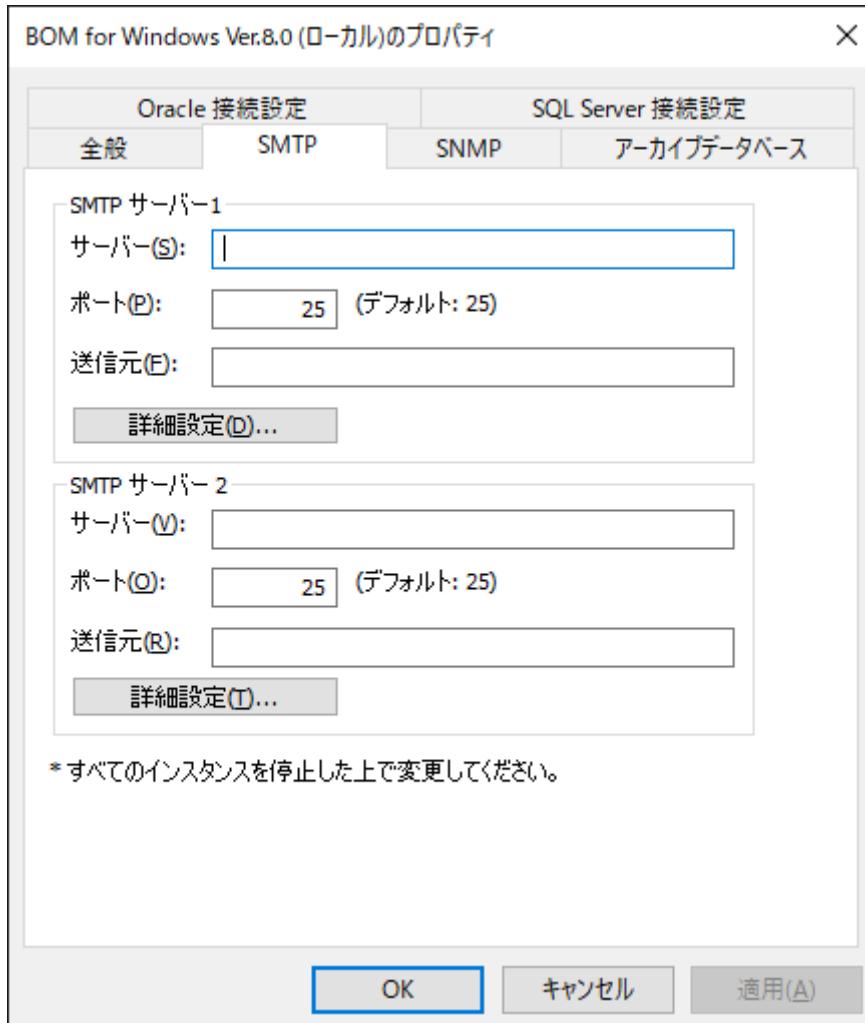
【左画面：BOMマネージャー未接続、右画面：BOMマネージャー接続中】

(3) SMTP情報の設定

SMTP情報は、メール送信アクション項目を使用する際に設定が必要です。

- SMTP情報の設定を行う"SMTP"タブは、BOMマネージャーに接続している状態でなければ表示されません。
- 設定変更はすべてのインスタンスを停止してからでないと実施できません。
- SMTP情報は、"SMTPサーバー1"と"SMTPサーバー2"の2台まで登録が可能です。

1. BOMマネージャーを起動し、接続します。
2. "BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"アイコンを右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックします。
3. "プロパティ"画面の「SMTP」タブに移動します。



4. "SMTPサーバー1"または"SMTPサーバー2"フィールドの"サーバー"テキストフィールドにSMTPサーバーのIPアドレスあるいはホスト名を入力します。
5. "ポート"フィールドにはSMTPサーバーのポート番号を入力します。
 - 既定値として"25"が入力されています。変更する場合は"1"から"65535"までの整数を入力してください。
6. "送信元"フィールドには、送信者メールアドレスを入力します。
7. [詳細設定..]ボタンをクリックすると、"SMTP 詳細設定"画面が表示されます。
 - 認証を使用するSMTPサーバーについて、認証情報の指定をすることができます。設定を行う際は、"認証を使用"チェックボックスにチェックを入れて、以降の操作を行ってください。

- 対応する認証方法は、"SMTP認証"、"POP before SMTP認証"、"SMTP Over SSL/TLS認証"、"STARTTLS認証"、"OAuth2.0認証"です。



• SMTP認証

※ SMTP認証については、CRAM-MD5方式とPLAIN方式とLOGIN方式に対応しています。

- "SMTP認証"ラジオボタンを選択してください。
- "ユーザーID"フィールドにSMTP認証で使用するユーザーIDを、"パスワード"フィールドにはSMTP認証で使用するユーザーIDのパスワードを入力してください。
- [OK]ボタンをクリックします。

• POP before SMTP認証

- "POP before SMTP"ラジオボタンを選択してください。
- "POP3サーバー"フィールドにPOP3サーバーのIPアドレスを入力します。
 - "POP before SMTP"ラジオボタンを選択すると、SMTPサーバーと同一名が"POP3サーバー"フィールドにコピーされますが、変更可能です。
- "POP3ポート"フィールドにはポート番号を、"1"～"65535"の間で入力します。
- POP before SMTP認証はユーザーIDとパスワードを使用して実行するため、これらの値も同時に指定してください。
- [OK]ボタンをクリックします。

• SMTP Over SSL/TLS認証

- "SMTP Over SSL/TLS"ラジオボタンを選択してください。

2. "ユーザーID"フィールドにSMTP Over SSL/TLS認証で使用するユーザーIDを、"パスワード"フィールドにはSMTP Over SSL/TLS認証で使用するユーザーIDのパスワードを入力してください。

3. [OK]ボタンをクリックします。

• STARTTLS認証の場合

1. "STARTTLS"ラジオボタンを選択してください。

2. "ユーザーID"フィールドにSTARTTLS認証で使用するユーザーIDを、"パスワード"フィールドにはSTARTTLS認証で使用するユーザーIDのパスワードを入力してください。

3. [OK]ボタンをクリックします。

• OAuth2.0認証の場合

※ OAuth2.0認証は、Microsoft 365環境のみに対応します。

※ Microsoft 365 管理センターで「認証済み SMTP」を"ON"にしていないと、メール送信がエラーになります（既定値は"OFF"）。

※ Microsoft AzureおよびMicrosoft 365の設定や、各値の取得方法については、マイクロソフト社に確認してください。

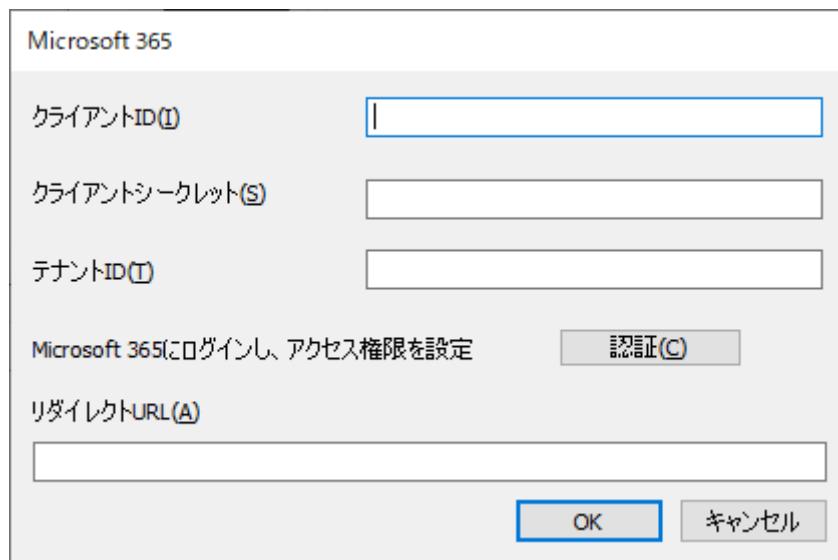
1. "OAuth2.0"ラジオボタンを選択してください。

2. [Microsoft 365]ボタンをクリックします。

3. "Microsoft 365"画面が開きます。

"クライアントID"欄 (Azure Active Directory上では"アプリケーション (クライアント) ID")、"クライアントシークレット"欄、"テナントID"欄にMicrosoft AzureのAzure Active Directoryから取得した値し、[認証]ボタンをクリックします。

- "クライアントシークレット"欄には、"クライアントシークレット"の「シークレットID」ではなく、「値」を入力してください。



- マイクロソフト社参考情報（2025年1月8日現在）

Office アドインガイド - OAuth を使用して IMAP、POP、SMTP 接続を認証する

<https://learn.microsoft.com/ja-jp/exchange/client-developer/legacy-protocols/how-to-authenticate-an-imap-pop-smtp-application-by-using-oauth>

- Microsoft Azureでの設定について

- アプリケーション設定に登録するリダイレクトURIには、以下の値を設定してください。

http://localhost/MxMail/

- APIのアクセス許可には、"SMTP.Send"および"offline_access"を付与してください。

4. 自動的にブラウザーが起動します。

Microsoft 365にログインし、アクセス権限を設定してリダイレクトURI（URL）を取得します。

5. 取得したリダイレクトURIを"リダイレクトURL"欄に入力し、[OK]ボタンをクリックします。

8. [OK]ボタンまたは[適用]ボタンをクリックし、設定を保存します。

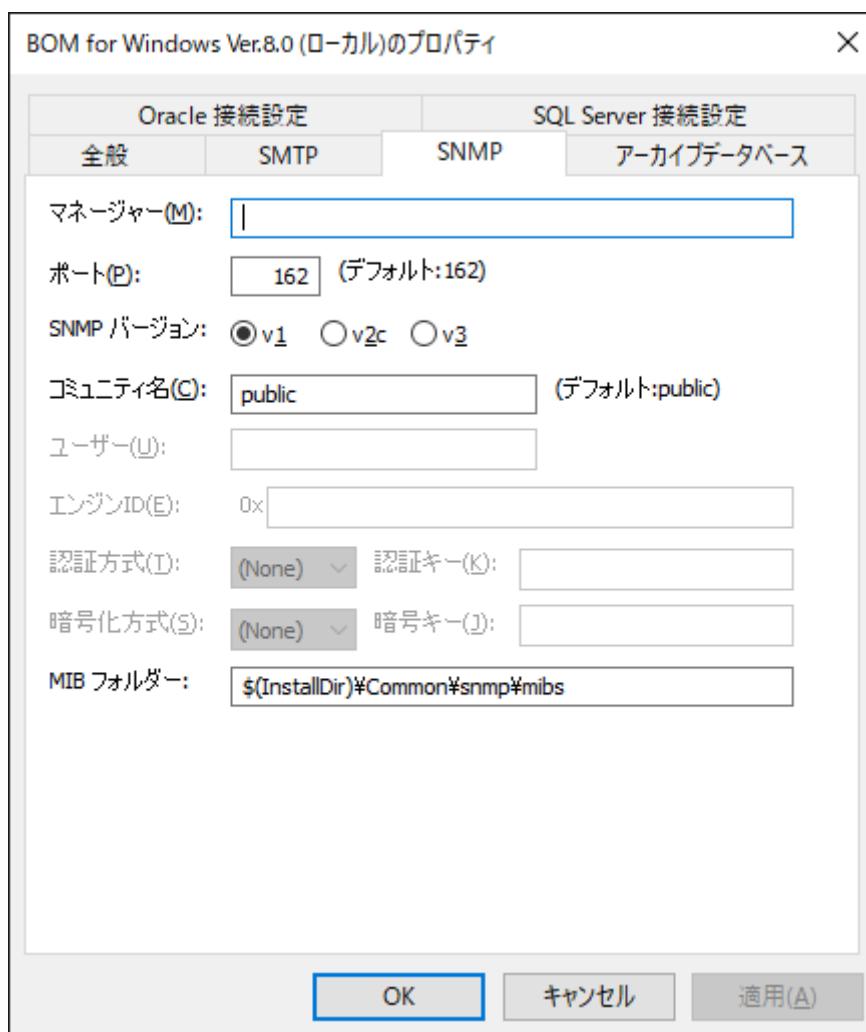
(4) SNMP情報の設定

SNMP情報は、SNMPトラップ送信アクション機能を用いてSNMPトラップを送信する際に設定が必要です。

- SNMP情報の設定を行う"SNMP"タブは、BOMマネージャーに接続している状態でなければ表示されません。
- 設定変更はすべてのインスタンスを停止してからでないと実施できません。
- 代理監視の場合、SNMPマネージャーには代理監視先コンピューターではなく、代理監視元コンピューターのIPアドレスが通知されます。SNMPマネージャー側の設定を行う際には、代理監視元コンピューターのIPアドレスを登録してください。
- SNMPマネージャーをIPv6アドレスで指定する場合、もしくはホスト名であってもIPv4に変換できない場合、SNMPバージョンは"v2c"もしくは"v3"を選択する必要があります。
※ "v1"はtrap-agent-addressフィールドがIPv6アドレスに対応していないため、SNMPトラップ送信時にエラーとなります。

※ デュアルルスタックでIPv6優先のOS設定下であっても、IPv4アドレスに変換ができれば問題はありません。

1. BOMマネージャーを起動し、接続します。
2. "BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"アイコンを右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックします。
3. "プロパティ"画面の「SNMP」タブに移動します。



4. "マネージャー"フィールドに、SNMPトラップ送信先のSNMPマネージャーの"ホスト名"か"IPアドレス"を入力します。
5. "ポート"フィールドは既定値が162になっています。"1"～"65535"までの値を入力することができます。

6. "SNMPバージョン"フィールドはSNMPトラップのバージョンを選択します。既定値が"v1"になっています。

- "v1""v2c"ラジオボタンを選択した場合

"コミュニティ名"フィールドは既定値がpublicになっています。使用する環境に合わせて変更してください。

- "v3"ラジオボタンを選択した場合

V3トラップ用のユーザー設定が必要になります。

SNMPバージョン: v1 v2c v3

コミュニティ名(□): public (デフォルト:public)

ユーザー(□):

エンジンID(□): 0x

認証方式(□): (None) 認証キー(□):

暗号化方式(□): (None) 暗号キー(□):

1. "ユーザー"フィールドに、SNMPマネージャーで設定した"ユーザー名"と同じ値を入力します。

2. "エンジンID"フィールドに、SNMPマネージャーで設定した"エンジンID"と同じ値を入力します。

- BOM 8.0のSNMPトラップでは、BOM 8.0固有のエンジンIDはありません。

3. "認証方式"フィールドでは、"(None)"(認証方式を認証なし)、"MD5"、"SHA"から選択します。

4. "認証キー"フィールドでは、認証方式を指定した場合に設定できます。認証方式にて使用するキーを入力します。

5. "暗号化方式"フィールドでは、"(None)"(暗号化方式を平文)、"DES"、"AES"から選択します。

6. "暗号キー"フィールドでは、暗号化/復号する時に使用するキーを入力します。

7. [OK]ボタンまたは[適用]ボタンをクリックし、設定を保存します。

(5) アーカイブデータベースの設定

アーカイブサービスにてデータ蓄積を構成する場合に設定します。詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 アーカイブ ユーザーズ マニュアル'を参照ください。

(6) 「Oracle接続設定」タブについて

「Oracle詳細設定」タブはOracleオプションを使用する際に必要となる設定で、Oracleオプションの監視対象となるOracleデータベースの接続情報を設定することができます。

詳細は、'BOM Oracle オプション Ver.8.0 ユーザーズマニュアル'を参照してください。

(7) 「SQL Server接続設定」タブについて

「SQL Server詳細設定」タブはSQL Serverオプションを使用する際に必要となる設定で、SQL Serverオプションの監視対象となるSQL Serverインスタンスの接続情報を設定することができます。

詳細は、'BOM SQL Server オプション Ver.8.0 ユーザーズマニュアル'を参照してください。

(8) ヘルプの表示

"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"内のノードを右クリックし、コンテキストメニューの"ヘルプ"をクリックすることで、BOM 8.0のヘルプを起動することができます。

また同様に、以下の操作でもヘルプファイルは表示できます。

- キーボードのファンクションキー ("F1"キー) を押下する。
- ツールバーのヘルプアイコンをクリックする。

4. 一覧のエクスポート

スコープペインの各ノードを左クリックで選択した後に右クリックし、コンテキストメニューの"一覧のエクスポート"をクリックすることで、各ノードの情報の一覧をエクスポートすることができます。

本機能はインスタンスノード（BOM for Windows Ver.8.0（ローカル））配下のすべてのノードで起動でき、エクスポートされる内容はBOMマネージャー上で選択したノードの、リザルトペインに表示する内容をテキストファイルにしたもので

- "監視"ノードを指定（右クリック）した場合にエクスポートできる項目

"名前"、"ID"、"有効/無効"、"スケジュール"、"前回実行時刻"、"正常項目数"、"注意項目数"、"危険項目数"、"失敗項目数"、"未監視項目数"、"監視項目合計"

エクスポート手順

1. リストをエクスポートしたい該当インスタンスノード以下（インスタンスノードも含む）のいずれかのノード（例："監視"、"監視グループ"、"各監視項目"、"各アクション"、"通知"、"ログ"等）を左クリックし、選択した状態にします。
2. 選択したノードを右クリックし、コンテキストメニューの"一覧のエクスポート..."を選択します。
3. "一覧のエクスポート"画面が表示されます。ファイルを保存するフォルダーを選択して、ファイルに名前を付けます。
4. [保存]ボタンをクリックします。

5. MMC共通メニューについて

BOMマネージャーはマイクロソフト管理コンソール（MMC）のスナップインとしてシステムにインストールされるため、以下のメニュー項目はMMCを通して共通です。

BOMマネージャー固有の項目については、それぞれの章で説明します。

メニュー	説明
開く	新しいMMCファイル (*.msc) を開きます。
列の追加と削除	リザルトペインに表示される列を追加、削除するダイアログを表示します。
大きいアイコン	リザルトペインに表示されるアイコンを大きいアイコンにします。
小さいアイコン	リザルトペインに表示されるアイコンを小さいアイコンにします。
一覧	リザルトペインに表示されるアイコンを小さいアイコンで一覧表示にします。
詳細	リザルトペインの表示を詳細表示にします。既定値ではこの状態です。
カスタマイズ	MMCおよびスナップインの各要素（ツールバーなど）の表示をオン・オフすることが可能です。
ここから新しいウィンドウ	スコープペインで選択中の項目をルートにして、新しい画面を表示します。
新しいタスクパッド表示	新しいタスクパッド表示ウィザードが起動します。 このウィザードではリザルトペインに表示される新しいタスクパッド（項目のリストとそれに対するタスクの表示されるページ）を追加することができます。
タスクパッド表示の編集	リザルトペインに表示されている現在のタスクパッド表示を編集できます。
タスクパッド表示の削除	リザルトペインに表示されている現在のタスクパッドを削除できます。
最新の情報に更新	リザルトペインの表示を最新の情報に更新します。

第3章 ローカル監視、代理監視、リモート接続

1. インスタンスの解説

BOM 8.0では監視対象を"インスタンス"という概念で扱っており、監視設定を行う際はまずこの"インスタンス"を作成する必要があります。

1つのインスタンスに作成できる監視項目数には制限がありますが、インスタンスは同一コンピューターに対して複数設定できます。また、BOM 8.0を導入していないコンピューターに対して監視を行う代理監視についても1インスタンスを使用し、独立した監視が実施されます。

(1) インスタンスの監視開始と監視終了

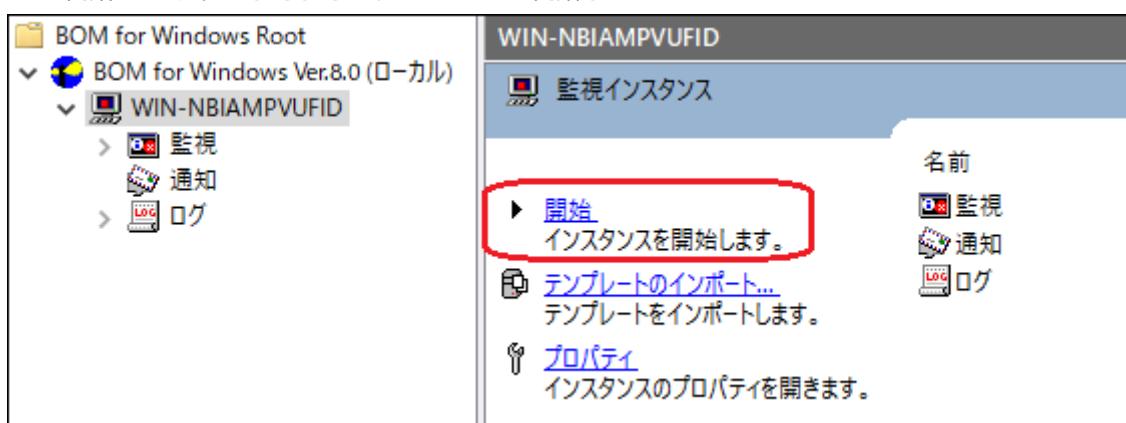
インスタンスの監視開始とは、設定した監視項目を実際に動作させることです。

1. インスタンスの"サーバーアイコン"を右クリックし、コンテキストメニューの"開始"をクリックします。

インスタンスの監視が既に開始している場合、"開始"は灰色表示されて"停止"と"再起動"が選択できるようになります。



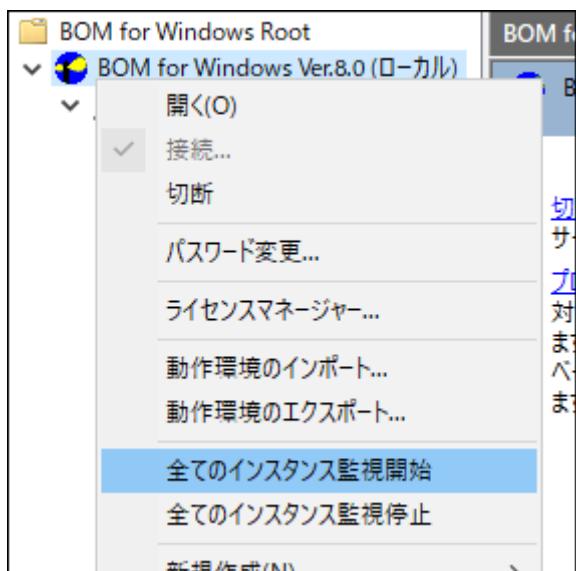
- BOMマネージャーの"インスタンス管理"スコープペインで、インスタンスをクリックし、続いてリザルトペインの"開始"をクリックしてもインスタンスが開始します。



- インスタンスが停止すると、サーバーアイコンの上に赤い正方形が表示されます ()。BOM 8.0の監視設定の変更を行う際は、インスタンスを停止する必要があります。
- インスタンスが開始すると、サーバーアイコンの上に緑の三角形が表示されます ()。監視を行う際は、インスタンスを開始する必要があります。

2. インスタンスが1台のコンピューターに複数ある場合には、同時にすべてのインスタンスを開始、停止が可能です。

"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"を右クリックし、コンテキストメニューの"全てのインスタンス監視開始"をクリックします。



- 一斉に停止する場合には、"全てのインスタンス監視停止"をクリックします。
- 設定した監視項目が監視を行うには、監視グループ・監視項目も有効にする必要があります。

また、アクションが起動するには、アクションも有効になっている必要があります。既定値では、すべて有効になっています。

2. 監視の方法

(1) ローカル監視

ローカル監視は、BOM 8.0をインストールしたローカルコンピューターを監視対象とする監視のことです。

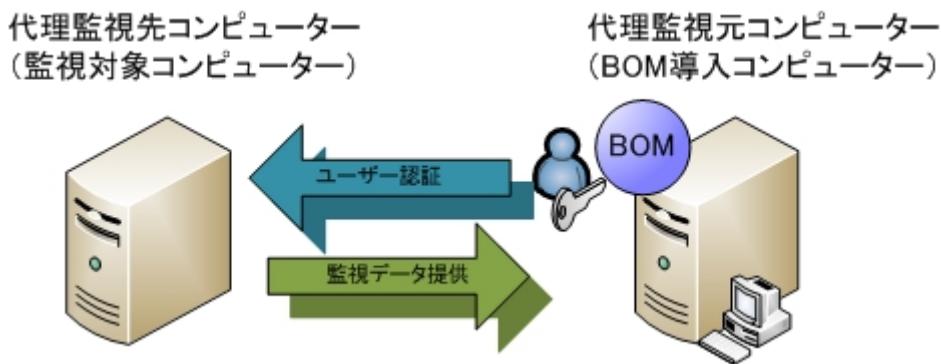
同一ローカルコンピューターに複数のローカル監視のインスタンス（ローカルインスタンス）を作成することができます。例えば、監視項目数には1インスタンスあたり200件までという制限があるため、監視項目数が200件を超える場合には別途2つめのローカルインスタンスを作成する必要があります。

なお、インスタンスごとにライセンスが必要です。ローカル監視の設定は'[ローカル監視の初期スタートアップ](#)'を参照してください。

(2) 代理監視

エージェントレス監視とも呼ばれる監視方法で、監視対象コンピューターにBOM 8.0をインストールせずにリモートコンピューターから監視を行うことができます。

BOM 8.0を導入したローカルコンピューター上の代理監視用のインスタンス（代理監視インスタンス）を使用して、ネットワークを介してリモートコンピューターの監視を実施します。



- 代理監視インスタンスに対してもライセンスが必要です。

必要な数のライセンスさえあれば、1台のBOM 8.0を導入したコンピューターから、ネットワーク上の複数のリモートコンピューターを代理監視で監視することができます。

- 代理監視の設定は'[代理監視の初期スタートアップ](#)'を参照してください。

(3) リモート接続

既にBOM 8.0を導入済みのコンピューターに対してはスナップインの追加によってローカルコンピューターのBOM 8.0と接続することができます（リモート接続）。これにより、リモートコンピューター上のBOM 8.0の監視設定をローカルコンピューターで管理することができます。

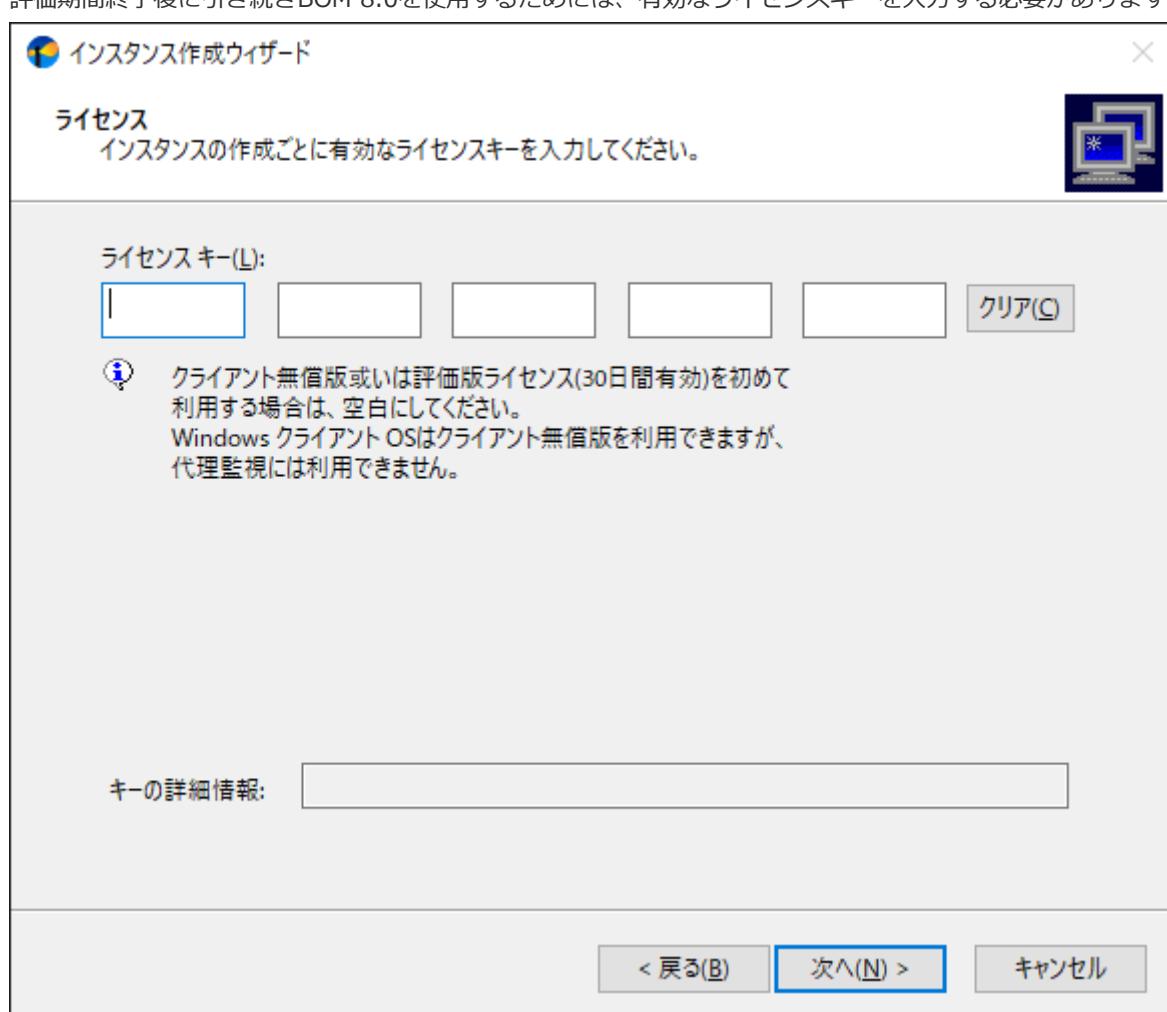
- リモート接続は、BOM導入済みのリモートコンピューターに対する接続です。リモート接続用にライセンスは不要です。
- リモート接続の設定や接続条件などは、'[リモート接続の初期スタートアップ](#)'を参照ください。

3. ローカル監視の初期スタートアップ

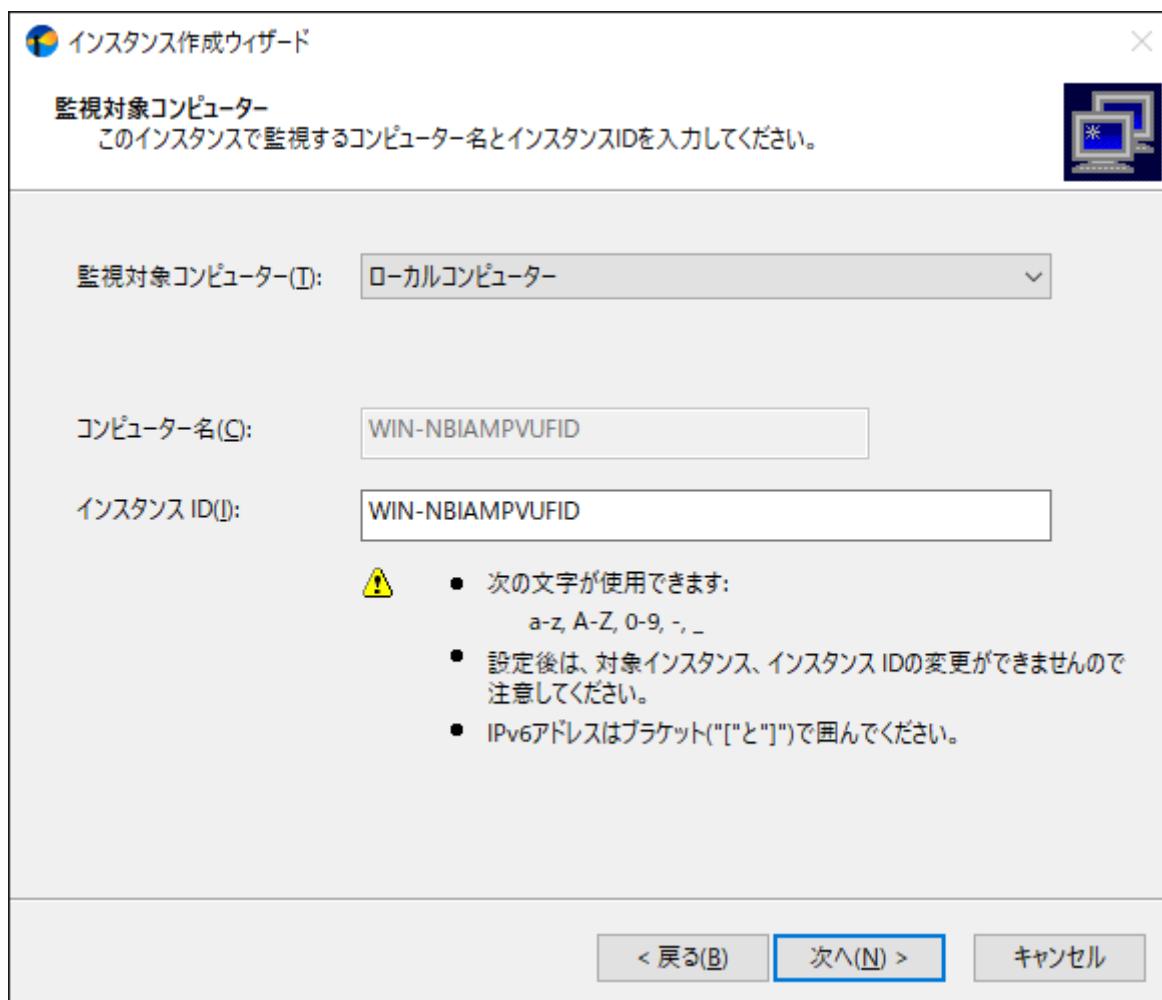
BOM 8.0のインストール後にローカル監視インスタンスを作成する際は、以下の手順で実施してください。

1. BOMマネージャーからの接続後、"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"を右クリックし、コンテキストメニューの "新規作成"→"監視インスタンス..."の順にクリックします。
または、メニューバーに移動し、"操作"→"新規作成"→"監視インスタンス..."の順にクリックします。
2. "インスタンス作成ウィザード"が開始されるので[次へ]ボタンをクリックすると、"インスタンス作成ウィザード ライセンス"画面が表示されます。
製品パッケージに同梱されているライセンスキーを入力し、[次へ]ボタンをクリックします。
 - BOM 8.0を期限付きの評価版として使用する場合は、フィールドはブランクのまま、[次へ]ボタンをクリックします。
 - 評価版ライセンスでは、製品版と同じ機能を備えた評価版を30日間試用できます。

評価期間終了後に引き続きBOM 8.0を使用するためには、有効なライセンスキーを入力する必要があります。



3. "インスタンス作成ウィザード監視対象コンピューター"画面が表示されます。



4. ローカルコンピューターの監視をする場合、"監視対象コンピューター"フィールドで、"ローカルコンピューター"を選択します。

- 代理監視の設定の詳細は'[代理監視の初期スタートアップ](#)'を参照してください。

5. "インスタンス ID"フィールドに、BOMマネージャー等での表示名となるインスタンス IDを入力します。

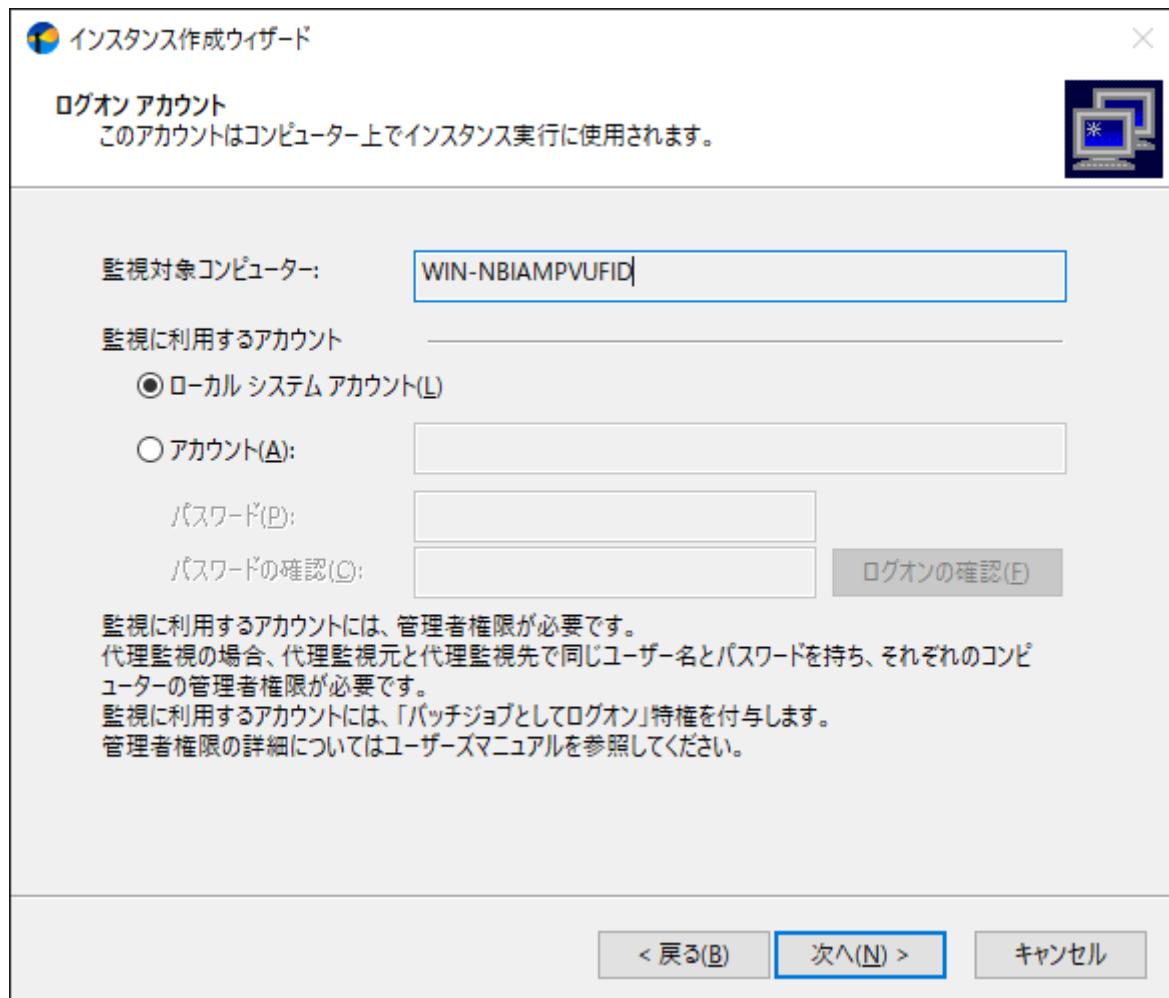
- インスタンス IDは一意でなければならず、また後で変更することはできません。
- 使用可能な文字は半角英数字、ハイフン、およびアンダーバーのみで、100文字まで入力可能です。

6. [次へ]ボタンをクリックすると、"インスタンス作成ウィザード ログオン アカウント"画面が表示されます。

監視を利用するアカウントを、ローカルシステムアカウントとユーザーアカウントのどちらかで、指定することができます。

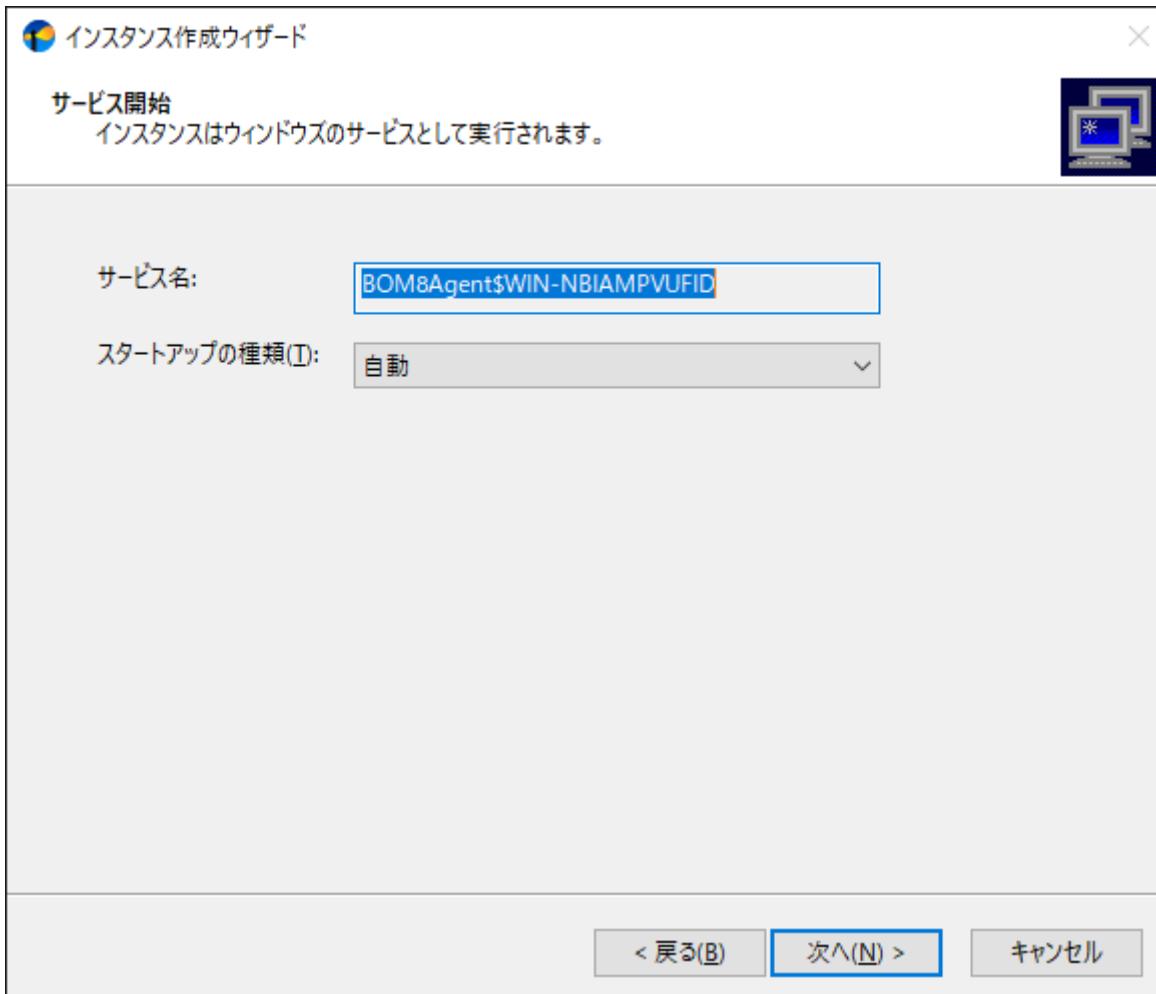
- ユーザーアカウントを指定すると、そのアカウントに自動的に"バッチジョブとしてログオン"権限が付与されます。

- ユーザー アカウントを指定する際は、UACをオフにする必要があります。詳細については、「[代理監視設定が正しく監視できない場合のトラブルシューティング](#)」の「[ユーザー アカウント制御（UAC）](#)」を参照してください。



7. [次へ]ボタンをクリックすると、"インスタンス作成ウィザード サービス開始"画面が表示され、BOM監視サービスのスタートアップの種類を選択できます。

"自動"を選択すると、OS起動時にBOM監視サービスが自動で起動され、監視を開始します。



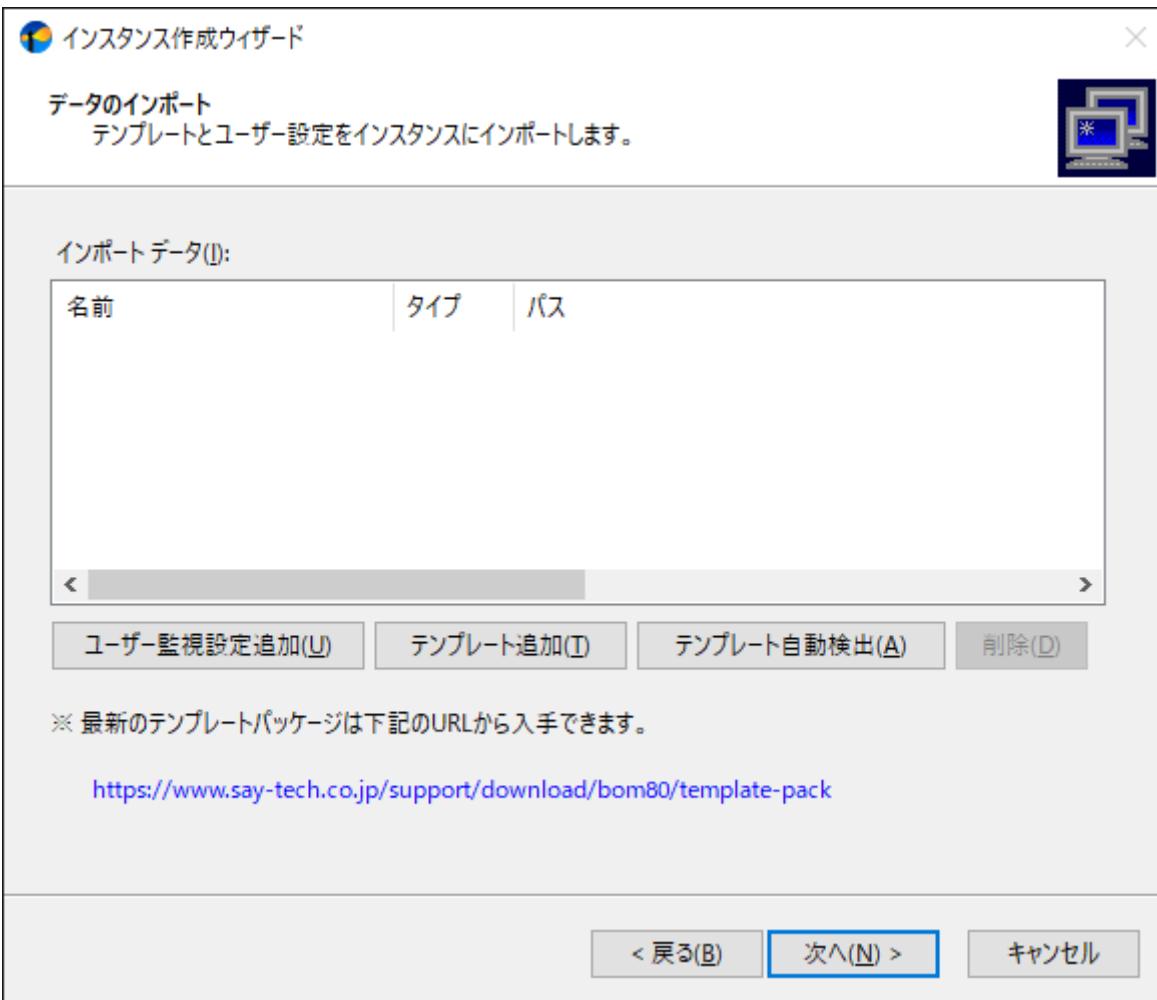
8. [次へ]ボタンをクリックすると、"インスタンス作成ウィザード データのインポート"画面が表示されます。

この画面では、該当するインスタンスにインポートする「監視設定のエクスポートファイル」や「監視テンプレート」を選択できます。選択後、[次へ]ボタンをクリックします。

※ 最新のテンプレートパッケージは弊社ウェブサイトで公開しています。テンプレートパッケージの使用方法については、ダウンロードページまたはパッケージに同梱されたドキュメントを確認してください。

※ テンプレートの各監視項目に設定済みの閾値や監視間隔などは、弊社での検証結果から設定した値で、ご利用の環境や要件にこれらの設定値が適合しない場合があります。その際は設定値を環境や要件に適合した値に変更して使用してください。

※ 代理監視インスタンスおよび、BOM 8.0 のオプション製品ではテンプレート自動検出が使用できません。[テンプレート自動検出]ボタンはグレーアウト状態になります。



- 監視設定のエクスポートファイルがある場合

[ユーザー監視設定の追加]ボタンをクリックし、ファイルを選択してから[次へ]ボタンをクリックします。追加した監視設定は、該当するインスタンスにインポートされます。

※ BOM 8.0の"監視設定のエクスポート"で生成した、拡張子がCABのファイル（以降CABファイル）を選択します。"監視設定のエクスポート"の詳細は、['監視設定のエクスポートとインポート'](#)を参照ください。

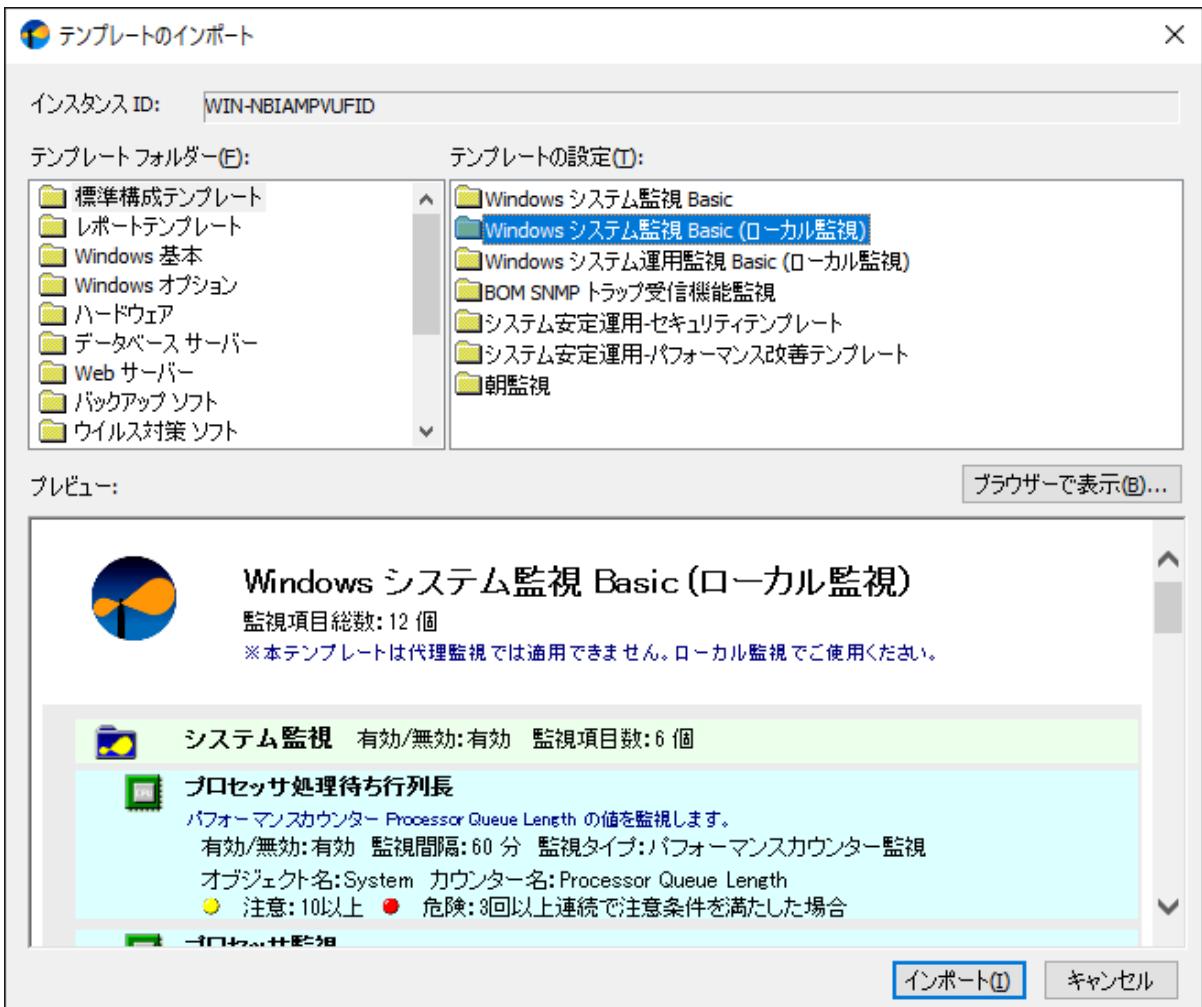
※ 監視設定ファイルのファイル名は変更できますが、監視設定ファイルをインポートした際にエラーが出る場合には、監視設定のCABファイルではない可能性があるため、正しい監視設定のCABファイルを選択してください。

※ メジャーバージョンが異なる旧製品（BOM 6.0、BOM 7.0など）の"監視設定のエクスポート"で生成したCABファイルは、BOM 8.0と互換性がないため監視項目をインポートできません。

- テンプレートを手動で追加する場合

[テンプレートの追加..]ボタンをクリックすると、"テンプレートのインポート"画面が表示されます。

"テンプレート フォルダー"→"テンプレートの設定"の順で監視テンプレートを指定すると、下のプレビュー画面に指定した監視テンプレートの監視設定内容を表示します。内容を確認してインポートする場合は[インポート]ボタンをクリックします。



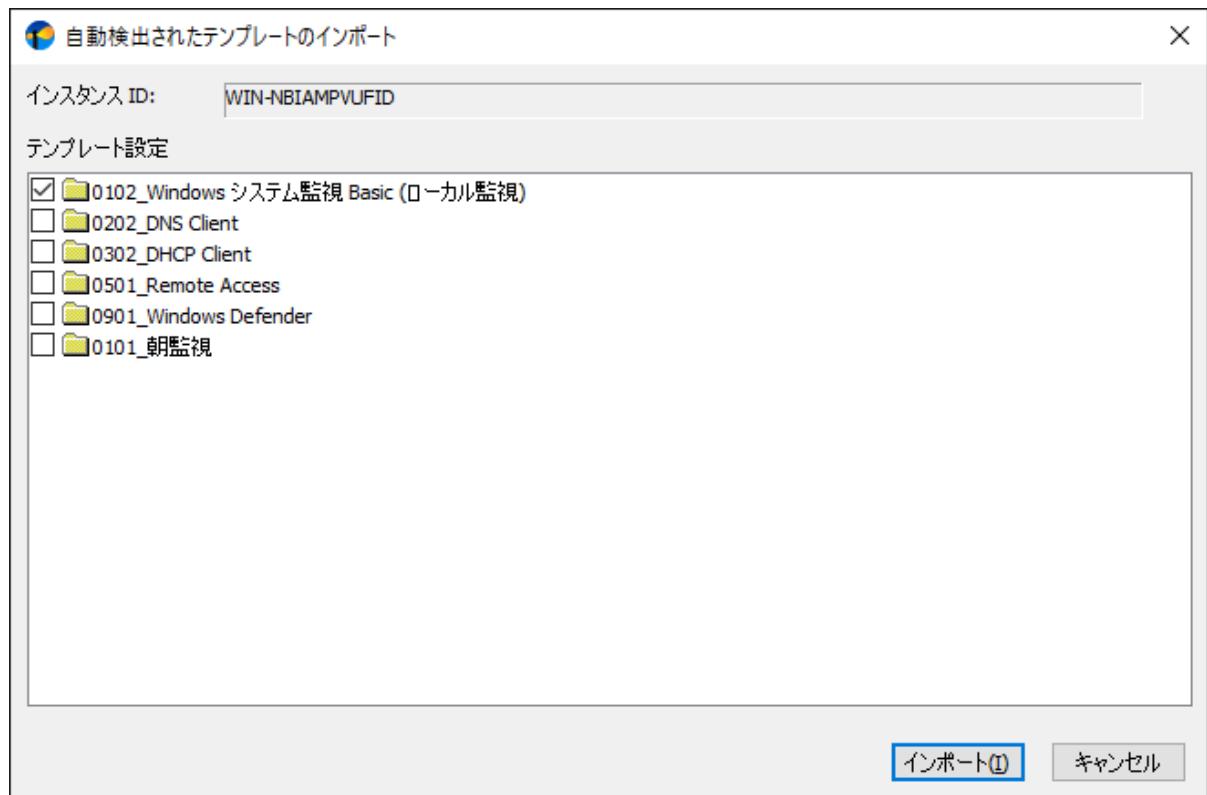
※ [ブラウザーで表示]ボタンをクリックすると、プレビュー画面で表示された情報をブラウザーで表示することができます。

※ テンプレートは設定完了後もインポートすることができます。'テンプレートのインポート'を参照してください。

- テンプレートの自動検出を使用する場合

[テンプレートの自動検出]ボタンをクリックすると、コンピューターを自動的にチェックし、自動検出に対応したテンプレートから対象のコンピューターで適用可能なものを"自動検出されたテンプレートのインポート"ウィンドウ内に一覧表示します。

適用するテンプレートにチェックを入れ、[インポート]ボタンをクリックしてください。



※ テンプレート自動検出は代理監視インスタンスおよび、BOM 8.0 のオプション製品では使用できません。

※ 対象のコンピューターに導入された機能やアプリケーションにより、一覧表示される内容は異なります。

※ 自動検出に対応しないテンプレートおよび、自動検出されないテンプレートは手動で追加する必要があります。前項の'テンプレートを手動で追加する場合'を参照してください。

9. "インスタンス作成の実行"画面が表示され、現状のインスタンスIDがインスタンス作成ウィザード画面上に一覧表示されます。続けてインスタンスを追加する場合には[追加]ボタン、変更をする場合には[変更]ボタン、削除する場合には[削除]ボタンをクリックします。



10. 以上でインスタンス作成の準備が整いました。設定したインスタンスIDとライセンス内容を確認してください。

[開始]ボタンをクリックするとインスタンス作成が開始されます。

- 一度に追加できるインスタンスは10個までです。
- インスタンス作成終了時になんらかの原因で"中断"、"警告"が出ることがあります。

"中断"の場合には、再度インスタンス作成を実行してください。

"警告"の場合には、画面に出たメッセージに従い操作をしてください。

4. 代理監視の初期スタートアップ^①

(1) 代理監視用インスタンスの作成手順

BOM 8.0のインストール後に代理監視インスタンスを作成する際は、以下の手順で実施してください。

- 代理監視インスタンスの作成手順は、以下手順3.で"代理監視コンピューター"を選択する点を除き、ローカル監視インスタンスの作成と同様です。

1. BOMマネージャーからの接続後、"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"を右クリックし、コンテキストメニューの "新規作成"→"監視インスタンス..."の順にクリックします。

または、メニューバーに移動し、"操作"→"新規作成"→"監視インスタンス..."の順にクリックします。

2. "インスタンス作成ウィザード"が開始されるので[次へ]ボタンをクリックすると、"インスタンス作成ウィザード ライセンス"画面が表示されます。

製品パッケージに同梱されているライセンスキーを入力し、[次へ]ボタンをクリックします。

- BOM 8.0を期限付きの評価版として使用する場合は、フィールドはブランクのまま、[次へ]ボタンをクリックします。
- 評価版ライセンスでは、製品版と同じ機能を備えた評価版を30日間試用できます。

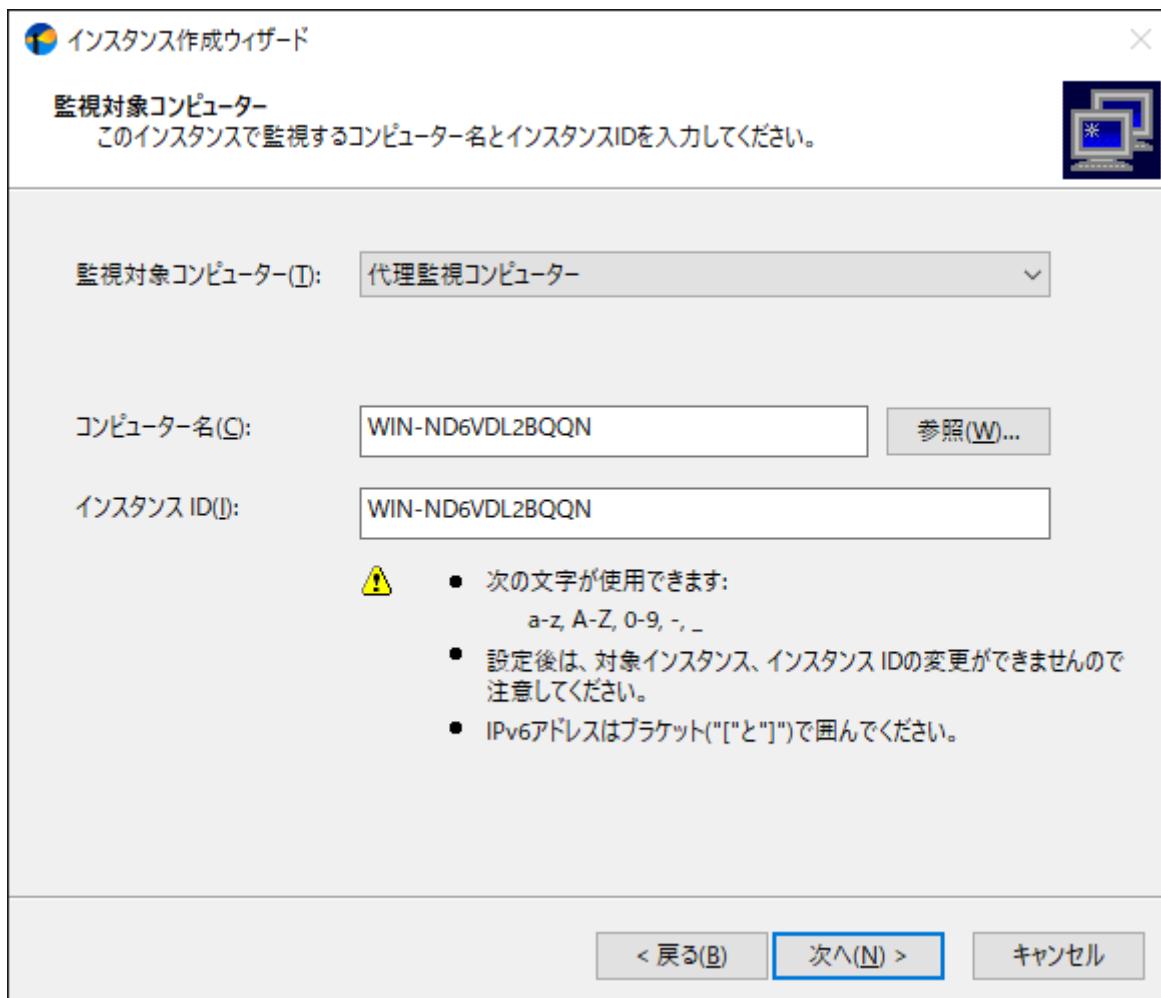
評価期間終了後に引き続きBOM 8.0を使用するためには、有効なライセンスキーを入力する必要があります。

3. "監視対象コンピューター"画面では、"監視対象コンピューター"のプルダウンから"代理監視コンピューター"を選択します。

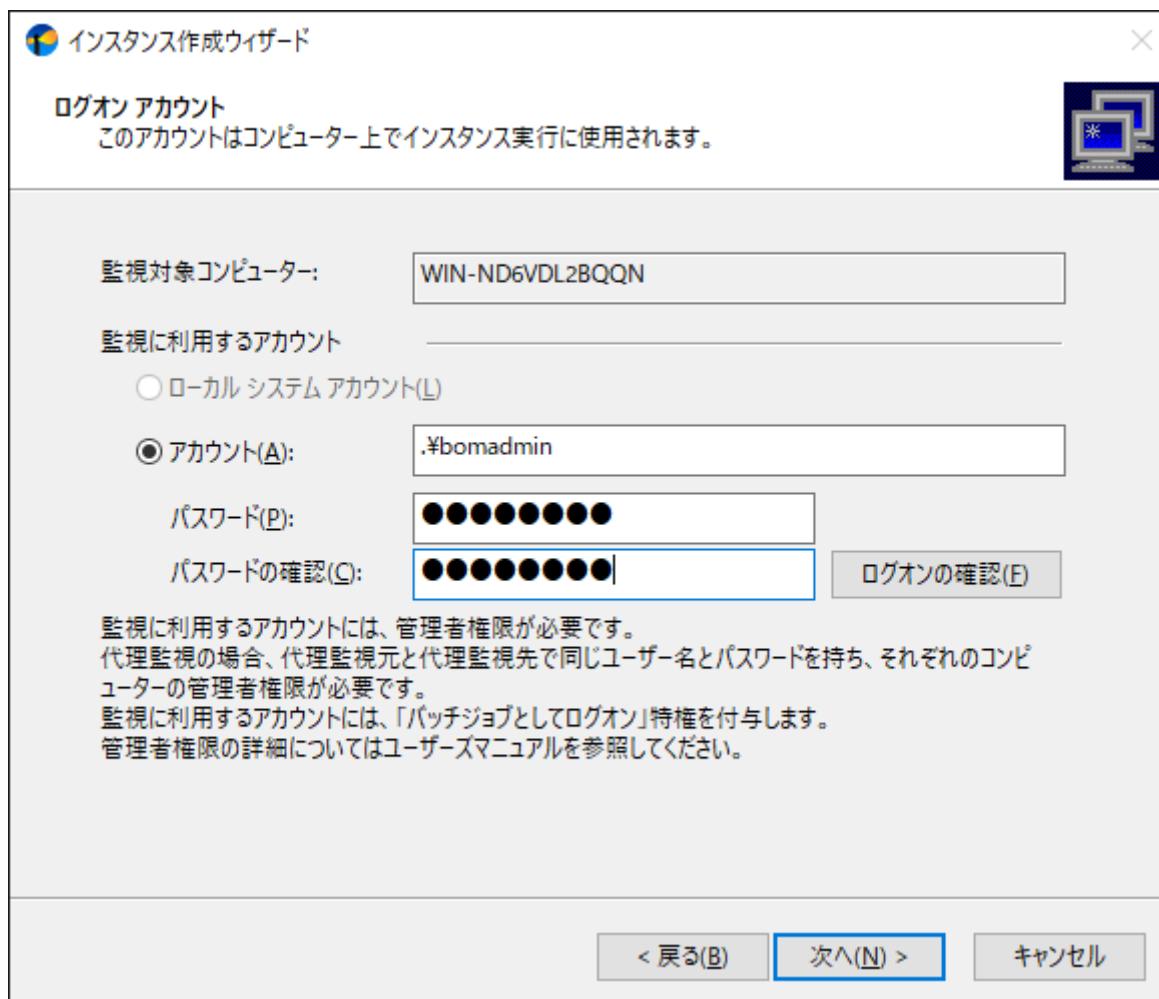
- 代理監視インスタンスを作成する場合、この"代理監視コンピューター"を選択する点を除き、インストールの後にインスタンスを作成する手順はローカルインスタンスを作成する場合と同じです。

4. "コンピュータ名"フィールドに、代理監視対象の"コンピュータ名"もしくは、"IPアドレス"を入力します。

5. "インスタンスID"フィールドには"コンピューター名"フィールドに入力した内容が"インスタンス ID"に反映されますが、他の名前に変えることもできます。



6. "ログオンアカウント"画面では、代理監視にて使用する"監視に利用するアカウント"を設定します。



- "監視に利用するアカウント"は、代理監視元と代理監視先で同じユーザー名とパスワードを持ち、それぞれのコンピューターの管理者権限が必要です。"監視に利用するアカウント"はさまざまな条件を満たす必要があるために、必ず一度は'[代理監視設定のポイント](#)'もしくは、'[代理監視設定が正しく監視できない場合のトラブルシューティング](#)'を参照してください。

7. 以降は、ローカル監視インスタンスと同様に作成します。

(2) 代理監視設定のポイント

代理監視を行う場合に、注意すべき設定内容は下記のとおりです。

A. 監視に利用するアカウントの準備

"監視に利用するアカウント"には、代理監視元と代理監視先の双方で利用できるユーザーアカウントが必要です。

- ワークグループユーザー認証の場合

双方のコンピューターに同一のアカウント名、パスワードを設定し、Administratorsグループのメンバーとして追加します。

- ドメインユーザー認証の場合

任意のドメインアカウントを双方のコンピューターのAdministratorsグループのメンバーとして追加します。

B. 監視を利用するアカウントのローカルセキュリティポリシー

"監視を利用するアカウント"に対し、ローカルセキュリティポリシーの設定は基本的に必要ありません。

ただし、意図的に下記2つのポリシー設定に対し、既定値に与えられている"local service"と"network service"を削除した場合には、"監視を利用するアカウント"に対し下記2つのポリシーの許可を与えてください。

- プロセスレベルトークンの置き換え
- プロセスのメモリクオータの増加

C. 監視を利用するアカウントのその他特筆事項

- "監視を利用するアカウント"には、自動的に"バックジョブとしてログオン"権限が付与されます。
- "監視を利用するアカウント"は、サービスアカウントとは異なります。
- "監視を利用するアカウント"のアカウント名やパスワードを代理監視先のコンピューターで変更した場合、監視が失敗するようになり、監視項目のテストでもエラーが表示されます。この際、エラーメッセージは出力されず、エラーコードのみが表示されます。

D. 認証、データ連携用ポートの開放

代理監視先コンピューターでは、ユーザー認証や監視データ取得のために、ポートを開放する必要があります。

弊社ウェブサイトで公開している下記サポート技術情報を参考にして、ポートを開放してください。

- サポート技術情報000156 '代理監視で使用するポート'について
<http://faq.say-tech.co.jp/bom-for-windows-ver-8-0/p241>

E. 代理監視インスタンスの作成

代理監視先コンピューターを監視するための代理監視用インスタンスを、'[代理監視用インスタンスの作成手順](#)'に従って作成します。

(3) 代理監視設定が正しく監視できない場合のトラブルシューティング

'[代理監視用インスタンスの作成手順](#)'や'[代理監視設定のポイント](#)'を元に代理監視インスタンスを作成しても正しく代理監視ができない場合は、下記の項目を確認してください。

A. 名前解決

インスタンス作成時に代理監視先コンピューターをコンピューター名で指定した場合、コンピューター名からIPアドレスに名前解決ができる必要があります。

- Ping、NSLookupなどのコマンドにて、名前解決ができるかを確認してください。

B. 通信遮断

代理監視元コンピューターと代理監視先コンピューターの経路上にファイアウォールが設置されている場合や、代理監視先コンピューターのOSのWindows ファイアウォールが有効になっている場合には、代理監視設定のポイントの項目'[認証、データ連携用ポートの開放](#)'で解説した通信をブロックしている可能性があります。

- 経路上のファイアウォールが必要な通信をブロックしていないかを確認してください。
- Windows ファイアウォールが必要な通信をブロックしていないかを確認してください。

C. Remote Registryサービス

代理監視先コンピューターの監視データを取得するためには代理監視先コンピューターにてRemote Registryサービスが開始している必要があります。

- サービスが開始していない場合には開始してください。
- スタートアップの種類が"無効"または"手動"になっている場合には、"自動"に変更してください。

D. Guest認証設定

代理監視先コンピューターのセキュリティポリシーにて、ポリシー名"ネットワークアクセス:ローカルアカウントの共有とセキュリティモデル"の設定値が"Guestのみ"に設定されている場合、代理監視元コンピューターからの接続がGuestアカウントとして扱われ、管理者権限を取得できません。

- "ネットワークアクセス:ローカルアカウントの共有とセキュリティモデル"の設定値を"クラシック"に変更してください。

E. サービスアカウントの特権

代理監視元コンピューターで動作するBOM監視サービスは、"サービスのログオンアカウント"として"ローカルシステムアカウント"を設定しています。

"ローカルシステムアカウント"は、既定で特権"プロセス レベル トークンの置き換え"と"プロセスのメモリ クオータの増加"を保有しており、BOM 8.0ではその特権を使用している関係上、"サービスのログオンアカウント"を"ローカルシステムアカウント"以外へ変更した場合や、"ローカルシステムアカウント"から特権を削除した場合には、代理監視にて不具合が発生します。

- BOM監視サービスの"サービスのログオンアカウント"が、特権"プロセス レベル トークンの置き換え"と"プロセスのメモリ クオータの増加"を保有するように構成してください。
- BOM 8.0の"監視に利用するアカウント"とOSの"サービスのログオンアカウント"は異なり、代理監視先コンピューターに接続するのは"監視に利用するアカウント"である点に注意してください。

F. ユーザーアカウント制御（UAC）

Windows OSでは、既定でユーザーアカウント制御（UAC）が有効になっており、ワークグループユーザー認証では代理監視先コンピューターの管理者権限を取得できません。

- 弊社ウェブサイトで公開している下記サポート技術情報を参考にして、UACの対処を行ってください。
 - サポート技術情報000188 '代理監視にてリモートコンピューターを監視する場合'
<http://faq.say-tech.co.jp/bom-for-windows-ver-8-0/p274>

G. 管理共有の有効化

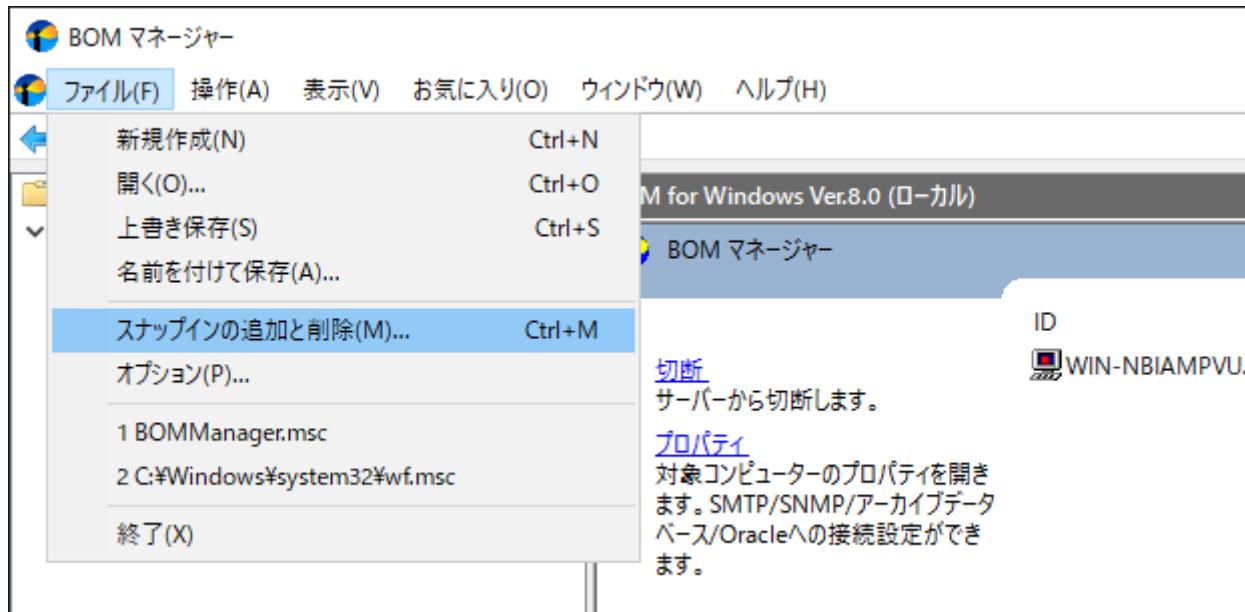
Windows OSの管理共有が無効化されていると、カスタム監視などの監視の設定で[参照]ボタンを押した際にドライブが表示されない現象が発生します。通常、管理共有は既定値で「有効」となっていますが、何らかの理由で無効化されている場合は有効化してください。

5. リモート接続の初期スタートアップ

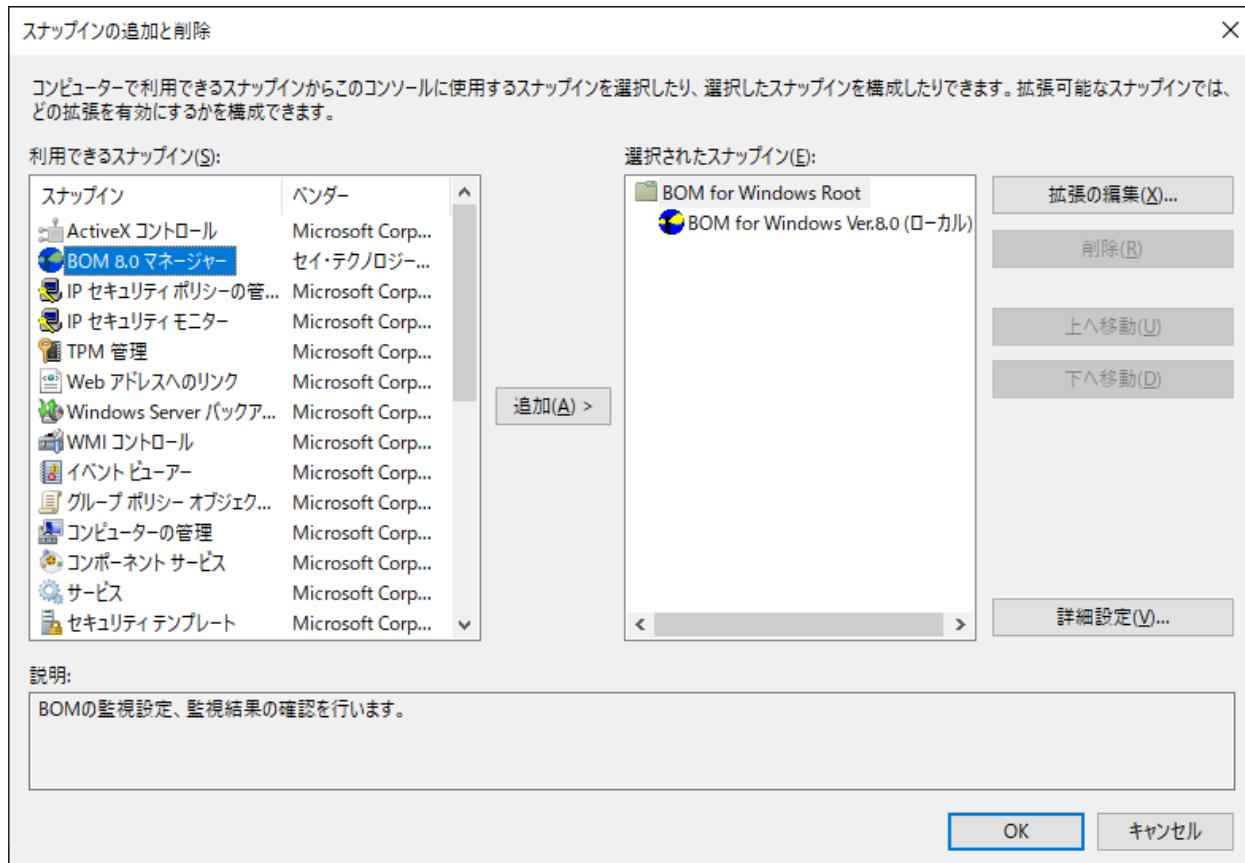
既にBOM 8.0を導入済みのコンピューターに対してはスナップインの追加によってローカルコンピューターのBOM 8.0と接続することができます（リモート接続）。これにより、リモートコンピューター上のBOM 8.0の監視設定をローカルコンピューターで管理することができます。

- BOM 8.0アーカイブログビューアーやBOM 8.0アーカイブマネージャーのスナップインの追加も同仕様です。

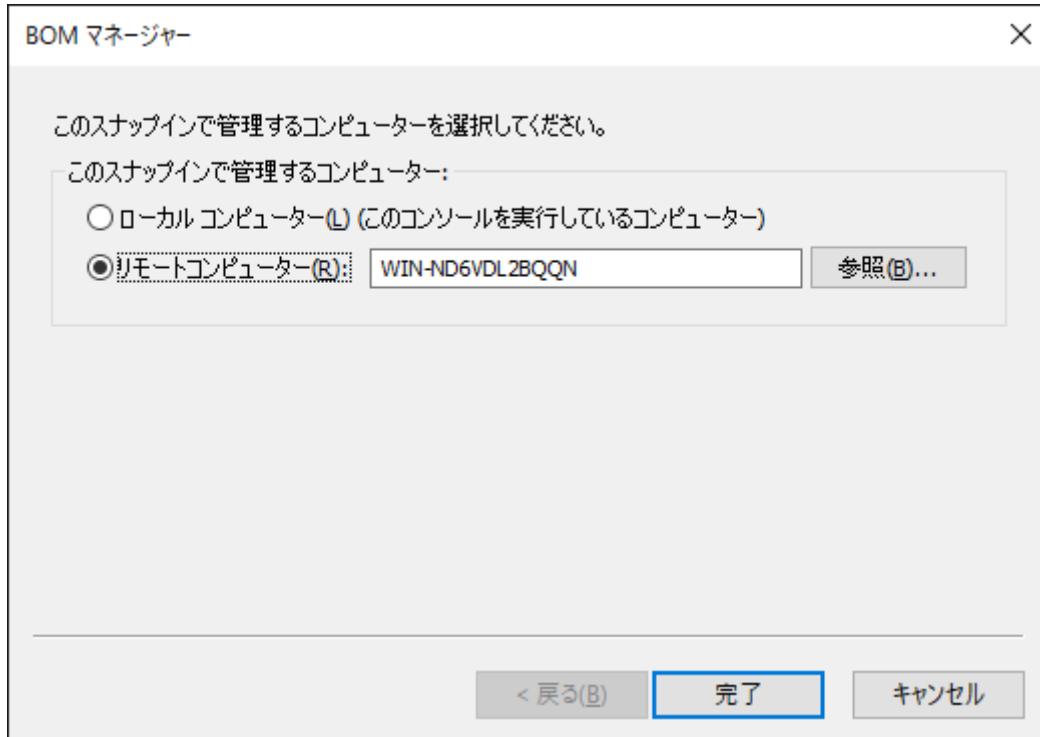
1. メニューバーに移動して、"ファイル"→"スナップインの追加と削除..."をクリックすると、"スナップインの追加と削除"画面が表示されます。



2. "スナップインの追加と削除"画面で"BOM 8.0 マネージャー"をクリックした後に[追加...]ボタンをクリックします。

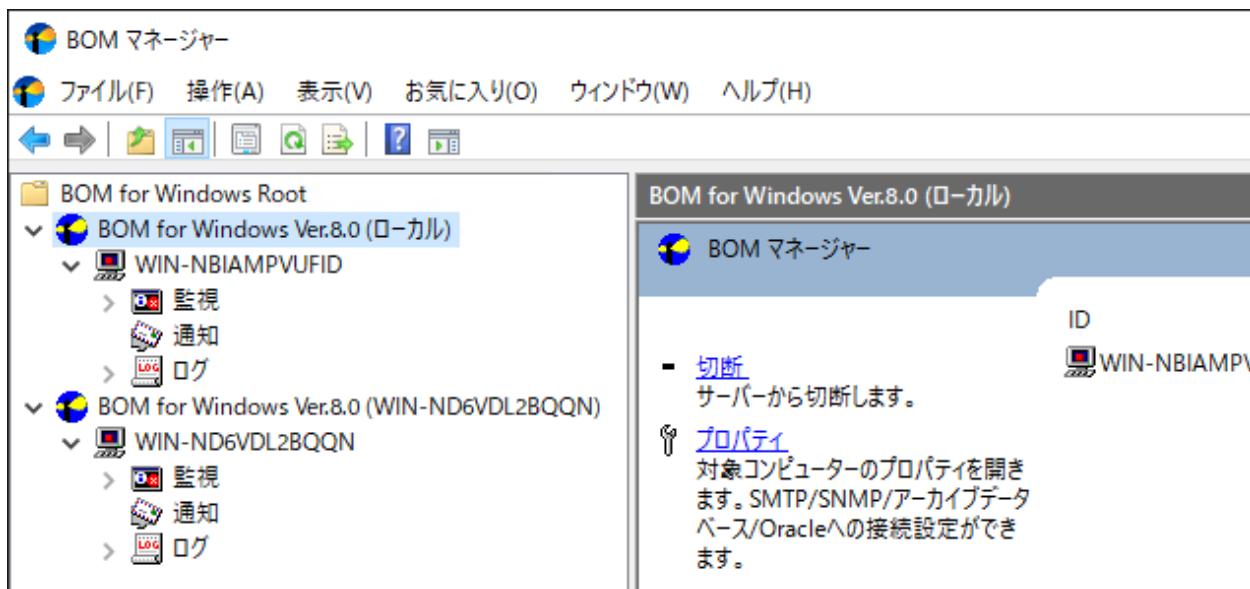


3. "BOMマネージャー"画面では"リモートコンピューター"ラジオボタンを選択し、[参照..]ボタンをクリックして該当監視対象コンピューターを選択するか、直接コンピューター名、またはIPアドレスを入力します。



4. [完了]ボタンをクリックすると"スナップインの追加と削除"画面に戻ります。

5. "スナップインの追加と削除"画面で[OK]ボタンをクリックして"スナップインの追加と削除"画面を閉じると、BOMマネージャーのスコープペインに追加した接続ノードが表示され、末尾に選択したリモートコンピューターの名前が表示されます。



リモートコンピューターに接続するには、リモートコンピューター上のBOMヘルパーサービスを開始する必要があります。

リモートコンピューターに管理者モードでログインした場合は、BOMマネージャーを使用して監視設定変更を行うことができ、設定変更内容は、リモートコンピューターのBOM 8.0の監視設定に反映されます。

- "BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)" のスナップインと、前段で追加したリモートスナップインの間、または、二つのリモートスナップインの間で、インスタンスあるいは監視設定を、ドラッグ & ドロップで移動させることはできません。

- リモートコンピューター上のBOMヘルパーサービスを開始するには、リモートコンピューター上のBOMコントロールパネルでBOMヘルパーサービスを起動する必要があります。詳細は['BOMコントロールパネル'](#)を参照してください。
- リモート接続の設定後、"接続"した際に"接続できません (TCPエラー)"が出る場合は、リモートコンピューターとの通信ができない可能性があります。ネットワーク環境やWindows ファイアウォールの設定などを確認してください。
- "アクセス制限のためBOM8Helper接続が拒否されました"のエラーが出る場合は、リモート接続先のBOMヘルパーサービスで"リモートアクセスの範囲"が制限されており、リモートアクセス範囲外（異なるセグメント間など）から接続しようとしたことが原因と考えられます。

詳細は['BOMヘルパーサービス設定'](#)より、"リモートアクセスの範囲"の設定値を確認してください。

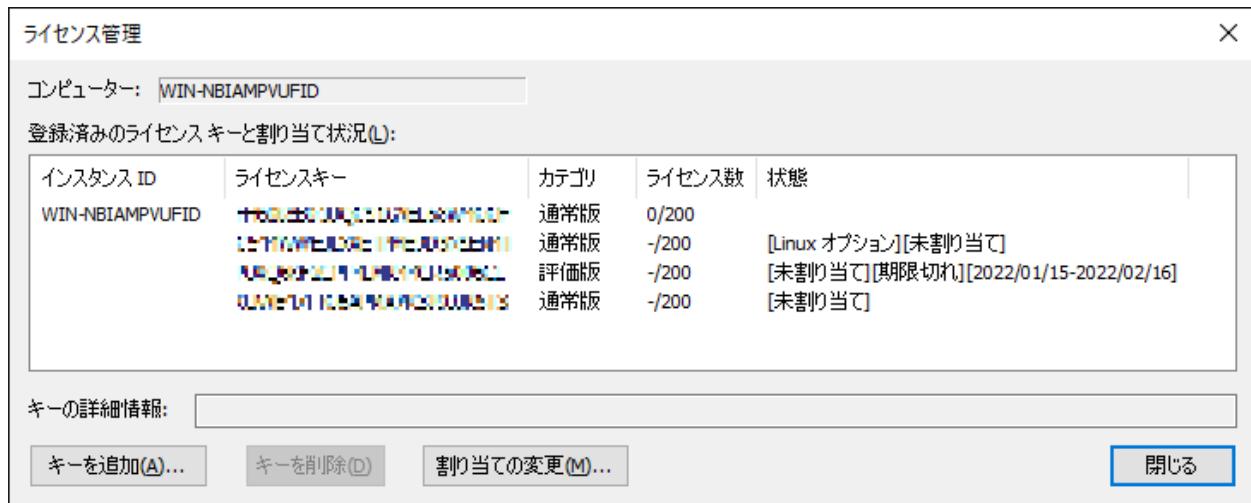
6. ライセンス管理

監視を実行する際は必ずライセンスキーが必要になります。ライセンスキーをインスタンスに割り当てて初めてインスタンスでの監視が動作します。どのライセンスキーをどのインスタンスに割り当てるか、あるいは現在登録しているライセンスキーを違うインスタンスに割り当て直すなどの、ライセンス管理を行うのがライセンスマネージャーです。

ライセンスマネージャーは、BOMマネージャーの"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"を右クリックし、コンテキストメニューの"ライセンスマネージャー"をクリックして起動します。

- ライセンスの操作を行う際は、対象のスナップイン（上記の場合、「BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)」）配下に存在するすべてのインスタンスの監視を停止する必要があります。

監視実行中のインスタンスが存在する場合、ライセンス管理画面のボタンがグレーアウトし、変更などの操作ができません。



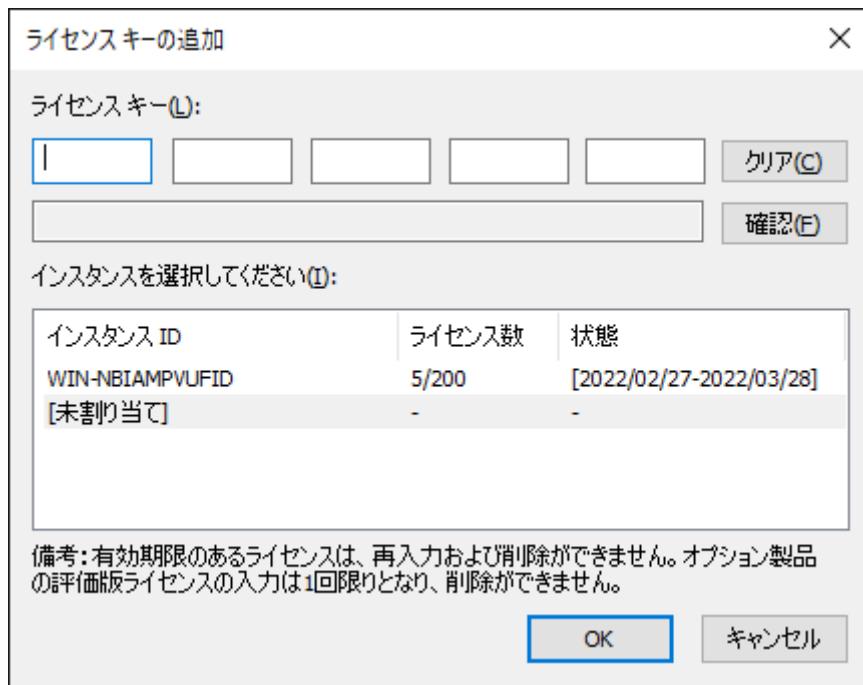
A. ライセンス管理画面

項目	説明
コンピューター	どのコンピューターの情報かを示します。
"登録済みのライセンスキーと割り当て状況"エリア	インスタンスIDとライセンスキー、そしてカテゴリ、ライセンス数、状態を表示します。
インスタンスID	選択したコンピューターに登録したインスタンスIDをすべて表示します。
ライセンスキー	選択したコンピューターに登録されているライセンスキーをすべて表示します。
カテゴリ	登録されているライセンスキーの種類が"通常版"もしくは"評価版"と表示されます。
ライセンス数	1インスタンスに設定できる監視項目数の上限は200項目ですが、この"ライセンス数"では該当のライセンスが割り当てられたインスタンスで作成されている監視項目数を、 $n/200$ の形式で表示します。（12/200と表示される場合、最大200項目まで作成できるうち、12項目まで作成していることを示します。） 現状の監視グループ数、監視項目数、アクション項目数、通知項目数は 「情報」タブ でも確認することができます。
状態	未割り当て ライセンスキーがまだインスタンスIDに割り当てられていないことを示します。
	期限切れ ライセンスキーが評価版用のライセンスキーで期限が切れたことを示します。
	オプション 基本ライセンスキーかオプションライセンスキーかを示します。
	yyyy/mm/dd -- yyyy/mm/dd 評価版のライセンスキーの使用期間を示します。（yyyy:西暦年号、mm:月、dd:日を表します。）
"キーの詳細情報"欄	ライセンスキーにフォーカスを当てると、"キーの詳細情報"フィールドに選択したキーの説明が表示されます。 オプションのライセンスキーを選択するとそのオプションが何のオプションかを表示します。
[キーを追加]ボタン	クリックすると、"ライセンスキー追加画面"が表示されます。
[キーを削除]ボタン	対象のライセンスキーにフォーカスを当てて[キーを削除]ボタンをクリックすると、確認ダイアログを表示した後にライセンスを削除することができます。
[割り当ての変更]ボタン	クリックすると、"ライセンス割り当ての変更画面"が表示されます。

B. ライセンス キーの追加画面

"ライセンスキーの追加"画面では、インスタンスの作成前にライセンスキーを登録しておくことが可能です。

なお、ライセンスキーはBOM本体およびBOMオプション製品、それぞれで異なります。オプション製品についてはオプション製品それぞれのユーザーズマニュアルもあわせて参照してください。



○ 追加方法

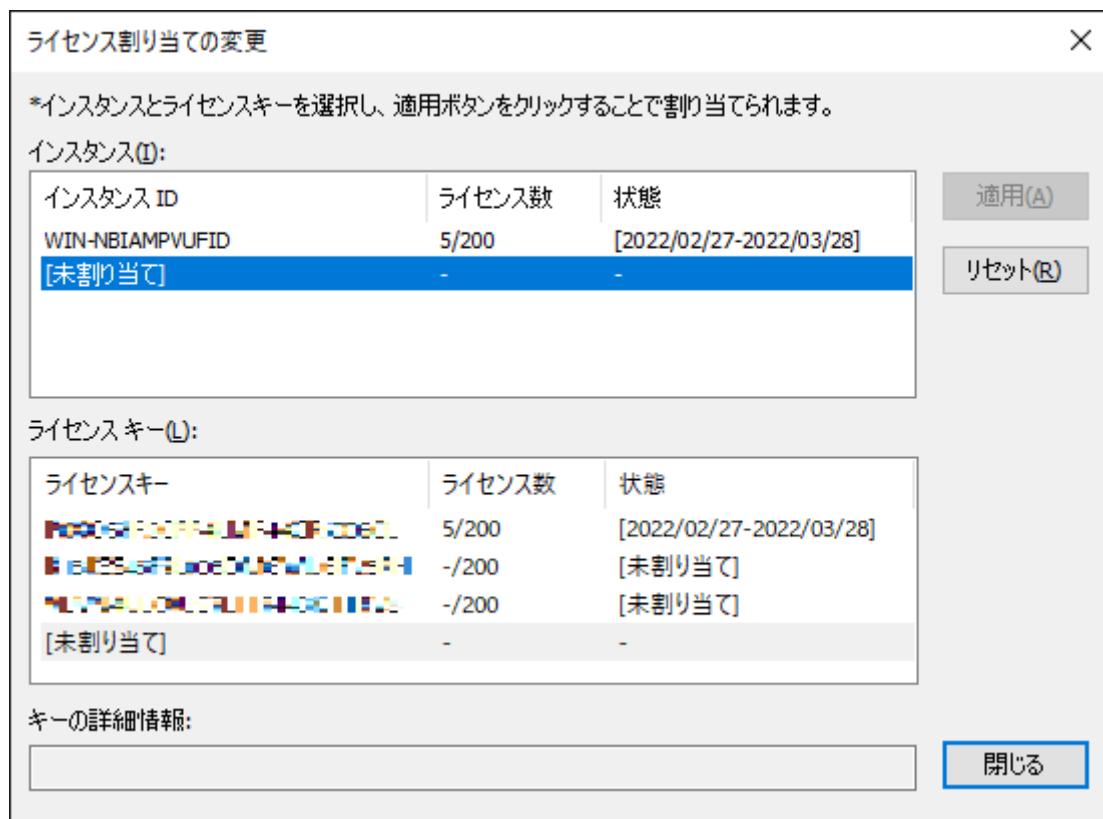
1. ライセンスキーを入力します。

誤ったライセンスキーを入力した場合には[クリア]ボタンですべて空白に戻すか、間違った文字のところを変更してください。

2. [確認]ボタンをクリックすると、入力したライセンスキーが正しいかを確認することができます。
3. インスタンスに割り当てる場合は、割り当てるインスタンスIDを選択します。
 - 割り当てるインスタンスがなければ"未割り当て"を選択します。
 - すでに割り当っているインスタンスIDに対して新規に追加したライセンスキーを割り当ると、既存のライセンスキーは"未割り当て"になり、新規のライセンスキーが指定したインスタンスIDに割り当てされます。
 - 既に登録してあるライセンスキーを再度[OK]ボタンをクリックして登録しようとした場合、エラーが出力され登録はできません。

C. ライセンス割り当ての変更画面

"ライセンス割り当ての変更"画面では、設定したライセンスキーの割り当てを変更することができます。



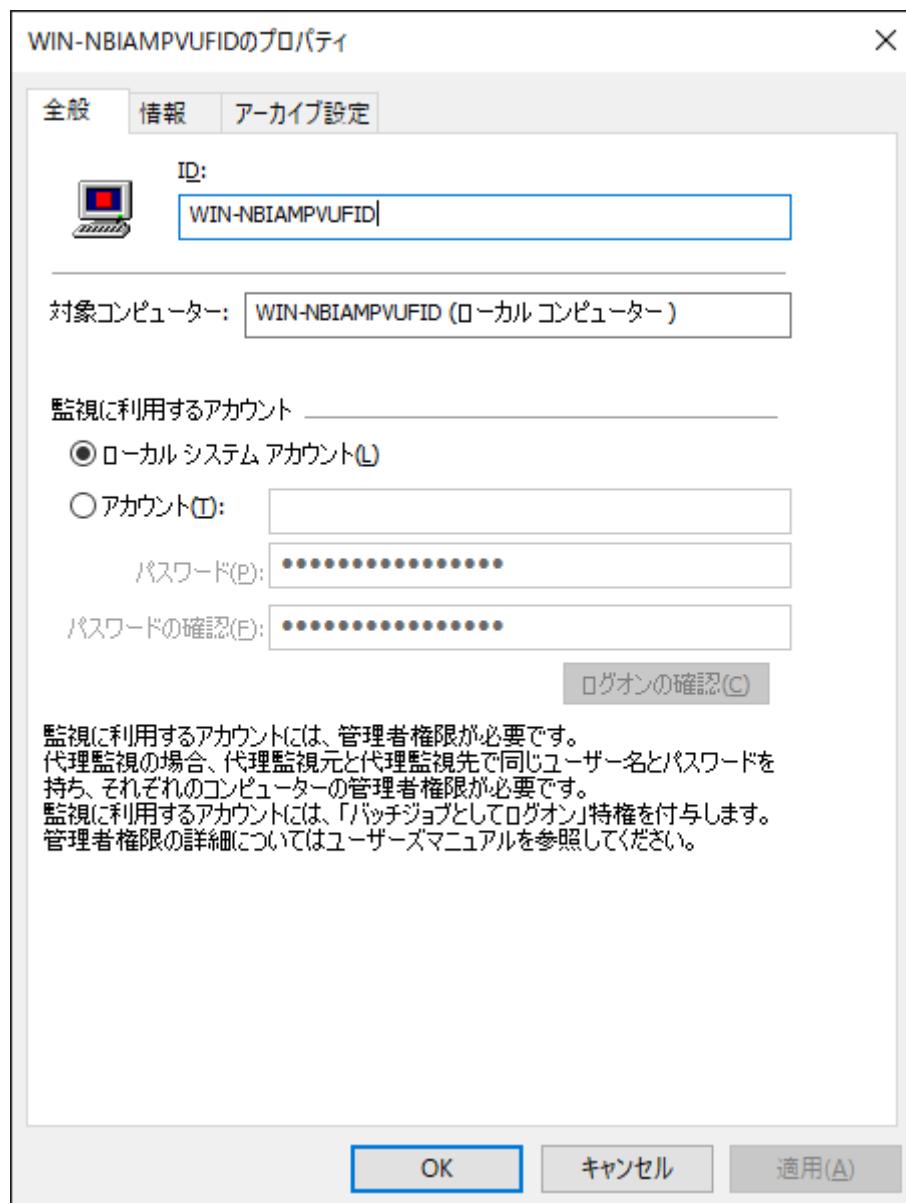
- 変更手順

1. 割り当てる"インスタンスID"を選択し、"ライセンスキー"の一覧から割り当てるライセンスキーを選択します。
 2. [適用]ボタンをクリックすると割り当てます。
 3. [リセット]ボタンをクリックすると、現在のすべてのインスタンスIDとライセンスキーの割り当てを解除します。
 - 既に割り当てるインスタンスIDに対しても未割り当てるライセンスキーの割り当ては可能です。
 - また、現在割り当てるライセンスキーを異なったインスタンスIDに割り当てる事も可能です。
 - [リセット]ボタンをクリックし、すべてのライセンスキーがインスタンスIDから解除されても、監視設定が消えることはありません。ただし監視を開始することはできません。また、監視設定を変更することもできません。
- BOMマネージャーのインスタンスの監視起動のメニューがグレイアウトされ、インスタンスIDにライセンスキーを割り当てるまでアクティブになりません。

7. インスタンスのプロパティ

BOMマネージャー上で監視インスタンスを右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックすると、インスタンスの"プロパティ"画面を表示します。

(1) 「全般」タブ



項目	説明
ID	インスタンスのIDが表示されます。
対象コンピューター	監視対象のコンピューターの名前が、ローカルコンピューターの場合は、"コンピューターネーム(ローカルコンピューター)"、代理監視コンピューターの場合は、"コンピューターネーム(代理監視コンピューター)"と表示されます。
"監視に利用するアカウント"エリア	監視に利用するアカウントを、"ローカルシステムアカウント"と"ユーザーアカウント"から指定することができます。
"ローカルシステムアカウント"ラジオボタン	ローカルコンピューターのアカウントを用いて対象コンピューターにログオンします。

項目	説明
"アカウント"ラジオボタン	任意のアカウントを用いて対象コンピューターにログオンします。 この場合、そのアカウントにバッチジョブとしてのログオン権限が付与されます。
[ログオンの確認]ボタン (※)	ログオンに成功した場合、"ログオンに成功しました"というダイアログを表示します。 失敗した場合は、"ログオンに失敗しました"というダイアログを表示します。

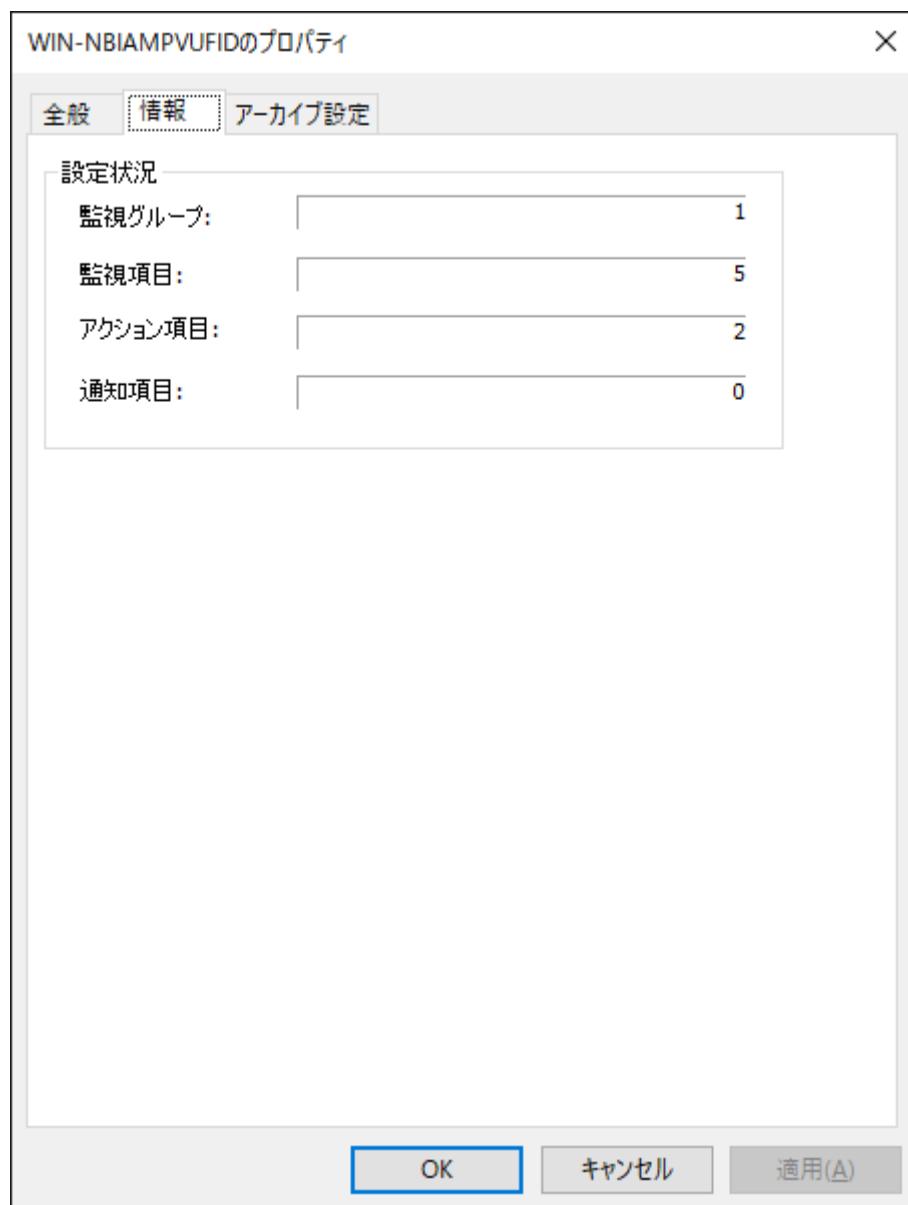
※ [ログオンの確認]ボタンはローカルコンピューターへのログオンの確認です。

※ ユーザーアカウントを指定する際は、UACをオフにする必要があります。詳細は、'[ユーザーアカウント制御\(UAC\)](#)'を参照してください。

(2) 「情報」タブ

インスタンスの各種設定項目の数を示します。

1インスタンスあたりの監視項目とアクション項目と通知項目を合わせた項目数の上限は10000項目です。1インスタンスに対して、10000項目より多くの項目を設定することはできません。

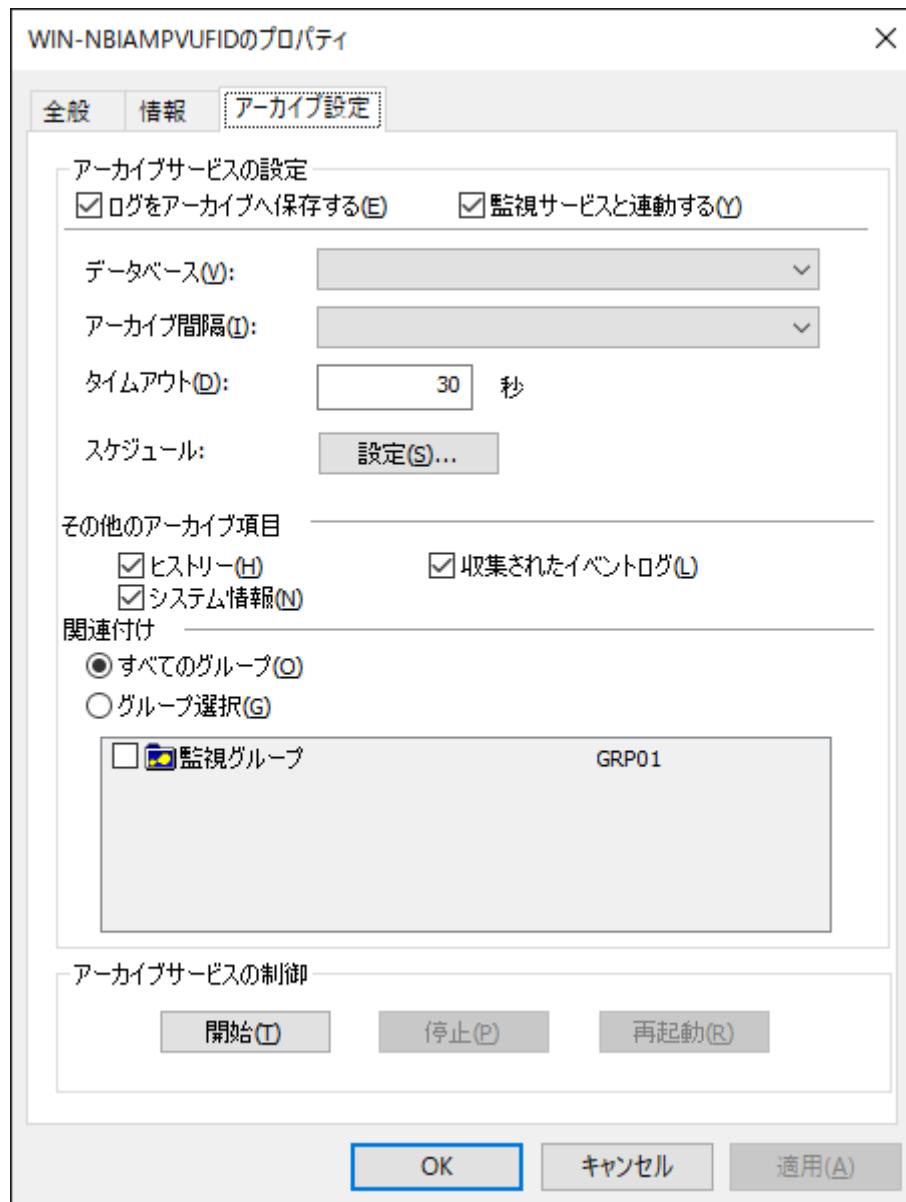


項目	説明
監視グループ	現状の監視グループの数を示します。
監視項目	現状の監視項目の数を示します。1インスタンスに設定できる監視項目数の上限は200項目です。
アクション項目	現状のアクション項目の数を示します。1監視項目に設定できるアクション項目の上限は99項目です。
通知項目	現状の通知項目の数を示します。1インスタンスに設定できる通知項目数の上限は99項目です。

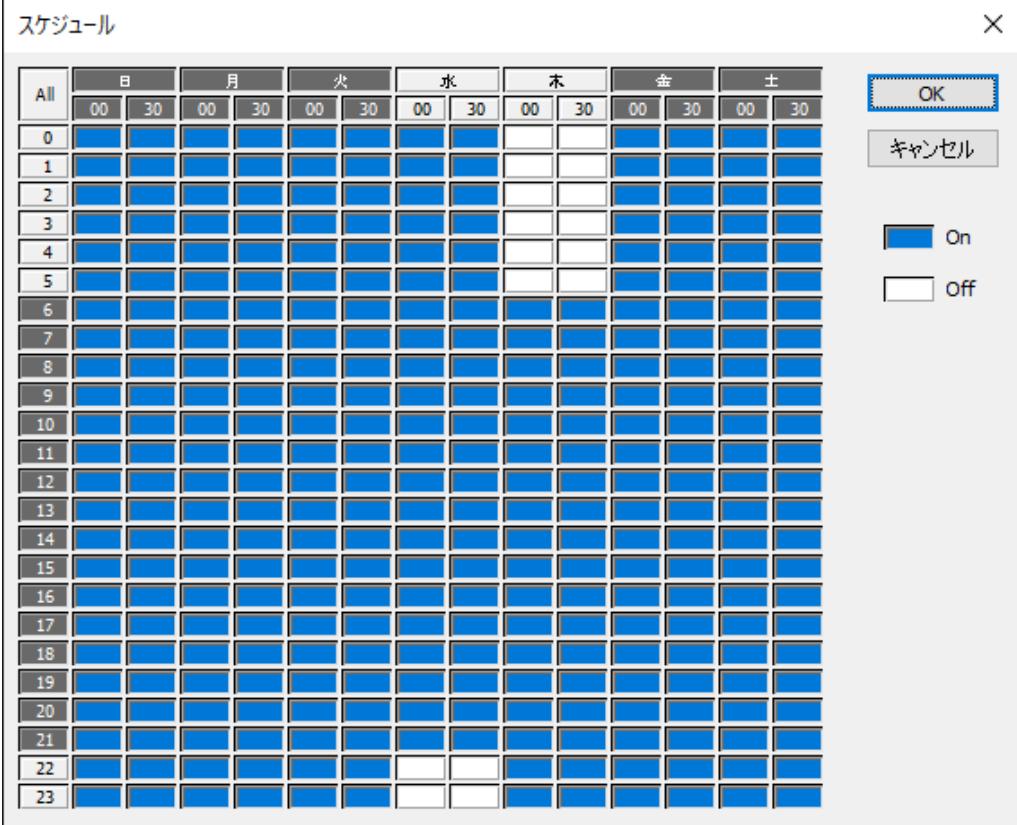
(3) 「アーカイブ設定」タブ

アーカイブサービスの設定を行います。

タブを表示した段階で、アーカイブサービスの登録を行います。詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 アーカイブユーザーズマニュアル'を参照してください。



項目	説明
ログをアーカイブへ保存する	チェックボックスにチェックを入れると、ログをアーカイブデータベースに保存します。
監視サービスと連動する	監視サービスに合わせて、アーカイブサービスが起動・停止します。 この設定は、BOMマネージャーにより監視サービスを開始する場合のみ機能します。BOMコントロールパネルおよびサービスマネージャーから監視サービスを起動した場合、アーカイブサービスは連動して開始しません。
データベース	アーカイブデータベースを指定します。 指定するアーカイブデータベースはアーカイブデータベースの設定で追加したリストから選択します。詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 アーカイブ ユーザーズマニュアル'を参照してください。

項目	説明
アーカイブ間隔	アーカイブデータベースにデータを送る間隔を、"30分"、"1時間"、"1.5時間"、"2時間"、"3時間"、"4時間"、"6時間"、"8時間"、"0.5日（12時間）"、"1日"から指定できます。
タイムアウト	アーカイブデータベースにデータを蓄積する際のタイムアウト時間を指定します。 "0"～"999999999"秒を指定でき、"0"を指定した場合は実行完了まで無制限に待機します。
スケジュール	[設定...]ボタンをクリックすると、"スケジュール画面"が表示されます。  <p>縦軸は"時間"、横軸は"曜日"と"毎時00分"、"毎時30分"のいずれかを指定します。青色がオン状態、白色がオフ状態です。</p> <p>上図は、毎週水曜日の22時から翌日木曜日の6時まで定期メンテナンスなどでアーカイブデータベースを停止させているため、該当するインスタンスからアーカイブデータベースへのデータ送信をOff（無効）にした場合の例です。</p>
その他のアーカイブ	項目監視ノード配下の監視データ以外のアーカイブデータの選択を行います。 ログノード配下の"ヒストリー"と"収集されたイベントログ"を選択することができます。
"関連付け"エリア	アーカイブ対象としたい監視グループを選択します。
"すべてのグループ"ラジオボタン	すべての監視グループをアーカイブデータベースに保存します。
"グループ選択"ラジオボタン	監視グループの一覧が表示されるため、アーカイブ対象としたい監視グループのチェックボックスにチェックを入れることで、該当する監視グループをアーカイブデータベースに保存します。

項目	説明
"アーカイブサービスの制御"エリア	[開始]ボタン：アーカイブサービスを開始します。 [停止]ボタン：アーカイブサービスを停止します。 [再起動]ボタン：アーカイブサービスを再起動します。

8. インスタンスのコンテキストメニュー

BOMマネージャーのインスタンスを右クリックした際に表示される、下記のコンテキストメニューについて解説します。

- BOM 8.0のインストールコンポーネントや設定状況により、表示されるコンテキストメニューの内容は異なります。
- MMC共通のメニューについては、'MMC共通メニューについて'を参照してください。



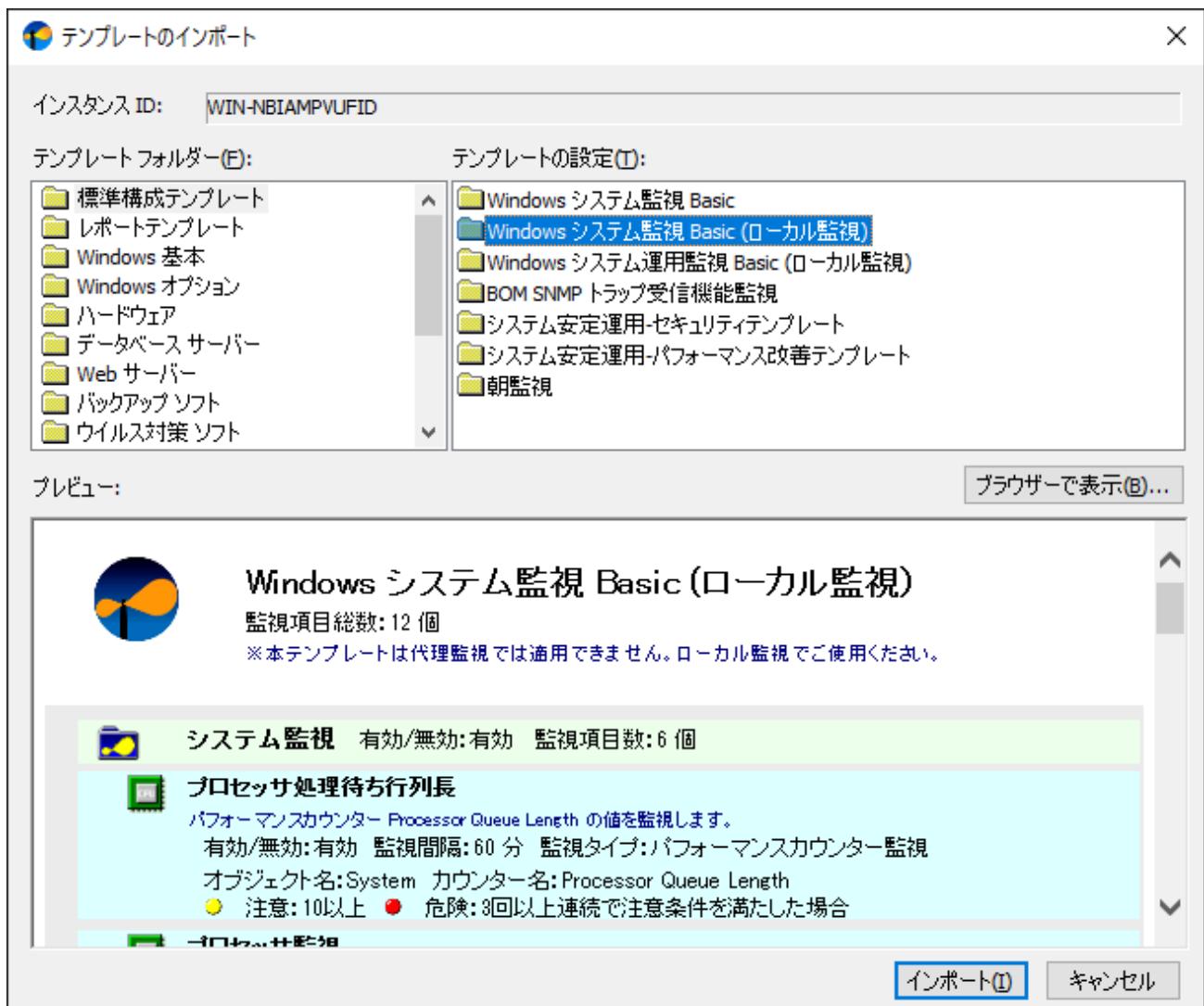
(1) テンプレートのインポート

BOM 8.0では、よく使用される監視設定をあらかじめパッケージ化した"テンプレート"をインストールできます。

※ テンプレートは通常、インポートするだけですぐに動作しますが、一部のテンプレートではインポート後に個別の設定が必要です。

※ テンプレートの各監視項目に設定済みの閾値や監視間隔などは、弊社での検証結果から設定した値で、ご利用の環境や要件にこれらの設定値が適合しない場合があります。その際は設定値を環境や要件に適合した値に変更して使用してください。

"テンプレートのインポート"を実行すると、次のようなテンプレートを選択する"テンプレートのインポート"画面が表示されます。



1. "テンプレートフォルダー"エリアから、種類ごとにまとめられた監視テンプレートが保存されたフォルダーを選択します。
2. "テンプレートの設定"エリアから、監視テンプレートを選択します。
3. 選択した監視テンプレートに収録された監視項目の情報が、"レビュー"エリアに表示されます。
 - [ブラウザーで表示]ボタンをクリックすると、レビュー画面で表示された情報をブラウザーで表示します。
4. [インポート]ボタンをクリックすると"テンプレートのインポート"画面が閉じ、選択したテンプレートがインポートされます。
 - インポートしたテンプレートが表示されない場合は、スコープペインの"監視"をクリックして表示を更新してください。
 - インポートする監視項目は、1インスタンスあたり200項目以上の制限を超過してもインポートされますが、監視サービスが起動できなくなります。この際はインスタンスあたりの項目数を200項目以下にしてください。1インスタンスあたりの総項目数の確認については、「[情報タブ](#)」で参照できます。
 - 異なるメジャーバージョンのBOM製品に用意されたテンプレートには互換性がなく、監視項目はインポートできません。

(2) 監視設定のエクスポートとインポート

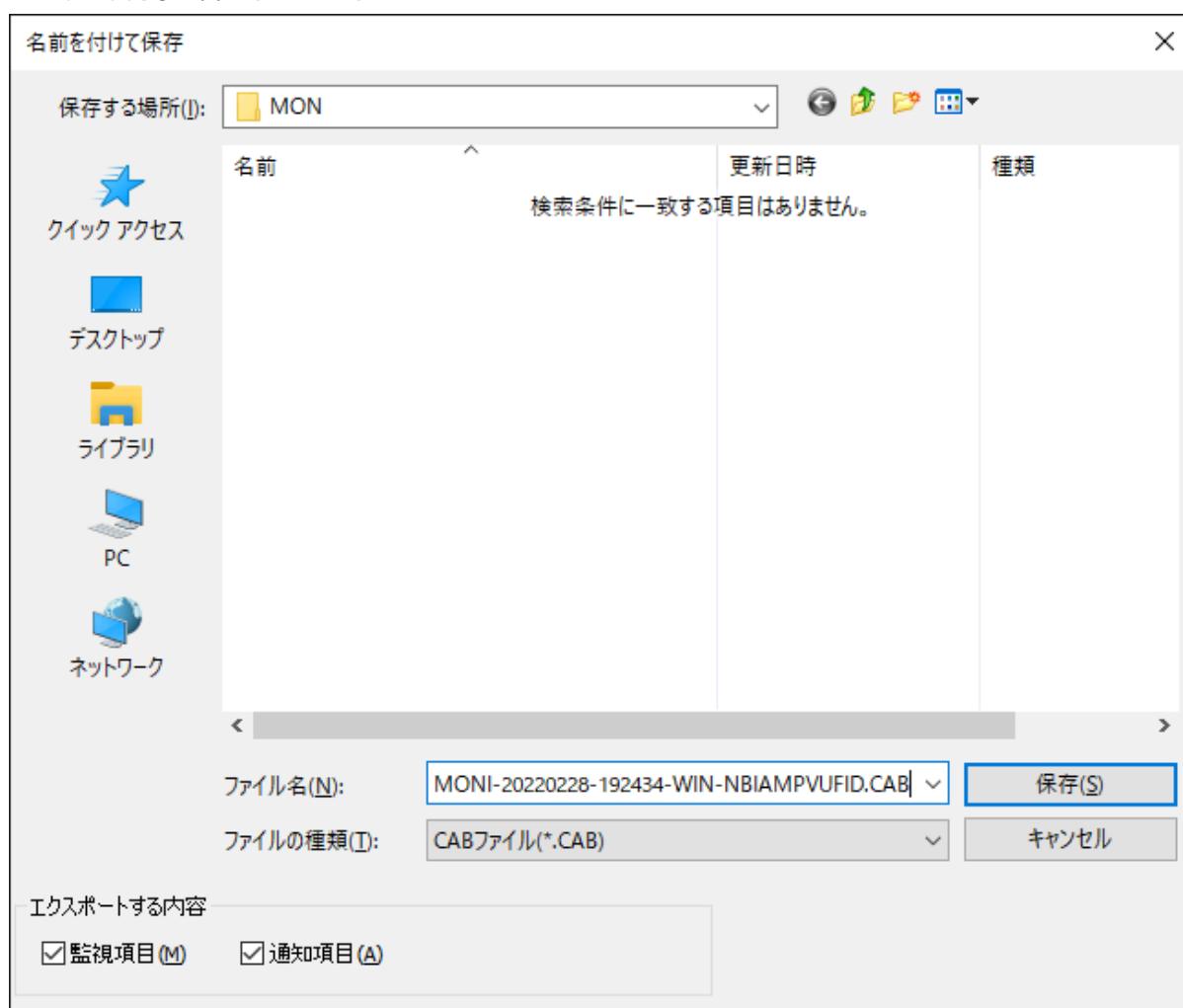
BOM 8.0インスタンスの設定を行った後に、監視設定のエクスポート機能を使ってインスタンス内の設定値をCABファイルに出力することができます。

同じような監視を行いたいインスタンスを追加する際には、エクスポートした設定値のCABファイルを監視設定のインポート機能を使って取り込むことで、設定値を複製して監視をすぐに開始することができます。

- 設定値の一部は、監視対象コンピューターの情報に合わせて変更する必要があります。

A. 監視設定のエクスポート

1. BOMマネージャーのスコープペインにて、監視設定をエクスポートしたいインスタンスを選択し、右クリックします。
2. コンテキストメニューの"設定のエクスポート"をクリックします。
3. "名前を付けて保存"画面で、CABファイルの保存先フォルダーとファイル名を指定します。
 - "監視項目"チェックボックスにチェックを入れることで、監視グループ、監視項目、アクション項目をエクスポート対象に含めることができます。また"通知項目"チェックボックスにチェックを入れることで、通知項目をエクスポート対象に含めることができます。



- 既定のフォルダーおよびファイル名は以下のとおりです。

フォルダー : ¥ProgramData¥SAY Technologies¥BOMW8¥DAT¥MANAGER¥MON

ファイル名 : MONI-yyyyMMdd-hhmmss-[インスタンス名].CAB

(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)

4. [保存]ボタンをクリックすると、手順1.で指定したインスタンスの設定値を手順3.の条件でCABファイルに出力します。

- エクスポート先のフォルダーは必ず、ログオンユーザーが書き込み権限を持つフォルダーを指定してください。

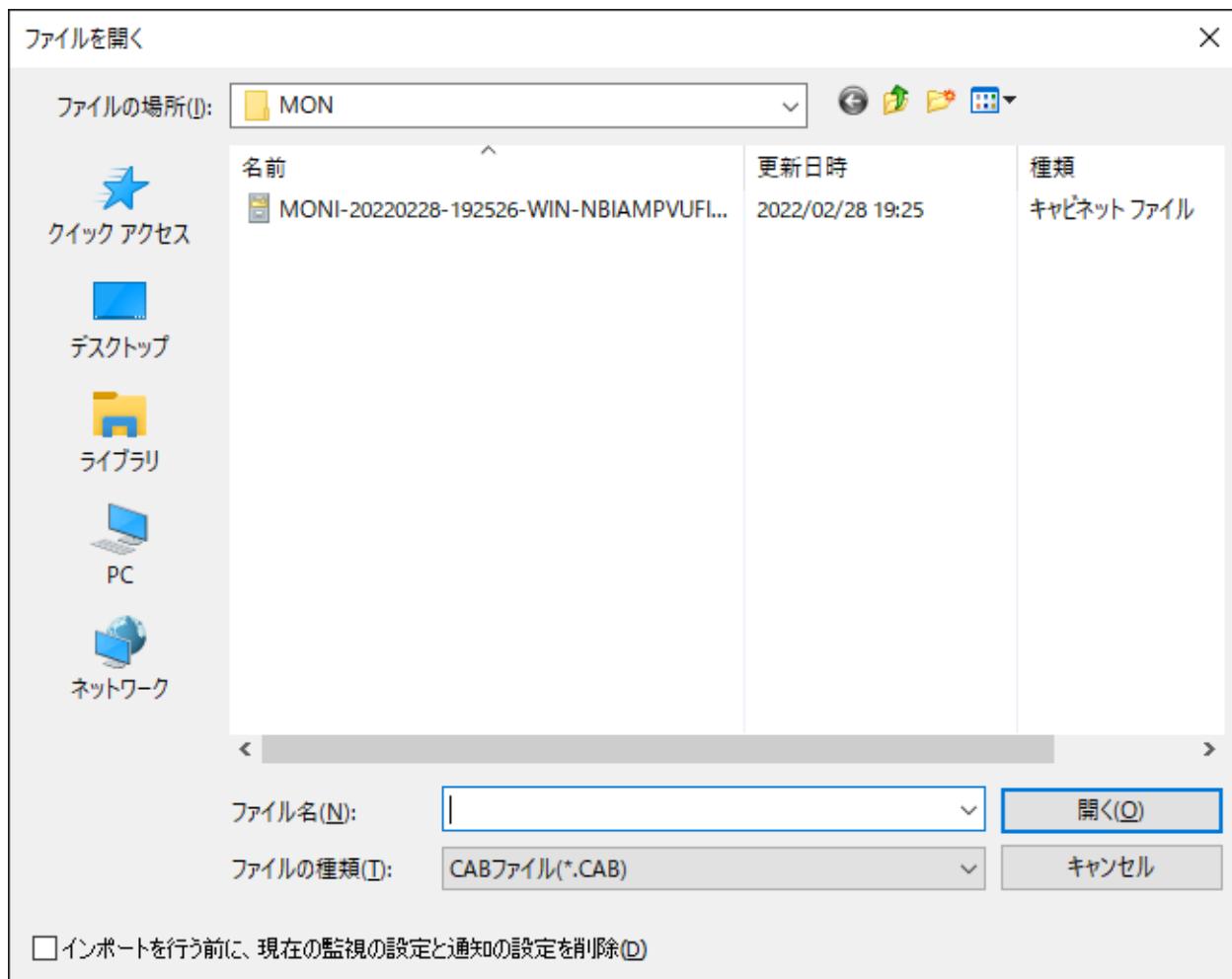
書き込み権限のないフォルダーあるいはプロテクトにより書き込めないメディアにエクスポートすると、"指定された保存場所には書き込みできません。ドライブの種別・アクセス権の有無を確認してください。"というエラーになります。

B. 監視設定のインポート

エクスポートした設定値をインポートする際は、設定値をインポートする対象のインスタンスが必要です。

新しいインスタンスの作成の詳細については、'ローカル監視、代理監視、リモート接続'を参照してください。

- BOMマネージャーのスコープペインにて、監視設定をインポートしたいインスタンスを選択し、右クリックします。
- コンテキストメニューの"設定のインポート"をクリックします。
- "ファイルを開く"画面で、インポートする設定値のCABファイルを選択します。



- "インポートを行う前に、現在の監視の設定と通知の設定を削除"チェックボックスについて

- チェックボックスにチェックを入れた場合 :**

インポート先のインスタンスの監視グループ、監視項目、アクション項目、通知項目の設定値をすべて削除した上で、新しい設定値をインポートします。この際、監視グループIDはエクスポート時から変更せずインポートします。

- チェックボックスのチェックを外した場合 :**

インポート先のインスタンスの監視グループ、監視項目、アクション項目、通知項目の設定値を残し、インポートする設定を追加します。事前に作成した設定値を残した上で設定値をインポートする場合や、複数のCABファイルをインポートする場合には、本チェックボックスからチェックを外してください。

この際、既存の監視設定と監視グループIDが重複する可能性があるため、インポートした監視グループのIDには空いているIDを頭から割り振る動作をします。

4. [開く]ボタンをクリックすると、手順1.で指定したインスタンスに対し手順3.の条件で設定値をインポートを実行します。

- あるインスタンスで監視設定した内容をエクスポートし、異なるインスタンスにインポートした場合、あるいは同一のインスタンスでもハードウェア環境、ソフトウェア環境を変更した後インポートする場合には、監視項目やアクション機能が失敗することがあります。その場合には、監視対象コンピューターに適合した監視設定に変更してください。
- インポートする監視項目は、1インスタンスあたり200項目以上の制限を超過してもインポートされますが、監視サービスが起動できなくなります。この際はインスタンスあたりの項目数を200項目以下にしてください。
1インスタンスあたりの総項目数の確認については、「[情報タブ](#)」で参照できます。
- BOM オプション製品でエクスポートした監視設定は、同じ製品にのみインポートが可能です。異なる製品にインポートを試みた場合には、警告メッセージが表示されます。

(3) 監視設定一覧の出力

監視インスタンス毎に監視グループ／監視項目／アクション項目／通知項目の監視設定の一覧を、XML形式またはCSV形式のファイルで出力します。出力形式はファイルの種類から変更できます。

このファイルは、XML形式、CSV形式の読み込めるアプリケーション（Microsoft Excel等）で読み込むことができます。

- ファイルに出力される内容

項目	内容
インスタンス情報	インスタンス名
監視グループ	グループ名、グループID、有効/無効、スケジュール設定の有無
監視項目情報	項目名、項目ID、有効/無効、監視間隔、判定条件[注意]、判定条件[危険]
アクション項目情報	項目名、項目ID、有効/無効、実行条件（※1）、実行頻度（※2）
通知項目情報	項目名、項目ID、有効/無効、実行条件（※3）、実行頻度（※2）

※1 N:正常、W:注意、C:危険、F:失敗

※2 - (ハイフン) :毎回または回数指定、O:変化時のみ

※3 監視結果による通知の場合 N:正常、W:注意、C:危険、F:失敗

アクション実行結果による通知の場合 S:成功、E:エラー、F:失敗

- 出力ファイル

既定値は以下のとおりです。

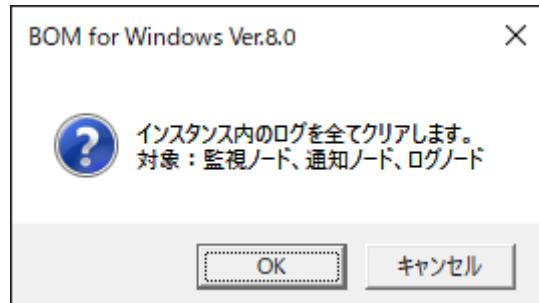
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\DAT\MANAGER\LIST

ファイル名 : LIST-yyyyMMdd-hhmmss-[インスタンス名].xml

(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)

(4) すべてのログのクリア

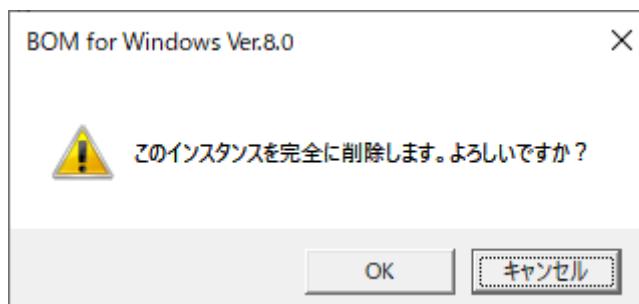
"すべてのログのクリア"をクリックすると、下記のメッセージが表示され、インスタンス内の監視および通知、ログのログデータがすべて削除されます。



(5) 削除

"削除"ではインスタンスを削除できます。

クリックすると下記のメッセージが表示され、対象のインスタンス情報、監視設定、ログなど、すべての情報が削除されます。



(6) プロパティ

"プロパティ"では、監視アカウントの変更が可能です。

詳細は '[インスタンスのプロパティ](#)' を参照してください。

第4章 監視グループ

1. 監視グループについて

監視グループを使用することで、監視インスタンスに設定される1つ1つの監視を分類して管理できます。

下記のようなケースでは、複数の監視グループを利用することで柔軟な監視を実現できます。

- 監視項目を目的別に整理するために、監視グループをWindowsのフォルダーのように使用する

1台のサーバー上で社内のさまざまな業務アプリケーションが稼働しており、アプリケーションによってシステム管理者が異なるため、システム管理者ごとに監視グループを設定し、設定変更時などのメンテナンス性を高めたい場合など。

例: 経理システムのバージョンアップを行うため、一定期間イベントログや経理システムが出力するログファイルの監視を強化し、大きなトラブルが起きなければ不要な監視項目の削除や監視設定を元に戻したいが、管轄外のアプリケーションの監視項目を誤って削除・変更してしまうリスクはできるだけ避けたい。

- 監視グループの監視の有効/無効スケジュール機能を使用する

毎週の定期メンテナンスの際には、リソース監視は必ず異常を検知してしまうため定期メンテナンスの決まった時間帯は監視を止めたいが、リソース監視以外の監視は継続しておきたい場合など。

例: 每週水曜日の22時から木曜日の5時までは定期メンテナンスを行っている関係上、CPU使用率やメモリ使用率などのリソース監視は必ず異常を検知するので監視を自動で止めておきたいが、イベントログ監視などのリソースに直接関係のない監視項目は定期メンテナンスの作業ミスなどを検知できるため継続して行っておきたい。

- 監視グループに属するすべての監視項目の監視間隔の設定機能を使用する

月末に負荷が集中するサーバーがあり、月末の一定期間だけ不測の事態に備えるためにリソース監視の監視間隔は短くし、リソース監視以外の監視は監視間隔を長くしておきたい場合など。

例: 每月28日から翌月の初日までは月末締めの各種バッチ処理が日中でも稼働しているためCPU使用率やメモリ使用率などのリソース監視はすべて通常時よりも監視間隔を短くして不測の事態に備えたいが、各種バッチ処理の稼働中はサーバーの負荷が著しく上昇するため、リソース監視以外の監視間隔は長くすることで、少しでもサーバー負荷を軽減したい。

2. 監視グループの作成

1. 該当するインスタンスの下にある"監視"ノードをクリックして選択します。
 2. "監視"ノードを右クリックし、コンテキストメニューの"新規作成"→"監視グループ"の順にクリックします。
 3. "監視グループ"ノードが"監視"のツリーノード下に新たに作成されます。
- 新しい監視グループにフォーカスを当てるするとBOMマネージャーのリザルトペインに"監視項目"と表示されます。
4. 監視グループの名前を変更するには、下記のどちらかの手段で"プロパティ"画面を表示し、"名前"欄を変更して[OK]をクリックします。
- リザルトペインで"監視グループ"をダブルクリック
 - スコープペインかリザルトペインのどちらかで"監視グループ"を右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリック



3. 監視グループのコピー

監視グループをコピーすると、監視グループに含まれる全監視項目、アクション項目の設定値等、監視グループのすべての設定をコピーすることができ、監視要件が同じ、または類似する複数のサーバーを監視する場合に設定時間を節約することができます。

コピーした監視グループは同じ名前とプロパティ設定値を持っています。設定値を変更する場合は、該当監視グループの"プロパティ"画面より行います。

1. 下記のどちらかの手段でコピーを行います。

- コピー元の監視グループを右クリックして、コンテキストメニューの"コピー"をクリック
- 監視グループをクリックして選択してから、メニューバーに移動してメニューをクリックし、"操作"→"コピー"の順にクリック

2. コピーした監視グループを貼り付ける"監視"ノードを右クリックし、コンテキストメニューの"貼り付け"をクリックします。

- "監視"ノードを右クリックし、コンテキストメニューの"貼り付け"をクリックすると、グループIDは自動で未使用のIDが割り振られます。

4. 監視グループの有効化/無効化

監視グループに属する、監視項目すべての監視の有効/無効を制御することができます。

- 監視グループ単位での有効/無効制御のため、監視グループに所属する監視項目レベルで"無効"になっている監視項目の監視を"有効"にすることはできません。

1. 下記のどちらかの手段で、監視グループの"プロパティ"画面を表示させます。

- リザルトペインで"監視グループ"をダブルクリック
- スコープペインかリザルトペインのどちらかで"監視グループ"を右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリック

2. 既定では"有効"になっています。監視グループを"無効"にしたい場合には、"有効"チェックボックスのチェックを外します。

5. 監視グループのIDの変更

監視項目、アクション項目、および通知項目のIDも同じ手順で変更することができます。

- アクション項目のプロパティ画面で、アクション項目をID番号順に実行するか否か（アクションの逐次処理を行う）を選択することにより、アクション項目をID番号順に実行させることができます。詳細は'[「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

- 該当する監視グループを右クリックし、コンテキストメニューの"IDの変更..."をクリックすると"IDの変更"画面が表示されます。



- 置き換える"新しいID"を、"1"～"99"の任意の整数の中より入力します。

- この番号は未使用のIDでなければなりません。
- 既に使用されているIDを割り当てると"このIDはすでに別の項目で使用されています"というエラーが出力されます。

6. 監視グループのスケジューリング

監視が正常に実行されるためには、下記の3カ所の設定ですべて監視が有効になっていることが条件であり、一つでも監視が無効になつていれば監視は実行されません。

- 監視グループで設定したスケジュールの監視オン/オフのスケジュールが"On"である
- 各監視グループの有効/無効が"有効"である
- 監視グループ下の監視項目の有効/無効が"有効"であり、かつ、開始時刻の設定が該当する時間である

この最初にあげた監視スケジュールの設定方法は以下のとおりです。

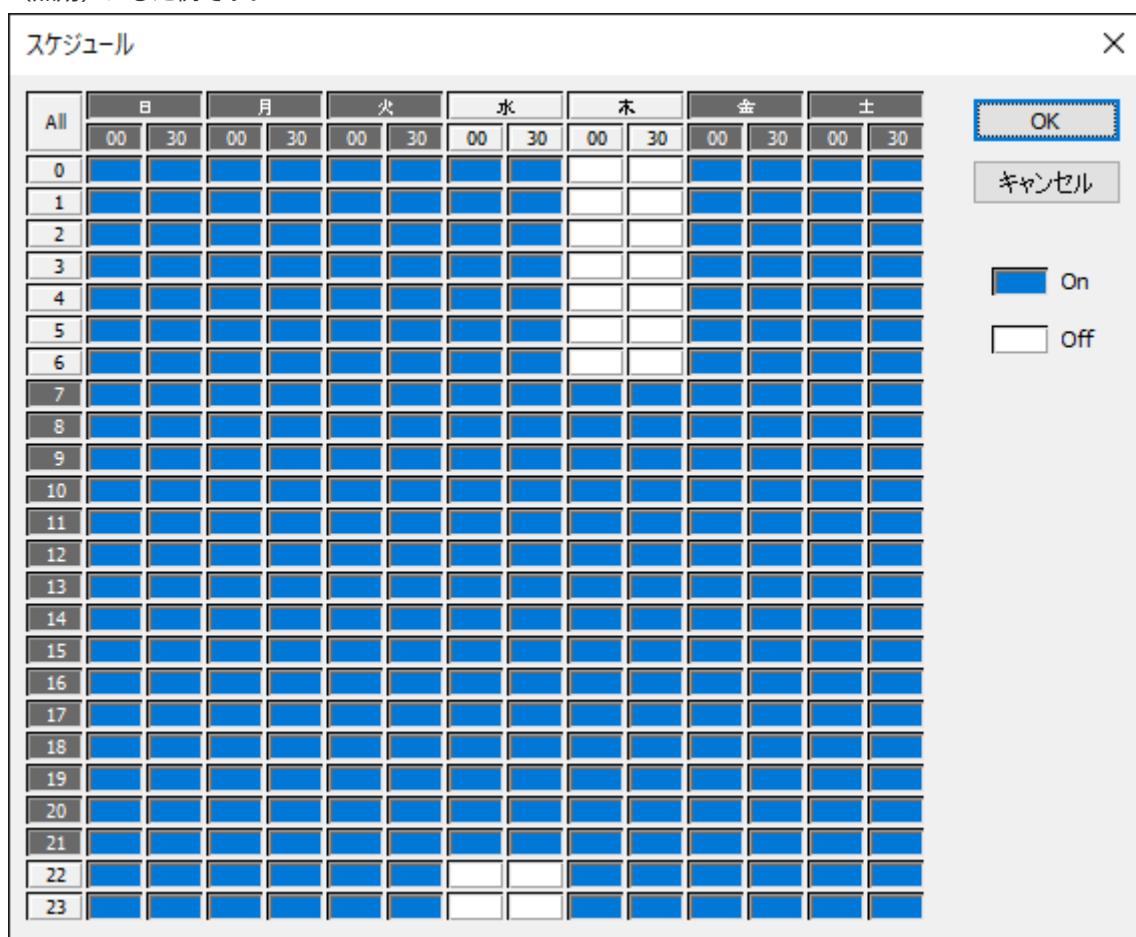
1. 下記のどちらかの手段で、監視グループの"プロパティ"画面を表示させます。

- リザルトペインで"監視グループ"をダブルクリック
- スコープペインかリザルトペインのどちらかで"監視グループ"を右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリック

2. [設定..]ボタンをクリックし、"スケジュール"画面を表示させます。

既定値では監視グループは常に実行されるようにスケジュールされています。必要に応じてカーソルをドラッグまたはクリックし、監視実行の選択（監視"On"）/選択解除（監視"Off"）を変更します。

- 青くなっている時刻は監視がOnになり、白くなっている時刻は監視がOffになります。
- 下記は、毎週水曜日の22時から翌日木曜日の6時まで定期メンテナンスなどで、該当する監視グループの監視をOff（無効）にした例です。



7. 監視項目を作成する際の注意

監視項目は必ず、いずれかの監視グループに所属している必要があります。そのため監視項目を作成する際は、まず監視グループから作成します。

監視グループの作成後、作成した"監視グループ"をスコープペインで右クリックし、コンテキストメニューの"新規作成"をクリックすると、監視項目を作成することができます。

監視項目の詳細は'[監視項目](#)'を参照してください。

8. 一覧のエクスポート

監視グループ内の情報は、タブ区切りのテキストファイルにエクスポートできます。

この情報は、BOMマネージャーのリザルトペインをテキストファイルにしたものです。

1. BOMマネージャーで情報をエクスポートしたい監視グループを左クリックし、選択した状態にします。
2. 選択した監視グループを右クリックし、コンテキストメニューの"一覧のエクスポート..."を選択します。
3. "一覧のエクスポート"画面が表示されます。ファイルを保存するフォルダーを選択して、ファイルに名前を付けます。
4. [保存]ボタンをクリックします。

監視項目リストのエクスポートでは、監視グループを選択した際のリザルトペインに表示されている下記項目が出力されます。

"項目名"、"各監視項目名"、"ID"、"有効/無効"、"監視間隔"、"注意"、"危険の条件"、"ステータス"、"前回の値"、"前回実行時刻"

第5章 監視項目

1. 監視項目の解説

BOM 8.0では、システム管理者が監視設定する具体的な項目のことを監視項目と呼び、イベントログのエントリから、ハードディスク、プロセスなど、システム管理者にとって重要なものを監視できます。

- 監視を実行するには、監視項目が"有効"となっている必要があります。
- 監視項目や、その監視項目に関連付くアクション項目を作成/変更/削除する際は、インスタンスが停止している必要があります。
- 1つのインスタンスに作成できる監視項目の最大数は200項目です。

2. 監視項目の作成・削除

- 新規作成手順

1. 監視項目を作成する"監視グループ"を右クリックし、コンテキストメニューの"新規作成"をクリックします。
2. コンテキストメニューが展開され、作成できる監視項目（"ディスク容量監視"、"プロセス監視"、"プロセッサ監視"など）が一覧表示されます。

作成する監視項目をクリックすると、手順1.で選択した"監視グループ"の直下に作成されます。

作成後、"監視項目"は必要に応じて設定値を変更する必要があります。

- 削除手順

削除対象の監視項目上で右クリックし、コンテキストメニューの"削除"をクリックします。

3. 監視項目のコピー

監視項目をコピーすると、監視項目に含まれる全アクション項目の設定値を含め、監視項目のすべての設定をコピーすることができ、監視要件が同じ、または類似する複数のサーバーを監視する場合に設定時間を節約することができます。

コピーした監視項目は同じ名前とプロパティ設定値を持っています。設定値を変更する場合は、該当監視項目の"プロパティ"画面より行います。

1. 下記のどちらかの手段でコピーを行います。

- コピー元の監視項目を右クリックして、コンテキストメニューの"コピー"をクリック
- 監視項目をクリックして選択してから、メニューバーに移動してメニューをクリックし、"操作"→"コピー"の順にクリック

2. コピーした監視項目を貼り付ける監視グループを右クリックし、コンテキストメニューの"貼り付け"をクリックします。

- 監視グループを右クリックし、コンテキストメニューの"貼り付け"をクリックすると、監視項目IDは自動で未使用のIDが割り振られます。
- ローカル監視もしくは代理監視のインスタンス間で監視項目を"コピー"し、"貼り付ける"ことができます。リモート接続時のスナップインノード間の監視項目のコピーはできません。

4. 監視項目の有効化/無効化

監視項目を"有効"にするには、下記のいずれかを実行します。

- ※ 監視項目は既定で"有効"チェックボックスにチェックが入っています。
- ※ 監視項目を"無効"にしたい際には、同様の手順で"無効"を選択するか、"有効"チェックボックスからチェックを外します。
- "監視項目"を右クリックし、コンテキストメニューの"有効"をクリックします。
- "監視項目"を右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックして"プロパティ"画面を表示させ、"有効"チェックボックスにチェックを入れます。
- リザルトペインで"監視項目"をダブルクリックして"プロパティ"画面を表示させ、"有効"チェックボックスにチェックを入れます。
- リザルトペインで"監視項目"をクリックし、リザルトペインの画面下部にある"有効"をクリックします。

5. 監視間隔の概念

各監視項目の"プロパティ"画面の「全般」タブにある"監視開始時刻"からの監視間隔を基準にして監視が実行されます。

なお、監視項目の"有効"チェックボックスのチェックを外しても時間はカウントされており、途中で監視項目の"有効"チェックボックスにチェックを入れた場合には、この間隔に沿って監視が行われます。

- "監視開始時刻"を"午前0時"に設定し、監視項目の監視間隔が"1時間"の場合
 - 午前1時、2時、3時・・・と1時間おきに監視が行われます。
 - 1時10分に監視項目の"有効"チェックボックスにチェックを入れた場合には、次に監視が行われるのは2時です。

6. 監視間隔の設定

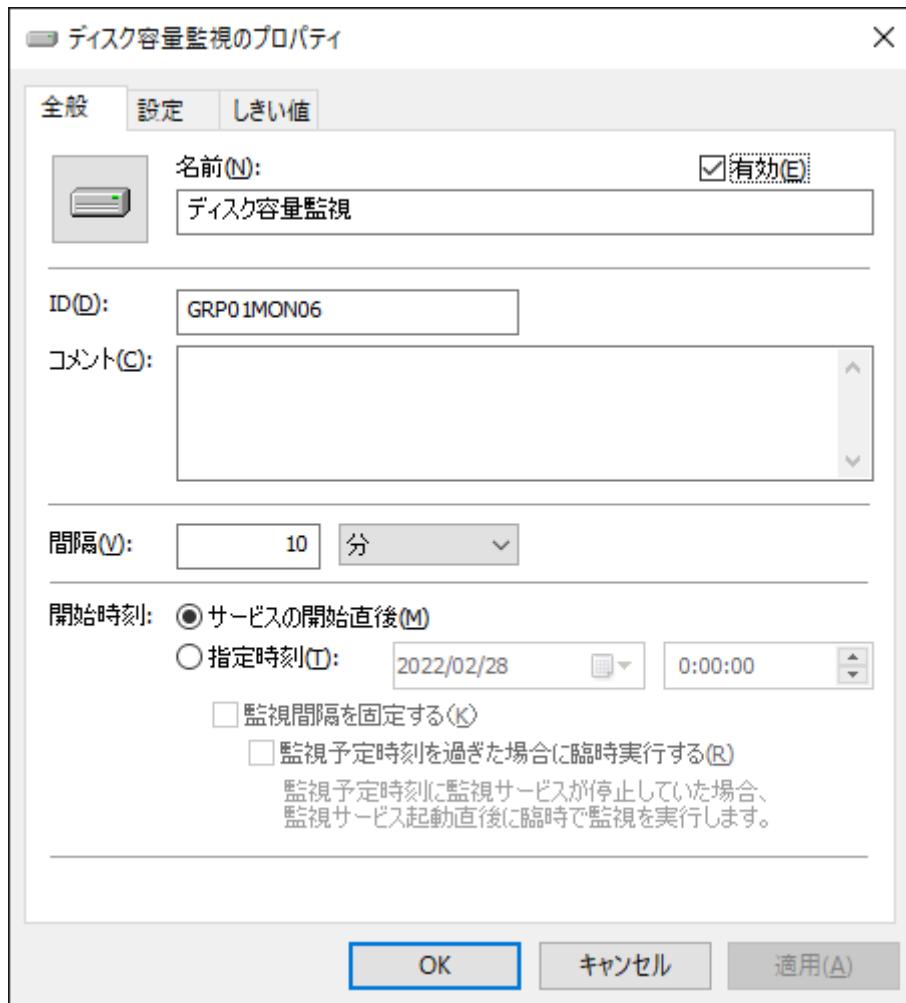
監視間隔は監視項目ごとに設定する必要があります。

設定には2つの方法があるため、ディスク容量監視のプロパティを例に説明します。

なお、手順A.は監視項目ひとつひとつに対する設定であり、手順B.は同一の監視グループ内の全監視項目に対して、まとめて監視間隔の変更を反映させることができます。

(1) 監視項目のプロパティから実施する

- "監視項目"を右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックして"プロパティ"画面を表示します。



- 「全般」タブの"間隔"フィールドに、この項目に対して監視を行う時間間隔（半角数値と時間単位）を入力します。
 - 最大で"9999"日まで設定可能です。
 - 既定値は監視項目によって異なり、ディスク容量監視の既定値は"10"分です。
- "開始時刻"では、この監視項目の監視をいつ開始するのかを選択します。
 - "サービスの開始直後"ラジオボタンを選択した場合
監視（監視サービス）を開始した時点で監視を実行し、その後は設定された間隔ごとに監視を実行します。
 - "指定時刻:"ラジオボタンを選択した場合
以下の手順で基準となる日時を指定します。

1. "日付"フィールドのドロップダウンメニューのカレンダーより、"起動日"を指定します。

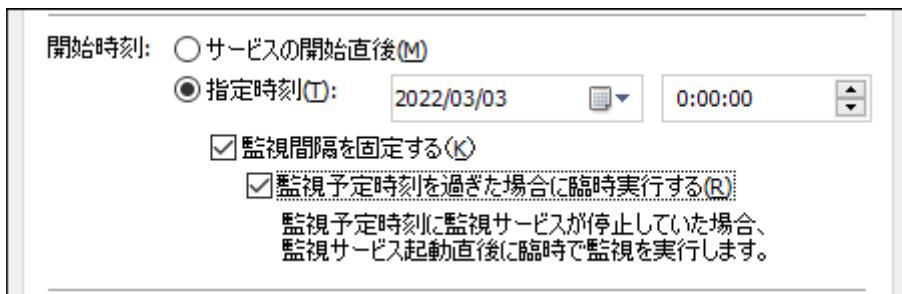


2. "時刻"の入力は、"時"、"分"、"秒"を強調表示し、上矢印キーまたは下矢印キーで変更を加えます。



3. 必要に応じて"監視間隔を固定する"チェックボックスにチェックを入れます。

このチェックボックスにチェックを入れると、"指定時刻"を起点に監視間隔を固定することができます。これにより、監視サービス再起動によって監視時刻が変動しなくなります。



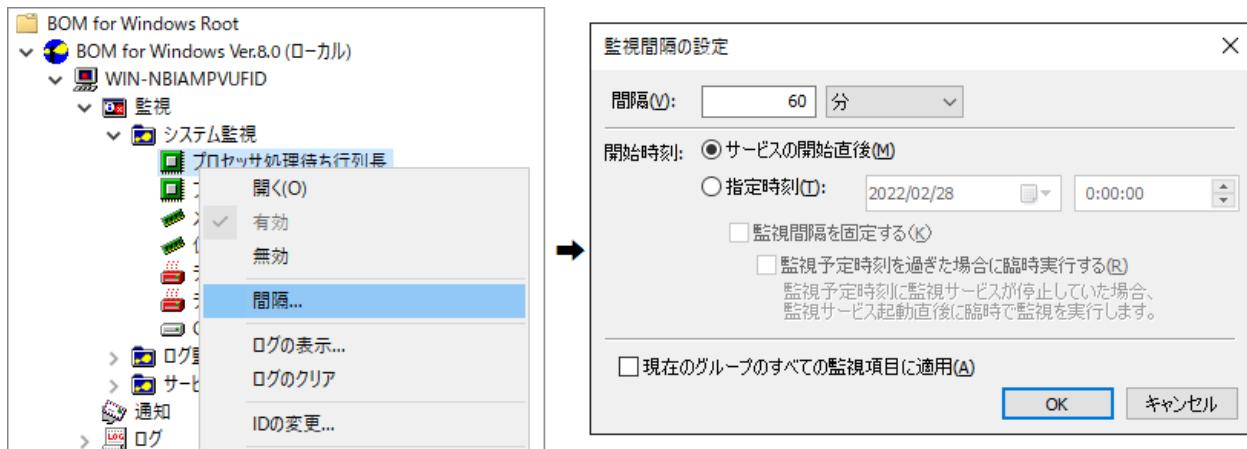
4. 必要に応じて"監視予定時刻を過ぎた場合に臨時実行する"チェックボックスにチェックを入れます。

このチェックボックスにチェックを入れると、前回の監視実行から監視サービス再起動などの影響で監視の行われない時間が監視間隔以上になっていた場合、臨時に監視を行わることができます。

例えば、毎日10:00に監視するように設定した上で、当日の10:00に監視サービスが起動していなかった場合、10:20に監視サービスを起動すると、当日は10:20に臨時に監視を行い、翌日以降は10:00に監視を実行します。

(2) 監視項目のコンテキストメニューから実施する

- "監視項目"を右クリックし、コンテキストメニューの"間隔"をクリックします。



- "監視間隔の設定"画面が表示されます。

"間隔"フィールドは、該当監視項目の監視を行う時間間隔（半角数値と時間単位）を入力します。

- 監視間隔は"9999"日まで入力可能です。

- "開始時刻"エリアは、'監視項目のプロパティから実施する'の手順3.と同様に設定します。

- "現在のグループのすべての監視項目に適用"チェックボックスにチェックを入れて[OK]ボタンをクリックした場合、手順2.、3.で指定した監視間隔を同一グループのすべての監視項目に適用することができます。

- "現在のグループのすべての監視項目に適用"チェックボックスのチェックを外して[OK]ボタンをクリックした場合、手順2.で指定した監視間隔は、手順1.で選択した監視項目のみに適用されます。

7. 監視ステータスについて

各監視項目には、以下のとおり4つの監視ステータスが存在します。

アイコン	監視ステータス名	説明
	正常	正常に監視が完了した状態
	注意	正常に監視が完了し、かつ 設定した注意しきい値の条件に当てはまった状態 ※危険しきい値に当てはまった場合、ステータスは注意とならず危険になります
	危険	正常に監視が完了し、かつ設定した危険しきい値の条件に当てはまった状態
	失敗	監視対象のコンピューターから整数以外の値が返却された状態 (マイナスの値やNullデータ、データ無し等)

監視ステータスの失敗については、BOMでは基本的に正常に動作しているが監視対象から整数以外が返却された場合に監視結果として出力されます。失敗ステータスが表示された場合には、監視元コンピューターと監視先コンピューター間または監視先コンピューターが正常に動作しているかを確認してください。

また、"ログ" → "ヒストリー" → "監視"に保存される監視ログレコードのプロパティには詳細内容が記録されるため、原因の調査に利用できます。

8. インスタンスステータスの表示

インスタンス配下の"監視"ノードを右クリックし、コンテキストメニューの"インスタンスステータスの表示"をクリックすることで、"インスタンスステータス"画面を表示できます。

この画面では、監視項目すべての"ステータス"、"前回の値"、"前回の実行時刻"、"前回の実行時間"、"前回の結果"、"アクション"の有無を表示します。

名前	ID	有効	間隔	ステータス	前回の値	前回実行時刻	前回の実行...	前回の結果	アクション
プロセッサ処理待ち...	GRP01MON01	Yes	60 分	正常	2	2022/04/12 15:41:08	3.391	0	0
プロセッサ監視	GRP01MON02	Yes	60 分	正常	9 %	2022/04/12 15:41:08	3.891	0	0
メモリ監視	GRP01MON03	Yes	60 分	注意	745 MB	2022/04/12 15:41:08	3.406	0	0
仮想メモリ監視	GRP01MON04	Yes	60 分	正常	68 %	2022/04/12 15:41:08	3.406	0	0
ディスク処理待ち行...	GRP01MON05	Yes	60 分	正常	0	2022/04/12 15:41:08	3.922	0	0
C ドライブディスク容...	GRP01MON06	Yes	60 分	正常	38 GB	2022/04/12 15:41:08	0.266	0	0
システムログ監視	GRP02MON01	Yes	5 分	正常	0 件	2022/04/12 15:41:08	2.641	0	0
アプリケーションログ...	GRP02MON02	Yes	5 分	正常	0 件	2022/04/12 15:41:08	0.938	0	0
イベントログチェック	GRP02MON03	Yes	5 分	正常	0	2022/04/12 15:41:09	1.157	0	1
Server 監視	GRP03MON01	Yes	1 分	正常	開始	2022/04/12 15:41:10	0.016	0	0
Remote Procedure C...	GRP03MON02	Yes	1 分	正常	開始	2022/04/12 15:41:10	0.047	0	0
Windows Managemen...	GRP03MON03	Yes	1 分	正常	開始	2022/04/12 15:41:10	0.000	0	0

失敗(F) 危険(D) 注意(W) 正常(N) 自動更新(A) 間隔: 30秒 ログの表示(V)... 更新(R) 閉じる

項目	説明
"失敗"、"危険"、"注意"、"正常"	各チェックボックスにチェックを入れると、"インスタンスステータス"画面に表示される監視項目をステータスに該当する監視項目のみに絞込むことができます。 (ステータス"なし"の監視項目は、常に表示されます。)
自動更新	チェックボックスにチェックを入れると、インスタンスステータス"画面の表示を"30秒間隔"で自動更新します。
[ログの表示]ボタン	"インスタンスステータス"画面に表示されている監視項目をクリックした状態でをクリックすると、該当する監視項目の"ログビューアー"画面を表示できます。 監視項目の"ログビューアー"画面の詳細は、'ログの表示'を参照してください。
[更新]ボタン	クリックすると、"インスタンスステータス"画面の表示を更新します。
[閉じる]ボタン	クリックすると、"インスタンスステータス"画面を閉じます。

9. 監視項目のログ

(1) ログの表示

BOM 8.0の監視ログは、BOM 8.0で検出したシステム障害のトラブルシューティングを行う際に非常に役立ちます。

以下の方法で確認してください。

1. BOMマネージャーで、"監視"ノード配下の監視グループから、該当の監視項目を右クリックします。

2. コンテキストメニューの"ログの表示..."をクリックして"BOMログビューアー"画面を表示させます。

名前	ステータス	値	実行時刻	コード	実行時間(秒)
プロセッサ監視	● 注意	100 %	2022/03/11 20:53:02	0	0.891
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 20:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 19:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	0 %	2022/03/11 18:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 17:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	28 %	2022/03/11 16:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 15:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	2 %	2022/03/11 14:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	2 %	2022/03/11 13:32:45	0	0.016
プロセッサ監視	● 正常	2 %	2022/03/11 12:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	3 %	2022/03/11 11:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 10:32:45	0	0.016
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 9:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 8:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 7:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 6:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 5:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 4:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	7 %	2022/03/11 3:32:45	0	0.000
プロセッサ監視	● 正常	1 %	2022/03/11 2:32:45	0	0.000
待機中	● (なし)		● 最後: 2022/03/11 20:53:02	100 %	37 件

3. タイトルバーに、現在表示されている"インスタンス"、"監視グループ"、および"監視項目"の名前が示されます。

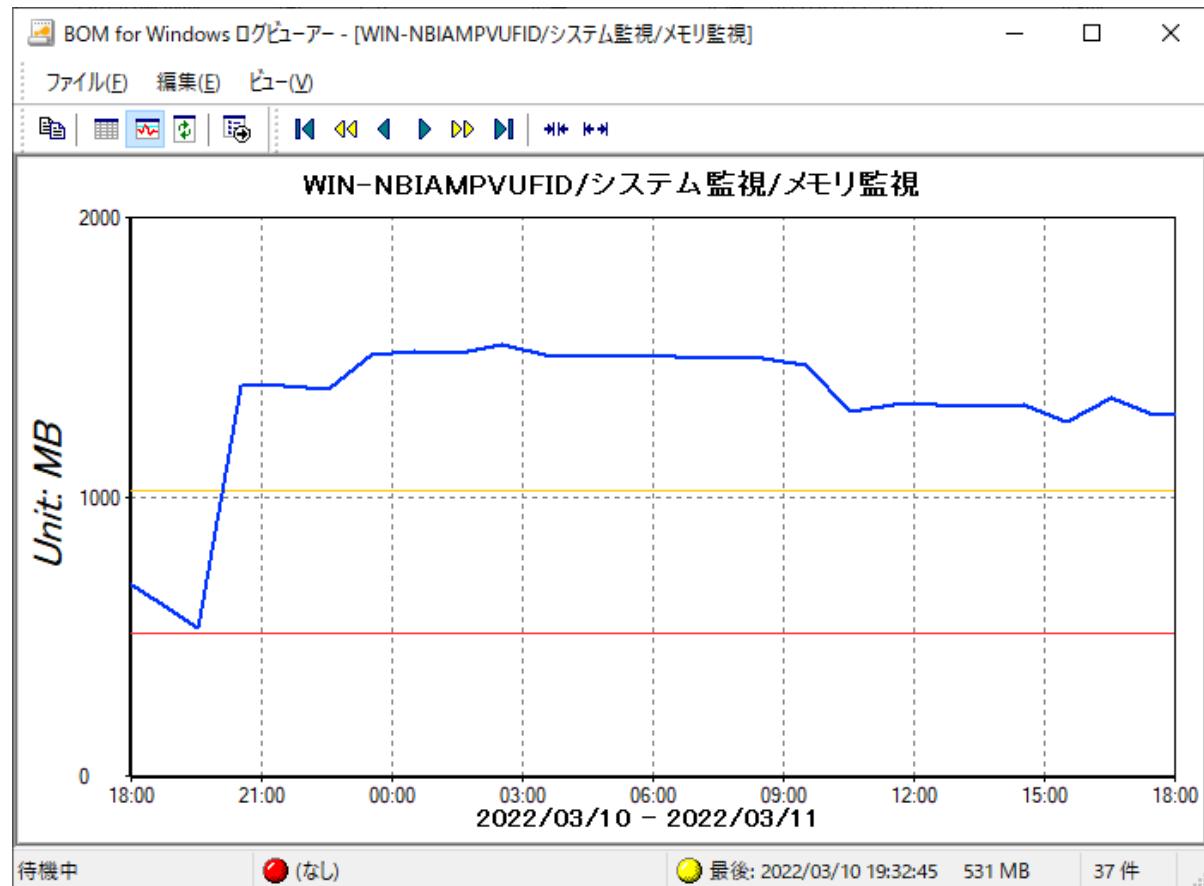
- 一度に複数の"BOMログビューアー"画面を開くこともできます。
- 1監視項目あたりの最大ログ蓄積量の既定値は15000件です。
- "名前"列には、実行された監視項目がリストされます。
- "ステータス"列には、監視が行われたときの監視項目の状態 ("正常"、"注意"、"危険"、"失敗"のいずれか) がリストされます。
- "値"列には、監視が行われた時点の項目の値がリストされます。
"N/A"は値が取得できなかった場合、あるいは必要なデータがすべて取得できなかった場合に表示されます。"N/A"であっても"失敗"ステータスになるとは限りません。
- "実行時刻"列には、監視項目が実行された日時がリストされます。
- "コード"列には、BOM監視プログラムからの"結果コード"がリストされます。
- "実行時間"列には、BOM 8.0がその項目の監視を完了するまでにかかった時間がリストされます。

4. "BOMログビューアー"画面最下部にあるステータスバーには、最新の"注意"ステータスと"危険"ステータスの日時と値がリストされます。

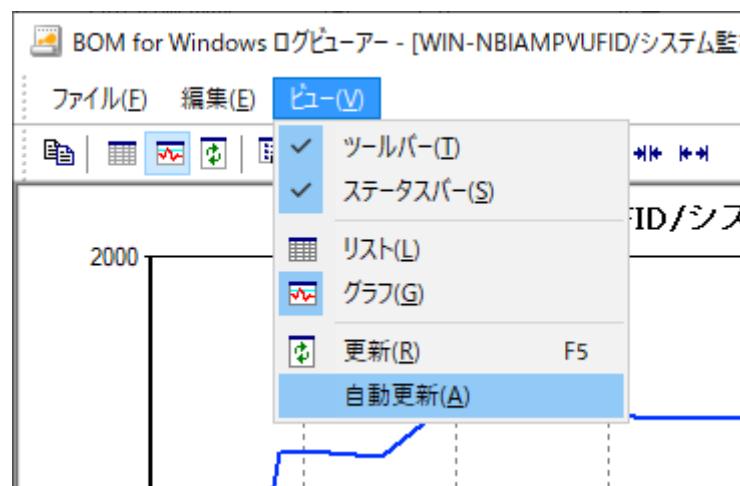
5. ログファイルの情報をグラフ表現で表示する方法は下記の2つがあり、下図のようなグラフが表示されます。

黄色い線は"注意"のしきい値、赤い線は"危険"のしきい値を示し、青い線は実際の値です。

-  をクリック
- "BOMログビューアー"画面のメニューbaruにある"ビュー"→"グラフ"の順にクリック



6. "BOMログビューアー"画面のメニューbaruにある"ビュー"→"自動更新"の順にクリックすることで、自動的に最新情報を表示するように設定することができます。なお、"自動更新"の間隔は2秒です。



(2) ログ蓄積量の最大件数の変更

監視項目のログは既定値で15000件まで保存できますが、最大件数は下記のiniファイルの一部を書き換えることで変更することができます。なお、設定は最初に監視項目のログが作成される場合に有効になります。

ログが既に存在する場合に最大件数を変更するには、一度'各種ログのクリア'の手順で監視項目のログを消去し、下記のiniファイルの設定を変更してから、BOMヘルパーサービス（BOM8Helperサービス）を再起動してください。

- iniファイル

格納先 : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config

ファイル名 : MxHelper.ini

変更箇所（パラメーター）：

下記のパラメーターを追記して[XXXXXX]部分に数字を入力すると、保存件数を変更できます。

[Option]

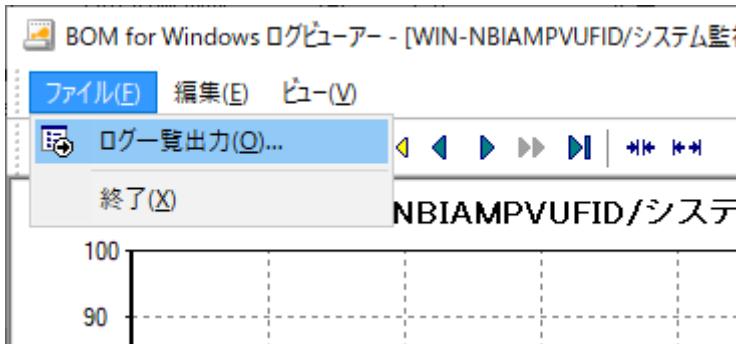
MaxMonLog = [XXXXXX]

10. 監視ログリストのエクスポート

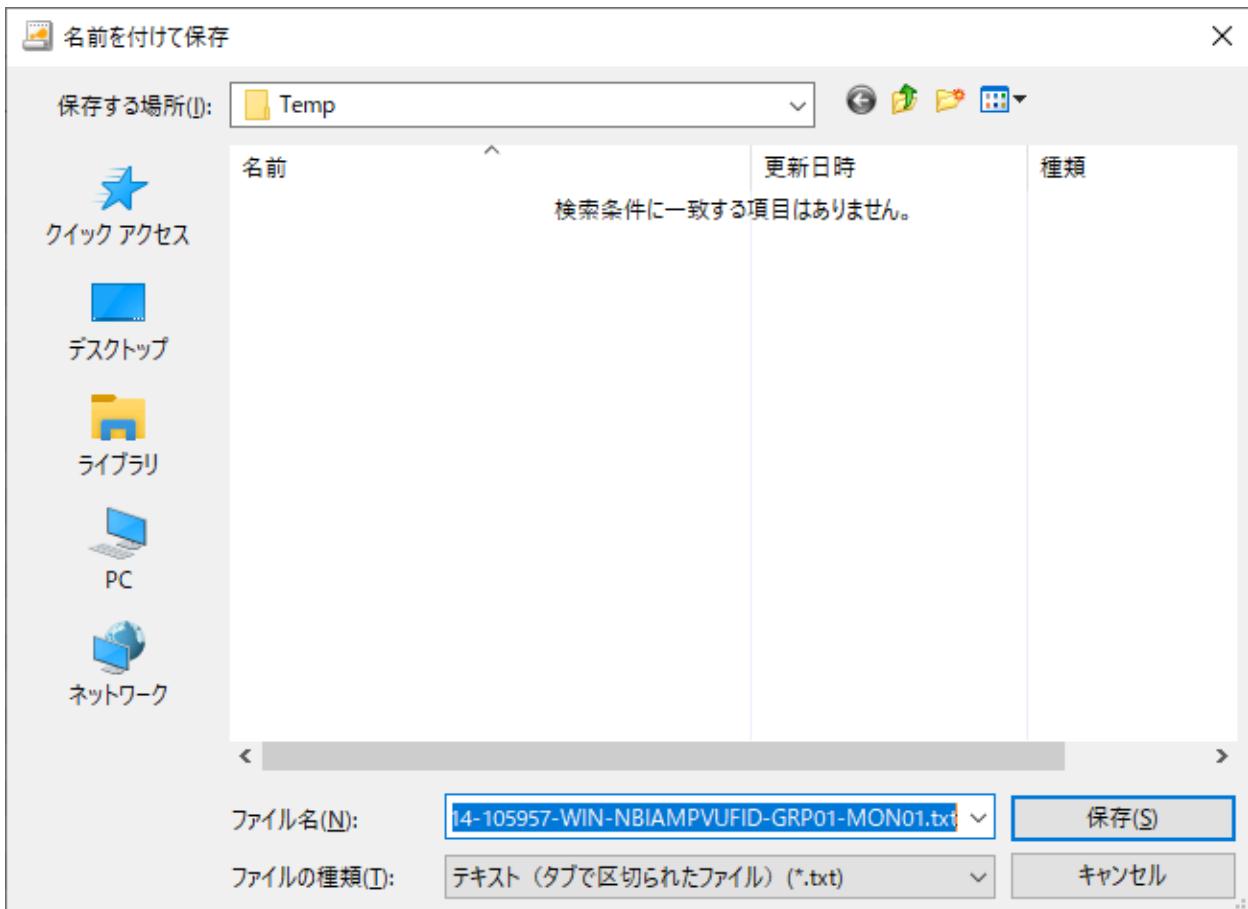
監視項目のログ情報は、タブ区切りのテキストファイルにエクスポートできます。

この情報は、"BOMログビューアー"画面で表示されたデータをテキストファイルに出力するものです。"BOMログビューアー"画面の詳細は、'ログの表示'を参照してください。

1. "BOMログビューアー"のメニューバーにある"ファイル"→"ログ一覧出力"をクリックします。



2. ファイルを保存するフォルダーを選択して、ファイルに名前を付けます。



3. [保存]ボタンをクリックします。

出力される内容は、"各項目名"、"ステータス"、"実行時刻"、"項目名"、"取得値"、"コード"、"実行時間"です。

11. 監視項目の詳細

(1) 監視項目の種類

BOM 8.0基本製品で使用できる監視項目は下記の26種類です。

オプション製品をインストールしライセンスを適用することで、オプション製品固有の監視項目が追加で使用できるようになります。オプション製品固有の監視項目の詳細は各オプション製品のユーザーズマニュアルを参照ください。

- リソース監視系: 9種類

アイコン	監視項目名	説明
	ディスク容量監視	論理ディスクの空き容量を監視
	フォルダー・ファイル監視	フォルダー、またはファイルの容量を監視
	プロセッサ監視	プロセッサ (CPU) の使用率を監視
	メモリ監視	メモリの空き容量を監視
	ディスク処理待ち行列長監視	全物理ディスクに対する負荷状況を監視
	ネットワークインターフェイス監視	物理ネットワークインターフェイスの帯域使用率を監視
	ネットワークアダプター監視	チーミングNICを含む、ネットワークアダプターの帯域使用率を監視
	プロセス監視	プロセスの各種パフォーマンスを監視
	パフォーマンスカウンター監視	パフォーマンスカウンターの値を監視

- 稼働監視系: 2種類

アイコン	監視項目名	説明
	サービス監視	サービスの状態（開始/停止）を監視
	プロセスリスト監視	プロセス一覧を取得し、稼働状況を監視

- ログ監視系: 3種類

アイコン	監視項目名	説明
	イベントログ監視	アプリケーションとサービスログを含むログ監視
	テキストログ監視	テキストログファイルの監視
	BOMヒストリー監視	BOM 8.0のヒストリーログを監視

- リモート監視系: 2種類

アイコン	監視項目名	説明
	Ping監視	特定サーバーとのPing (ICMP ECHO) 疎通監視

アイコン	監視項目名	説明
	ポート監視	特定サーバーとのTCP/UDPポート疎通監視

- その他の監視系: 10種類

アイコン	監視項目名	説明
	インストールソフトウェア変更監視	インストールされているソフトウェアを監視
	Windows Update監視	インストールされたWindowsUpdateの適用状況を監視
	AWS S3ストレージ容量監視	Amazon S3および、Amazon S3互換ストレージ（※）上のバケット、フォルダー、ファイルのサイズ、数を監視
	iLOログ監視	iLO 5が出力するIntegrated Management Log（IML）を監視
	iRMCログ監視	iRMCが出力するログを監視
 (RDS監視)	RDS セッション監視 (セッション数取得)	RDSのセッションを監視し、セッション数を取得
 (RDS監視)	RDS セッション監視 (ユーザー／クライアントリスト取得)	RDSのセッション監視をし、ユーザー／クライアントのリストを取得
 (RDS監視)	RDS プロセス監視 (プロセス数取得)	RDSのプロセスを監視し、プロセス数を取得
 (RDS監視)	RDS プロセス監視 (ユーザー／クライアント／セッションリスト取得)	RDSのプロセスを監視し、ユーザー／クライアント／セッションのリストを取得
	カスタム監視	任意のプログラムを実行し、実行結果を監視

※ Amazon S3互換ストレージについて、API準拠をうたうすべてのストレージでの動作を保証するものではありません。

弊社では、クラウディアン株式会社のCLOUDIAN HYPERSTOREについて動作確認を取っており、今後の対応確認情報は弊社ウェブサイトで随時公開いたします。

(2) 監視項目の概要

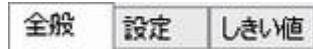
設定を行いたい監視項目を右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックすると、"プロパティ"画面が表示されます。

監視項目は作成しただけでは意図した監視が行えないため、"プロパティ"画面で監視項目の詳細な設定を行う必要があります。

A. 基本操作

- タブ

プロパティシートは、「全般」、「設定」などのタブで構成されています。それぞれのタブをクリックすることで、該当するタブが表示され、設定を変更できます。



- 変更した設定の反映と破棄

変更した設定は、[OK]ボタン、または[適用]ボタンをクリックすることでBOM 8.0に反映することができます。変更した設定を破棄したい場合には[キャンセル]ボタンをクリックします。



B. 「全般」タブ

「全般」タブは、"アイコン"、"ID"、"名前"、"間隔"に設定されている値を除き、すべての監視項目で共通です。

「全般」タブの概念は、'監視項目の有効化/無効化'、'監視間隔の概念'、'監視間隔の設定'も参照してください。



設定項目	説明
[アイコン]ボタン	[アイコン]ボタンは監視項目で設定されているアイコンが表示され、既定では監視項目の種類に合わせたアイコンが設定されています。 [アイコン]ボタンをクリックすることで、アイコンを変更するための"アイコンの選択"ダイアログを表示することができます。"アイコンの選択"ダイアログにて変更したいアイコンを選択し、[OK]ボタンをクリックすることでアイコンを変更できます。
"有効"チェックボックス	チェックを入れることで監視が有効になります。 既定ではチェックボックスにチェックが入っています。監視を実行しない場合はチェックボックスからチェックを外してください。
"名前"欄	監視項目名を入力します。既定値として監視項目の種類と同じ名称が入力されています。 必要に応じてわかりやすい名称に変更してください。
"ID"欄	監視項目IDが表示されます。監視項目IDはインスタンス内で監視項目ごとに一意になるようにBOMが自動的に設定するため、ここでは変更できません。
"コメント"欄	監視項目の補足情報を入力します。既定では空白です。 必要に応じて入力してください。
"間隔"欄	監視項目の監視間隔を入力します。既定値として監視項目の種類ごとに定められた推奨値が入力されています。 入力欄には、1から9999までの整数を入力できます。単位は"秒"、"分"、"時"、または"日"から選択できます。
開始時刻	監視項目を開始する日時を指定します。既定では"サービスの開始直後"ラジオボタンが選択されています。なお、初回以降の監視は、指定した監視間隔ごとに行われます。 - "サービスの開始直後"ラジオボタン：BOM監視サービスの起動時に初回の監視を実行します。 - "指定時刻"ラジオボタン：指定の日時に初回の監視を実行します。
"監視間隔を固定する"チェックボックス	"指定時刻"ラジオボタンを選択した場合のみ利用できる機能で、チェックを入れることで指定時間を基準日時として監視間隔を固定します。 既定ではチェックボックスのチェックは外れており、BOM監視サービスを再起動すると前回の監視時刻を無視して監視を即時実行します。監視サービス再起動によって監視間隔が変動することを防止したい場合には、チェックボックスにチェックを入れてください。
"監視予定時刻を過ぎた場合に臨時実行する"チェックボックス	"監視間隔を固定する"チェックボックスにチェックを入れた場合のみ利用できる機能で、チェックを入れることで監視サービス再起動などによって前回の監視から監視間隔以上を経過していた場合、臨時に監視を行います。 既定ではチェックボックスのチェックは外れています。 例えば、毎日10:00に監視するように設定した上で当日の10:00に監視サービスが起動していないかった場合、10:20に監視サービスを起動すると、チェックを入れた場合には、当日は10:20に臨時に監視を行い、翌日以降は10:00に監視します。 チェックを外した場合には、当日は監視が行われず、翌日以降は10:00に監視します。

C. しきい値

すべての監視項目では、しきい値を設定する必要があります。しきい値に設定した条件に合致することで、監視ステータスが"注意"や"危険"に変化します。

しきい値に設定した条件に合致しない場合には監視ステータスが"正常"になります。

しきい値の設定方法は監視項目の種類によって異なります。

(3) ディスク容量監視

監視対象コンピューターに存在する論理ディスクドライブの容量を監視します。

- ネットワークドライブは、ドライブマウントしていても対象となりません。

A. 「全般」タブ

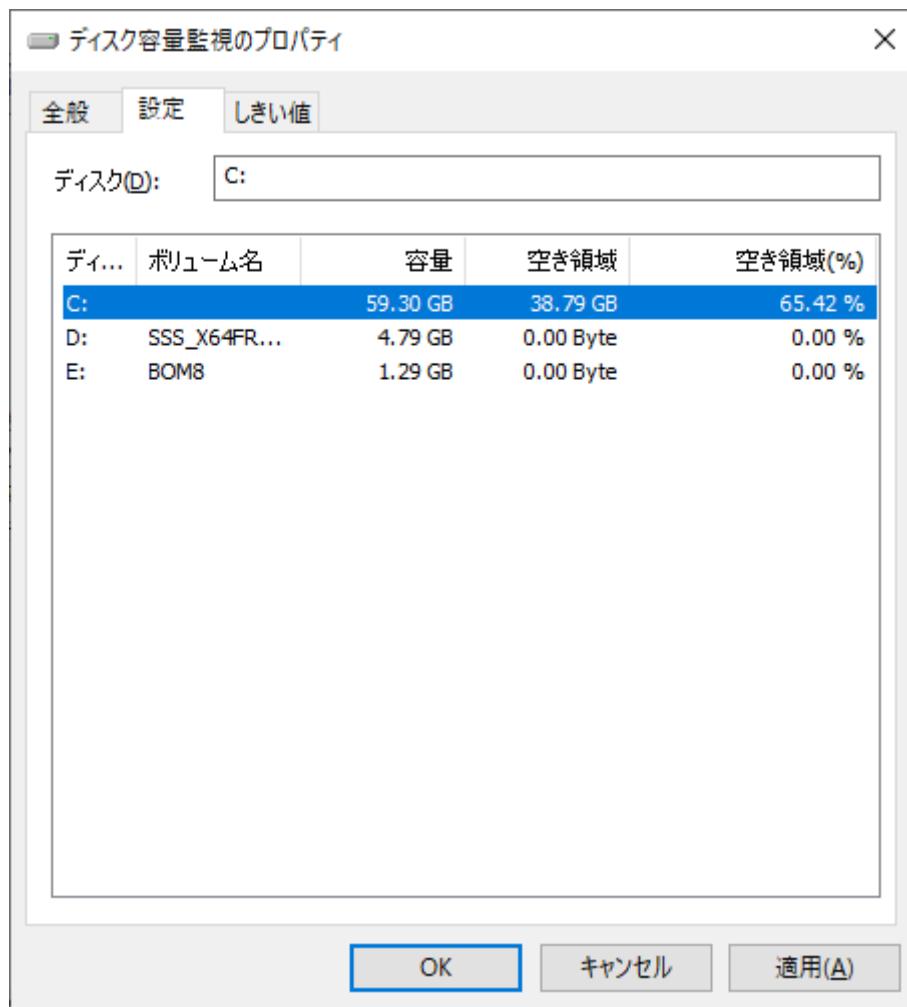
「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

ディスク容量監視では、監視間隔の既定値が10分に指定されています。

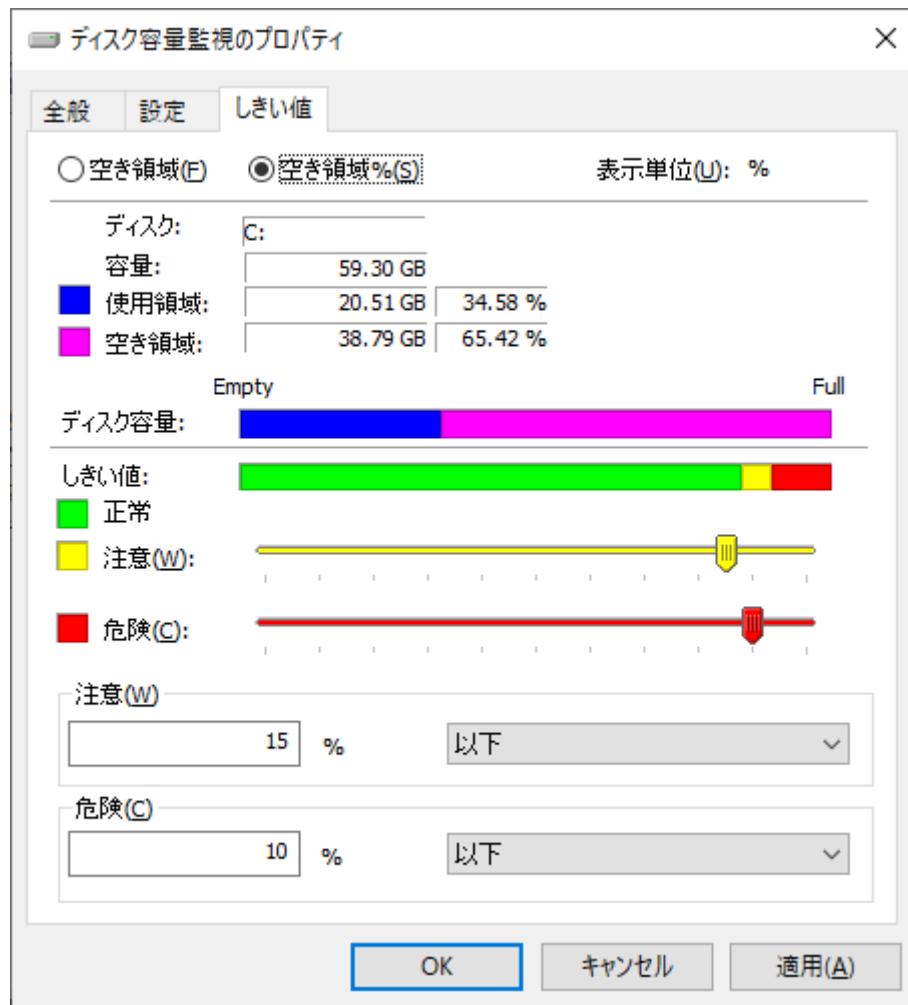
B. 「設定」タブ

BOM 8.0は、コンピューター上にあるすべての論理ドライブを自動検出し、"ディスクドライブ情報"フィールドに表示します。

"ディスクドライブ情報"フィールドの監視対象のディスクドライブ名をダブルクリックすることで、"ディスク"フィールドに値を設定することができます。



C. 「しきい値」タブ



1. 指定したディスクドライブのドライブの"空き領域"（容量）ラジオボタン、または"空き領域%"（パーセンテージ）ラジオボタンのどちらかを選択します。

2. "注意"フィールドと"危険"フィールドに、しきい値を下記のどちらかの手段で設定します。

- "注意"フィールドと"危険"フィールドに数値（"0"～"100"）を入力
- スライドバーを使用

スライドバーを使用するには、ハンドルをドラッグしてください。

黄色のハンドルをスライドすると、それに合わせて"注意"フィールド内の数値が変わります。

赤色のハンドルをスライドすると、それに合わせて"危険"フィールド内の数値が変わります。

3. 手順1.で"空き領域"（容量）ラジオボタンを選択した場合、表示単位を選択することができます（既定値は"MB"）。

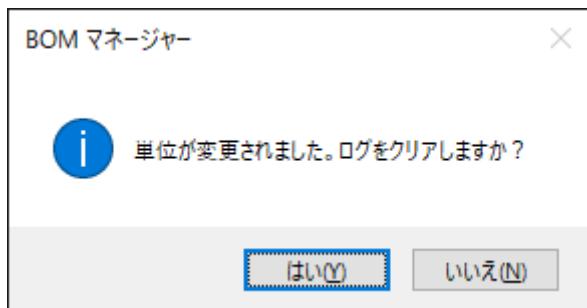
表示単位とは、BOMマネージャーに表示される単位です。

4. "危険"しきい値の設定は手順2.に加え、"注意"ステータスの"連続発生回数"をしきい値にすることができます。

- 下記のように設定すると、連続して"9"回目の"注意"ステータスで、"危険"ステータスに変わります。

注意(W)	15	%	以下
危険(C)	9		連続したN回目の注意から

- ・ "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。
5. 既に監視ログが蓄積されている場合、ディスク容量監視項目を計測する単位を変更すると ("パーセンテージ"→"MB"など) 、設定を適用する時点で次のダイアログボックスが表示されます。



- ・ [はい]ボタンをクリックした場合、その監視項目のログファイルはクリアされます。
クリアされたログファイルは復旧できません。
- ・ [いいえ]ボタンをクリックした場合、以前のデータを保持して以降のデータは追記されますが、ログ表示では指定した単位での表示になります。
以前設定した単位での表示になりません。

(4) フォルダー・ファイル監視

監視対象コンピューターにある指定したフォルダー、あるいはファイルの使用サイズを監視します。

シンボリックリンクを使用したフォルダーへのフォルダー監視は、OSと動作が異なるため注意が必要です。

- OS標準のエクスプローラーで見た場合

フォルダーとしても、ファイルとしても認識せず、ファイルサイズは0byteと認識されます。

- BOM 8.0のフォルダー監視の場合

リンク先のフォルダーカー数、フォルダーサイズ、ファイル数、ファイルサイズを認識します。

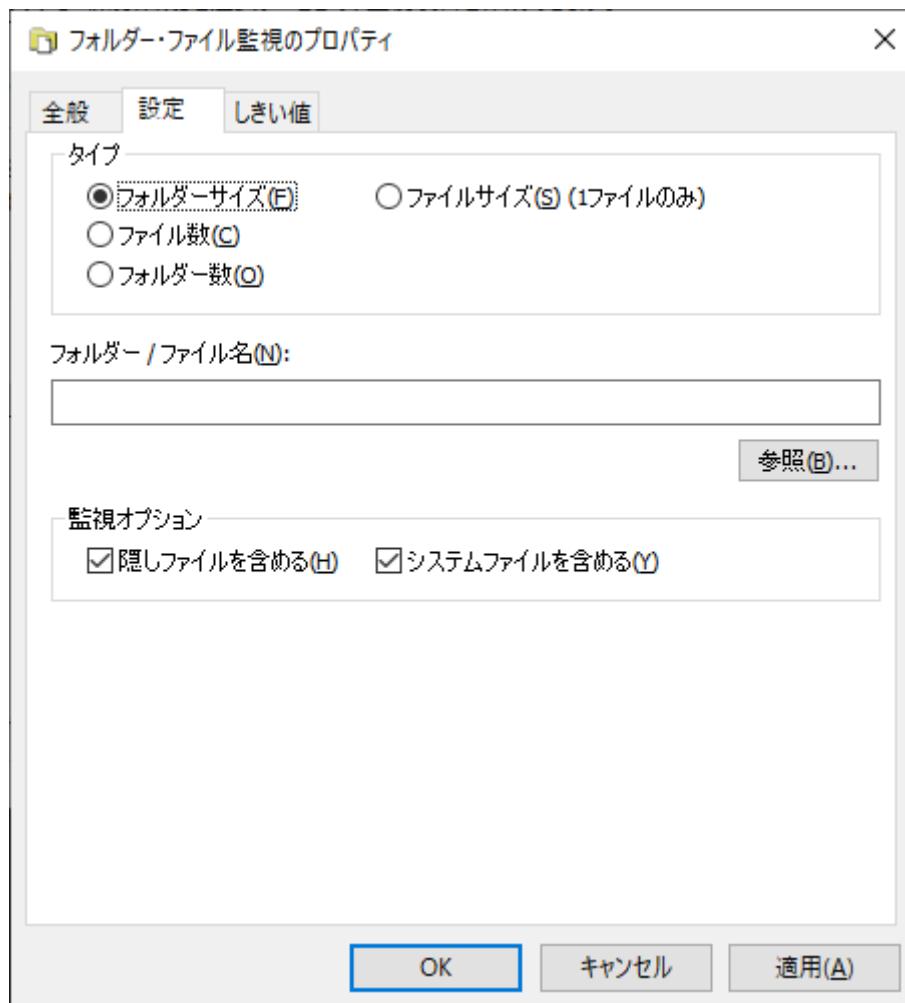
シンボリックリンクによる無限ループ（参照した先に参照元のフォルダーがシンボリックリンク）がある場合には、監視に失敗します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については「監視項目の概要」の項目「[「全般」タブ](#)」を参照してください。

フォルダー・ファイル監視では、監視間隔の既定値が10分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. "タイプ"フィールドは、監視対象を各対象のラジオボタンで選択します。

- 複数の"タイプ"で監視する場合は、フォルダー・ファイル監視項目を新しく作成する必要があります。

異なる"タイプ"を選択する場合でも新規作成する監視項目名の既定値は同一になるため、異なるタイプの監視項目が区別できるよう「全般」タブの"名前"フィールドにはわかりやすい名称を設定することをお勧めします。

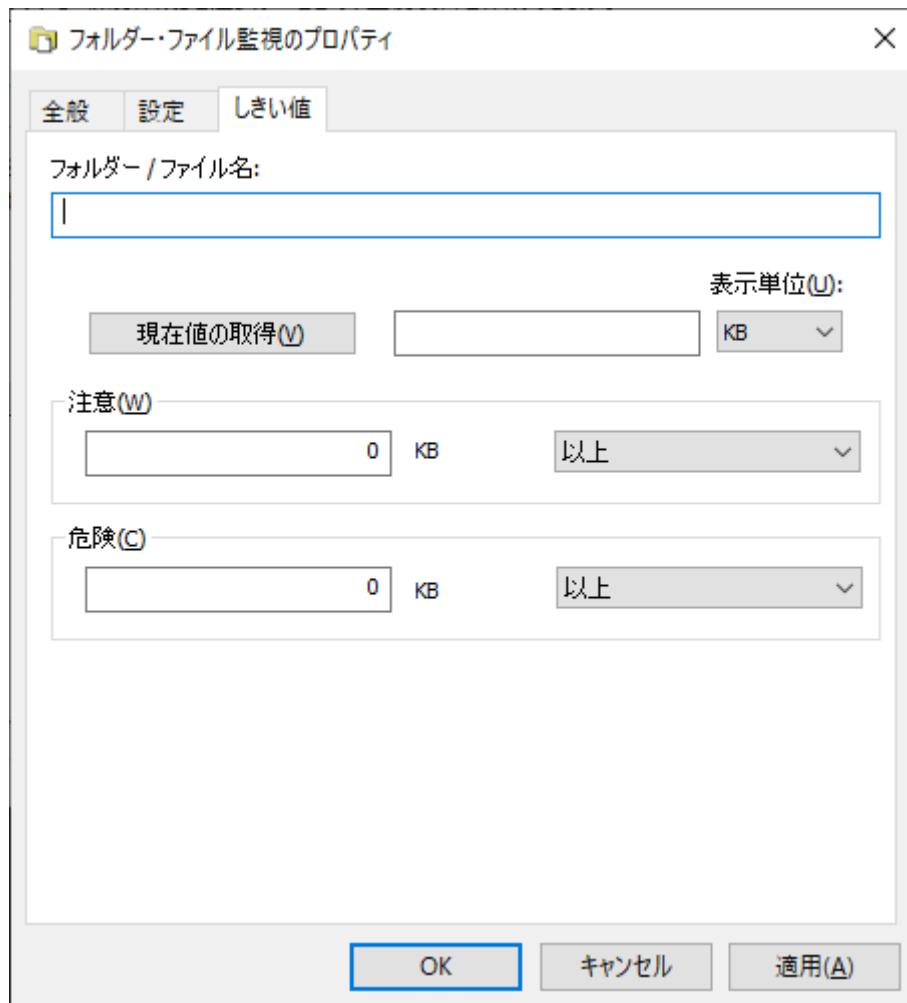
2. "フォルダー/ファイル名"フィールドは、下記のどちらかの手段で設定します。

- ・フォルダー、またはファイルの絶対パスを入力
- ・[参照..]ボタンをクリックしてフォルダー、またはファイルを選択
"参照"をクリックして表示される画面は通常のエクスプローラーと挙動が異なり、フォルダーを選択して"Enter"キーを押下した際、[OK]ボタンのクリックと同じ動作になります。

3. "監視オプション"フィールドで、必要なオプションを選択します。

既定値では、"隠しファイル"と"システムファイル"を含むすべてのファイルが監視対象に含まれています。

C. 「しきい値」タブ



1. [現在値の取得]ボタンをクリックすることで、「設定」タブで選択したファイル・フォルダーの現在の値を表示できます。

2. ファイルまたはフォルダーのサイズを監視する場合、ドロップダウンメニューから[現在の値を取得]ボタンの単位を選択します。

"表示単位"フィールドの単位を変更した場合、もう一度[現在値の取得]ボタンをクリックすると変更した単位でサイズを再計算して表示できるので、単位に合わせて最適なしきい値を設定してください。

- ・"表示単位"を"MB"→"Bytes"変更した場合

[現在値の取得]ボタンクリック時にフィールドの数値が"86"の場合→"90,177,536"に変わります。 ("1KB = 1024Bytes"で計算しています。)

3. "注意"フィールドと"危険"フィールドに、しきい値を下記のとおりそれぞれ設定します。

- ・しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"9999999") を入力します。

しきい値に対する単位は、手順2.で指定した"表示単位"に応じて"KB"、"MB"などが自動で表示されます。

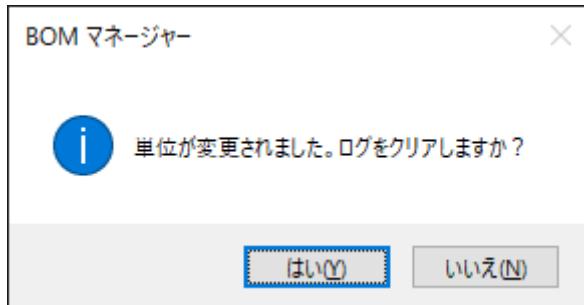
- しきい値の判定単位

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

4. "危険"しきい値の設定は手順3.に加え、"注意"ステータスの"連続発生回数"をしきい値にすることができます。

- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

5. 既に監視ログが蓄積されている場合、ファイル・フォルダー監視項目を計測する単位を変更すると（"ファイルサイズ"→"ファイル数"など）、設定を適用する時点で次のダイアログボックスが表示されます。



- [はい]ボタンをクリックした場合、その監視項目のログファイルはクリアされます。
クリアされたログファイルは復旧できません。
- [いいえ]ボタンをクリックした場合、以前のデータを保持し以降のデータは追記されますが、ログ表示では指定した単位での表示になります。
以前設定した単位での表示になりません。

(5) サービス監視

監視対象コンピューターのサービス状態の状態が、"開始"状態あるいは"停止"状態かを監視します。

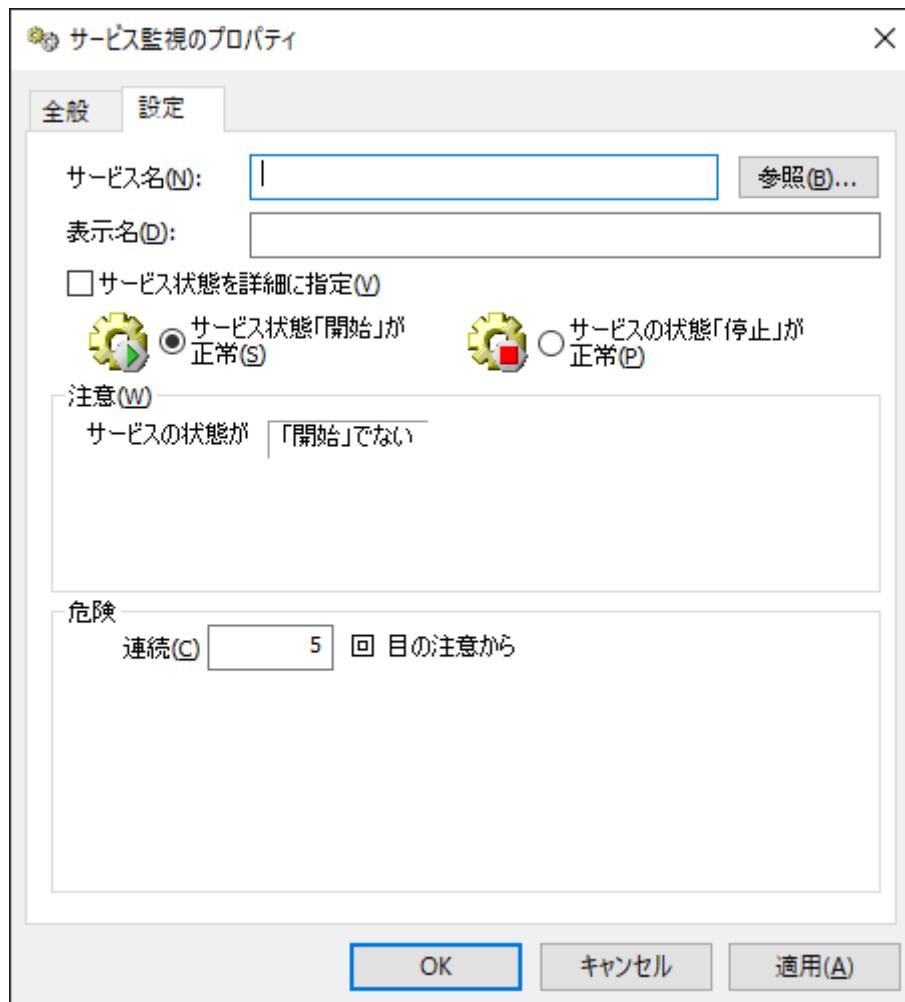
サービス監視では他の監視項目と違い、文字列が監視結果となっているため[ログの表示](#)のグラフ表示はできません。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

サービス監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. 「設定」タブの"サービス名"フィールドに、監視する"サービス名"を下記のどちらかの手段で設定します。

- ・ "サービス名"を入力
- ・ [参照..]ボタンをクリックし、"サービス選択"画面から"サービス名"を選択

※ Windows Server 2016 version 1803の環境を代理監視による監視対象としている場合、[参照..]ボタンをクリックした際に「アクセスが拒否されました」というエラーでサービス一覧の取得に失敗することがあります。この際は"サービス名"フィールドへ監視するサービス名を直接入力してください。

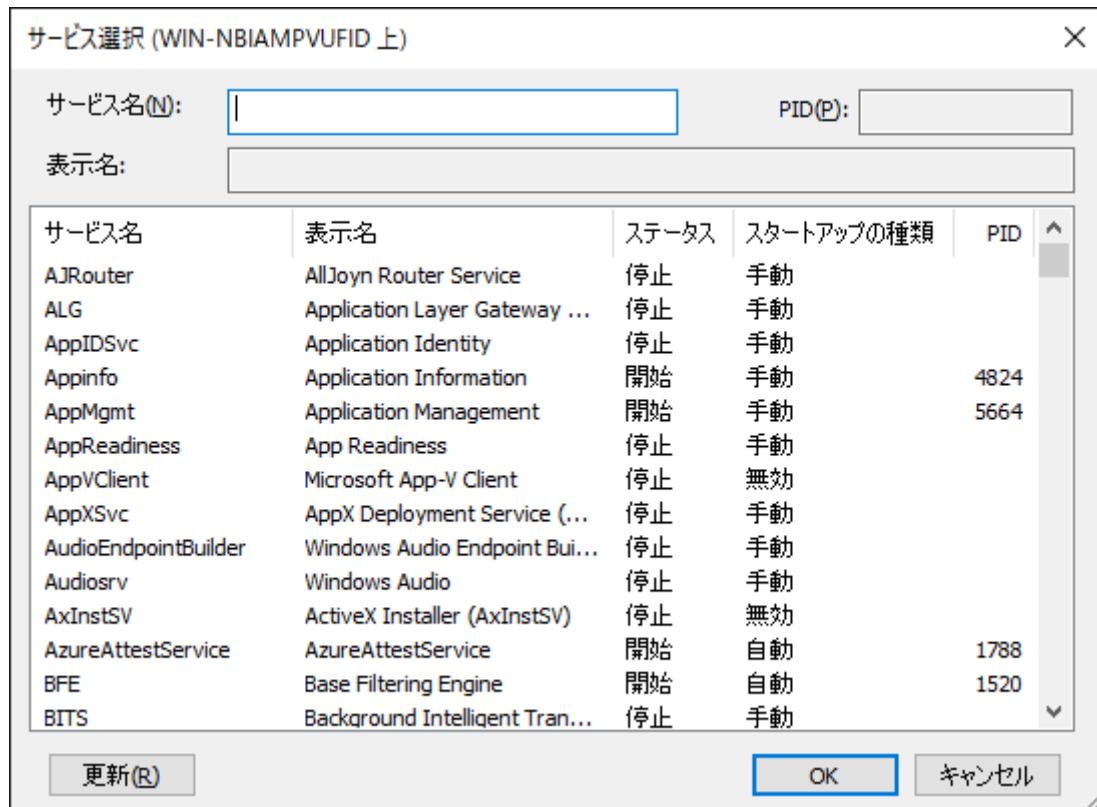
2. [参照..]ボタンをクリックした場合、"サービス選択"画面が表示されます。

サービスのリストとステータスを最新表示するには[更新 (R)]ボタンをクリックしてください。

"サービス選択"画面では、"サービス名"フィールドに監視する"サービス名"を下記のどちらかの手段で設定し、[OK]ボタンをクリックします。

- ・ "サービス名"を入力して、[OK]ボタンをクリック

- リストの"サービス名"をクリックして、[OK]ボタンをクリック



3. "注意"フィールドに、しきい値を下記のどちらかの手段で設定します。

- "サービス状態を詳細に指定"チェックボックスのチェックを外した場合

"サービス状態「開始」が正常"ラジオボタンか、"サービス状態「停止」が正常"ラジオボタンより選択します。

既定値は"開始"状態です。その場合、監視対象サービスが"開始"状態ではない際に、"注意"ステータスになります。

- "サービス状態を詳細に指定"チェックボックスにチェックを入れた場合

サービスのステータスを"開始"、"開始中"、"再開中"、"一時停止中"、"一時停止"、"停止中"、"停止"の中から複数指定することができます。



4. "危険"フィールドに、しきい値を下記のいずれかの手段で設定します。

- "サービス状態を詳細に指定"チェックボックスのチェックを外した場合

"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定します。連続回数に指定できるのは、"1"~"99"の数値です。

- "サービス状態を詳細に指定"チェックボックスにチェックを入れた場合

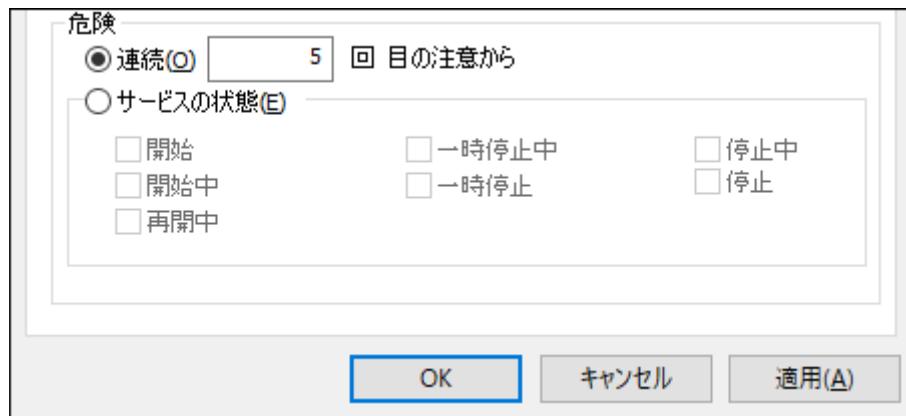
以下のラジオボタンで条件を選択します。

- "連続"ラジオボタン

"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定します。連続回数に指定できるのは、"1"~"99"の数値です。

- "サービスの状態"ラジオボタンを選択した場合

サービスのステータスを"開始"、"開始中"、"再開中"、"一時停止中"、"一時停止"、"停止中"、"停止"の中から複数指定することができます。



(6) プロセッサ監視

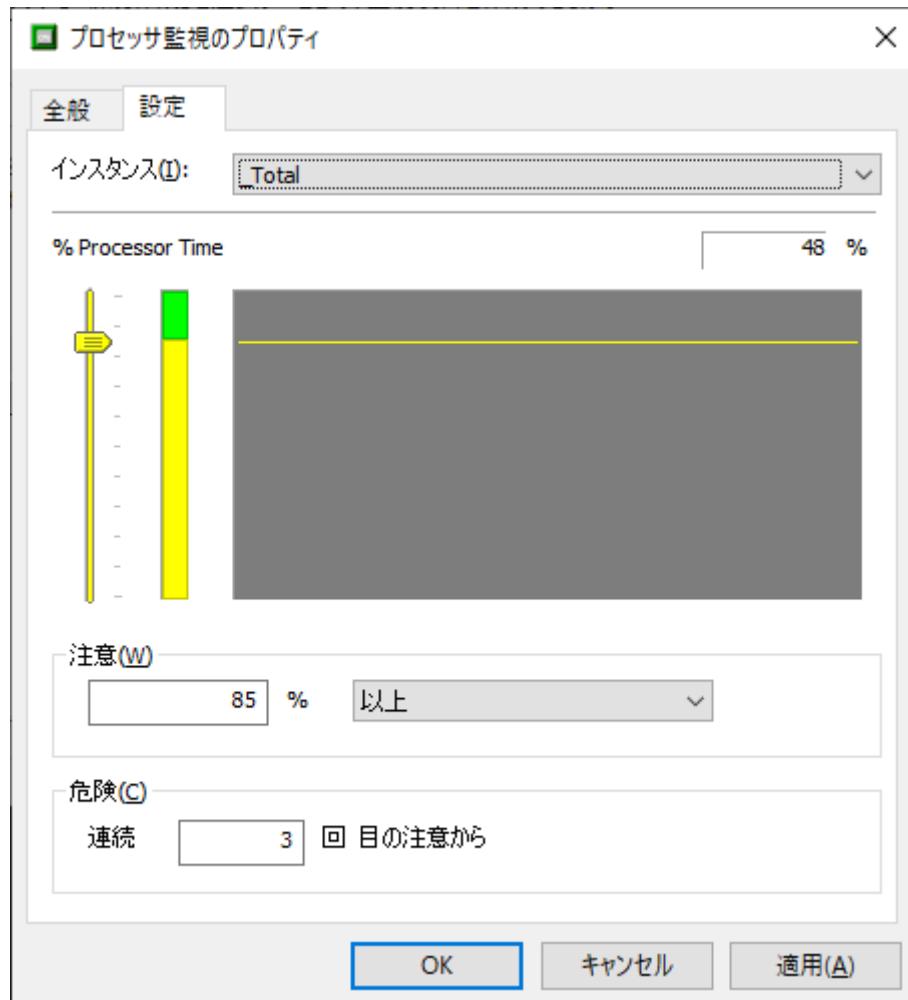
監視対象コンピューターのプロセッサ（CPU）稼働状態を監視します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

プロセッサ監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. BOM 8.0は、コンピューター上にあるすべてのプロセッサを自動検出し、"インスタンス"フィールドに表示します。

監視対象のプロセッサを、"インスタンス"フィールドのドロップダウンリストより選択します。

- 4CPUシステムでは、ドロップダウンメニューに、"_Total"の他"0"、"1"、"2"、"3"と4つのプロセッサが表示されます。

2. "注意"フィールドに、しきい値を数値入力またはスライドバーで設定します。

- 数値入力の場合 "0"～"9999" の値が設定可能ですが、本監視項目において "100" より大きい値を設定するケースは想定しておりません。

3. "危険"フィールドのしきい値に、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定します。

- 連続回数に指定できるのは、"1"～"99"の数値です。

(7) メモリ監視

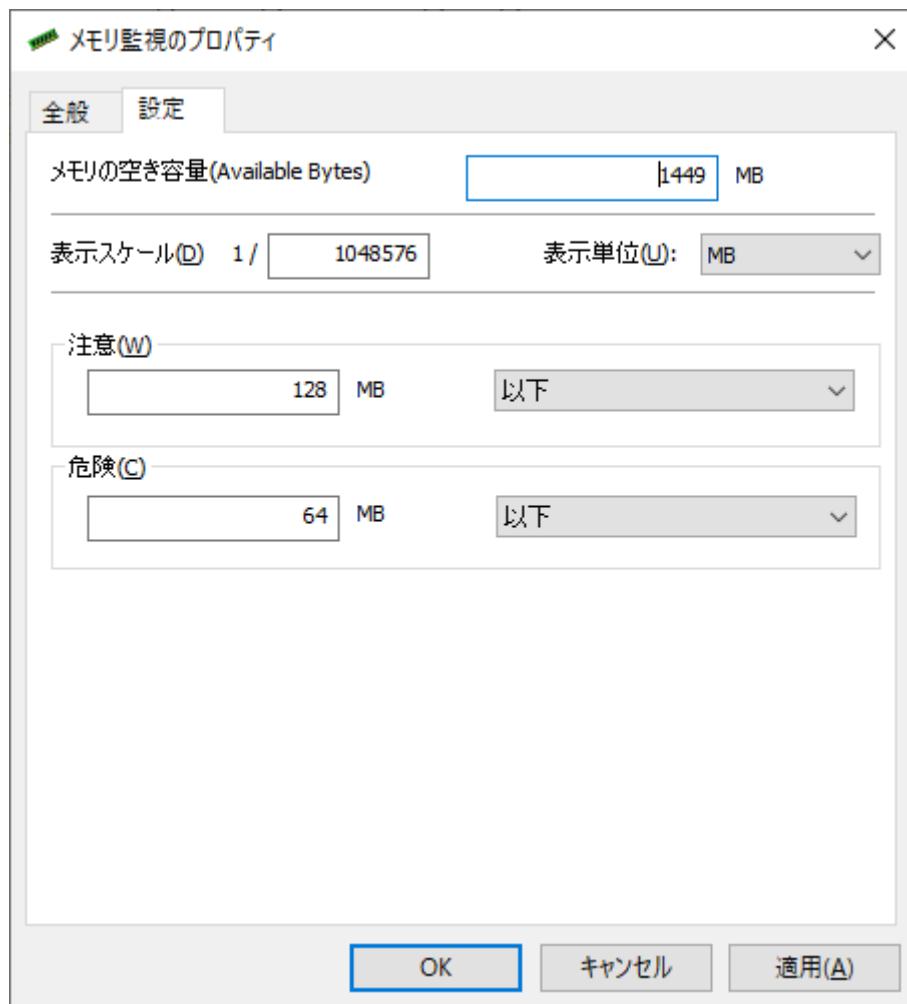
監視対象コンピューターのメモリの使用できる空き容量を監視します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

メモリ監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. 使用する単位を"表示単位"より選択します。

- 表示単位を変更すると上段の現在の"メモリの空き容量 (Available Bytes)"の数値が表示スケールで表示されます。この数値を参考に、"注意"、"危険"のしきい値を決めることができます。

2. "注意"フィールドと"危険"フィールドに、しきい値を下記のとおりそれぞれ設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値に対する判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

(8) ディスク処理待ち行列長監視

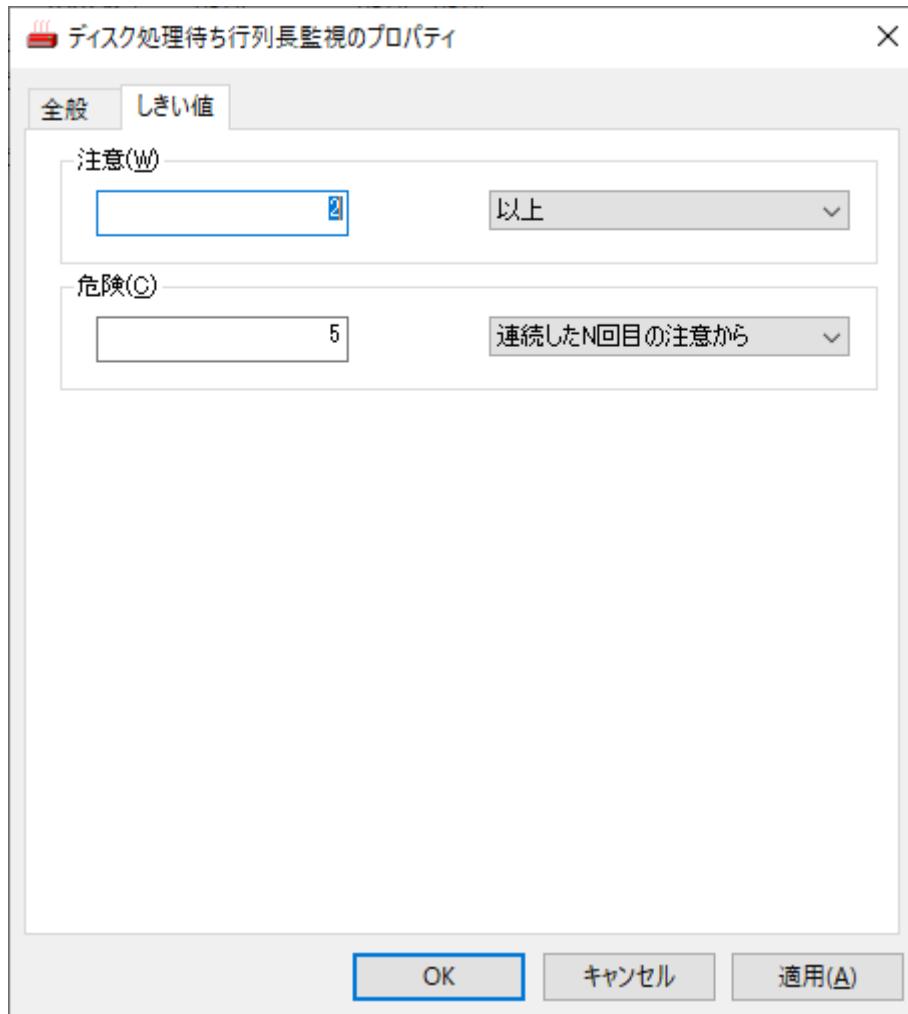
監視対象コンピューターに存在する全物理ディスクを対象に、ディスクの読み書きを待つリクエストの数を監視します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については「監視項目の概要」の項目「[「全般」タブ](#)」を参照してください。

ディスク処理待ち行列長監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおりそれぞれ設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値に対する判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"以上"、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドのしきい値に、"注意"ステータスと同様にしきい値を設定します。

危険の判定条件では、"連続したN回目の注意から"も指定できます。連続回数に指定できるのは、"1"~"99"の数値です。

(9) ネットワークインターフェイス監視

監視対象コンピューター上の指定した物理ネットワークアダプタ（NIC）について、1秒あたりのネットワーク帯域使用率を帯域と使用量を以下のパフォーマンスカウンターより算出し、ネットワーク負荷を監視します。

[使用するカウンター]

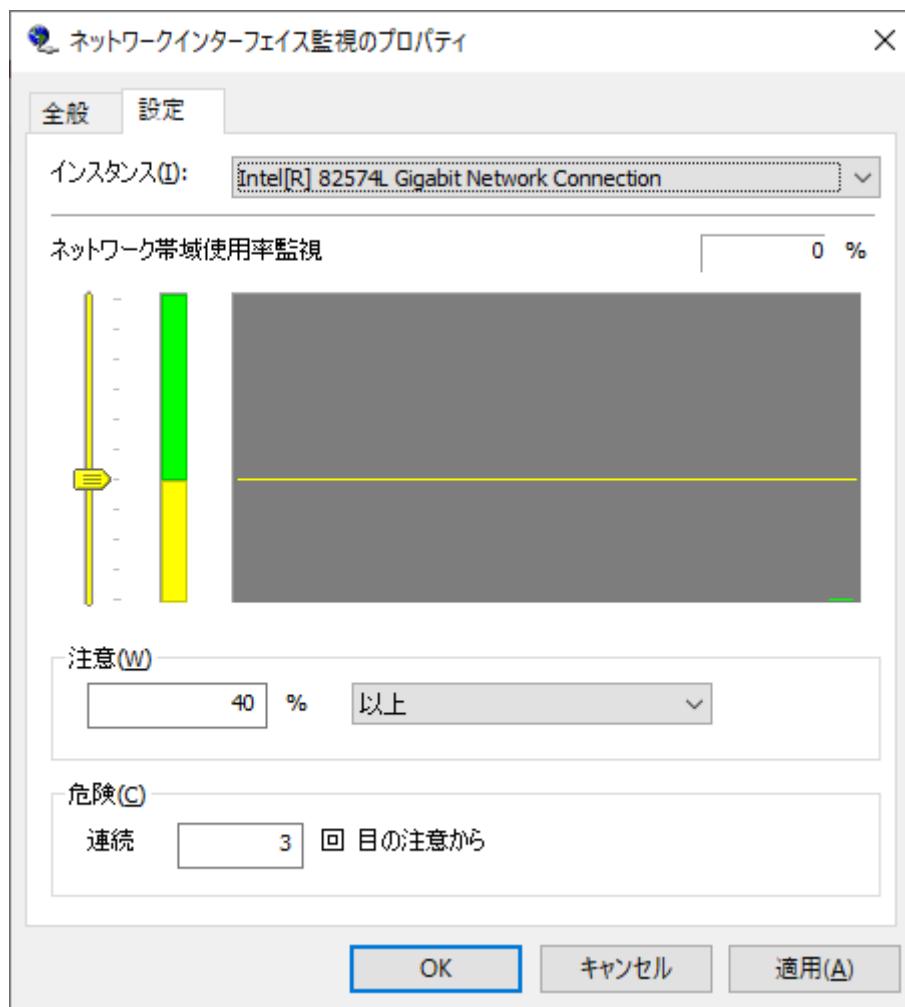
- Network Interface
 - Current Bandwidth
 - Bytes Total/sec

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

ネットワークインターフェイス監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. BOM 8.0は、システムに存在する物理ネットワークインターフェイスを自動検出し、"インスタンス"フィールドに表示します。

監視対象とするネットワークインターフェイスを、"インスタンス"フィールドのドロップダウンリストより選択します。

- ネットワークインターフェイス監視を新規作成した際には、インスタンス（どのNICを監視するか）が指定されていません。

新規作成時には必ずインスタンスを指定してください。

- 半二重通信時は最大まで帯域を使用しても50%になります。

2. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおりそれぞれ設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999") を入力するか、スライドバー ("0"~"100") で設定します。

- しきい値に対する判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"より大きい"、"以上"の中から選択します。

3. "危険"フィールドのしきい値に、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定します。

- 連続回数に指定できるのは、"1"~"99"の数値です。

(10) ネットワークアダプター監視

監視対象コンピューター上の指定したネットワークアダプタ（チーミングNICを含む）について、1秒あたりのネットワーク帯域使用率を帯域と使用量を以下のパフォーマンスカウンターより算出し、ネットワーク負荷を監視します。

[使用するカウンター]

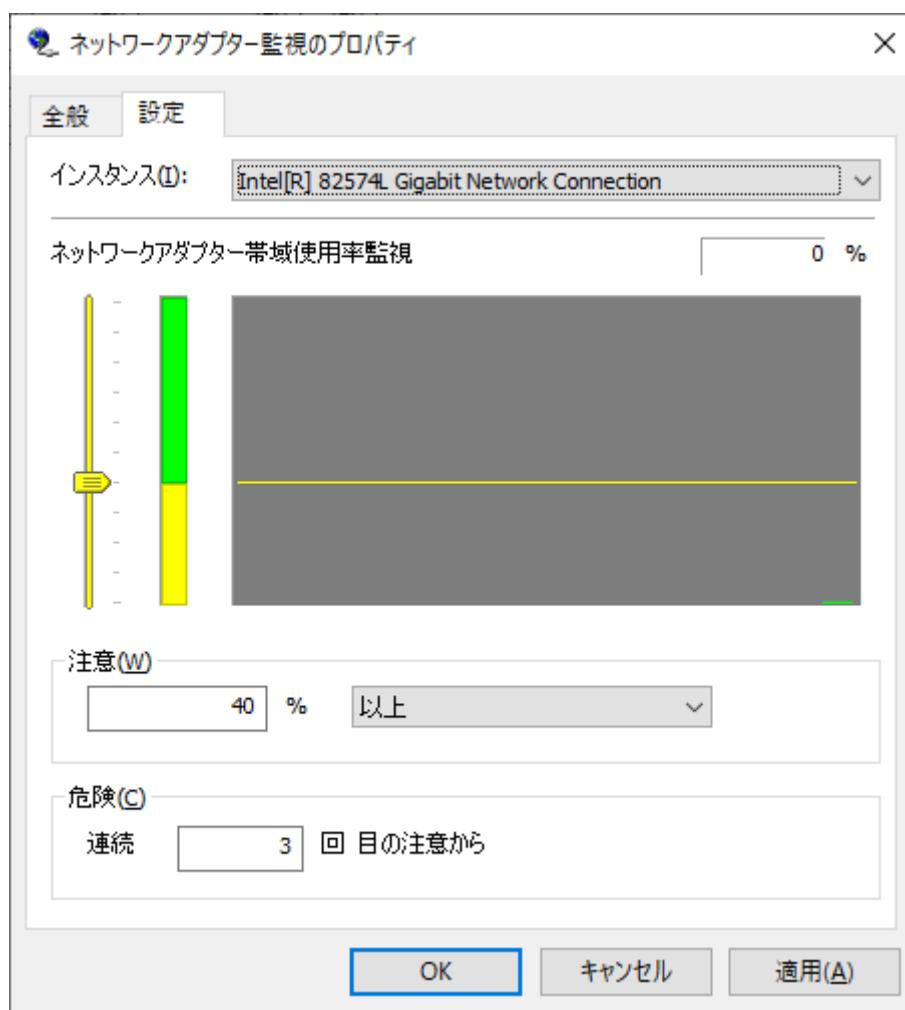
- Network Adapter
 - Current Bandwidth
 - Bytes Total/sec

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

ネットワークアダプター監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. BOM 8.0は、システムに存在するネットワークアダプターを自動検出し、"インスタンス"フィールドに表示します。

監視対象とするネットワークアダプターを、"インスタンス"フィールドのドロップダウンリストより選択します。

- ネットワークアダプター監視を新規作成した際には、インスタンス（どのNICを監視するか）が指定されていません。

新規作成時には必ずインスタンスを指定してください。

- 半二重通信時は最大まで帯域を使用しても50%になります。
2. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおりそれぞれ設定します。
- しきい値
- テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999") を入力するか、スライドバー ("0"~"100") で設定します。
- しきい値に対する判定条件
- ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"より大きい"、"以上"の中から選択します。
3. "危険"フィールドのしきい値に、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定します。
- 連続回数に指定できるのは、"1"~"99"の数値です。

◦ **チーミングNICを指定する際の注意**

チーミングNICを監視対象として指定する際は、"インスタンス"フィールドでチーム名を選択するのではなく、以下の手順で確認した名称を選択してください。

1. コマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行します。

```
ipconfig /all
```

2. 表示されたイーサネットアダプターの一覧から、監視対象のチーミングNICを探します。
3. "説明"欄に表示された内容 ("Microsoft Network Adapter Multiplexor Driver_x"など) と同じ名称を、"インスタンス"フィールドで選択します。

(11) プロセス監視

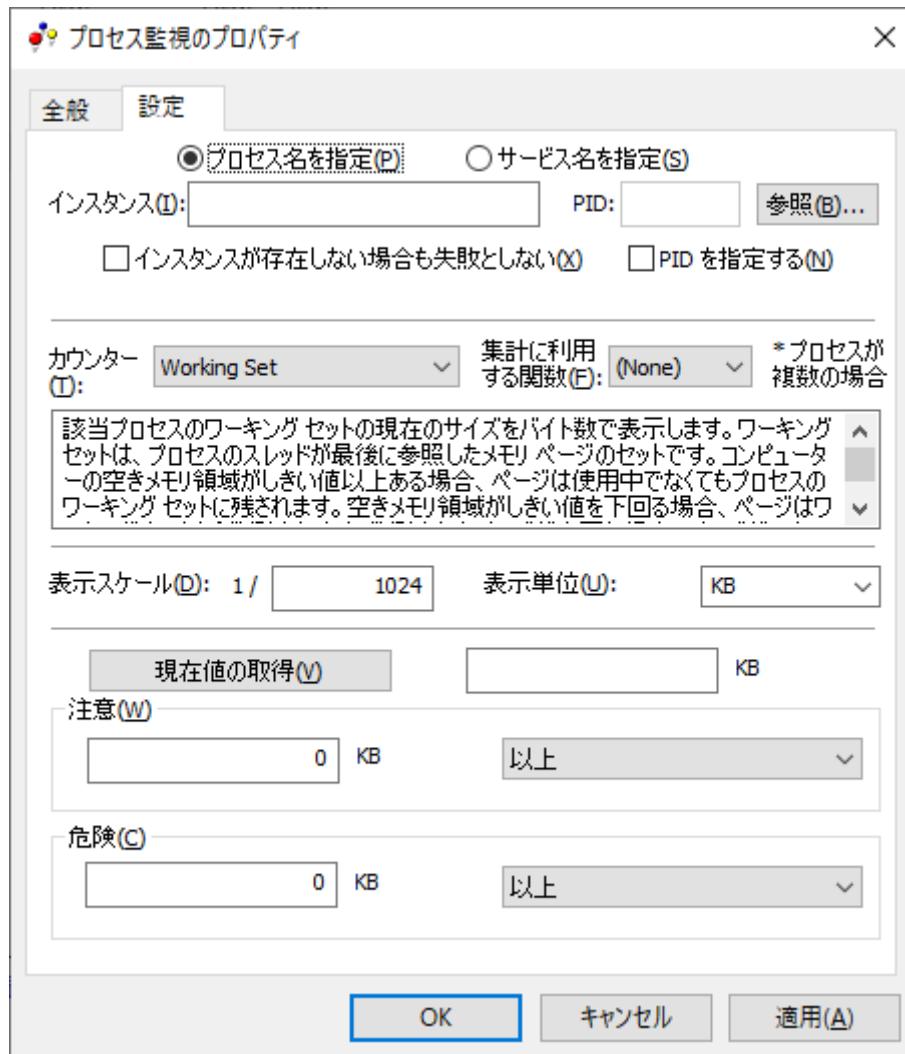
監視対象コンピューターの指定したプロセスのパフォーマンスや稼働状態を監視します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

プロセス監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ

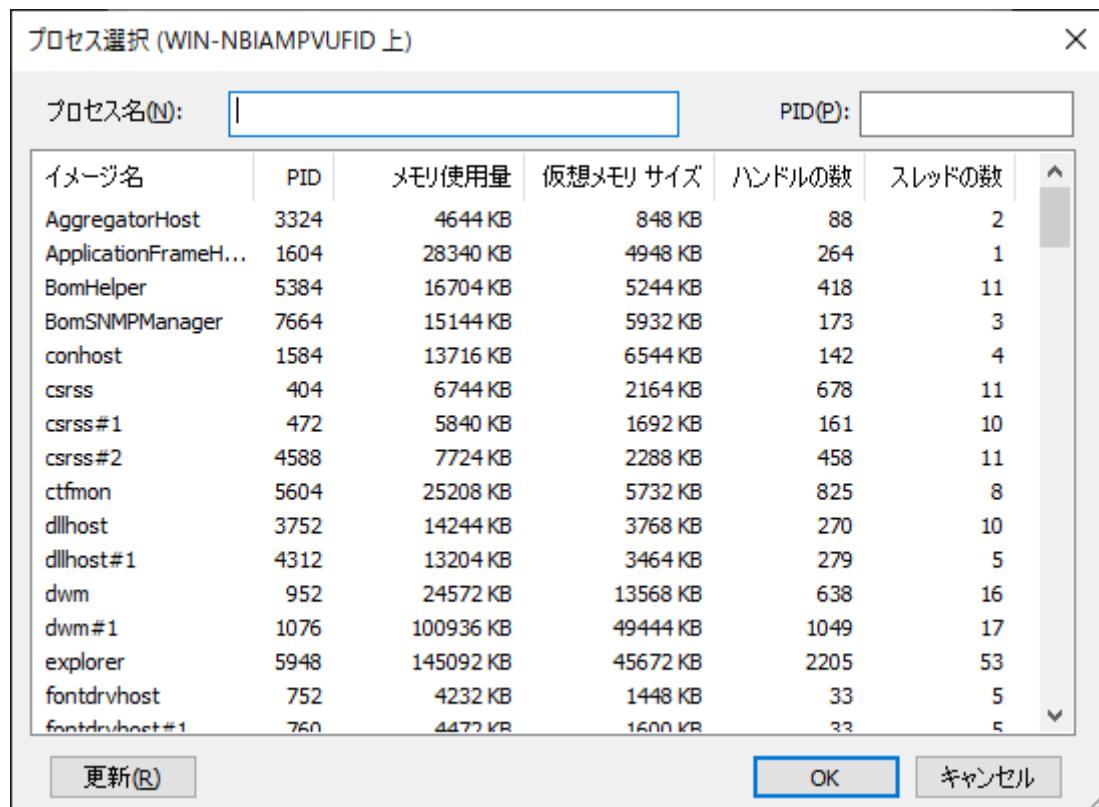


1. "プロセス名を指定"ラジオボタンを選択している場合は監視対象の"プロセス名"を、"サービス名を指定"ラジオボタンを選択している場合は監視対象の"サービス名"を、"インスタンス"フィールドに以下のいずれかの方法で選択します。

- "インスタンス"フィールドに、"プロセス名"もしくは"サービス名"を直接入力
- [参照..]ボタンをクリックし、"プロセス"もしくは、"サービス"のリストから対象を選択

※ Windows Server 2016 version 1803の環境を代理監視による監視対象としている場合、"サービス名を指定"ラジオボタンを選択して[参照..]ボタンをクリックすると、「アクセスが拒否されました」というエラーでサービス一覧の取得に失敗することがあります。この際は"インスタンス"フィールドへ、監視対象とするサービス名を直接入力してください。

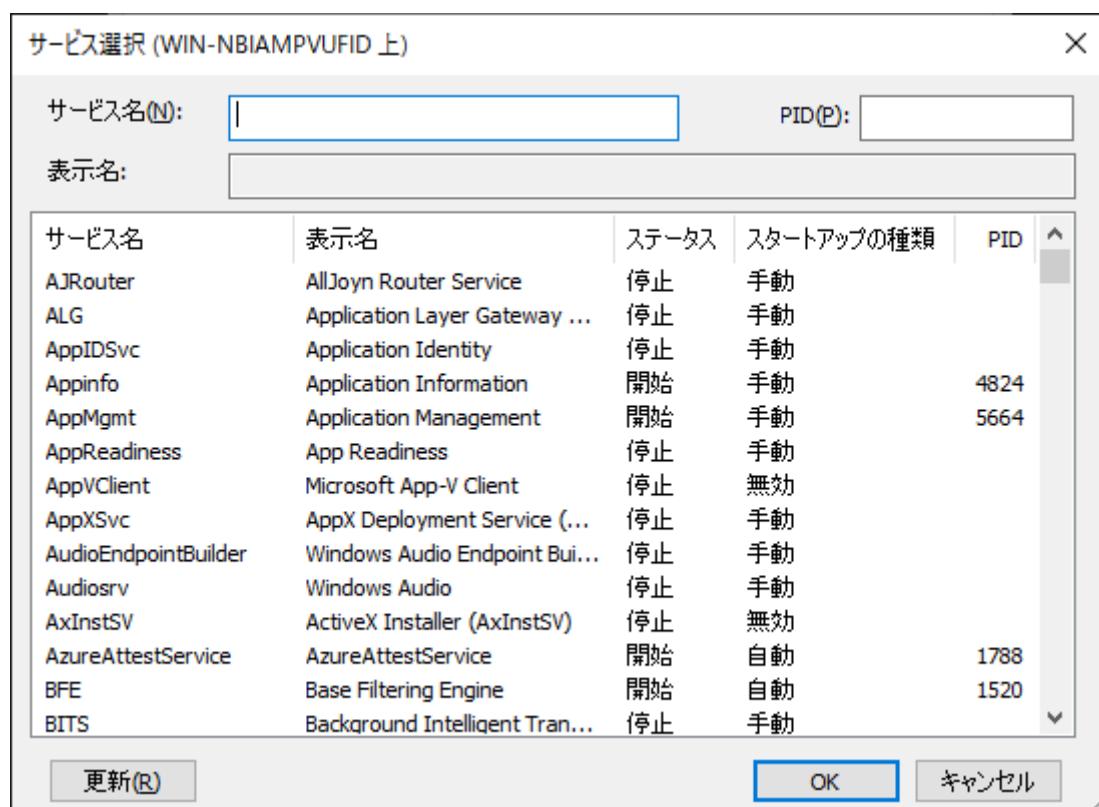
2. "プロセス名を指定"ラジオボタンを選択して[参照..]ボタンをクリックした場合、下記の"プロセス"選択画面が表示されます。



"プロセス名"フィールドに、監視する"プロセス名"を下記のどちらかの手段で設定します。

- "プロセス名"を入力して、[OK]ボタンをクリックする。
- リストの"プロセス名"をクリックして、[OK]ボタンをクリックする。

3. "サービス名を指定"ラジオボタンを選択して[参照..]ボタンをクリックした場合、下記の"サービス選択"画面が表示されます。



- "サービス名"フィールドに、監視する"サービス名"を下記のどちらかの手段で設定します。

- "サービス名"を入力して、[OK]ボタンをクリックする。
 - リストの"サービス名"をクリックして、[OK]ボタンをクリックする。
4. それぞれの画面では、[更新]ボタンをクリックすることでリストを最新の状態にすることができます。
5. "PID"フィールドは、"インスタンス"フィールドの指定を行った際に、指定した"インスタンス"に該当するPIDが自動で設定されます。
6. "インスタンスが存在しない場合も失敗としない"チェックボックスは以下を参考に選択します。
- チェックボックスのチェックを外した場合
手順1.で指定したプロセスもしくはサービスが監視時に存在しなかった場合、監視結果のステータスは"失敗"を返します。
 - チェックボックスにチェックを入れた場合
手順1.で指定したプロセスもしくはサービスが監視時に存在しなかった場合、監視結果の値は"0"を返します。仮に、注意もしくは危険のしきい値で"0"を検知するように設定していた場合、監視結果のステータスは"注意"もしくは"危険"になります。
7. "PIDを指定する"チェックボックスにチェックを入れた場合、"インスタンス"欄に入力された内容を無視し、PIDに設定された値を元に監視を行います。
- 手順1.で"サービス名を指定"ラジオボタンを選択した場合、"PIDを指定する"チェックボックスにチェックを入れることができません。
 - "PIDを指定する"チェックボックスにチェックを入れた場合、手順9.の複数の同一プロセスを集計するための"集計"フィールドは設定することができません。
8. "カウンター"フィールドで、指定した"プロセス"または"サービス"の監視方法を選択します。
- 各カウンターの詳細は、"カウンター"フィールド下部の画面に解説が表示されます。
9. "集計"フィールドで、複数の同一プロセスがある場合に、"カウンター"で設定した値の集計方法を選択します。集計方法は下記のとおりです。
- Count : 指定同一名プロセス個数を集計します。Countは"カウンター"設定は無効です。
 - Sum : 指定同一名プロセスの"カウンター"設定した監視結果の合計を出力します。
 - Min : 指定同一名プロセスの"カウンター"設定した監視結果の最小値を出力します。
 - Max : 指定同一名プロセスの"カウンター"設定した監視結果の最大値を出力します。
 - Avg : 指定同一名プロセスの"カウンター"設定した監視結果の平均値を出力します。
10. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。
- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

手順7.で指定した"カウンター"に応じて、しきい値に対する適切な単位 ("KB"、"Sec"など) が自動で表示されますが、件数（スレッド数、ハンドル数、プロセス数）が対象の場合、単位はありません。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

11. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

12. しきい値設定のため参考値を見るには、[現在値の取得]ボタンをクリックします。

取得値は、指定した"カウンター"の単位に応じて表示されます。

C. プロセスの生死確認を行う場合

以下の手順で、プロセス自身の生死を監視することができます。

1. "プロセス名"あるいは"プロセスID"を指定します。
2. "集計"に利用する関数を"Count"とします。
3. "注意"あるいは"危険"しきい値を"0と等しい"に設定すると、プロセスが存在しなければ、"注意"ステータスあるいは"危険"ステータスになります。
これにより、プロセスの生死を判定することができます。

D. 拡張事項

- "インスタンスが存在しない場合も失敗としない"チェックボックスにチェックを入れている場合、監視対象のインスタンスが存在しない時に[現在値の取得]ボタンをクリックすると、結果は"0"になります。

ただし、下記のカウンターの場合には"N/A"になります。

- Creating Process ID
- ID Process
- Priority Base
- System Idle Process

- 同一"プロセス名"が複数ある場合には、プロセスの起動順序に"プロセス名"の後に"#1"~"n"がつきます。

例：プロセス名、プロセス名 #1、プロセス名 #2・・・

同一"プロセス名"の一つを監視する際はその中から指定するか、直接インスタンスの箇所に"プロセス名#1"と指定します。

また、途中でその中のプロセスが停止した場合には、順に番号は繰り上がる点に注意が必要です。

(12) パフォーマンスカウンター監視

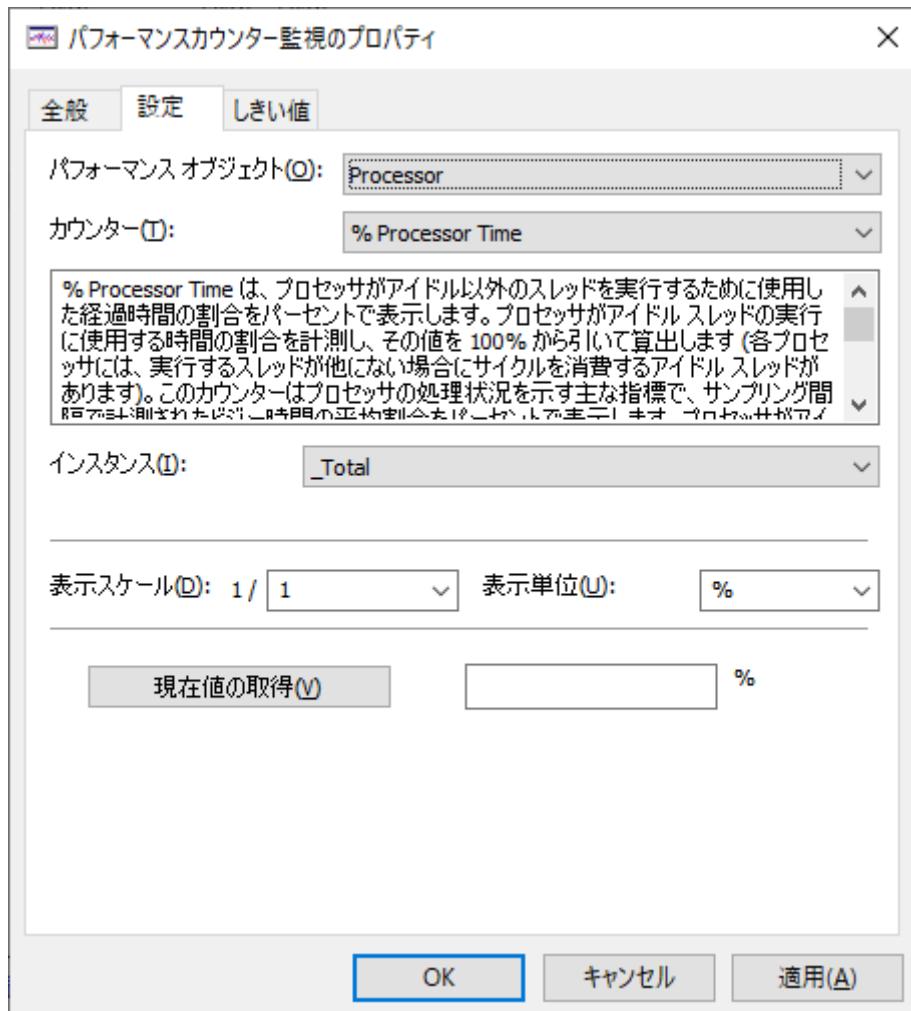
監視対象コンピューターのパフォーマンスをOS標準のパフォーマンスデータを元に監視を行います。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

パフォーマンスカウンター監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. "パフォーマンス オブジェクト"フィールドで、監視するオブジェクトを選択します。
2. "カウンター"フィールドのリストは、手順1.で指定した"パフォーマンス オブジェクト"によって異なります。
 - 各カウンターの詳細は、"カウンター"フィールド下部の画面に解説が表示されます。
3. "インスタンス"フィールドのリストは、手順2.で指定した"カウンター"によって異なります（ブランクの場合もあります。）。
4. "表示スケール"は、監視値を指定したスケールに合わせてログに表示します。
 - "表示スケール"の設定範囲は"1"～"2,000,000,000"の整数を入力することができます。

小数点数値はドロップダウンリスト

から"0.1"、"0.01"、"0.001"、"0.0001"、"0.00001"、"0.000001"、"0.0000001"が選択できます。

- 整数の"表示スケール"→整数の"表示スケール"に変更した際には、所得値は表示上でスケールに応じて変更されます。

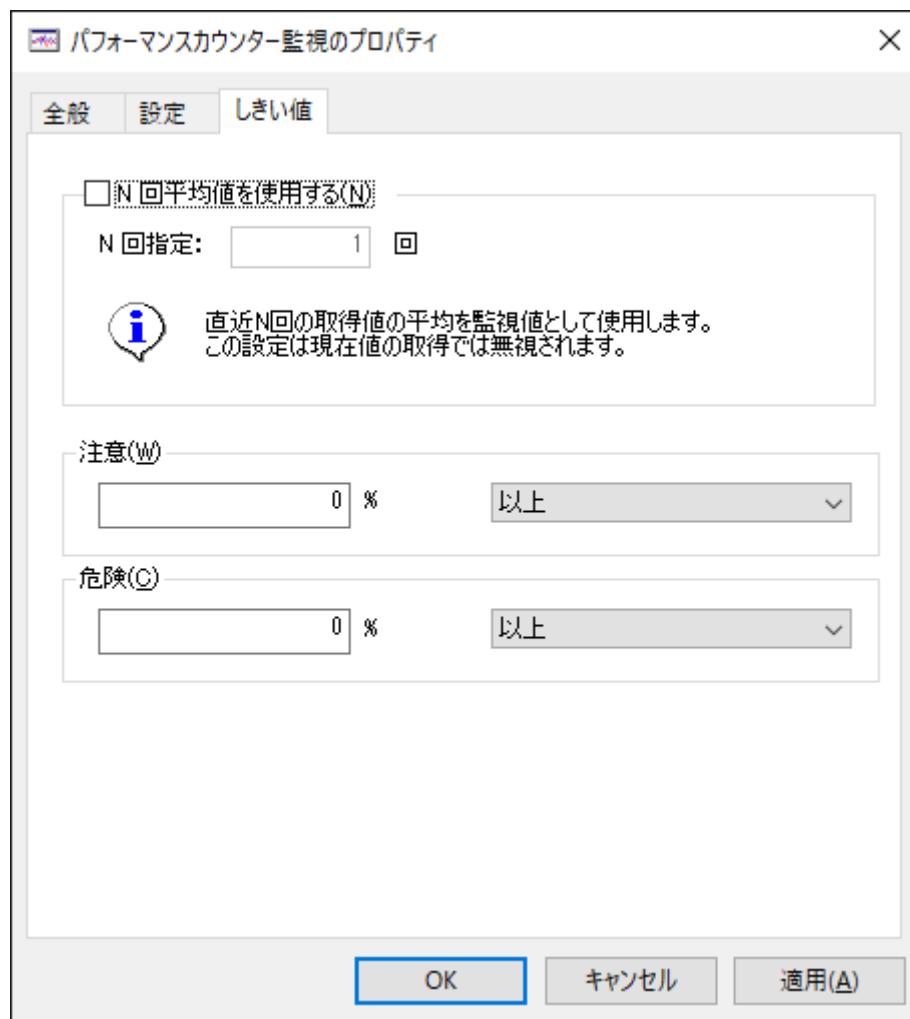
- 整数の"表示スケール"→小数点の"表示スケール"に変更した場合、もしくは逆の変更を行った場合、下記に表示される値が正しく表示できなくなりますので、スケールを変更した監視項目のログのクリアが必要です。
 1. BOMマネージャーのリザルトペインの"前回の値"
 2. ログのリスト表示
 3. インスタンスステータス表示の取得値

5. "表示単位"は、表示上、わかりやすく指定するもので、あらかじめ設定されている単位以外にも任意に変更可能です。

この表示単位はスケールとは関係ありません。なお、"KB"では"1024"、"MB"では"1048576"と表示されます。

6. 現在選択されている"カウンター"の値を表示するには、[現在値の取得]ボタンをクリックします。

C. 「しきい値」タブ



1. "N回平均値を使用する"にチェックをすると、「設定」タブの監視条件で取得した値の、直近N回分の平均値をしきい値にすることができます。

"N回指定"フィールドには、具体的に直近何回分のデータを対象とするのかを数値 ("1"~"99") で入力します。

- 「設定」タブの手順6.の[現在値の取得]ボタンのクリックでは平均値は取得できず、現在の値が表示されます。
- "N回平均値を使用する"場合、指定したN回分のデータが蓄積されるまでは、取得値は"N/A"になります。

2. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"99999999") を入力します。

「設定」タブの手順2.で指定した"カウンター"に応じて、しきい値に対する適切な単位 ("KB"、"Sec"など) が自動で表示されますが、件数（スレッド数、ハンドル数、プロセス数）が対象の場合、単位はありません。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

3. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

D. 補足事項

- "Processorオブジェクト"の"Processor Queue Length"はBOM 8.0の監視項目に応じて増加します。
しきい値を設定する際には、[現在値の取得]ボタンで表示される現在値を参考に設定してください。
- "カウンター"によっては本来もっているべきインスタンスが存在しない場合には説明文が表示されません。

(13) プロセスリスト監視

監視対象コンピューターのプロセスの有無を監視します。プロセスリスト監視の使用方法は、下記の2種類があります。

- 拒否リストプロセス監視

監視対象コンピューター上で既存の問題あるプロセス（拒否リスト）をあらかじめ列挙しておき、そのプロセスを監視します。

- 許可リストプロセス監視

あらかじめ監視対象コンピューター上で動作していても問題ないと判断するプロセスリスト（許可リスト）を作成します。

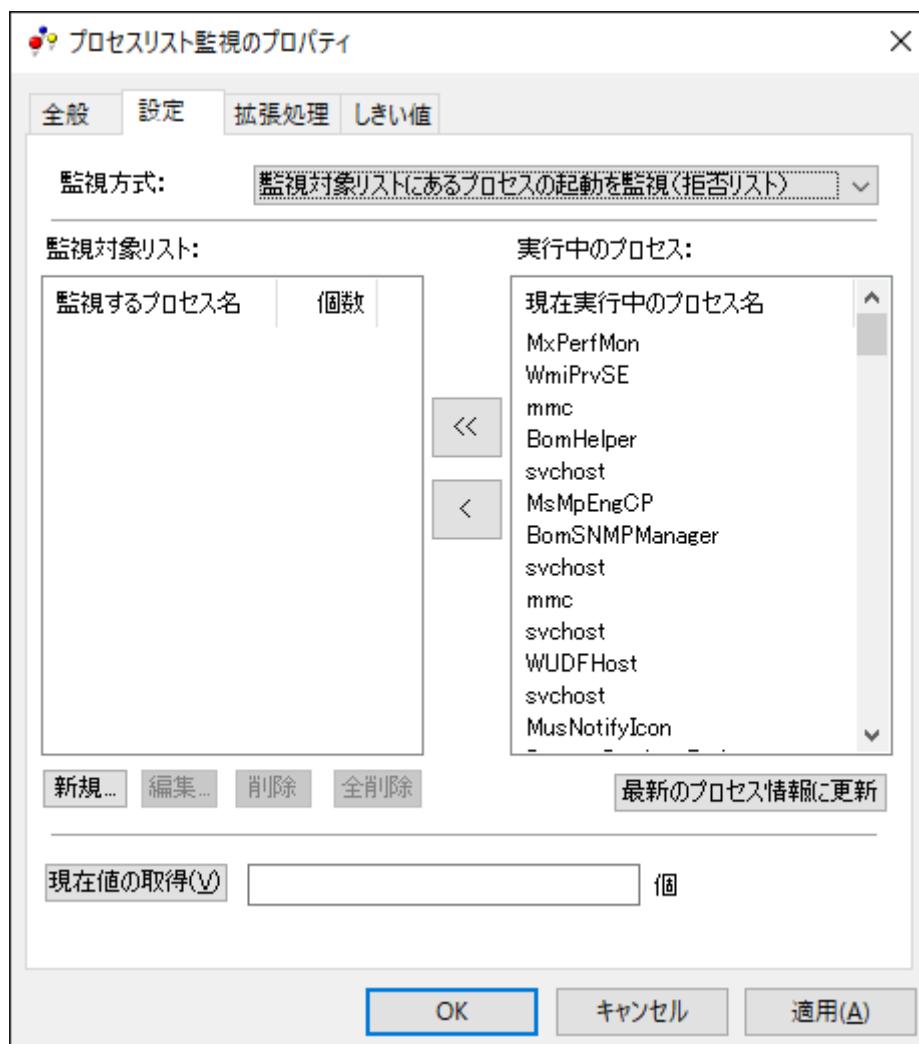
プロセスリストには同一プロセスの個数も含まれられ、監視時に指定個数を超えるプロセスを検知すると、超えたプロセス数を取得値とし、該当プロセス一覧も取得できます。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については「監視項目の概要」の項目「[「全般」タブ](#)」を参照してください。

プロセスリスト監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



- 拒否リストプロセス監視は、監視対象コンピューター上で動作すべきではないプロセスをあらかじめ登録します。
- 許可リストプロセス監視は、監視対象コンピューター上で動作していても問題のないプロセスをあらかじめ登録します。

1. 拒否リストプロセスと許可リストプロセスのどちらの監視を行いたいのか、"監視方式"フィールドに指定します。なお、"許可リスト"→"拒否リスト"に変更した場合、"プロセス数の個数が全て1に変更される"という趣旨のポップアップ画面が表示されます。

- 拒否リストプロセス監視

"監視方式"フィールドに、"監視対象リストにあるプロセスの起動を監視（拒否リスト）"を設定します。

- 許可リストプロセス監視

"監視方式"フィールドに、"監視対象リストにないプロセスの起動を監視（許可リスト）"を設定します。

2. 監視するプロセス名を指定する場合には、下記のどちらかの手段で設定します。

- 実行中のプロセスリストより選択

BOM 8.0は、コンピューター上で実行中のプロセスを自動検出し、"実行中のプロセス"フィールドに表示させます。この"実行中プロセス"リストで拒否リスト、もしくは許可リスト対象の"プロセス名"をダブルクリックするか、[<]ボタンをクリックすることにより、"監視対象リスト"に登録します。

また、[<<]ボタンをクリックすると、"実行中プロセス"リストのすべてのプロセスを"監視対象リスト"に登録します。

- [新規..]ボタンをクリックし、"プロセスの追加"画面より選択

[新規..]ボタンをクリックすると"プロセスの追加"画面が表示され、"プロセス名"と"プロセス数"を指定できます。



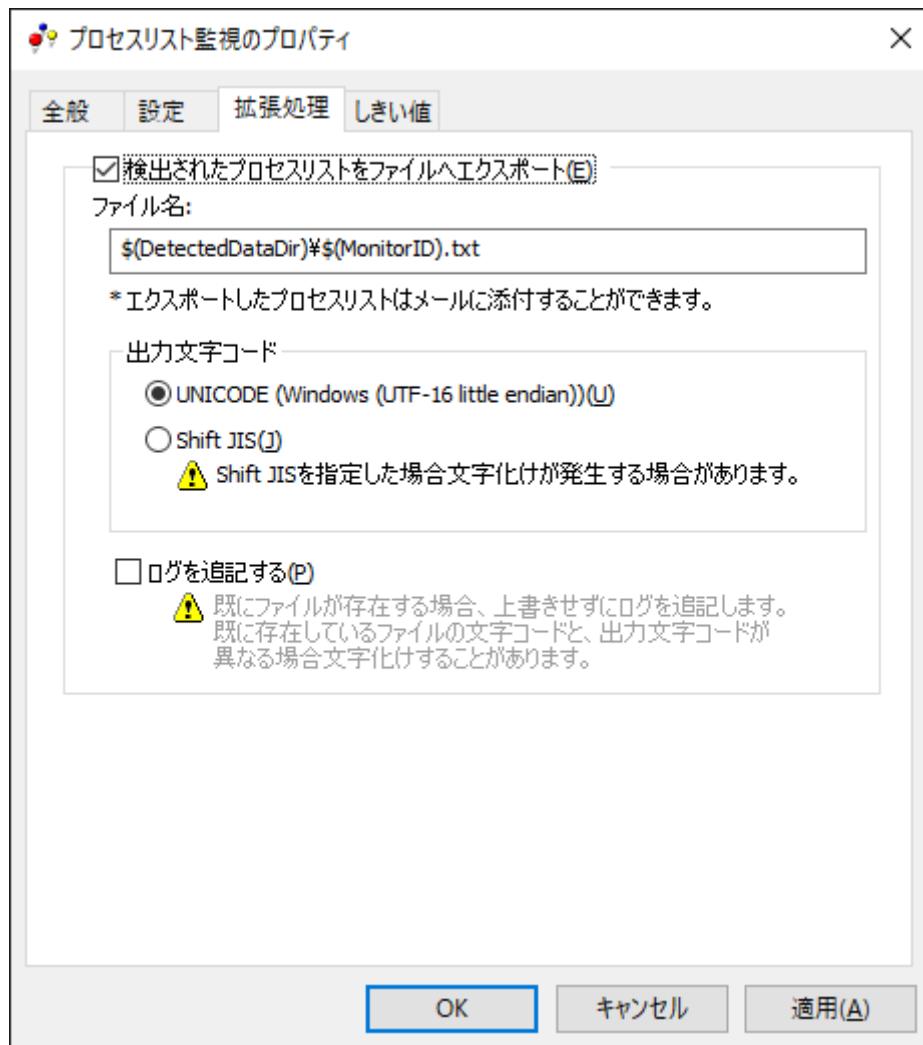
- 拒否リストプロセス監視の場合、"プロセス数"は指定できません。

- "System Idle Process"は、"Idle"と表示されます。

3. [最新のプロセス情報に更新]ボタンをクリックすると、"実行中のプロセス"の最新"プロセス数"を表示します。

4. "プロセス名"をダブルクリックするか[編集..]ボタンをクリックすることで、"プロセスの編集"画面を表示させ、"監視対象リスト"に登録したプロセス名を編集することができます。

C. 「拡張処理」タブ



監視結果を調査する際や監視結果を電子メールで送信する場合、"検出されたプロセスリストをファイルへエクスポート"にチェックを入れることで、該当するプロセス名をテキストファイルに出力することができます。

- 出力されるテキストファイル

下記のフォルダー・ファイル名で、テキストファイルを出力することができます。

出力先フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Instance\[インスタンス名]\\${DetectedData}
テキストファイル名 : GRPxxMONyy.txt
(xx:グループID、yy:監視項目IDを表します。)

- エクスポートファイルの"出力文字コード"は、"UNICODE"ラジオボタンもしくは"Shift JIS"ラジオボタンより選択することができます。
- エクスポートするファイルが既に存在する場合、古いファイルは上書きしますが、"ログを追記する"チェックボックスにチェックを入れることで古いファイルに追記することができます。
 - この機能を使用すると、エクスポートするファイルが肥大化する場合があるため注意が必要です。
 - この機能を使用するとエクスポートしたファイルへ、監視間隔毎に監視結果および、仕切り線"-----"が追記されます。

- 拒否リスト監視の出力内容

拒否リストプロセス監視の"監視対象リスト"に登録されている"プロセス"が起動していた場合、該当する"プロセス名"をテキストファイルに記述します。

例：拒否リストプロセス監視で指定したプロセスが、"notepad"の場合

プロセス"notepad"を検知した場合、テキストファイルに記述されるプロセス名は"notepad"です。

- 許可リスト監視の出力内容

許可リストプロセス監視の"監視対象リスト"に登録されていない"プロセス"が起動していた場合、該当する"プロセス名"をテキストファイルに記述します。なお、"プロセス数"を指定していた場合には、"プロセス数"を超えた"プロセス名"を列挙します。

例：許可リストプロセス監視で指定したプロセスが、"notepad"かつ"プロセス数2"の場合

プロセス"notepad"のプロセス数が"5"を検知すると、テキストファイルには"notepad"、"notepad"、"notepad"とプロセス名が3つ列挙されます。

D. 「しきい値」タブ

- 拒否リストプロセス監視の監視は、拒否リスト（"監視対象リスト"）に登録した"プロセス"が監視実行時に起動していた"プロセス数"を監視結果とします。

例：拒否リスト（"監視対象リスト"）に"notepad"を登録しており、かつ監視実行時に"notepad"が"3個"起動していた場合、監視結果は"3"です。

- 許可リストプロセス監視の監視は、許可リスト（"監視対象リスト"）に登録したプロセス（指定した個数も含めて）以外の監視実行時に起動している"プロセス数"を監視結果とします。

例：許可リスト（"監視対象リスト"）中に"notepad"を"プロセス数2個"を登録しており、監視時の許可リスト（"監視対象リスト"）以外のプロセス"EXCEL"が"1個"、"notepad"が"3個"起動していた場合、監視結果は"2"です。



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999") を入力します。

しきい値の判定条件で"より小さい"を選択した場合には、数値に"0"を入力することができません。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

E. 换算事項

- 許可リストプロセス監視を実行した際は、BOM 8.0以外のプロセスを対象とします。

BOM 8.0が使用する下記のプロセスは、"実行中のプロセス"リストから除外して監視が実行されます。

No	プロセス名	No	プロセス名	No	プロセス名
1	BomAgent.exe	31	BomSNMPGet.exe	61	MxTrap.exe
2	BomAIProcMon.exe	32	BomSNMPManager.exe	62	MxTxtlogMon.exe
3	BomArchiveDBAccess.exe	33	BomSNMPUsmEncrypt.exe	63	MxTxtlogMonOpt.exe
4	BomArchiveService.exe	34	BomSNMPWizard.exe	64	MxTxtlogMonOpt.exe
5	BomArcMailPop.exe	35	BOMSQLMon.exe	65	MxWmiMon.exe
6	BomArcMailSmtip.exe	36	BomSQLServerMon.exe	66	ReportDesigner.exe
7	BomArcMailUnreachedChecker.exe	37	BomStatusViewer.exe	67	ReportETL.exe
8	BomBackupConfig.exe	38	BomSwitchB.exe	68	ReportPrinter.exe
9	BomBackupService.exe	39	BomVer.exe	69	ReportPrintWizard.exe
10	BomCmd.exe	40	BomVmAct.exe	70	ReportSetting.exe
11	BomCmdInstance.exe	41	BomVmLogViewer.exe	71	SendMessageWts.exe
12	BomCmdLogtxt.exe	42	BomVmMon.exe	72	SendPopup.exe
13	BomCMon.exe	43	BomVmReportCreator.exe	73	SMARTMon.exe
14	BomCMonSub.exe	44	BomWtsMon.exe	74	BomSyslogReceiveService.exe
15	BomComExec.exe	45	ccmenu.exe	75	BomSyslogGenerateCert.exe
16	BomCsvImporter.exe	46	ESM_BOM_Reg.exe	76	BomRestartService.exe
17	BomDBMon64.exe	47	ExShutdown.exe	77	BomUpdateMonitor.exe
18	BomEasySettingWizard.exe	48	LogoffSessionWts.exe	78	BomUpdateMonitorChecker.exe
19	BomFindFiles.exe	49	MxAdminSub.exe	79	BomAutoUpdate.exe
20	BomHelper.exe	50	MxDeployConfUI.exe	80	BomEasySettingInstaller.exe
21	BomHistoryMon.exe	51	MxDeployWizard.exe		
22	BomImail.exe	52	MxEvtlogMon.exe		
23	BomInstSwMon.exe	53	MxLinuxAct.exe		
24	BomMonScheduler.exe	54	MxLinuxMon.exe		
25	BomNetMon.exe	55	MxLogViewer.exe		
26	BomOraMon.exe	56	MxMail.exe		
27	BomPLink.exe	57	MxPerfMon.exe		
28	BomPSftp.exe	58	MxProcListMon.exe		
29	BomPutEventLog.exe	59	MxSysConf.exe		
30	BomQfeList.exe	60	MxSysMon.exe		

(14) イベントログ監視

OS標準のイベントビューアーには多種多様のイベントが記述されますが、BOM 8.0のイベントログ監視は管理者が必要とするイベントログをフィルタリングしてイベントログの件数やリストを出力します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については「監視項目の概要」の項目「全般 タブ」を参照してください。

イベントログ監視では、監視間隔の既定値が5分に指定されています。

B. 「設定」タブ

- イベントログ監視の除外設定方法については、弊社ウェブサイトの以下のページで追加情報を公開しています。必要に応じて参照してください。

- イベントログ監視での除外設定方法ガイドライン

<https://www.say-tech.co.jp/support/download/bom80/79779170320>

- 同一"ソース名"で同一"イベントID"が複数存在する場合、選択した同一"イベントID"はすべて監視対象になります。

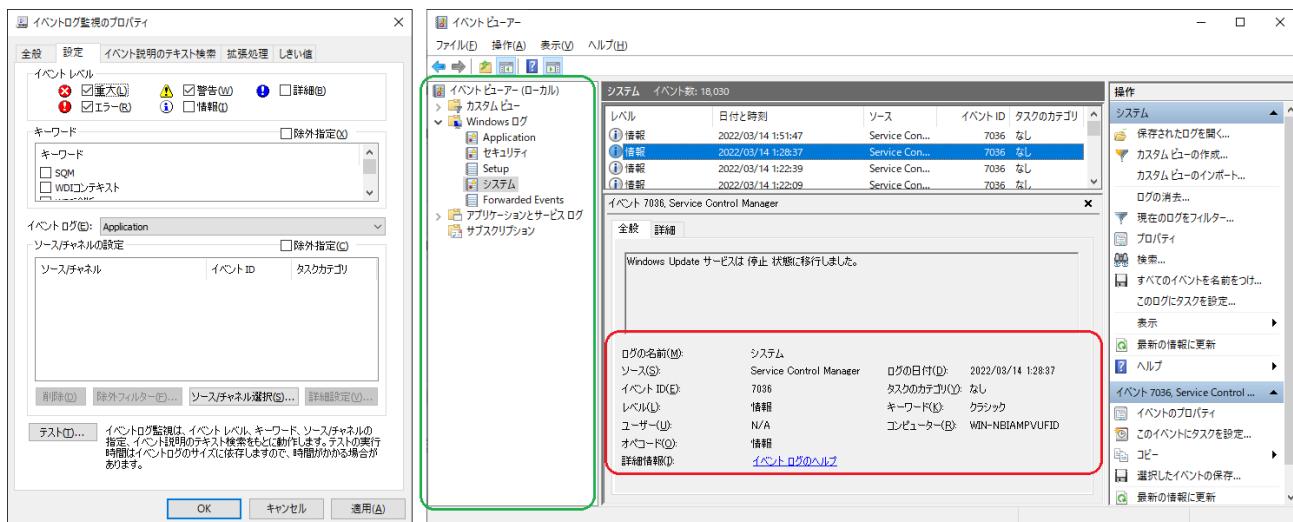
同一"イベントID"で"メッセージ"が異なる一部のイベントのみを監視対象にする場合は、後述の「イベント説明のテキスト検索」タブで対象となる"メッセージ"を絞り込んでください。

- イベントログ監視では、実行する際に"ソース/チャネルの設定"で指定された選択・除外指定を「XPath形式」のクエリとして発行しますが、このXPath形式では「クエリは最大で"32"件まで」という制限があり、選択・除外指定が多数登録された場合はクエリー数が32件を超えて、イベントログ監視が以下のエラーで失敗することがあります。

エラーコード : 0x80073A99

メッセージ : 指定されたクエリは無効です。

このエラーは、"ソース/チャネルの設定"の指定条件を減らす事で回避できます。発行されるクエリー数をBOM 8.0から制御することはできませんが、「設定」タブの[テスト]ボタンをクリックすることで、あらかじめエラー発生の有無を確認することは可能です。



【左画面：イベントログ監視の設定画面、右画面：OSのイベントビューアー画面】

上図は"イベントログ監視"の設定画面（左）とOSのイベントビューアー画面（右）を表示しています。

右側の赤い実線部分で記述されている内容が左側のBOM 8.0の設定画面でフィルタリングの対象として設定できる内容です。

1. "イベント レベル"フィールドでは、"重大"、"警告"、"詳細"、"エラー"、"情報"の5種類からフィルタリングしたいレベルを選択します。

2. "キーワード"フィールドでは、"キーワード"リストから該当する"キーワード"を選択してフィルタリングします。

- "キーワード"フィールドの"除外指定"チェックボックスのチェックを外した場合

選択指定：選択した"キーワード"に該当するイベントログのみをフィルタリングします。

- "キーワード"フィールドの"除外指定"チェックボックスにチェックを入れた場合

除外指定：選択した"キーワード"に該当するイベントログを除外してフィルタリングします。

3. "イベント ログ"フィールドのドロップダウンリストには、上記イベントビューアー画面（右）の左側（緑の点線で囲ってある部分）の"Windowsログ"と"アプリケーションとサービスログ"に表示されているログファイル"Application"、"セキュリティ"といったイベントログの種別を選択します。

4. 手順3.で指定した"イベントログ"からさらに細かく"ソース/チャネル"を選択する場合、"ソース/チャネルの設定"フィールドで[ソース/チャネル選択]ボタンをクリックすると、"ソース/チャネル選択"画面が表示されます。

なお、"ソース/チャネルの設定"フィールドに表示された"ソース/チャネル"を選択後、[詳細設定]ボタンをクリックすると、手順8.の、"イベントログ詳細設定"画面を表示させることができます。

また、"除外指定"チェックボックスにチェックを入れると、[除外フィルター]ボタンが有効となります。このボタンおよび除外フィルター機能の詳細については、'除外フィルター'を参照してください。

- "ソース/チャネルの設定"フィールドの"除外指定"チェックボックスのチェックを外した場合

選択指定：選択した"ソース/チャネル"に該当するイベントログのみをフィルタリングします。

- "ソース/チャネルの設定"フィールドの"除外指定"チェックボックスにチェックを入れた場合

除外指定：選択した"ソース/チャネル"に該当するイベントログを除外してフィルタリングします。

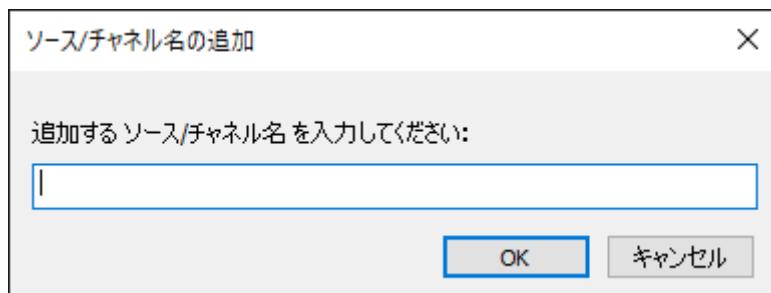
5. "ソース/チャネル選択"画面で、現在監視対象コンピューターに登録されているソース/チャネルリストから、監視する対象の"ソース/チャネル"にチェックを入れます。監視対象の"ソース/チャネル"は、複数選択することができます。



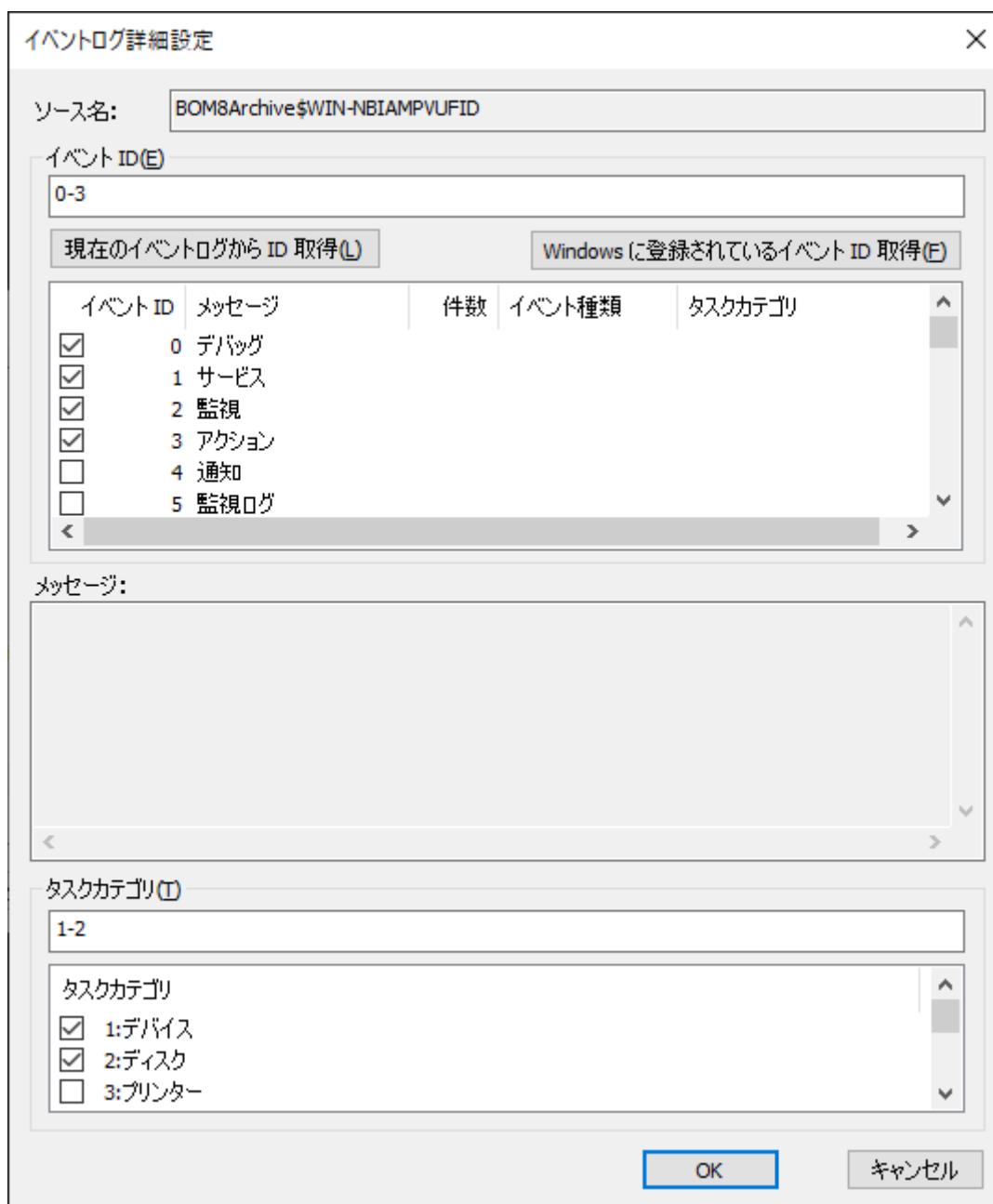
6. [件数取得]ボタンをクリックすると、現在イベントログに実際に出力されているソース・チャネルの件数（合計、重大、エラー、警告等）が表示されます。手順5.のソース/チャネルリストからの選択時の参考にしてください。

- システムにあらかじめ登録していないアプリケーションやユーザー独自アプリケーションからイベントログを書き出している場合、"ソース/チャネル選択"画面で最初はソース/チャネルが表示されませんが、[件数取得]ボタンをクリックするとソースが表示され、件数がカウントできることがあります。

7. [ソース/チャネルの追加]ボタンをクリックすると、"ソース/チャネル選択"画面のリストに表示されていない"ソース/チャネル"を、"ソース/チャネル名の追加"画面から登録することができます。



8. ソース/チャネルリストから1つを選択し、[詳細設定]ボタンをクリックすると、"イベントログ詳細設定"画面を表示させることができます。



9. [現在のイベントログからID取得]ボタンをクリックすると、現在イベントログに出力されているログから表示されているソース名を検索して、同一"ソース名"の"イベントID"、"メッセージ"、"件数"、"イベント種類"、"タスクカテゴリ"をリスト表示します。

- 表示された"イベントID"をクリックすると、該当する"イベントID"の"メッセージ"と"タスクカテゴリ"の内容が下部の"メッセージ"ボックスに表示されます。
10. [Windowsに登録されているイベントID取得]ボタンをクリックすると、監視対象コンピューターに登録されているイベントログから表示されているソース名を検索して、同一"ソース名"の"イベントID","メッセージ"をリスト表示します。
- 表示された"イベントID"をクリックすると、該当する"イベントID"の"メッセージ"内容が下部の"メッセージ"ボックスに表示されます。
11. 手順9.もしくは手順10.で表示させたリストから、監視対象とする"イベントID"のチェックボックスにをチェックを入れます。
- "イベントID"のチェックボックスにチェックを入れていくと、"イベントID"フィールドに"イベントID"が追加されていきます。
- "イベントID"を複数指定する表記法
"イベントID"フィールドに、"イベントID"、または"イベントID"範囲を、カンマ区切やハイフンで複数指定します。
例：1-10,12
 - 条件を除外する表記方法
"イベントID"フィールドに、"イベントID"を入力する際に、"イベントID"の先頭に"負符号"を入力します。
例：1-10,12,-4
 - この場合、イベントID1～10,12を監視対象にしますが、ID4は監視対象から外します。
12. "タスクカテゴリ"フィールドにも手順11.と同じように、"タスクカテゴリ"のチェックボックスにチェックを入れることで、設定を行うことができます。
13. 設定終了後、その時点での該当する件数を[テスト..]ボタンより確認できます。
- 手順4.のソース/チャネルの除外指定と、手順11.の負記号を組み合わせた場合の監視結果は下記のとおりです。

イベントログの除外指定	イベントIDを通常指定	イベントIDを負記号で指定
ON	指定したソース/チャネル以外を監視し、指定したソース/チャネルのイベントIDは監視	指定したソース/チャネル以外を監視し、指定したソース/チャネルの負記号で指定したイベントID以外を監視
OFF	指定したソース/チャネルのうち、指定したイベントIDのみ監視	指定したソース/チャネルのうち、負記号で指定したイベントID以外を監視

C. 除外フィルター

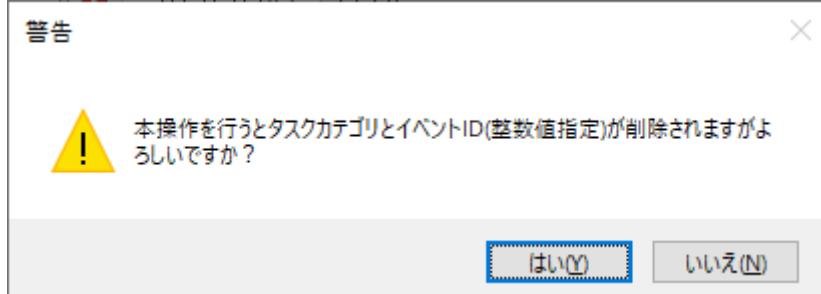
"ソース/チャネルの設定"フィールドで"除外指定"チェックボックスにチェックを入れた場合、"ソース/チャネルの設定"フィールドの[除外フィルター]ボタンが有効となり、このボタンから除外フィルター設定画面を表示できます。

※ 除外フィルター機能は、BOM 8.0が収集したイベントログから除外対象を選択して指定するため、除外の判断ができる件数および種類のイベントログがあらかじめ収集されている必要があります。本機能は、一定期間イベントログ監視を実行し、イベントログを収集した上で実行してください。（収集されたイベントログとは、"ログ"ノード

配下の"取集されたイベントログ"ノードに蓄積されているログを指します。)

ただし、他のインスタンスより除外設定ファイルをインポートする場合はこの限りではありません。

1. "ソース/チャネルの設定"フィールドで"除外指定"チェックボックスにチェックを入れ、[除外フィルター]ボタンをクリックします。
2. 以下の警告画面が表示されますので、除外フィルター機能を使用する場合は[はい]ボタンをクリックします。



※ すでに何らかの"ソース/チャネルの設定"が登録されている場合、除外フィルター機能を使用すると以下の登録内容は削除されます。問題がある場合は[いいえ]ボタンをクリックしてください。

- イベントIDで「-」(マイナス)指定されているもの以外のソース/チャネル指定
- タスクカテゴリの設定

3. 除外フィルター画面が表示されます。

The 'イベントログ解析結果' section displays a table of event logs:

ソース/チャネル	イベント ID	メッセージ	件数
Service Control Manager	7036	Software Protection サービスは 停止 状態に移行しました。	9
Microsoft-Windows-Hyper-V-Netvsc	14	ミニポート NIC 'Microsoft Hyper-V Network Adapter' ネットワークは変更されました	3
Microsoft-Windows-Hyper-V-Netvsc	13	ミニポート NIC 'Microsoft Hyper-V Network Adapter' は切断されました	2
Microsoft-Windows-Time-Service	35	システム時刻とタイム ソース time.windows.com,0x8 (ntp.m 0x8 0.0.0.0:123->52.179.17.38:123) ...	2
Microsoft-Windows-Kernel-General	1	システム時刻は 2017-08-21T09:55:04.114433800Z から 2017-08-22T00:31:38.086000000Z に変...	1
Microsoft-Windows-Time-Service	37	タイム プロバイダー NtpClient は現在 time.windows.com,0x8 (ntp.m 0x8 0.0.0.0:123->52.179.17....	1
Service Control Manager	7042	TCP/IP NetBIOS Helper サービスに停止 コントロールが正常に送信されました。指定された理由: 0x4...	1
Microsoft-Windows-Hyper-V-Netvsc	12	ミニポート NIC 'Microsoft Hyper-V Network Adapter' は接続されました	1

The '除外一覧' section is currently empty.

Buttons at the bottom include: 'インポート(I)', 'エクスポート(E)', 'OK(O)', and 'キャンセル(C)'.

4. "イベントログ解析結果"フィールドにBOM 8.0が収集したイベントログが一覧表示されます。

除外したいイベントログを選択し、[▼除外一覧に追加▼]ボタンをクリックすると、選択したイベントログが"除外一覧"フィールドに移動し、除外の対象となります。

5. "除外一覧"フィールドには除外指定されたイベントログの一覧が表示されます。

除外対象から外したいイベントログを選択し、[▲除外一覧から削除▲]ボタンをクリックすると、選択したイベントログが"イベントログ解析結果"フィールドに移動し、除外の対象から外れます。

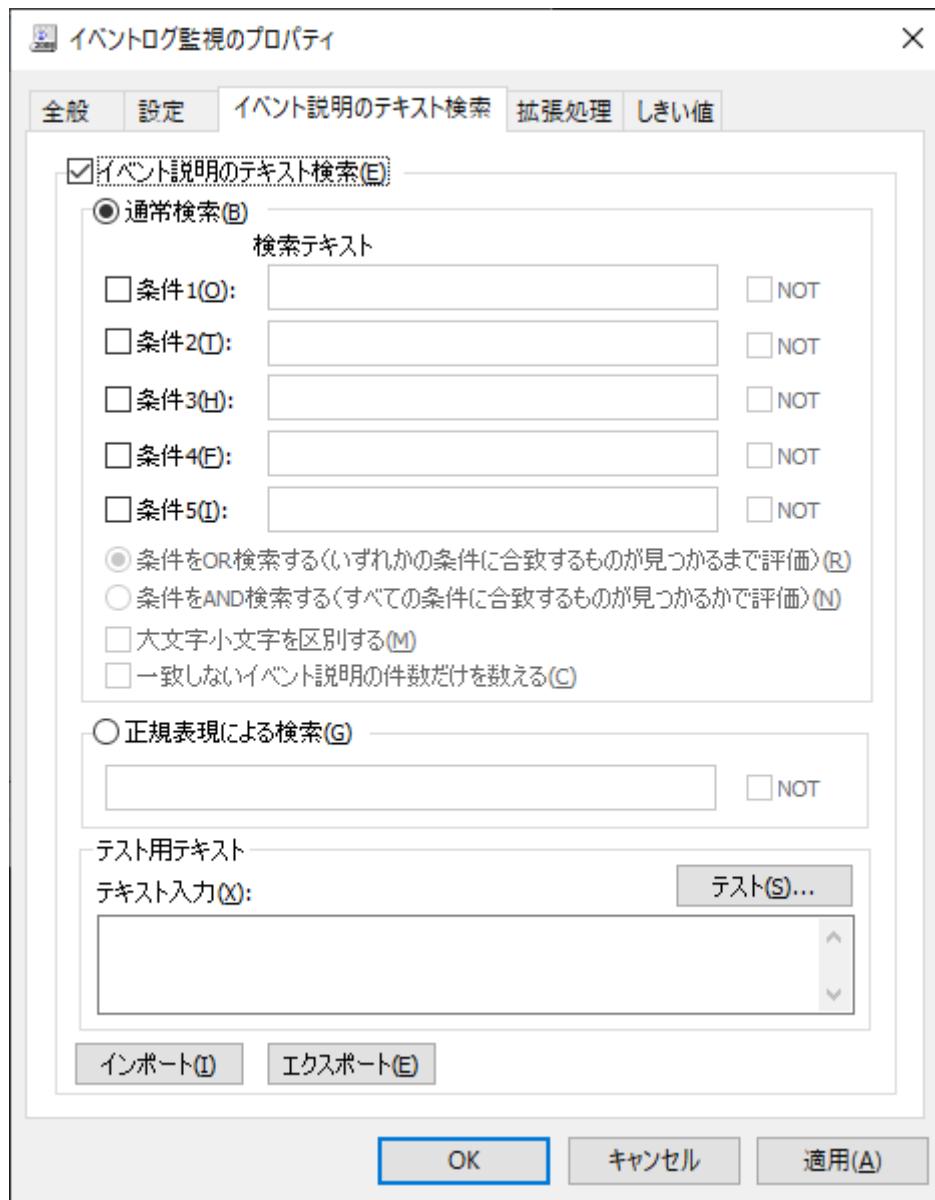
6. [エクスポート]ボタンをクリックすると、除外フィルターの設定を".json"形式のファイルにエクスポートできます。

7. [インポート]ボタンをクリックすると、他のインスタンスから".json"形式でエクスポートした除外フィルターの設定をインポートできます。

D. 「イベント説明のテキスト検索」タブ

イベントログのテキストを検索する場合、"イベント説明のテキスト検索"チェックボックスにチェックを入れます。

イベントログの"説明文"に対し、検索テキストに指定した文言条件に該当するイベントログを抽出します。



- "通常検索"ラジオボタンを選択して下記を設定すると、テキスト検索が行えます。設定できる内容は下記のとおりです。

項目	説明
"条件1"～"条件5"	チェックをつけて検索キーワードを入力します。
NOT	検索テキストに合致しないものを検索したい場合にチェックを入れます。 条件ごとの判定であるため、例えばNOT"1" or NOT"2" は、"(NOT"1") or (NOT"2")"という条件になり、"1"だった場合はNOT"2"で検知され、"2"だった場合はNOT"1"で検知されます。 1でも2でもない値を検知させたい場合にはNOT"1" and NOT"2"で指定します。
条件をOR検索する	"条件1"～"条件5"までの条件が1つでも合致した際に抽出したい場合に選択します。

項目	説明
条件をAND検索する	"条件1"～"条件5"までの条件が5つすべて合致した際に抽出したい場合に選択します。
大文字小文字を区別する	半角英文字の大文字小文字を区別して検索を行いたい場合にチェックを入れます。
一致しないイベント説明の件数だけを数える	"条件1"～"条件5"と、"条件をOR検索する"、あるいは"条件をAND検索する"で設定した検索キーワードに一致しない件数だけを抽出したい場合にチェックを入れます。

2. "正規表現による検索"ラジオボタンを選択し、"正規表現"フィールドにキーワードを入力すると（最大文字数は1024文字）正規表現による検索が行えます。

- 正規表現とは、文字列の集合をパターンマッチ文字列で表現する方法であり、文字列から特定のパターンをもった文字列を抽出するときに使います。正規表現の詳細については、Webや書籍等を参照してください。

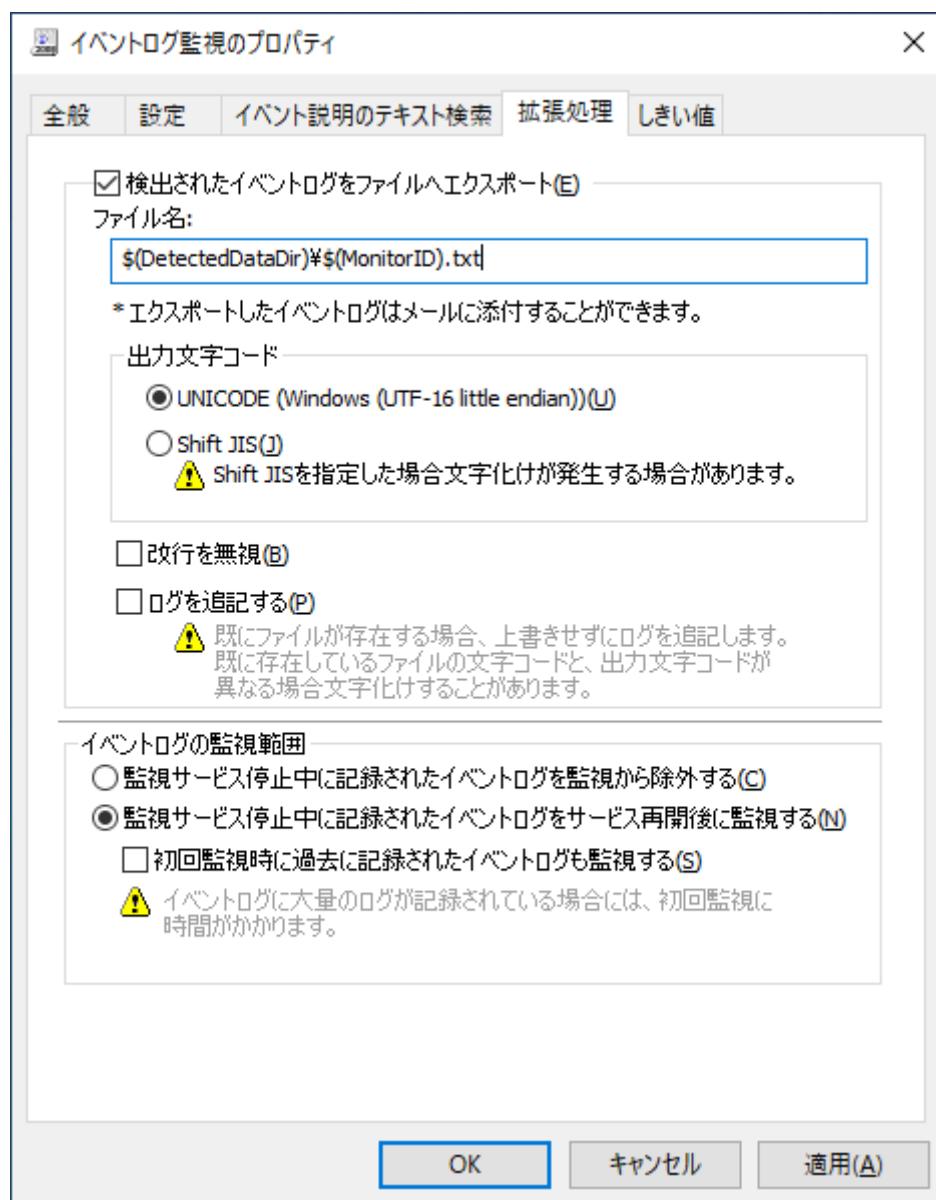
ここではパターンマッチ文字列のリストと特殊文字のリストを記載します。

パターンマッチ文字列	意味
¥	次に続く文字列を特殊文字、後方参照、リテラル文字列、8進文字として解釈。
.	¥n以外の任意の1文字。
^	先頭文字。
\$	終端文字。
*	直前の文字または式の0回以上の繰り返し。
+	直前の文字または式の1回以上の繰り返し。
?	直前の文字または式の0回または1回の繰り返し。
{n}	直前の文字または式のn回の繰り返し。
{n,}	直前の文字または式のn回以上の繰り返し。
{n,m}	直前の文字または式のn回以上m回以下の繰り返し。
?	*、+、?、{n}、{n,}、{n,m}のいずれかの後に付けると最小一致になる。
(pattern)	グループ化を定義。patternに一致するとともに一致した文字列を記憶。
(?:pattern)	グループ化を定義。patternに一致するが文字列は記憶しない。
(?=pattern)	patternで指定した文字列が続く場合一致（肯定先読み）。
(?!pattern)	patternで指定した文字列が続かない場合一致（否定先読み）。
x y	xかyに一致。
[xyz]	カッコ内の任意の1文字（ここではxかyかz）に一致。
[^xyz]	カッコ内のすべての文字に一致しない文字列（ここではx、y、z以外）に一致。

パターンマッチ文字列	意味
[a-z]	文字範囲に一致（ここでは、a、b、c、....、x、y、z）。
[^a-z]	文字範囲に含まれない文字に一致。
n	後方参照または8進数値。
¥0n	8進数値。
¥xnn	16進数値。
¥x{nn}	UNICODE16進数値。
¥cX	コントロールコード
¥Xn	UNICODE文字。

3. [エクスポート]ボタンをクリックすると、「イベント説明のテキスト検索」タブの設定内容を".json"形式のファイルにエクスポートできます。
4. [インポート]ボタンをクリックすると、".json"形式でエクスポートした「イベント説明のテキスト検索」タブの設定内容をインポートできます。

E. 「拡張処理」タブ



監視結果を調査する際や、監視結果を電子メールで送信する場合、"検出されたイベントログをファイルへエクスポート"にチェックを入れることで、検出されたイベントログを下記のとおりテキストファイルに出力することができます。

- 出力されるテキストファイル

下記のフォルダー・ファイル名で、テキストファイルを出力することができます。

```
出力先フォルダー : C:¥ProgramData¥SAY Technologies¥BOMW8¥Environment¥Instance¥[インスタンス名]¥DetectedData¥
テキストファイル名 : GRPxxMONyy.txt
(xx:グループID、yy:監視項目IDを表します。)
```

- エクスポートファイルの"出力文字コード"は、"UNICODE"ラジオボタンもしくは"Shift JIS"ラジオボタンより選択することができます。
- "改行を無視"チェックボックスにチェックを入れると、エクスポート対象のイベントログを1件1行で出力します。
- エクスポートするファイルが既に存在する場合、古いファイルは上書きしますが、"ログを追記する"チェックボックスにチェックを入れることで古いファイルに追記することができます。
 - この機能を使用すると、エクスポートするファイルが肥大化する場合があるため注意が必要です。
 - "検出されたイベントログをファイルへエクスポート"設定をした場合、書き出す件数は最大で10万件です。

"イベントログの監視範囲"フィールドでは、BOM監視サービスが停止した時、あるいは監視を無効に設定した時に出力されたイベントログの監視の要否を設定することができます。

- "監視サービス停止中に記録されたイベントログを監視から除外する"ラジオボタンを選択した場合

BOM監視サービスが停止中に記録されたイベントログは切り捨て、監視サービスが実行中に記録されたイベントログのみを監視範囲に指定します。

- "監視サービス停止中に記録されたイベントログをサービス再開後に監視する"ラジオボタンを選択した場合

BOM監視サービスが停止中に記録されたイベントログは、BOM監視サービスを起動した際に監視範囲に含めるため、BOM監視サービスが停止中に発生した障害も検知することができます。既定ではこちらが選択されています。

- 監視サービスが停止した後に監視が再開された際の監視範囲の相関表は下記のとおりです。

対象	監視サービスの制御方法	"監視から除外する"を選択	"再開後に監視する"を選択
監視グループ	プロパティ画面の有効/無効	監視無効期間のログ検知	監視無効期間のログ検知
	監視 有効/無効アクション	監視無効期間のログ検知	監視無効期間のログ検知
	スケジュール機能	監視無効期間のログ検知	監視無効期間のログ検知
監視項目	プロパティ画面の有効/無効	監視無効期間のログ検知なし	監視無効期間のログ検知
	監視 有効/無効アクション	監視無効期間のログ検知なし	監視無効期間のログ検知

- "初回監視時に過去に記録されたイベントログも監視する"をチェックした場合

イベントログ監視項目を新規作成し、初回の監視実行時に、今までに出力されたすべてのイベントログを監視範囲に含めることができます。

- この機能を使用すると、イベントログファイルのサイズによっては初回監視時の実行時間が長くなるため、注意が必要です。
- 過去のイベントログメッセージに含まれている一部のセキュリティIDが、名前に変換されない場合があります。

F. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999") を入力します。

しきい値の判定条件で"より小さい"を選択した場合には、数値に"0"を入力することができません。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(15) テキストログ監視

監視対象コンピューターの指定したテキストログの内容をテキスト検索して監視します。

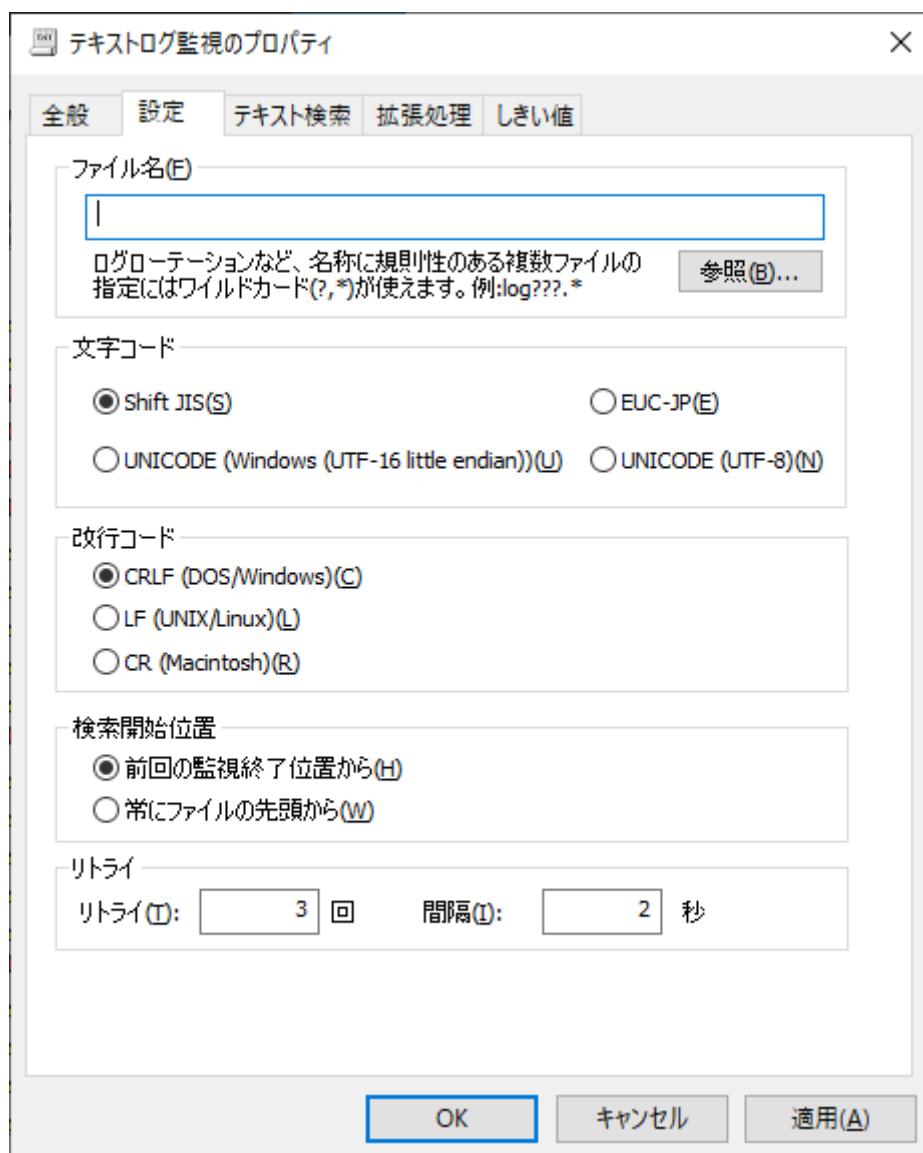
※ テキストログ監視は、初回実行の際、監視の起点とするために必要な情報の取得を行い、2回目以降の実行で前回実行時からの差分を監視することによって対象のテキストを検知します。そのため、初回の実行は情報の取得に成功した時点で必ず監視値が"0"となります。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

テキストログ監視では、監視間隔の既定値が5分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. "ファイル名"フィールドに、監視対象の"ファイル名"をどちらかの手段で設定します。

- 入力する場合

監視対象のファイルを、絶対パスで入力します。

- [参照]ボタンより設定する場合

[参照]ボタンをクリックすると、"ファイル選択"画面が表示され、監視対象のファイルを指定します。

2. 監視対象テキストファイルの"文字コード"の種類と、ファイル内で使用されている"改行コード"の種類を選択します。

3. "検索開始位置"は下記のどちらかを選択します。

- "常にファイルの先頭から"ラジオボタンを選択した場合

初回の監視時も含め、毎回ファイルの先頭から監視を行います。

- "前回の監視終了位置から"ラジオボタンを選択した場合

監視対象ファイルの更新日時が前回監視実行時よりも新しい場合、かつ前回監視実行時の最終位置から検索します。

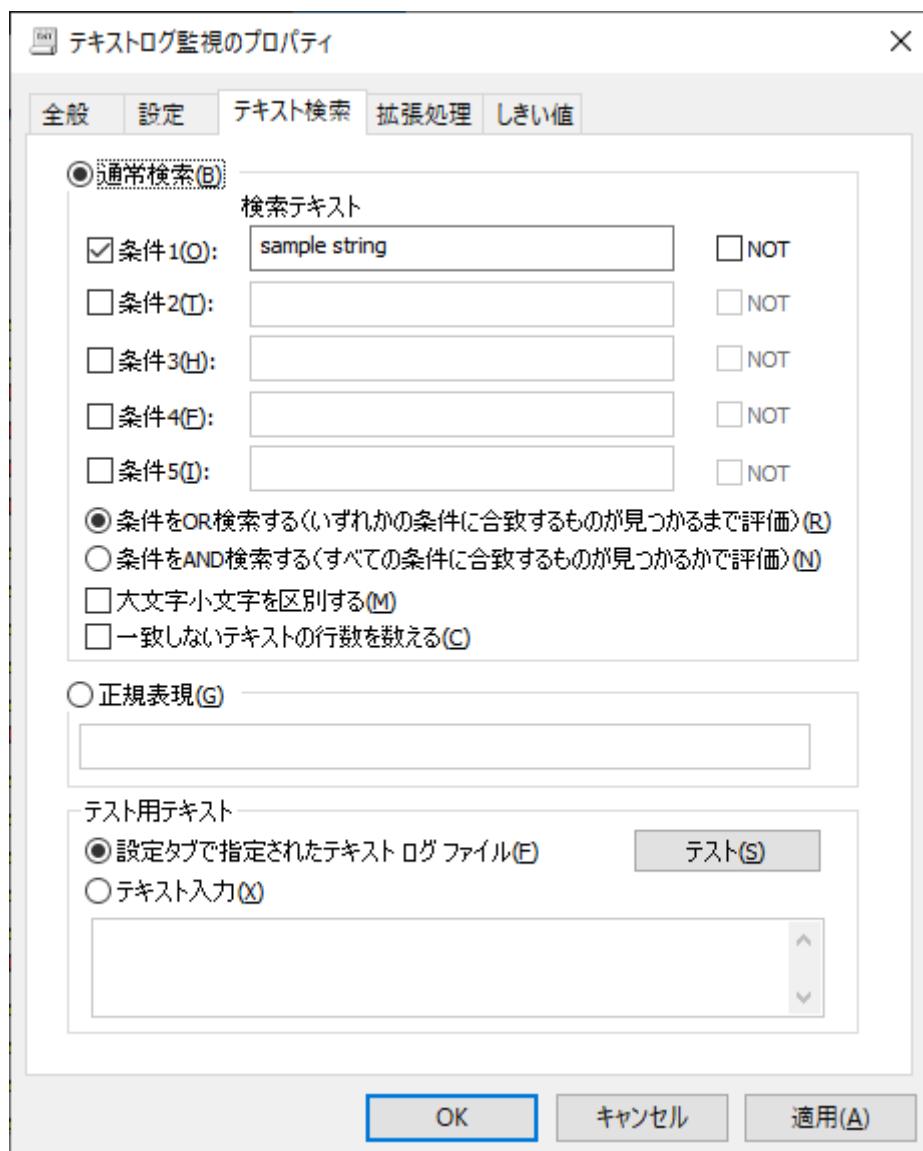
前回監視実行時のファイルの中身が入れ替わっている場合にはファイルの先頭から検索します。

初回の監視動作は最終ファイル位置を検索するため監視を行わず、2回目以降の監視より監視を実行します。

4. "リトライ"フィールドでは、BOM 8.0がテキストファイルを監視する間隔と試行回数を指定します。

- リトライが起こる原因としては、検索対象のファイルを示すディレクトリが存在しない場合、リネームされた場合などが考えられます。
- リトライ回数の値は "1"~"9"、リトライ間隔の値は"1"~"30"の間で設定できます。

C. 「テキスト検索」タブ



1. "通常検索"ラジオボタンを選択して下記を設定すると、テキスト検索が行えます。設定できる内容は下記のとおりです。

項目	説明
"条件1"～"条件5"	チェックをつけて検索キーワードを入力します。 条件1には既定で"sample string"という文字列が入力されていますが、これは削除して入力してください。
NOT	検索テキストに合致しないものを検索したい場合にチェックを入れます。 条件ごとの判定であるため、例えはNOT"1" or NOT"2" は、"(NOT"1") or (NOT"2")"という条件になり、"1"だった場合はNOT"2"で検知され、"2"だった場合はNOT"1"で検知されます。 1でも2でもない値を検知させたい場合にはNOT"1" and NOT"2"で指定します。
条件をOR検索する	"条件1"～"条件5"までの条件が1つでも合致した際に抽出したい場合に選択します。
条件をAND検索する	"条件1"～"条件5"までの条件が5つすべて合致した際に抽出したい場合に選択します。
大文字小文字を区別する	半角英文字の大文字小文字を区別して検索を行いたい場合にチェックを入れます。
一致しないイベント説明の件数だけを数える	"条件1"～"条件5"と、"条件をOR検索する"、あるいは"条件をAND検索する"で設定した検索キーワードに一致しない件数だけを抽出したい場合にチェックを入れます。

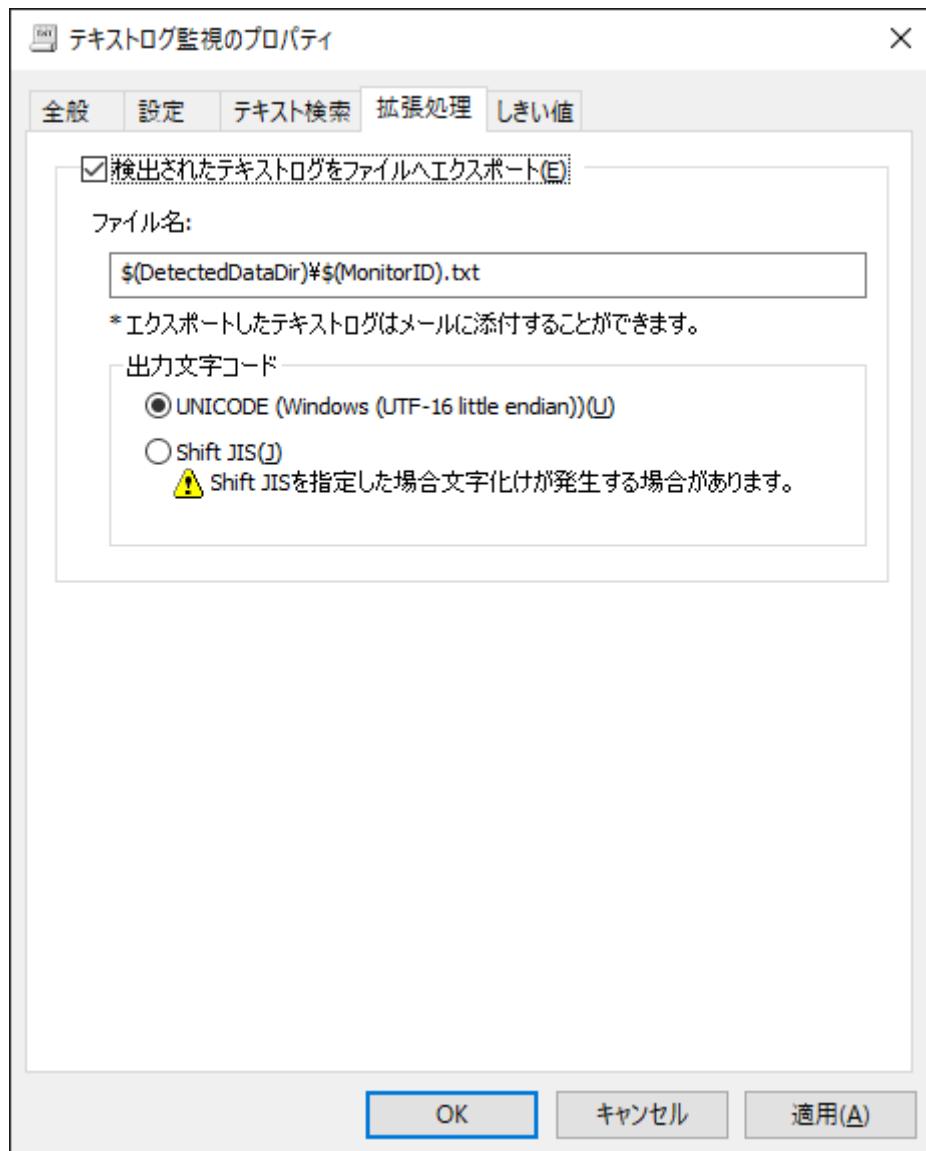
2. "正規表現による検索"ラジオボタンを選択し、"正規表現"フィールドにキーワードを入力すると（最大文字数は1024文字）正規表現による検索が行えます。

- 正規表現の解説とパターンマッチ文字列のリストと特殊文字のリストは、[「イベント説明のテキスト検索」タブ](#)を参照してください。

3. [テスト]ボタンをクリックすると、下記の対象に対して、「テキスト検索」タブの検索条件のテスト実行を行うことができます。

- テスト実行でのタイムアウト時間は2分です。
- "設定タブで指定されたテキストログファイル"ラジオボタンを選択している場合
「設定」タブの"ファイル名"フィールドで選択したファイルに対して、テストを実行します。
- "テキスト入力"ラジオボタンを選択している場合
"テキスト入力"ラジオボタン下部の空の"テキストボックス"に内容を入力して、テストを実行します。

D. 「拡張処理」タブ



監視結果を調査する際や、監視結果を電子メールで送信する場合、"検出されたテキストログをファイルへエクスポート"にチェックを入れることで、検出されたテキストログを下記のとおりテキストファイルに出力することができます。

- 出力されるテキストファイル

下記のフォルダー・ファイル名で、テキストファイルを出力することができます。

出力先フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Instance\[インスタンス名]\DetectedData\
テキストファイル名 : GRPxxMONyy.txt
(xx:グループID、yy:監視項目IDを表します。)

- "出力文字コード"は、"UNICODE"ラジオボタンもしくは"Shift JIS"ラジオボタンより選択することができますが、改行コードはCRLFでエクスポートファイルを出力します。
- テキストログ監視で出力できるテキストファイルの最大行数は、ファイルの先頭から10万行です。
- 出力形式は以下の例のとおりで、変更はできません。

カッコつきの※印部分は注記のため、実際の出力には存在しません。

出力例 : "c:\textlog\logfile.log(※1)","2020/04/06 18:52:55(※2)","+0900(※3)","2020/04/07 17:24:52(※4)","+0900(※5)",1(※6),"System error(※7)"

※1	テキストログファイル名(格納パス含む)	※2	監視対象ファイル生成時刻
※3	※2のタイムゾーン	※4	監視対象ファイル最終更新時刻
※5	※4のタイムゾーン	※6	前回監視タイミング以降に追記された行における、 監視対象ファイル単位での検出行の行番号
※7	検出行文字列		

E. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999") を入力します。

しきい値の判定条件で"より小さい"を選択した場合には、数値に"0"を入力できません。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

F. 監視動作について

ワイルドカードを指定した場合の監視動作

テキストログ監視の対象ファイル名はワイルドカード (*、?) 指定ができますが、指定できる対象ファイル名はログローテーション等による下図の形式の規則的なファイルのみです。

形式	前回監視時	次回監視時	備考
リング形式 ※ファイルは上書き	SampleLog.SUN SampleLog.MON SampleLog.TUE SampleLog.WED SampleLog.THU SampleLog.FRI SampleLog.SAT	SampleLog.SUN SampleLog.MON SampleLog.TUE SampleLog.WED SampleLog.THU SampleLog.FRI SampleLog.SAT	曜日により上書き更新のファイルが変わる。 曜日の代わりに数字の場合もある。
連番追加 連番で新しいファイルが追加される形式	Log20040501.dat Log20040502.dat Log20040503.dat Log20040504.dat	Log20040501.dat Log20040502.dat Log20040503.dat Log20040504.dat Log20040505.dat [新規]	一定期間ごとにファイルは破棄される。 日時を含むファイル名、番号を含む ファイル名が多い。 ←Log20040505.datが新規追加
シフト形式 連番で古いファイルの ファイル名がシフトする 形式	SampleLog.000 SampleLog.001 SampleLog.002 SampleLog.003 : SampleLog.098 SampleLog.099	SampleLog.000 [新規] SampleLog.001 SampleLog.002 SampleLog.003 SampleLog.004 : SampleLog.099 [破棄 (前回SampleLog.099)]	←次回監視時のSampleLog.000が新規追加 ←前回監視時のSampleLog.000は、 次回監視時にはSampleLog.001にシフト (前回SampleLog.001以降も同様にシフト) ←常にファイルが追加され、一定数を超えた 古いファイル(前回SampleLog.099)は シフトされずに破棄される。

- ワイルドカード指定の場合、前回監視情報を持つファイルかどうかを、前回監視情報にあるファイル名と、該当監視ファイル名を比較して自動で判別します。
 - 検索対象ファイルが前回監視情報を持つ場合
差分監視を行います。
 - 検索対象ファイルが前回監視情報を持たない場合
全文検索を行います。
- ワイルドカード指定時における、複数の対象ファイルが存在した場合の検索順序
 - ワイルドカード指定時の検索順序と、上記の前回監視情報については、関係ありません。
 - 同時に複数ファイルが書き込まれた場合、ファイルシステムの順序に従って検索順序が決まります。
- ワイルドカード指定時における、リング形式でローテーションする複数の対象ファイルが存在した場合の検索順序
 - リング形式でローテーションする際に、同時にファイルを複数リング形式の最初のファイルに戻すテキストログの場合、検索順序の最後が前回監視情報のあるファイルになることがあります。
例："Sample.SUN"~"Sample.SAT"で、"Sample.SAT"から"Sample.SUN"に戻る場合、次回の監視はリング形式の最初のファイル"Sample.SUN"の先頭から監視が実行されます。
 - リング形式のローテーションファイルで日が跨る異なるファイルの場合、ファイルは上書き保存する形式にのみ対応しています。
例："Sample.SUN"~"Sample.SAT"まで記述して、再び"SampleLog.SUN"に書き込む場合、"SampleLog.SUN"は、前回のデータを消去して記述する必要があります。

監視対象ファイルが存在しなかった場合の監視動作

監視対象のファイル（单一指定時、ワイルドカード指定時）が存在しなかった場合の監視結果は、下記のとおりです。

- ステータス：正常
- 値：(N/A)
- コード：1

検索開始位置で"前回の監視終了位置から"ラジオボタンを選択した上で、監視が失敗した場合の監視動作

本監視動作を満たす条件は、「設定」タブの検索開始位置で"前回の監視終了位置から"ラジオボタンを選択しており、かつ、ファイルが存在しなかった以外の何かしらの理由で監視が失敗した場合です。

- "前回の監視終了位置から"ラジオボタンを選択した場合、初回の監視動作は最終ファイル位置を検索するため監視を行わず、実際の監視は2回目以降より実行します。
- "前回の監視終了位置から"ラジオボタン選択時の詳細は、[「設定」タブ](#)を参照してください。

初回のテキストログ監視時に、何かしらの理由で監視が失敗した場合、次回以降の監視でファイルを検知できた時点を起点として以降の検出を行います。

1度でも監視が成功している場合、かつ、仮に何かしらの理由でそれ以降の監視が失敗した場合、次回監視時に監視が成功した際には、差分を正常に検出した上で監視結果を返します。

- 上記を実際の監視に当てはめた動作例：
 1. 1回目の監視時、監視対象ファイルが排他制御されており監視が失敗
 2. 2回目が初回監視となり、次回以降の監視の起点を特定
 3. 3回目の監視は2回目の起点より監視を行い成功したため、最終ファイル位置を更新
 4. 4回目の監視で再度ファイル排他中になり監視が失敗
 5. 5回目の監視は3回目の最終ファイル位置より監視を行い成功したため、最終ファイル位置を更新

監視回数	監視対象ファイル		監視結果		
	中身	状態	値	コード	補足開設
1回目	AAA BBB	排他中	(N/A)	0x80070020	左記コードはファイル排他時のエラーコードであり、エラー原因により出力されるコードが異なります。
2回目	AAA BBB CCC	排他解除	0	0	・初回の監視時には最終ファイル位置の検索のみを行い、監視自体は行わないため、値は"0"になります。 ・CCCの後に次回以降の監視起点を設定します。
3回目	AAA BBB CCC DDD	排他解除	1	0	・3回目の監視は、CCC終了時点が監視の起点のため、DDDを検知し、値は"1"になります。 ・DDDの後に次回以降の監視起点を設定します。
4回目	AAA BBB CCC DDD EEE	排他中	(N/A)	0x80070020	左記コードはファイル排他時のエラーコードであり、エラー原因により出力されるコードが異なります。

5回 目	AAA BBB CCC DDD EEE FFF	排他 解除	2	0	<ul style="list-style-type: none">・5回目の監視は、3回目の監視成功時のDDD終了時点が監視の起点のため、EEE、FFFを検知して値は“2”になります。・FFFの後に次回以降の監視起点を設定します。
---------	--	----------	---	---	---

(16) BOMヒストリー監視

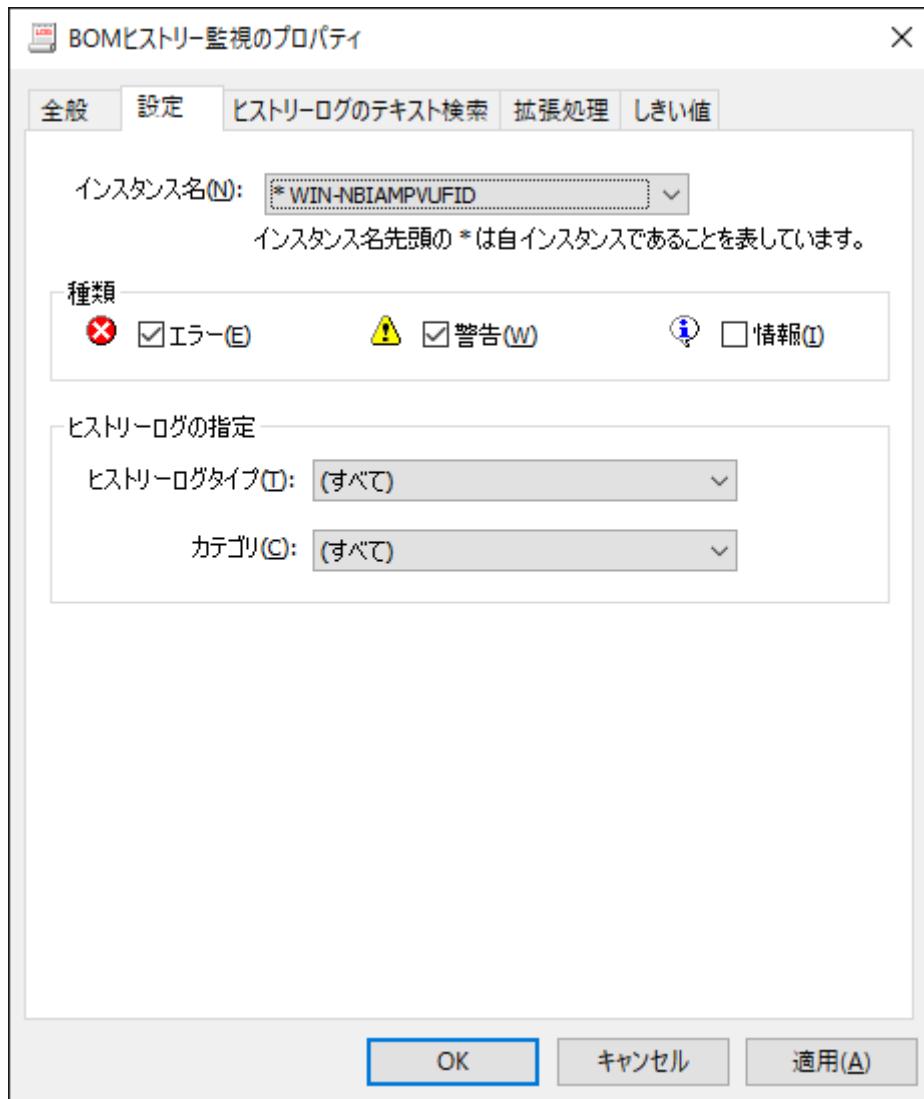
BOMヒストリー監視では、BOM 8.0が outputするヒストリーログを監視します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

BOMヒストリー監視では、監視間隔の既定値が5分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. "インスタンス名"フィールドでは、監視したいヒストリーログを保有する"インスタンス"を指定します。

- BOMマネージャーに複数のインスタンスを登録している場合、BOMヒストリー監視は他のインスタンスのヒストリーログも監視対象にすることができます。その際、BOMヒストリー監視を設定する自分自身のインスタンスが簡単に識別できるよう、自インスタンス名の先頭には"*"が表示されます。
- 代理監視など、同一コンピューター内に存在する別のインスタンスも監視対象に設定することができます。

2. "種類"フィールドでは、BOM 8.0が outputするヒストリーログのうち、監視対象とする"種類"を設定します。

3. "ヒストリーログタイプ"フィールドは、既定値で" (すべて) "です。

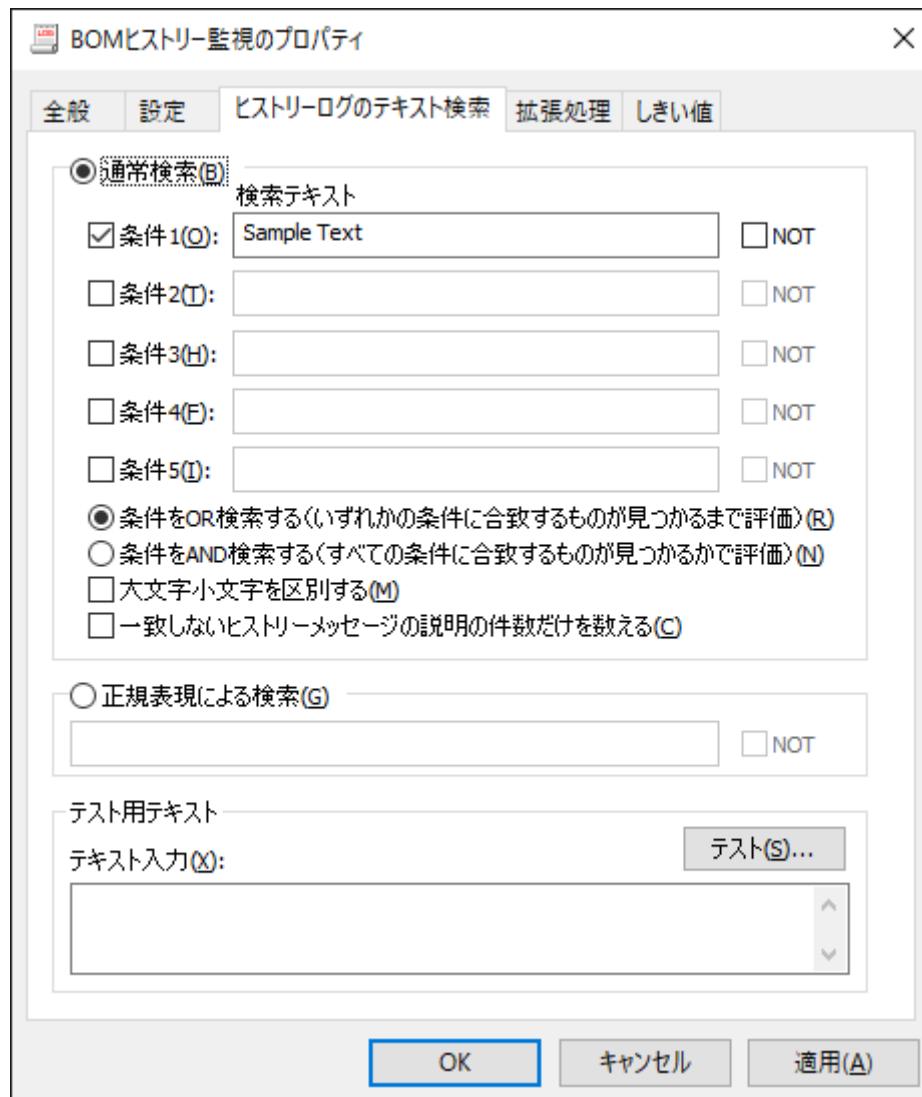
ヒストリーログのタイプは、"サービス"、"監視"、"アクション"の3タイプより選択できます。

4. "カテゴリ"フィールドは、既定値で" (すべて) "です。

手順3.で、"ヒストリーコグタイプ"を指定した場合に、"ヒストリーコグタイプ"ごとに異なる"カテゴリ"を選択できます。

- ・ "サービス"を選択した場合、"(すべて)"、"サービス"、"スケジューラ"から選択できます。
- ・ "監視"を選択した場合のプルダウンは、"(すべて)"、"監視"のみです。
- ・ アクションを選択した場合、"(すべて)"、"アクション"、"通知"から選択できます。

C. 「ヒストリーコグのテキスト検索」タブ



1. "通常検索"ラジオボタンを選択して下記を設定すると、テキスト検索が行えます。設定できる内容は下記のとおりです。

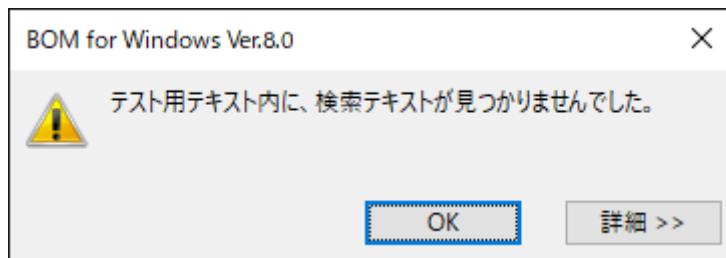
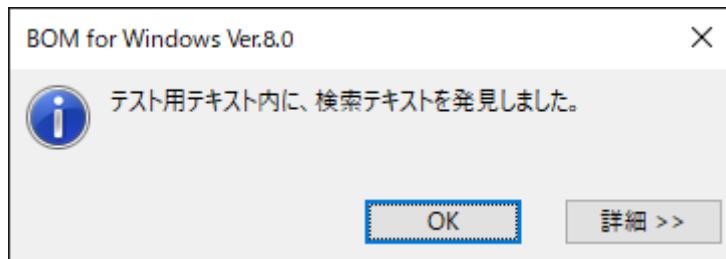
項目	説明
"条件1"～"条件5"	チェックをつけて検索キーワードを入力します。 条件1には既定で"sample text"という文字列が入力されていますが、これは削除して入力してください。
NOT	検索テキストに合致しないものを検索したい場合にチェックを入れます。 条件ごとの判定であるため、例えばNOT"1" or NOT"2" は、"(NOT"1") or (NOT"2")"という条件になり、"1"だった場合はNOT"2"で検知され、"2"だった場合はNOT"1"で検知されます。 1でも2でもない値を検知させたい場合にはNOT"1" and NOT"2"で指定します。
条件をOR検索する	"条件1"～"条件5"までの条件が1つでも合致した際に抽出したい場合に選択します。

項目	説明
条件をAND検索する	"条件1"～"条件5"までの条件が5つすべて合致した際に抽出したい場合に選択します。
大文字小文字を区別する	半角英文字の大文字小文字を区別して検索を行いたい場合にチェックを入れます。
一致しないイベント説明の件数だけを数える	"条件1"～"条件5"と、"条件をOR検索する"、あるいは"条件をAND検索する"で設定した検索キーワードに一致しない件数だけを抽出したい場合にチェックを入れます。

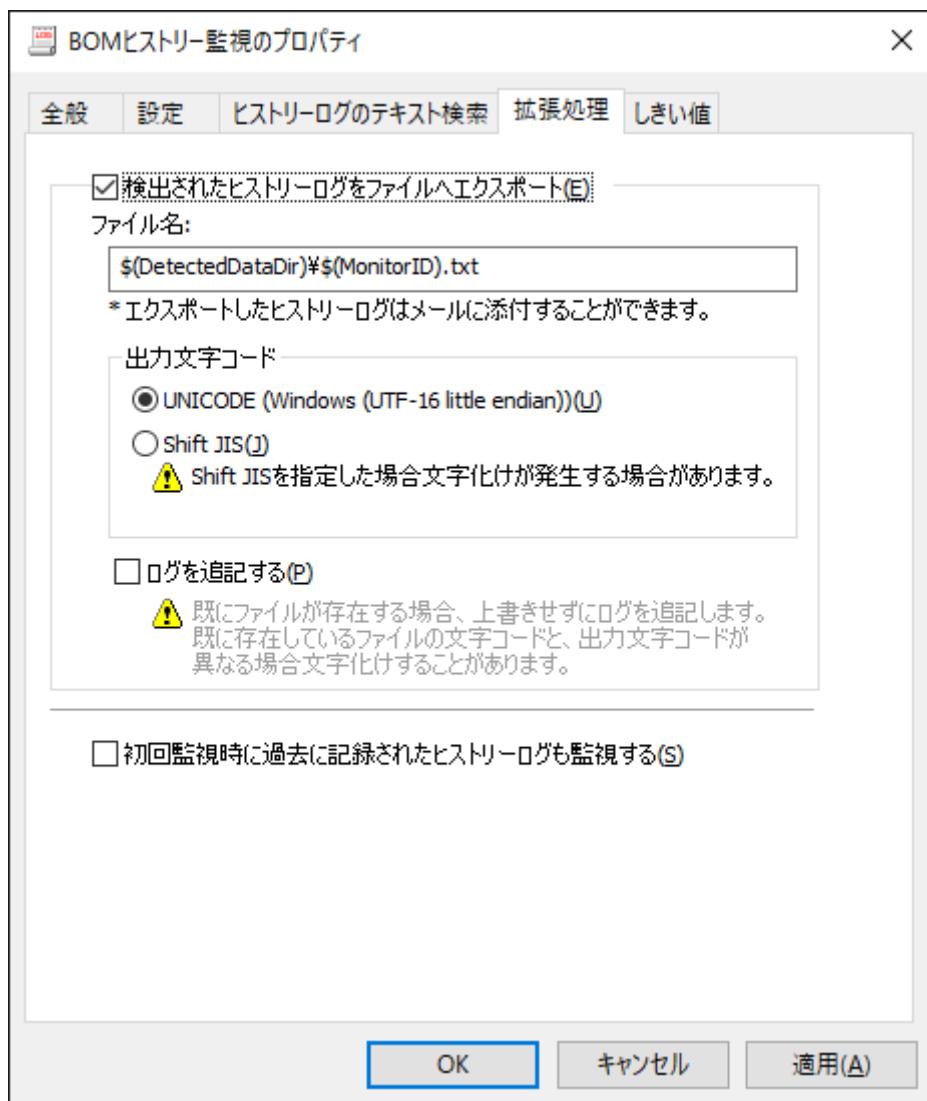
2. "正規表現による検索"ラジオボタンを選択し、"正規表現"フィールドにキーワードを入力すると（最大文字数は1024文字）正規表現による検索が行えます。

- 正規表現の解説とパターンマッチ文字列のリストと特殊文字のリストは、[「イベント説明のテキスト検索」タブ](#)を参照してください。

3. "テキスト入力"フィールド下部の空の"テキストボックス"に内容を入力して、[テスト...]ボタンをクリックすると、「ヒストリーログのテキスト検索」タブの検索条件で、テスト実行を行うことができます。



D. 「拡張処理」タブ



監視結果を調査する際や、監視結果を電子メールで送信する場合、"検出されたヒストリーコグをファイルへエクスポート"にチェックを入れることで、検出されたヒストリーコグを下記のとおりテキストファイルに出力することができます。

- 出力されるテキストファイル

下記のフォルダー・ファイル名で、テキストファイルを出力することができます。

出力先フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Instance\[インスタンス名]\DetectedData\
テキストファイル名 : GRPxxMONyy.txt (xx:グループID、yy:監視項目IDを表します。)

- "出力文字コード"は、"UNICODE"ラジオボタンもしくは"Shift JIS"ラジオボタンより選択することができます。
- BOMヒストリー監視で出力できるテキストファイルの最大行数は、ファイルの先頭から10万行です。

エクスポートするファイルが既に存在する場合、古いファイルは上書きしますが、"ログを追記する"チェックボックスにチェックを入れることで古いファイルに追記することができます。

- この機能を使用すると、エクスポートするファイルが肥大化する場合があるため注意が必要です。

"初回監視時に過去に記録されたイベントログも監視する"チェックボックスにチェックを入れると、BOMヒストリー監視項目を新規作成した際の初回監視時にのみ、今までに出力されたすべてのBOMヒストリーコグを監視範囲に含めます。

- この機能を使用すると、ヒストリーログファイルのサイズによっては初回監視時の実行時間が長くなるため、注意が必要です。

E. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999") を入力します。

しきい値の判定条件で"より小さい"を選択した場合には、数値に"0"を入力することができません。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(17) Ping監視

監視対象コンピューターから他のネットワーク機器や他のコンピューターに対してPingによってネットワーク状態を監視します。

※ 代理監視を使用している場合、Ping監視は代理監視元コンピューターから実行されます。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

Ping監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. "監視先"フィールドには、Ping監視対象のコンピューターやネットワーク機器などの"IPアドレス"か"コンピューター名"を入力します。

2. "監視設定"は"平均レスポンス時間"ラジオボタンと"パケットロスト率"ラジオボタンのどちらかを選択します。

- "平均レスポンス時間"ラジオボタンを選択した場合

Pingを"監視先"にリクエスト回数分実行した後のレスポンス時間の平均値を取得します。

Pingを実行する条件は選択した"取得タイプ"フィールドの下の"パケットサイズ"、"タイムアウト時間"、"リクエスト回数"、"インターバル"を指定することによって設定し、疎通確認に成功した際のレスポンス時間から平均を取得します。

このため、リクエスト回数で指定されたすべてのPingが失敗（タイムアウト）した場合、監視はしきい値に関わらず"失敗"となります。

- "パケットロスト率"ラジオボタンを選択した場合

Pingを"監視先"に実行した後のレスポンスでリクエスト回数のうち何回ロストしたかを%で取得します。

3. "パケットサイズ"、"タイムアウト時間"、"リクエスト回数"、"インターバル"を指定します。指定可能な値は下記のとおりです。

項目	設定可能な値
パケットサイズ	1~65468
タイムアウト時間	100~60000
リクエスト回数	1~100
インターバル	100~60000

4. [現在値の取得]ボタンをクリックすると、"監視設定"フィールドの条件で値を取得します。

5. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値（パケットロスト率："0"~"100"／平均レスポンス時間："0"~"99999"）を入力します。

しきい値の判定条件で"より小さい"を選択した場合には、数値に"0"を入力することができません。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

6. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(18) ポート監視

監視対象コンピューターのTCP・UDPポートを監視します。

ポート監視では他の監視項目と違い、文字列が監視結果となっているため'ログの表示'のグラフ表示はできません。

※ UDPポートを監視する場合、監視元コンピューターのWindows ファイアウォールをOFFにするか、Windows ファイアウォールの受信の規制でICMPパケットを例外に追加する必要があります。

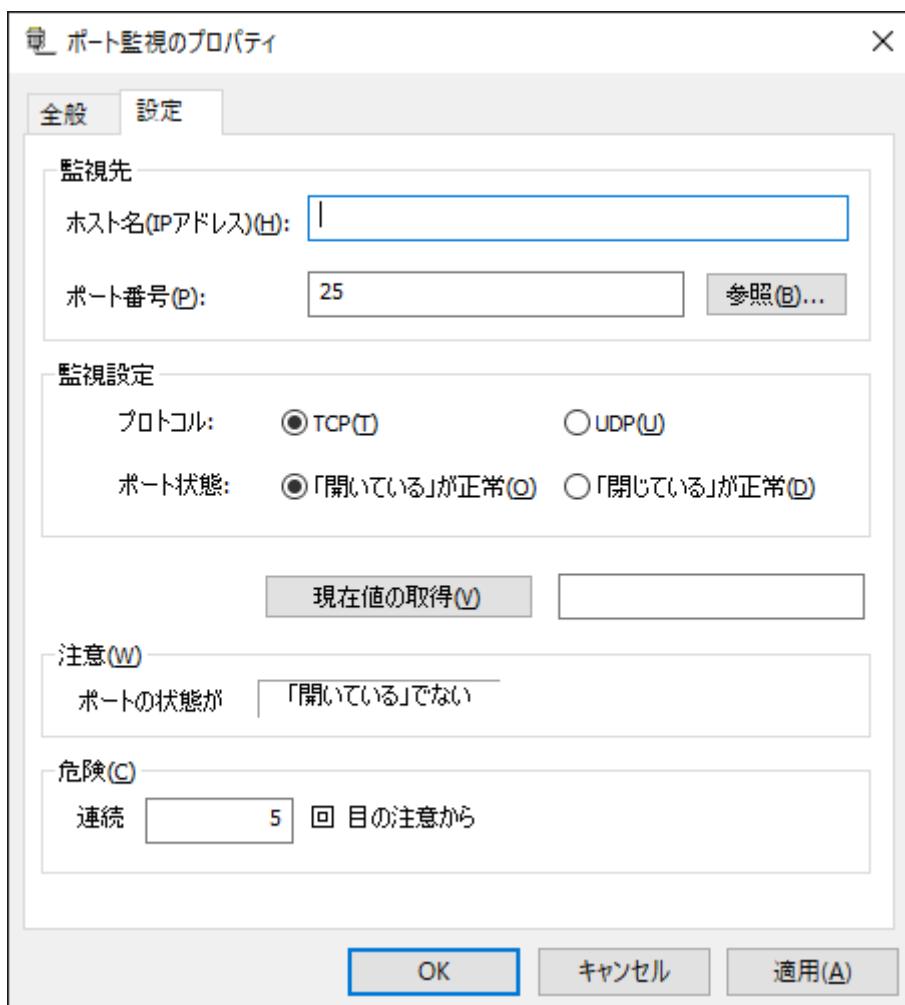
※ 代理監視を使用している場合、ポート監視は代理監視元コンピューターから実行されます。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

ポート監視では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. "監視先"の"ホスト名"フィールドに、ポート監視を実行する"ホスト名"あるいは"IPアドレス"を入力します。
 - 複数ネットワークカードがある場合、あるいは同一ネットワークカードに複数のIPアドレスを割り振っている場合には、監視対象のIPアドレスを指定してください。
2. "ポート番号"に、監視対象の"ポート番号"を指定します。
3. [参照]ボタンをクリックすると、ウェルノウンポート一覧が表示されます。
4. "監視設定"に、監視対象の"プロトコル"の種類と"ポート状態"を指定します。
5. [現在値の取得]ボタンをクリックすると、「設定」タブで指定した"プロトコル"の"ポート番号"が、"開いている"か"閉じている"かを確認することができます。

6. "注意"フィールドには、手順4.で設定した"ポート状態"の条件に対する逆の状態を"注意"条件として自動設定します。
7. "危険"フィールドのしきい値に、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定します。
 - 連続回数に指定できるのは、"1"~"99"の数値です。

C. UDPポート監視時の注意点

ポートの状態を監視する際は、UDPパケットを送信したのち、順次下記の判定を行っています。

1. ICMP到達不能メッセージ (type-3) を受信した場合
 - ポート"閉"状態
2. 受信タイムアウトした場合
 - Ping (echo request) を行い、Ping応答 (echo reply) があった場合
 - ポート"開"状態
 - Ping (echo request) を行い、Ping応答 (echo reply) がない (タイムアウト) の場合
 - ポート"閉"状態

(19) インストールソフトウェア変更監視

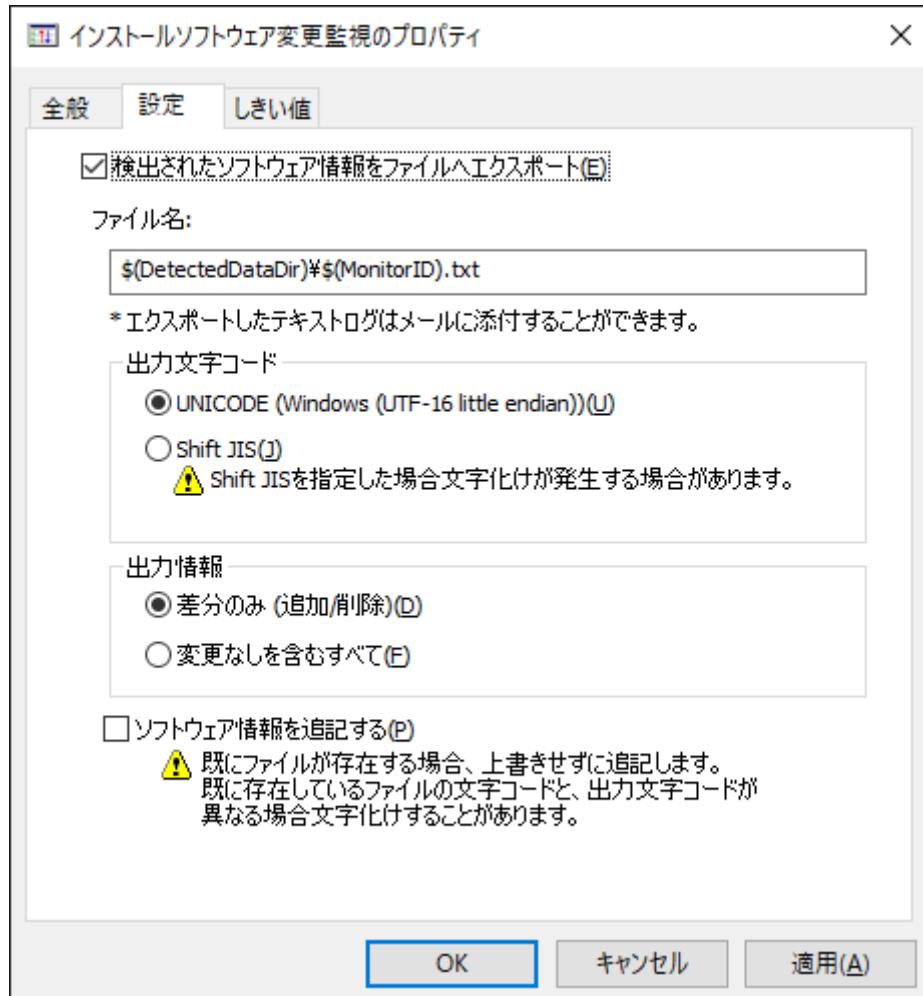
監視対象コンピューターのインストールされているソフトウェアの差分を検出し監視します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

インストールソフトウェア変更監視では、監視間隔の既定値が1日に指定されています。

B. 「設定」タブ



監視結果を調査する際や、監視結果を電子メールで送信する場合、"検出されたソフトウェア情報をファイルへエクスポート"にチェックを入れることで、検出されたソフトウェア情報を下記のとおりテキストファイルに出力することができます。

- 出力されるテキストファイル

下記のフォルダー・ファイル名で、テキストファイルを出力することができます。

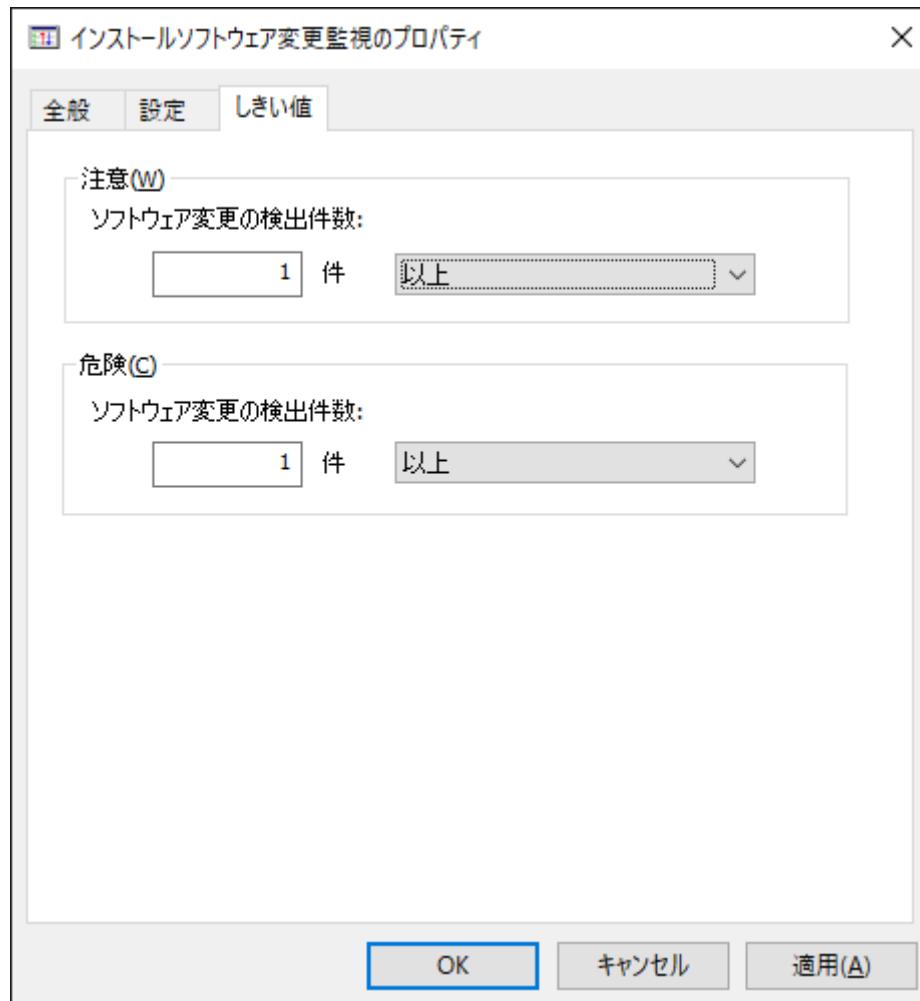
出力先フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Instance\[インスタンス名]\\${DetectedData}
テキストファイル名 : GRPxxyMONyy.txt
(xx:グループID、yy:監視項目IDを表します。)

- "出力文字コード"は、"UNICODE"ラジオボタンもしくは"Shift JIS"ラジオボタンより選択することができます。
- "出力情報"エリアの"差分のみ (追加/削除)"ラジオボタンもしくは"変更なしを含むすべて"ラジオボタンで、エクスポートファイルに出力する内容を指定することができます。

エクスポートするファイルが既に存在する場合、古いファイルは上書きしますが、"ソフトウェア情報を追記する"チェックボックスにチェックを入れることで古いファイルに追記することができます。

- この機能を使用すると、エクスポートするファイルが肥大化する場合があるため注意が必要です。

C. 「しきい値」タブ



- "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999") を入力します。

しきい値の判定条件で"より小さい"を選択した場合には、数値に"0"を入力できません。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。

- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(20) Windows Update監視

監視対象コンピューターのインストールされているWindows Update状況を監視します。

※ 本監視は代理監視機能に対応していません。ローカル監視のみ対応しています。

監視結果は、以下のフォルダーにcsv形式で格納されます。

フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Temp

また、監視結果はCsvViewerを使用して確認することも可能です。CsvViewerの詳細については、'[CsvViewerについて](#)'を参照してください。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

Windows Update監視では、監視間隔および開始時刻の設定が、以下のように指定されています。

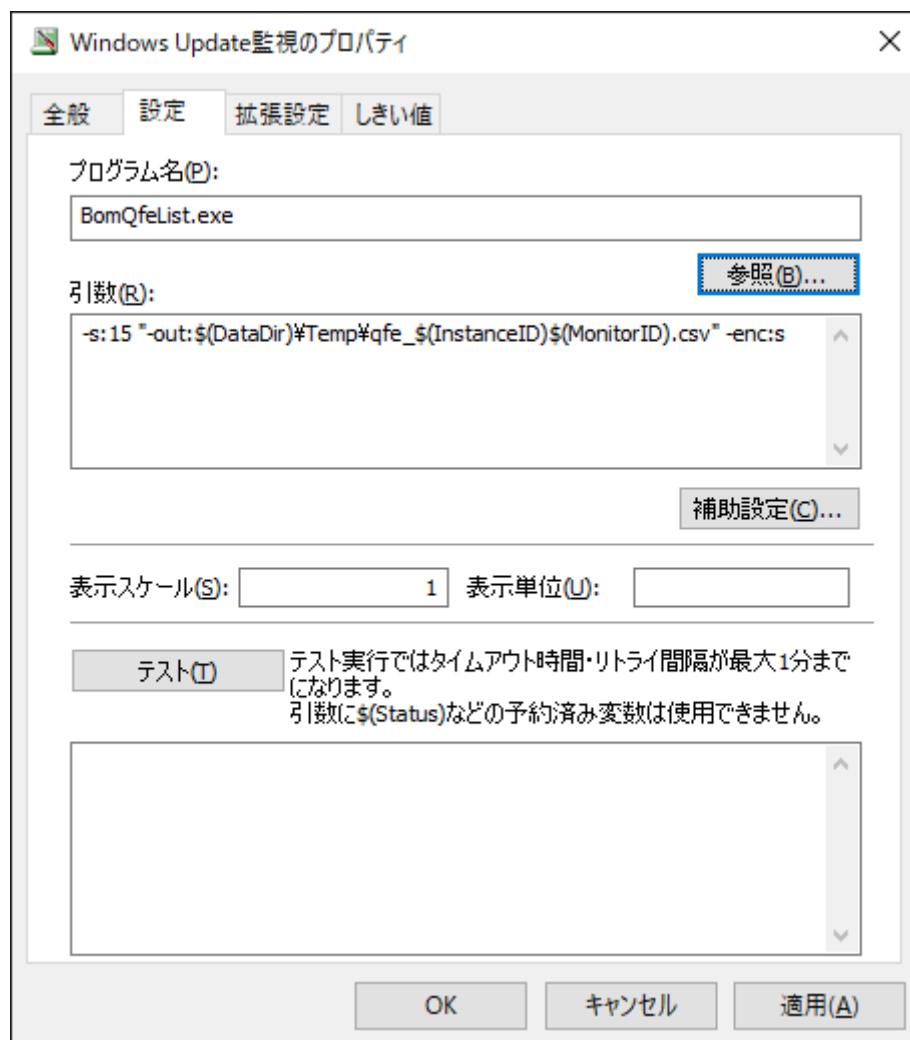
- 間隔 : 7日
- 開始時刻
 - "指定時刻"を選択
 - 日付 : 2016/08/28
 - 時刻 : 0:00:00
 - "監視間隔を固定する"チェックボックスにチェック
 - "監視予定時刻を過ぎた場合に臨時実行する"チェックボックスはチェックなし

これは「2016/08/28 0:00:00（日曜日）」から、7日間隔固定で監視を実行する設定です。臨時実行は設定されていないため、どのようなタイミングで監視を開始しても、毎週日曜日の0:00に監視が実行されることを意味します。

B. 「設定」タブ

「設定」タブの設定内容は、既定値から変更しないでください。

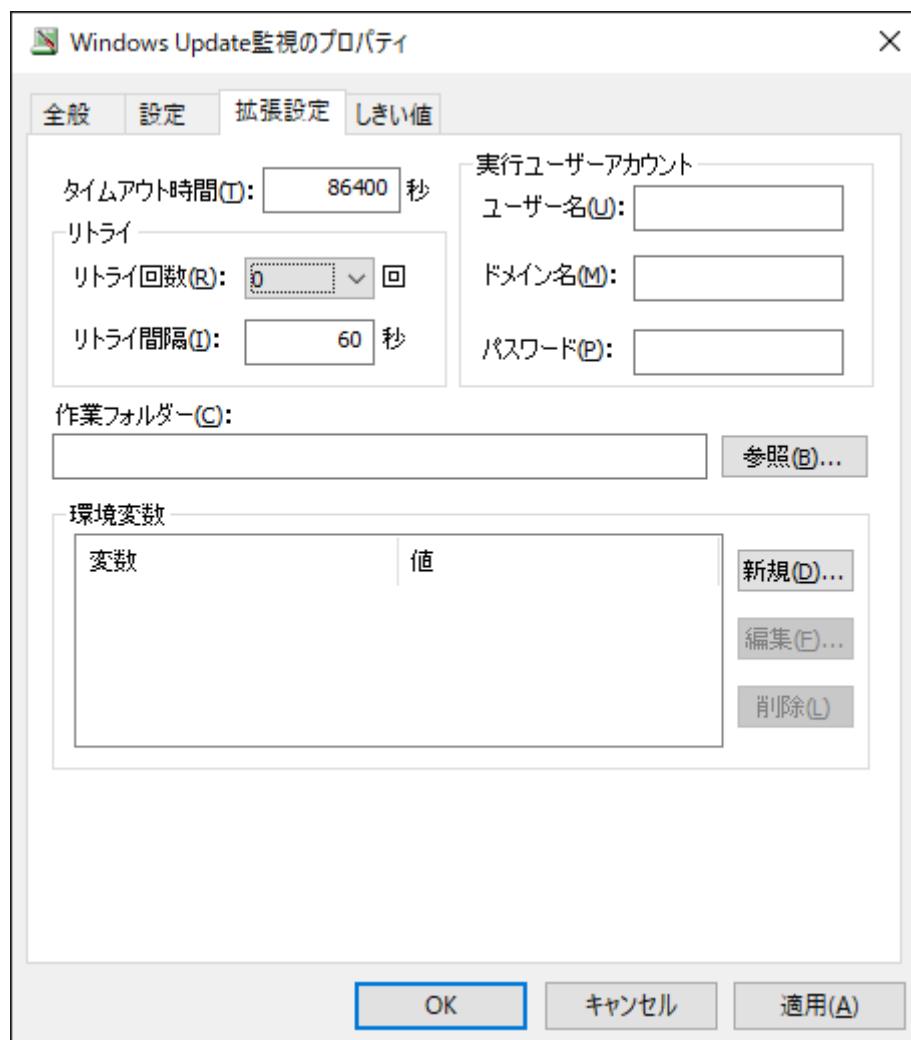
変更された場合、サポート対象外となります。



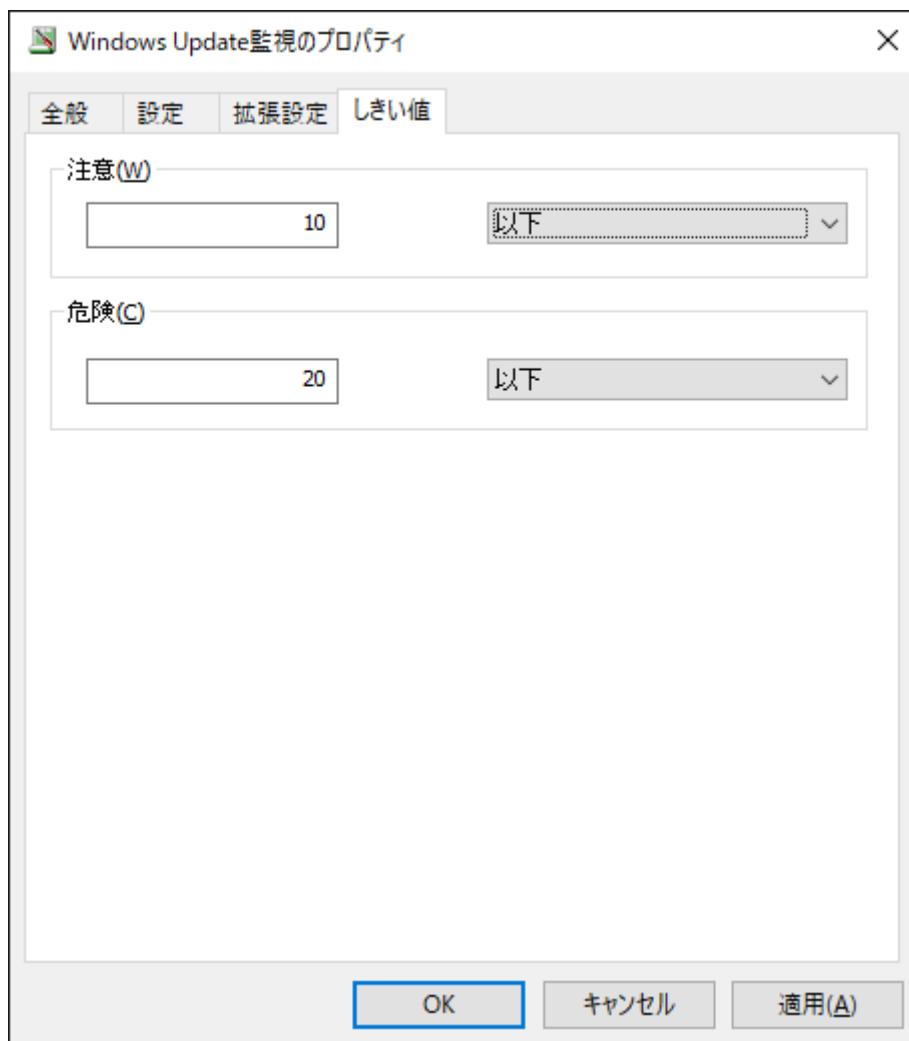
C. 「拡張設定」タブ

「拡張設定」タブの設定内容は、既定値から変更しないでください。

変更された場合、サポート対象外となります。



D. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(21) AWS S3 ストレージ容量監視

Amazon S3および、Amazon S3のAPIに完全準拠するAmazon S3互換ストレージを監視対象とし、パケットのサイズ、フォルダーおよびファイルのサイズ、または数を監視します。

※ Amazon S3互換ストレージについて、API準拠をうたうすべてのストレージでの動作を保証するものではありません。

弊社では、クラウディアン株式会社のCLOUDIAN HYPERSTOREについて動作確認を取っており、今後の対応確認情報は弊社ウェブサイトで随時公開します。

※ プロキシサーバーを利用する場合の資格情報の設定は、基本認証、NTLM認証をサポートしています。

※ アマゾン ウェブ サービスのAmazon Simple Storage Service 開発者ガイド (API Version 2006-03-01) に記載されている、「使用しない方がよい文字」を含むフォルダ名、ファイル名には非対応です。

※ この監視ではListリクエストでフォルダー・ファイルのメタデータを取得しており、このリクエストで取得できるメタデータ件数に上限（1回あたり1000件）があります。このため、監視対象のパケット、フォルダー配下のフォルダ数、ファイル数に応じてリクエスト数が増加します。

Listリクエスト数は次の式で計算できます。

"Listリクエスト数" = "指定したパケットまたはフォルダー配下のフォルダーとファイル数の合計" ÷ 1000 （端数切り上げ）

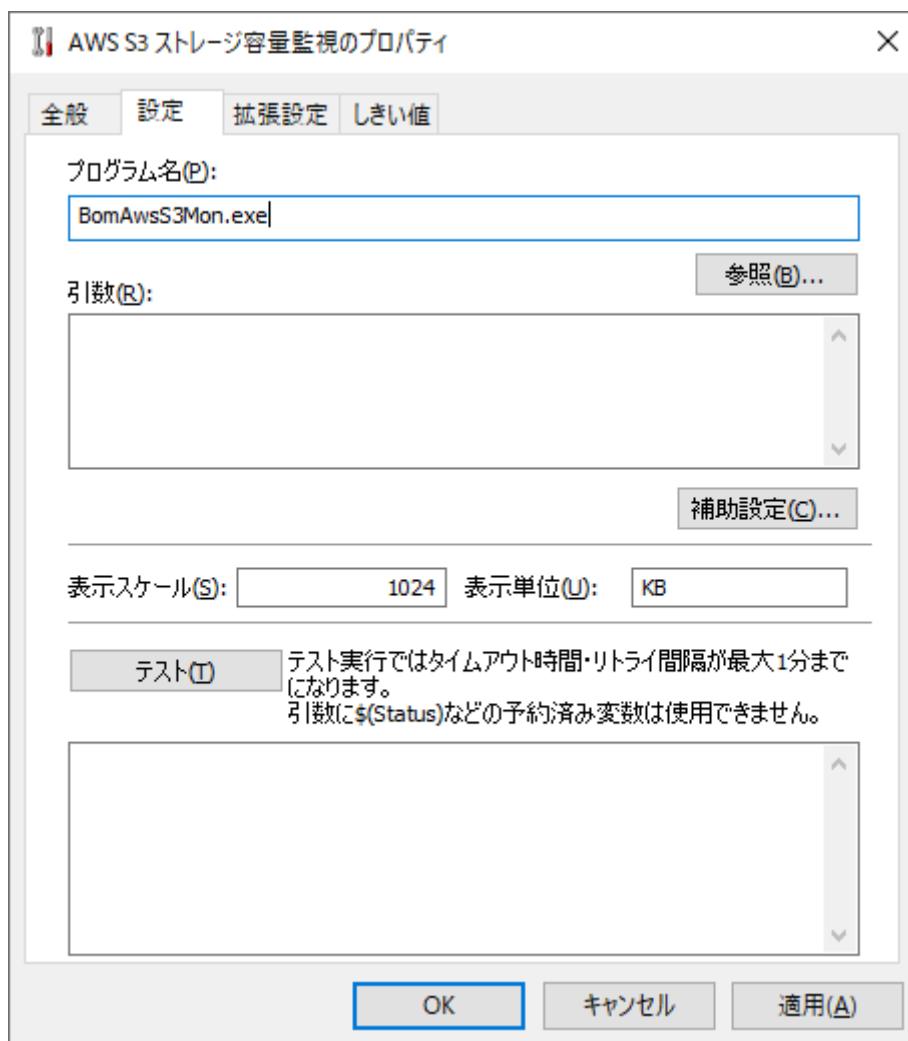
A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

AWS S3 ストレージ容量監視では、監視間隔の既定値が1日に指定されています。

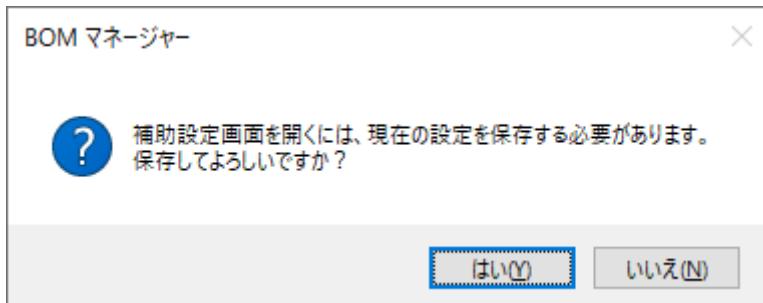
B. 「設定」タブ

AWS S3 ストレージ容量監視の詳細な設定は、「設定」タブの[補助設定]ボタンをクリックすると表示される、「[AWS S3 ストレージ容量監視」補助設定](#)画面から実施します。



項目名	説明
"プログラム名"フィールド	あらかじめ"BomAwsS3Mon.exe"と入力されています。この値は変更しないでください。
"引数"フィールド	本監視では詳細な設定を後述の補助設定画面で行い、設定された内容は自動的に"引数"フィールドへ反映されます。 この画面では"引数"フィールド内の入力および編集を行わないでください。
"表示スケール"フィールド	監視で取得された値を"表示スケール"フィールドの入力値で割った数値を基に監視が実行されます。 既定値は"1024"ですが、特にファイル数およびフォルダー数の実数を監視する場合は"1"に変更してください。
"表示単位"フィールド	表示に使用する単位を入力します。 既定値は"KB"（キロバイト）ですので、ファイル数およびフォルダー数の実数を監視する場合は適宜変更してください。
[テスト]ボタン	クリックすると、「設定」タブ、「拡張設定」タブの両方の設定を加えてプログラムをテスト実行します。テスト実行ではタイムアウト時間、リトライ時間が最大1分となります。

項目名	説明
[補助設定]ボタン	クリックすると以下の要求が表示され、[はい]ボタンをクリックすると設定の保存後に「AWS S3 ストレージ容量監視」の補助設定画面が表示されます。



C. 「AWS S3 ストレージ容量監視」補助設定



- "AWS IAMユーザー"フィールド (必須)

Amazon S3および、Amazon S3互換ストレージについて、接続に必要なユーザー情報を入力します。

(参考情報)

Amazon S3ストレージの場合、IAMでアクセスキーを作成し、"アクセスキーID"フィールドおよび、"シークレットアクセスキー"フィールドに入力します。IAMでのアクセスキー作成については、2025年1月8日現在、アマゾンウェブサービスの以下のサイトに該当の手順が記載されています。

- "AWS Identity and Access Management ユーザーガイド - IAM ユーザーのアクセスキーを管理します。"
https://docs.aws.amazon.com/ja_jp/IAM/latest/UserGuide/id_credentials_access-keys.html

- "プロキシ設定"フィールド (任意)

プロキシを使用して接続する場合、"ホスト"フィールドおよび、"ポート"フィールドの入力は必須です。またプロキシで認証が必要な場合は"ユーザー"フィールドおよび、"パスワード"フィールドに入力してください。

- "監視設定"フィールド（選択必須）

監視対象をラジオボタンで選択します。

- パケットサイズ

パケット配下のすべてのファイルの合計サイズを監視

- フォルダーサイズ

サブフォルダーを含む、指定したフォルダー配下のすべてのファイルの合計サイズを監視

- ファイルサイズ（1ファイルのみ）

指定したファイルのサイズを監視

- フォルダーナンバー

サブフォルダーを含む、指定したフォルダー配下のすべてのフォルダーナンバーの合計を監視

- ファイル数

サブフォルダーを含む、指定したフォルダー配下のすべてのファイル数の合計を監視

- "監視対象"フィールド（必須）

- "リージョン/エンドポイント"フィールド

リクエスト先のAmazon S3のリージョンコード、またはAmazon S3互換ストレージのエンドポイントを入力します。

※ エンドポイントを指定する場合は、必ずhttps://から始まる文字列を入力してください。

例1) リージョンコードでアジアパシフィック(東京)を指定 : ap-northeast-1

例2) CLOUDIAN HYPERSTOREでエンドポイントを指定 : https://xxxxxx.s3.cloudian.jp

- （参考情報）

Amazon S3における各リージョンの詳細なコードについては、2025年1月8日現在、以下のAmazon ウェブ サービスのリファレンスで確認できます。

- "AWS 全般のリファレンス - リージョンエンドポイント"

https://docs.aws.amazon.com/ja_jp/general/latest/gr/rande.html#region-endpoints

- "パケット"フィールド

監視対象を含むパケット名を入力します。

- "対象フォルダー"フィールド

"監視設定"フィールドで"フォルダーサイズ"、"フォルダーナンバー"、"ファイル数"を選択したときのみ表示されます。

監視対象とするAmazon S3、またはAmazon S3互換ストレージのフォルダーを入力します。階層はスラッシュで区切ってください。

記載例 : saytech/bomforwin/demo

- "対象ファイル"フィールド

"監視設定"フィールドで"ファイルサイズ（1ファイルのみ）"を選択したときのみ表示されます。

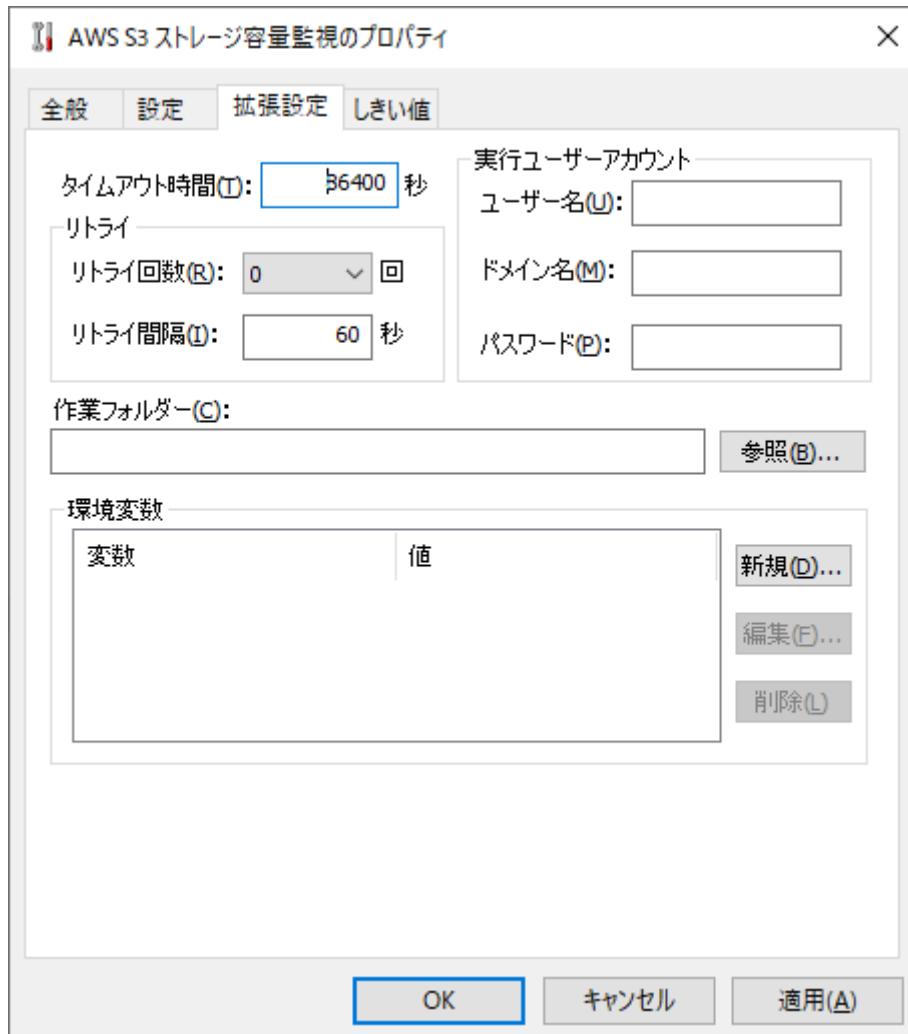
監視対象とするファイルを入力します。階層はスラッシュで区切ってください。

各フィールドに必要事項を入力して[OK]ボタンをクリックすると、補助設定画面は閉じます。

継続して本監視項目の設定を行う場合は、改めてプロパティを開いてください。

D. 「拡張設定」タブ

「設定」タブで指定したプログラムの実行条件を設定します。



- "タイムアウト時間"フィールド

"0"~"2000000"までの整数を設定でき、既定値は"86400"です。

"0"を指定すると必ずタイムアウトします。

- "リトライ"フィールド

"リトライ回数"は"0"~"9"までの整数を指定でき、"0"を指定するとリトライしません。リトライは以下の場合に実行されます。

- プロセスの作成に失敗した場合。
- プロセス待機のタイムアウトが発生した場合。
- プロセス待機が失敗した場合。
- プロセスが"0"以外の終了コードを返した場合。
- 監視結果の出力を読み取れなかった場合。

- "実行ユーザーアカウント"エリア

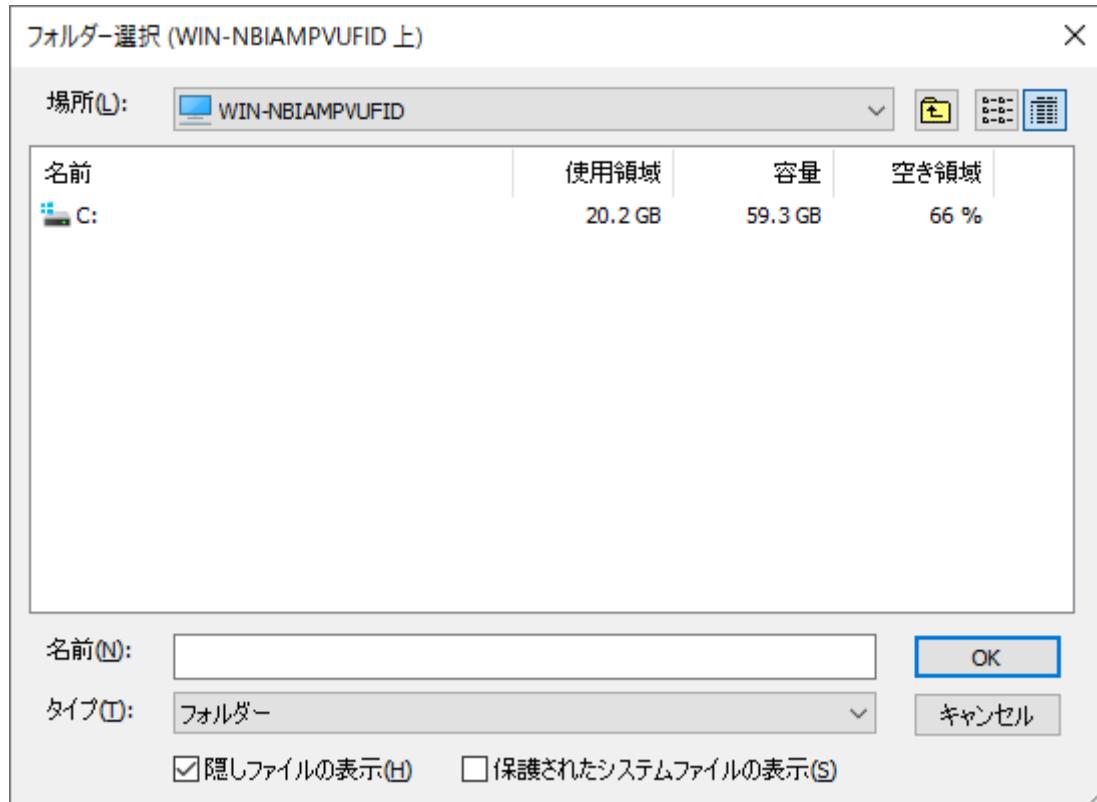
"監視実行プログラム (BomAwsS3Mon.exe) "を実行する際の"ユーザー名"、"ドメイン名"、"パスワード"を入力します。

- 実行ユーザー アカウント指定時は、UAC をオフにする必要があります。詳細は、' [ユーザー アカウント制御 \(UAC\)](#) 'を参照してください。
- 実行ユーザー アカウントは、Administrator もしくは Administrators グループのユーザー アカウントである必要があります、それ以外のユーザー アカウントを指定した場合、監視が失敗します。

- "作業フォルダー" フィールド

プログラム実行する際の実行フォルダーを下記のどちらかの手段で設定します。

- "作業フォルダー" を、絶対パスで入力
- [参照..] ボタンをクリックし、"フォルダー選択" 画面より "作業フォルダー" を選択



※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、フォルダー選択画面にドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。

このような場合は、指定する作業フォルダーを絶対パスで直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合は、有効化することでドライブが表示されるようになります。

- "隠しファイルの表示" チェックボックスもしくは "保護されたシステムファイルの表示" チェックボックスにチェックを入れると、条件に応じた該当ファイルが表示されます。

- "環境変数" フィールド

本監視項目では使用しないでください。

E. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(22) iLOログ監視

iLOを搭載した監視対象コンピューターに接続し、iLOが outputするIntegrated Management Log (IML) の件数を監視します。

※ 本監視項目は、iLO 5のみに対応します。

※ 監視対象とするログはIntegrated Management Log (IML) のみです。iLO Event Log (IEL) は対象となりません。

※ 時刻が[NOTSET]となっているログは監視対象外です。

※ iLO ログ監視は、初回実行の際、監視の起点とするために必要な情報（永続化データ）の取得のみをiLOから行い、2回目以降の実行で前回実行時からの差分を監視することによって対象のログを検知します。そのため、初回の実行は情報の取得に成功した時点で必ず「正常」ステータスとなります。

※ iLO ログ監視では、永続化データを保持しているか否かによって、初回実行か2回目以降の実行かを判断します。そのため、もし監視先のコンピューターを変更する場合（IPアドレスが同一でも、コンピューターが異なる場合を含みます。）は、当該の監視項目で"ログのクリア"を行う必要があります。ログのクリア方法については、[各種ログのクリア](#)を参照してください。

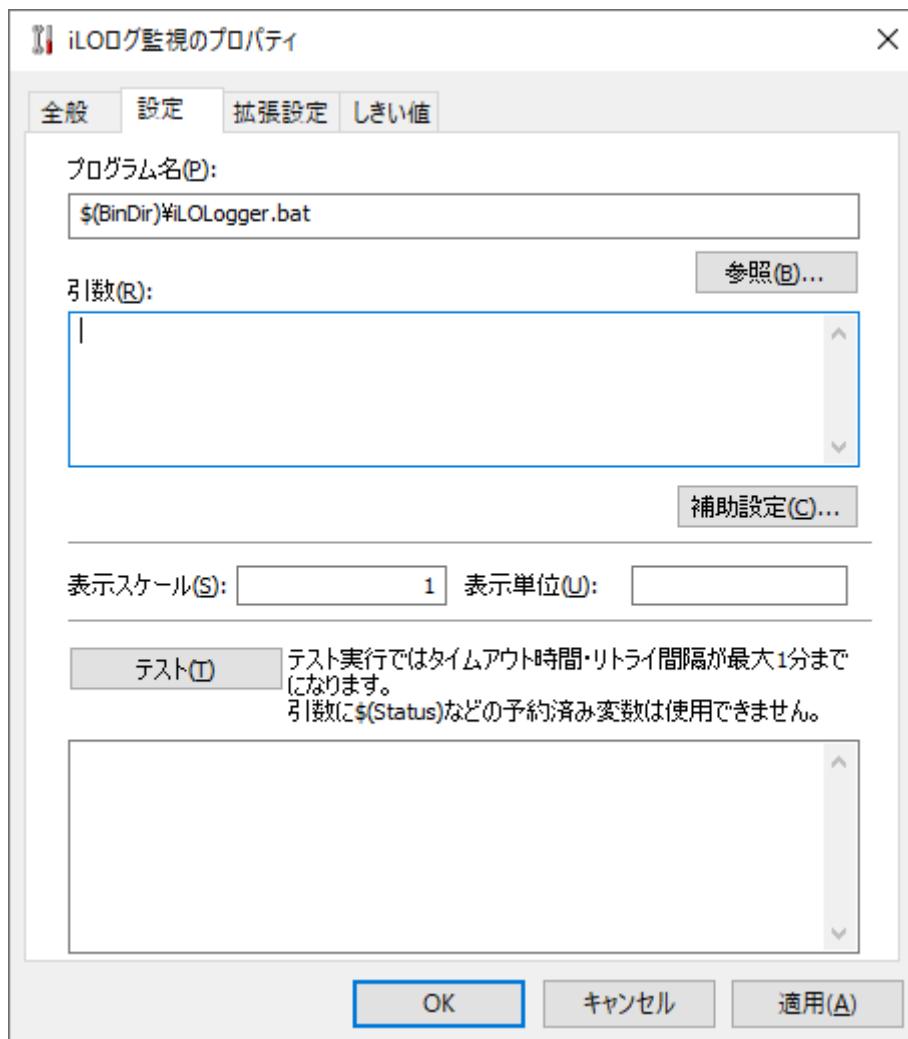
A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

iLOログ監視では、監視間隔の既定値が10分に指定されています。

B. 「設定」タブ

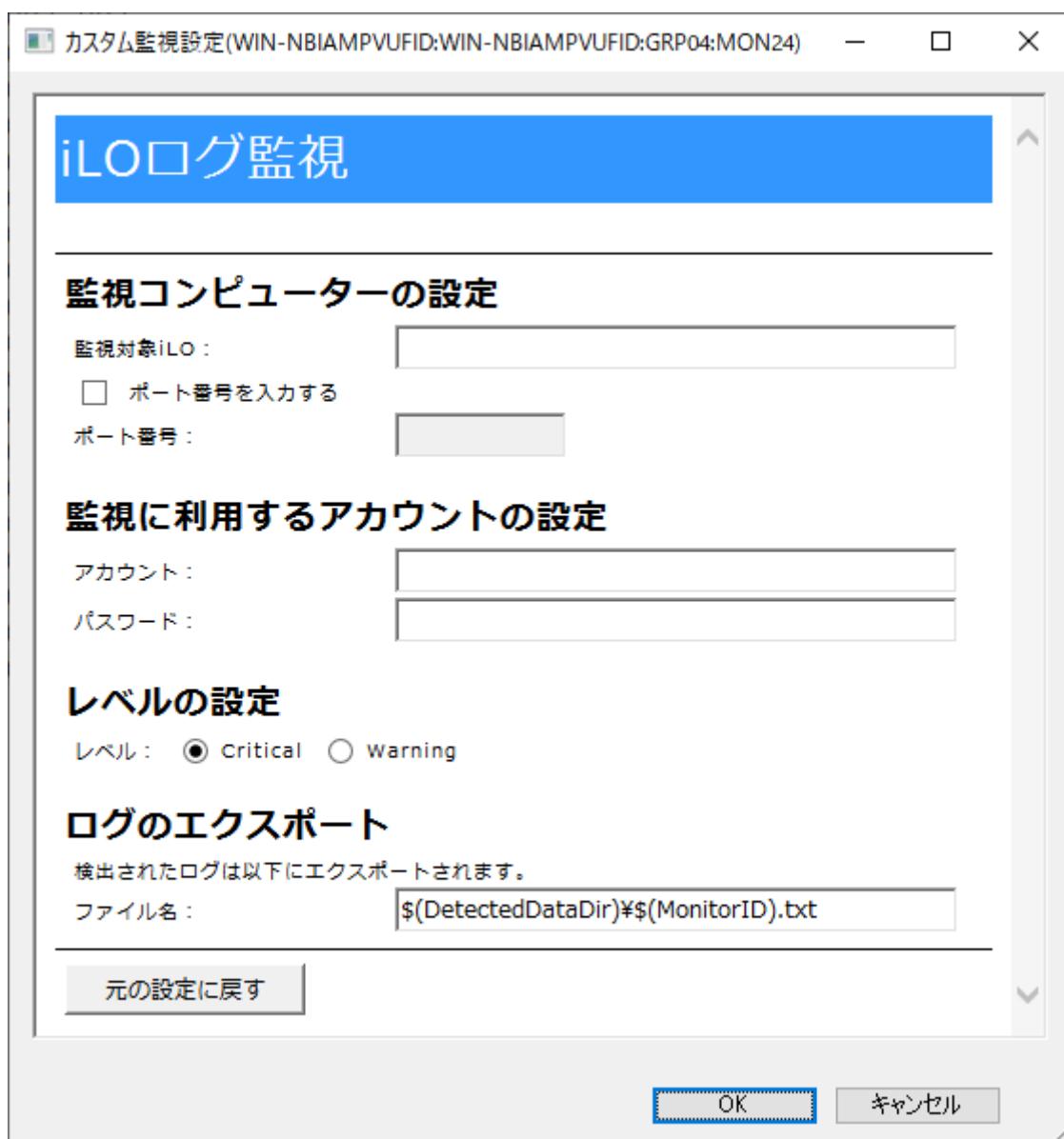
iLOログ監視の詳細な設定は、「設定」タブの[補助設定]ボタンをクリックすると表示される、「[「iLOログ監視」補助設定](#)」画面から実施します。



項目名	説明
"プログラム名"フィールド	あらかじめ"\$(BinDir)\iLOLogger.bat"と入力されています。この値は変更しないでください。
"引数"フィールド	本監視では詳細な設定を後述の補助設定画面で行い、設定された内容は自動的に"引数"フィールドへ反映されます。 この画面では"引数"フィールド内の入力および編集を行わないでください。 ※ 当フィールドに反映される補助設定画面での設定内容は、iLOのアカウントパスワードを含めてすべて平文となります。
"表示スケール"フィールド	既定値として"1"と入力されています。この値は変更しないでください。
"表示単位"フィールド	表示に使用する単位を入力します。 表示に使用する単位を入力します。既定値は空欄となっています。
[テスト]ボタン	本監視項目において、[テスト]ボタンは使用できません。

項目名	説明
[補助設定]ボタン	クリックすると以下の要求が表示され、[はい]ボタンをクリックすると設定の保存後に「iLOログ監視」の補助設定画面が表示されます。

C. 「iLOログ監視」補助設定



- "監視コンピューターの設定" フィールド（一部必須）

"監視対象iLO" フィールドには、監視対象とするコンピューターのIPアドレス（IPv4、IPv6）または、コンピューター名を入力します。このフィールドは入力必須です。

ポート番号は既定値で"443"が設定されますが、変更する必要がある場合は"ポート番号を入力する"にチェックを入れ、"ポート番号"フィールドに任意の値を入力してください。

- "監視に利用するアカウントの設定" フィールド（必須）

"アカウント"および"パスワード"に、iLOへ接続するためのアカウント情報を入力します。

- レベルの設定"フィールド (選択必須)

監視対象とするログのレベル (CriticalまたはWarning) をラジオボタンで選択します。

- 必ずどちらかを選択する必要があります。CriticalおよびWarningの両方を監視する場合は、iLOログ監視をそれに作成してください。

- "ログのエクスポート"フィールド (参照のみ)

本フィールドには既定値として"`$(DetectedDataDir)¥$(MonitorID).txt`"と設定されており、変更できません。

本監視で検出されたログは上記の場所に出力され、通知メールに添付するなどが可能です。

- ログのエクスポートファイルについて

txt形式ファイルで、文字コードはShift JIS方式固定です。

- "`$(DetectedDataDir)`"および"`$(MonitorID)`"について

それぞれBOM 8.0の予約済み変数です。値の詳細は'[予約済み変数](#)'を参照してください。

- ログファイルについて

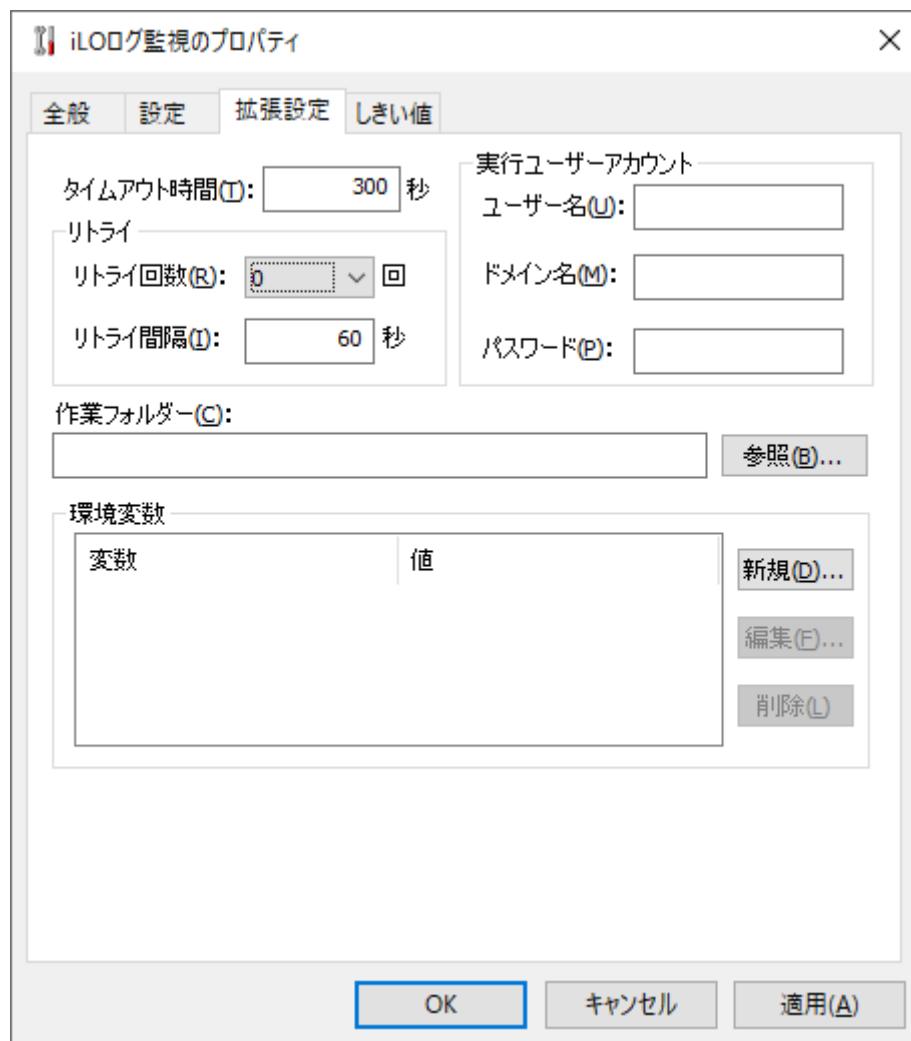
ログファイルは監視間隔ごとに上書きされ、検出されたログが0件の場合は削除されます。

各フィールドに必要事項を入力して[OK]ボタンをクリックすると、補助設定画面は閉じます。

継続して本監視項目の設定を行う場合は、改めてプロパティを開いてください。

D. 「拡張設定」タブ

「設定」タブで指定したプログラムの実行条件を設定します。



- "タイムアウト時間"フィールド

"0"~"2000000"までの整数を設定でき、既定値は"86400"です。

"0"を指定すると必ずタイムアウトします。

- "リトライ"フィールド

"リトライ回数"は"0"~"9"までの整数を指定でき、"0"を指定するとリトライしません。リトライは以下の場合に実行されます。

- プロセスの作成に失敗した場合。
- プロセス待機のタイムアウトが発生した場合。
- プロセス待機が失敗した場合。
- プロセスが"0"以外の終了コードを返した場合。
- 監視結果の出力を読み取れなかった場合。

- "実行ユーザーアカウント"エリア

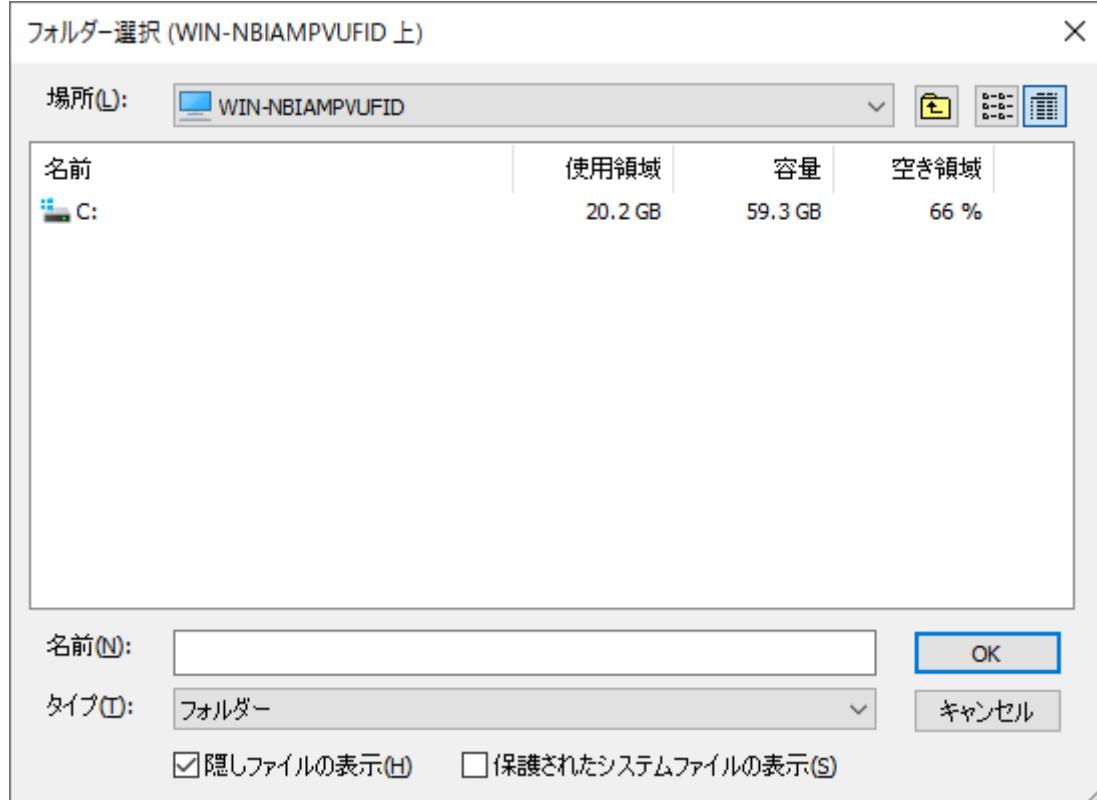
"監視実行プログラム (iLOLogger.bat)"を実行する際の"ユーザー名"、"ドメイン名"、"パスワード"を入力します。

- 実行ユーザーアカウント指定時は、UAC をオフにする必要があります。詳細は、「[ユーザーアカウント制御 \(UAC\)](#)」を参照してください。

- 実行ユーザーアカウントは、Administrator もしくはAdministrators グループのユーザーアカウントである必要があり、それ以外のユーザーアカウントを指定した場合、監視が失敗します。
- "作業フォルダー"フィールド

プログラム実行する際の実行フォルダーを下記のどちらかの手段で設定します。

- "作業フォルダー"を、絶対パスで入力
- [参照..]ボタンをクリックし、"フォルダー選択"画面より"作業フォルダー"を選択



※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、フォルダー選択画面にドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。

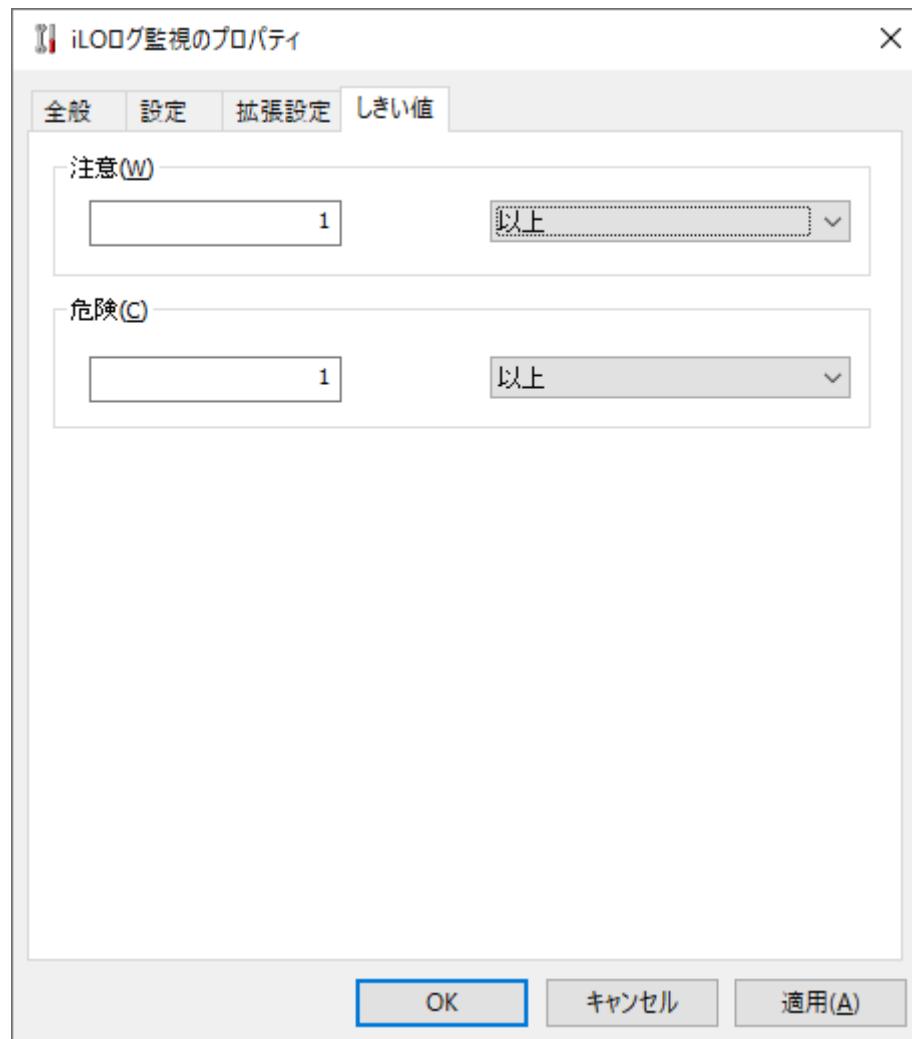
このような場合は、指定する作業フォルダーを絶対パスで直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合は、有効化することでドライブが表示されるようになります。

- "隠しファイルの表示"チェックボックスもしくは"保護されたシステムファイルの表示"チェックボックスにチェックを入れると、条件に応じた該当ファイルが表示されます。

- "環境変数"フィールド

本監視項目では使用しないでください。

E. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(23) iRMCログ監視

iRMCを搭載した監視対象コンピューターに接続し、iRMCが outputするシステムイベントログ（SEL）の件数を監視します。

※ 本監視項目は、iRMC S5のみに対応します。

※ 監視対象とするログはシステムイベントログ（SEL）のみです。内部イベントログ（IEL）は対象となりません。

※ システムイベントログの上書きポリシーが「ログフル時に上書き」に設定されている場合、監視間隔以下の短時間に大量のログが出力されるような状況で、保存件数の上限に達した際に上書きされたログは監視できません。

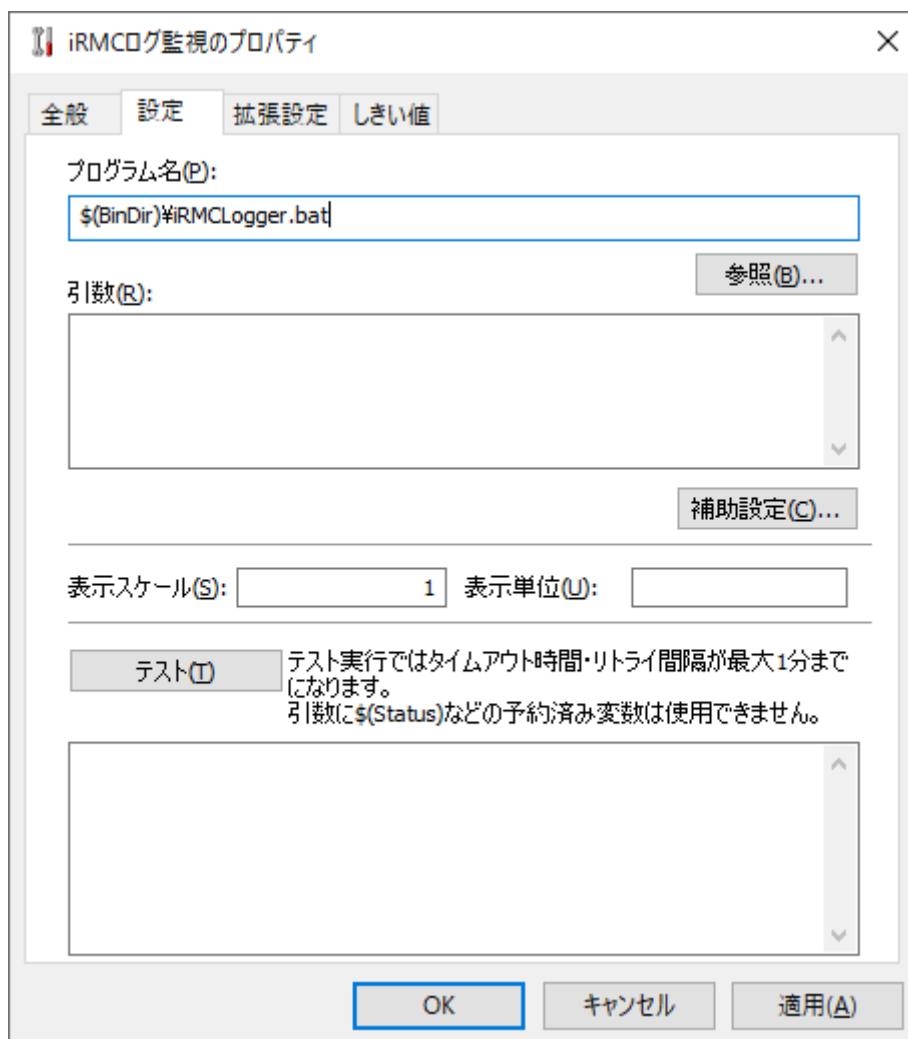
A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については「監視項目の概要」の項目「[「全般」タブ](#)」を参照してください。

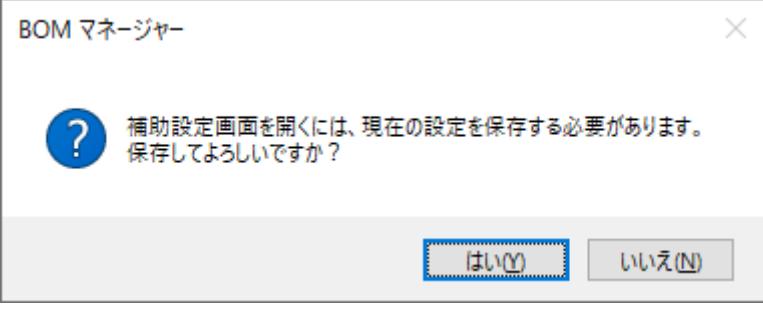
iRMCログ監視では、監視間隔の既定値が10分に指定されています。

B. 「設定」タブ

iRMCログ監視の詳細な設定は、「設定」タブの[補助設定]ボタンをクリックすると表示される、「[「iRMCログ監視」補助設定](#)」画面から実施します。



項目名	説明
"プログラム名"フィールド	あらかじめ "\$(BinDir)\\$iRMCLLogger.bat" と入力されています。この値は変更しないでください。

項目名	説明
"引数"フィールド	<p>本監視では詳細な設定を後述の補助設定画面で行い、設定された内容は自動的に"引数"フィールドへ反映されます。</p> <p>この画面では"引数"フィールド内の入力および編集を行わないでください。</p> <p>※ 当フィールドに反映される補助設定画面での設定内容は、iRMCのアカウントパスワードを含めてすべて平文となります。</p>
"表示スケーリル"フィールド	既定値として"1"と入力されています。この値は変更しないでください。
"表示単位"フィールド	<p>表示に使用する単位を入力します。</p> <p>表示に使用する単位を入力します。既定値は空欄となっています。</p>
[テスト]ボタン	本監視項目において、[テスト]ボタンは使用できません。
[補助設定]ボタン	<p>クリックすると以下の要求が表示され、[はい]ボタンをクリックすると設定の保存後に「iRMCログ監視」の補助設定画面が表示されます。</p> 

C. 「iRMCログ監視」補助設定



- "監視コンピューターの設定" フィールド (一部必須)

"監視対象iRMC" フィールドには、監視対象とするコンピューターのIPアドレス (IPv4、IPv6) または、コンピューター名を入力します。このフィールドは入力必須です。

また、ポート番号を指定する必要がある場合は"ポート番号を入力する"にチェックを入れ、"ポート番号" フィールドに任意の値を入力してください。

- "監視に利用するアカウントの設定" フィールド (必須)

"アカウント" および "パスワード" に、iRMCへ接続するためのアカウント情報を入力します。

- "レベルの設定" フィールド (選択必須)

監視対象とするログのレベル (Critical または Warning) をラジオボタンで選択します。

- 必ずどちらかを選択する必要があります。Critical および Warning の両方を監視する場合は、iRMCログ監視をそれぞれに作成してください。

- "ログのエクスポート" フィールド (参照のみ)

本フィールドには既定値として "\$(DetectedDataDir)\\$(MonitorID).txt" と設定されており、変更できません。

本監視で検出されたログは上記の場所に出力され、通知メールに添付するなどが可能です。

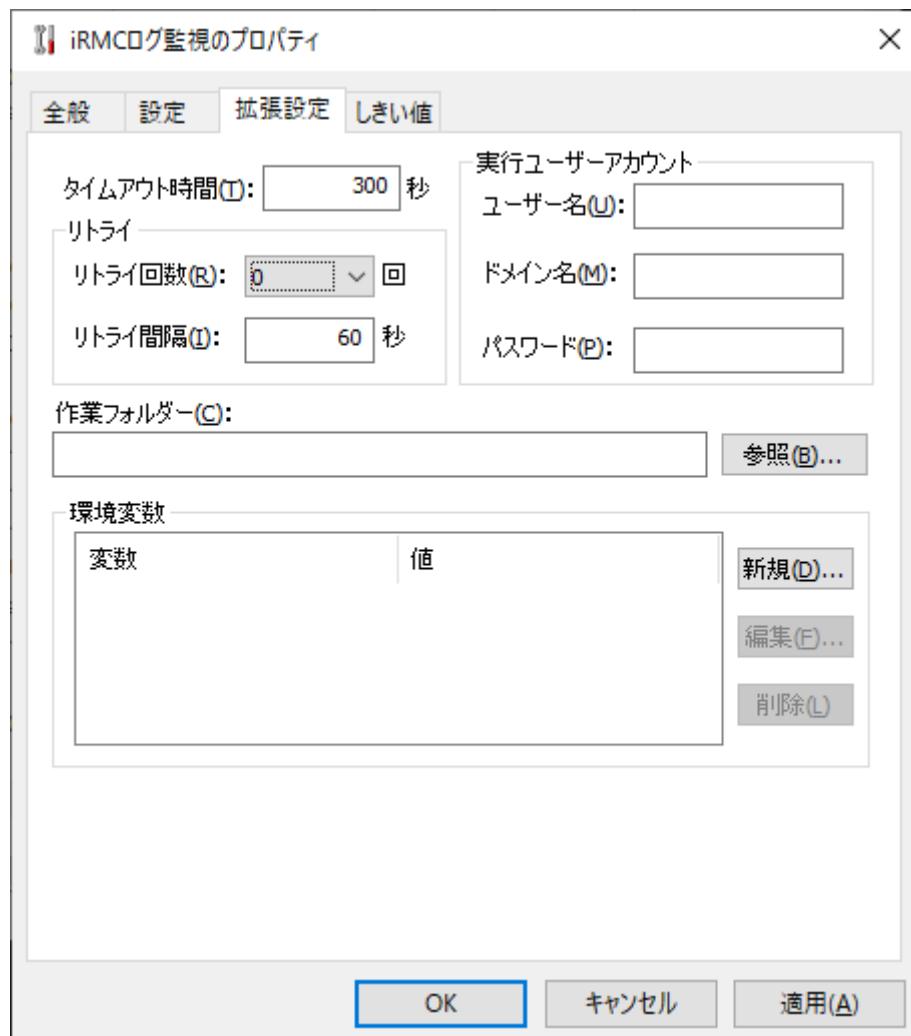
- ログのエクスポートファイルについて
txt形式ファイルで、文字コードはShift JIS方式固定です。
- "\$(DetectedDataDir)"および"\$(MonitorID)"について
それぞれBOM 8.0の予約済み変数です。値の詳細は['予約済み変数'](#)を参照してください。
- ログファイルについて
ログファイルは監視間隔ごとに上書きされ、検出されたログが0件の場合は削除されます。

各フィールドに必要事項を入力して[OK]ボタンをクリックすると、補助設定画面は閉じます。

継続して本監視項目の設定を行う場合は、改めてプロパティを開いてください。

D. 「拡張設定」タブ

「設定」タブで指定したプログラムの実行条件を設定します。



- "タイムアウト時間"フィールド

"0"～"2000000"までの整数を設定でき、既定値は"86400"です。

"0"を指定すると必ずタイムアウトします。

- "リトライ"フィールド

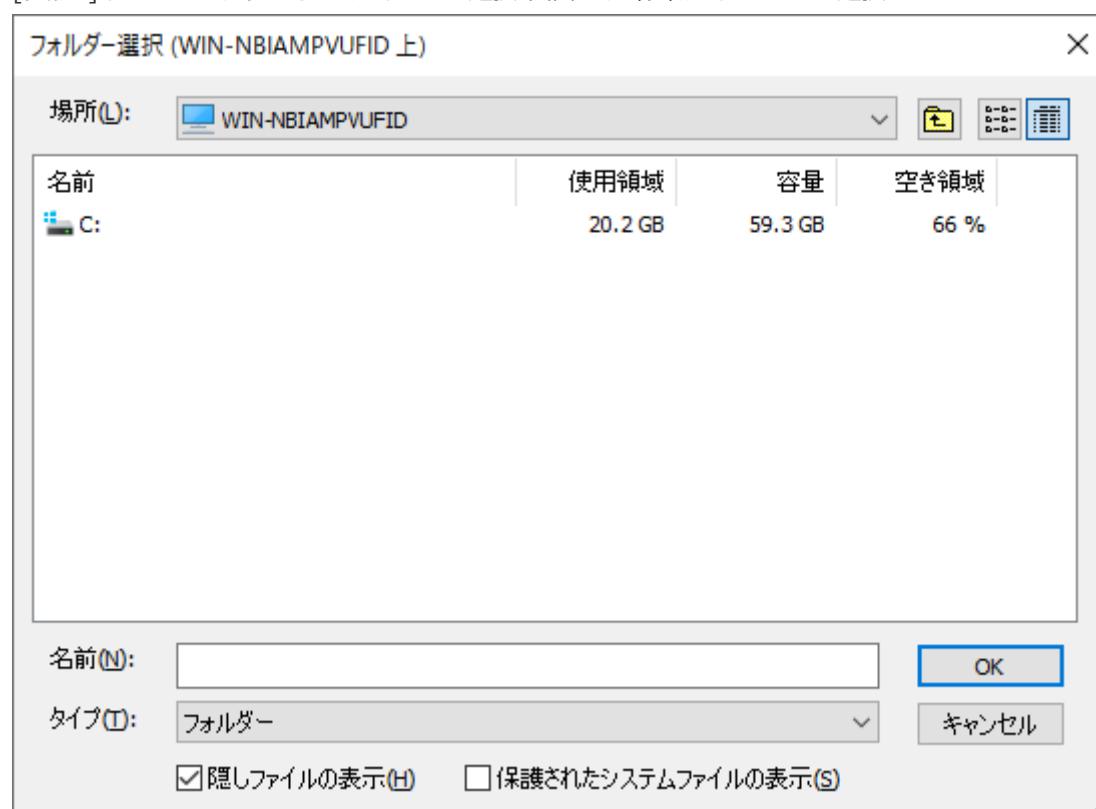
"リトライ回数"は"0"～"9"までの整数を指定でき、"0"を指定するとリトライしません。リトライは以下の場合に実行されます。

- プロセスの作成に失敗した場合。

- プロセス待機のタイムアウトが発生した場合。
 - プロセス待機が失敗した場合。
 - プロセスが"0"以外の終了コードを返した場合。
 - 監視結果の出力を読み取れなかった場合。
- "実行ユーザーアカウント"エリア
- "監視実行プログラム (iRMCLogger.bat) "を実行する際の"ユーザー名"、"ドメイン名"、"パスワード"を入力します。
- 実行ユーザーアカウント指定時は、UAC をオフにする必要があります。詳細は、' [ユーザーアカウント制御 \(UAC\)](#) 'を参照してください。
 - 実行ユーザーアカウントは、Administrator もしくはAdministrators グループのユーザーアカウントである必要があります、それ以外のユーザーアカウントを指定した場合、監視が失敗します。
- "作業フォルダー"フィールド

プログラム実行する際の実行フォルダーを下記のどちらかの手段で設定します。

- "作業フォルダー"を、絶対パスで入力
- [参照..]ボタンをクリックし、"フォルダー選択"画面より"作業フォルダー"を選択



※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、フォルダー選択画面にドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。

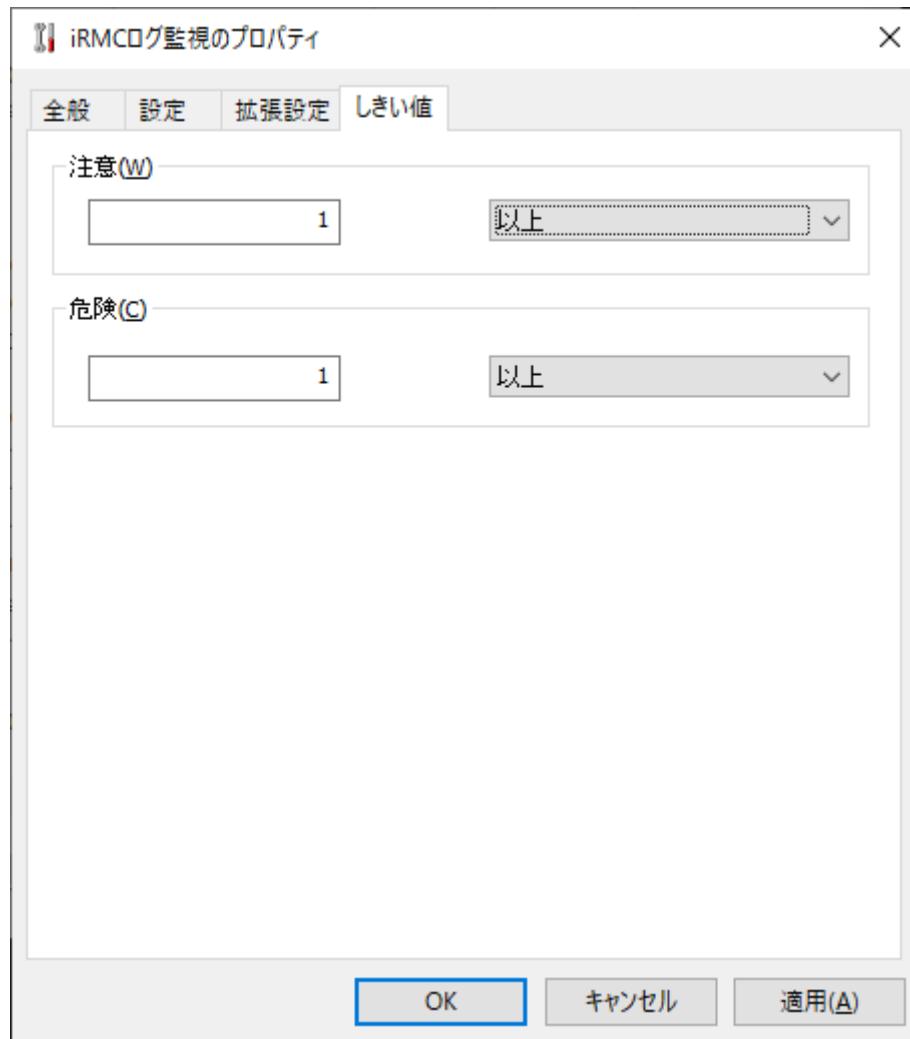
このような場合は、指定する作業フォルダーを絶対パスで直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合は、有効化することでドライブが表示されるようになります。

- "隠しファイルの表示"チェックボックスもしくは"保護されたシステムファイルの表示"チェックボックスにチェックを入れると、条件に応じた該当ファイルが表示されます。

- "環境変数"フィールド

本監視項目では使用しないでください。

E. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(24) RDS セッション監視（セッション数取得）

指定した条件に該当するRDSのセッション数を監視します。

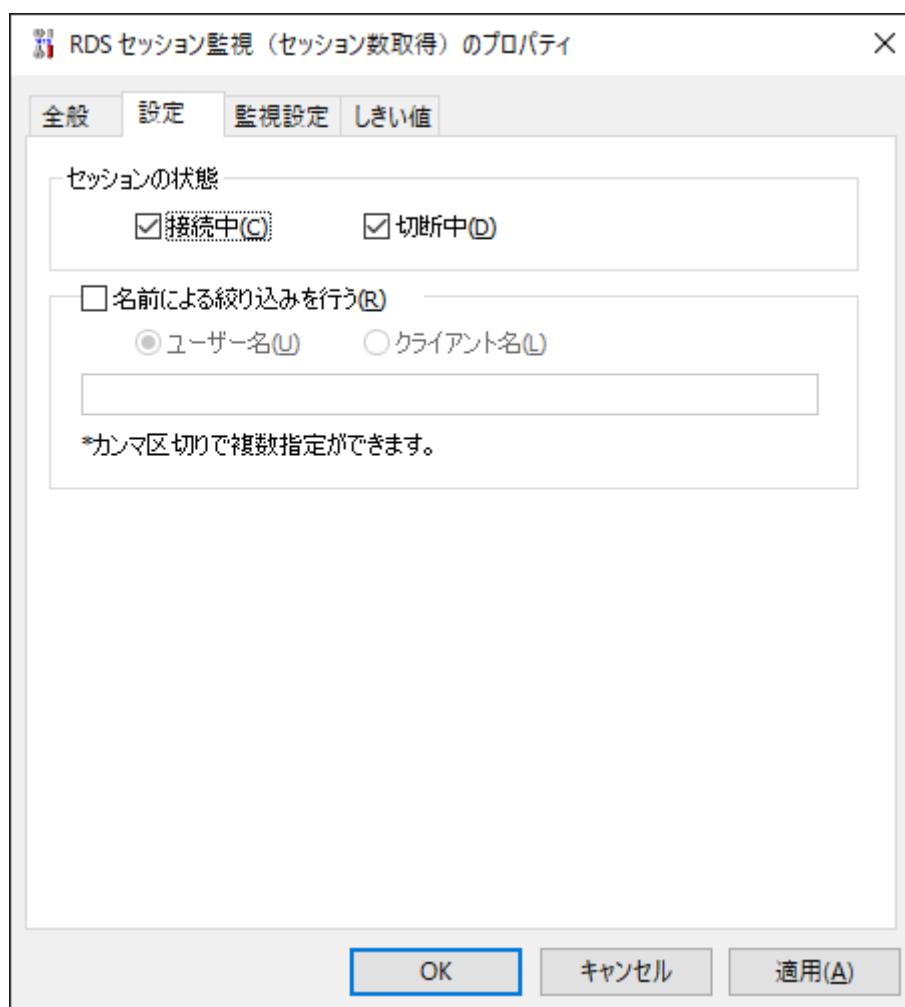
※ 本監視は代理監視機能に対応していません。ローカル監視のみ対応しています。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

RDS セッション監視（セッション数取得）では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



- "セッションの状態"欄（必須）

監視するセッションの状態を指定します。"接続中"および"切断中"チェックボックスにチェックを入れてください。

- 接続中： 接続中のセッションが対象になります。
- 切断中： 切断状態のセッションが対象になります。

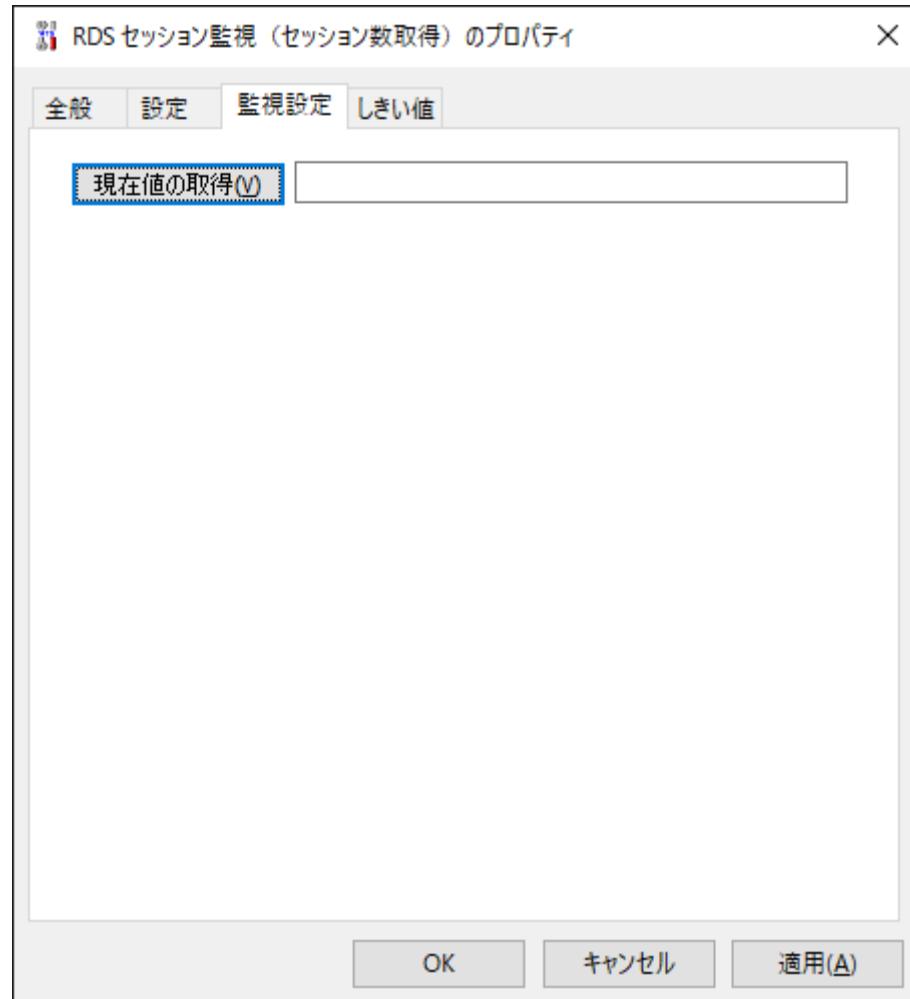
- "名前による絞り込みを行う"欄

ユーザー名かクライアント名をクリックし、入力した条件で絞り込みを行います。カンマ区切りで指定すると、複数のユーザーまたはクライアントに対して絞り込みを行うことができます。名前を入力する際、スペースは入力しないでください。

以下の場合には、名前による絞り込みは行われません。

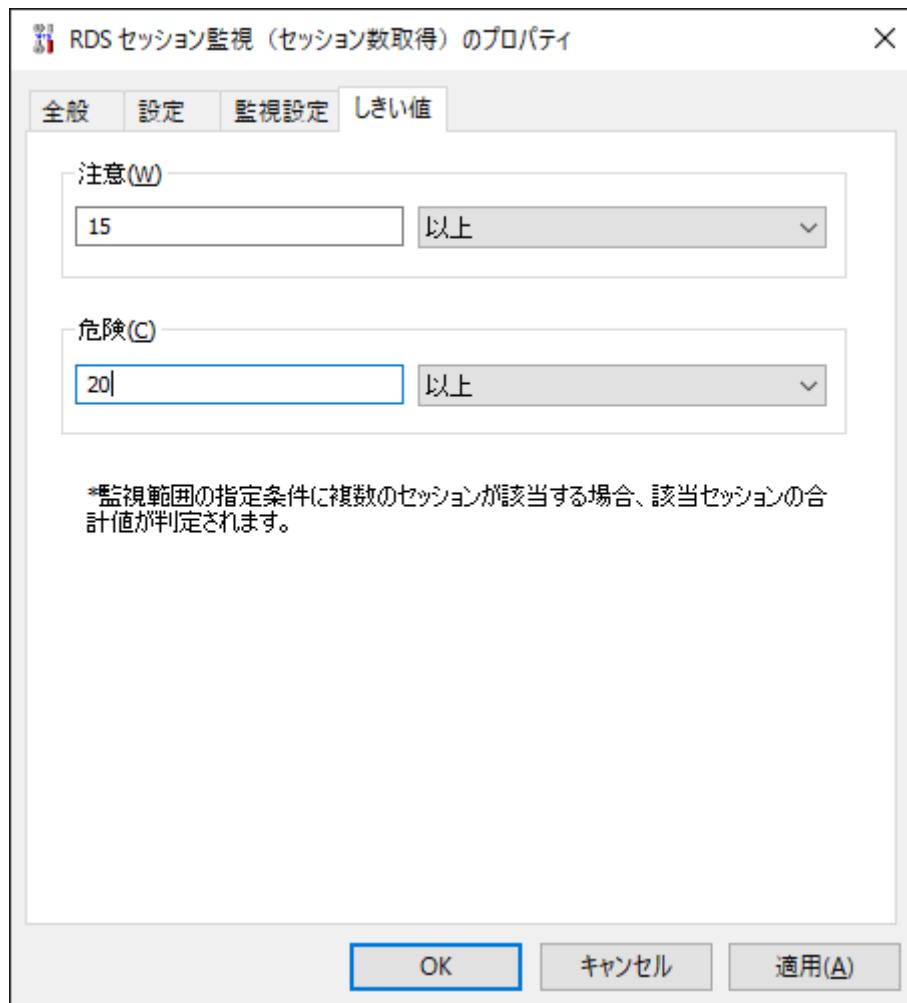
- "名前による絞り込みを行う"チェックボックスにチェックを入れない場合
- ユーザー名かクライアント名が入力されていない場合

C. 「監視設定」タブ



[現在値の取得]ボタンをクリックすると、その時点で「設定」タブで指定した条件に該当するセッション数の合計値を表示します。

D. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(25) RDS セッション監視（ユーザー／クライアント リスト取得）

RDSのセッション数を監視し、設定条件および注意しきい値の条件に合致するユーザーまたはクライアントのリストを取得します。

※ 本監視は代理監視機能に対応していません。ローカル監視のみ対応しています。

"RDS プロセス監視（ユーザー／クライアント／セッション リスト取得）"は、しきい値や監視結果などのあつかいが他の監視項目と異なります。以下の図を参照してください。

	RDS セッション監視 (ユーザー／クライアント リスト取得)	他の監視項目
しきい値	ユーザーまたはクライアントを絞り込むための条件の一つ	監視を実行して取得された値が"注意"か"危険"かを判定するための条件
監視値	<ul style="list-style-type: none">◦ 設定されたセッションの条件に合致する◦ 注意しきい値に設定された条件に合致する <p>この2つを満たすユーザーまたはクライアントの件数</p>	設定された条件に従って取得された値
監視結果	監視値が1以上になれば"注意"または"危険"	しきい値に設定された条件と監視値を比較して、"注意""危険"を判定

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' 「全般」タブ'を参照してください。

RDS セッション監視（ユーザー／クライアント リスト取得）では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



- "セッションの状態"欄 (必須)

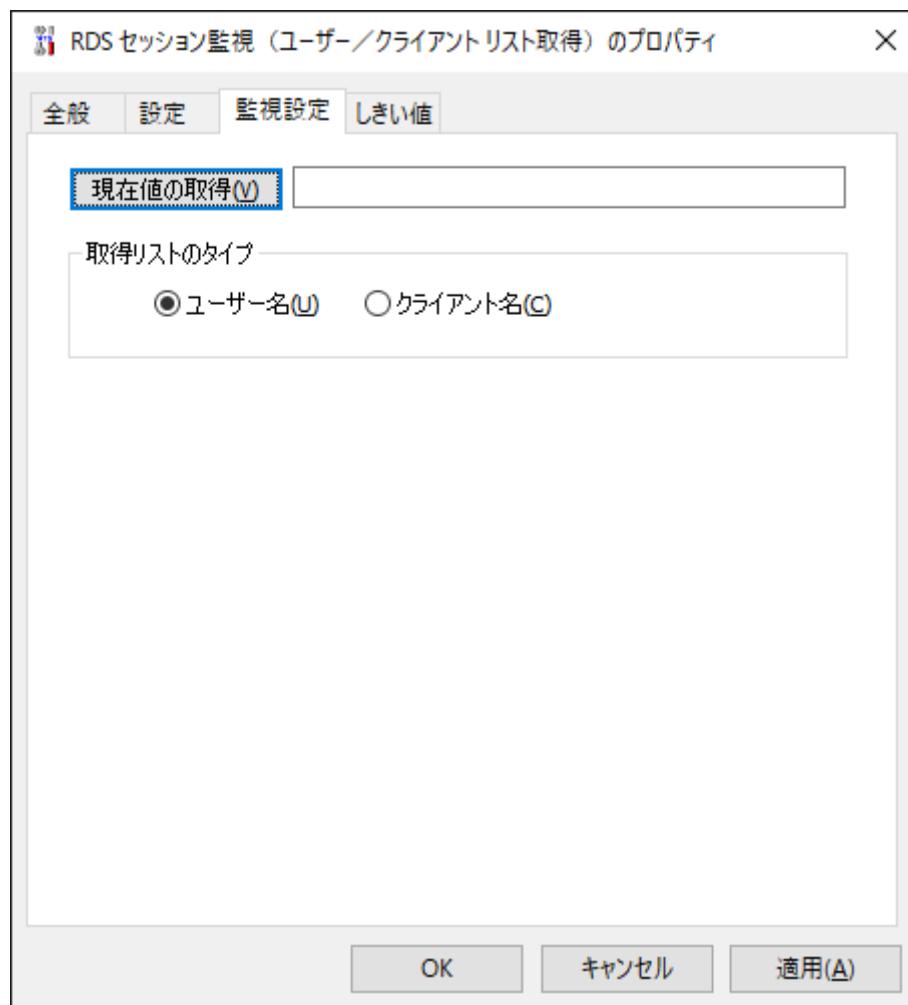
監視するセッションの状態を指定します。"接続中"および"切断中"チェックボックスにチェックを入れてください。

- 接続中：接続中のセッションが対象になります。
- 切断中：切断状態のセッションが対象になります。

- "リスト取得結果をファイル出力する"チェックボックス

- 取得したユーザーリストやクライアントリストをファイルに出力します。リストのファイルについては、'取得リストの参照方法'を参照してください。

C. 「監視設定」タブ



- [現在値の取得]ボタン

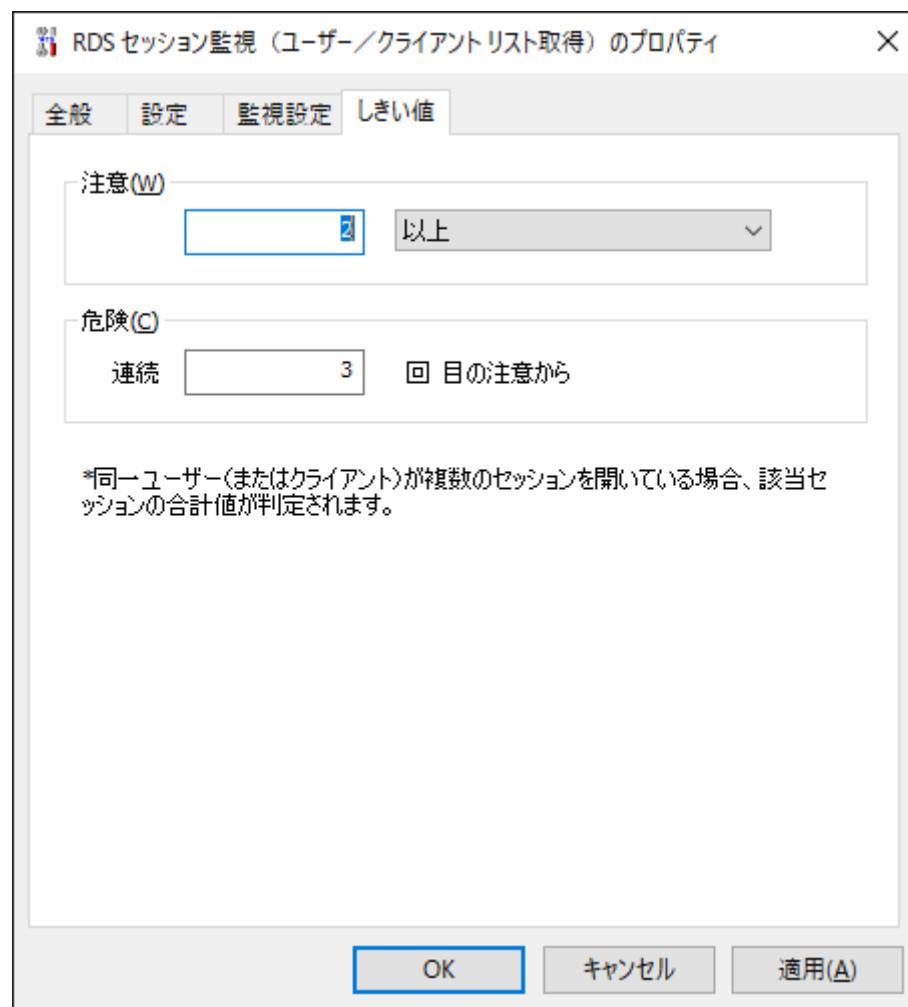
クリックすると、設定タブで指定した内容のユーザーまたはクライアントのリストを表示します。表示するリストのタイプは、"取得リストのタイプ"で選択することができます。

- "取得リストのタイプ"欄

取得するリストタイプをユーザー名またはクライアント名で指定します。

D. 「しきい値」タブ

"RDS セッション監視（ユーザー／クライアントリスト取得）"のしきい値は、通常の監視のしきい値とあつかいが異なり、ユーザーまたはクライアントを絞り込むための条件の一つとして使用されます。



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドに、危険と判定する"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定します。

- 設定できる数値は、"1"~"99"です。

E. 取得リストの参照方法

取得したユーザーまたはクライアントのリストを参照する際は、以下のディレクトリのテキストファイルを参照してください。

```
C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Instance\[インスタンス名]\DetectedData\GRPXXMONYY.log
```

- XX:グループ番号です。"監視"をクリックして表示される監視グループ一覧のGRPで始まる番号です。
- YY:監視項目番号です。各監視グループをクリックして表示されるMONで始まる番号です。

取得したリストのフォーマットは以下のとおりです。

```
["監視時刻"] "取得したユーザーリスト" "セッション数リスト"
```

例：

```
[2022/02/17 16:00:20] Users=Administrator Values=1  
[2022/02/17 16:00:21] Users=Administrator Values=1  
[2022/02/21 19:37:28] Users=Administrator,say-tech Values=1,1  
:  
:
```

(26) RDS プロセス監視（プロセス数取得）

指定した条件に該当するRDSクライアントが使用しているプロセス（例えばオフィスアプリケーションなど）の数を監視します。

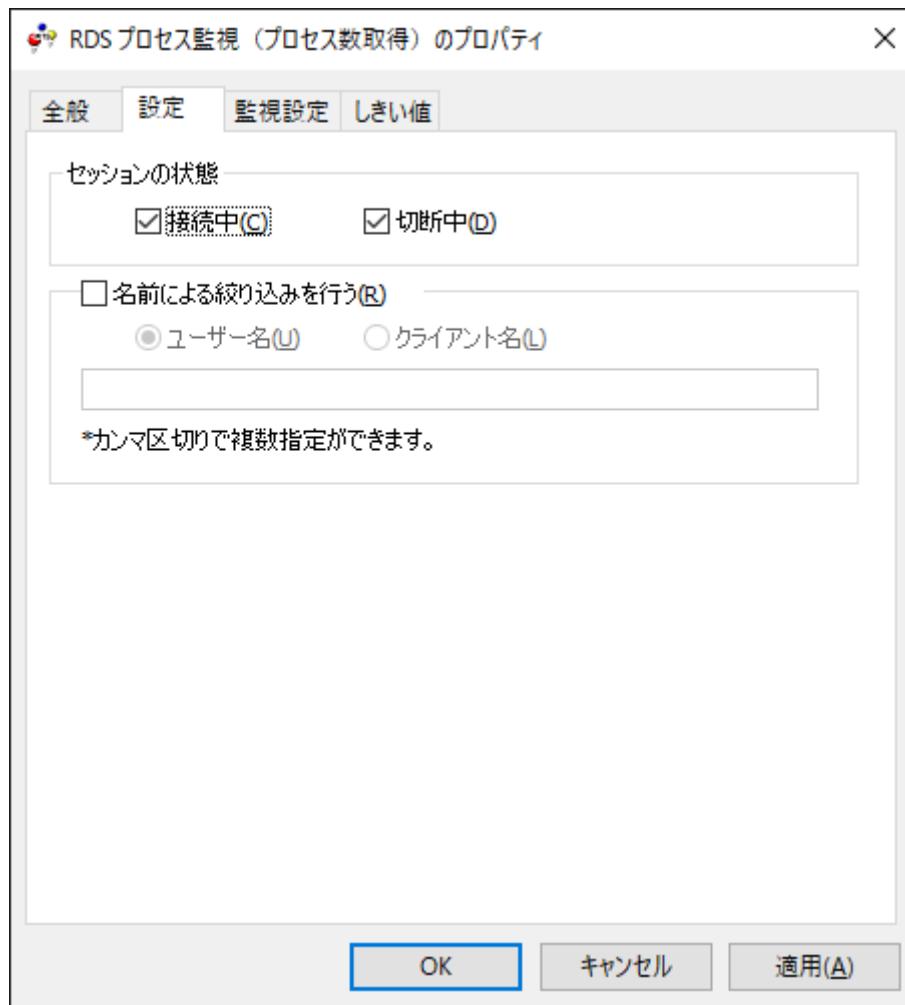
※ 本監視は代理監視機能に対応していません。ローカル監視のみ対応しています。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

RDS プロセス監視（プロセス数取得）では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



- "セッションの状態"欄（必須）

監視するセッションの状態を指定します。"接続中"および"切断中"チェックボックスにチェックを入れてください。

- 接続中： 接続中のセッションが対象になります。
- 切断中： 切断状態のセッションが対象になります。

- "名前による絞り込みを行う"欄

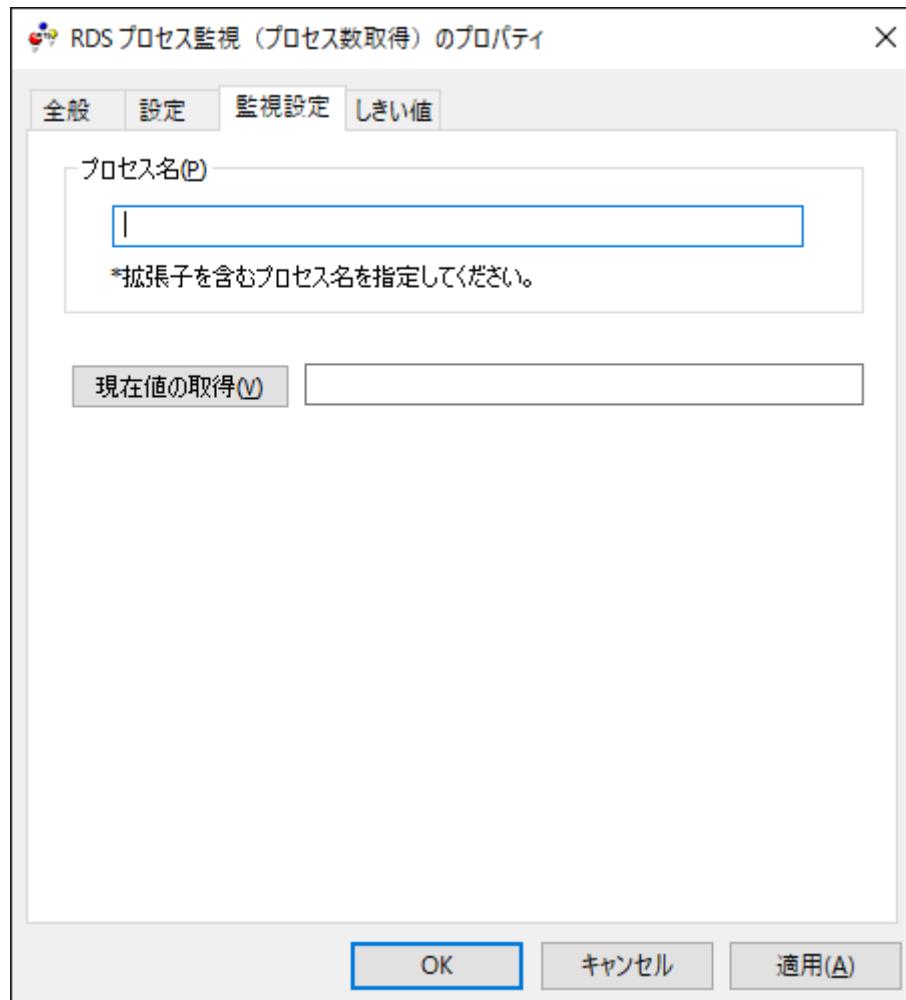
ユーザー名かクライアント名をクリックし、入力した条件で絞り込みを行います。カンマ区切りで指定すると、複数のユーザーまたはクライアントに対して絞り込みを行うことができます。名前を入力する際、スペースは入力しないでください。

以下の場合には、名前による絞り込みは行われません。

- "名前による絞り込みを行う"チェックボックスにチェックを入れない場合

- ・ ユーザー名かクライアント名が入力されていない場合

C. 「監視設定」タブ



- "プロセス名"フィールド

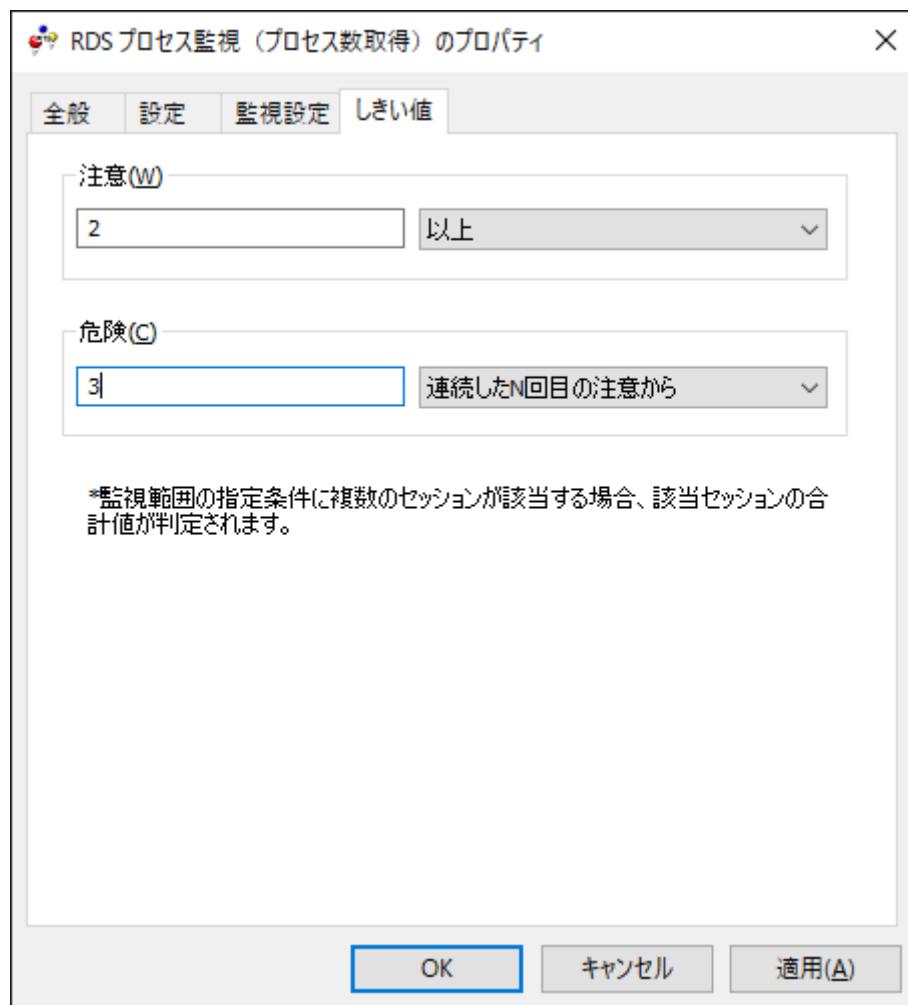
監視するプロセス名（拡張子を含む）を指定します。プロセス名の前後に余分なスペースは入力しないでください。

- [現在値の取得]ボタン

クリックすると、その時点で指定した条件に該当するプロセス数を表示します。

プロセス名が空欄の状態で[現在値の取得]ボタンをクリックするとエラーになります。

D. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

(27) RDS プロセス監視（ユーザー／クライアント／セッション リスト取得）

RDSクライアントが使用しているプロセス（例えばオフィスアプリケーションなど）の数を監視し、設定条件および注意しきい値の条件に合致するユーザーまたはクライアント、セッションIDのリストを取得します。

※ 本監視は代理監視機能に対応していません。ローカル監視のみ対応しています。

"RDS プロセス監視（ユーザー／クライアント／セッション リスト取得）"は、しきい値や監視結果などのあつかいが他の監視項目と異なります。以下の図を参照してください。

RDS プロセス監視 (ユーザー／ クライアント／ セッション リスト取得)		他の監視項目
しきい値	ユーザーまたはクライアントまたはセッションIDを絞り込むための条件の一つ	監視を実行して取得された値が"注意"か"危険"かを判定するための条件
監視値	<ul style="list-style-type: none">◦ 設定されたセッションの条件に合致する◦ 注意しきい値に設定された条件に合致する この2つを満たすユーザーまたはクライアントまたはセッションIDの件数	設定された条件に従って取得された値
監視結果	監視値が1以上になれば"注意"または"危険"	しきい値に設定された条件と監視値を比較して、"注意""危険"を判定

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については'監視項目の概要'の項目'[「全般」タブ](#)'を参照してください。

RDS セッション監視（ユーザー／クライアント リスト取得）では、監視間隔の既定値が1分に指定されています。

B. 「設定」タブ



- "セッションの状態"欄（必須）

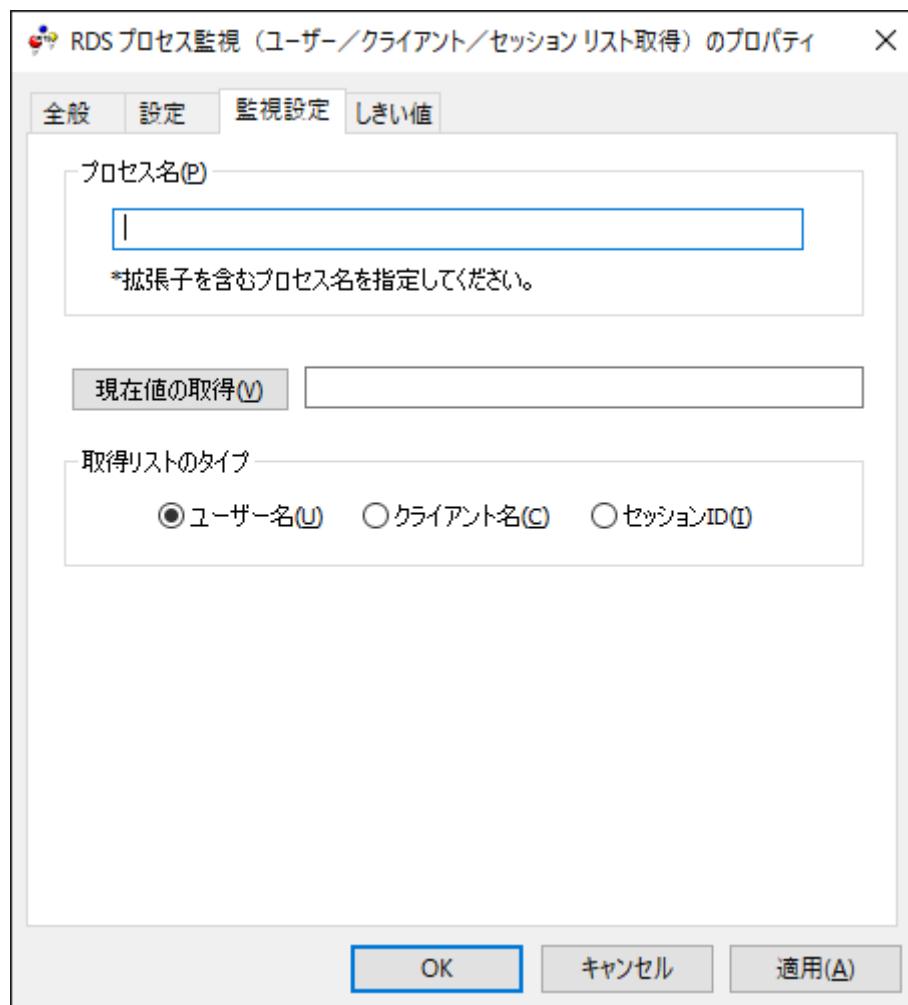
監視するセッションの状態を指定します。"接続中"および"切断中"チェックボックスにチェックを入れてください。

- 接続中：接続中のセッションが対象になります。
- 切断中：切断状態のセッションが対象になります。

- "リスト取得結果をファイル出力する"チェックボックス

- 取得したユーザーリストやクライアントリストをファイルに出力します。リストのファイルについては、'取得リストの参照方法'を参照してください。

C. 「監視設定」タブ



- "Process Name" Field

監視するプロセス名（拡張子を含む）を指定します。プロセス名の前後に余分なスペースは入力しないでください。

- [Current Value Acquisition] Button

クリックすると、指定した条件に該当する値を表示します。

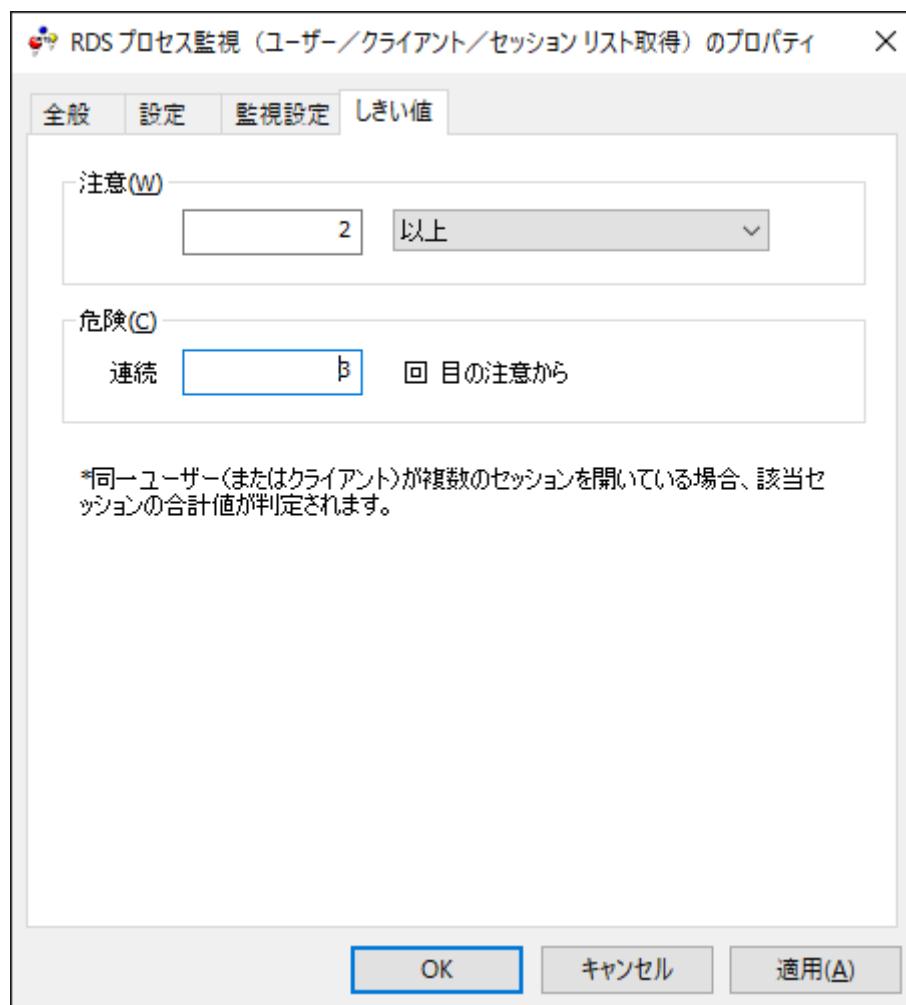
プロセス名が空欄の状態で[現在値の取得]ボタンをクリックするとエラーになります。

- "Get List Type" Field

[現在値の取得]ボタンのクリック時に取得する値を、"ユーザー名"、"クライアント名"、"セッションID"から選択できます。

D. 「しきい値」タブ

"RDS プロセス監視（ユーザー／クライアント／セッションリスト取得）"のしきい値は、通常の監視のしきい値とあつかいが異なり、ユーザーまたはクライアントまたはセッションIDを絞り込むための条件の一つとして使用されます。



- "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"～"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

- "危険"フィールドに、危険と判定する"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定します。

- 設定できる数値は、"1"～"99"です。

E. 取得リストの参照方法

取得したユーザーまたはクライアントまたはセッションIDのリストを参照する際は、以下のディレクトリのテキストファイルを参照してください。

```
C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Instance\[インスタンス名]\DetectedData\GRPXXMONYY.log
```

- XX:グループ番号です。"監視"をクリックして表示される監視グループ一覧のGRPで始まる番号です。
- YY:監視項目番号です。各監視グループをクリックして表示されるMONで始まる番号です。

(28) カスタム監視

任意の指定した実行プログラム（監視実行プログラム）を実行し、戻り値（監視値、結果コード、メッセージ）を監視します。

※ 指定可能な実行プログラムはコンソールアプリケーション（.exe）、バッチファイル（.bat）です。

CScript形式、PowerShell形式のファイルについても、標準出力へ監視値を正しく出力できれば監視可能です

※ 設定した実行プログラムの返り値は、文字列および負の値を返り値とすることはできません。必ず正の数値にしてください。

文字列の返り値の場合には（N/A）という値が返り、ステータスは正常になります。

※ 代理監視の場合、カスタム監視のプログラムはインスタンスを構築したローカルコンピューター上で実行されますので、代理監視先の情報を取得する場合には、指定するプログラムがリモートコンピューターを選択できるプログラムである必要があります。

※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、プロパティの「設定」タブにある「プログラム名」欄の[参照]ボタンや、「拡張設定」タブにある「作業フォルダー」欄の[参照]ボタンを押しても、ファイル選択画面でドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。

このような場合は、設定する内容を絶対パスで該当する欄に直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合は、有効化することで[参照]ボタンが使用できるようになります。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの詳細については「監視項目の概要」の項目「[「全般」タブ](#)」を参照してください。

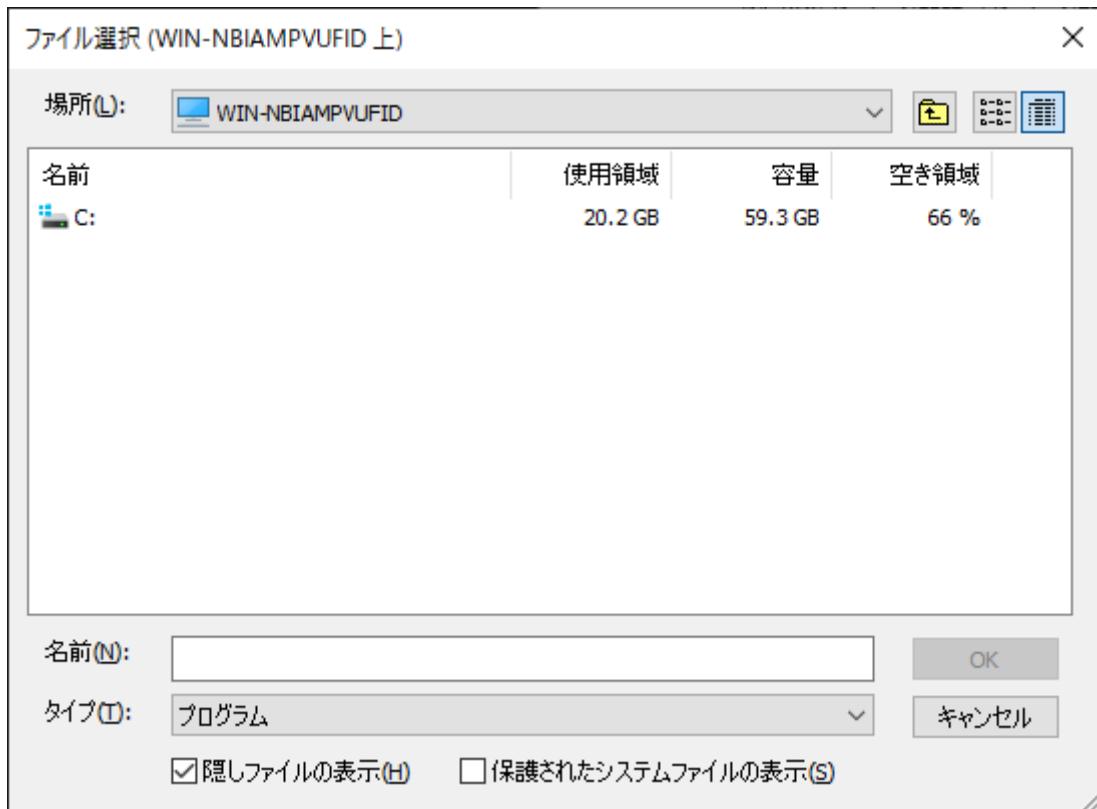
カスタム監視では、監視間隔の既定値が5分に指定されています。

B. 「設定」タブ



1. "プログラム名"フィールドに、任意の"監視実行プログラム名"を下記のどちらかの手段で設定します。
 - "監視実行プログラム名"を、絶対パスで入力

- [参照..]ボタンをクリックして、"ファイル選択"画面より"監視実行プログラム"を選択



- "隠しファイルの表示"チェックボックスもしくは"保護されたシステムファイルの表示"チェックボックスにチェックを入れると、条件に応じた該当ファイルが表示されます。

2. "引数"フィールドには監視実行プログラムの引数を記述します。

- 手順4.のテスト実行時の引数に、BOM 8.0の予約済み変数は使用できません。

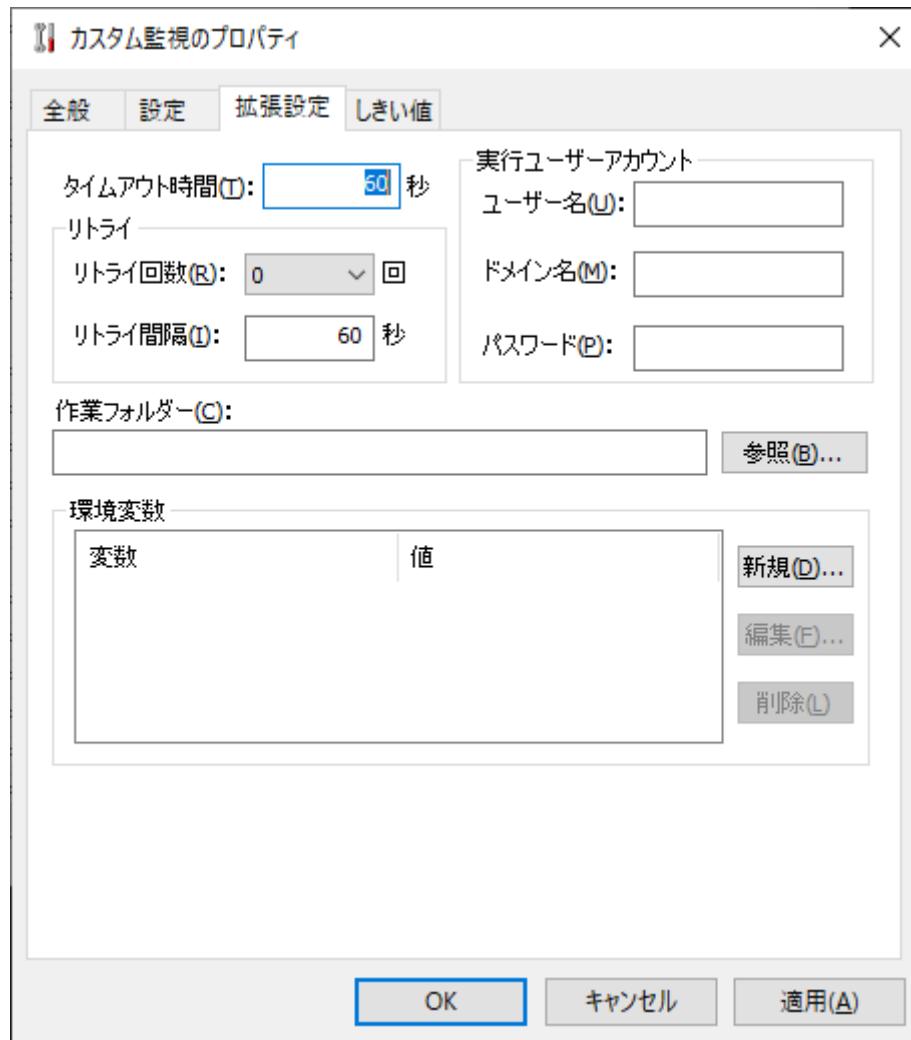
3. [補助設定]ボタンは、カスタム監視補助で使用します。詳細は'[カスタム監視補助](#)'を参照してください。

4. [テスト]ボタンをクリックすると、「設定」タブ、「拡張設定」タブの両方の設定を加えてテスト実行します。

- テスト実行ではタイムアウト時間、リトライ時間が最大1分までです。

C. 「拡張設定」タブ

「設定」タブで指定したプログラムの実行条件を設定します。



- "タイムアウト時間"フィールド

"0"~"2000000"までの整数を設定でき、既定値は"86400"です。

"0"を指定すると必ずタイムアウトします。

- "リトライ"フィールド

"リトライ回数"は"0"~"9"までの整数を指定でき、"0"を指定するとリトライしません。リトライは以下の場合に実行されます。

- プロセスの作成に失敗した場合。
- プロセス待機のタイムアウトが発生した場合。
- プロセス待機が失敗した場合。
- プロセスが"0"以外の終了コードを返した場合。
- 監視結果の出力を読み取れなかった場合。

- "実行ユーザーアカウント"エリア

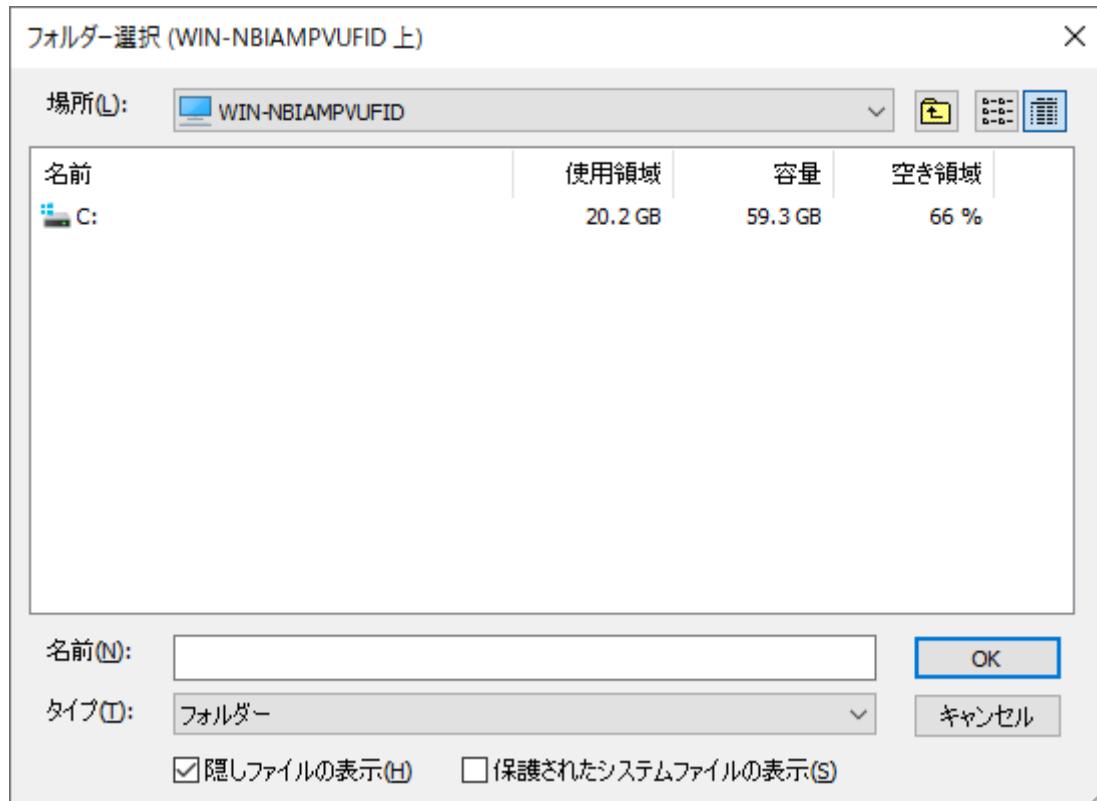
"監視実行プログラム"を実行する際の"ユーザー名"、"ドメイン名"、"パスワード"を入力します。

- 実行ユーザーアカウント指定時は、UAC をオフにする必要があります。詳細は、「[ユーザーアカウント制御 \(UAC\)](#)」を参照してください。

- 実行ユーザーアカウントは、Administrator もしくはAdministrators グループのユーザーアカウントである必要があり、それ以外のユーザーアカウントを指定した場合、監視が失敗します。
- "作業フォルダー"フィールド

プログラム実行する際の実行フォルダーを下記のどちらかの手段で設定します。

 - "作業フォルダー"を、絶対パスで入力
 - [参照..]ボタンをクリックし、"フォルダー選択"画面より"作業フォルダー"を選択



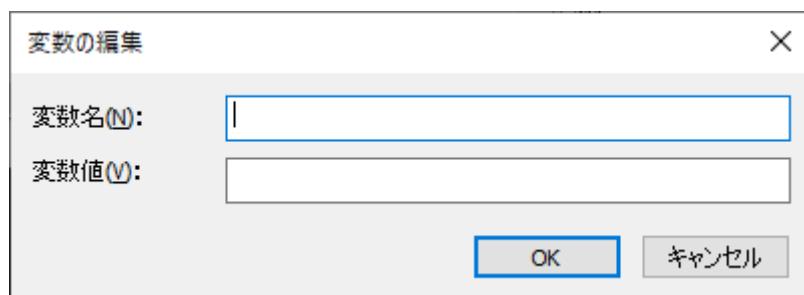
※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、フォルダー選択画面にドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。

このような場合は、指定する作業フォルダーを絶対パスで直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合は、有効化することでドライブが表示されるようになります。

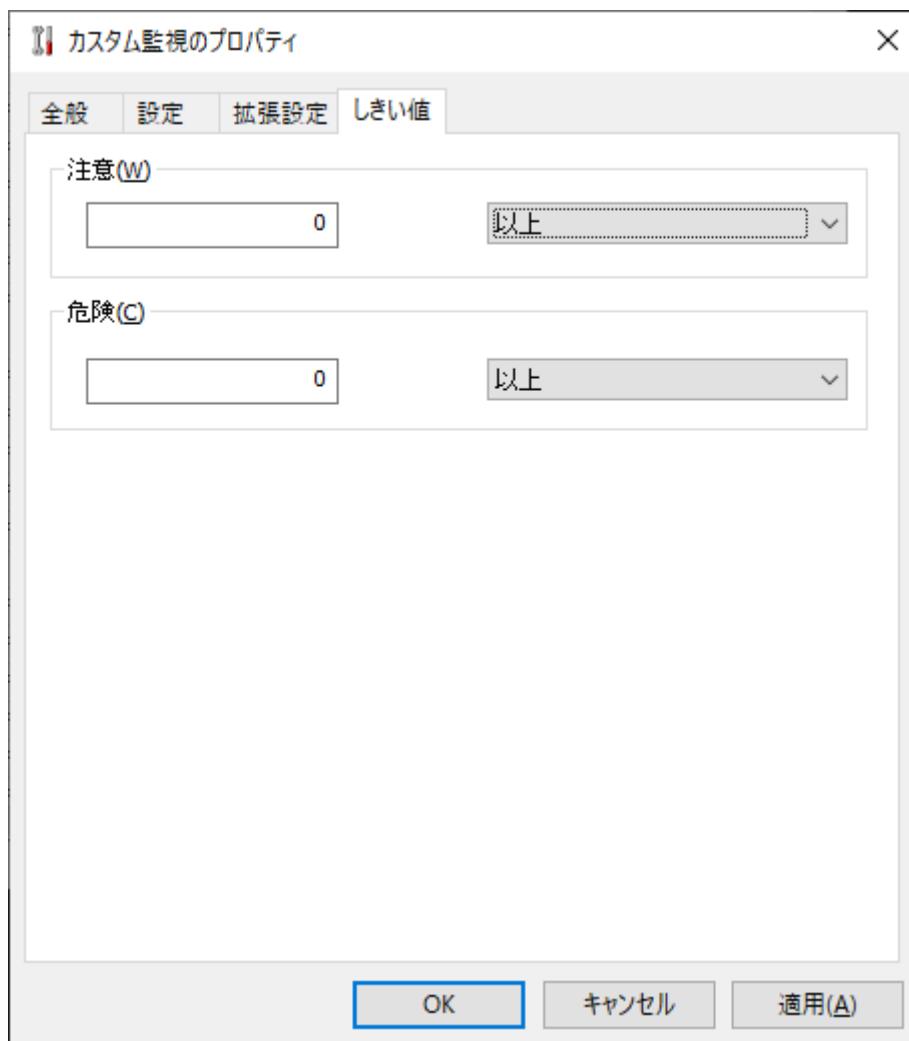
- "隠しファイルの表示"チェックボックスもしくは"保護されたシステムファイルの表示"チェックボックスにチェックを入れると、条件に応じた該当ファイルが表示されます。

- "環境変数"

プログラムに必要な環境変数があれば、[新規..]ボタンをクリックし、"変数の編集"画面を表示して"変数名"と"変数值"を登録します。



D. 「しきい値」タブ



1. "注意"フィールドに、しきい値を下記のとおり設定します。

- しきい値

テキスト入力フィールドに数値 ("0"~"999999999") を入力します。

- しきい値の判定条件

ドロップダウンメニューを使用して、しきい値に対する判定条件を、"と等しい"、"と等しくない"、"より大きい"、"以上"、"より小さい"、"以下"の中から選択します。

2. "危険"フィールドにしきい値を設定します。

- "危険"しきい値の設定は注意のしきい値に加えて、"注意"ステータスの"連続発生回数"を指定できます。
- "連続したN回目の注意から"に設定できる数値は、"1"~"99"です。

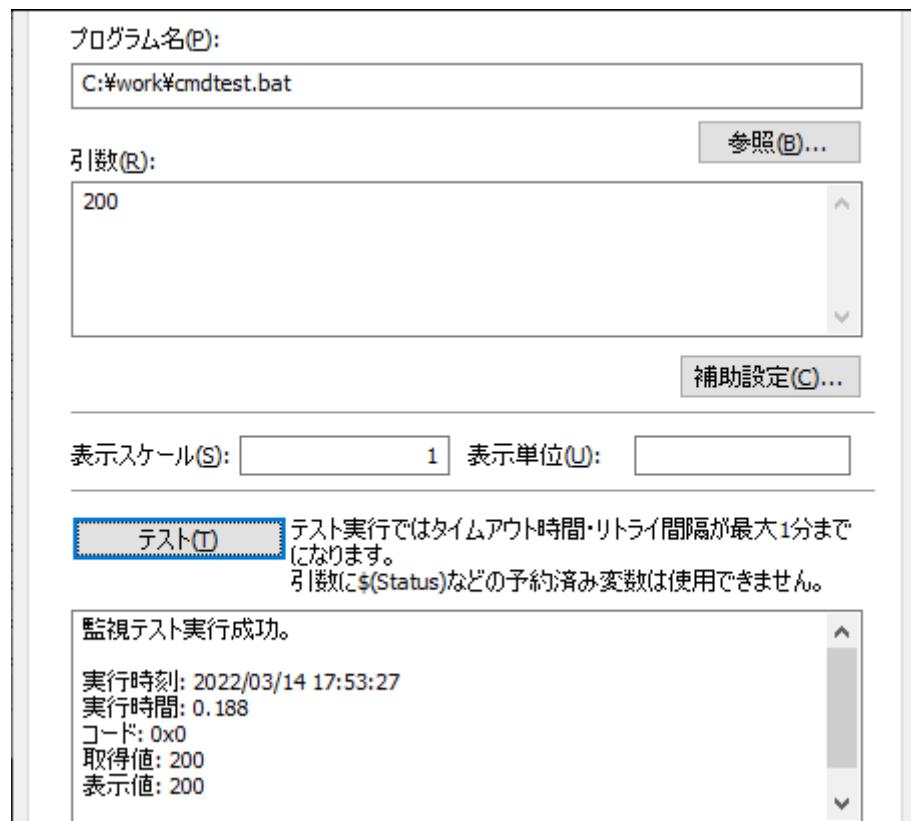
E. バッチファイルの設定例

- 「プログラム名」欄にバッチファイル名、「引数」欄にバッチファイルで使用される引数を指定します。
- バッチファイル内では標準出力が返り値になります。@echo offでエコー機能をoffにしてください。
- バッチファイルのサンプル ("cmdtest.bat") と設定、およびテスト実行結果は下記を参照してください。

本サンプルファイルは引数で指定した値を取得するバッチファイルです。

```
-----cmdtest.batここから
@echo off
if "%1" == "" goto error
echo %1      (この出力がバッチファイルの取得値となります)
goto end
:error
exit 1      (エラーの場合、0以外の終了コードに指定します)
:end
exit 0      (正常終了の場合、終了コードは0に指定します)
-----cmdtest.batここまで
```

[テスト実行結果]

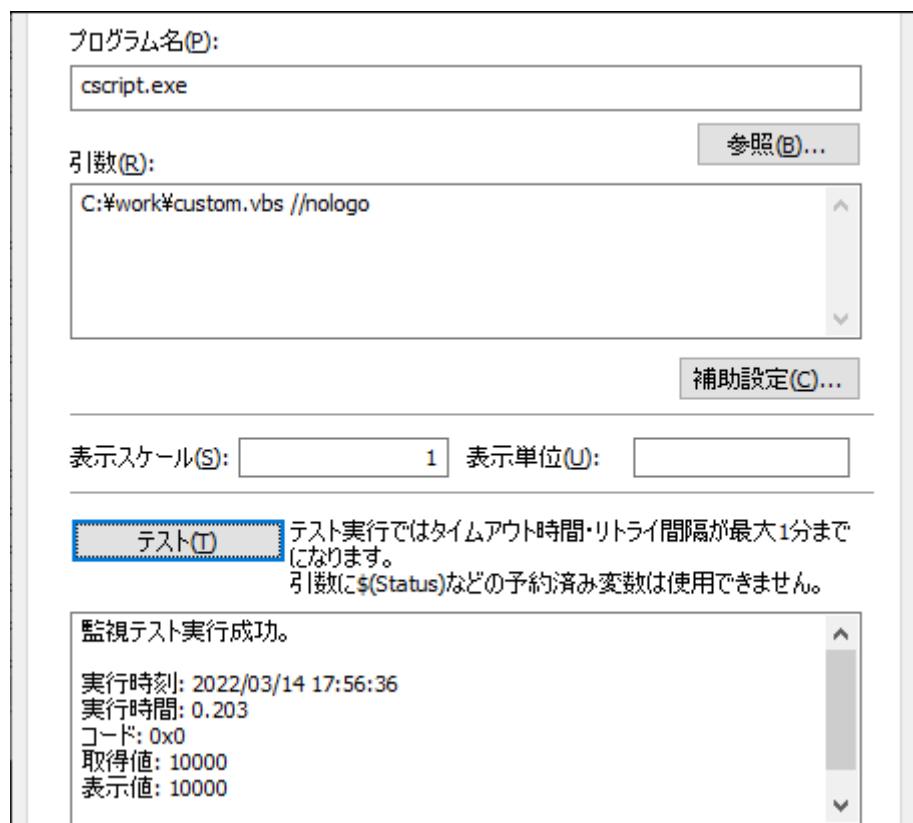


F. WSHのCscriptで実行するファイルの設定例

- プログラム名にcscript.exe、引数に実行するファイル名を指定します。
- WSHのCscriptで動作させる場合、エラー機能をoffにするため引数設定には必ず//nologoを記述します。
- 実行ファイルのサンプル ("custom.vbs") と設定、およびテスト実行結果は下記を参照してください。
本スクリプトは10000を取得値とするスクリプトです。

```
-----custom.vbsここから
Dim objStdOut '標準出力用オブジェクト
Dim intExitCode '終了コード
'標準出力用オブジェクトのインスタンス作成
Set objStdOut = Wscript.Stdout
objStdOut.WriteLine ("10000")
'インスタンスの破棄
Set objStdOut = Nothing
If Err.Number <> 0 Then
    intExitCode = 1 'エラー
Else
    intExitCode = 0 '正常
End If
'intExitCodeが終了コードになります。
Wscript.Quit (intExitCode)
-----custom.vbsここまで
```

[テスト実行結果]



第6章 カスタム監視補助

カスタム監視補助については、従来のカスタム監視を拡張した機能です。

設定画面はカスタム監視のUIをそのまま利用しており、特定の監視テンプレートを適用することで従来の監視項目とは異なる監視を行うことができます。

カスタム監視補助の設定は、別途用意されている補助画面上で実施し、引数を直接変更はしないようにしてください。変更された場合にはサポートの対象外となります。

1. カスタム監視補助用のテンプレート適用方法

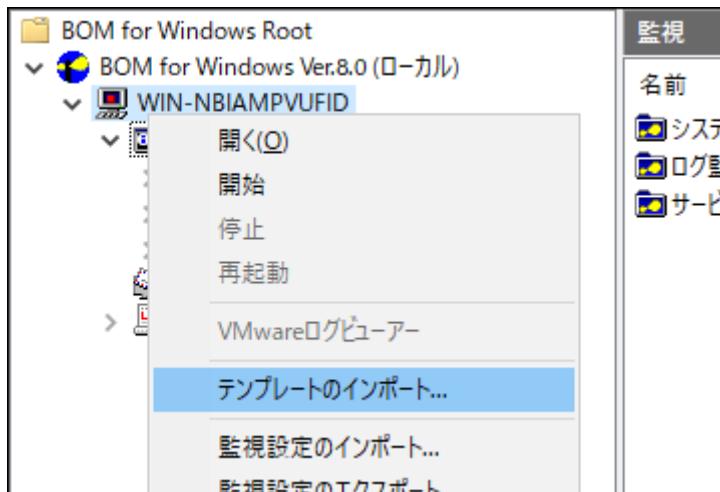
カスタム監視補助用テンプレートの適用方法は以下のとおりです。

※ 本内容は必要な手順のみを抜粋しています。テンプレートインポートの詳細手順については、[テンプレートのインポート](#)を参照してください

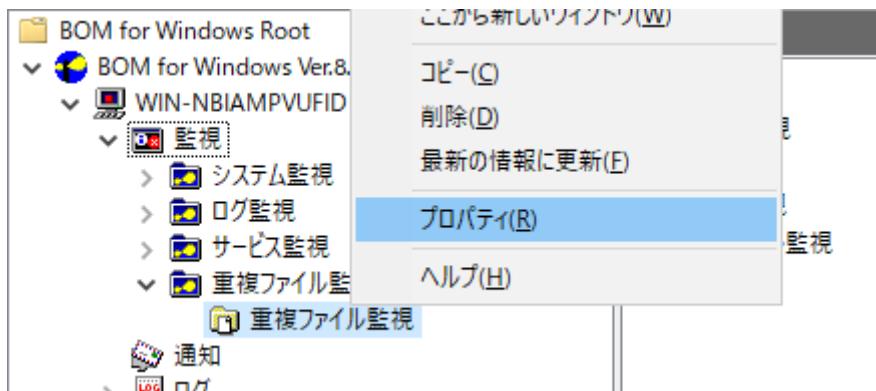
(1) カスタム監視補助用監視項目の作成

カスタム監視補助用監視項目を作成する手順は以下のとおりです。

1. スタートメニューより、"BOM 8.0 マネージャー"を起動します。
2. BOMマネージャーで"接続"をクリックし、監視コンピューターに接続します。
3. スコープペインでカスタム監視補助を使用するWindows監視インスタンスを選択し、右クリックメニューから"テンプレートのインポート"をクリックします。



4. "テンプレートのインポート"画面が開きます。"テンプレートフォルダー"で"BOMカスタム監視補助"を、"テンプレートの設定"でインポートしたいテンプレートを選択します。



5. [インポート]ボタンをクリックし、テンプレートをインポートします。

6. スコープペインにて選択したテンプレートの監視グループおよび監視項目が作成されたことを確認します。

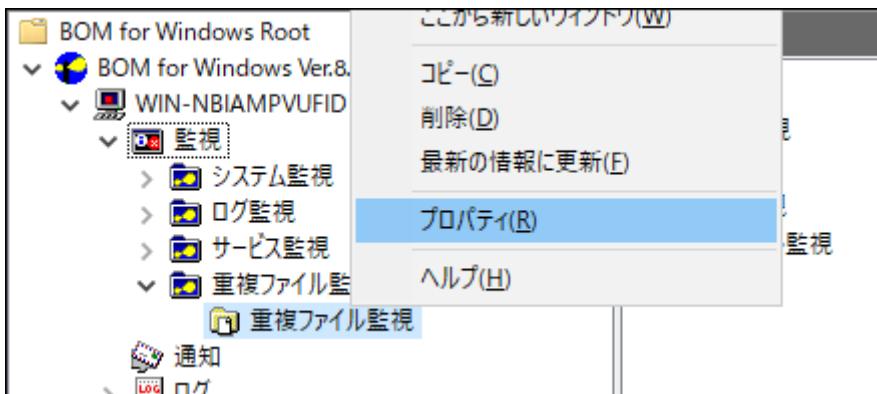
- インポートしたテンプレートが表示されない場合は、対象のインスタンスで"監視"ノードをクリックし、表示を更新してください。

2. カスタム監視補助の設定

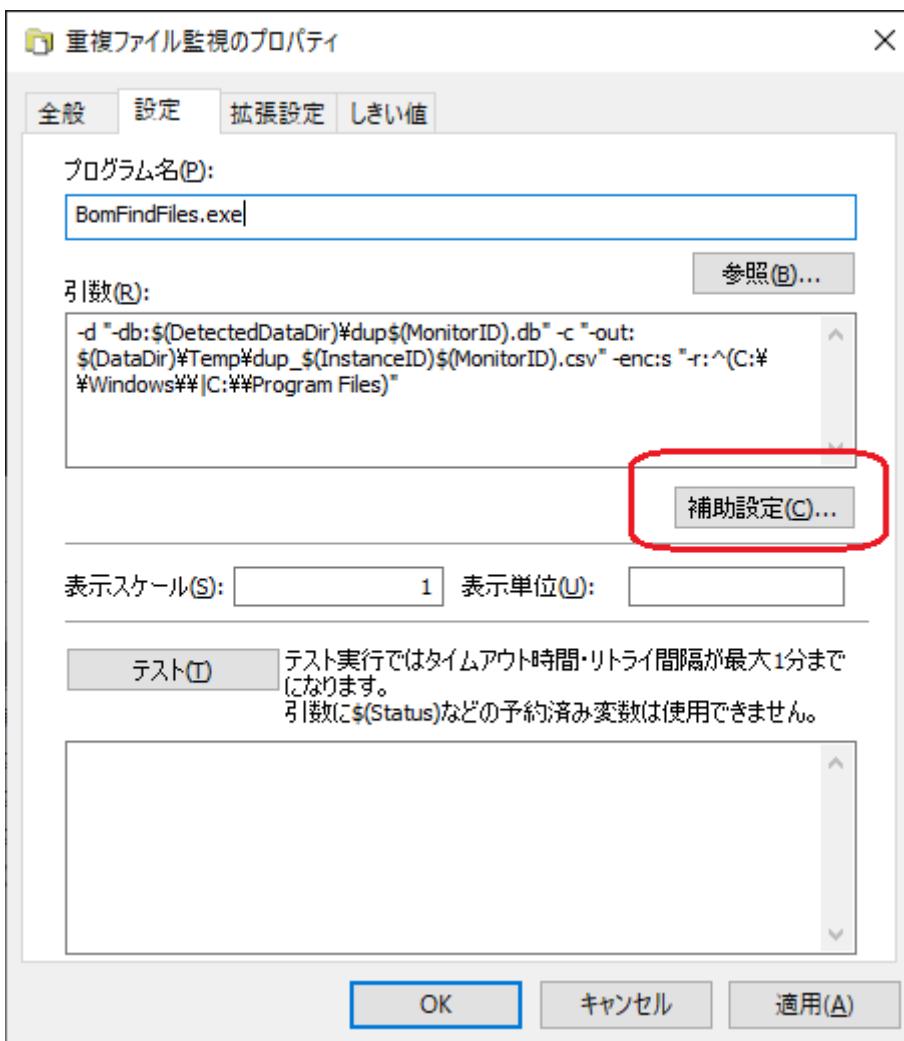
カスタム監視補助の設定は、カスタム監視項目の設定内容を保存した上で実施する必要があります。

以下の手順で作業を行ってください。

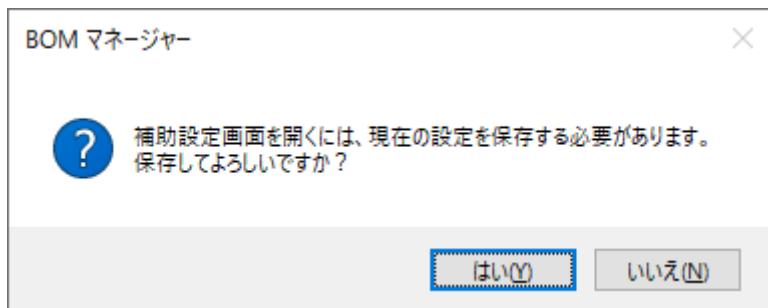
1. 設定する監視項目を選択し、右クリックメニューから"プロパティ"を選択します。



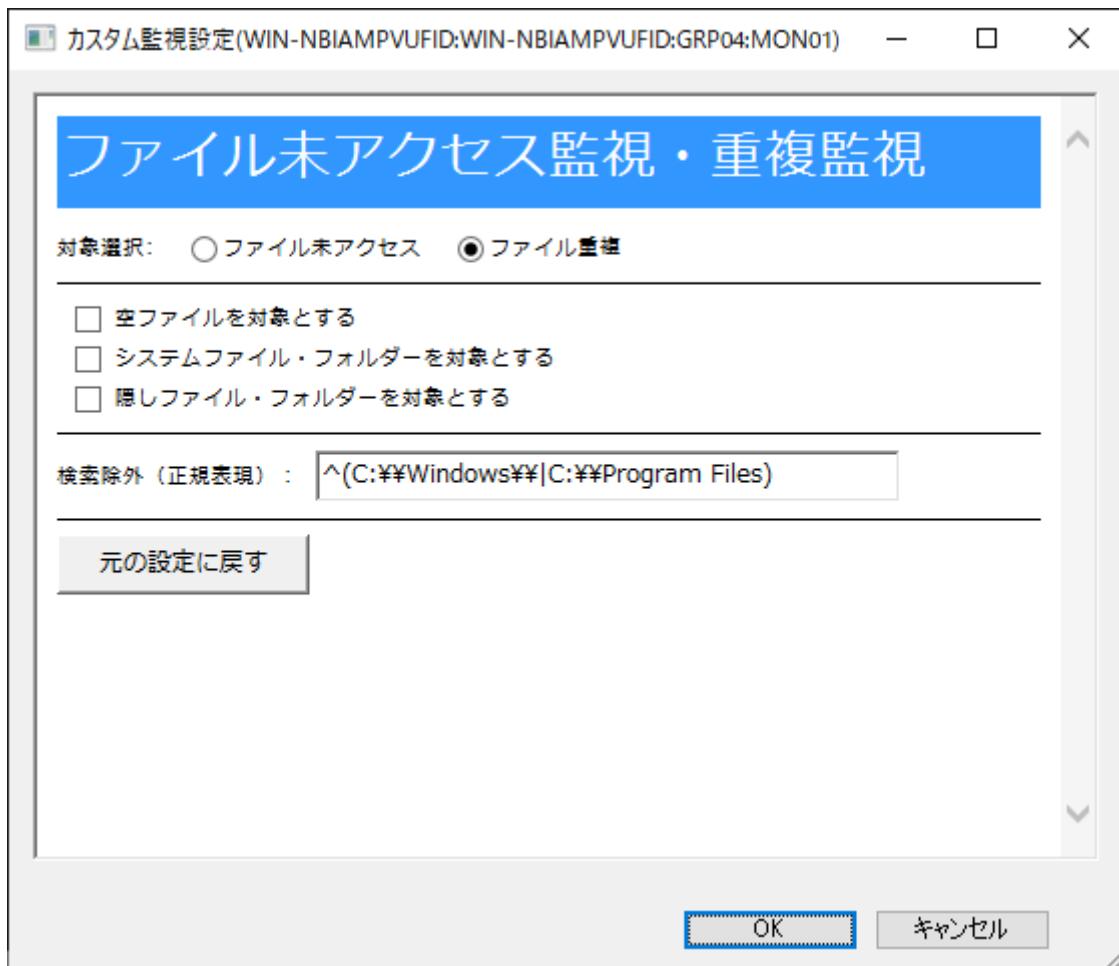
2. プロパティ画面から「設定」タブを選択後、[補助設定]ボタンをクリックします。



3. [補助設定]ボタンをクリックすると以下の要求が表示されます。[はい]ボタンをクリックして、カスタム監視の監視設定を保存します。



4. 保存が完了すると、選択した内容の補助画面が表示されます。



3. カスタム監視補助の詳細

(1) SNMP Get 監視

対象のテンプレート名 : **SNMP Get 監視**

SNMP Get 監視では、対象サーバーとOIDを指定することで、そのOIDに対応するオブジェクトの値を取得することができます。

- ※ SNMPバージョンによって設定内容が異なるため注意してください。
- ※ 本監視は代理監視機能に対応していません。ローカル監視のみ対応しています。
- ※ しきい値は、補助設定画面のしきい値の項目で設定してください。
(カスタム監視のプロパティで「しきい値」タブに設定されている値は変更しないでください。)
- ※ 対応するRFC番号は、2578,2579,2580です。
- ※ MIBファイルは以下のフォルダーへ格納してください。

```
C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config\snmp\mibs
```

- ※ 正常に読み込めないMIBファイルがあった場合、監視は失敗となり、以下のログファイルに詳細が記載されます。
監視が失敗した際はログファイルを確認してください。

```
C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config\snmp\logs\BomSnmpGet.txt
```

A. 共通設定



項目	説明
"SNMPバージョン"ラジオボタン (必須)	SNMPGet監視を行うSNMPバージョンを"v1","v2c","v3"から指定することが可能です。
"対象サーバー"フィールド (必須)	SNMPGetコマンドを送信する対象サーバーを指定します。
"取得するOID"フィールド (必須)	<p>"対象サーバー"フィールドで指定した対象サーバーから取得するOIDを、上限2000文字までで指定します。 複数のOIDを指定することはできません。複数を指定する場合は、SNMP Get監視を必要な件数分作成してください。</p> <p>SNMP TrapのOIDと、本フィールドで指定するSNMP GetのOIDは異なるため、SNMP TrapのOIDはSNMP Getに流用できません。対象とする機器で使用できるSNMP GetのOIDを確認した上で設定してください。</p> <p>OIDは部分一致ではなく完全一致で動作します。取得したいOIDの文字列をそのまま入力してください。</p>
"注意となる文字列 (正規表現)"フィールド (任意)	監視結果として注意となる文字列を正規表現を使用して指定することができます。 注意となる正規表現の指定は、完全一致ではなく部分一致です。

項目	説明
"危険となる文字列（正規表現）"フィールド (任意)	監視結果として危険となる文字列を正規表現を使用し指定することができます。危険となる正規表現の指定は、完全一致ではなく部分一致です。
"受信結果をログに出力する"チェックボックス (任意)	"受信結果をログに出力する"チェックボックスにチェックを入れることにより、受信した結果を出力することが可能です（※）。受信した結果を出力したくない場合には、チェックボックスのチェックを外してください。

※ 出力されたログは以下の場所に保存されます。（追記型）

監視インスタンスのログクリアを実施した場合、本ログも削除されます。

C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Instance\[インスタンス名]\DetectedData

B. v1 / v2cの追加設定

v1/v2c の追加設定

コミュニティ名 :

項目	説明
"コミュニティ名"フィールド (必須)	'対象サーバー'フィールドで指定した対象サーバーのうち、取得するコミュニティ名を指定します。 入力できる文字列の上限は255文字です。 入力不可文字については枠外を参照してください。

[入力不可文字]

¥、"、<、>、|、&、%、^、(半角スペース)

C. v3の追加設定

v3 の追加設定

エンジンID : 0X

ユーザー名 :

認証を利用する

認証方式 : 認証キー :

暗号化を利用する

暗号方式 : 暗号キー :

項目	説明
"エンジンID"フィールド (任意)	"対象サーバー"フィールドで指定したサーバーでエンジンIDを指定している場合に設定します。 RFCの規定に沿い、最大64文字までの入力が有効となります。
"ユーザー名"フィールド (必須)	"対象サーバー"フィールドで指定したサーバーで有効なユーザー名を指定します。
"認証を利用する"チェックボックス (任意)	認証を利用したい場合には、"認証を利用する"チェックボックスにチェックを入れます。
"認証方式"プルダウン (任意)	"認証を利用する"チェックボックスにチェックを入れた場合、認証方式を"MD5"または"SHA"から選択します。
"認証キー"フィールド (任意)	"認証方式"プルダウンで指定した暗号方式の認証キーを入力します。 (※)

項目	説明
"暗号化を利用する"チェックボックス（任意）	暗号化を利用したい場合には、"暗号化を利用する"チェックボックスにチェックをいれます。
"暗号方式"プルダウン（任意）	"暗号化を利用する"チェックボックスにチェックを入れた場合、暗号方式を"DES"、"AES"から選択します。
"暗号キー"フィールド（任意）	暗号化/複合するときに使用するキーを入力します。 (※)

※ 認証キーの値は、設定値をローカルの設定ファイルに保存します。

通信は暗号化された状態で行われますが、設定ファイルは暗号化されません。

(2) 重複ファイル監視

対象のテンプレート名 : 重複ファイル監視

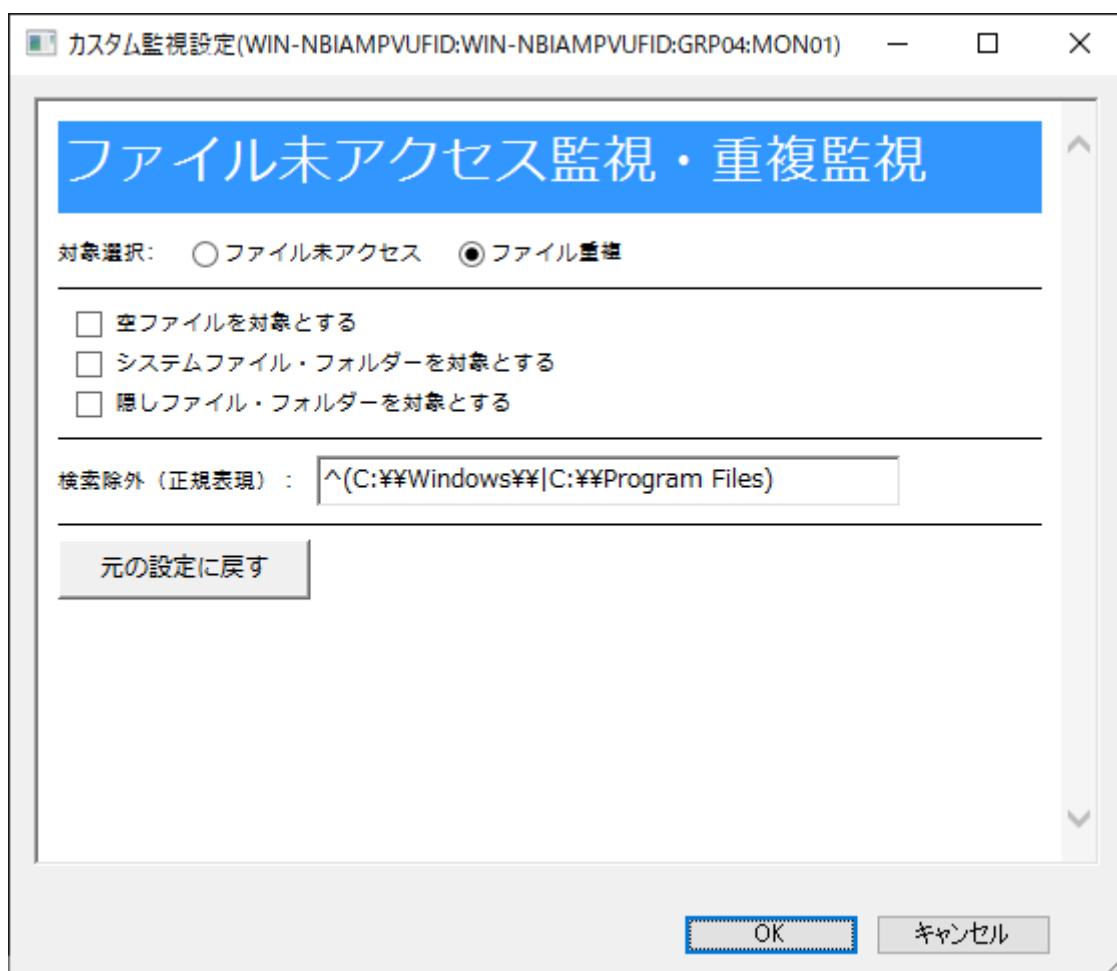
重複ファイル監視は、監視対象の論理ドライブへ対し、重複しているファイル名、ファイル属性（システムファイル、隠し属性）を基に監視を行うことが可能です。

※ 本監視は代理監視機能に対応していません。ローカル監視のみ対応しています。

※ 監視した結果は以下のフォルダーにcsv形式で格納されており、CsvViewerを使用して確認することも可能です。

CsvViewerの詳細については、'CsvViewerについて'を参照してください。

C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Temp



項目	説明
"空ファイルを対象とする"チェックボックス	当欄にチェックを入れることにより、空ファイルを監視対象に含めることができます。 空ファイルを監視対象に含めたくない場合には、チェックボックスのチェックを外してください。
"システムファイル・フォルダーを対象とする"チェックボックス	当欄にチェックを入れることにより、システムファイル・フォルダーを監視対象に含めることができます。 システムファイル・フォルダーを監視対象に含めたくない場合には、チェックボックスのチェックを外してください。

項目	説明
"隠しファイル・フォルダーを対象とする"チェックボックス	<p>当欄にチェックを入れることにより、隠しファイル・フォルダーを監視対象に含めることができます。</p> <p>隠しファイル・フォルダーを監視対象に含めたくない場合には、チェックボックスのチェックを外してください。</p>
"検索除外（正規表現）"フィールド	監視対象から除外したいフォルダー・ファイル・または文字列を、正規表現を使用して指定できます。

(3) 未アクセスファイル監視

対象のテンプレート名 : **未アクセスファイル監視**

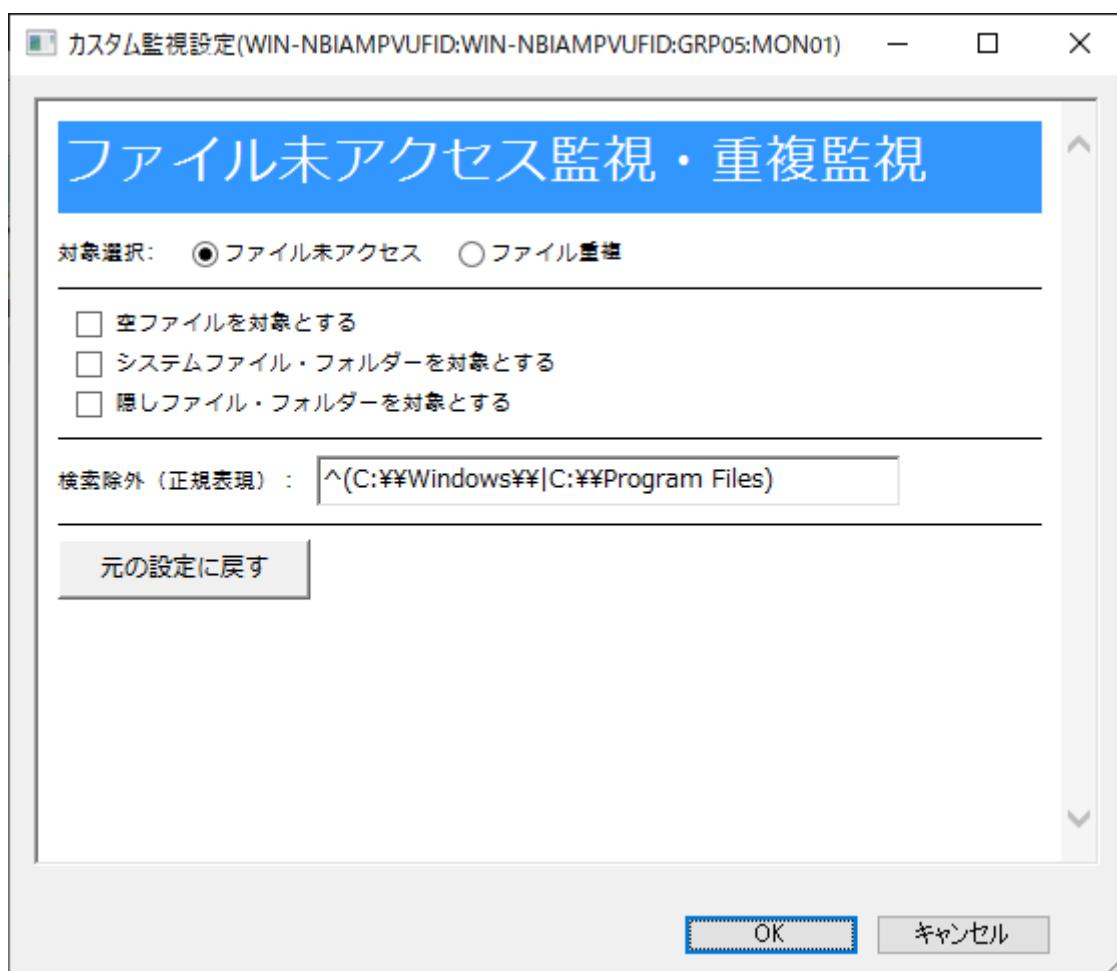
未アクセスファイル監視は、監視対象の論理ドライブへ対し、最終アクセス日が6か月以上前のファイルを対象に監視を行うことが可能です。

※ 本監視は代理監視機能に対応していません。ローカル監視のみ対応しています。

※ 監視した結果は以下のフォルダーにcsv形式で格納されており、CsvViewerを使用して確認することも可能です。

CsvViewerの詳細については、'CsvViewerについて'を参照してください。

C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Temp



項目	説明
"空ファイルを対象とする"チェックボックス	当欄にチェックを入れることにより、空ファイルを監視対象に含めることができます。 空ファイルを監視対象に含めたくない場合には、チェックボックスのチェックを外してください。
"システムファイル・フォルダーを対象とする"チェックボックス	当欄にチェックを入れることにより、システムファイル・フォルダーを監視対象に含めることができます。 システムファイル・フォルダーを監視対象に含めたくない場合には、チェックボックスのチェックを外してください。

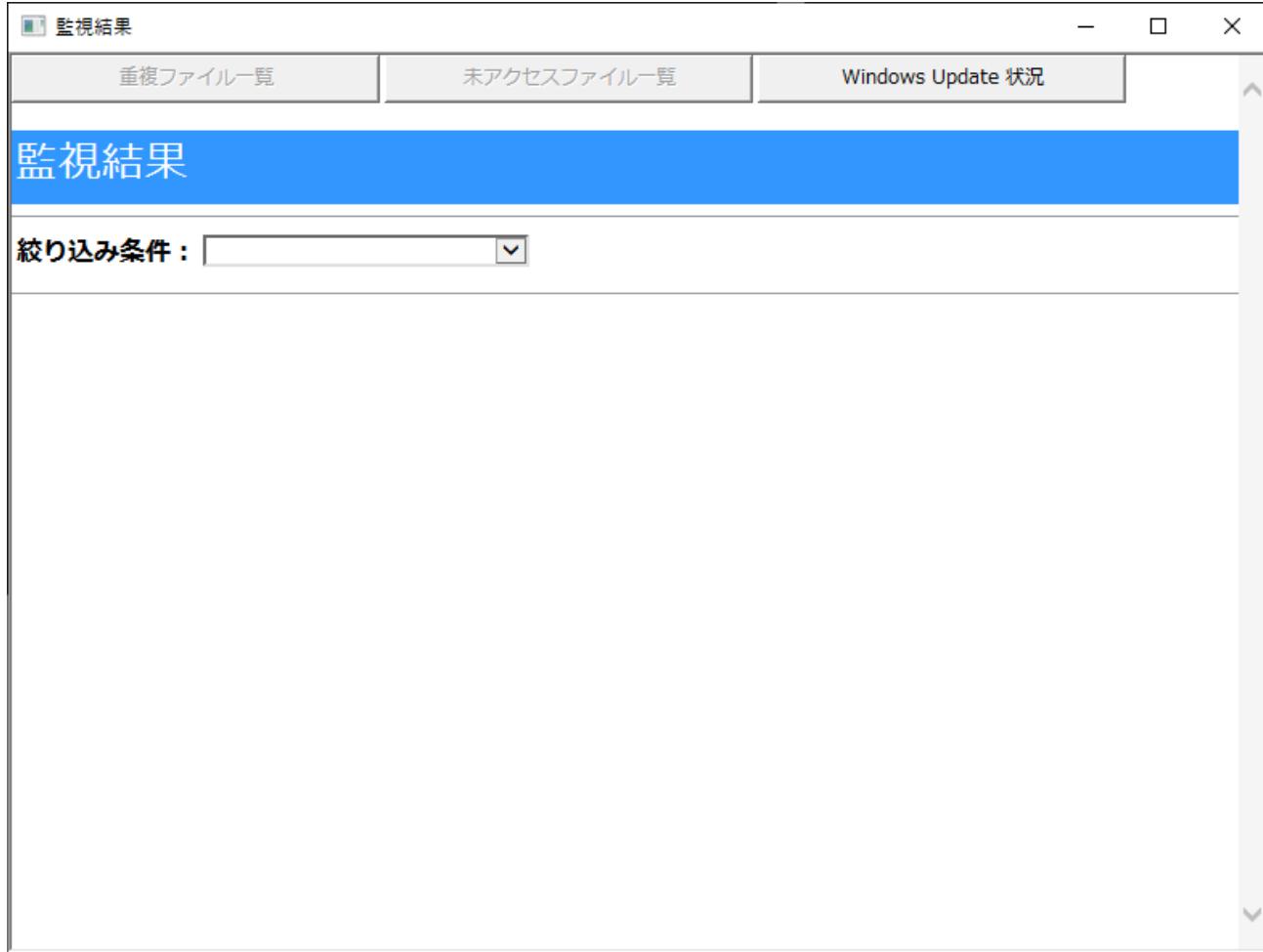
項目	説明
"隠しファイル・フォルダーを対象とする"チェックボックス	<p>当欄にチェックを入れることにより、隠しファイル・フォルダーを監視対象に含めることができます。</p> <p>隠しファイル・フォルダーを監視対象に含めたくない場合には、チェックボックスのチェックを外してください。</p>
"検索除外（正規表現）"フィールド	監視対象から除外したいフォルダー・ファイル・または文字列を、正規表現を使用して指定できます。

(4) CsvViewerについて

重複ファイル監視や未アクセスファイル監視、Windows Update監視で監視した結果は、CsvViewerを使用することにより確認できます。

A. CsvViewerの起動方法

1. BOM 8.0のインストールパッケージに格納された、"TOOLS"フォルダーを開きます。
2. "TOOLS"フォルダー内にある"CsvViewer"フォルダーを選択し、デスクトップなど任意の場所へコピーします。
3. コピー完了後、"CsvViewer"フォルダーを開き、"start.bat"ファイルを実行します。
4. "start.bat"ファイルを起動すると、監視結果ウィンドウが開きます。



B. CsvViewerの操作方法

1. 確認したいログを、画面上部にある以下のボタンから選択します。
 - 重複ファイル一覧
 - 未アクセスファイル一覧
 - Windows Update 状況

2. 該当するログが画面上に出力されます。

監視結果	
重複ファイル一覧	
未アクセスファイル一覧	
Windows Update 状況	
項目番号	ファイル
1	C:\ProgramData\Package Cache\{4938A647-7EA4-4496-A843-5E338B91C07E}\v15.0.20 ¥x86¥ssms_is.msi
2	C:\ProgramData\Microsoft\Windows\AppxProvisioning.xml
3	C:\ProgramData\Microsoft\UEV\InboxTemplates\DesktopSettings2013.xml
4	C:\ProgramData\Microsoft\UEV\InboxTemplates\EaseOfAccessSettings2013.xml
5	C:\ProgramData\Microsoft\UEV\InboxTemplates\MicrosoftOffice2010Win32.xml

3. 必要に応じて、プルダウンメニューから絞り込み条件を選択します。

監視結果	
重複ファイル一覧	
未アクセスファイル一覧	
Windows Update 状況	
項目番号	ファイル
未アクセス期間による絞り込み :	
6ヶ月以上未アクセス	
12ヶ月以上未アクセス	
18ヶ月以上未アクセス	
24ヶ月以上未アクセス	

4. 選択後、画面下部に絞り込み結果が出力されます。

監視結果

重複ファイル一覧 未アクセスファイル一覧 Windows Update 状況

未アクセスファイル 監視結果

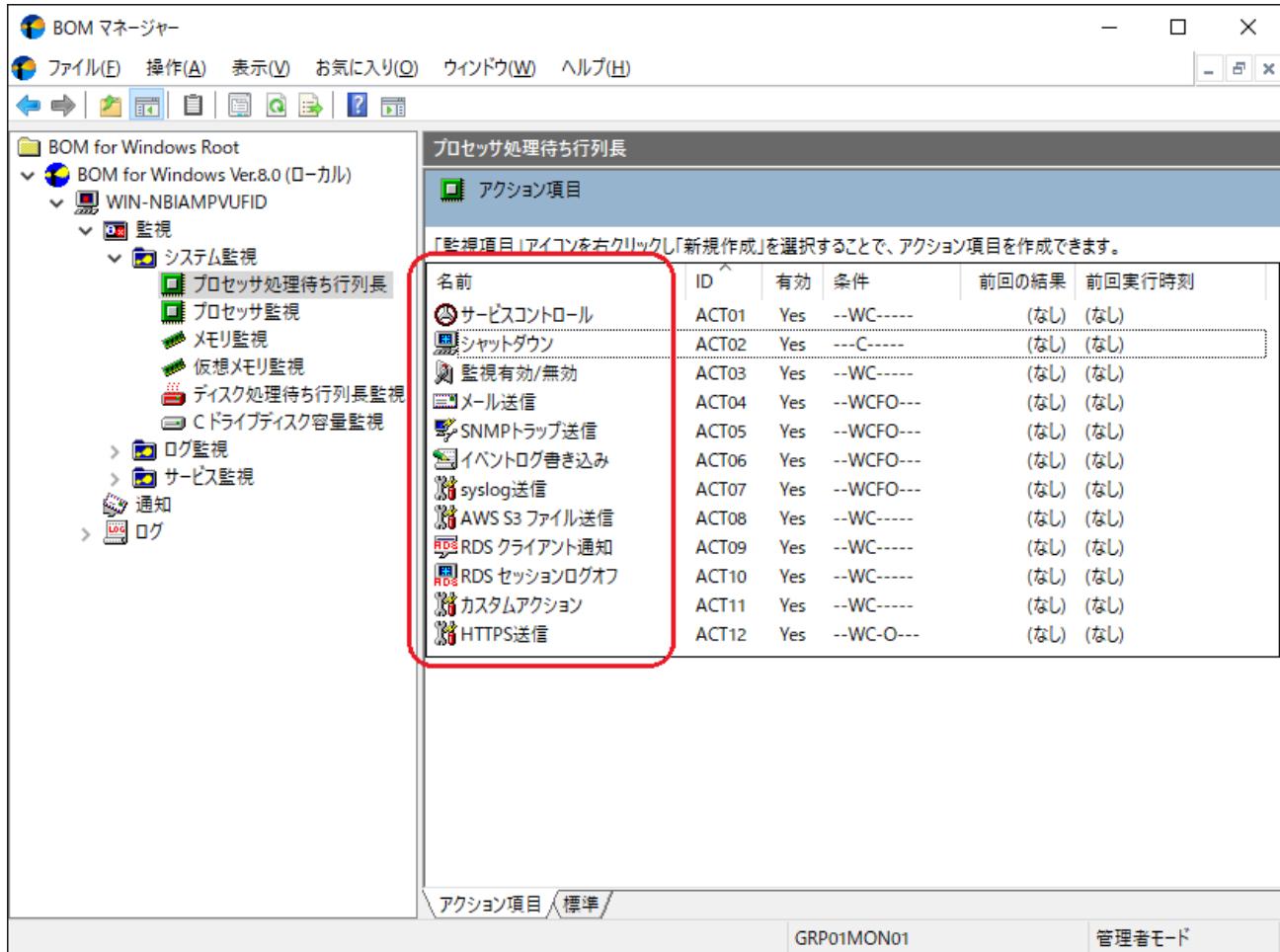
未アクセス期間による絞り込み : 12ヶ月以上未アクセス

項目番号	ファイル
1	C:\ProgramData\Package Cache\{853997DA-6FCB-4FB9-918E-E0FF881FAF65}\v17.7.2.1\msodbcsql.msi
2	C:\ProgramData\Package Cache\{9D6F8754-28E9-4940-B319-3FC8588CF18F}\v18.5.0.0\msoledbsql.msi
3	C:\SQL2019\Express_JPN\v1041_JPN_LP\x64\v1041\LICENSE_DEV.RTF
4	C:\SQL2019\Express_JPN\v1041_JPN_LP\x64\v1041\LICENSE_EVAL.RTF
5	C:\SQL2019\Express_JPN\v1041_JPN_LP\x64\v1041\LICENSE_EVAL.RTF

第7章 アクション項目

1. アクション項目の解説

アクション項目とは、'監視項目'の監視項目のステータスである"正常"、"注意"、"危険"、"失敗"をトリガーに実行させることができる特定のアクションです。



- アクション項目の変数について

メール送信など、各アクションで使用する変数は、必ず事前にテストを行って内容を確認してから使用してください。

- アクションが実行中あるいは実行のキューに入っている間に監視を停止した場合の動作について

アクションが実行中あるいは実行のキューに入っている間に監視を停止した場合には、下記の3つの結果が想定されます。

- 停止してから60秒を超えて実行されずキューに入っていた場合、スキップされた旨のエラーメッセージがヒストリーログに表示されます。
- 停止してから60秒を超えて実行中のままの場合、結果が戻らない旨のエラーメッセージがヒストリーログに表示されます。
- 停止してから60秒以内に実行が完了できた場合、完了メッセージがヒストリーログに表示されます。

- アクションの実行には、その実行内容に応じた時間を要します。そのため、同じアクションが実行に要する時間よりも短い間隔で連続実行される状況では、アクションが正常に実行されない可能性があります。アクション実行の状況は実環境で確認し、必要に応じて実行間隔の調整を行ってください。

例：メール送信に20秒前後かかる環境において、5秒間隔でPing監視を実行し、"注意"や"危険"を検知した際は毎回メールを送信する。

- 上記の設定では、"注意"や"危険"が連続した際に5秒間隔でメール送信が連続実行されます。このような場合、以下のような設定の変更を推奨します。
 - Ping監視の間隔を延ばす。
 - 検知時のメール送信を"毎回"ではなく、"変化時のみ"にする。

2. アクション項目の作成

アクション項目は、個々の監視項目に紐づく形で作成します。

具体的な作成方法は以下のとおりです。

1. アクション項目を設定したい監視項目を右クリックし、コンテキストメニューの"新規作成"をクリックします。
 2. 表示されたコンテキストメニューから実行させたいアクション ("サービスコントロール"、"シャットダウン"など) をクリックします。
 3. 選択したアクション項目が作成されます。
- 対象の監視項目をクリックすると、追加したアクション項目がBOMマネージャーのリザルトペインに表示されます。
4. 必要に応じてアクション項目の設定を変更します。

以降のセクションでは、アクション項目を有効にする方法、および使用可能なアクション項目とその設定値の詳細について解説します。

「全般」タブと「実行条件」タブは、"シャットダウン"アクション項目の以下の点を除き、すべてのアクション項目で共通です。

- シャットダウンアクション項目は、「全般」タブの"1度だけ実行（実行後、自動的にアクションが無効になります）"のチェックボックスに既定値でチェックが入っています。

その他のタブは、アクション項目によって異なります。

3. アクション項目のコピー

アクション項目は以下の手順でコピーすることができます。

1. 対象のアクション項目を右クリックし、コンテキストメニューの"コピー"をクリックします。
2. コピー先の監視項目のリザルトペインを右クリックし、コンテキストメニューの"貼り付け"をクリックします。
 - インスタンス間でもアクション項目を"コピー"し、"貼り付け"することができます。
 - リモート接続時のスナップインノード間の監視項目のコピーはできません。

アクション項目をコピーすると、コピー先の監視項目のリザルトペインに表示されます。コピーした項目は同じ名前とプロパティ設定値を持っているため、必要に応じてアクション項目の"プロパティ"画面より設定の変更を行ってください。

4. アクション項目を有効にする

アクション項目を実行するためには、"有効"状態にしておく必要があります。

アクション項目は、下記のいずれかの方法で"有効"にできます。

- A. "アクション項目"を右クリックし、コンテキストメニューの"有効"をクリックする。
 - B. "アクション項目"を右クリック→コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックすると開く"プロパティ"画面で、"有効"チェックボックスにチェックを入れる。
 - C. リザルトペインで"アクション項目"をダブルクリックして"プロパティ"画面を表示させ、"有効"チェックボックスにチェックを入れる。
 - D. "アクション項目"をクリックし、リザルトペインの画面下部にある"有効"をクリックする。
-
- アクション項目を"無効"にしたい際には、上記A.、B.、C.いずれかの手順で"無効"を選択します。
 - 各アクションの「全般」タブの下部"1回のみ実行（実行後、自動的にアクションが無効となります）"チェックボックスにチェックを入れた場合、該当のアクション項目は1回のみ実行された後で自動的に"無効"になり、以降は実行されなくなります。

問題解消後などにアクションを再び実行させる場合、上記の方法で改めて"有効"にする必要があります。

5. アクション項目のログ

(1) リザルトペイン表示

BOMマネージャーに登録された各監視項目をクリックすると、対象の監視項目に登録された"アクション項目"の状態がリザルトペインに表示されます。

The screenshot shows the BOM Manager interface. On the left, the navigation tree displays 'BOM for Windows Root' and 'WIN-NBIAMPVUFID'. Under 'WIN-NBIAMPVUFID', there are several monitoring categories: '監視' (Monitoring), 'システム監視' (System Monitoring), 'ログ監視' (Log Monitoring), 'サービス監視' (Service Monitoring), '通知' (Notification), and 'ログ' (Log). The 'システム監視' category is expanded, showing sub-items like 'プロセッサ処理待ち行列長' (Processor Queue Length), 'メモリ監視' (Memory Monitoring), '仮想メモリ監視' (Virtual Memory Monitoring), 'ディスク処理待ち行列長監視' (Disk Queue Length Monitoring), 'C ドライブディスク容量監視' (C Drive Disk Capacity Monitoring), 'ログ監視' (Log Monitoring), and 'サービス監視' (Service Monitoring). The 'ログ' category is collapsed. On the right, the main window title is 'プロセッサ処理待ち行列長' (Processor Queue Length). Below it, a sub-section titled 'アクション項目' (Action Item) is shown with the message: '監視項目アイコンを右クリックし「新規作成」を選択することで、アクション項目を作成できます。' (Right-click the monitoring item icon and select 'New Creation' to create an action item). A table lists 12 action items:

名前	ID	有効	条件	前回の結果	前回実行時刻
サービスコントロール	ACT01	Yes	--WC-----	(なし)	(なし)
シャットダウン	ACT02	Yes	---C-----	(なし)	(なし)
監視有効/無効	ACT03	Yes	--WC-----	(なし)	(なし)
メール送信	ACT04	Yes	--WCFO---	(なし)	(なし)
SNMPトラップ送信	ACT05	Yes	--WCFO---	(なし)	(なし)
イベントログ書き込み	ACT06	Yes	--WCFO---	(なし)	(なし)
syslog送信	ACT07	Yes	--WCFO---	(なし)	(なし)
AWS S3 ファイル送信	ACT08	Yes	--WC-----	(なし)	(なし)
RDS クライアント通知	ACT09	Yes	--WC-----	(なし)	(なし)
RDS セッションログオフ	ACT10	Yes	--WC-----	(なし)	(なし)
カスタムアクション	ACT11	Yes	--WC-----	(なし)	(なし)
HTTPS送信	ACT12	Yes	--WC-O---	(なし)	(なし)

At the bottom of the main window, there are tabs for 'アクション項目' (Action Item) and '標準' (Standard). The status bar shows 'GRP01MON01' and '管理者モード' (Administrator Mode).

列名	説明
名前	実行されるアクション項目がリストされます。
ID	アクション項目の"ID"がリストされます。
有効	アクション項目が"有効"か"無効"かが表示されます。
条件	アクション項目を実行させるために設定した条件が、リスト表示されます。 詳細は別表を参照してください。
前回の結果	アクション項目の実行結果がリストされます。
前回実行時刻	アクション項目が実行された日時がリストされます。

[条件]

条件記号	条件名	アクション項目の"プロパティ"の設定内容
S	逐次	"アクションの逐次処理を行う"チェックボックスにチェックが入っている状態
N	正常	"正常"チェックボックスにチェックが入っている状態

条件記号	条件名	アクション項目の“プロパティ”的定内容
W	注意	“注意”チェックボックスにチェックが入っている状態
C	危険	“危険”チェックボックスにチェックが入っている状態
F	失敗	“失敗”チェックボックスにチェックが入っている状態
O	変化時のみ	“変化時のみ”ラジオボタンを選択した状態
<	N回目まで	“回数指定”ラジオボタンを選択し、“回目まで”を選択した状態
>	N回目以降	“回数指定”ラジオボタンを選択し、“回目以降”を選択した状態
=	N回目のみ	“回数指定”ラジオボタンを選択し、“回目のみ”を選択した状態
NNN (数値)	実行回数 (NNN回)	“回数指定”ラジオボタンを選択した際の実行回数

(2) ログの表示

アクション項目の実行状況は、ログで確認できます。

- アクション項目の実行ログは、以下のBOMログビューアーの他に、BOMマネージャーのヒストリーログからも確認することができます。ヒストリーログの詳細は、「[ヒストリー](#)」を参照してください。

名前	結果	実行時刻	コード	実行時間(秒)
イベントログ書き込み	成功	2022/03/14 19:32:03	0	0.109
イベントログ書き込み	成功	2022/03/14 19:31:03	0	0.094
イベントログ書き込み	成功	2022/03/14 19:30:03	0	0.109
イベントログ書き込み	成功	2022/03/14 19:29:03	0	0.312
イベントログ書き込み	成功	2022/03/14 19:28:03	0	0.078
イベントログ書き込み	成功	2022/03/14 19:27:03	0	0.125
イベントログ書き込み	成功	2022/03/14 19:26:05	0	0.140

- BOMマネージャー上で監視項目をクリックし、リザルトペインにアクション項目を表示します。
- アクション項目を右クリックし、コンテキストメニューの"ログの表示..."をクリックして、アクション項目の"BOM ログビューアー"画面を表示します。
 - 一度に複数の"BOMログビューアー"画面を開くこともできます。
 - 1アクション項目あたりの最大ログ蓄積量の既定値は15000件です。

項目・列名	説明
タイトルバー	現在表示されているインスタンス、監視グループ、監視項目、およびアクション項目の名前が表示されます。
名前	実行されたアクション項目がリストされます。
結果	アクション項目の実行結果が、"成功"、"エラー"、"失敗"のいずれかでリストされます。 エラー：アクションの実行モジュールは正常に動作し、結果的に期待される動作をしなかった場合 失敗：アクションの実行モジュールそのものが正常に動作しなかった場合 カスタムアクションでは指定された外部アプリケーションの動作に依存するため、上記の動作とならない場合もあります。
実行時刻	アクション項目が実行された日時がリストされます。
コード	エラーコードがリストされます。この値は、アクション項目が正常に実行された場合は"0"となります。
実行時間	アクション項目を完了するまでにかかった時間が秒単位でリストされます。

(3) ログ蓄積量の最大件数の変更

アクション項目のログは1アクション項目あたり既定値で15000件まで保存できますが、下記のiniファイルの一部を書き換えることで最大件数を変更することができます。なお、設定は最初にアクション項目のログが作成される場合に有効となります。

ログが既にある場合に最大件数を変更するには、まず'[各種ログのクリア](#)'の手順でアクション項目のログを消去し、下記のiniファイルの設定を変更してから、BOMヘルパーサービス（BOM8Helper）を再起動してください。

- iniファイルの保存場所

```
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config\  
ファイル名 : MxHelper.ini
```

- iniファイルの設定変更箇所

```
[Option]  
MaxActLog = 15000
```

- ・上記は既定値です。数値部分を変更することで、保存できる件数を変更できます。

6. アクション項目におけるローカル監視と代理監視の違い

ローカル監視（自立分散監視）の場合、監視元であるBOMと監視対象は同一の環境であり、アクション項目で設定されたアクションや実行プログラムはローカルコンピューター上で実行されます。

これに対して代理監視の場合、アクション項目によりアクションや実行プログラムの実行対象が異なります。下表を参照してください。

アクション名	監視元のコンピューター	代理監視先のコンピューター
サービスコントロール	—	代理監視先コンピューターのサービスを制御します。
シャットダウン	—	代理監視先コンピューターをシャットダウンします。
監視 有効/無効	監視元コンピューター上で、代理監視先コンピューターに対する監視ON/OFFを変更します。	—
メール送信	監視元コンピューターから、指定したSMTPサーバーに送信します。ファイル添付する場合は、監視元コンピューター上のファイルを指定してください。	—
SNMPトラップ送信	監視元コンピューターから、指定したSNMPマネージャーに送信します。送信元は監視元コンピューターのIPアドレスになります。	—
イベントログ書き込み	代理監視先コンピューターで検知した内容を、監視元コンピューターのイベントログに書込みます。	—
syslog送信	監視元コンピューターから、指定したsyslog受信サーバーに送信します。	—
AWS S3 ファイル送信	監視元コンピューターから、指定したAWS S3バケットに監視元コンピューター上のファイルを送信します。	—
カスタムアクション	監視元コンピューター上の実行プログラムを、監視元コンピューター上で実行します。	(※)
HTTPS送信	監視元コンピューターから、監視元コンピューター上のファイルをHTTPSプロトコルで送信します。	—

※ カスタムアクションによって代理監視先に対して何らかの働きかけを行いたい場合は、指定する実行プログラムそのものが代理監視先に対して働きかけられるよう作成されている必要があります。

- "RDS クライアント通知"アクションおよび、"RDS セッションログオフ"アクションはローカル監視インスタンスでのみ利用できます。

7. アクション項目の詳細

(1) アクション項目の種類

BOM 8.0で使用できるアクション項目は、下記の12種類です。

オプション製品をインストールしライセンスを適用することで、オプション製品固有のアクション項目が追加で使用できるようになります。オプション製品固有のアクション項目の詳細は各オプション製品のユーザーズマニュアルを参照ください。

- リカバリーアクション系：3種類

アイコン	アクション項目名	説明
	サービスコントロール	サービスの開始/停止/再起動を制御
	シャットダウン	Windowsのシャットダウン/再起動を制御
	監視 有効/無効	監視グループ/監視項目の有効化/無効化制御

- 通知アクション系：4種類

アイコン	アクション項目名	説明
	メール送信	SMTP形式のメール通知
	SNMPトラップ送信	SNMP形式のトラップ送信による通知
	イベントログ書き込み	Windowsイベントログへの書き込みによる通知
	syslog送信	syslogサーバーへ監視結果を送信

- その他のアクション系：5種類

アイコン	アクション項目名	説明
	AWS S3 ファイル送信	Amazon S3および、Amazon S3互換ストレージ（※1）へ、任意のファイルを送信
	RDS クライアント通知（※2）	接続中のクライアントに対して、通知メッセージを送信することができます。
	RDS セッションログオフ（※2）	指定した条件に該当するステータスのセッションを強制的にログオフします。
	HTTPS送信	HTTPSプロトコルを使用したファイル/通知の送信
	カスタムアクション	外部アプリケーションを利用した制御/通知

※1 Amazon S3互換ストレージについて、API準拠をうたうすべてのストレージでの動作を保証するものではありません。

弊社では、クラウディアン株式会社のCLOUDIAN HYPERSTOREについて動作確認を取っており、今後の対応確認情報は弊社ウェブサイトで随時公開します。

※2 本アクションは代理監視機能に対応していません。ローカル監視インスタンスのみで利用可能です。

(2) メール送信とSNMPトラップ送信に必要な環境設定

BOM 8.0で使用できるアクション項目のうち、メール送信とSNMPトラップ送信は、"BOM for Windows Ver.8.0（□一カル）のプロパティ"画面より、事前に下記の設定を行う必要があります。

- メール送信の場合

メールを送信するために必要なSMTPサーバーの情報。詳細は'[SMTP情報の設定](#)'を参照してください。

- SNMPトラップ送信の場合

BOM 8.0より送信したSNMPトラップを受信させるSNMPマネージャーの情報。詳細は'[SNMP情報の設定](#)'を参照してください。

(3) アクション項目の概要

アクション項目は、以下の操作で"プロパティ"画面を表示することができます。

アクション項目を意図するように動作させるため、この"プロパティ"画面で詳細な設定を行う必要があります。

- 設定を行いたいアクション項目を右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリック
- リザルトペインに表示された、設定を行いたいアクション項目をクリックし、画面下部の"プロパティ"をクリック
- リザルトペインに表示された、設定を行いたいアクション項目をダブルクリック

A. 基本操作

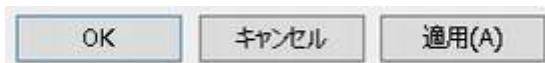
- タブ

"プロパティ"画面は、「全般」、「実行条件」、「設定」などのタブで構成されています。それぞれのタブをクリックすることで、該当するタブが表示され、設定を変更できます。



- 変更した設定の反映と破棄

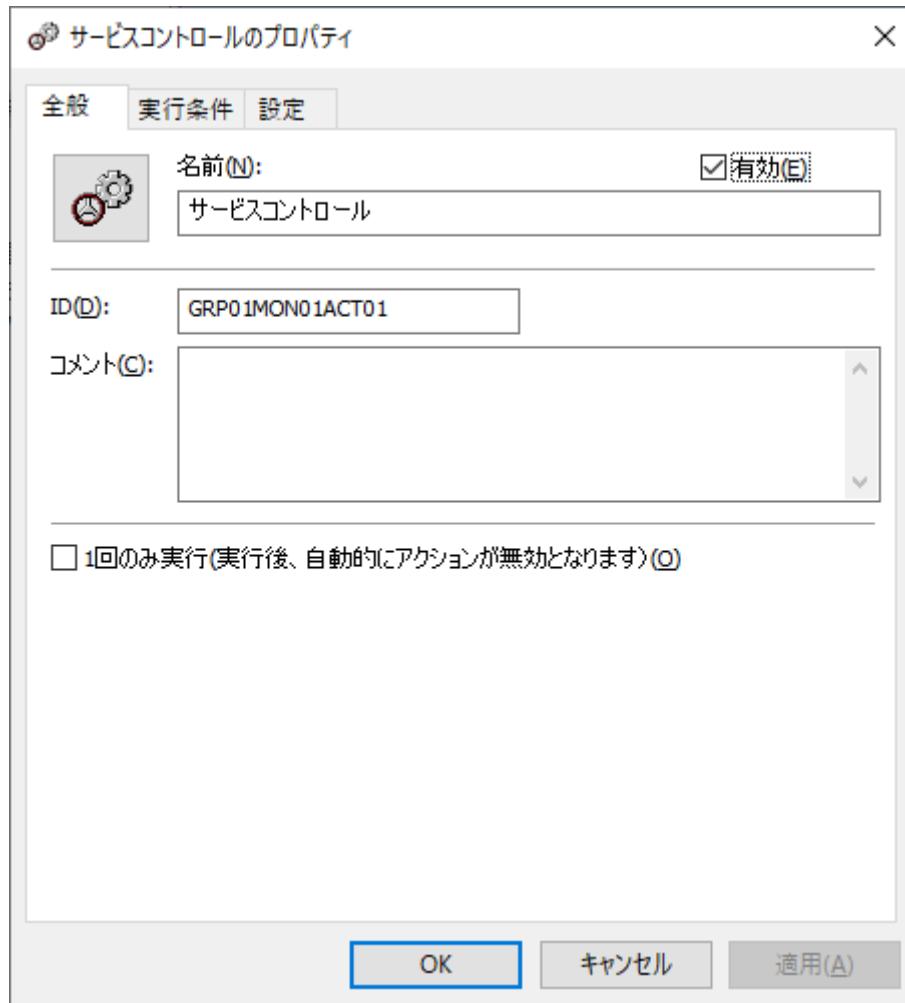
変更した設定は、[OK]ボタン、または[適用]ボタンをクリックすることでBOM 8.0に反映することができます。変更した設定を破棄したい場合には[キャンセル]ボタンをクリックします。



B. 「全般」タブ

「全般」タブは、"アイコン"、"ID"、"名前"に設定されている値を除き、すべてのアクション項目で共通です。

「全般」タブに登場するアクション項目の基本概念に関する詳細は、'アクション項目を有効にする'もあわせて参考してください。



設定項目	説明
[アイコン]ボタン	[アイコン]ボタンはアクション項目で設定されているアイコンが表示され、既定ではアクション項目の種類に合わせたアイコンが設定されています。 [アイコン]ボタンをクリックすることで、アイコンを変更するための"アイコンの選択"ダイアログを表示することができます。"アイコンの選択"ダイアログにて変更したいアイコンを選択し、[OK]ボタンをクリックすることでアイコンを変更できます。
"有効"チェックボックス	"有効"チェックボックスにチェックを入れることで、アクションを実行します。 既定では"有効"チェックボックスにチェックが入っています。アクションを実行しない場合は、"有効"チェックボックスのチェックを外します。
"名前"欄	アクション項目名を入力します。既定値としてアクション項目の種類と同じ名称が入力されています。 必要に応じて、わかりやすい名称に変更してください。
"ID"欄	監視グループ番号と監視項目番号とアクション項目番号を含む、アクション項目IDが表示されます。アクション項目IDは、インスタンス内でアクション項目ごとに一意になるように、BOM 8.0が自動的に設定します。

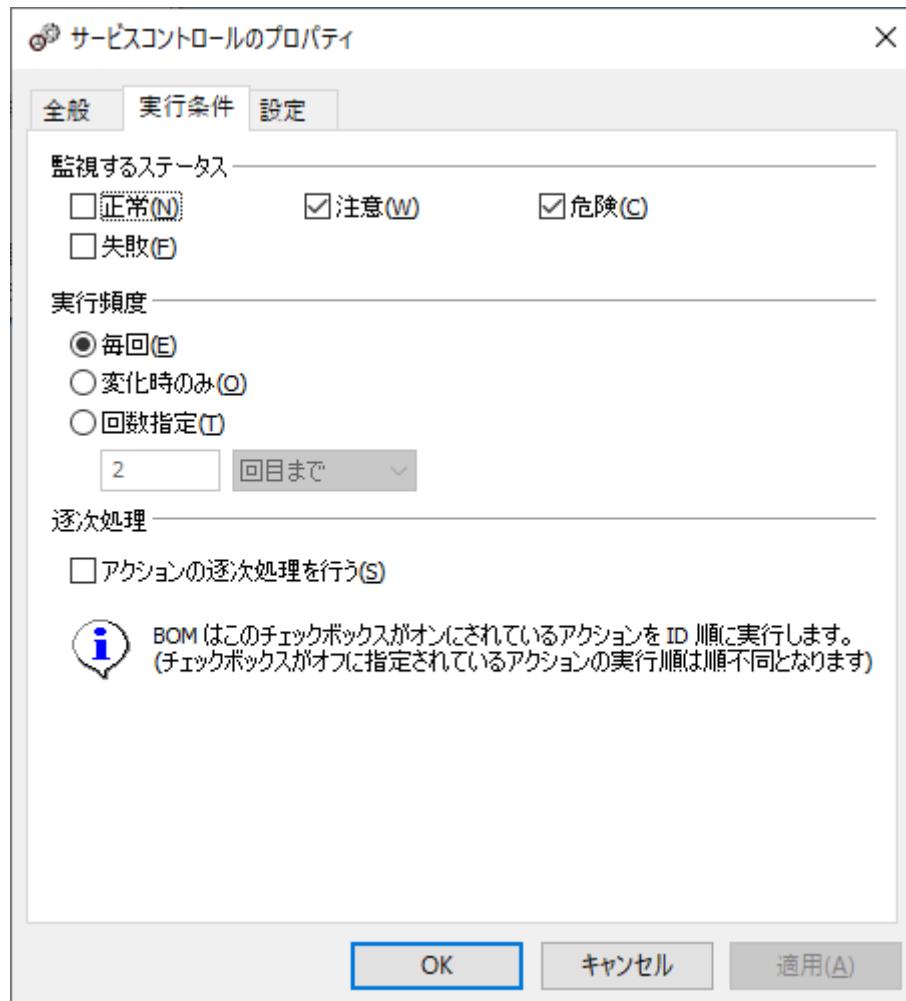
設定項目	説明
"コメント"欄	アクション項目の補足情報を入力します。既定では空白です。 必要に応じて入力してください。
"1回のみ実行"チェックボックス	"1回のみ実行"チェックボックスにチェックが入っている場合、アクション項目が実行された時に上記の"有効"チェックボックスのチェックを自動で外します。そのため、再び手動で"有効"チェックボックスにチェックを入れるまで、そのアクション項目は起動しなくなります。 シャットダウンアクションのみ、既定で"1回のみ実行"チェックボックスにチェックが入っています。

C. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブは、アクション項目を実行するための条件を設定します。

「実行条件」タブは、"監視ステータス"、"実行頻度"の既定値を除き、すべてのアクション項目で共通です。

- 「全般」タブで"1回のみ実行"チェックボックスにチェックを入れた場合、1度アクションが実行されるとアクション項目が無効状態になるため、"実行頻度"フィールドの設定がどのような値であっても実行されません。



設定項目	説明
"監視するステータス"チェックボックス	監視項目の監視結果（ステータス）を、アクションの起動条件として指定することができます。 指定できるステータスは、"正常"、"注意"、"危険"、"失敗"の4つがあり、各ステータスのチェックボックスにチェックを入れて起動条件を満たした際に、アクションを実行することができます。既定では、"注意"と"危険"チェックボックスにチェックが入っています。
"実行頻度"フィールド	上記で選択した同一のステータスが連続して発生した際のアクションの動作条件を指定することができます。 既定では以下の"毎回"（毎回アクションが実行される）が選択されています。
"毎回"ラジオボタン	アクションが起動するステータス条件を満たしていた際に、アクションを毎回実行します。
"変化時のみ"ラジオボタン	アクションが起動するステータス条件を満たしていたとしても、前回のステータスと同一であった時にはアクションは実行しません。

設定項目	説明
"回数指定"ラジオボタン	アクションが起動するステータス条件を満たしていた際に、ステータスが何回連続して発生したのかをカウントしてアクションを実行します。
回数指定の数値入力フィールド	"2"~"999"までの整数を入力できます。
回数指定のドロップダウンリスト	<ul style="list-style-type: none"> ・"回目まで"を選択した場合 カウントした値が"N"回に達するまで、アクションを実行します。 ・"回目以降"を選択した場合 カウントした値が"N"回を超えた場合に、アクションを実行します。 ・"回目のみ"を選択した場合 カウントした値が"N"回と一致した場合にのみ、アクションを実行します。
"アクションの逐次処理を行う"チェックボックス	1つの監視項目に対して複数のアクション項目を作成している場合、「全般」タブのアクション"ID"順（昇順）に逐次処理をさせることができます。これにより、アクションの実行順序を制御することができます。

[アクションの逐次処理について]

"アクションの逐次処理を行う"チェックボックスにチェックがついている場合の動作は以下のようになります。

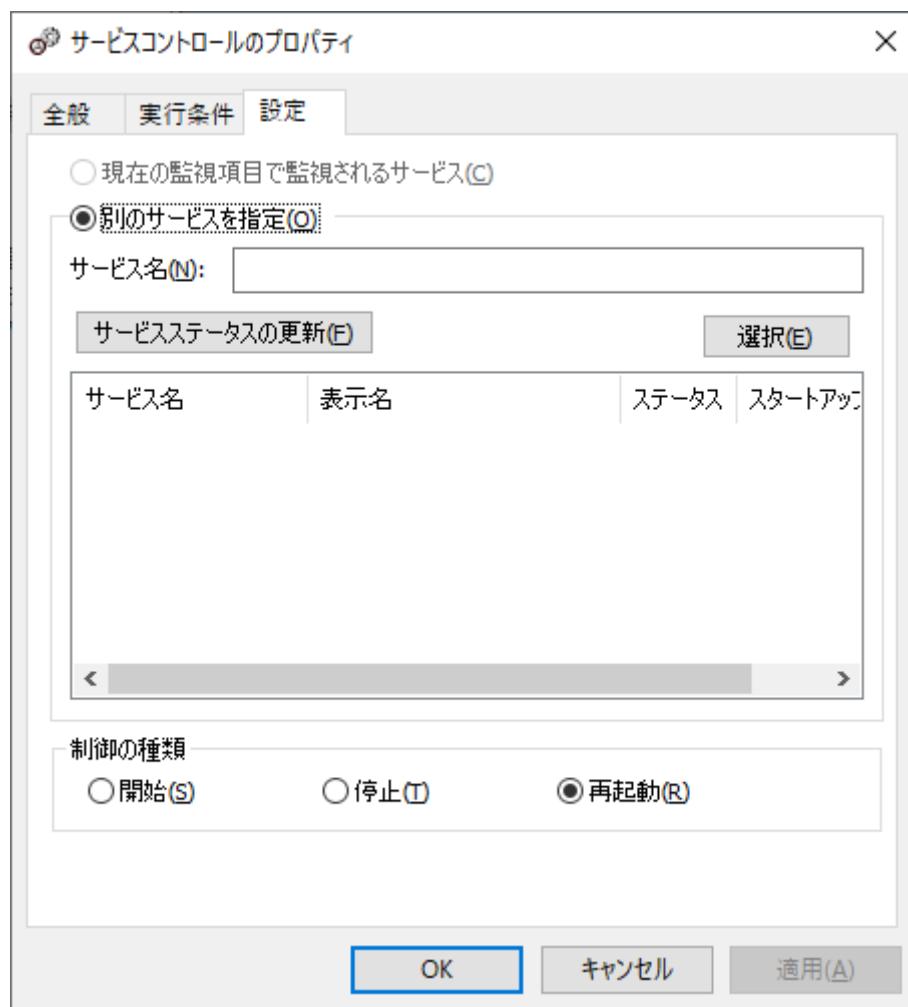
1. 同一監視項目に作成されている他のアクション項目にチェックが入っているか否かを確認し、チェックが入っているすべてのアクション項目をアクション項目"ID"順（昇順）で逐次実行します。
2. "監視するステータス"および"実行頻度"は、アクション項目"ID"順（昇順）で先頭（1番目）のアクション項目の指定のみが適用され、2番目以降のアクションに指定した"監視するステータス"および"実行頻度"は無視されます。
その際に、'リザルトペイン表示'の"監視するステータス"および"実行頻度"には、"-"で表示がされます。
3. 逐次実行対象のアクションが途中で失敗した場合、それ以降の逐次対象の実行アクションは実行されません。
4. 逐次実行アクションの中で1回のみ実行の設定のアクションがある場合、2回目以降はそのアクションも含め、それ以降のIDの逐次実行アクションは実行されません。

"アクションの逐次処理を行う"チェックボックスのチェックが外れている場合の動作は以下のようになります。

- チェックが外れているアクション項目は、他のアクション項目の実行条件や状況に影響をうけずに、並列処理を行います。

D. 「設定」タブ

「設定」タブはアクション項目の種類によって異なり、アクション項目のコントロール対象とコントロール方法を設定します。



(4) サービスコントロールアクション

サービスコントロールアクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、特定の指定したサービスを"開始"または"停止"させることができます。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

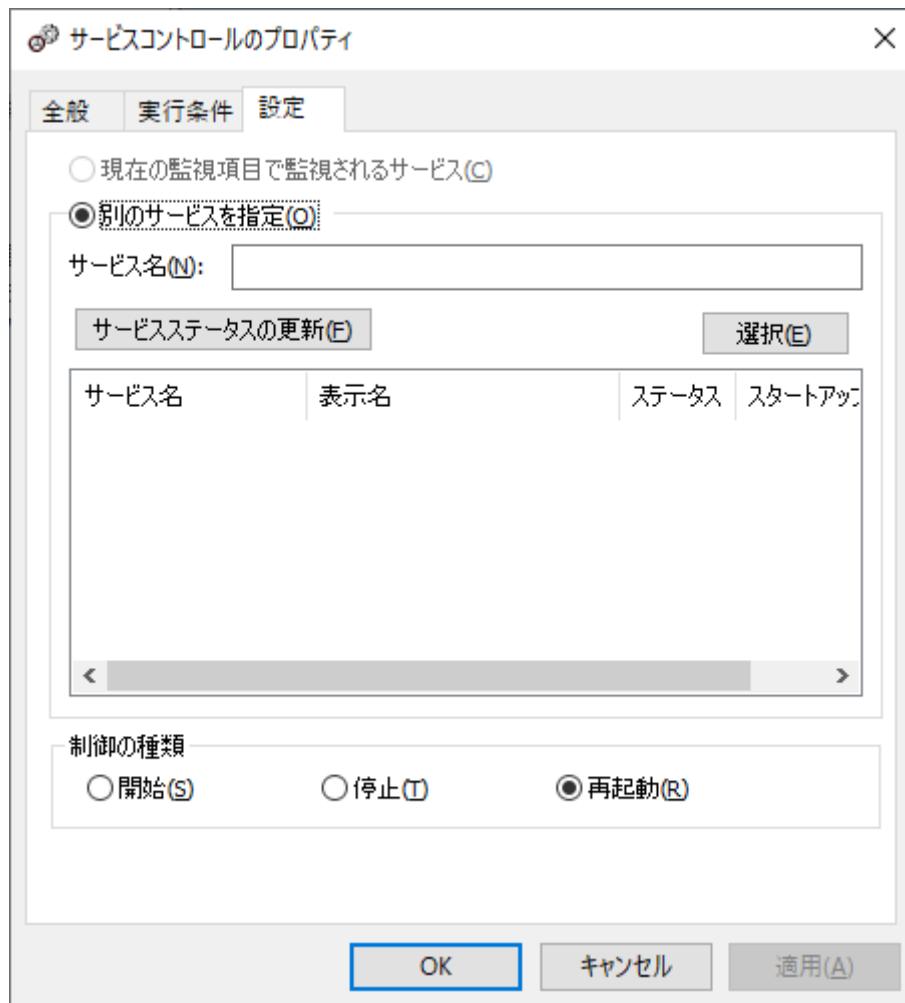
「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



1. コントロールを行いたいサービスを下記のどちらかの手段で設定します。

- "現在の監視項目で監視されるサービス"ラジオボタンを選択した場合

サービス監視に対してサービスコントロールアクションを作成した場合、既定値で選択されており、監視対象のサービスに対して、コントロールを行います。

- "別のサービスを指定"ラジオボタンを選択した場合

サービス監視以外の監視項目に対して、サービスコントロールアクションを作成した場合、既定値で選択されており、コントロールするサービス名を手順2.で指定します。

2. 下記のいずれかの方法で、"サービス名"フィールドにコントロール対象の"サービス名"を設定します。

※ Windows Server 2016 version 1803の環境を代理監視による監視対象としている場合、[サービスステータスの更新]ボタンをクリックした際に「アクセスが拒否されました」というエラーでサービス一覧の取得に失敗することがあります。この際は"サービス名"フィールドへ監視するサービス名を直接入力してください。

- "サービス名"フィールドへ監視するサービス名を直接入力する
- [サービスステータスの更新]ボタンをクリックして、サービスを選択する

監視対象コンピューターに導入されているすべてのサービスがリスト表示されます。コントロール対象のサービスをクリックした状態で[選択]ボタンをクリックするか、ダブルクリックすることで"サービス名"フィールドに設定することができます。

3. "制御の種類"フィールドに、コントロール方法を設定します。

- "開始"ラジオボタンを選択した場合

このアクション項目のための条件が満たされたときに、選択されたサービスを開始します。

- "停止"ラジオボタンを選択した場合

このアクション項目のための条件が満たされたときに、選択されたサービスを停止します。

- "再起動"ラジオボタンを選択した場合

このアクション項目のための条件が満たされたときに、選択されたサービスを再起動します。

(5) シャットダウンアクション

シャットダウンアクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、監視対象コンピューターをシャットダウン、または再起動させることができます。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通ですが、シャットダウンアクションのみ既定値で、"1回のみ実行（実行後、自動的にアクションが無効となります）"チェックボックスにチェックが入っています。

その他、「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

- "1回のみ実行（実行後、自動的にアクションが無効となります）"チェックボックスにチェックが入っている場合、BOM 8.0が監視対象コンピューターをシャットダウンするのは1回だけです。

監視対象コンピューターが再起動され、BOM 8.0が自動的にスタートアップした時点でシャットダウンアクション項目は"無効"になっているため、必要に応じて手動で"有効"にする必要があります。

- BOM監視サービスを"自動スタートアップ"に設定した上で、"1回のみ実行（実行後、自動的にアクションが無効となります）"チェックボックスのチェックを外してシャットダウンアクションの実行条件が毎回満たされた場合、下記の例のように監視対象コンピューターがスタートアップとシャットダウンを繰り返す可能性があります。

設定する際は十分に注意してください。

[シャットダウンを繰り返す例]

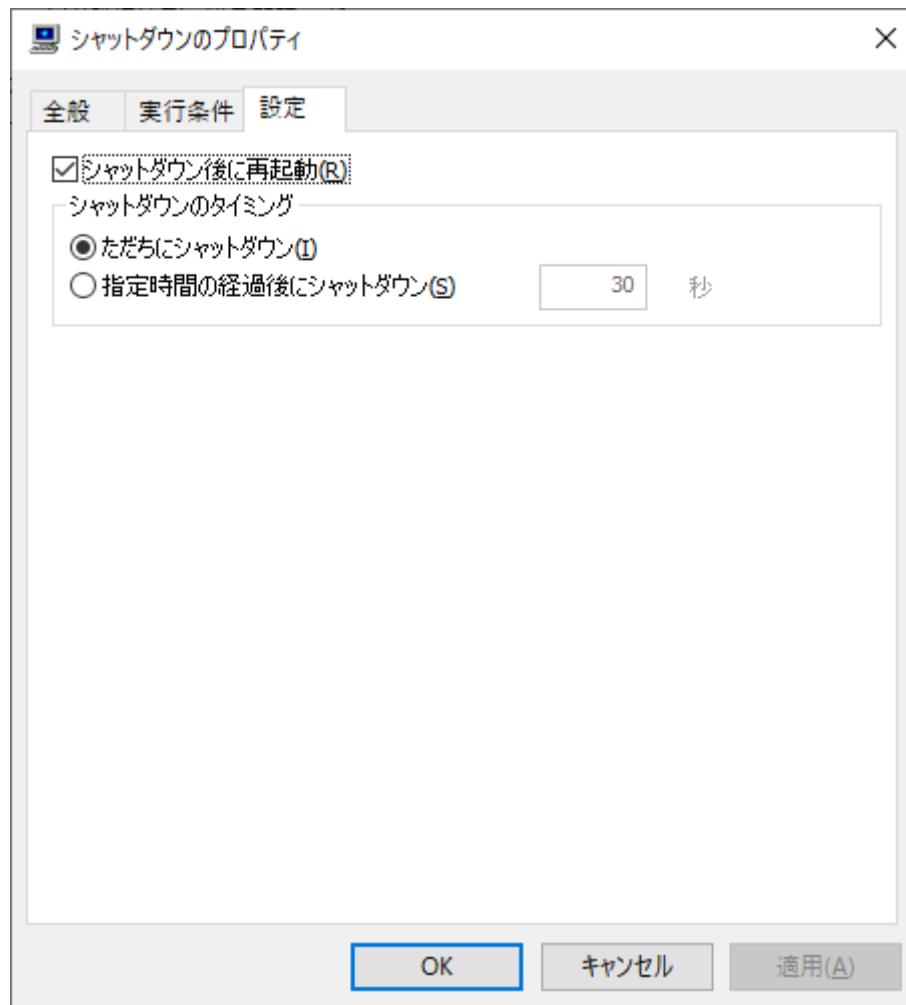
1. ディスク容量監視でディスク使用率"90%"をしきい値とし、シャットダウンアクションを再起動するよう設定している。
2. 実際にディスク使用率が"90%"になり、監視対象コンピューターがシャットダウン（再起動）される。
3. BOM監視サービスが"自動スタートアップ"に設定されている場合、監視対象コンピューターでは再起動後に再びBOM 8.0のディスク容量監視で"90%"の使用率を検出する。
4. 再度コンピューターがシャットダウンされる。
5. 3、4を繰り返す。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



1. "シャットダウン後に再起動"チェックボックスにチェックを入れることで、監視対象コンピューターのシャットダウン後に再起動させることができます。
2. "シャットダウンのタイミング"は、シャットダウンの方法を下記のどちらかより指定することができます。
 - "ただちにシャットダウン"ラジオボタンを選択した場合
条件が満たされた直後に、システムをシャットダウンします。
 - "時間指定の経過後にシャットダウン"ラジオボタンを選択した場合
条件が満たされた直後より、"指定時間"フィールドに入力した秒数が経過するまで待ってから、監視対象コンピューターをシャットダウンします。

(6) 監視有効/無効アクション

監視有効/無効アクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、指定した監視グループあるいは監視項目の有効/無効を制御します。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

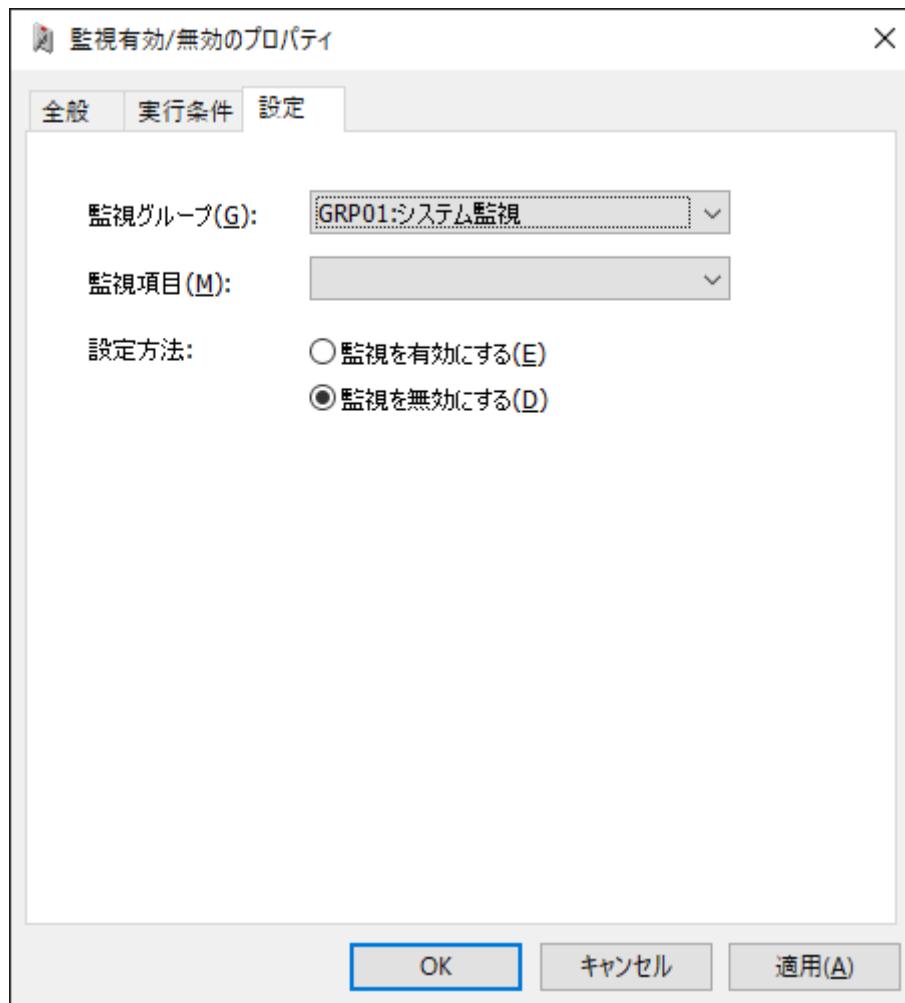
「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



- 対象の"監視グループ"、あるいは"監視グループ"と"監視項目"をプルダウンメニューから指定します。
- 手順1.で指定した"監視グループ"または"監視項目"を、"有効"にするか"無効"にするかをラジオボタンで選択します。

なお、監視項目に対する"有効"、"無効"のアクション結果は、指定した"監視項目"の「全般」タブの"開始時刻"を基準に反映されます。

- "監視項目"の「全般」タブで、"サービスの開始直後"ラジオボタンを選択している場合
監視サービスが起動してからを基準とします。

- "監視項目"の「全般」タブで、"指定時刻"ラジオボタンを選択している場合

"指定時刻"を基準とするため、監視開始時刻からの基準で監視間隔単位の監視有効/無効を判断します。

例：監視開始時刻が午前0時に始まり、途中監視有効から無効になった監視項目Aが監視間隔1時間で存在する場合、他の監視項目Bのアクションが監視項目Aに対して午前0時30分で監視有効のアクションが起きた時に、実際に監視項目Aの監視が開始するのは午前1時になります。

(7) メール送信アクション

メール送信アクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、指定したメールアドレスにメールを送信します。

- 事前に、BOMマネージャーのスコープペインの"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"の"プロパティ"画面の「SMTP」タブで "SMTPサーバー"設定値を設定する必要があります。詳細は["SMTP情報の設定"](#)を参照してください。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

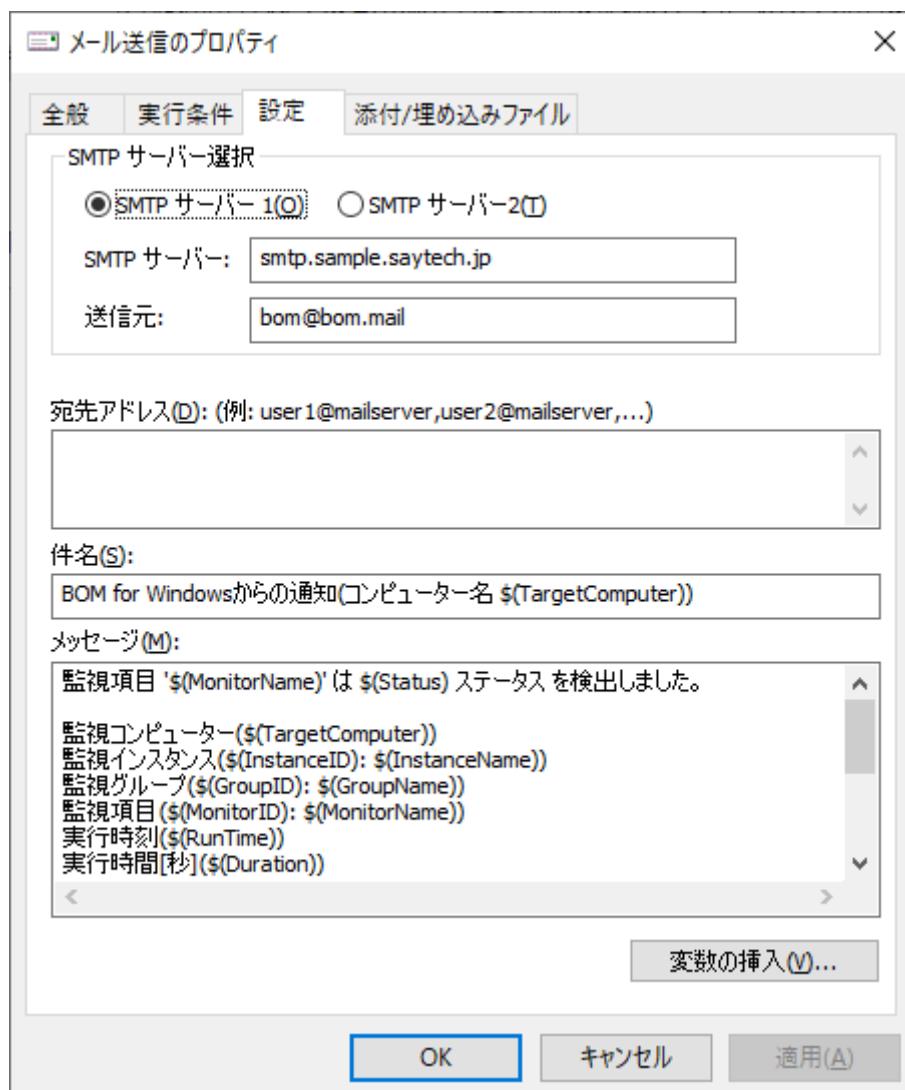
「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の[「全般」タブ](#)を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の[「実行条件」タブ](#)を参照してください。

C. 「設定」タブ



- "SMTPサーバー選択"フィールドで、"SMTP サーバー1"ラジオボタンまたは"SMTPサーバー2"ラジオボタンのいずれかを選択します。

- 上記の選択時、"SMTPサーバー"フィールドと"送信元"フィールドに情報が何も表示されない場合は、"SMTPサーバー"に関する情報を設定する必要があります。詳細は['SMTP情報の設定'](#)を参照してください。

2. "宛先アドレス"フィールドに、メッセージの宛先となる電子メールアカウントを入力します。

- 複数のアドレスを指定する際には、カンマで区切って入力します。
- 宛先アドレスの最大文字数は1000文字です。

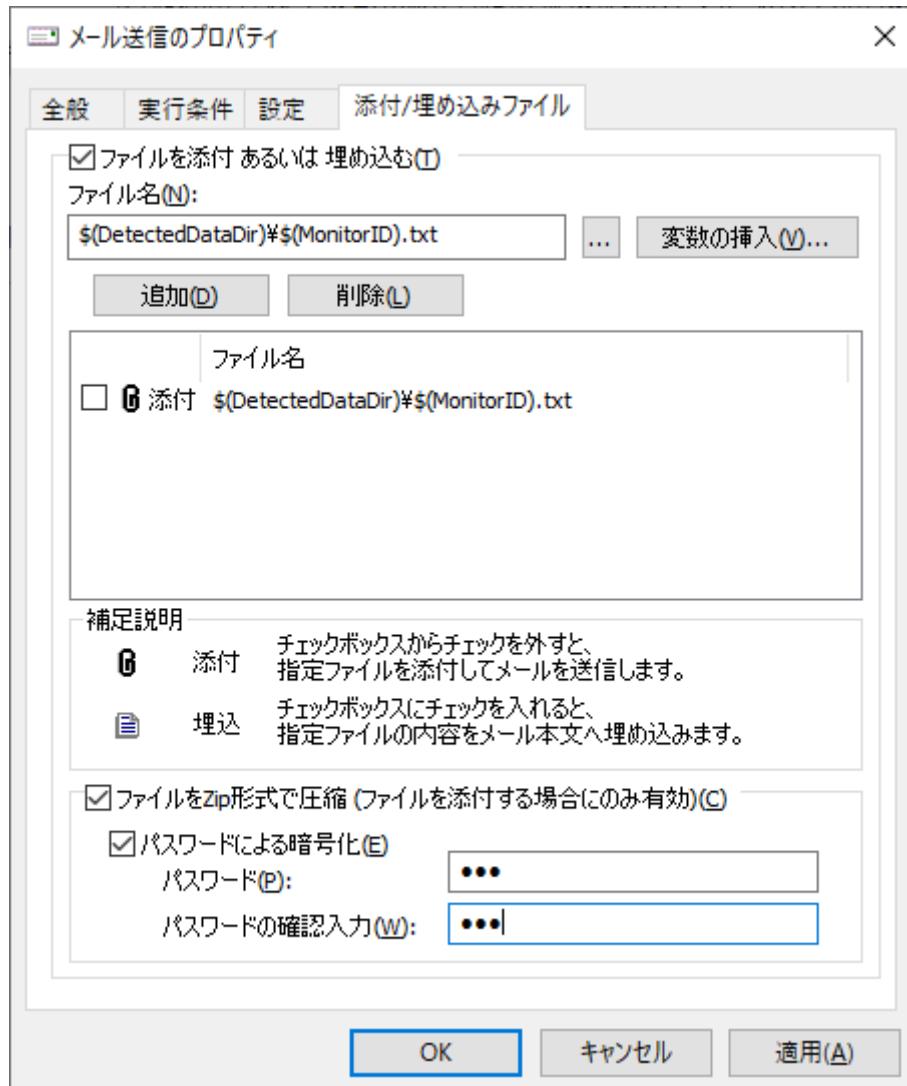
3. "件名"フィールドに、メールの件名を入力します。

- 既定値で設定されている件名の変数は、[変数の挿入]ボタンをクリックすることで変数リストを表示させて確認できます。

4. "メッセージ"フィールドに、メールの本文を入力します。

- "メッセージ"の最大文字数は2500文字です。
- [変数の挿入]ボタンより2500文字を超える入力をした場合、"メッセージ"フィールドに反映されるのは2500文字です。
- 変数に関しては展開後の文字数で換算されますが、展開後2500文字を超えた場合でも問題なくアクションは実行します。
- メール送信のメッセージはRFC2822より、メール本文の1行あたりの文字数が決まっており、BOM 8.0では、1行における文字列が991バイト以上になった時点で強制改行します。

D. 「添付/埋め込みファイル」タブ



[変数の挿入]ボタンより変数名を指定することで、テキストログ監視やイベントログ監視でエクスポートしたテキストファイルをメールに添付することができます。

1. "ファイルを添付あるいは埋め込む"チェックボックスにチェックを入れることで、メール送信アクションにファイルを添付する、または添付ファイルの中身をメール本文に埋め込むことができます。

- ファイルを埋め込む場合には、埋め込むファイルはテキストファイルである必要があります。

2. "ファイル名"フィールドに、下記のいずれかの手段で添付したいファイルの"ファイル名"を設定します。

手順3.の[追加]ボタンをクリックするまで、選択したファイルは添付ファイルの対象にはならないため、注意が必要です。

- 添付するファイルの絶対パスを入力
- [...]ボタンを使用

[...]ボタンをクリックすると、ファイル選択画面が開きます。任意のファイルを選択して、[OK]ボタンをクリックします。

※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、ファイル選択画面にドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。

このような場合は、指定するファイルを絶対パスで直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合は、有効化することでドライブが表示されるようになります。

- [変数の挿入]ボタンを使用

[変数の挿入]ボタンをクリックし、"変数の挿入"画面で"検出テキストのエクスポートファイル名を指定"チェックボックスにチェックを入れた後に[挿入]ボタンをクリックすることで、以下の文字列が設定され、テキストログ監視やイベントログ監視でエクスポートしたテキストファイルを指定できます。

```
$(DetectedDataDir)¥$(MonitorID).txt
```

また、"変数の挿入"画面で"検出テキストのエクスポートファイル名を指定"チェックボックスのチェックを外した後、変数リストの対象変数をクリックして[挿入]ボタンをクリックするか、直接変数をダブルクリックすることで、"変数の挿入"フィールドに変数を含んだ"ファイル名"を設定することも可能です。

3. [追加]ボタンをクリックすると、手順2.で指定したファイルを添付ファイルの対象として下部の"ファイル"フィールドに表示します。

4. ファイルをメール本文に埋め込む場合は、手順3.の"ファイル"フィールドの"ファイル名"の横にあるチェックボックスにチェックを入れます。

- JIS、Shift JIS以外のテキストファイルは埋め込みできません。

5. "ファイルをZip形式で圧縮（ファイルを添付する場合にのみ有効）"チェックボックスにチェックを入れることで、手順4.でメール本文の埋め込み対象にしなかった添付ファイル一式を圧縮することができます。

- 手順4.で、埋め込み対象に指定したファイルは圧縮の対象にはなりません。
- 圧縮した添付ファイルに対して、パスワードによる暗号化を行う場合には、"パスワードによる暗号化"チェックボックスにチェックを入れて、"パスワード"と"パスワードの確認入力"を入力します。

(8) SNMPトラップ送信アクション

SNMPトラップ送信アクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、指定したSNMPマネージャーにSNMPトラップを送信します。

- 事前に、BOMマネージャーのスコープペインの"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"の"プロパティ"画面の「SNMP」タブで "SNMPマネージャー"設定値を設定する必要があります。詳細は'[SNMP情報の設定](#)'を参照してください。
- 代理監視を使用している場合、SNMPマネージャーには"代理監視元コンピューター"ではなく、"代理監視先コンピューター"のIPアドレスが通知されます。SNMPマネージャー側の設定を行う際には、代理監視先コンピューターのIPアドレスも登録してください。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

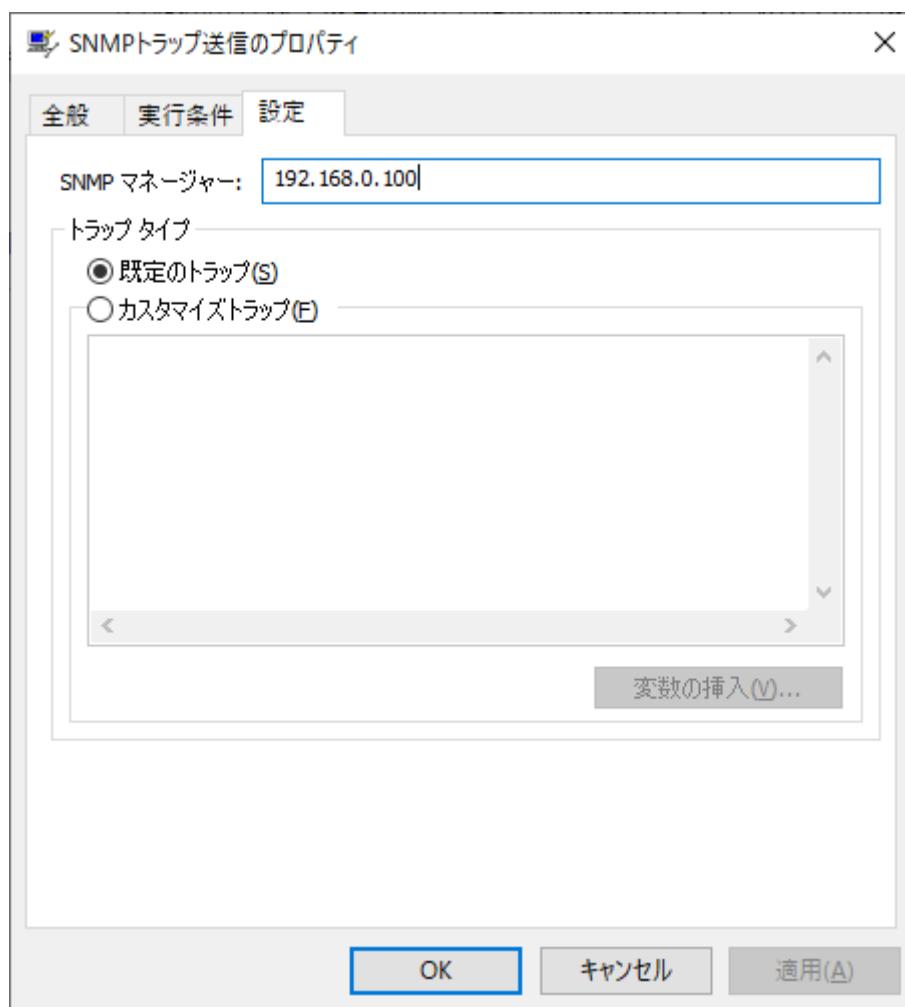
「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の'[「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の'[「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



- "SNMPマネージャー"フィールドに、情報が何も表示されない場合、"SNMPマネージャー"に関する情報を設定する必要があります。詳細は'[SNMP情報の設定](#)'を参照してください。
- "トラップ タイプ"フィールドは、下記のどちらかを設定します。

- "既定のトラップ"ラジオボタンを選択した場合
メッセージはBOM 8.0の既定のトラップ内容とともにトラップ送信されます。
 - "カスタマイズトラップ"ラジオボタンを選択した場合
"メッセージ"フィールドに指定した内容でトラップ送信されます。
3. "メッセージ"フィールドは、手順2.で"カスタマイズトラップ"ラジオボタンを選択した際に、トラップ送信される内容です。
- "メッセージ"の最大データサイズは255byteです。制限を超えている場合、エラーとなりSNMPトラップが実行されません。
 - 変数の展開後のデータサイズが255byteを超える場合、エラーとなりSNMPトラップが実行されません。
4. [変数の挿入]ボタンをクリックすると、手順2.の"メッセージ"フィールドに挿入可能な、BOM 8.0の予約済み変数をリストから選択することができる"変数の挿入"画面を表示させることができます。
- 予約済み変数については[予約済み変数](#)を参照してください。
 - [変数の挿入]ボタンより、"グループ名"、"監視名"、"アクション名"に格納される最大文字数は63文字です。制限数を超えているとエラーになり、SNMPトラップが実行されません。

D. SNMPトラップの送信内容

SNMPトラップの送信内容は、各"OID"に設定されています。"OID"の詳細は下記の表を参照してください。

- 既定のトラップ内容
送信コンピューター名 (TargetComputer)、インスタンスID (InstanceID)、グループ名 (GroupName)、監視項目名 (MonitorName)、監視取得値 (Value)、監視結果 (ResultCode) で、各内容に"OID"が対応しています。
- カスタマイズトラップ時の送信内容
カスタマイズトラップメッセージ ("\$(UserMsg)")

監視アイテム（オブジェクト）

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.1	mxTargetComputer	コンピューター名
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.3	mxInstanceID	インスタンスID
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.6	mxGroupName	監視グループ名
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.8	mxMonitorName	監視項目名
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.10	mxActionName	アクション名
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.13	mxresultCode	監視結果コード
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.14	mxMonitorValue	監視取得値
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.15	mxMonitorStatus	監視ステータス
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.16	mxExitCode	終了コード

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.25	mxUserMsg	ユーザーメッセージ

監視ステータス（トラップ）

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.20	mxMonitorFailure	監視失敗
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.21	mxStatusNormal	監視正常
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.22	mxStatusWarning	監視注意
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.23	mxStatusCritical	監視危険

アクションステータス（トラップ）

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.30	mxActionFailure	アクション失敗
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.31	mxActionSuccess	アクション成功
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.32	mxActionError	アクションエラー

その他（トラップ）

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.41	mxUserMessage	ユーザー定義

(9) イベントログ書き込みアクション

イベントログ書き込みアクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、指定した事項をイベントログに書き込みます。

- イベントログに書き込む内容はあらかじめ既定値が決まっており、「設定」タブの"既定のメッセージ"フィールドの内容は必ず書き込まれます。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

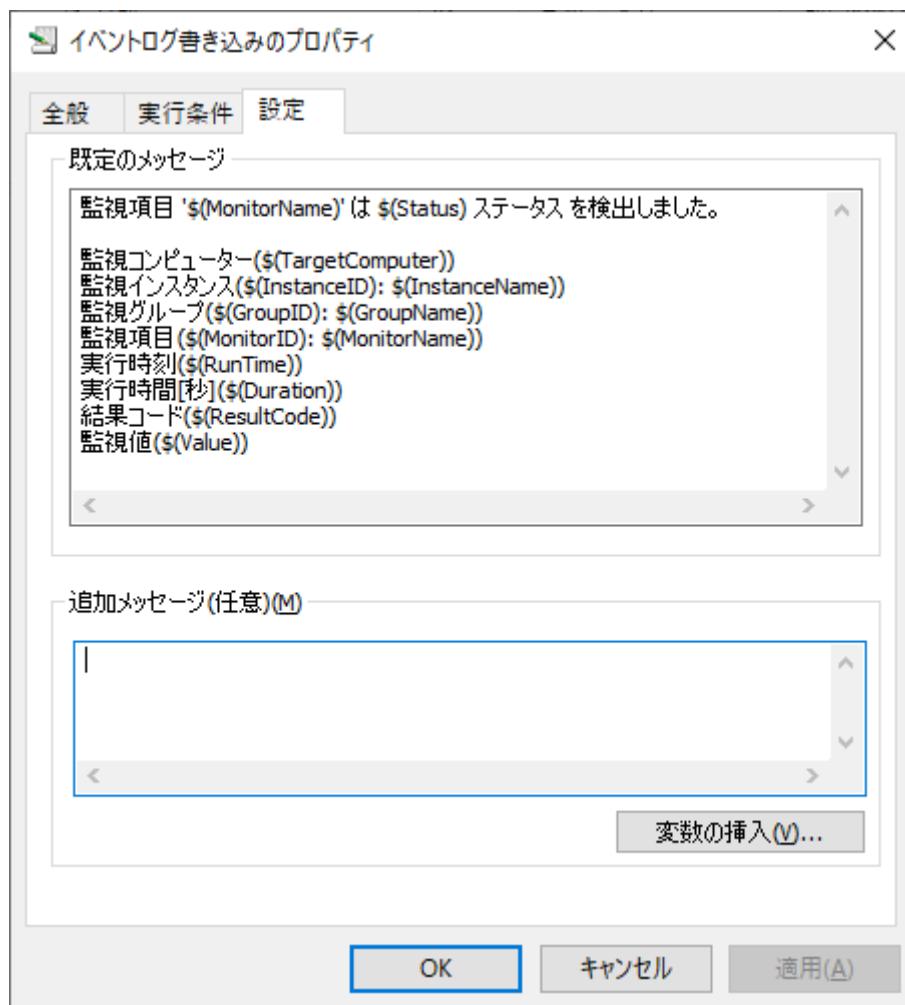
「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



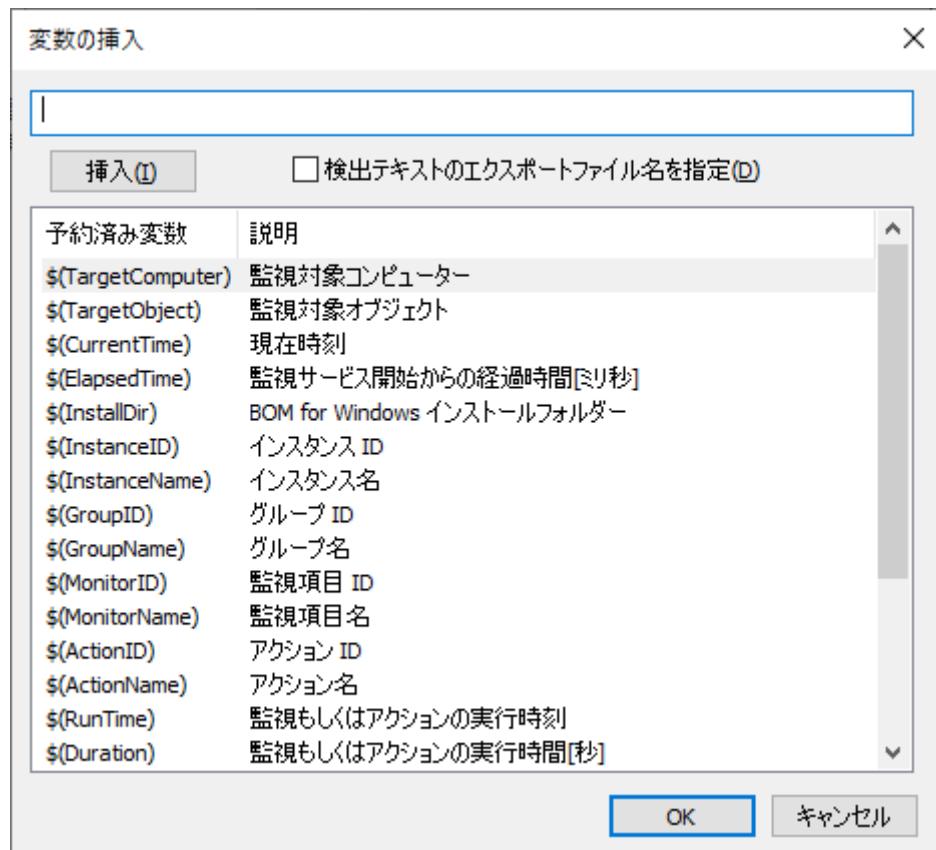
- "既定のメッセージ"フィールドの内容は必ずイベントログに書き込まれます。

- "既定のメッセージ"中の"\$"で始まる記号は変数です。[変数の挿入]ボタンをクリックすると、変数の内容を確認することができます。

- "追加メッセージ（任意）"フィールドに入力した内容は、既定値以降に付け加えてイベントログに書き込むことができます。

- [変数の挿入]ボタンをクリックすることで、変数を使用することもできます。

- 追加メッセージの最大文字数は2000文字です。
- [変数の挿入]ボタンより2000文字を超える入力をした場合、"メッセージ"フィールドに反映されるのは2000文字までです。
- 変数に関しては展開後の文字数で換算されますが、展開後2000文字を超えた場合でも問題なくアクションは実行されます。



D. イベントログの出力内容

イベントログ書き込みアクションで、実際にイベントログに書き込まれる内容は下記のとおりです。

- イベントログの種別

"アプリケーション"

- ソース

"Bom8Action"

- 分類

"なし"

- イベントの種類

監視ステータスによってイベントの種類が変わります。ステータス、イベントの種類、イベントIDの相関は下記のとおりです。

イベント ID	監視ステータス	イベントログ出力	
		種類	説明
3300	正常	情報	
3301	注意	警告	
3302	危険	エラー	説明本文はすべて共通で既定のメッセージが書き込まれます。 追加メッセージが設定されていれば既定メッセージに追記されます。
3303	失敗	エラー	

(10) syslog送信アクション

syslog送信アクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、任意の送信先ホストに指定した事項をsyslog形式で送信します。

※ UDPを使用して送信する場合、syslogサーバー側で取りこぼしが発生する可能性があります。

※ メッセージの送信文字コードはUTF-8です。また、ASCIIコード33(0x21)～126(0x1E) + 32(0x20)以外の文字のロギング（日本語などがロギングまたは表示されるかどうかなど）は受信先のsyslogサーバーの仕様によります。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

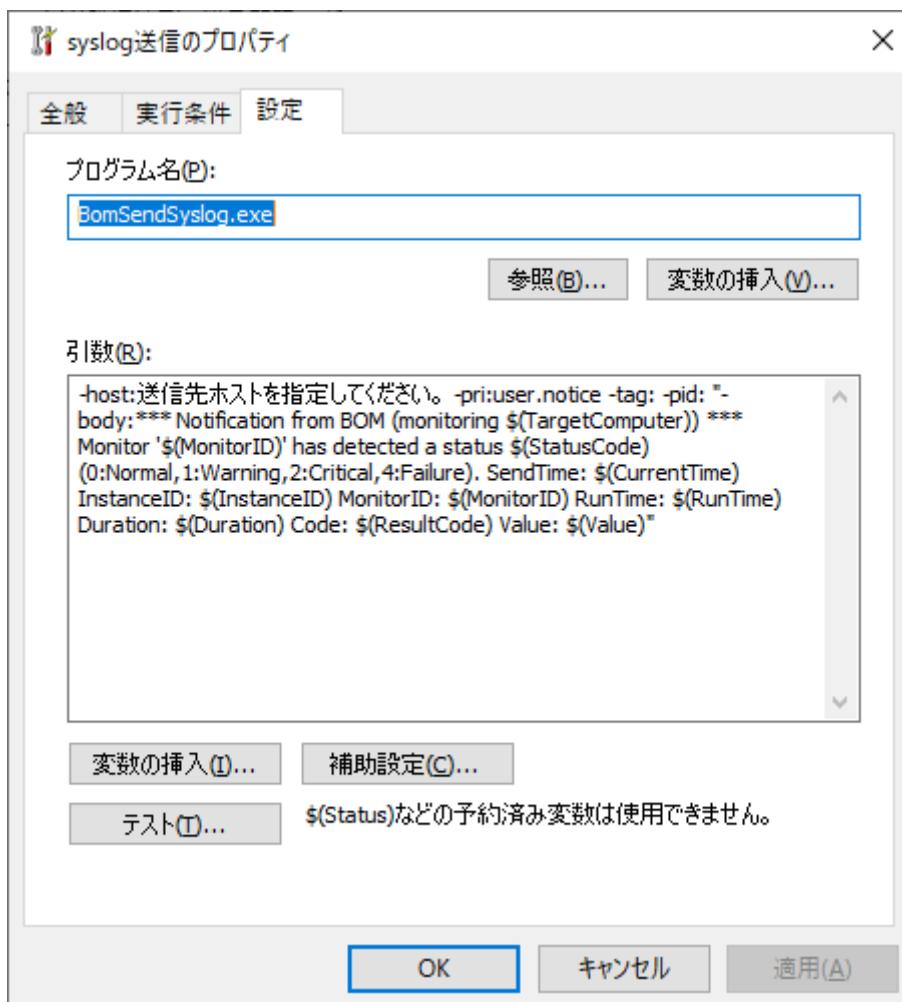
「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の'[「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の'[「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



1. "プログラム名"フィールドにはあらかじめ"BomSendSyslog.exe"と入力されていますので、変更しないでください。また、"プログラム名"フィールドの[参照]ボタンおよび[変数の挿入]ボタンは使用しないでください。
2. "引数"フィールドは以下の内容で設定および入力してください。

引数	説明
-host	"送信先ホストを指定してください。"部分を削除し、syslogを送信するホストのIPアドレス(IPv4、IPv6)またはコンピューターネームで指定します。
-pri	プライオリティを数値(0~191)または[facilityコード].[severityコード]で指定します。 facilityコードおよびseverityコードについては、'プライオリティコード表'を参照してください。
-p	送信先ポート番号を指定します。 引数または値が無い場合は、getservbynameで取得された値を使用します。RFC3164ではudp:514が使用されます。
-body	「"-body:」から末尾の「」(ダブルクオーテーション)の間に、送信する情報を設定します。 変数を使用する場合は、"引数"フィールドの[変数の挿入]ボタンを使用してください。(※1) ヘッダーなどの情報を含めて全体で1024byteに収まらない場合、送信に失敗します。
-rfc5424	この引数を追加することにより、RFC5424形式のsyslogプロトコルで動作します。 指定されていない場合、RFC3164形式で動作します。
-udp	この引数を追加することにより、UDPで通信します。(※2) RFC5424形式を指定した時のみ使用でき、RFC3164形式の場合は無視されます。
-tcp	この引数を追加することにより、TCPで通信します。(※2) RFC5424形式を指定した時のみ使用でき、RFC3164形式の場合は無視されます。
-tls	この引数を追加することにより、通信をTLSで暗号化します(UDP、TCP共用)。(※3) RFC5424形式を指定した時のみ使用でき、RFC3164形式の場合は無視されます。また使用する際は、あらかじめsyslogサーバー側の証明書がインポートされている必要があります。

※1 "引数"フィールドの[変数の挿入]ボタンをクリックし、予約済み変数の一覧から選択します。選択後、[挿入]ボタン→[OK]ボタンをクリックすると、"引数"フィールドのカーソルの位置に選択した変数が挿入されます。
予約済み変数については'予約済み変数'を参照してください。

※2 "-udp"または"-tls"の指定が無い場合はUDPプロトコルで通信し、両方が指定されている場合は"-tls"が優先されます。

※3 BOM syslog 受信機能が対応するのはTCPのみです。

[引数欄の記述例]

- RFC3164形式を使用し、ホスト名"syslog_srv"に対して、プライオリティをメールシステムのエラーで送信する場合。

```
-host:syslog_srv -pri:mail.warn -tag: -pid: "-body: <省略>"
```

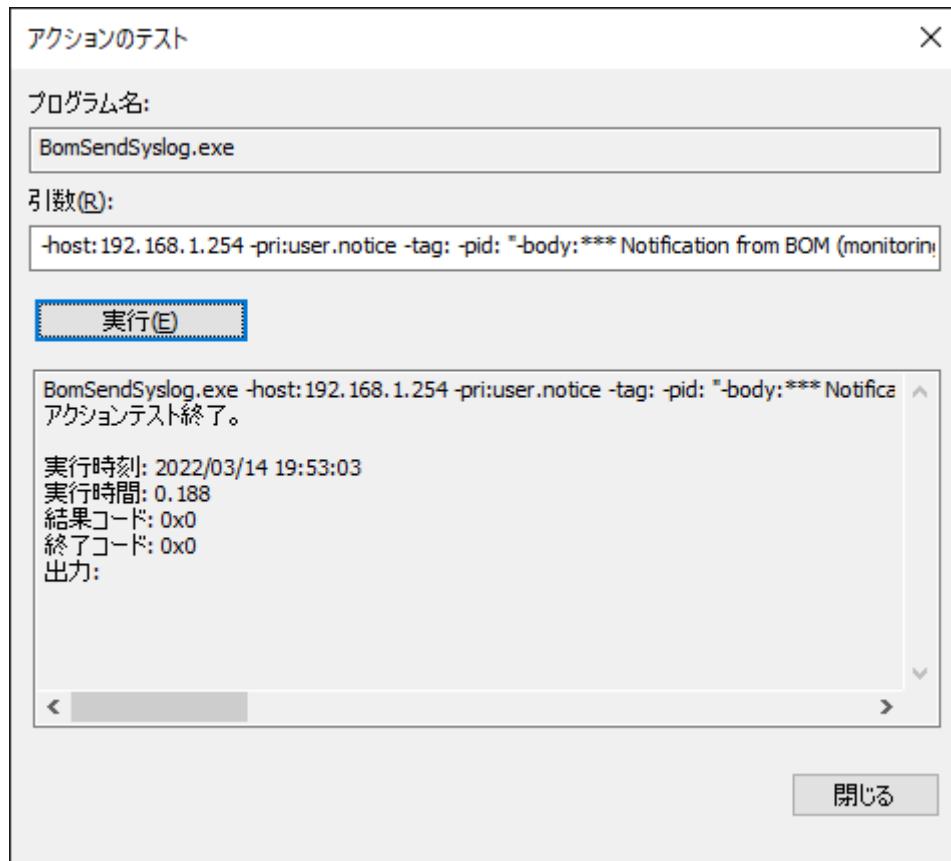
- RFC5424形式を使用し、ホスト"192.168.0.1"にユーザーレベルの警告を数値コードで指定して、TLS通信で送信する場合。

```
-host:192.168.0.1 -pri:12 -tag: -pid: -rfc5424 -tcp -tls "-body: <省略>"
```

3. [補助設定]ボタンは使用できません。

4. [テスト]ボタンをクリックすると、"アクションのテスト"画面を表示し、「設定」タブの設定を加えてテスト実行します。

- テスト実行時にBOM 8.0の予約済み変数を使用することはできません。



D. プライオリティコード表

"[Facilityコード].[Severityコード]"の形式でプライオリティを指定した場合、それぞれの数値コードを利用して以下の計算をおこない、その値がプライオリティとなります。

- 計算式

Facilityの数値コード×8 + Severityの数値コード

(例：user.notice が指定された場合)

"user"の数値コード = 1

"notice"の数値コード = 5

$$1 \times 8 + 5 = 13$$

→ プライオリティは13となります。

- Facilityコード

コード	数値コード	概要
kern	0	カーネルからのメッセージ
user	1	ユーザーレベルメッセージ
mail	2	メールシステム
daemon	3	システムデーモン
security または auth	4	セキュリティ/認証メッセージ
syslog	5	syslogd が内部的に生成するメッセージ
lpr	6	サブシステム：ラインプリンタ
news	7	サブシステム：ネットワークニュース
uucp	8	サブシステム：UUCP (UNIX ファイル転送システム)
cron	9	clock デーモン
authpriv	10	セキュリティ/認証メッセージ
ftp	11	ftp デーモン
local0	16	ローカルユーザー 0
local1	17	ローカルユーザー 1
local2	18	ローカルユーザー 2
local3	19	ローカルユーザー 3
local4	20	ローカルユーザー 4
local5	21	ローカルユーザー 5

コード	数値コード	概要
local6	22	ローカルユーザー 6
local7	23	ローカルユーザー 7

- Severityコード

コード	数値コード	概要
alert	1	直ちに行動を起こさなければならない
crit	2	状況：危機的
err または error	3	状況：エラー
warning または warn	4	状況：警告
notice	5	正常だが重要な状態
info	6	情報メッセージ
debug	7	デバッグレベルのメッセージ

(11) AWS S3 ファイル送信アクション

AWS S3 ファイル送信アクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、Amazon S3および、Amazon S3のAPIに完全準拠するAmazon S3互換ストレージ上のバケットへ指定したファイルをアップロードすることができます。

※ Amazon S3互換ストレージについて、API準拠をうたうすべてのストレージでの動作を保証するものではありません。弊社では、クラウディアン株式会社のCLOUDIAN HYPERSTOREについて動作確認を取っており、今後の対応確認情報は弊社ウェブサイトで随時公開します。

※ プロキシサーバーを利用する場合の資格情報の設定は、基本認証、NTLM認証をサポートしています。

※ 送信対象としてフォルダーを指定する場合、そのフォルダー配下のシンボリックリンクとそのリンク先はアップロードされません。送信対象としてシンボリックリンクを直接指定した場合は、そのリンク先のファイルはアップロードされます。

例) C:¥Program Data¥link (シンボリックリンク)

上記の場合、"C:¥Program Data"を送信対象として指定すると、link (シンボリックリンク) はアップロード対象として除外されます。

"C:¥Program Data¥link (シンボリックリンク)"を送信対象として指定した場合は、"link (シンボリックリンク)" フォルダーとそのリンク先のファイルをアップロードします。

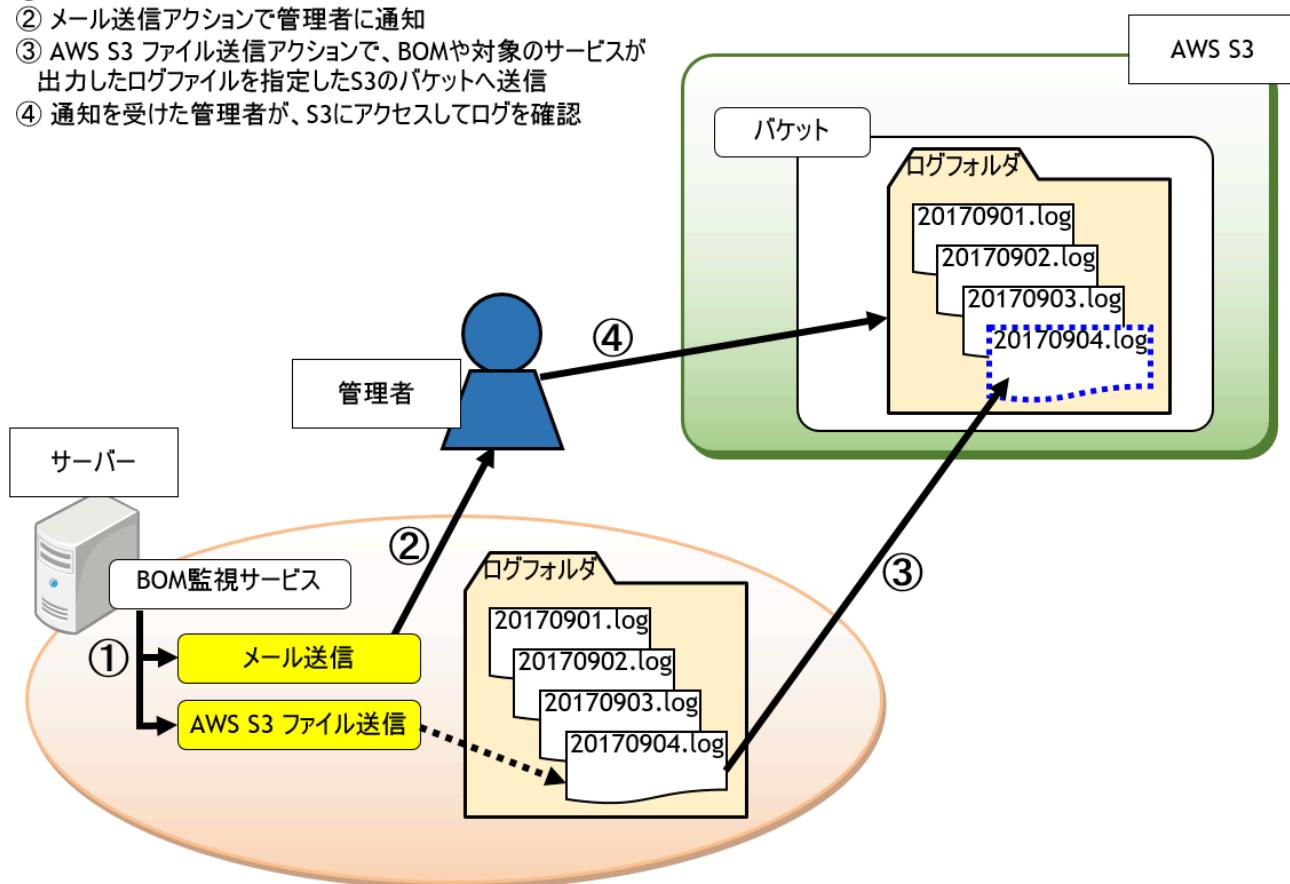
※ 送信可能なファイルサイズ上限は5TBです。

※ ファイル送信の処理時間が2時間を経過した場合、本アクションの仕様により強制終了します。

※ 100MBを超えるファイルをアップロードする場合は、マルチパートアップロードによるアップロードに切り替わるため、PUTリクエスト数が増加することがあります。

運用イメージ

- ① BOMが異常を検知
- ② メール送信アクションで管理者に通知
- ③ AWS S3 ファイル送信アクションで、BOMや対象のサービスが
出力したログファイルを指定したS3のバケットへ送信
- ④ 通知を受けた管理者が、S3にアクセスしてログを確認



例えば管理者が外出中の場合や、サーバーへのアクセス権限がないユーザーでも、S3へログインできる環境があればログから状況を確認できます。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

「全般」タブの詳細については「アクション項目の概要」の「[「全般」タブ](#)」を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については「アクション項目の概要」の「[「実行条件」タブ](#)」を参照してください。

C. 「設定」タブ

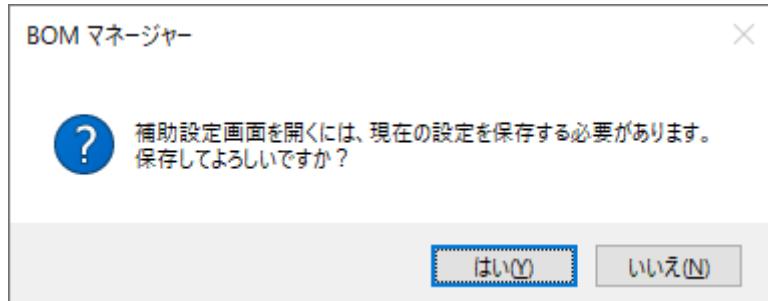


1. "プログラム名" フィールドにはあらかじめ "BomAwsS3Upload.exe" と入力されていますので、変更しないでください。

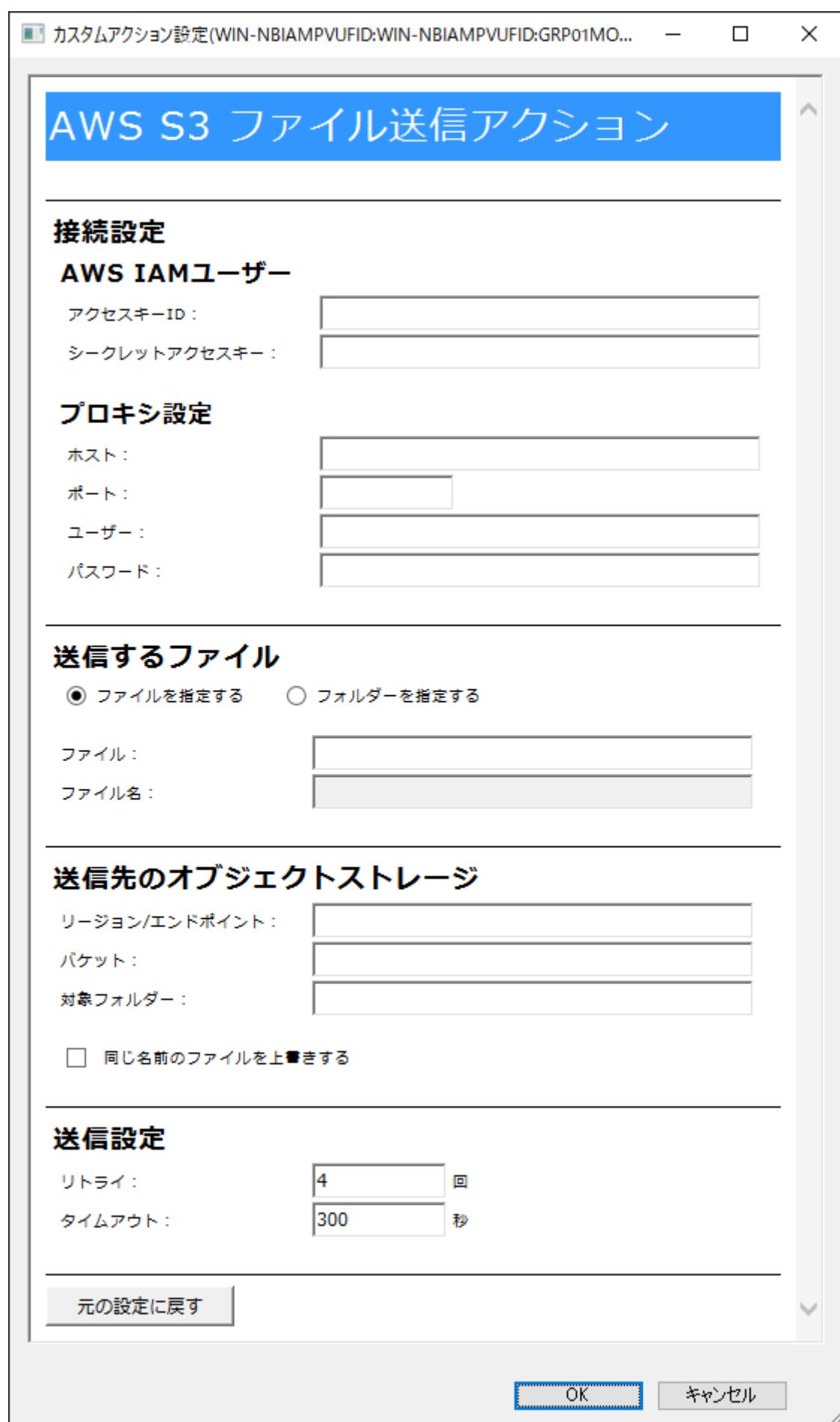
※ 本アクションの詳細な設定は補助設定画面で行い、設定後は"引数" フィールドへ自動的に必要な値が入力されます。この画面では"引数" フィールド内の入力および編集を行わないでください。

2. [補助設定] ボタンをクリックします。
3. [補助設定] ボタンをクリックすると以下の要求が表示されます。[はい] ボタンをクリックしてください。

保存完了後、「AWS S3 ファイル送信アクション」の補助設定画面が表示されます。



D. 「AWS S3 ファイル送信アクション」補助設定



- "AWS IAMユーザー"フィールド (必須)

ファイル送信先のAmazon S3および、Amazon S3互換ストレージについて、接続に必要なユーザー情報を入力します。

(参考情報)

Amazon S3の場合、IAMでアクセスキーを作成し、"アクセスキーID"フィールドおよび、"シークレットアクセスキー"フィールドに入力します。IAMでのアクセスキー作成については、2025年1月8日現在、アマゾン ウェブ サービスの以下のサイトに該当の手順が記載されています。

- "AWS Identity and Access Management ユーザーガイド - IAM ユーザーのアクセスキーを管理します。"
https://docs.aws.amazon.com/ja_jp/IAM/latest/UserGuide/id_credentials_access-keys.html

◦ "プロキシ設定"フィールド（任意）

プロキシを使用して接続する場合、"ホスト"フィールドおよび、"ポート"フィールドの入力は必須です。またプロキシで認証が必要な場合は"ユーザー"フィールドおよび、"パスワード"フィールドに入力してください。

◦ "送信するファイル"フィールド

送信するファイルの条件を設定します。

- "ファイルを指定する"、"フォルダーを指定する"（選択必須）

ファイル単位で送信する対象を指定する場合は"ファイルを指定する"にチェックします。

フォルダー単位で送信する対象を指定する場合は"フォルダーを指定する"にチェックします。

- "ファイル"フィールド（必須）

"ファイルを指定する"を選択した場合に表示されます。

送信したいローカルコンピューター上のファイルを入力してください。

記載例 : C:\Program Files\appication\log\applog.log

- "フォルダー"フィールド（必須）

"フォルダーを指定する"を選択した場合に表示されます。

送信したいファイルが保存されているローカルコンピューター上のフォルダーを入力してください。

記載例 : C:\Program Files\appication\log\

- "ファイル名"フィールド

"フォルダーを指定する"を選択した場合に入力が有効となります。

"フォルダー"フィールドで指定したフォルダー配下のファイルについて、送信するファイルを絞り込むための条件（ワイルドカード使用可）を入力します。未入力の場合は、指定フォルダー配下のサブフォルダーを含むすべてのファイルが送信対象となります。

記載例1 : *.txt

記載例2 : log*.log

◦ "送信先のオブジェクトストレージ"フィールド（必須）

- "リージョン/エンドポイント"フィールド

リクエスト先のAmazon S3のリージョンコード、またはAmazon S3互換ストレージのエンドポイントを入力します。

※ エンドポイントを指定する場合は、必ずhttps://から始まる文字列を入力してください。

例1) リージョンコードでアジアパシフィック(東京)を指定 : ap-northeast-1

例2) CLOUDIAN HYPERSTOREでエンドポイントを指定 : https://xxxxxx.s3.cloudian.jp

- (参考情報)

Amazon S3における各リージョンの詳細なコードについては、2025年1月8日現在、以下のAmazon ウェブ サービスのリファレンスで確認できます。

- "AWS 全般のリファレンス - リージョンエンドポイント"

https://docs.aws.amazon.com/ja_jp/general/latest/gr/rande.html#regional-endpoints

- "バケット"フィールド

ファイルの送信先となるAmazon S3またはAmazon S3互換ストレージのバケット名を入力します。

- "対象フォルダー"フィールド

ファイルの送信先となるAmazon S3またはAmazon S3互換ストレージ上のフォルダーを入力します。この際、階層はスラッシュで区切ってください。

記載例 : server01/bomaction/log/

- "同じ名前のファイルを上書きする"チェックボックス

Amazon S3またはAmazon S3互換ストレージの指定したフォルダー内に、ローカルコンピューターから送信したファイルと同名のファイルが存在した場合の動作を指定します。

- チェックをした場合 : ファイルを上書きします。

- チェックしていない場合 : ファイルを送信せずスキップします。このスキップは送信失敗と見做しません。

- "送信設定"フィールド

ファイル送信に失敗した際の、リトライ回数およびタイムアウト（単位：秒）の条件を設定します。

デフォルト値はリトライ4回、タイムアウト300秒です。

各フィールドに必要事項を入力して[OK]ボタンをクリックすると、補助設定画面は閉じます。

継続して本アクションの設定を行う場合は、改めてプロパティを開いてください。

(12) RDS クライアント通知

接続中のクライアントに対して、通知メッセージを送信することができます。

※ 本アクションは代理監視機能に対応していません。ローカル監視インスタンスのみで利用可能です。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「詳細設定 1」タブ



- “セッションの状態”欄

本監視は接続中のセッションを対象としているため、当項目は"接続中"で固定されています。

- “名前による絞り込みを行う”欄

ユーザー名、クライアント名、セッションIDを選択し、条件を入力することで絞り込みを行います。カンマ区切りで指定すると、複数の対象に対して絞り込みを行うことができます。名前を入力するときは、スペースを入力しないでください。

なお、以下の場合には名前による絞り込みを行いません。

- ・ "名前による絞り込みを行う"にチェックを入れていない場合

- ・ ユーザー名、クライアント名、セッションIDが入力されていない場合

D. 「詳細設定 2」タブ



- "ログオン日時による絞り込みを行う"欄

「詳細設定1」タブで指定した条件に該当する値について、さらにログオン日時で絞り込むことができます。

ログオンした日時は、Remote Desktop Servicesにおいて“ログオン日時”で表示されており、“新しいセッションから”または“古いセッションから”指定した件数を超えるセッションが対象となります。

- 「詳細設定1」タブの指定条件で絞り込んだ値が以下になる場合

セッションID	ユーザー	クライアント	ログオン日時	
3	User1	PC-A	2022/01/01 15:40	… ①
2	User2	PC-D	2022/01/01 15:41	… ②
1	User3	PC-A	2022/01/01 15:45	… ③
4	User1	PC-D	2022/01/01 15:50	… ④
5	User2	PC-D	2022/01/01 16:00	… ⑤
6	User7	PC-A	2022/01/01 16:21	… ⑥
8	User6	PC-A	2022/01/01 16:22	… ⑦
7	User5	PC-A	2022/01/02 09:30	… ⑧

- "新しいセッションから" "5件を超えるものを対象とする"と設定すると...

→ ①、②、③ が対象となります。

- "古いセッションから" "5件を超えるものを対象とする"と設定すると...

→ ⑥、⑦、⑧ が対象となります。

- "0件"の指定はできません。0件を指定すると、エラーとなります。

- "メッセージ"欄

通知するメッセージを入力してください。[変数の挿入]ボタンを使用することで、BOM 8.0の予約済み変数を使用して通知することも可能です。

- 予約済み変数については'[予約済み変数](#)'を参照してください。

(13) RDS セッションログオフ

指定した条件に該当するステータスのセッションを強制的にログオフします。ただしRemote Desktop Servicesで、「セッション」タブの“セッション”が“Console”と表示されるセッションは対象外となります。

※ 本アクションは代理監視機能に対応していません。ローカル監視インスタンスのみで利用可能です。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

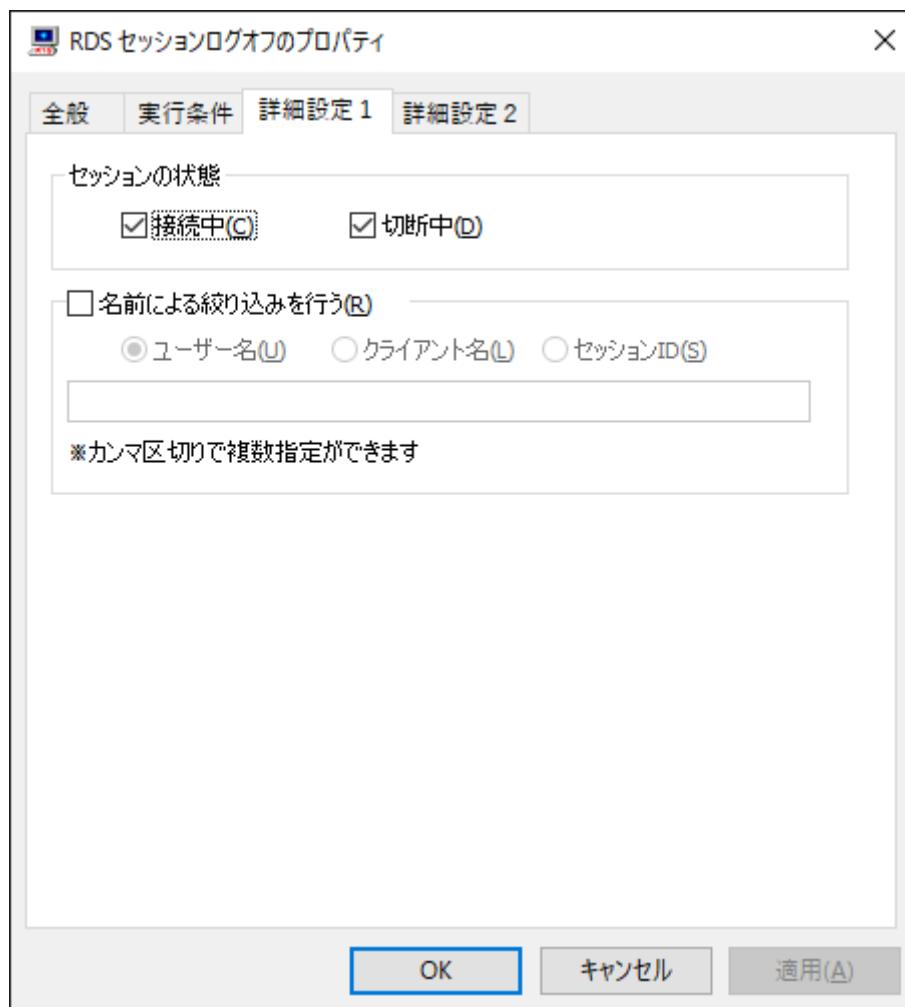
「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「詳細設定 1」タブ



- “セッションの状態”欄（必須）

監視するセッションの状態を指定します。“接続中”もしくは“切断中”的どちらかを指定してください。

- 接続中：接続中のセッションが対象になります。
- 切断中：切断状態のセッションが対象になります。

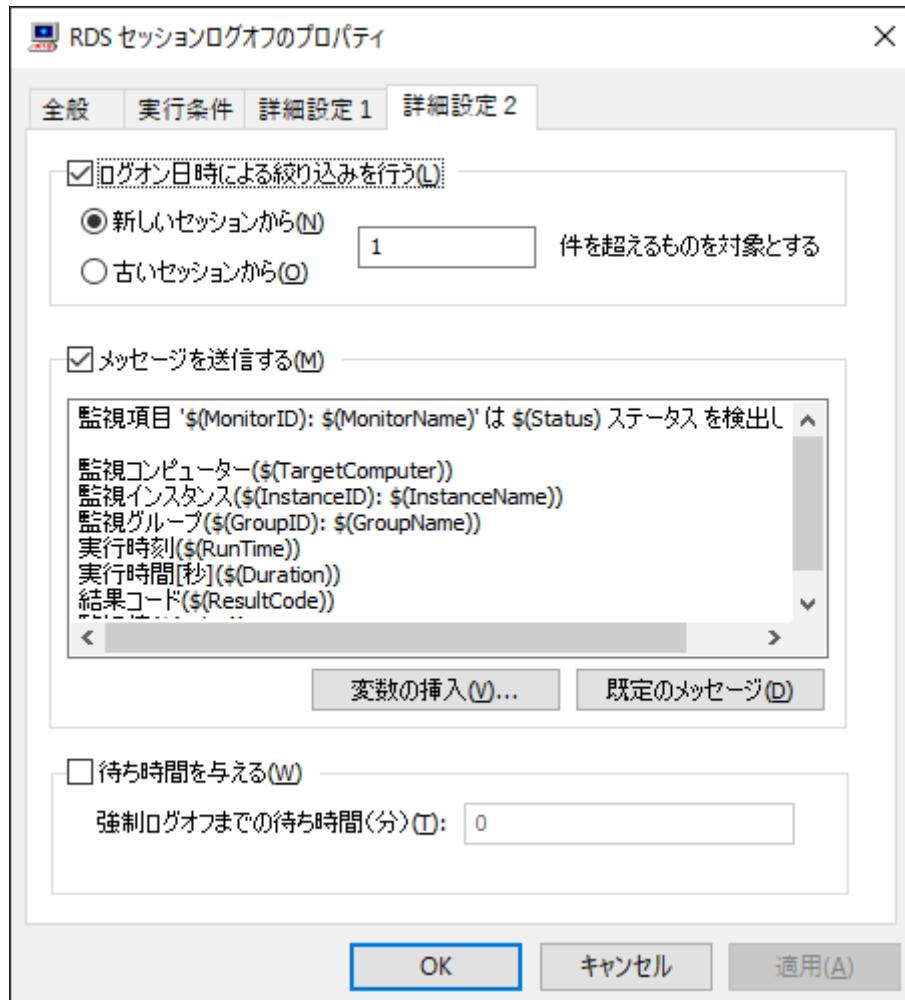
- “名前による絞り込みを行う”欄

ユーザー名、クライアント名、セッションIDを選択し、条件を入力することで絞り込みを行います。カンマ区切りで指定すると、複数の対象に対して絞り込みを行うことができます。名前を入力するときは、スペースを入力しないでください。

なお、以下の場合には名前による絞り込みを行いません。

- ・ "名前による絞り込みを行う"にチェックを入れていない場合
- ・ ユーザー名、クライアント名、セッションIDが入力されていない場合

D. 「詳細設定 2」タブ



- "ログオン日時による絞り込みを行う"欄

「詳細設定1」タブで指定した条件に該当する値について、さらにログオン日時で絞り込みむことができます。

ログオンした日時は、Remote Desktop Servicesにおいて“ログオン日時”で表示されており、“新しいセッションから”または“古いセッションから”指定した件数を超えるセッションが対象となります。

- ・ "0件"の指定はできません。0件を指定するとエラーとなります。

【例：「詳細設定1」タブの指定条件で絞り込んだ値が以下になる場合】

- ・ 「"新しいセッションから" "5件"を超えるものを対象とする」と設定した場合、ログオン時間の古い方からカウントして5件を超えているもの（下図の場合、①、②、③）が対象となります。
- ・ 「"古いセッションから" "5件"を超えるものを対象とする」と設定した場合、ログオン時間の新しい方からカウントして5件を超えているもの（下図の場合、⑥、⑦、⑧）が対象となります。

セッションID	ユーザー	クライアント	ログオン日時	
3	User1	PC-A	2022/01/01 15:40	… ①
2	User2	PC-D	2022/01/01 15:41	… ②
1	User3	PC-A	2022/01/01 15:45	… ③
4	User1	PC-D	2022/01/01 15:50	… ④
5	User2	PC-D	2022/01/01 16:00	… ⑤
6	User7	PC-A	2022/01/01 16:21	… ⑥
8	User6	PC-A	2022/01/01 16:22	… ⑦
7	User5	PC-A	2022/01/02 09:30	… ⑧

- "メッセージを送信する"欄

強制ログオフ時にメッセージを通知する場合、本欄にチェックを入れてメッセージを入力してください。[変数の挿入]ボタンを使用することで、BOM 8.0の予約済み変数を使用して通知することも可能です。

- 予約済み変数については[「予約済み変数」](#)を参照してください。

- "待ち時間を与える"欄

本欄にチェックを入れて"強制ログオフまでの待ち時間（分）"に分単位の時間を指定すると、指定の時間を超えた時点で強制的にログオフを実行します。

(14) カスタムアクション

カスタムアクション項目は、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合、またはしきい値のレベルが変化した場合に、サードパーティ製のコマンドラインベースのプログラムや、独自に記述したテキストベースのスクリプトプログラム（バッチファイルやWSH、PowerShellなど）を実行させることができます。

※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、プロパティの「設定」タブにある「プログラム名」欄の[参照]ボタンを押しても、ファイル選択画面でドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。

このような場合は、設定する内容を絶対パスで該当する欄に直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合には、有効化することで[参照]ボタンが使用できるようになります。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべてのアクション項目で共通です。

「全般」タブの詳細については'アクション項目の概要'の'[「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべてのアクション項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'アクション項目の概要'の'[「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



1. "プログラム名"フィールドに、任意の"実行プログラム名"を下記のどちらかの手段で設定します。

- "実行プログラム名"を、絶対パスで入力

"プログラム名"フィールドの[変数の挿入]ボタンをクリックし、"プログラム名"のパスにBOM 8.0の予約済み変数を使用することもできます。予約済み変数については[「予約済み変数」](#)を参照してください。

- [参照..]ボタンをクリックして、"ファイル選択"画面より"実行プログラム"を選択

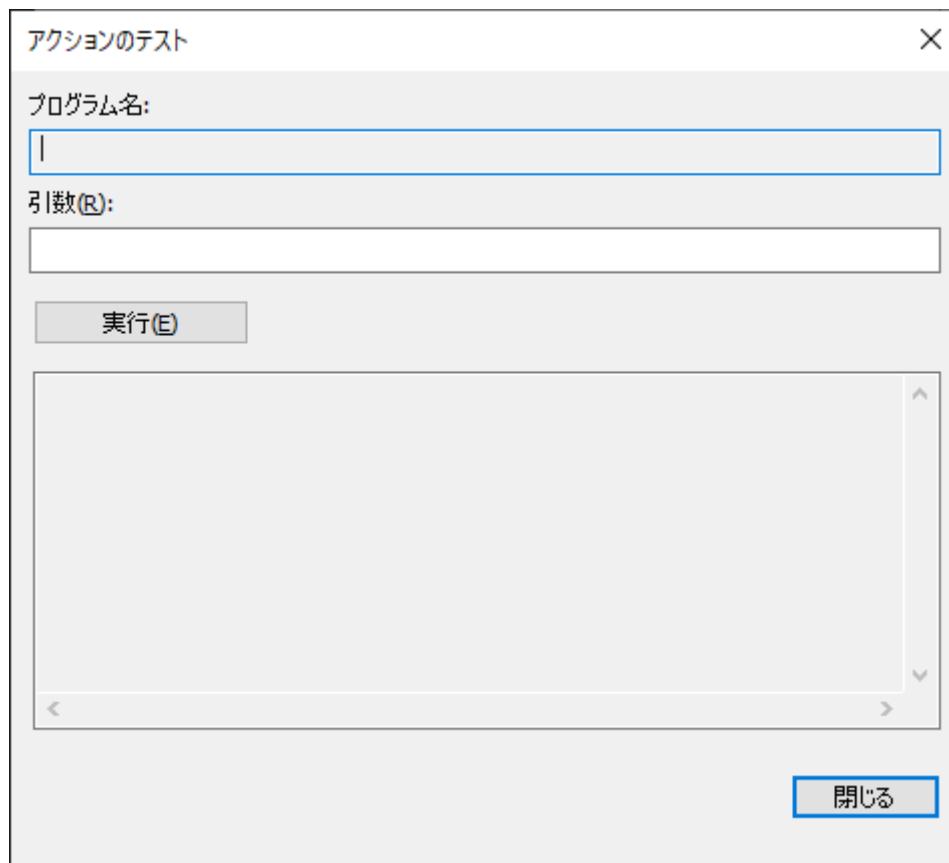
"隠しファイルの表示"チェックボックスもしくは"保護されたシステムファイルの表示"チェックボックスにチェックを入れると、条件に応じた該当ファイルが表示されます。

2. "引数"フィールドには実行プログラムの引数を記述します。

- "引数"フィールドの[変数の挿入]ボタンをクリックすることで"引数"に変数を指定することができますが、手順3.のテスト実行時にBOM 8.0の予約済み変数を使用することはできません。予約済み変数については[「予約済み変数」](#)を参照してください。

3. [テスト]ボタンをクリックすると"アクションのテスト"画面を表示し、「設定」タブの設定を加えてテスト実行することができます。

- コンソールプログラムをカスタムアクションとして設定する場合には、BOM監視サービスとBOMヘラパーサービスのサービスアカウントをローカルシステムアカウントとし、デスクトップとの対話にチェックしてください。
- 代理監視の場合にはコンソールプログラムは指定ができません。
- アクションの終了待ち時間は、既定値で2時間です。2時間経過後、アクションのプロセスは強制終了されます。



(15) HTTPS送信アクション

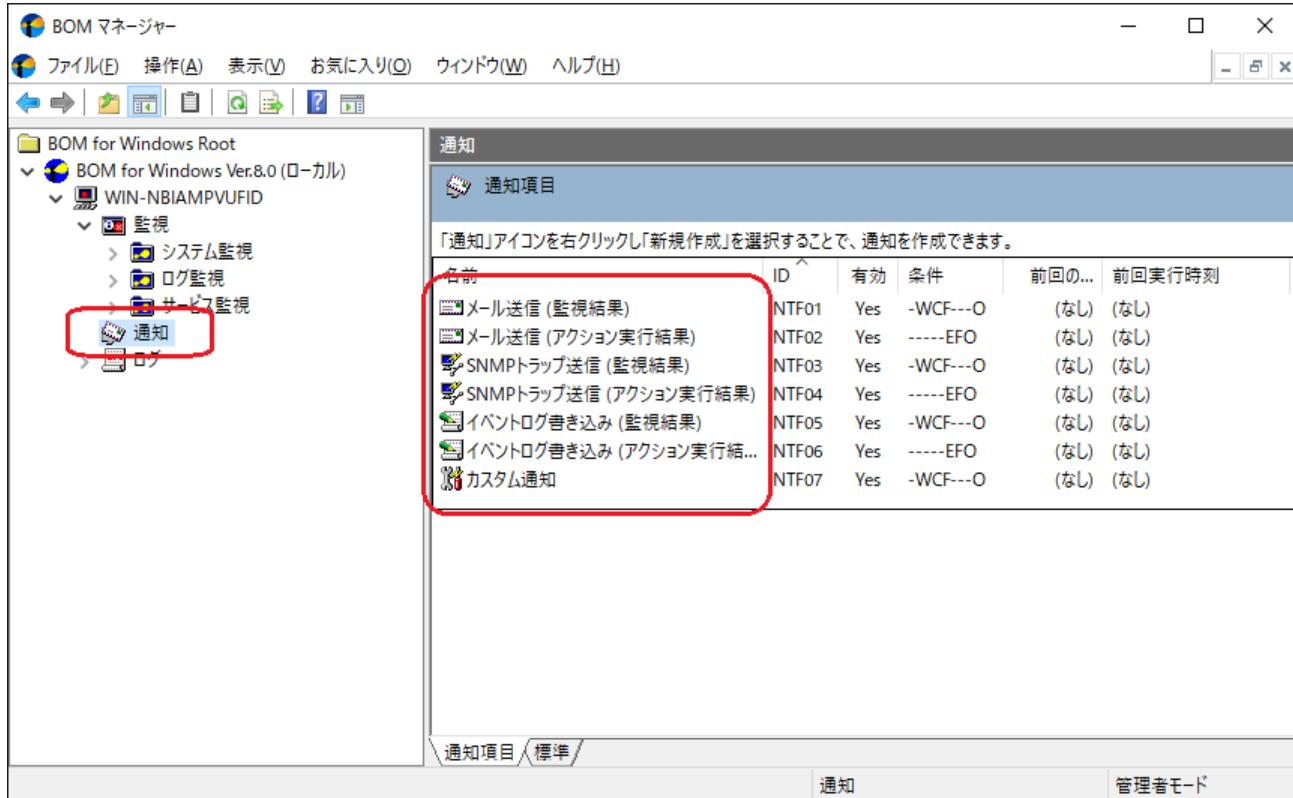
HTTPS送信アクション項目は、HTTPSプロトコルを使用して、アクションを実行させたい監視項目がしきい値のレベルに達した場合に、監視結果の情報や任意のファイルを指定したInternet Information Servicesの動作するWebサーバーへ送信することができます。

本アクションの詳細については、'BOM for Windows Ver.8.0 HTTPS 送受信 ユーザーズマニュアル'を参照してください。

第8章 通知

1. 通知の解説

通知項目とは、'監視項目'の監視項目のステータスである"正常"、"注意"、"危険"、"失敗"または、'アクション項目'のアクション実行ステータスである"成功"、"エラー"、"失敗"をトリガーとして、メール送信、SNMPトラップ送信、イベントログへの書き込みなどを実行させることができます。



"通知項目"と"アクション項目"の機能は、下記のように異なります。

項目	作成場所	起動条件	起動対象	実行条件	逐次処理
通知項目	"通知"ノード	監視項目および、"アクション項目"の各ステータス	監視グループ単位で指定	「毎回」 「変化時のみ」	無し
アクション項目	各監視項目	監視項目のステータス	自身がぶら下がる監視項目	「毎回」 「変化時のみ」 「回数指定」	あり

"通知項目"は"アクション項目"の各ステータスを起動条件に指定することができるため、「"カスタムアクション"で実行したバッチファイルの結果が失敗したことをトリガーに、システム管理者に"メール送信"を行う」などの制御ができます。

- 通知項目の実行には、その実行内容に応じた時間を要します。そのため、同じ通知項目が実行に要する時間よりも短い間隔で連続実行される状況では、通知が正常に実行されない可能性があります。通知実行の状況は実環境で確認し、必要に応じて実行間隔の調整を行ってください。

例：メール送信に20秒前後かかる環境において、5秒間隔でPing監視を実行し、"注意"や"危険"を検知した際は毎回メールを送信する。

- 上記の設定では、"注意"や"危険"が連続した際に5秒間隔でメール送信が連続実行されます。このような場合、以下のような設定の変更を推奨します。
 - Ping監視の間隔を延ばす。
 - 検知時のメール送信を"毎回"ではなく、"変化時のみ"にする。

2. 通知項目の作成

1. BOMマネージャーのスコープペインで"通知"ノードを右クリックし、コンテキストメニューから "新規作成"をクリックします。
2. 表示されたコンテキストメニューの通知項目 ("メール送信"、"SNMPトラップ送信"など) をクリックします。
3. 通知項目の起動条件 ("監視結果による通知"または、"アクション実行結果による通知") を選択します。
4. 手順1.で選択した"通知"ノードをクリックすると、リザルトペインに通知項目が表示されます。
5. 必要に応じて通知項目の設定を変更します。

以降のセクションでは、通知項目を有効にする方法、および使用可能なアクション項目とその設定値の詳細について解説します。

「全般」タブと「実行条件」タブは、すべての通知項目で共通です。

他のタブは、通知項目によって異なります。

3. 通知項目のコピー

通知項目をコピーすると、"通知"のリザルトペインに表示されます。

1. "通知項目"を右クリックし、コンテキストメニューの"コピー"をクリックします。
2. "通知"を右クリックするか、"通知"のリザルトペインを右クリックし、コンテキストメニューの"貼り付け"をクリックします。
 - インスタンス間で"通知項目"を"コピー"し、"貼り付け"することができます。
 - リモート接続時のスナップインノード間の"通知項目"のコピーはできません。

コピーした項目は同じ名前とプロパティ設定値を持っているため、必要に応じて通知項目のプロパティ"画面より設定の変更を行ってください。

4. 通知項目を有効にする

通知項目を実行するためには、"有効"状態にしておく必要があります。

通知項目は、下記のいずれかの方法で"有効"にできます。

- A. "通知項目"を右クリックし、コンテキストメニューの"有効"をクリックする。
 - B. "通知項目"を右クリック→コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックすると開く"プロパティ"画面で、"有効"チェックボックスにチェックを入れる。
 - C. リザルトペインで"通知項目"をダブルクリックして"プロパティ"画面を表示させ、"有効"チェックボックスにチェックを入れる。
 - D. "通知項目"をクリックし、リザルトペインの画面下部にある"有効"をクリックする。
- "通知項目"を"無効"にしたい際には、上記A.、B.、C.いずれかの手順で"無効"を選択します。
 - 各通知の「全般」タブの下部"1回のみ実行（実行後、自動的にアクションが無効となります）"チェックボックにチェックを入れた場合、該当の通知項目は1回のみ実行された後で自動的に"無効"になり、以降は実行されなくなります。

問題解消後などに通知項目を再び実行させる場合、上記の方法で改めて"有効"にする必要があります。

5. 通知項目のログ

(1) リザルトペイン表示

BOMマネージャーの"通知"をクリックすると、リザルトペインに"通知項目"の状態が下記のとおり表示されます。

The screenshot shows the BOM Manager interface. On the left, there's a navigation tree with 'BOM for Windows Root' expanded, showing 'BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)' and 'WIN-NBIAMPVUFID'. Under 'WIN-NBIAMPVUFID', '監視' is expanded, showing 'システム監視', 'ログ監視', 'サービス監視', and '通知' (which is highlighted with a red box). Below this is a 'ログ' node. On the right, a large window titled '通知' displays a table of '通知項目' (Notification Items). The table has columns: 名前 (Name), ID, 有効 (Effective), 条件 (Condition), 前回の... (Last time...), and 前回実行時刻 (Last execution time). The items listed are: メール送信 (監視結果) (NTF01), メール送信 (アクション実行結果) (NTF02), SNMPトラップ送信 (監視結果) (NTF03), SNMPトラップ送信 (アクション実行結果) (NTF04), イベントログ書き込み (監視結果) (NTF05), イベントログ書き込み (アクション実行結果) (NTF06), and カスタム通知 (NTF07). At the bottom of the right window, there are tabs for '通知項目' (Notification Items) and '標準' (Standard). Below the main window are buttons for '通知' (Notification) and '管理者モード' (Administrator Mode).

列名	説明
名前	実行される通知項目がリストされます。
ID	通知項目の"ID"がリストされます。
有効	通知項目が"有効"か"無効"かが表示されます。
条件	通知項目を実行させるために設定した条件が、リスト表示されます。 詳細は別表を参照してください。
前回の結果	通知項目の実行結果がリストされます。
前回実行時刻	通知項目が実行された日時がリストされます。

[条件]

条件記号	条件名	通知項目の"プロパティ"の設定内容
N	正常	"監視するステータス"フィールドの"正常"チェックボックスにチェックが入っている状態
W	注意	"監視するステータス"フィールドの"注意"チェックボックスにチェックが入っている状態
C	危険	"監視するステータス"フィールドの"危険"チェックボックスにチェックが入っている状態

条件記号	条件名	通知項目の“プロパティ”の設定内容
F	失敗	“監視するステータス”フィールドの“失敗”チェックボックスにチェックが入っている状態
S	成功	“アクションの実行結果”フィールドの“成功”チェックボックスにチェックが入っている状態
E	エラー	“アクションの実行結果”フィールドの“エラー”チェックボックスにチェックが入っている状態
F	失敗	“アクションの実行結果”フィールドの“失敗”チェックボックスにチェックが入っている状態
O	変化時のみ	“変化時のみ”ラジオボタンを選択した状態

(2) ログの表示

通知項目の実行状況は、ログで確認できます。

- アクション項目の実行ログは、以下のBOMログビューアーの他に、BOMマネージャーのヒストリーログからも確認することができます。ヒストリーログの詳細は、'ヒストリー'を参照してください。

The screenshot shows the BOM for Windows Log Viewer window. The title bar reads "BOM for Windows ログビューアー - [WIN-NBIAMPVUFID/イベントログ書き込み (監視...)]". The menu bar includes "ファイル(F)", "編集(E)", and "ビュー(V)". Below the menu is a toolbar with icons for search, refresh, and other functions. The main area is a grid table with columns: "名前" (Name), "結果" (Result), "実行時刻" (Execution Time), "コード" (Code), and "実行時間(秒)" (Execution Time (sec)). The table lists 18 successful log entries for "イベントログ書き込み (監視...)" from March 15, 2022, at 10:11:45, with execution times ranging from 0.078 to 0.656 seconds. A status bar at the bottom indicates "待機" (Waiting) and "18 件" (18 items).

名前	結果	実行時刻	コード	実行時間(秒)
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:47	0	0.172
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:47	0	0.250
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:46	0	0.359
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:46	0	0.375
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:46	0	0.313
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:46	0	0.109
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:46	0	0.281
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:44	0	0.656
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:44	0	0.672
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:44	0	0.719
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:44	0	0.828
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:44	0	0.766
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:44	0	0.672
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:11:44	0	0.672
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:10:45	0	0.078
イベントログ書き込み (監視...)	成功	2022/03/15 10:09:45	0	0.078

- BOMマネージャーで"通知"ノードをクリックし、リザルトペインに"通知項目"を表示します。
- 通知項目を右クリックし、コンテキストメニューの"ログの表示..."をクリックして"通知項目"の"BOMログビューアー"画面を表示します。
 - 一度に複数の"BOMログビューアー"画面を開くこともできます。
 - 1通知項目あたりの最大ログ蓄積量の既定値は15000件です。

項目・列名	説明
タイトルバー	現在表示されているインスタンス、通知項目の名前が表示されます。
名前	実行された通知項目がリストされます。
結果	通知項目の実行結果が、"成功"、"エラー"、"失敗"のいずれかでリストされます。 エラー：通知の実行モジュールは正常に動作し、結果的に期待される動作をしなかった場合 失敗：通知の実行モジュールそのものが正常に動作しなかった場合 カスタム通知では指定された外部アプリケーションの動作に依存するため、上記の動作とならない場合もあります。
実行時刻	通知項目が実行された日時がリストされます。

項目・列名	説明
コード	エラーコードがリストされます。この値は、通知項目が正常に実行された場合は"0"となります。
実行時間	通知項目を完了するまでにかかった時間が秒単位でリストされます。

(3) ログ蓄積量の最大件数の変更

通知項目のログは1通知項目あたり既定値で15000件まで保存できますが、下記のiniファイルの一部を書き換えることで最大件数を変更することができます。なお、設定は最初に通知項目のログが作成される場合に有効になります。

ログが既にある場合に最大件数を変更するには、まず'[各種ログのクリア](#)'の手順で通知項目のログを消去し、下記の ini ファイルの設定を変更してから、BOMヘルパーサービス（BOM8Helper）を再起動してください。

- iniファイルの保存場所

```
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config\  
ファイル名 : MxHelper.ini
```

- iniファイルの設定変更箇所

```
[Option]  
MaxNtfLog = 15000
```

- 上記は既定値です。数値部分を変更することで、保存できる件数を変更できます。

6. 通知項目におけるローカル監視と代理監視の違い

ローカル監視（自立分散監視）の場合、監視元であるBOMと監視対象は同一の環境であり、通知項目で設定された通知や実行プログラムはローカルコンピューター上で実行されます。

これに対して代理監視の場合、通知や実行プログラムは監視元である BOM がインストールされたコンピューター上で実行され、監視対象のコンピューター（代理監視先）上では実行されません。下表を参照してください。

通知項目名	監視元のコンピューター	代理監視先のコンピューター
メール送信	監視元コンピューターから、 指定したSMTPサーバーへ送信	—
SNMPトラップ送信	監視元コンピューターから、 指定したSNMPマネージャーに送信	—
イベントログ書き込み	代理監視先コンピューターで検知した内容を 監視元コンピューターのイベントログに書き込み	—
syslog送信	監視元コンピューターから、 指定したsyslogサーバーに送信	—
カスタム通知	実行プログラムは監視元コンピューター上で実行	(※)

※ カスタム通知によって代理監視先に対して何らかの働きかけを行いたい場合は、指定する実行プログラムそのものが代理監視先に対して働きかけられるよう作成されている必要があります。

7. 通知項目の詳細

(1) 通知項目の種類

BOM 8.0で使用できる通知項目は、下記の5種類です。

- 通知アクション系：4種類

アイコン	通知項目	説明
	メール送信	SMTP形式のメール通知
	SNMPトラップ送信	SNMP形式のトラップ送信による通知
	イベントログ書き込み	Windowsイベントログへの書き込みによる通知
	syslog送信	syslogサーバーへのsyslog送信による通知

- その他のアクション系：1種類

アイコン	通知項目	説明
	カスタム通知	外部アプリケーションを利用した制御/通知

(2) メール送信とSNMPトラップ送信に必要な環境設定

BOM 8.0で使用できる通知項目のうち、メール送信とSNMPトラップ送信は、"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル) のプロパティ"画面より、事前に下記の設定を行う必要があります。

- メール送信の場合

メールを送信するために必要なSMTPサーバーの情報。詳細は'[SMTP情報の設定](#)'を参照してください。

- SNMPトラップ送信の場合

BOM 8.0より送信したSNMPトラップを受信させるSNMPマネージャーの情報。詳細は'[SNMP情報の設定](#)'を参照してください。

(3) 通知項目の概要

通知項目は、以下の操作で"プロパティ"画面を表示することができます。

通知項目を意図するように動作させるため、この"プロパティ"画面で詳細な設定を行う必要があります。

- "通知"ノードをクリックし、リザルトペインに表示された設定対象の通知項目を右クリックして、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリック
- "通知"ノードをクリックし、リザルトペインに表示された設定対象の通知項目をクリックして、画面下部の"プロパティ"をクリック
- "通知"ノードをクリックし、リザルトペインに表示された設定対象の通知項目をダブルクリック

A. 基本操作

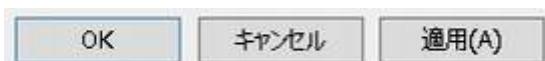
- タブ

"プロパティ"画面は、「全般」、「実行条件」、「設定」などのタブで構成されています。それぞれのタブをクリックすることで、該当するタブが表示され、設定を変更できます。



- 変更した設定の反映と破棄

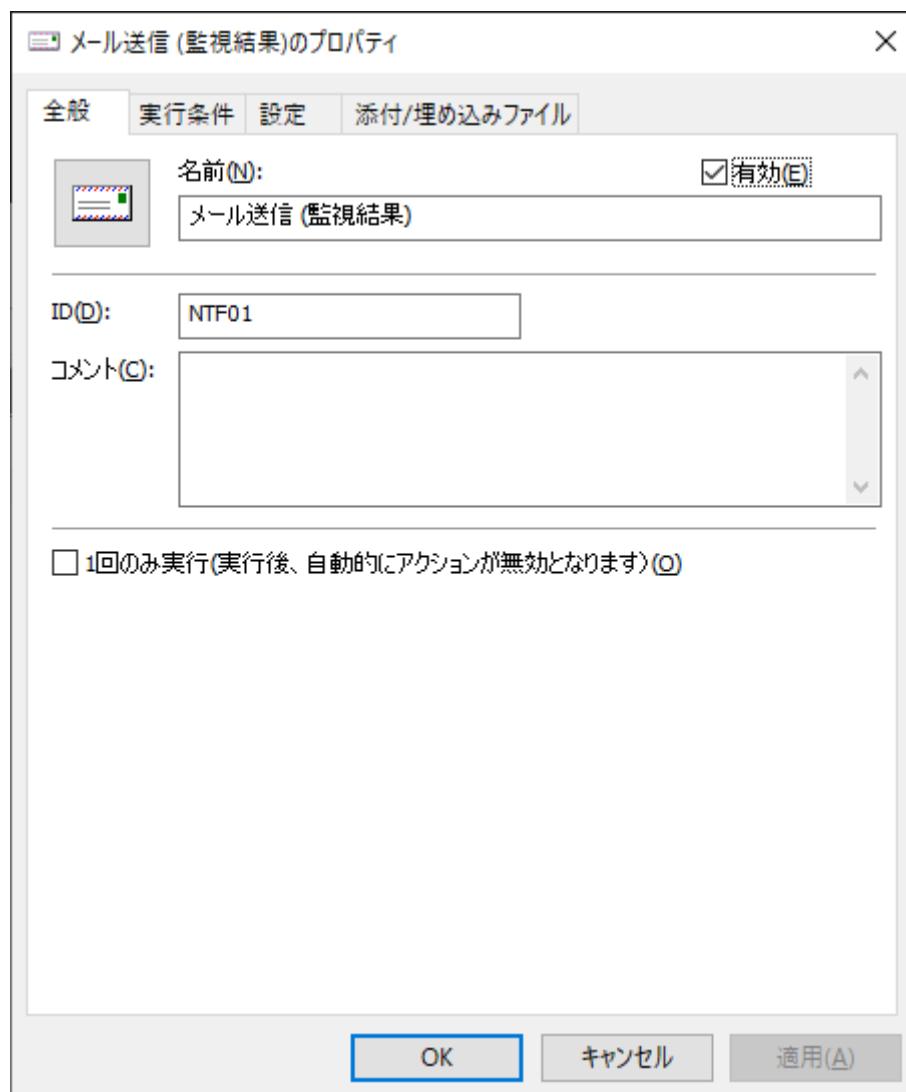
変更した設定は、[OK]ボタン、または[適用]ボタンをクリックすることでBOM 8.0に反映することができます。変更した設定を破棄したい場合には[キャンセル]ボタンをクリックします。



B. 「全般」タブ

「全般」タブは、"アイコン"、"ID"、"名前"に設定されている値を除き、すべての通知項目で共通です。

「全般」タブに登場する監視項目の基本概念に関する詳細は、'通知項目を有効にする'もあわせて参照してください。



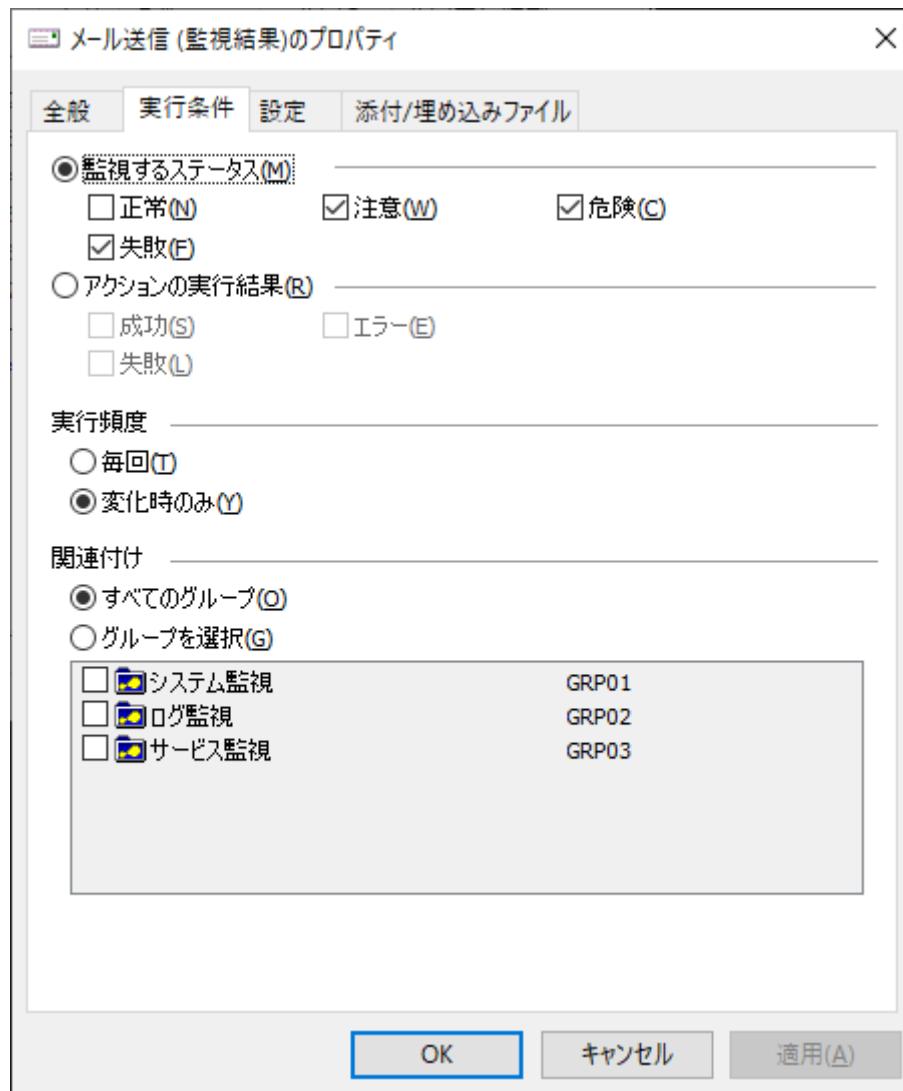
設定項目	説明
[アイコン]ボタン	[アイコン]ボタンは通知項目で設定されているアイコンが表示され、既定では通知項目の種類に合わせたアイコンが設定されています。 [アイコン]ボタンをクリックすることで、アイコンを変更するための"アイコンの選択"ダイアログを表示することができます。"アイコンの選択"ダイアログにて変更したいアイコンを選択し、[OK]ボタンをクリックすることでアイコンを変更できます。
"有効"チェックボックス	"有効"チェックボックスにチェックを入れることで、通知項目を実行します。 既定では"有効"チェックボックスにチェックが入っています。通知項目を実行しない場合は、"有効"チェックボックスのチェックを外します。
"名前"欄	通知項目名を入力します。既定値として通知項目の種類と同じ名称が入力されています。 必要に応じて、わかりやすい名称に変更してください。
"ID"欄	通知項目IDが表示されます。通知項目IDは、インスタンス内でアクション項目ごとに一意になるように、BOM 8.0が自動的に設定します。

設定項目	説明
"コメント"欄	通知項目の補足情報を入力します。既定では空白です。 必要に応じて入力してください。
"1回のみ実行"チェックボックス	"1回のみ実行"チェックボックスにチェックが入っている場合、通知項目が実行された時に上記の"有効"チェックボックスのチェックを自動で外します。そのため、再び手動で"有効"チェックボックスにチェックを入れるまで、その通知項目は起動しなくなります。

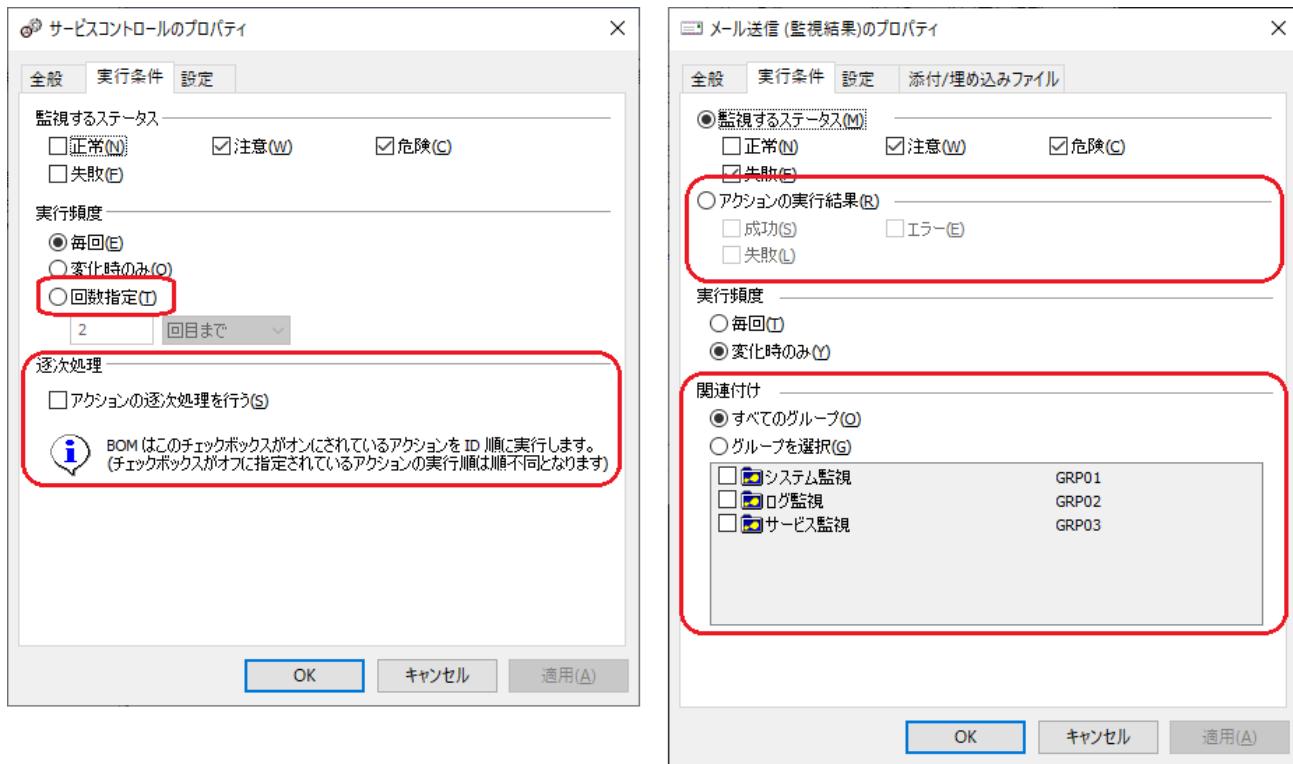
C. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブは、通知項目を実行するための条件を設定します。

「実行条件」タブは、"監視ステータス"、"実行頻度"の既定値を除き、すべての通知項目で共通です。



下図はどちらもメール送信の「実行条件」タブですが、左側が"アクション項目"、右側が"通知項目"です。"アクション項目"と"通知項目"は、実行条件の"アクションの実行結果"部分、"実行頻度"、"逐次処理"、"関連付け"の4項目で設定できる内容が異なります。



【左図：アクション項目、右図：通知項目】

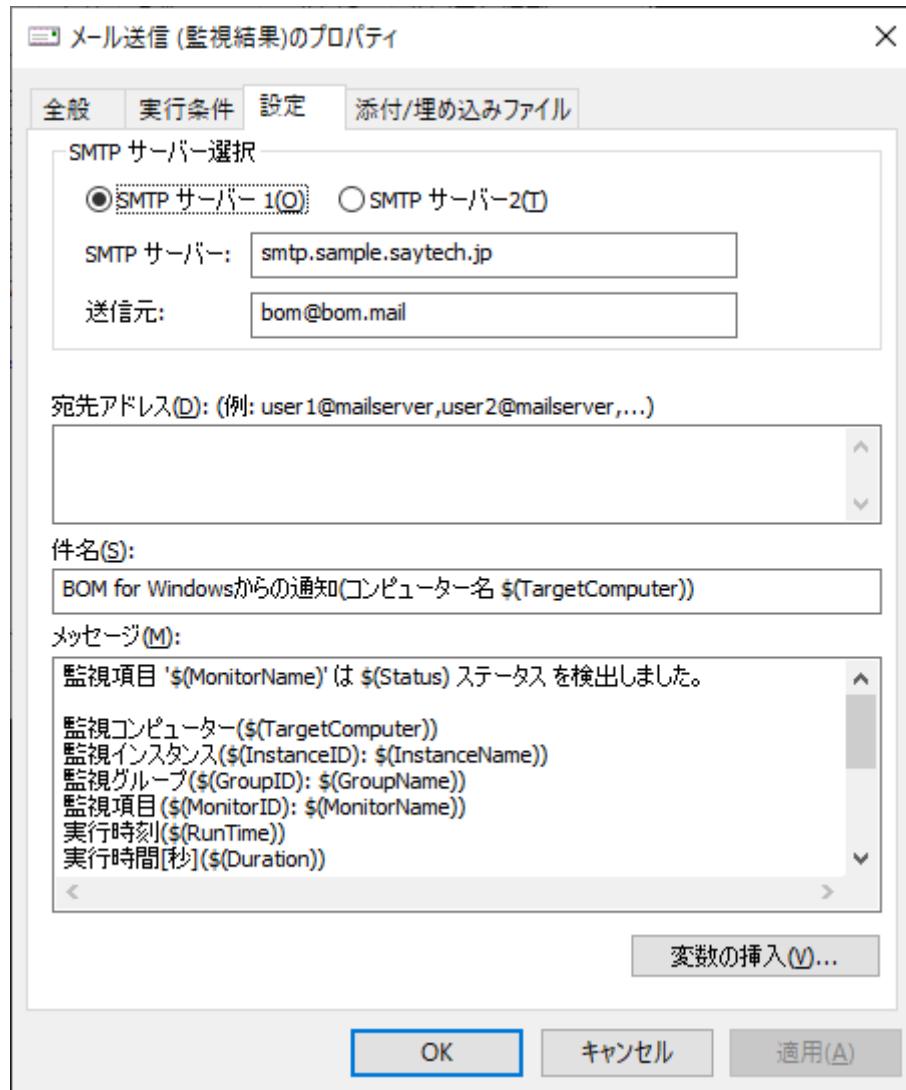
「全般」タブで"1回のみ実行"チェックボックスにチェックを入れた場合、1度アクションが実行されると通知項目が無効状態になるため、"実行頻度"フィールドの設定がどのような値であっても実行されません。

設定項目	説明
"監視するステータス"ラジオボタン	チェックすることで、監視項目の監視結果（ステータス）を、通知項目の起動条件として指定することができます。 指定できるステータスは、"正常"、"注意"、"危険"、"失敗"の4つがあり、各ステータスのチェックボックスにチェックを入れて起動条件を満たした際に、通知項目を実行することができます。
"アクションの実行結果"ラジオボタン	チェックすることで、アクション項目の実行結果（ステータス）を、通知項目の起動条件として指定することができます。 指定できるステータスは、"成功"、"エラー"、"失敗"の3つがあり、各ステータスのチェックボックスにチェックを入れて起動条件を満たした際に、通知項目を実行することができます。
"実行頻度"フィールド	上記で選択にした起動条件について、同一のステータスが連続して発生した際の動作を指定することができます。 既定では以下の"変化時のみ"が選択されています。
"毎回"ラジオボタン	通知項目が起動するステータス条件を満たしていた際に、通知項目を毎回実行します。
"変化時のみ"ラジオボタン	通知項目が起動するステータス条件を満たしていたとしても、前回のステータスと同一であった時には通知項目は実行しません。
"関連付け"フィールド	上記で設定した起動条件と実行頻度を、どの"監視グループ"に対して適用するか選択します。
"すべてのグループ"ラジオボタン	すべての"監視グループ"に属する"監視項目"もしくは"アクション項目"のステータスを通知項目の起動対象とします。

設定項目	説明
"グループを選択"ラジオボタン	"グループ選択"フィールドに表示された"監視グループ"の各チェックボックスにチェックを入れることで、該当する"監視グループ"に属する"監視項目"もしくは"アクション項目"のステータスを、通知項目の起動条件とします。

D. 「設定」タブ

「設定」タブは通知項目の種類によって異なり、通知項目のコントロール対象とコントロール方法を設定します。



(4) メール送信（通知項目）

メール送信（通知項目）は、"実行条件"で指定した"監視グループ"に属する"監視項目"のステータスもしくは"アクション項目"の実行結果と、それらの実行頻度といった起動条件を満たした場合に、指定したメールアドレスにメールを送信します。

- 事前に、BOMマネージャーのスコープペインの"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"の"プロパティ"画面の「SMTP」タブで "SMTPサーバー"設定値を設定する必要があります。詳細は'[SMTP情報の設定](#)'を参照してください。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべての通知項目で共通です。

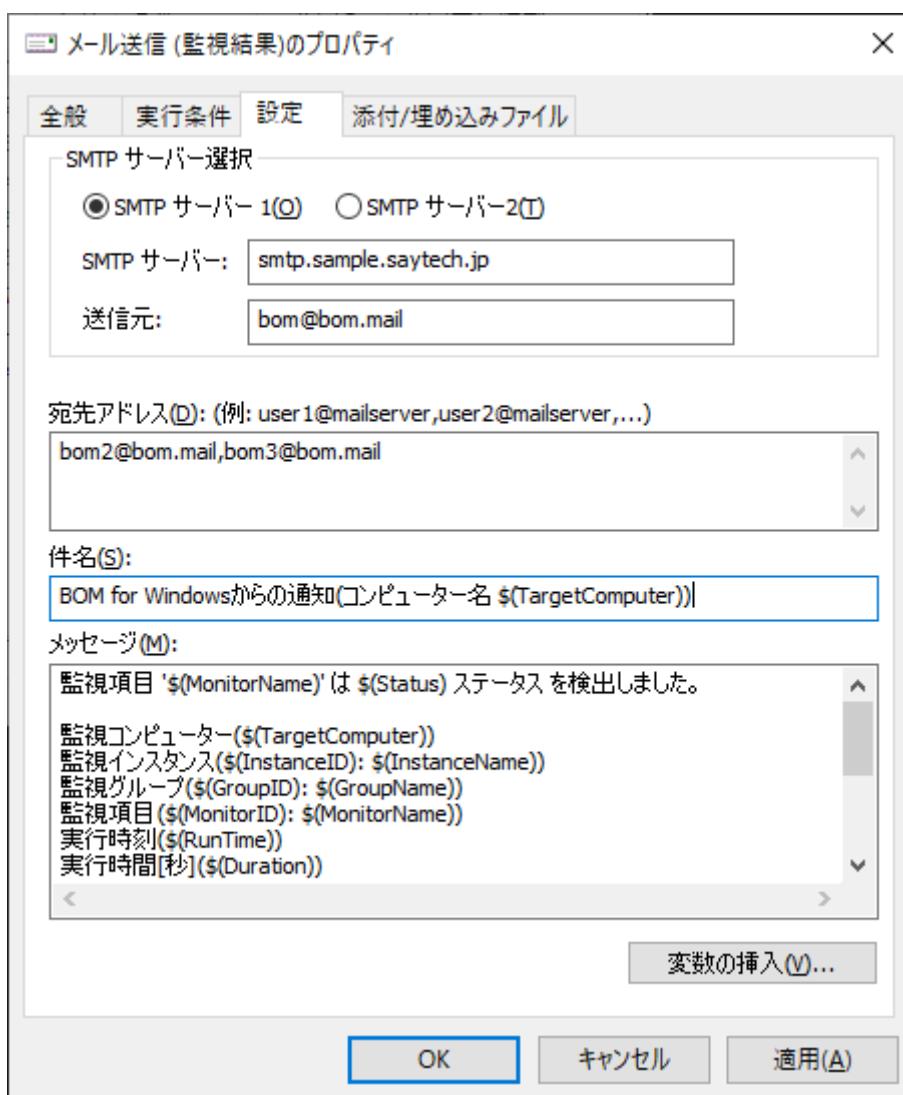
「全般」タブの詳細については'通知項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべての通知項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'通知項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



- "SMTPサーバー選択"フィールドで、"SMTP サーバー1"ラジオボタンまたは"SMTPサーバー2"ラジオボタンのいずれかを選択します。

- 上記の選択時、"SMTPサーバー"フィールドと"送信元"フィールドに情報が何も表示されない場合は、"SMTPサーバー"に関する情報を設定する必要があります。詳細は'[SMTP情報の設定](#)'を参照してください。

2. "宛先アドレス"フィールドに、メッセージの宛先となる電子メールアカウントを入力します。

- 複数のアドレスを指定する際には、カンマで区切って入力します。
- 宛先アドレスの最大文字数は1000文字です。

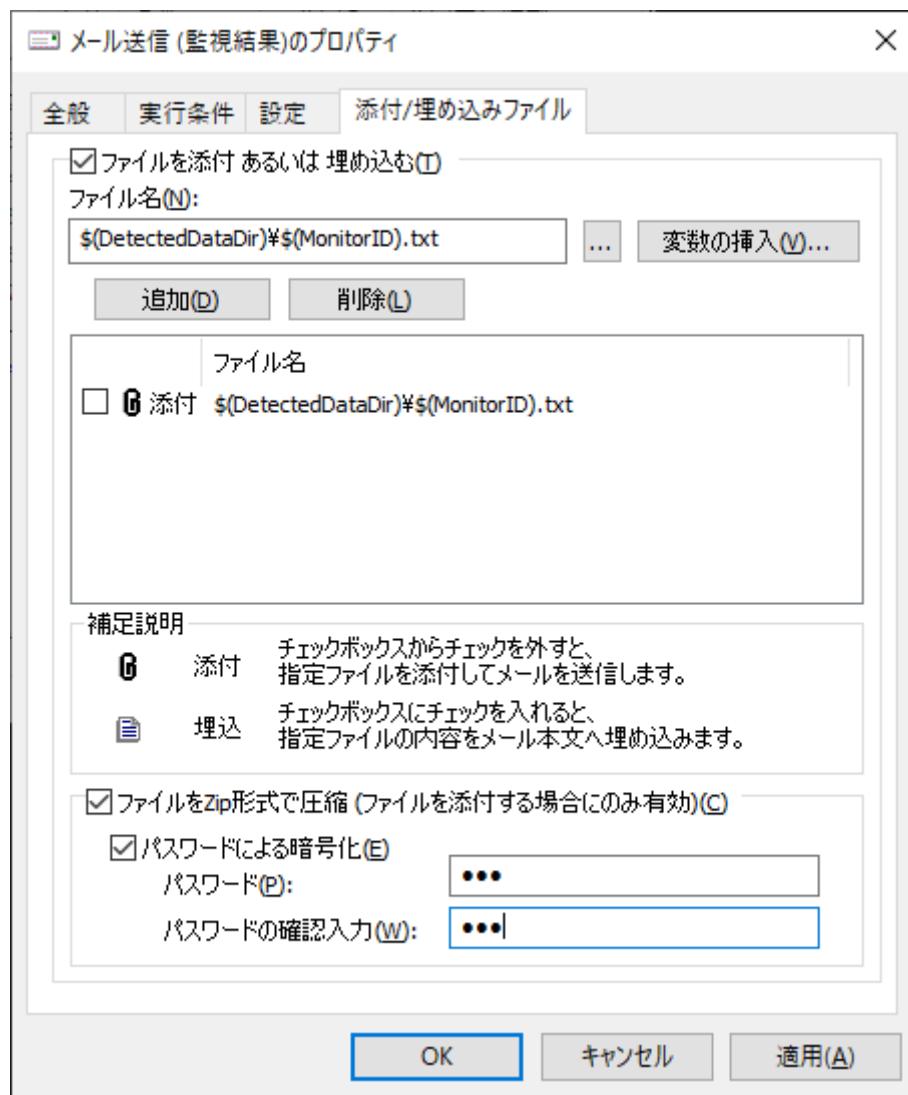
3. "件名"フィールドに、メールの件名を入力します。

- 既定値で設定されている件名の変数は、[変数の挿入]ボタンをクリックすることで変数リストを表示させて確認できます。

4. "メッセージ"フィールドに、メールの本文を入力します。

- "メッセージ"の最大文字数は2500文字です。
- [変数の挿入]ボタンより2500文字を超える入力をした場合、"メッセージ"フィールドに反映されるのは2500文字です。
- 変数に関しては展開後の文字数で換算されますが、展開後2500文字を超えた場合でも問題なくアクションは実行します。
- メール送信のメッセージはRFC2822より、メール本文の1行あたりの文字数が決まっており、BOM 8.0では、1行における文字列が991バイト以上になった時点で強制改行します。

D. 「添付/埋め込みファイル」タブ



[変数の挿入]ボタンより変数名を指定することで、テキストログ監視やイベントログ監視でエクスポートしたテキストファイルをメールに添付することができます。

1. "ファイルを添付あるいは埋め込む"チェックボックスにチェックを入れることで、メール送信アクションにファイルを添付する、または添付ファイルの中身をメール本文に埋め込むことができます。
 - ファイルを埋め込む場合には、埋め込むファイルはテキストファイルである必要があります。

2. "ファイル名"フィールドに、下記のいずれかの手段で添付したいファイルの"ファイル名"を設定します。手順3.の[追加]ボタンをクリックするまで、選択したファイルは添付ファイルの対象にはならないため、注意が必要です。

- 添付するファイルの絶対パスを入力
- [...]ボタンを使用

[...]ボタンをクリックすると、ファイル選択画面が開きます。任意のファイルを選択して、[OK]ボタンをクリックします。

※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、ファイル選択画面にドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。

このような場合は、指定するファイルを絶対パスで直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合は、有効化することでドライブが表示されるようになります。

- [変数の挿入]ボタンを使用

[変数の挿入]ボタンをクリックし、"変数の挿入"画面で"検出テキストのエクスポートファイル名を指定"チェックボックスにチェックを入れた後に[挿入]ボタンをクリックすることで、以下の文字列が設定され、テキストログ監視やイベントログ監視でエクスポートしたテキストファイルを指定できます。

```
$(DetectedDataDir)¥$(MonitorID).txt
```

また、"変数の挿入"画面で"検出テキストのエクスポートファイル名を指定"チェックボックスのチェックを外した後、変数リストの対象変数をクリックして[挿入]ボタンをクリックするか、直接変数をダブルクリックすることで、"変数の挿入"フィールドに変数を含んだ"ファイル名"を設定することも可能です。

3. [追加]ボタンをクリックすると、手順2.で指定したファイルを、添付ファイルの対象として下部の"ファイル"フィールドに表示します。
4. ファイルをメール本文に埋め込みたい場合、手順3.の"ファイル"フィールドの"ファイル名"の横にあるチェックボックスにチェックを入れます。
 - JIS、Shift JIS以外のテキストファイルの埋め込みはできません。
5. "ファイルをZip形式で圧縮（ファイルを添付する場合にのみ有効）"チェックボックスにチェックを入れることで、手順4.でメール本文の埋め込み対象にしなかった添付ファイル一式を圧縮することができます。
 - 手順4.で、埋め込み対象に指定したファイルは圧縮の対象にはなりません。
 - 圧縮した添付ファイルに対して、パスワードによる暗号化を行う場合には、"パスワードによる暗号化"チェックボックスにチェックを入れて、"パスワード"と"パスワードの確認入力"を入力します。

(5) SNMPトラップ送信（通知項目）

SNMPトラップ送信（通知項目）は、"実行条件"で指定した"監視グループ"に属する"監視項目"のステータスもしくは"アクション項目"の実行結果と、それらの実行頻度といった起動条件を満たした場合に、指定したSNMPマネージャーにSNMPトラップを送信します。

- 事前に、BOMマネージャーのスコープペインの"BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）"の"プロパティ"画面の「SNMP」タブで "SNMPマネージャー"設定値を設定する必要があります。詳細は['SNMP情報の設定'](#)を参照してください。
- 代理監視の場合には、代理監視元コンピューターではなく、代理監視はコンピューターのIPアドレスがSNMPマネージャーに通知されます。SNMPマネージャー側の設定を行う際には、代理監視先コンピューターのIPアドレスも登録してください。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべての通知項目で共通です。

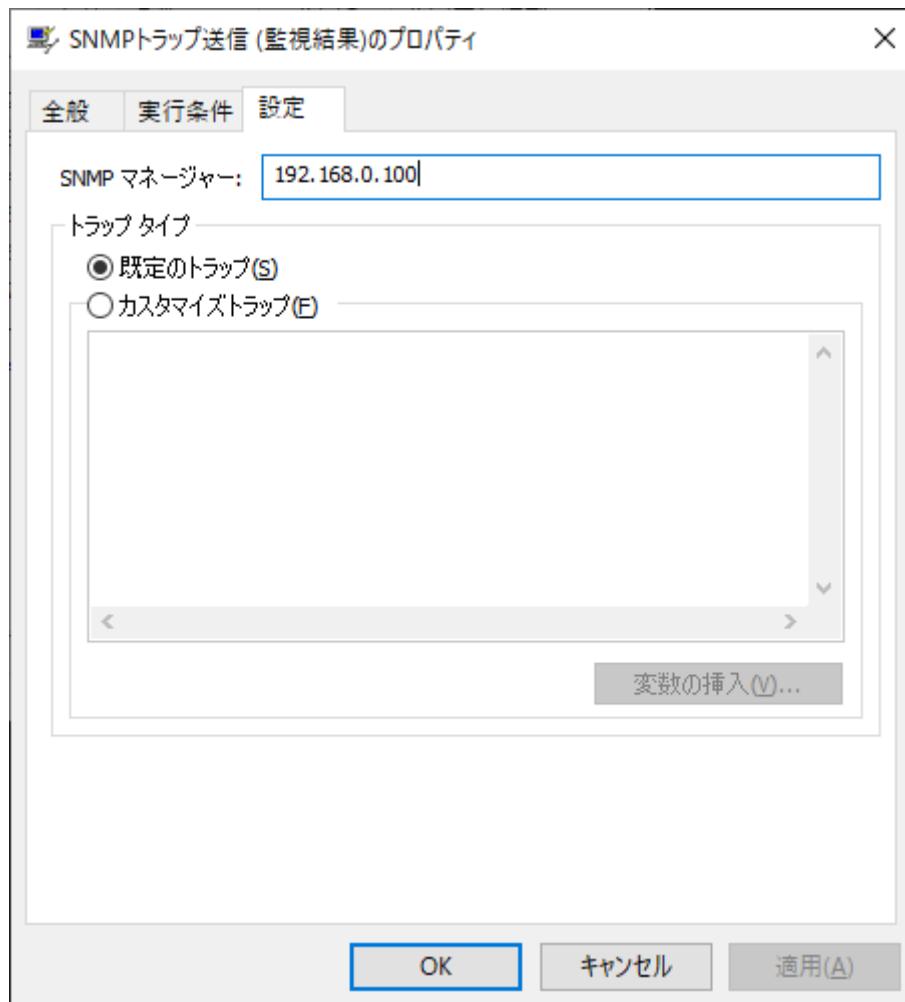
「全般」タブの詳細については'通知項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべての通知項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'通知項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



- "SNMPマネージャー"フィールドに、情報が何も表示されない場合、"SNMPマネージャー"に関する情報を設定する必要があります。詳細は['SNMP情報の設定'](#)を参照してください。

2. "トラップ タイプ"フィールドは、下記のどちらかを設定します。

- "既定のトラップ"ラジオボタンを選択した場合

メッセージはBOM 8.0の既定のトラップ内容とともにトラップ送信されます。

- "カスタマイズトラップ"ラジオボタンを選択した場合

"メッセージ"フィールドに指定した内容でトラップ送信されます。

3. "メッセージ"フィールドは、手順2.で"カスタマイズトラップ"ラジオボタンを選択した際に、トラップ送信される内容です。

- "メッセージ"の最大文字数は255文字です。制限数を超える場合、エラーとなりSNMPトラップが実行されません。
- 変数の展開後の文字数が255文字を超える場合、エラーとなりSNMPトラップが実行されません。

4. [変数の挿入]ボタンをクリックすると、手順2.の"メッセージ"フィールドに挿入可能な、BOM 8.0の予約済み変数をリストから選択することができる"変数の挿入"画面を表示させることができます。

- 予約済み変数については['予約済み変数'](#)を参照してください。
- [変数の挿入]ボタンより、"グループ名"、"監視名"、"アクション名"に格納される最大文字数は63文字です。制限数を超えてるとエラーになり、SNMPトラップが実行されません。

D. SNMPトラップの送信内容

SNMPトラップの送信内容は、各"OID"に設定されています。"OID"の詳細は下記の表を参照してください。

- 既定のトラップ内容かつ、「実行条件」タブの"監視するステータス"ラジオボタンを選択している場合

送信コンピューター名 (TargetComputer)、インスタンスID (InstanceID)、グループ名 (GroupName)、監視項目名 (MonitorName)、監視取得値 (Value)、監視結果 (ResultCode) で、各内容に"OID"が対応しています。

- 既定のトラップ内容かつ、「実行条件」タブの"アクションの実行結果"ラジオボタンを選択している場合

送信コンピューター名 (TargetComputer)、インスタンスID (InstanceID)、グループ名 (GroupName)、監視項目名 (MonitorName)、監視取得値 (Value)、監視ステータス (Status)、アクション名 (ActionName)、アクション実行結果 (ExitCode)、監視結果 (ResultCode) です。

- カスタマイズトラップ時の送信内容

カスタマイズトラップメッセージ ("\$(UserMsg)")

監視アイテム（オブジェクト）

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.1	mxTargetComputer	コンピューター名
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.3	mxInstanceID	インスタンスID
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.6	mxGroupName	監視グループ名
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.8	mxMonitorName	監視項目名
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.10	mxActionName	アクション名
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.13	mxresultCode	監視結果コード

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.14	mxMonitorValue	監視取得値
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.15	mxMonitorStatus	監視ステータス
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.16	mxExitCode	終了コード
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.1.25	mxUserMsg	ユーザーメッセージ

監視ステータス（トラップ）

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.20	mxMonitorFailure	監視失敗
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.21	mxStatusNormal	監視正常
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.22	mxStatusWarning	監視注意
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.23	mxStatusCritical	監視危険

アクションステータス（トラップ）

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.30	mxActionFailure	アクション失敗
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.31	mxActionSuccess	アクション成功
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.32	mxActionError	アクションエラー

その他（トラップ）

OID	オブジェクト名	通知内容
1.3.6.1.4.1.10035.2.10.1.2.0.41	mxUserMessage	ユーザー定義

(6) イベントログ書き込み（通知項目）

イベントログ書き込み（通知項目）は、"実行条件"で指定した"監視グループ"に属する"監視項目"のステータスもしくは"アクション項目"の実行結果と、それらの実行頻度といった起動条件を満たした場合に、指定した事項をイベントログに書き込みます。

- イベントログに書き込む内容はあらかじめ既定値が決まっており、「設定」タブの"既定のメッセージ"フィールドの内容は必ず書き込まれます。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべての通知項目で共通です。

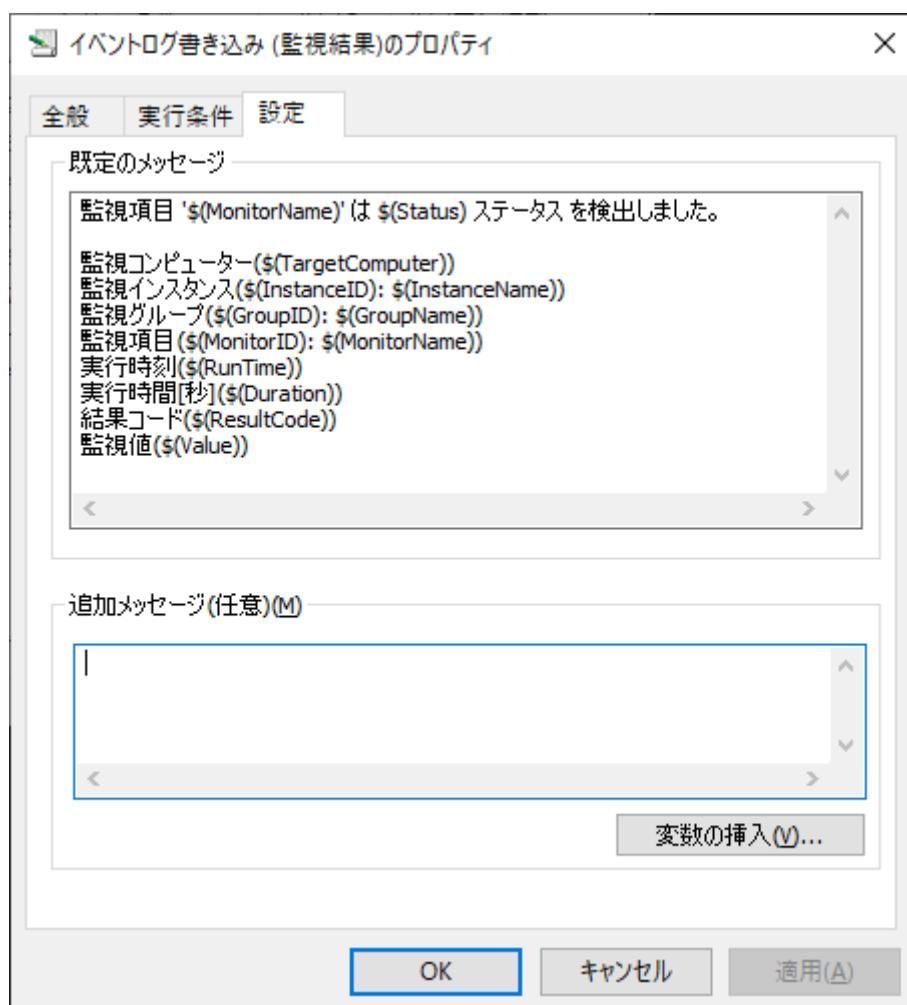
「全般」タブの詳細については'通知項目の概要'の '[「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべての通知項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'通知項目の概要'の '[「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ

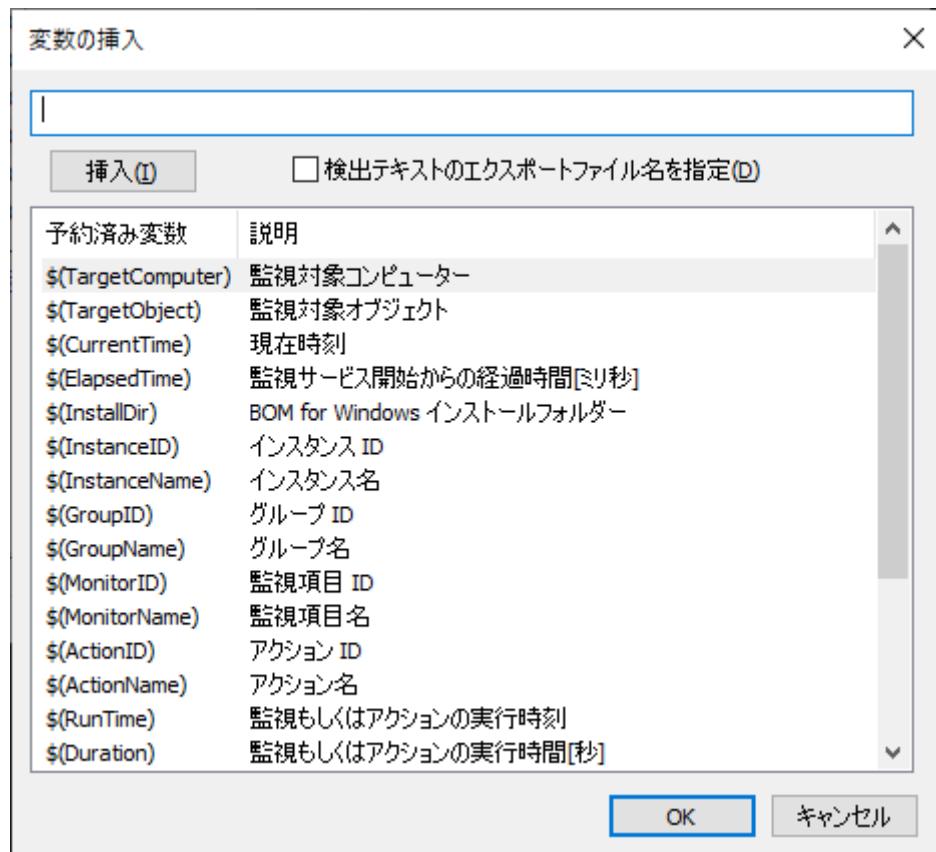


- "既定のメッセージ"フィールドの内容は必ずイベントログに書き込まれます。

- "既定のメッセージ"中の"\$"で始まる記号は変数です。[変数の挿入]ボタンをクリックして変数の内容を確認することができます。

- "追加メッセージ（任意）"フィールドに入力した内容は、既定値以降に付け加えてイベントログに書き込むことができます。

- ・[変数の挿入]ボタンをクリックして、変数を使用することもできます。
- ・追加メッセージの最大文字数は2000文字です。
- ・[変数の挿入]ボタンより2000文字を超える入力をした場合、"メッセージ"フィールドに反映されるのは2000文字です。
- ・変数に関しては展開後の文字数で換算されますが、展開後2000文字を超えた場合でも問題なくアクションは実行されます。



D. イベントログの出力内容

イベントログ書き込みアクションで、実際にイベントログに書き込まれる内容は下記のとおりです。

- イベントログの種別
 - "アプリケーション"
- ソース
 - "Bom8Action"
- 分類
 - "なし"
- イベントの種類

監視ステータスによって、イベントの種類が変わります。ステータス、イベントの種類、イベントIDの相関は下記のとおりです。

イベントID	監視ステータス	イベントログ出力	
		種類	説明
3300	正常	情報	説明本文はすべて共通で既定のメッセージが書き込まれます。 追加メッセージが設定されていれば既定メッセージに追記されます。
3301	注意	警告	
3302	危険	エラ ー	
3303	失敗	エラ ー	

(7) syslog送信（通知項目）

syslog送信アクションは、"実行条件"で指定した"監視グループ"に属する"監視項目"のステータスもしくは"アクション項目"の実行結果と、それらの実行頻度といった起動条件を満たした場合に、任意の送信先ホストに指定した事項をsyslog形式で送信します。

※ UDPを使用して送信する場合、syslogサーバー側で取りこぼしが発生する可能性があります。

※ メッセージの送信文字コードはUTF-8です。また、ASCIIコード33(0x21)～126(0x1E) + 32(0x20)以外の文字のロギング（日本語などがロギングまたは表示されるかどうかなど）は受信先のsyslogサーバーの仕様によります。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべての通知項目で共通です。

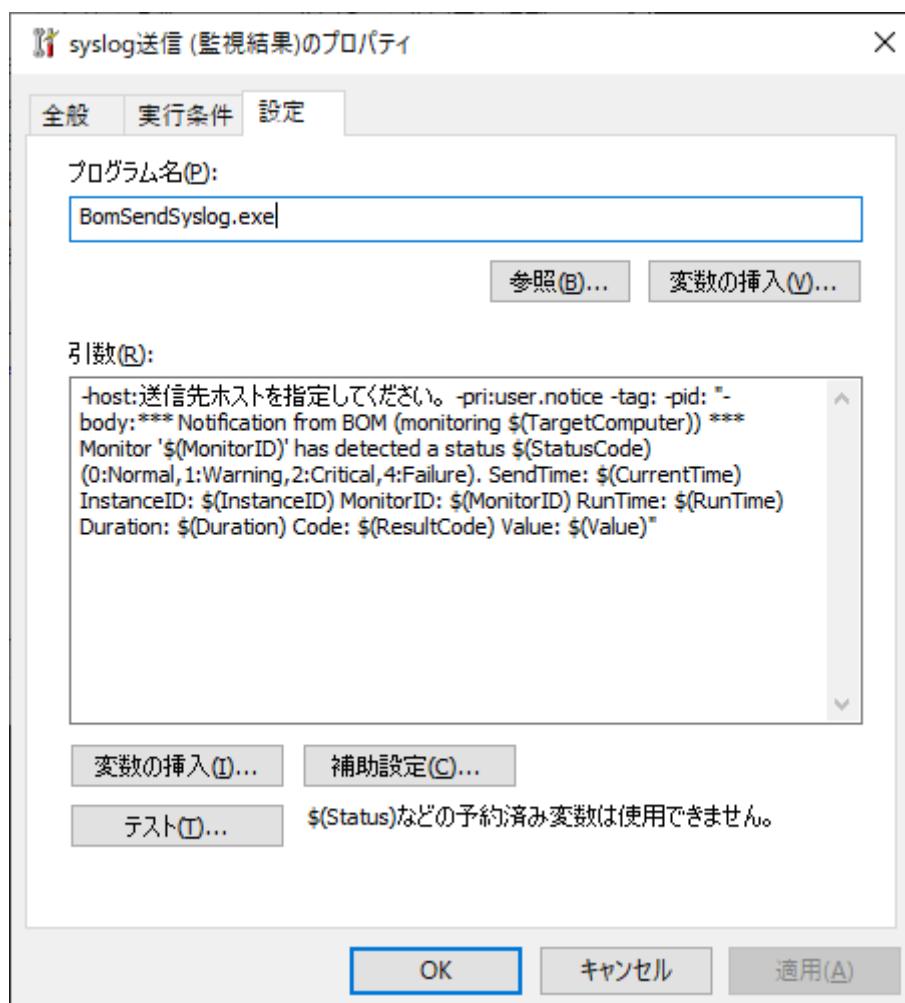
「全般」タブの詳細については'通知項目の概要'の'[「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべての通知項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'通知項目の概要'の'[「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



1. "プログラム名"フィールドにはあらかじめ"BomSendSyslog.exe"と入力されていますので、変更しないでください。また、"プログラム名"フィールドの[参照]ボタンおよび[変数の挿入]ボタンは使用しないでください。
2. "引数"フィールドは以下の内容で設定および入力してください。

引数	説明
-host	"送信先ホストを指定してください。"部分を削除し、syslogを送信するホストのIPアドレス(IPv4、IPv6)またはコンピューターナンで指定します。
-pri	プライオリティを数値(0~191)または[facilityコード].[severityコード]で指定します。facilityコードおよびseverityコードについては、syslog送信アクションの' プライオリティコード表 'を参照してください。
-p	送信先ポート番号を指定します。 引数または値が無い場合は、getservbynameで取得された値を使用します。RFC3164ではudp:514が使用されます。
-body	「"-body:」から末尾の「」」(ダブルクオーテーション)の間に、送信する情報を設定します。 変数を使用する場合は、「引数」フィールドの[変数の挿入]ボタンを使用してください。(※1) ヘッダーなどの情報を含めて全体で1024byteに収まらない場合、送信に失敗します。
-rfc5424	この引数を追加することにより、RFC5424形式のsyslogプロトコルで動作します。 指定されていない場合、RFC3164形式で動作します。
-udp	この引数を追加することにより、UDPで通信します。(※2) RFC5424形式を指定した時のみ使用でき、RFC3164形式の場合は無視されます。
-tcp	この引数を追加することにより、TCPで通信します。(※2) RFC5424形式を指定した時のみ使用でき、RFC3164形式の場合は無視されます。
-tls	この引数を追加することにより、通信をTLSで暗号化します(UDP、TCP共用)。(※3) RFC5424形式を指定した時のみ使用でき、RFC3164形式の場合は無視されます。また使用する際は、あらかじめsyslogサーバー側の証明書がインポートされている必要があります。

※1 "引数"フィールドの[変数の挿入]ボタンをクリックし、予約済み変数の一覧から選択します。選択後、[挿入]ボタン→[OK]ボタンをクリックすると、"引数"フィールドのカーソルの位置に選択した変数が挿入されます。
予約済み変数については[予約済み変数](#)を参照してください。

※2 "-udp"または"-tls"の指定が無い場合はUDPプロトコルで通信し、両方が指定されている場合は"-tls"が優先されます。

※3 BOM syslog 受信機能が対応するのはTCPのみです。

[引数欄の記述例]

- RFC3164形式を使用し、ホスト名"syslog_srv"に対して、プライオリティをメールシステムのエラーで送信する場合。

```
-host:syslog_srv -pri:mail.warn -tag: -pid: "-body: <省略>"
```

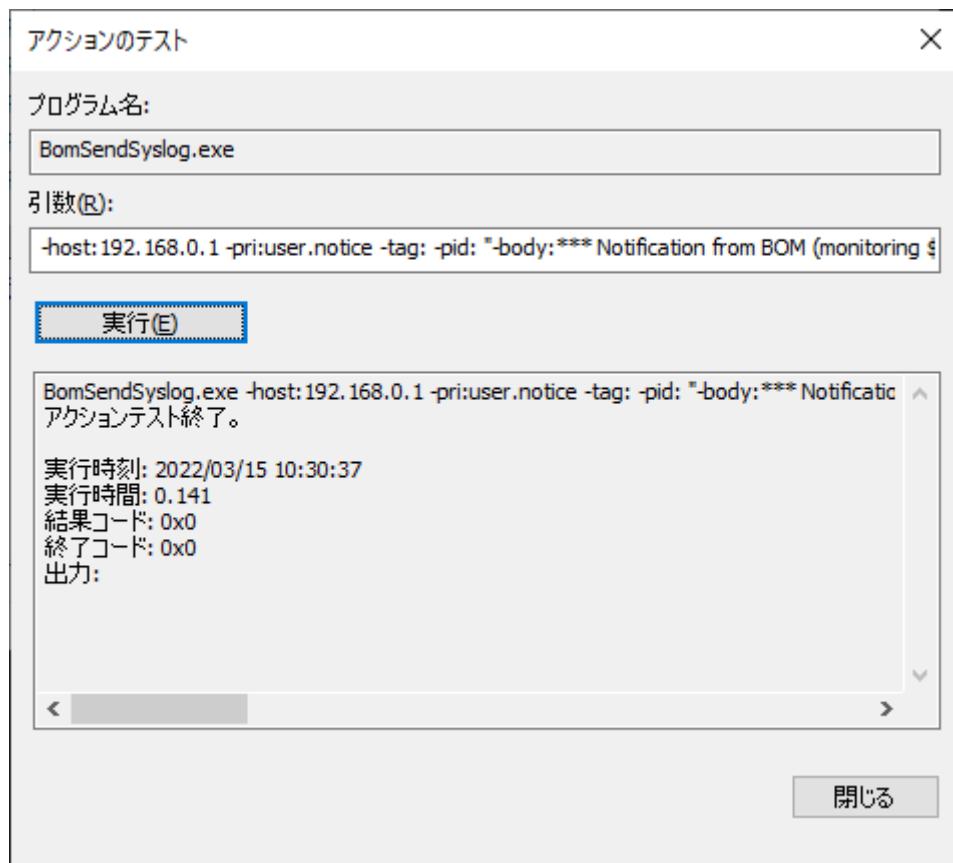
- RFC5424形式を使用し、ホスト"192.168.0.1"にユーザーレベルの警告を数値コードで指定して、TLS通信で送信する場合。

```
-host:192.168.0.1 -pri:12 -tag: -pid: -rfc5424 -tcp -tls "-body: <省略>"
```

3. [補助設定]ボタンは使用できません。

4. [テスト]ボタンをクリックすると、"アクションのテスト"画面を表示し、「設定」タブの設定を加えてテスト実行します。

- テスト実行時にBOM 8.0の予約済み変数を使用することはできません。



(8) カスタム通知（通知項目）

カスタム通知は、"実行条件"で指定した"監視グループ"に属する"監視項目"のステータスもしくは"アクション項目"の実行結果と、それらの実行頻度といった起動条件を満たした場合に、サードパーティ製のコマンドラインベースのプログラムや、独自に記述したテキストベースのスクリプトプログラム（バッチファイルやWSH、PowerShellなど）を実行させることができます。

※ 対象のコンピューターにおけるネットワーク設定やファイアウォール設定の影響などにより、プロパティの「設定」タブにある「プログラム名」欄の[参照]ボタンを押しても、ファイル選択画面でドライブが表示されないことがあります。また、Windows OSの管理共有が無効化されている場合にも同様の現象が発生します。
このような場合は、設定する内容を絶対パスで該当する欄に直接入力してください。管理共有の無効化が要因の場合は、有効化することで[参照]ボタンが使用できるようになります。

A. 「全般」タブ

「全般」タブの設定項目はすべての通知項目で共通です。

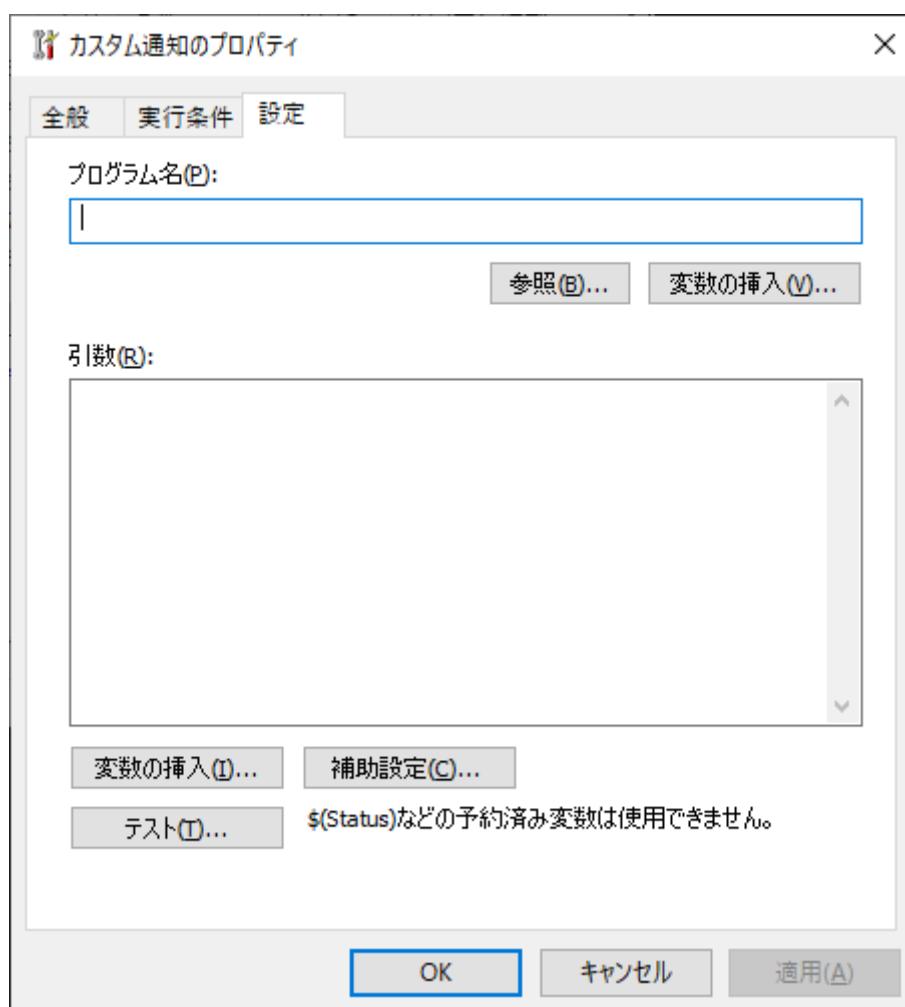
「全般」タブの詳細については'通知項目の概要'の' [「全般」タブ](#)'を参照してください。

B. 「実行条件」タブ

「実行条件」タブの設定項目は、すべての通知項目で共通です。

「実行条件」タブの詳細については'通知項目の概要'の' [「実行条件」タブ](#)'を参照してください。

C. 「設定」タブ



1. "プログラム名"フィールドに、任意の"実行プログラム名"を下記のどちらかの手段で設定します。

- "実行プログラム名"を、絶対パスで入力

"プログラム名"フィールドの[変数の挿入]ボタンをクリックし、"プログラム名"のパスにBOM 8.0の予約済み変数を使用することもできます。予約済み変数については'[予約済み変数](#)'を参照してください。

- [参照..]ボタンをクリックして、"ファイル選択"画面より"実行プログラム"を選択
- "隠しファイルの表示"チェックボックスもしくは"保護されたシステムファイルの表示"チェックボックスにチェックを入れると、条件に応じた該当ファイルが表示されます。

2. "引数"フィールドには実行プログラムの引数を記述します。

- "引数"フィールドの[変数の挿入]ボタンをクリックすることで"引数"に変数を指定することができますが、手順3.のテスト実行時にBOM 8.0の予約済み変数を使用することはできません。予約済み変数については'[予約済み変数](#)'を参照してください。

3. [テスト]ボタンをクリックすると"アクションのテスト"画面を表示し、「設定」タブの設定を加えてテスト実行することができます。

- コンソールプログラムをカスタム通知として設定する場合には、BOM監視サービスとBOMヘルパーサービスのサービスアカウントをローカルシステムアカウントとし、デスクトップとの対話にチェックしてください。
- 代理監視の場合にはコンソールプログラムは指定ができません。
- アクションの終了待ち時間は、既定値で2時間です。2時間経過後、アクションのプロセスは強制終了されます。

第9章 ログ

1. ログの解説

これまでの章では、BOM 8.0について下記のログを解説しましたが、本章ではBOM 8.0マネージャーの"ログ"ノード配下のログについて解説します。

- "監視項目"のログ

詳細は、['監視項目のログ'](#)を参照してください。

- "アクション項目"のログ

詳細は、['アクション項目のログ'](#)を参照してください。

- "通知項目"のログ

詳細は、['通知項目のログ'](#)を参照してください。

2. 収集されたイベントログ

"イベントログ監視"で監視設定した内容に該当するイベントログは、"ログ"ノード配下の"収集されたイベントログ"ノードに蓄積されます。

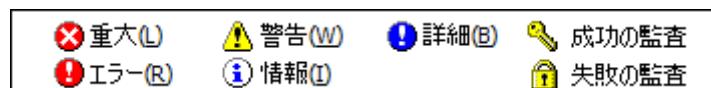
(1) 収集されたイベントログの表示

"イベントログ監視"によって蓄積されたデータが存在する場合、BOMマネージャーの"ログ"ノード→"収集されたイベントログ"以下には、"Application"、"セキュリティ"、"システム"などのイベントログノードが表示されます。

各イベントログノードをクリックすると、リザルトペインに"収集されたイベントログ"がリスト表示されます。

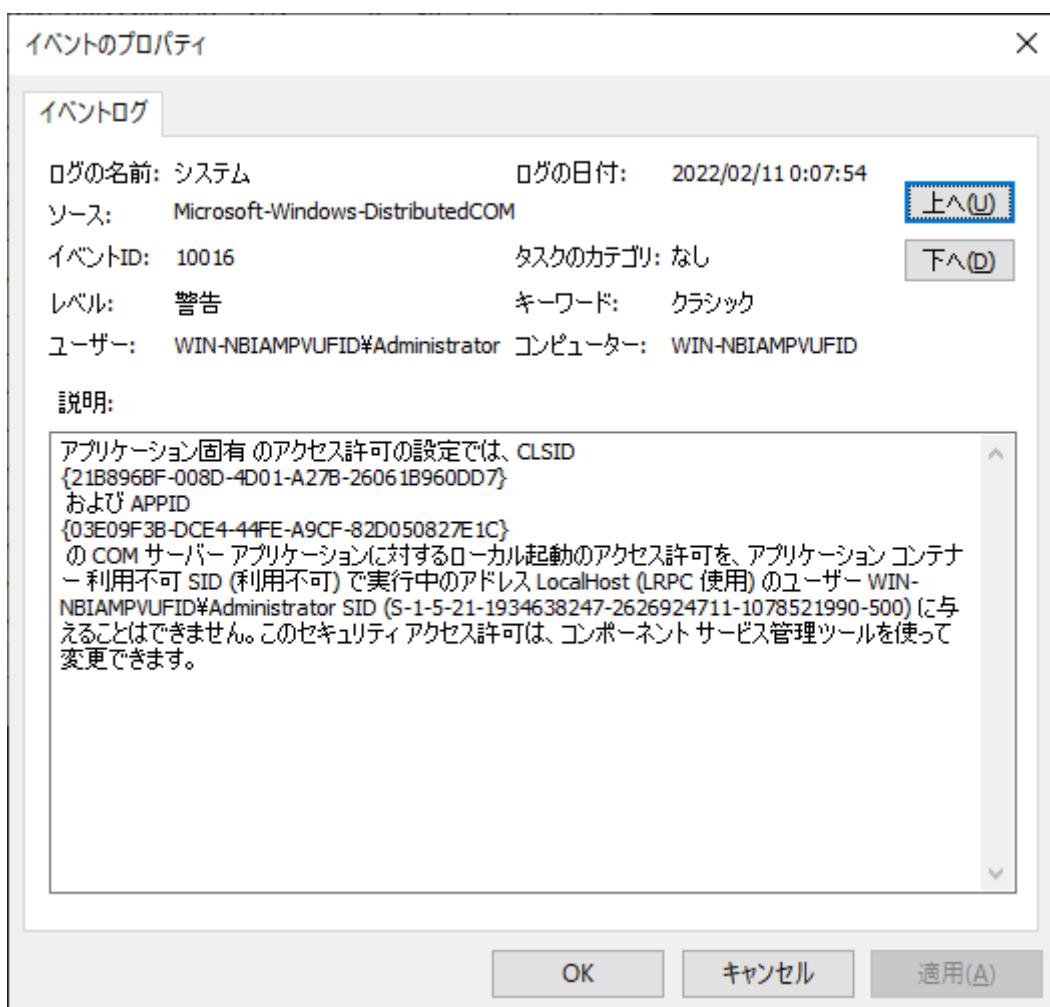
A. 収集されたイベントログの表示（アイコン部分）

- ステータスアイコン/表示



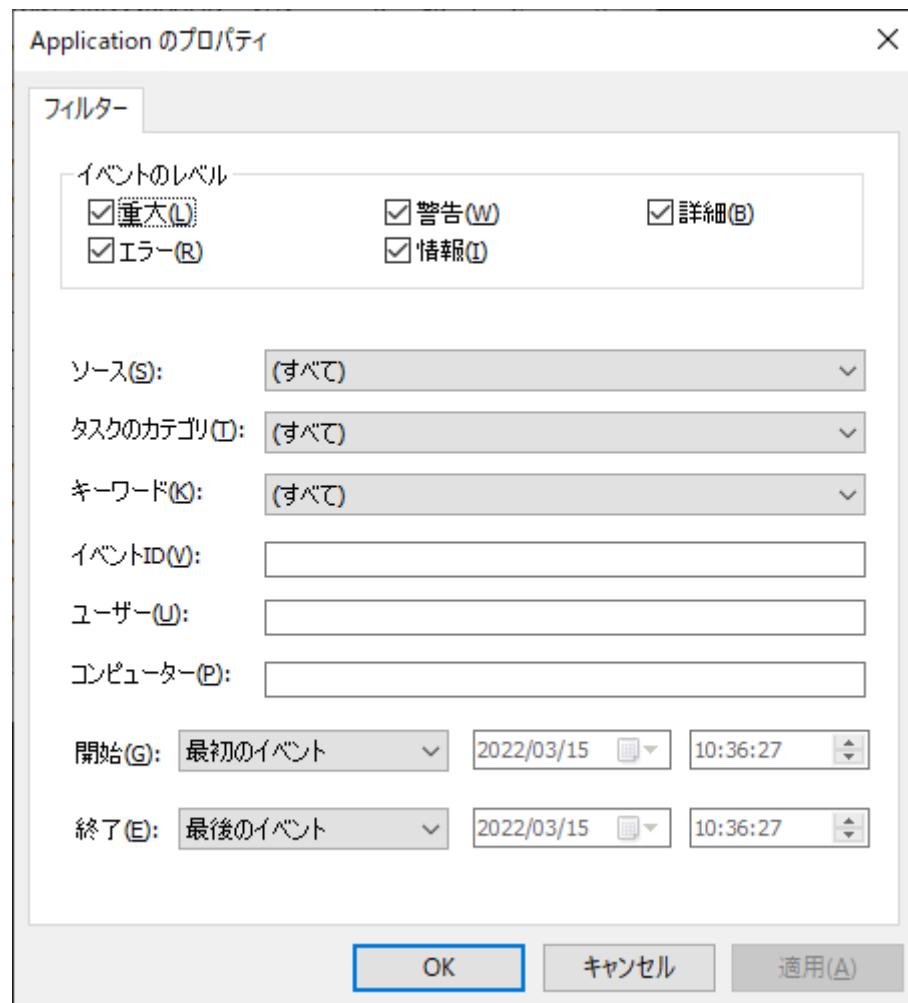
B. 各イベントログのプロパティ表示

リスト表示されたイベントログをダブルクリック、または右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックすることで、"イベントログのプロパティ"画面が開き、イベントログの詳細を確認できます。



C. イベントログのフィルタリング

収集されたイベントログは、フィルタリングして表示することができます。



- "ログ"ノード→"収集されたイベントログ"ノード→"アプリケーション"（イベントログの種別）を右クリックし、コンテキストメニューの"プロパティ"をクリックします。
表示する"イベントのレベル"にチェックを入れ、"ソース名"、"分類"、"タスクのカテゴリ"、"キーワード"を選択します。
- "イベントID"、"ユーザー名"、"コンピューター名"を入力します。
- "開始日時"と"終了日時"を指定して、イベントログに記述されたイベントログ時刻で、イベントログが絞り込まれます。

(2) 収集されたイベントログのローテーション

収集されたイベントログは、100000件まで各収集されたイベントログに保存されるよう設定されており、100000件を超えると古いログから上書きされます。

- "収集されたイベントログ"ノードをクリックした場合、リザルトペインに表示される件数は、最大で最新の1000件分です。
- すべてのログを表示したい場合には"収集されたイベントログ"配下の各ノードを右クリックし、コンテキストメニューの"すべてのレコードを表示"をクリックしてください。

(3) 収集されたイベントログ蓄積量の最大件数の変更

収集されたイベントログは、既定値で100000件まで保存できますが、下記のiniファイルの一部を書き換えることで最大件数を変更することができます。なお、設定は最初にイベントログ監視の収集ログが作成される場合に有効になります。

ログが既にある場合に最大件数を変更するには、まず「[各種ログのクリア](#)」の手順で収集されたイベントのログを消去し、下記のiniファイルの設定を変更してから、BOMヘルパーサービス（BOM8Helper）を再起動してください。

- iniファイルの保存場所

```
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config  
ファイル名 : BomEvtlogMon.ini
```

- iniファイルの設定変更箇所

```
[LOG_ROTATION_SETTINGS]  
DEFAULT=[数値] (項目がない、マイナスの場合は、100000が適用)  
BOM_LOG_System=[数値] (項目がない、マイナスの場合は、上記DEFAULTの設定値が適用)  
BOM_LOG_Application=[数値] (項目がない、マイナスの場合は、上記DEFAULTの設定値が適用)
```

- 上記の"System"、"Application"はイベントログファイル名あるいは、チャネル名を表します。
- [数値]部分の値を変更することで、保存できる件数を変更できます。

3. ヒストリー

"ログ"ノード配下の"ヒストリー"ノードには、"監視"、"アクション"、"サービス"の3つの主要なヒストリーログノードがあり、これらはそれぞれの機能のログが保存されていることを示しています。

- "監視"

すべての"監視項目"のログが蓄積されます。

- "アクション"

すべての"アクション項目"および、すべての"通知項目"のログが蓄積されます。

- "サービス"

BOM 8.0の"サービスのステータス"のログが蓄積されます。

(1) ヒストリーログの表示

BOMマネージャーの"ログ"ノード→"ヒストリー"をクリックし、"監視"、"アクション"、"サービス"を選択すると、リスト表示されます。

リスト表示されたヒストリーログをダブルクリックすることで、"プロパティ"画面が開き、詳細を確認できます。

The screenshot shows the BOM Manager interface with the 'Service History' log selected. The left sidebar shows a tree view with 'BOM for Windows Root' expanded, showing 'BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)' and 'WIN-NBIAMPVUFIID'. Under 'WIN-NBIAMPVUFIID', '監視' (Monitoring) is expanded, showing 'システム監視' (System Monitoring) with several sub-items like 'プロセッサ処理待ち' (Processor waiting), 'メモリ監視' (Memory monitoring), etc. 'ログ' (Log) is also expanded, showing '収集されたイベントログ' (Collected event log) and 'ヒストリー' (History). 'ヒストリー' is further expanded to show 'サービス' (Services), '監視' (Monitoring), and 'アクション' (Actions). The main pane displays a table titled 'サービス' (Services) with columns: タイプ (Type), 日時 (Date), カテゴリ (Category), and サマリー (Summary). The table lists 113 entries, all of which are service logs for 'BOM Archive Service' and 'BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID'.

タイプ	日時	カテゴリ	サマリー
情報	2022/03/15 10:11:43	サービス	BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFIID サービス...
情報	2022/03/15 10:11:42	サービス	BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID サービスは正常に開始しました。Pi...
情報	2022/03/15 10:11:27	サービス	BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFIID サービス...
情報	2022/03/15 10:11:25	サービス	BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID サービスは正常に停止しました。Pi...
情報	2022/03/15 10:08:50	サービス	BOM Archive Service:アーカイブが終了しました。PID: 8080インスタンス ...
情報	2022/03/15 10:08:45	サービス	BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFIID サービス...
情報	2022/03/15 10:08:44	サービス	BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID サービスは正常に開始しました。Pi...
情報	2022/03/14 19:34:18	サービス	BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFIID サービス...
情報	2022/03/14 19:34:17	サービス	BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID サービスは正常に停止しました。Pi...
情報	2022/03/14 19:24:06	サービス	BOM Archive Service:アーカイブが終了しました。PID: 7436インスタンス ...
情報	2022/03/14 19:24:03	サービス	BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFIID サービス...
情報	2022/03/14 19:24:02	サービス	BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID サービスは正常に開始しました。Pi...
情報	2022/03/14 19:14:54	サービス	BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFIID サービス...
情報	2022/03/14 19:14:53	サービス	BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID サービスは正常に停止しました。Pi...
警告	2022/03/14 18:46:00	スケジューラ	前回の監視が完了していないため、監視 '重複ファイル監視' はスキップさ...
情報	2022/03/14 18:45:14	サービス	BOM Archive Service:アーカイブが終了しました。PID: 7188インスタンス ...
情報	2022/03/14 18:45:01	サービス	BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFIID サービス...
情報	2022/03/14 18:45:00	サービス	BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID サービスは正常に開始しました。Pi...
情報	2022/03/14 18:44:30	サービス	BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFIID サービス...
情報	2022/03/14 18:44:29	サービス	BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFIID サービスは正常に停止しました。Pi...

A. "サービス"ヒストリーログ

- サービス起動に成功した場合

アイコンはInformation (緑)

- サービス起動に失敗した場合

アイコンはError (赤)

B. "監視"ヒストリーログ

監視項目IDとともにスキップされたと記述されることがあります。

これは前回の監視項目の実行時間が長く、次の監視実行時刻に監視が行われなかった場合に書き込まれるログです。

- "正常"ステータスに変化した場合
アイコンはInformation (緑)
- "注意"ステータス、"危険"ステータスに変化した場合
アイコンはWarning (黄)
- 監視失敗の場合
アイコンはError (赤)

C. "アクション"ヒストリーログ

- アクションが成功した場合
アイコンはInformation (緑)
- アクションに失敗した場合
アイコンはError (赤)

(2) ヒストリーログのローテーション

ヒストリーログは、"ヒストリー"配下の各ノードのログ数の合計が10000件まで各収集されたイベントログに保存されるよう設定されており、10000件を超えると古いログから上書きされます。

- "ヒストリー"配下の各ノードをクリックした場合、リザルトペインに表示される件数は、最大で最新の1000件分です。
- すべてのログを表示したい場合には"ヒストリー"配下の各ノードを右クリックし、コンテキストメニューの"すべてのレコードを表示"をクリックしてください。

(3) ヒストリーログ蓄積量の最大件数の変更

ヒストリーログは既定値で10000件まで保存できますが、下記のiniファイルの一部を書き換えることで最大件数を変更することができます。なお、設定は最初にヒストリーログの収集ログが作成される場合に有効になります。

ログが既にある場合に最大件数を変更するには、まず'各種ログのクリア'の手順でヒストリーログを消去し、下記のiniファイルの設定を変更してから、BOMヘルパーサービス (BOM8Helper) を再起動してください。

- iniファイルの保存場所

```
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config  
ファイル名 : MxHelper.ini
```

- iniファイルの設定変更箇所

```
[Option]  
MaxHistory = [数値]
```

• Option配下に上記のパラメーターを追記し、[数値]部分で件数を指定して保存します。

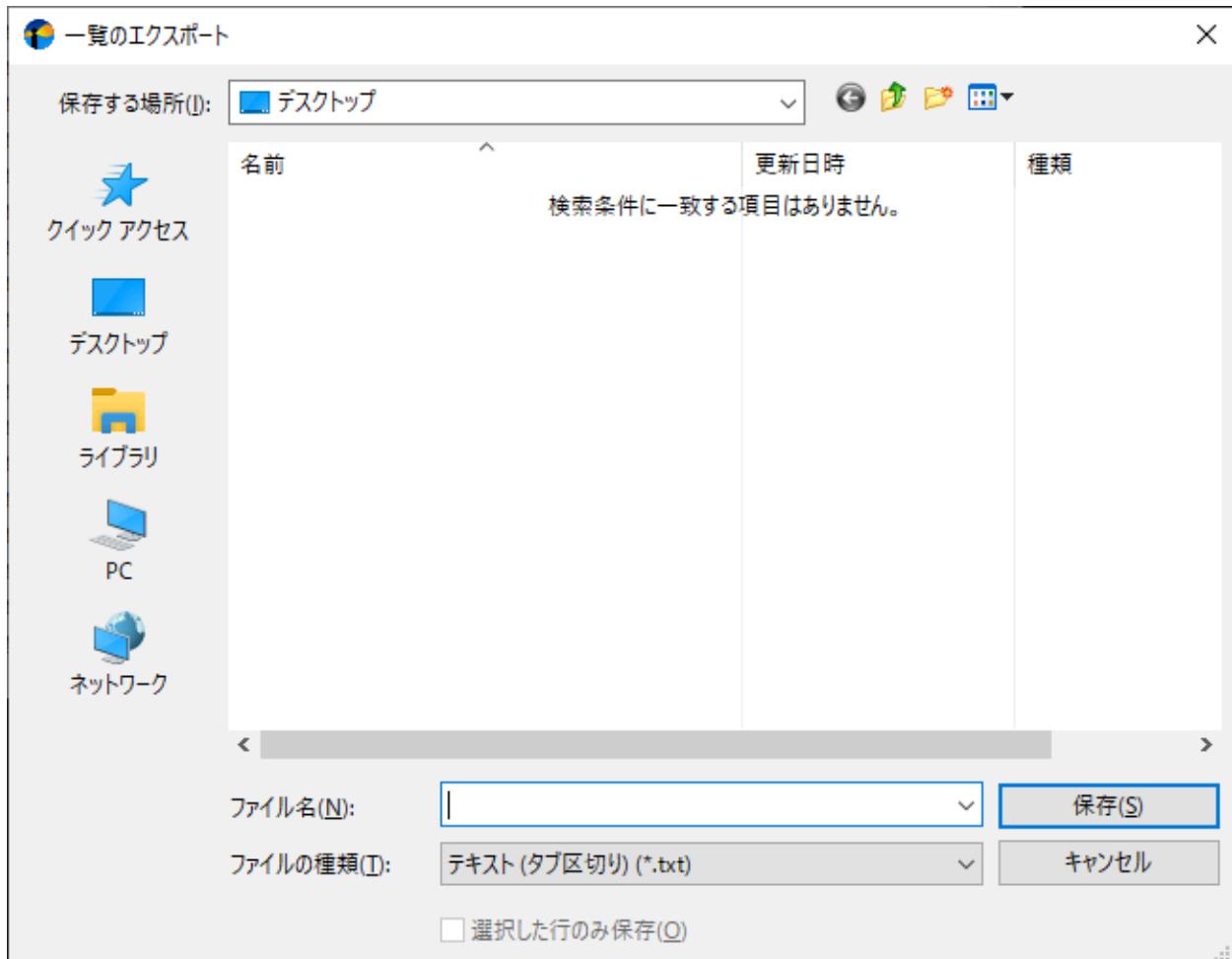
- アーカイブ設定をしている場合は、アーカイブ前にデータが上書きされないよう、上記パラメーターでの最大件数と監視間隔を調整してください。

各ノードのログの数がトータル10000件を超えると古いログから上書きされるため、注意が必要です。

4. 各種ログのエクスポート

"収集されたイベントログ"あるいは"ヒストリー"などでリザルトペインに見えているデータは、以下の手順でエクスポートできます。

1. エクスポートしたいノード（"収集されたイベントログ"あるいは"ヒストリー"ノード配下の各ノード）を右クリックし、コンテキストメニューの"一覧のエクスポート..."をクリックします。



2. "一覧のエクスポート..."画面で、"保存する場所"フィールドのドロップダウンメニューを使用してファイルの保存先とするフォルダーを選択します。
3. "ファイル名"フィールドに、ヒストリーテキストファイルの名前を指定します。
4. ファイルの種類を選択します。
5. [保存]ボタンをクリックします。

["ヒストリー"ノードの"サービス"エクスポート例]

- 以下は"テキスト (カンマ区切り) (*.csv)"で出力した例です。

タイプ,日時,カテゴリ,サマリー

情報,2022/03/11 20:53:22,サービス,BOM Archive Service:BOM8Archive\$WIN-NBIAMPVUFID サービスは正常に停止しました。

PID: 7736

インスタンス ID: WIN-NBIAMPVUFID

経過時間: 19469 (ミリ秒)

情報,2022/03/11 20:53:21,サービス,BOM8Agent\$WIN-NBIAMPVUFID サービスは正常に停止しました。

PID: 1044

インスタンス ID: WIN-NBIAMPVUFID

経過時間: 19797 (ミリ秒)

情報,2022/03/11 20:53:06,サービス,BOM Archive Service:アーカイブが終了しました。

5. 各種ログのクリア

(1) ログの種類

ログの種類と削除対象は下記のとおりです。

選択対象	削除対象
監視グループ	監視グループ内の監視項目、アクション項目のログをすべて消去します。
監視項目	監視項目、アクション項目のログをすべて消去します。
アクション項目	アクション項目のログをすべて消去します。
通知項目	通知項目のログをすべて消去します。
ログノード	ログノード配下のイベントログで収集されたログ、ヒストリーのログをすべて消去します。
"イベントログで収集されたログ"ノード	イベントログで収集されたログをすべて消去します。
"ヒストリー"ノード	"ヒストリー"ノード配下（サービス、監視、アクション）のログをすべて消去します。

(2) ログの削除手順

各ログを削除する手順は、右クリックで選択する箇所が異なるだけで、基本的な手順は共通です。

1. 監視項目、またはグループやアクション項目のログをクリアするには、削除したい該当"監視グループ"、"監視項目"、"アクション項目"、"通知項目"、"ログ"ノード、"イベントログで収集されたログ"ノード、あるいは"ヒストリー"ノードを右クリックします。
2. コンテキストメニューの"ログのクリア"をクリックします。
3. ログのクリアを実行するか確認するダイアログボックスが表示されます。問題なければ[OK]ボタンをクリックします。

クリアしたログは復旧できません。削除を実行する際は、十分注意してください。

第10章 BOMコントロールパネル

1. BOMコントロールパネルの解説

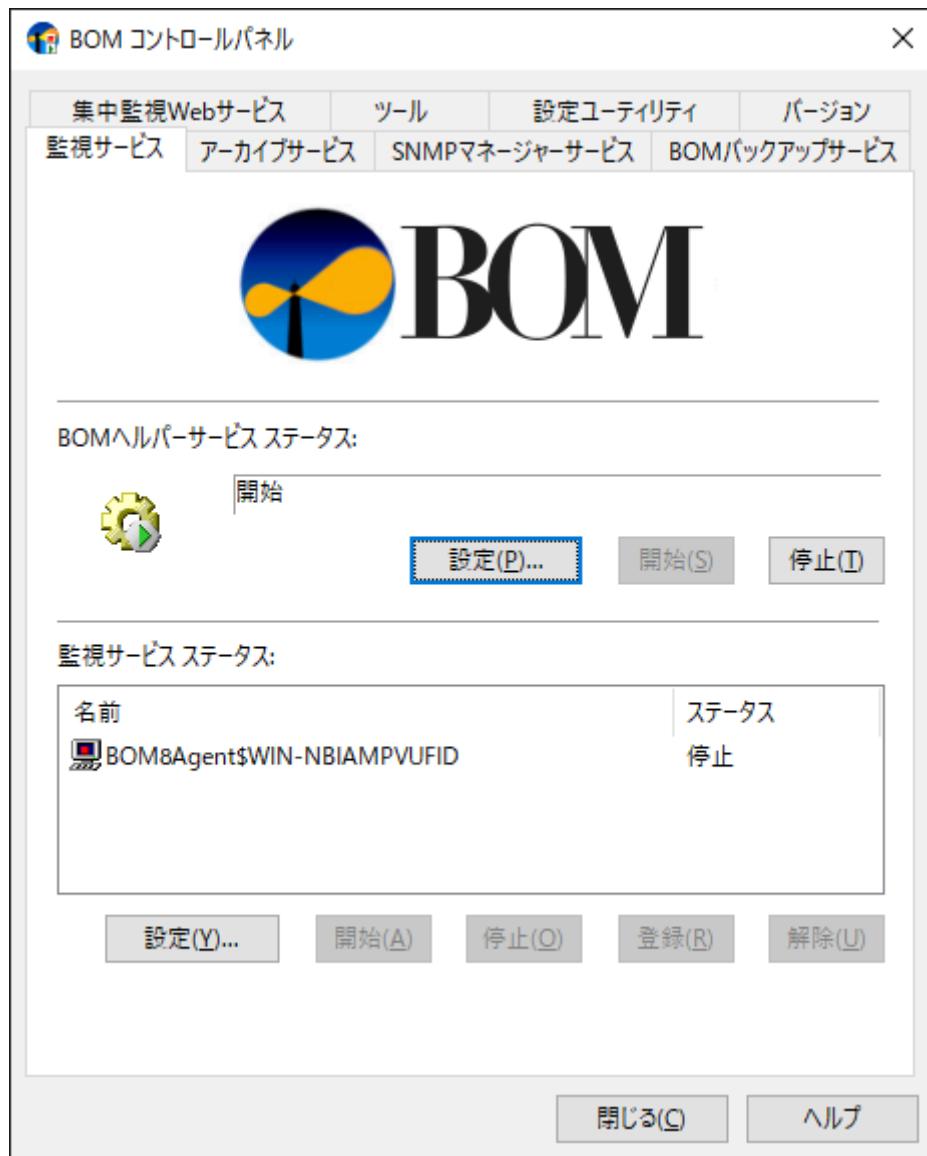
BOMコントロールパネルでは、下記の各コンポーネントの制御や、ツールを起動することができます。

監視サービス	BOM 8.0での監視に関するサービス（BOMヘルパーサービス、BOM監視サービス）に対する、"開始"、"停止"、"設定"などの制御ができます。
アーカイブサービス	BOMアーカイブサービスに対する、"開始"、"停止"、"登録"、"解除"の制御ができます。
ツール	<ul style="list-style-type: none">◦ 設定とログのバックアップ ローカルコンピューターに登録されているインスタンスの監視設定および監視ログをCABファイル、ZIPファイルに出力することができます。◦ 設定とログのリストア リストア処理では、ローカルコンピューター、あるいはリモートコンピューターのバックアップ処理で出力されたCABファイルまたはZIPファイル、および設定配布ツールで収集された監視設定のCABファイルをローカルコンピューターにリストアすることができます。◦ 各種BOM 8.0製品の起動 BOMマネージャー、BOM集中監視コンソール、BOMアーカイブマネージャーを起動することができます。
設定ユーティリティ	BOM 8.0の各種設定の収集/配布ができる、BOM 8.0設定一括配布ツール、BOM 8.0設定収集配布ツールを起動できます。
バージョン関連	インストールしたBOM 8.0のバージョン確認、インストールしたファイルごとのバージョンを確認することができます。
集中監視Webサービス	集中監視Webサービスに対する、"開始"、"停止"、"設定"の制御ができます。
SNMPマネージャー サービス	SNMPトラップ受信機能で使用する、SNMPマネージャーサービスの制御ができます。
BOMバックアップサービス	BOMバックアップサービスに対する、"開始"、"停止"、"設定"の制御ができます。

2. BOMコントロールパネルの起動

BOMコントロールパネルはOSのスタートメニューからBOM for Windows 8.0の"BOM 8.0 コントロールパネル"をクリックすることで起動できます。

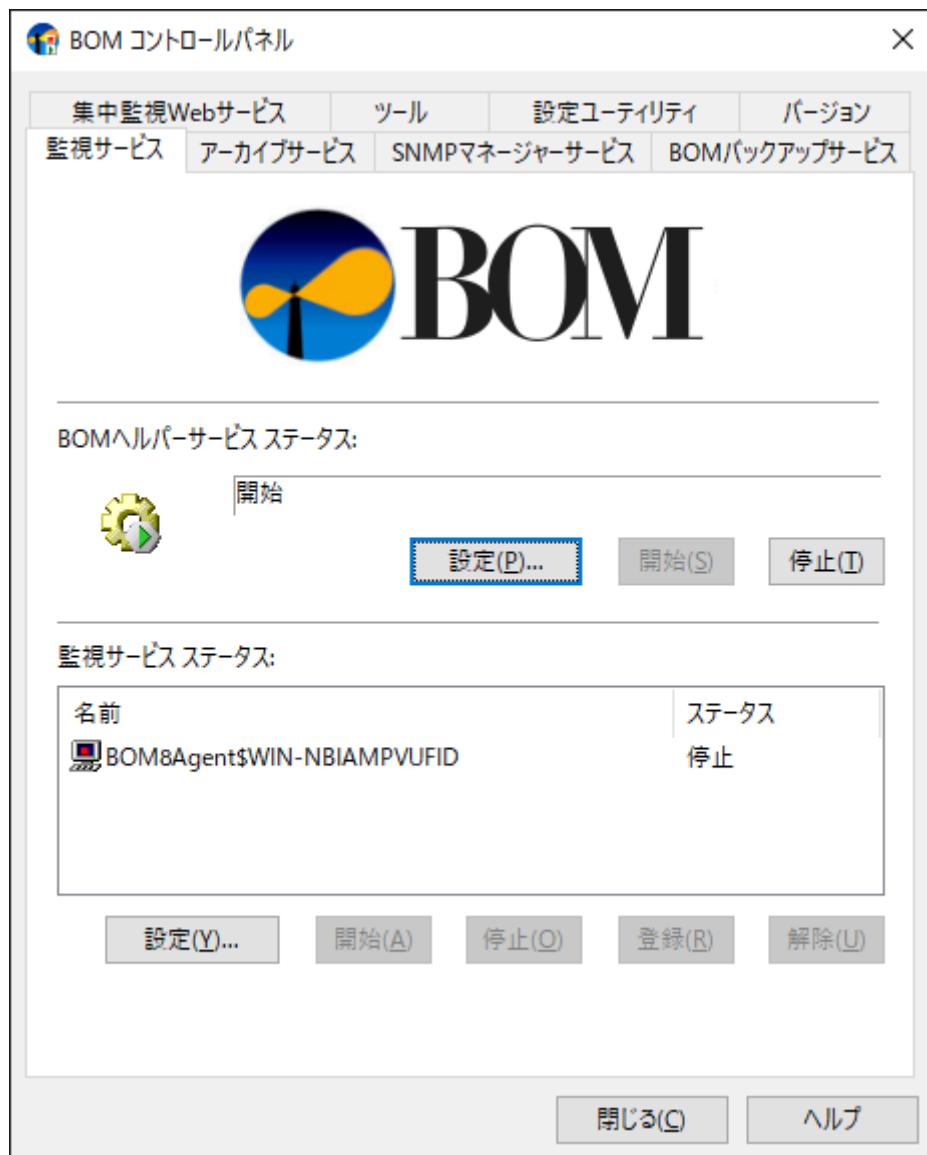
- BOMコントロールパネルの起動には、管理者権限が必要です。
- 対象のコンポーネントがインストールされていない環境では、対応するタブが表示されません。



3. 「監視サービス」タブ

ローカルコンピューターに登録されている、"BOMヘルパーサービス"と"BOM監視サービス"の"設定"、"開始"、"停止"処理を行うことができます。

- "BOMヘルパーサービス"または"BOM監視サービス"の"設定"を行う際には、BOMマネージャーを終了する必要があります。



(1) BOMヘルパーサービス ステータス

"BOMヘルパーサービス ステータス"フィールドでは、"BOMヘルパーサービス"の"設定"、"開始"、"停止"処理を行うことができます。

項目	説明
ステータスアイコン	開始  / 停止 
[開始]ボタン	BOMヘルパーサービスを"開始"します。
[停止]ボタン	BOMヘルパーサービスを"停止"します。

項目	説明
[設定]ボタン	"ヘルパーサービス設定"画面を表示します。 詳細は' BOMヘルパーサービス設定 'を参照してください。

(2) BOMヘルパーサービス設定

"リモートアクセスの範囲"の既定値は、"監視対象サーバーコンピューターと同じローカルセグメント（サブネット）"です。

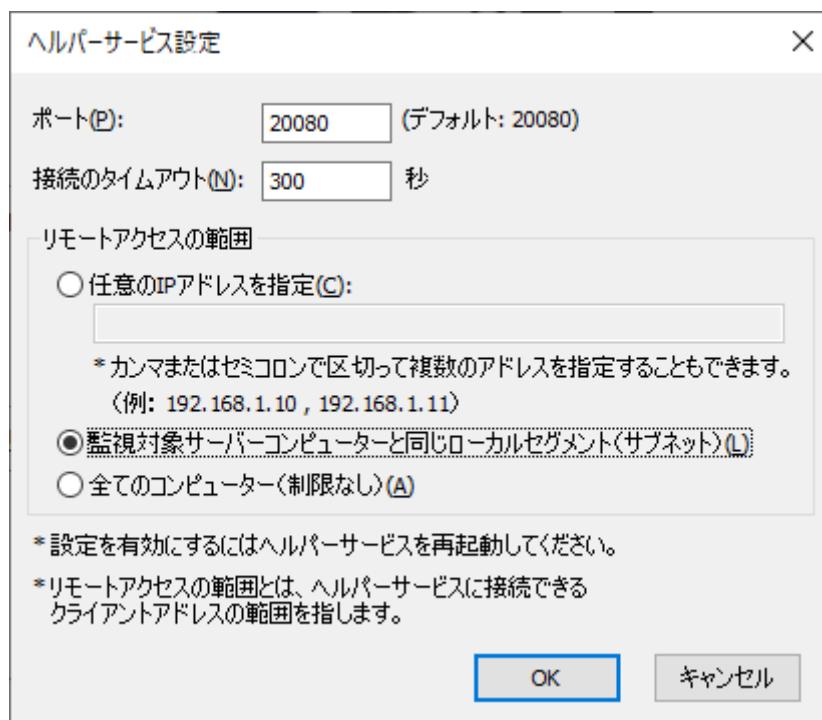
この設定は具体的に下記の機能へ影響を与えます。異なるセグメント間のコンピューターを監視/管理する場合は、運用に合わせて適切な値を設定してください。

- リモート接続時の監視元コンピューターの監視サービスとリモート接続先のBOMヘルパーサービスの通信

リモート接続の詳細は、'リモート接続'を参照してください。

- BOM集中監視コンソールの集中監視WebサービスとBOMヘルパーサービスの通信

BOM集中監視コンソールの集中監視Webサービスの詳細は、'BOM for Windows VVer.8.0 集中監視コンソール ユーザーズマニュアル'を参照してください。



- "ポート"フィールドは、BOMヘルパーサービスが使用するポート番号を、"1"~"65535"の範囲で設定します。

- ポート番号を変更した際は、設定を有効にするためBOMヘルパーサービスを再起動（停止→開始）する必要があります。'BOMヘルパーサービス ステータス'を参照してください。
- BOMマネージャーに登録されているローカルコンピューター上の各インスタンスのBOMヘルパーサービスのポート番号、および集中監視コンソールに登録されているインスタンスのBOMヘルパーサービスのポート番号は、BOMヘルパーサービスのポート番号と同じ番号に設定する必要があります。
- BOM 8.0インストール時に、BOMヘルパーサービスをWindows ファイアウォールの例外に追加することができます。

- "接続のタイムアウト"は、BOMヘルパーサービスへの無操作最大接続時間を、"0"~"86400"の範囲（秒単位）で設定します。

- BOMマネージャーが管理者モードで接続してから、無操作状態で管理者モードを維持できる時間を設定します。詳細は'アカウントとパスワード'を参照してください。
- 設定の配布時は管理者モードに接続して実行しますが、"接続のタイムアウト"はその際にも適用されます。

- "リモートアクセスの範囲"は、ローカルコンピューター上のBOMヘルパーサービスに接続できる範囲を設定します。

なお、設定した"リモートアクセスの範囲"以外よりリモート接続しようとすると、"アクセス制限のためBOM8Helper接続が拒否されました"というエラーが出力されます。

- "任意のIPアドレスを指定"ラジオボタンを選択した場合

指定したIPアドレスからの接続のみを許可します。

カンマで区切って複数のIPアドレスを指定でき、指定できる最大文字数は1000文字です。

- "監視対象サーバーコンピューターと同じローカルセグメント（サブネット）"ラジオボタンを選択した場合

監視対象コンピューターとローカルセグメント上のコンピューターから接続のみを許可します。

- "全てのコンピューター（制限なし）"ラジオボタンを選択した場合

すべてのコンピューターからの接続を許可します。

(3) BOM監視サービス ステータス

"監視サービス ステータス"フィールドでは、BOM監視サービスの一覧が表示され、BOM監視サービスの"設定"、"開始"、"停止"、サービスコントロールへの"登録"、"解除"といった制御を行うことができます。



A. BOM監視サービスの一覧について

ローカルコンピューターに登録されているすべてのBOM監視サービスのステータスを表示します。

監視サービスは、BOMマネージャーで作成したインスタンスごとに1つ作成されます。

- "名前"はBOM監視サービスの名前を、"ステータス"は"開始"、"停止"、"未登録"のいずれかを表示します。
- BOM監視サービスの名前は、BOM8Agent\$instanceIDの規則に準じて名前が付けられています。

InstanceID（インスタンスID）は、インスタンスの新規作成時に任意の名称に設定することができます。

B. BOM監視サービスの制御

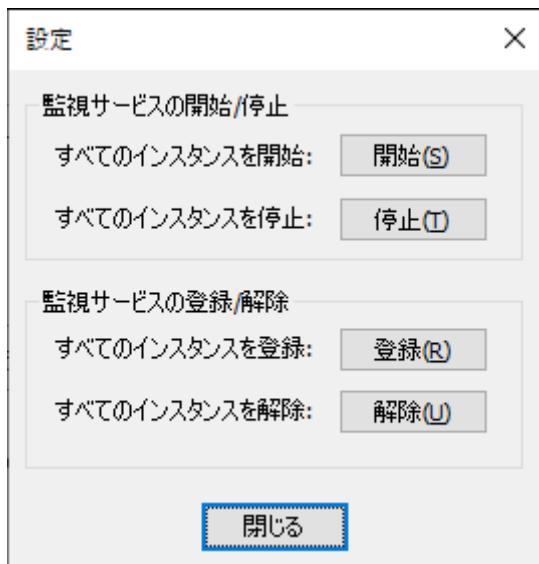
制御ボタン	説明
[開始]ボタン	BOM監視サービスを"開始"します。 BOM監視サービスを"開始"するには、インスタンスごとに有効な基本製品ライセンスが必要です。
[停止]ボタン	BOM監視サービスを"停止"します。
[登録]ボタン	BOM監視サービスがサービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）に登録されます。 該当のBOM監視サービスがWindowsサービスマネージャーに登録されていないとBOM監視サービスは使用できません。
[解除]ボタン	BOM監視サービスがサービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）から解除されます。

制御ボタン	説明
[設定]ボタン	BOM監視サービスの設定画面（'BOM監視サービスの設定'）が表示されます。 この際、同時にBOMマネージャーへ管理者モードで接続していると、エラー画面が表示されます。

(4) BOM監視サービスの設定

監視サービス設定では、一度に全インスタンスを"開始"、"停止"、"登録"、"解除"制御したい場合に使用します。

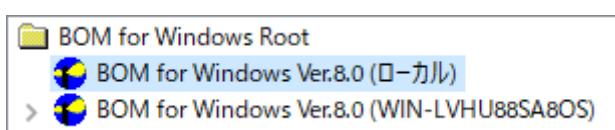
個別のインスタンスの監視サービスを制御する際は、'BOM監視サービスステータス'を参照してください。



制御ボタン	説明
[開始]ボタン	すべてのインスタンスのBOM監視サービスを"開始"します。 BOM監視サービスを"開始"するには、インスタンスごとに有効な基本製品ライセンスが必要です。
[停止]ボタン	すべてのインスタンスのBOM監視サービスを"停止"します。
[登録]ボタン	すべてのインスタンスのBOM監視サービスがサービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）に登録されます。 該当のBOM監視サービスがWindowsサービスマネージャーに登録されていないとBOM監視サービスは使用できません。
[解除]ボタン	すべてのインスタンスのBOM監視サービスがサービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）から解除されます。 主にすべての監視機能を削除したい場合に、"解除"を使用します。

(5) リモートコンピューターのBOMヘルパーサービス、監視サービスの制御

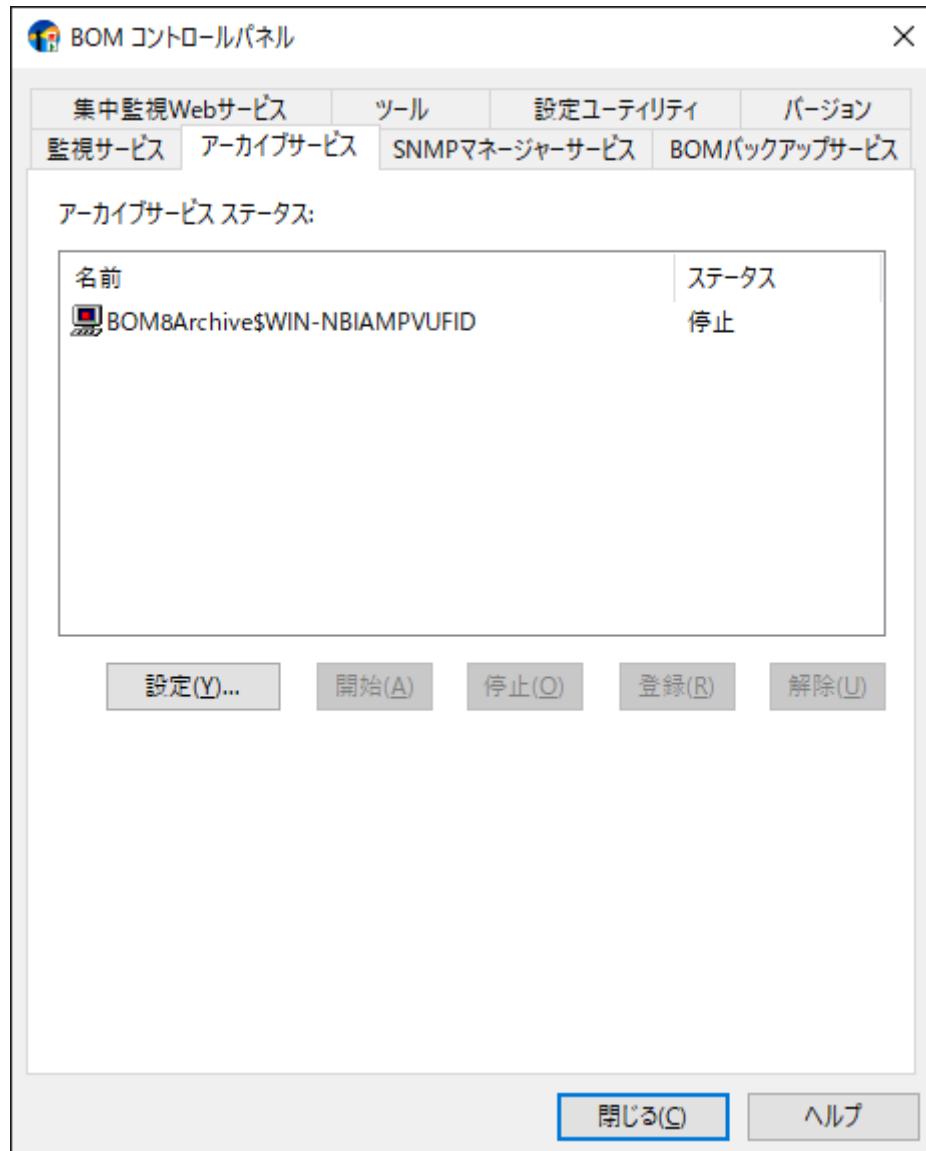
BOMマネージャー画面で"BOM for Windows Root"以下に存在する、"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"に属さないリモート接続したリモートコンピューター上についてインスタンスを"開始"、"停止処理"する際は、インスタンスごとに操作する必要があります。



- リモート接続したリモートコンピューター上のBOM 8.0コントロールパネルを起動するには、Windowsのリモート接続機能でリモートコンピューターに接続するか、該当するコンピューターで直接操作する必要があります。
- リモート接続したリモートコンピューター上のBOMヘルパーサービスを制御するには、該当するコンピューター上のBOMコントロールパネルから操作するか、Windowsの管理ツールの"サービス"画面の"サービス (ローカル) "ノードを右クリックして、"別のコンピューターへ接続"で操作する必要があります。

4. 「アーカイブサービス」タブ

ローカルコンピューター上の監視サービス（インスタンス）ごとに出力されたログをアーカイブデータベースに保存するため、アーカイブサービスの"登録"、"削除"、サービスコントロールへの"登録"、"解除"処理を行うことができます。



- インスタンスごとに行うアーカイブの設定は、BOMマネージャーで行います。詳細は、「[アーカイブ設定タブ](#)」を参照してください。
また、アーカイブの詳細については'BOM for Windows Ver.8.0 アーカイブユーザーズマニュアル'を参照してください。

(1) アーカイブサービス ステータス

"アーカイブサービス ステータス"フィールドでは、BOMアーカイブサービスの一覧が表示され、アーカイブサービスの"設定"、"開始"、"停止"、サービスコントロールへの"登録"、"解除"といった制御を行うことができます。

A. アーカイブサービスの一覧について

ローカルコンピューターに登録されているすべてのアーカイブサービスのステータスを表示します。アーカイブサービスはインスタンスごと作成されます。

- "名前"は、BOMアーカイブサービスの名前を表示します。

BOMアーカイブサービスの名前は、BOM8Archive\$[InstanceID]の規則に準じて名前が付けられており、
InstanceID（インスタンスID）部分は、インスタンスの新規作成時に任意の名称に設定することができます。

- "ステータス"は、"開始"、"停止"、"未登録"のいずれかを表示します。

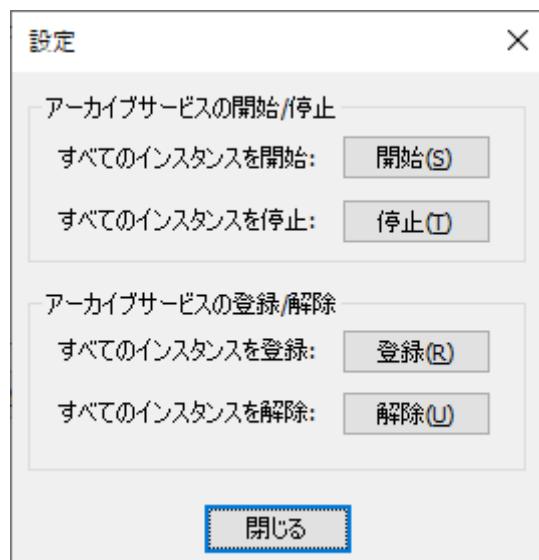
B. アーカイブサービスの制御

制御ボタン	説明
[開始]ボタン	アーカイブサービスを"開始"します。
[停止]ボタン	アーカイブサービスを"停止"します。
[登録]ボタン	アーカイブサービスをサービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）に登録します。 該当のアーカイブサービスがWindowsサービスマネージャーに登録されていないとアーカイブサービスは使用できません。
[解除]ボタン	アーカイブサービスをサービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）から"削除"します。
[設定]ボタン	アーカイブサービスの設定画面（'アーカイブサービスの設定'）が表示されます。

(2) アーカイブサービスの設定

アーカイブサービス設定は、一度に全インスタンスのアーカイブサービスを"開始"、"停止"、"登録"、"解除"制御したい場合に使用します。

個別のインスタンスのアーカイブサービスを制御する際は、'アーカイブサービスステータス'を参照してください。



制御ボタン	説明
[開始]ボタン	すべてのインスタンスのアーカイブサービスを"開始"します。

制御ボタン	説明
[停止]ボタン	すべてのインスタンスのアーカイブサービスを"停止"します。
[登録]ボタン	すべてのインスタンスのアーカイブサービスがサービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）に登録されます。 該当のアーカイブサービスがWindowsサービスマネージャーに登録されていないとアーカイブサービスは使用できません。
[解除]ボタン	すべてのインスタンスのアーカイブサービスがサービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）から解除されます。 主にすべてのアーカイブ機能を削除したい場合に、"解除"を使用します。

5. 「ツール」タブ

「ツール」タブからは、下記の機能を起動できます。

- バックアップ/リストア ウィザード
- BOM マネージャー
- BOM 集中監視コンソール
- BOMアーカイブマネージャー

各機能について、BOMマネージャーの詳細は'[BOMマネージャー](#)'、BOM集中監視コンソールの詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 集中監視コンソールユーザーズマニュアル'、BOMアーカイブマネージャーの詳細は'BOM for Windows Ver.8.0 アーカイブ ユーザーズマニュアル'を参照してください。

- 各対象コンポーネントがインストールされていない場合、対応するボタンはグレーアウトしてクリックできません。
- 以上のコンポーネントが既に起動済みの場合、各コンポーネントのウィンドウを最前面に表示させることができます。



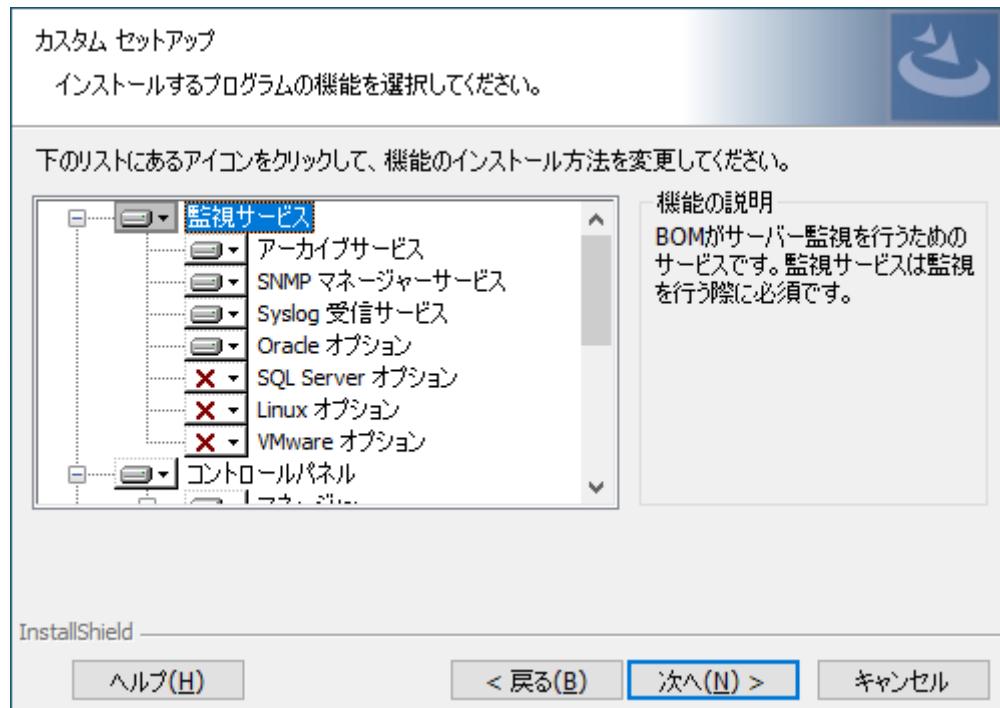
項目	説明
[バックアップ]ボタン	バックアップウィザードが起動します。

項目	説明
[リストア]ボタン	リストアウィザードが起動します。
[マネージャー]ボタン	BOMマネージャーが起動します。
[ブラウザーを起動...]ボタン	以下のURLを指定して既定で指定されているブラウザーを起動します。 "https://localhost:8443/Indicator/view/" 集中監視Webサービスが起動していない場合、既定で指定されているブラウザーが起動しますが、"このページは表示できません"というエラーが表示されます。
[アーカイブ]ボタン	BOMアーカイブマネージャーが起動します。

(1) バックアップ時とリストア前後のBOM 8.0の構成について

バックアップデータをリストアする際は、バックアップ時とリストア時のBOM 8.0の構成が同一、あるいはそれ以上の構成であることが条件となります。

- 構成情報は、BOM 8.0インストールパッケージから"変更セットアップ"を選択することにより確認できます。



- コンポーネント名の頭にハードディスクのアイコンのあるコンポーネントは導入済みを表します。"×"がついているコンポーネントは導入されていません。
- BOM 8.0を"基本製品"の"標準"でインストールした場合の標準構成は、監視サービス、BOMヘルパーサービス、BOMコントロールパネル、BOMマネージャー、BOM監視テンプレートがインストールされます。

(2) バックアップ処理

バックアップ処理では、ローカルコンピューター上に登録されているすべてのインスタンスに関する"環境設定"、"監視設定"および"監視ログ"をCABファイル、ZIPファイルに出力することができます。

- 設定のみをバックアップする際、監視項目数が200、監視項目ごとにアクション数が99を1つのインスタンスに登録している場合で、約100MBのハードディスクの空き容量が必要となります。
- 監視設定および監視ログとともにバックアップする場合、必要なディスク空容量は以下フォルダー配下のディスク使用量の約2倍となります。

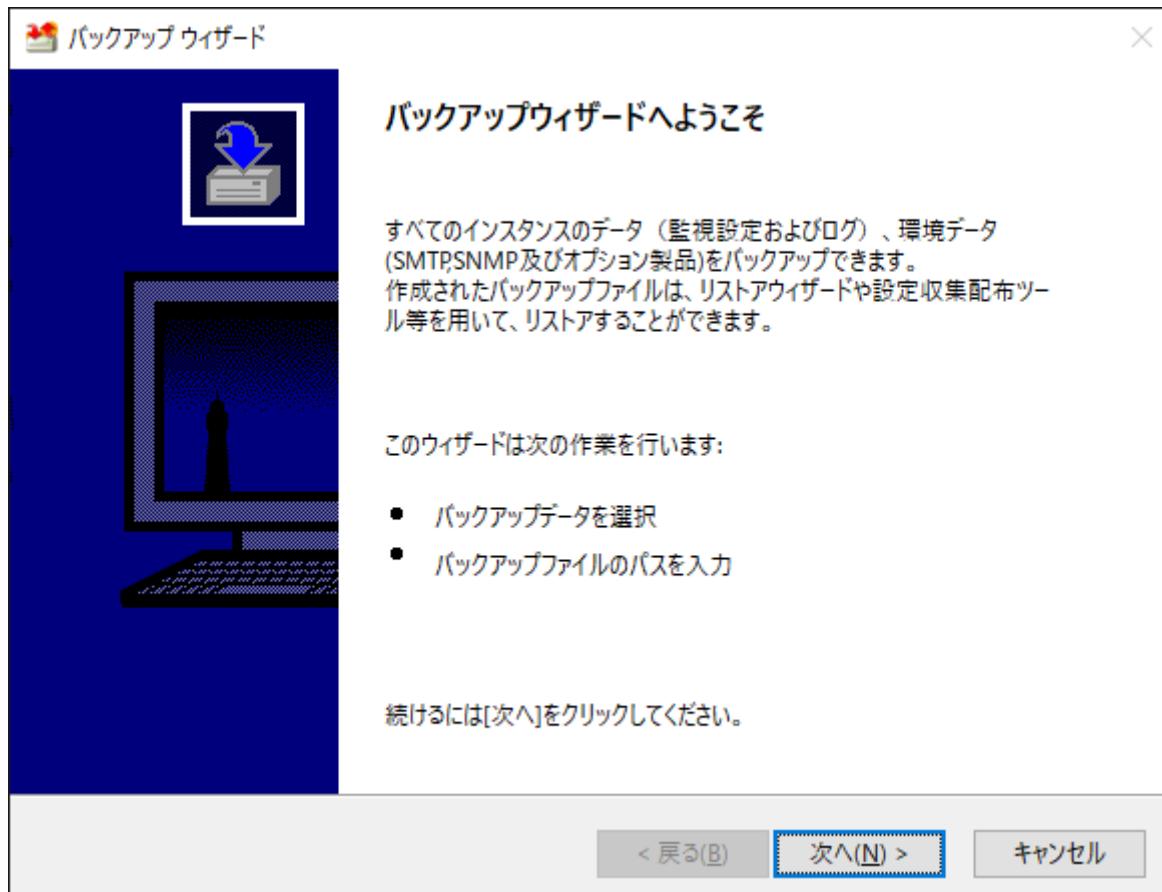
C:\¥ProgramData¥SAY Technologies¥BOMW8¥Environment¥Instance

- 本機能では、BOM 8.0が出力する以下のフォルダー配下に保存された、監視設定および、ログファイルをバックアップ対象とします。

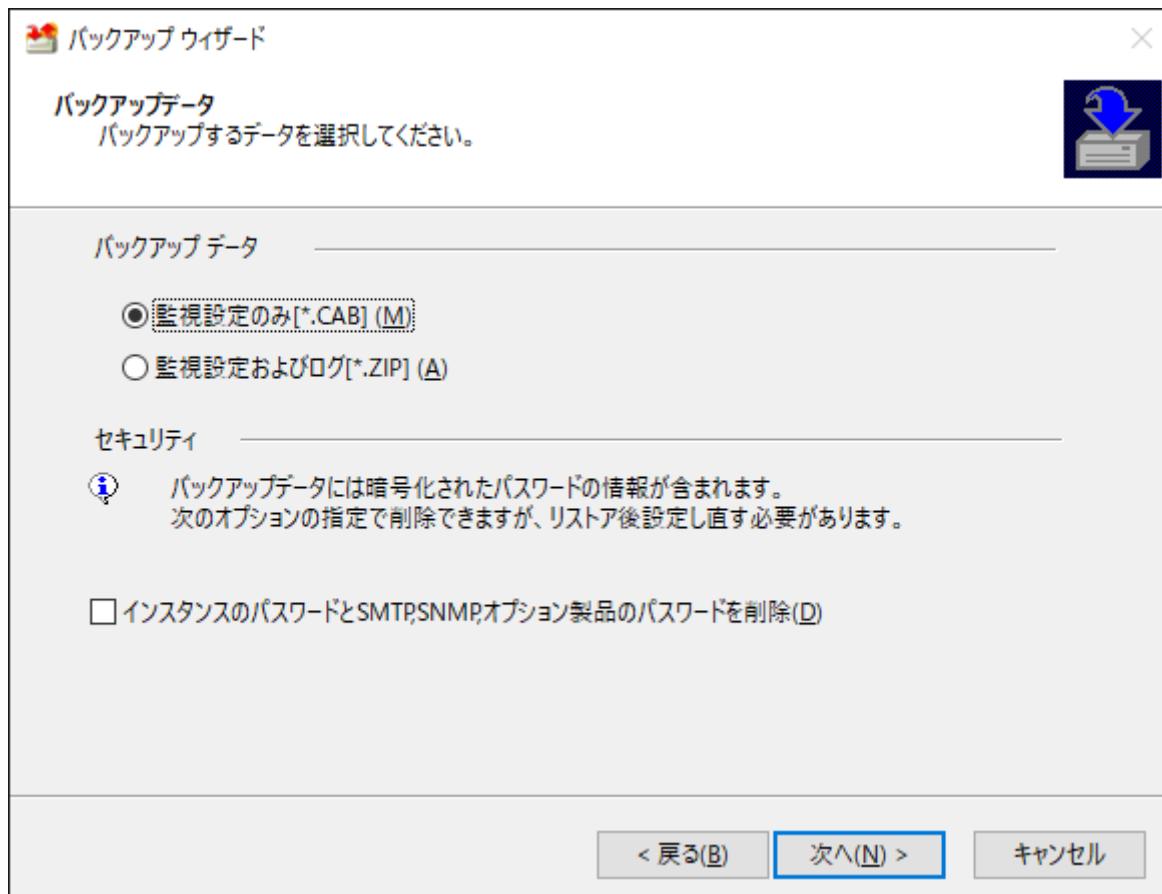
C:\¥ProgramData¥SAY Technologies¥BOMW8¥Environment¥

その他のフォルダーに手動で配置されたファイル（mibファイルや監視用スクリプト、プログラムなど）や、編集された設定ファイル（SNMPトラップ受信機能の設定ファイルなど）、およびBOM 集中監視コンソールの設定は対象となりません。

1. [バックアップ]ボタンをクリックすると、"バックアップ ウィザード"画面が表示されます。



2. [次へ]ボタンをクリックすると、"バックアップデータ"選択画面が表示されます。



3. "バックアップデータ"フィールドは、下記のどちらかを選択します。

- "監視設定のみ"ラジオボタンを選択した場合

監視ログを除く、すべての監視設定がCABファイルに保存されます。

- バックアップファイル名は、以下の名称となります。

BKNL-yyyyMMdd-hhmmss-コンピューター名.CAB
(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)

- "監視設定およびログ"ラジオボタンを選択した場合

すべての監視設定および、監視ログがZIPファイルに保存されます。

- バックアップファイル名は、以下の名称となります。

BKLO-yyyyMMdd-hhmmss-コンピューター名.ZIP
(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)

4. "セキュリティ"フィールドの"インスタンスのパスワードとSMTP、SNMP、オプション製品のパスワードを削除"チェックボックスにチェックを入れるとBOMマネージャーより設定した下記該当箇所のパスワードをバックアップデータから除外することができます。

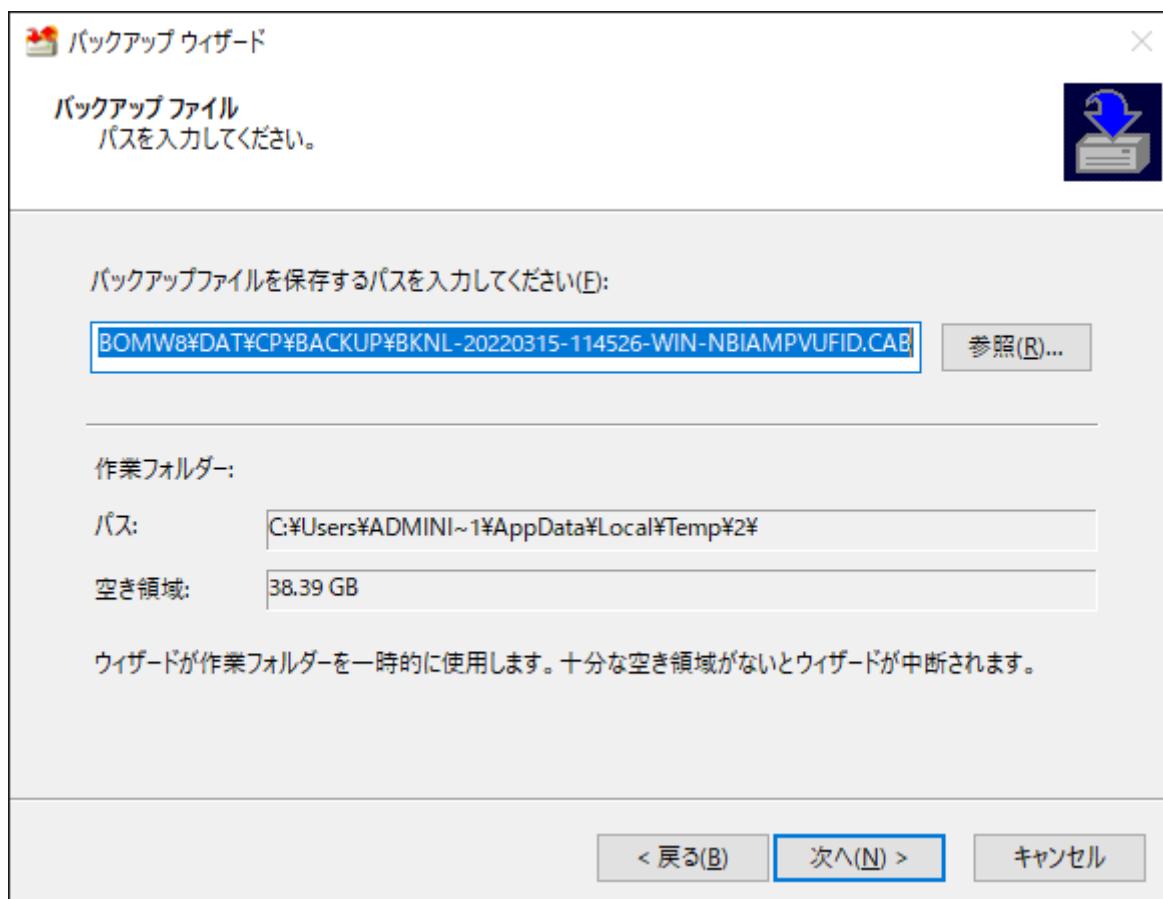
- インスタンスそれぞれのプロパティ画面

「全般」タブより設定するアカウントの"パスワード"および"パスワードの確認"

- BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）のプロパティ画面

- 「SMTP」タブより設定するSMTPサーバーそれぞれの"パスワード"
- 「SNMP」タブより設定する"認証キー"と"暗号キー"
- 「Oracle 接続設定」および「SQL Server 接続設定」タブより設定する、接続設定リストそれぞれの"パスワード"

5. [次へ]ボタンをクリックすると、"バックアップファイル選択"画面が表示されます。

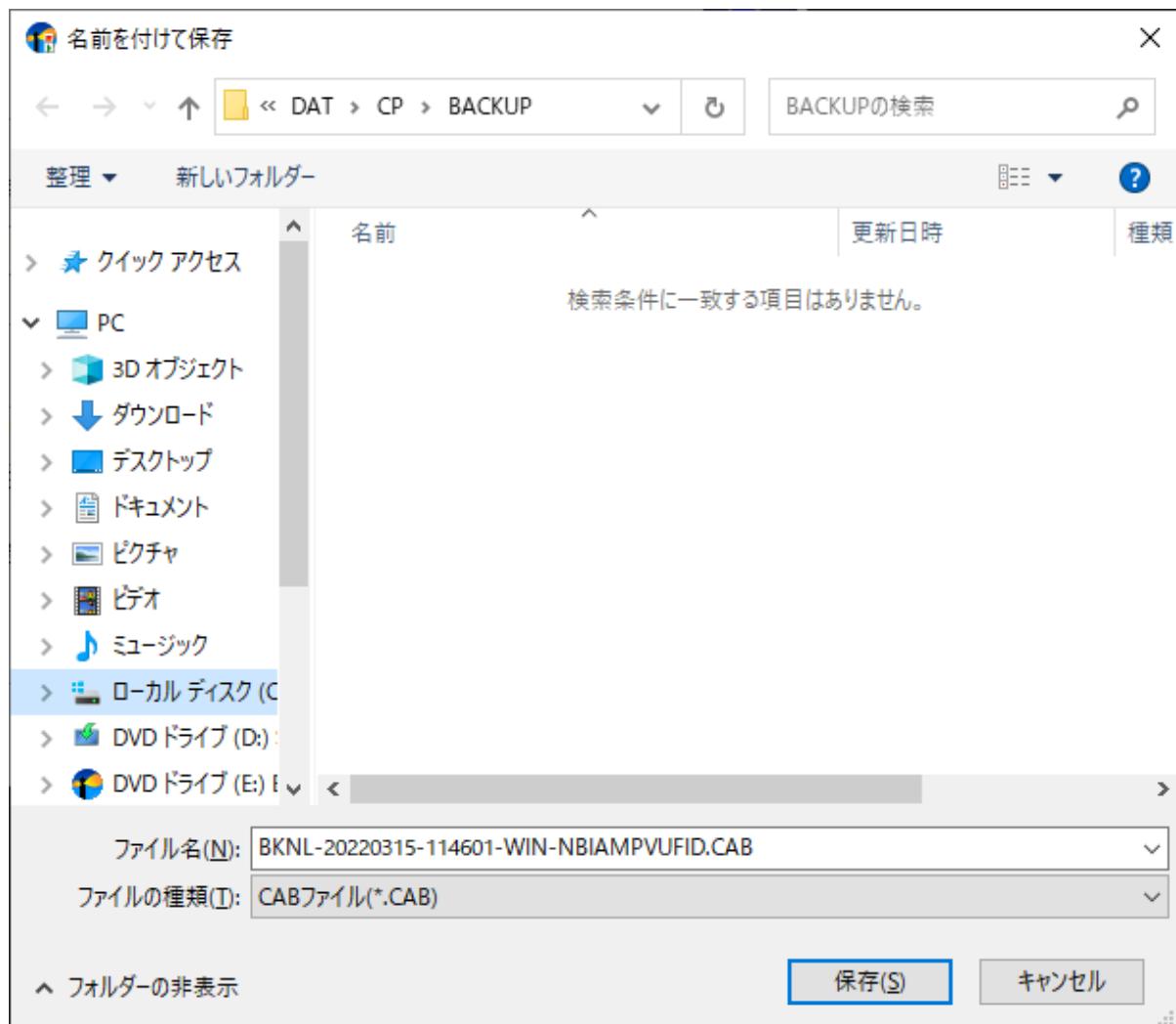


6. "バックアップファイルを保存するパスを入力してください" フィールドに、バックアップ先のフォルダーとファイル名を入力するか、[参照]ボタンをクリックして、"名前を付けて保存"画面より選択します。

- バックアップ出力先の既定値には下記のフォルダーが指定されています。

C:¥ProgramData¥SAY Technologies¥BOMW8¥DAT¥CP¥BACKUP¥

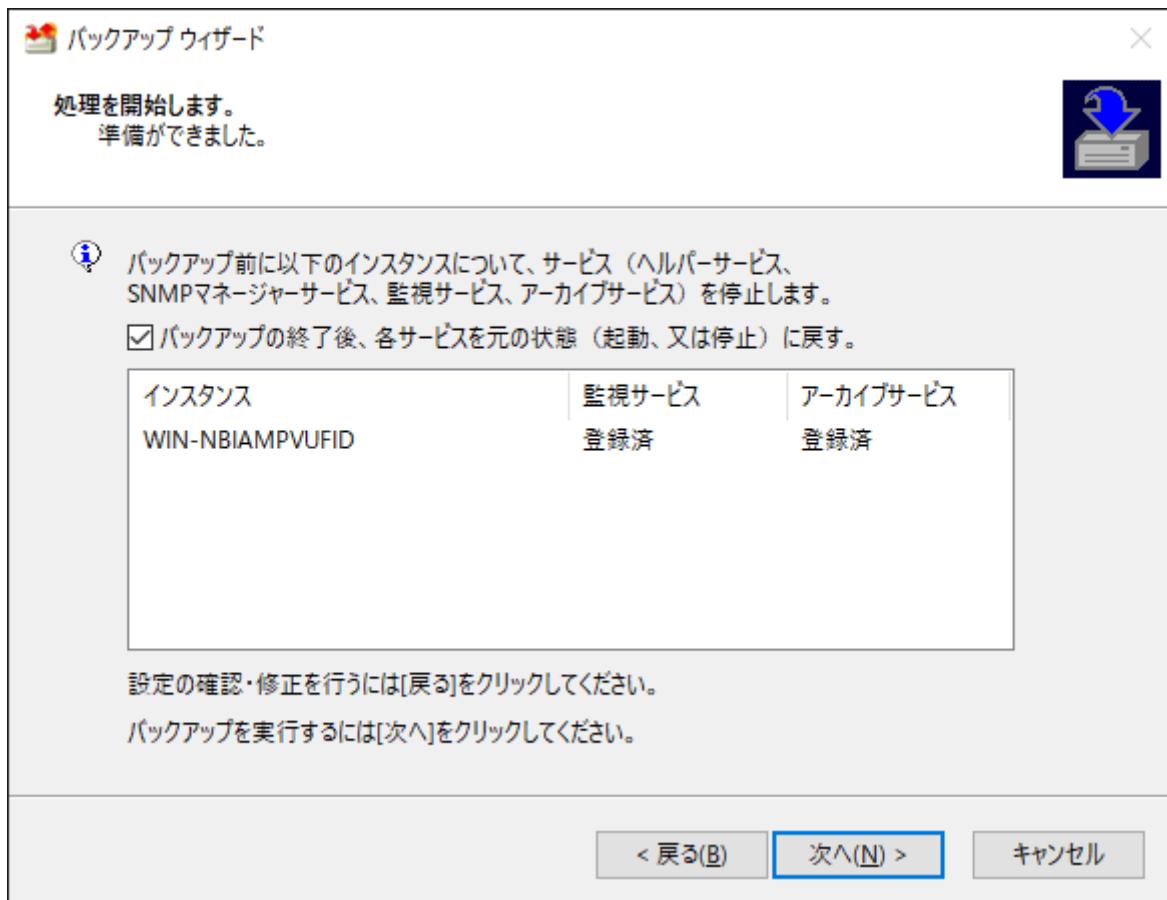
- ・バックアップファイル名の既定値は、手順3.のとおりです。



7. "バックアップファイル選択"画面で、[次へ]ボタンをクリックすると、"処理を開始します"確認画面が表示されます。

- ・インスタンスに監視サービス、アーカイブサービスが登録されているかが表示されます。

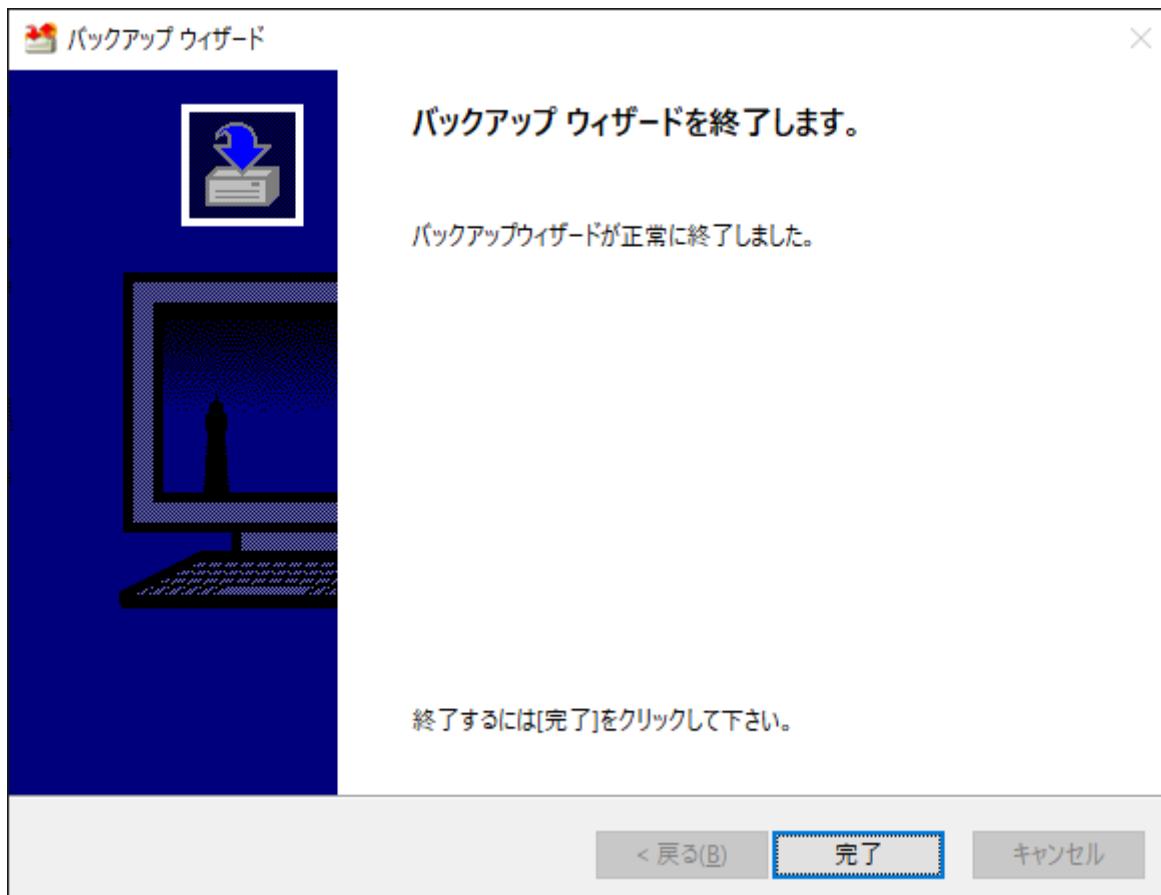
- BOMヘルパーサービスはインスタンスが作成された時点で必ず作成されているため、画面上では表示されません。



8. バックアップの終了後、各サービスを元の状態に戻すかどうかを選択します。

- "バックアップの終了後、各サービスを元の状態に戻す"チェックボックスにチェックを入れた場合
バックアップ時点でBOM監視サービスなどが起動中であれば、バックアップ中に各サービスを一旦停止し、バックアップ終了後、再起動します。BOMヘルパーサービスはバックアップ後、必ず起動されます。
- "バックアップの終了後、各サービスを元の状態に戻す"チェックボックスのチェックを外した場合
バックアップ時点でBOM監視サービスなどが起動中であれば、バックアップ中に各サービスを一旦停止し、全サービスは停止したままになります。

9. [次へ]ボタンをクリックすると、バックアップ処理が開始され、バックアップ処理が完了すると"バックアップウィザード終了"画面が表示されるので、[完了]ボタンをクリックするとBOMコントロールパネルに戻ります。

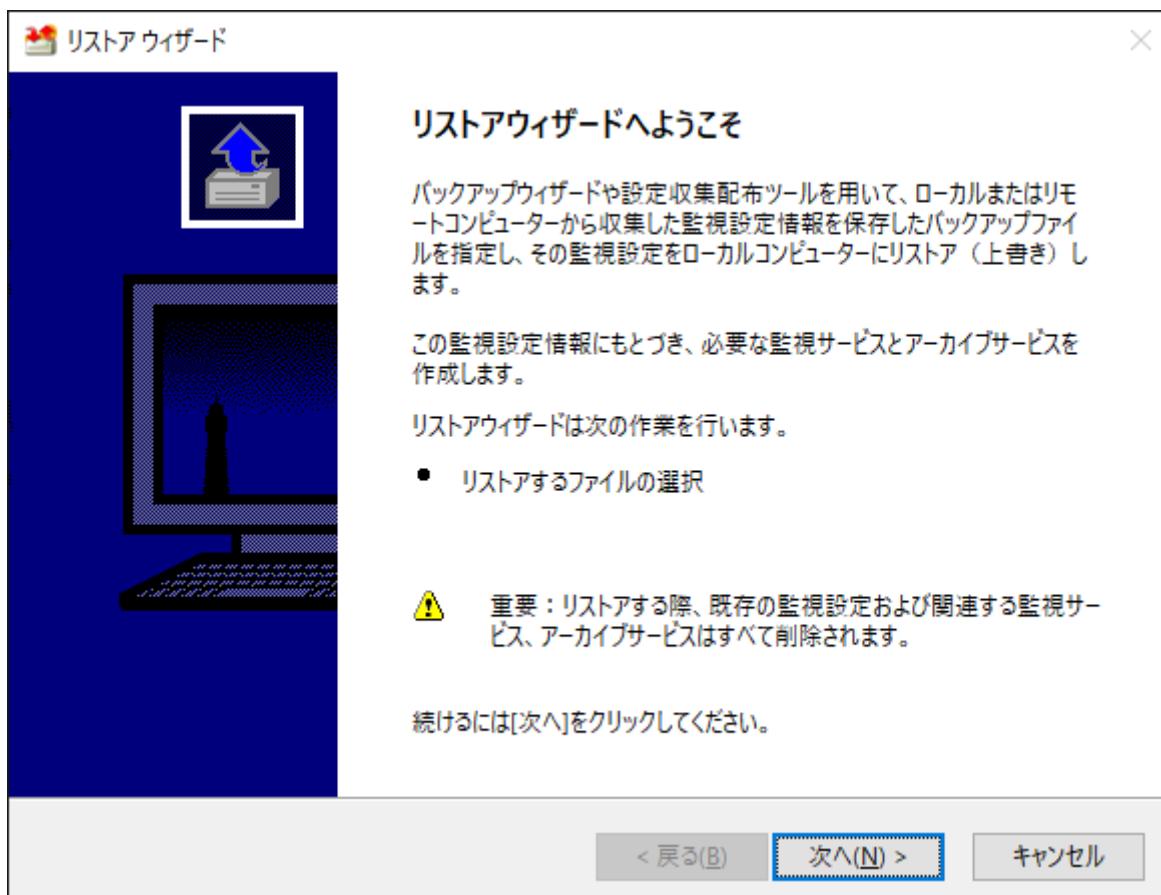


(3) リストア処理

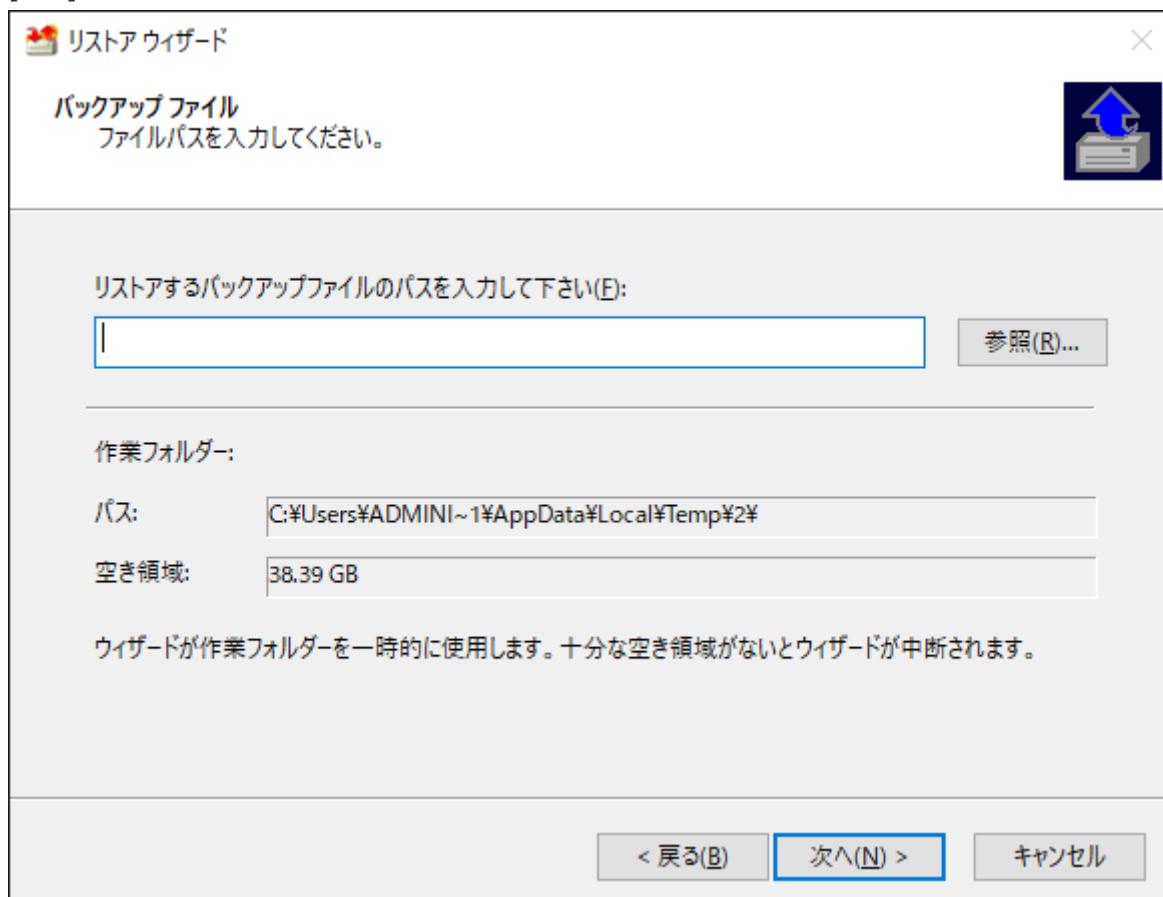
リストア処理では、ローカルコンピューターあるいはリモートコンピューターのバックアップ処理で出力されたCABファイルまたはZIPファイル、およびBOM 8.0設定収集配布ツールで収集された監視設定のCABファイルをローカルコンピューターに復元することができます。

- リストアする際、既存の監視設定および関連する監視サービス、アーカイブサービスといった現在のデータがすべて削除され、リストアするデータで置き換えられます。
- リストア処理を実行する際、すべてのBOM関連サービスが停止されます。

1. [リストア]ボタンをクリックすると、"リストア ウィザード"画面が表示されます。



2. [次へ]ボタンをクリックすると、"バックアップ ファイル"選択画面が表示されます。



3. "リストアするバックアップファイルのパスを入力してください"フィールドに、バックアップファイルのフォルダーとファイル名を入力するか、[参照]ボタンをクリックして、"開く"画面より選択します。

- バックアップ処理で作成したバックアップファイルを選択する場合

[参照]ボタンをクリックした時点で、バックアップファイルの既定出力先である以下のフォルダーが開きます。

C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\DAT\CP\BACKUP\

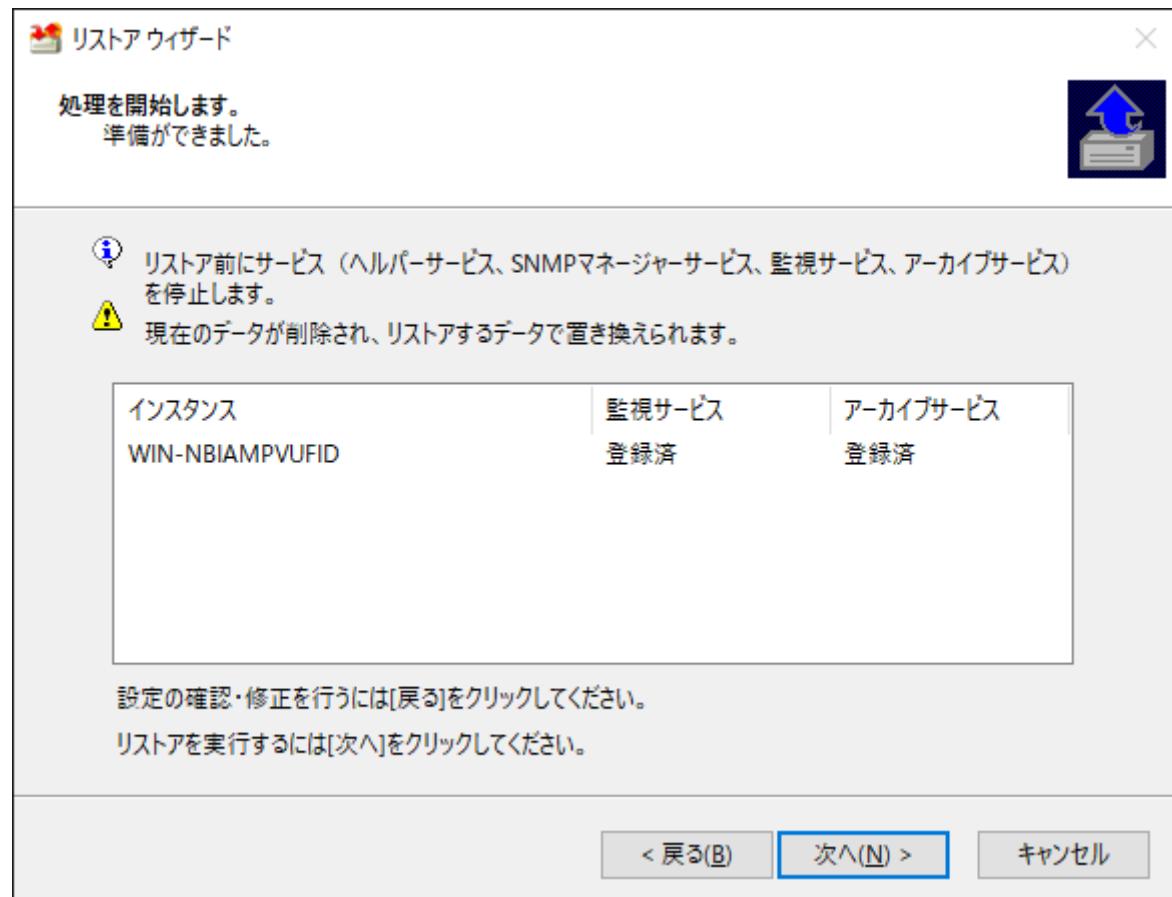
- BOM 8.0設定収集配布ツールで収集されたCABファイルを選択する場合

対象のファイルが出力される、以下のフォルダーまで移動してください。

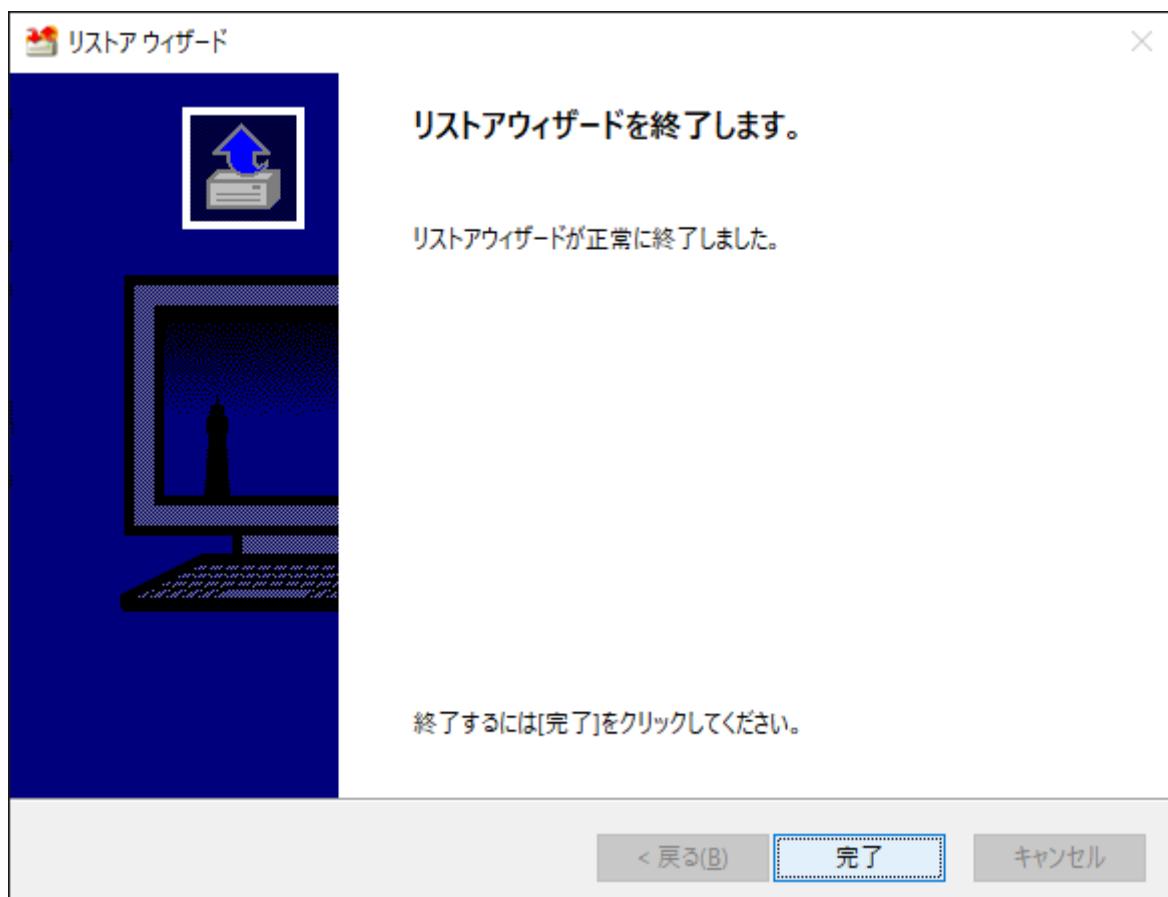
C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\DAT\CP\GATHER\DEF

4. "バックアップファイル選択"画面で、[次へ]ボタンをクリックすると、"処理を開始します"確認画面が表示されます。

- リストアによって削除されるインスタンスに監視サービス、アーカイブサービスが登録されているかが表示されます。



- [次へ]ボタンをクリックすると、リストア処理が開始され、リストア処理が完了すると"リストアウィザード終了"画面が表示されるので、[完了]ボタンをクリックするとBOMコントロールパネルに戻ります。



(4) パスワードが削除されたバックアップファイルをリストアした場合の注意事項

設定のバックアップ時に、"インスタンスのパスワードとSMTP、SNMP、オプション製品のパスワードを削除"チェックボックスにチェックを入れた場合、下記のパスワード情報がすべて削除されています。必要に応じてBOMマネージャーにより設定してください。

- インスタンスそれぞれのプロパティ画面

「全般」タブより設定するアカウントの"パスワード"および"パスワードの確認"

詳細は、'[インスタンスのプロパティ](#)'を参照してください。

- BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）のプロパティ画面

- 「SMTP」タブより設定するSMTPサーバーそれぞれの"パスワード"
- 「SNMP」タブより設定する"認証キー"と"暗号キー"
- 「Oracle接続設定」タブより設定する接続設定リストそれぞれの"パスワード"

詳細は、'[BOM for Windows Ver.8.0（ローカル）について](#)'を参照してください。

(5) "設定収集配布ツール"で収集した設定ファイルをリストアした場合の注意事項

インスタンスは表示されますが、サービスコントロール（Windowsのサービスマネージャー）にサービスとして登録されていないため、監視設定の変更ができません。また、ライセンスキーをインスタンスに設定しないと監視が開始できません。

- サービス登録

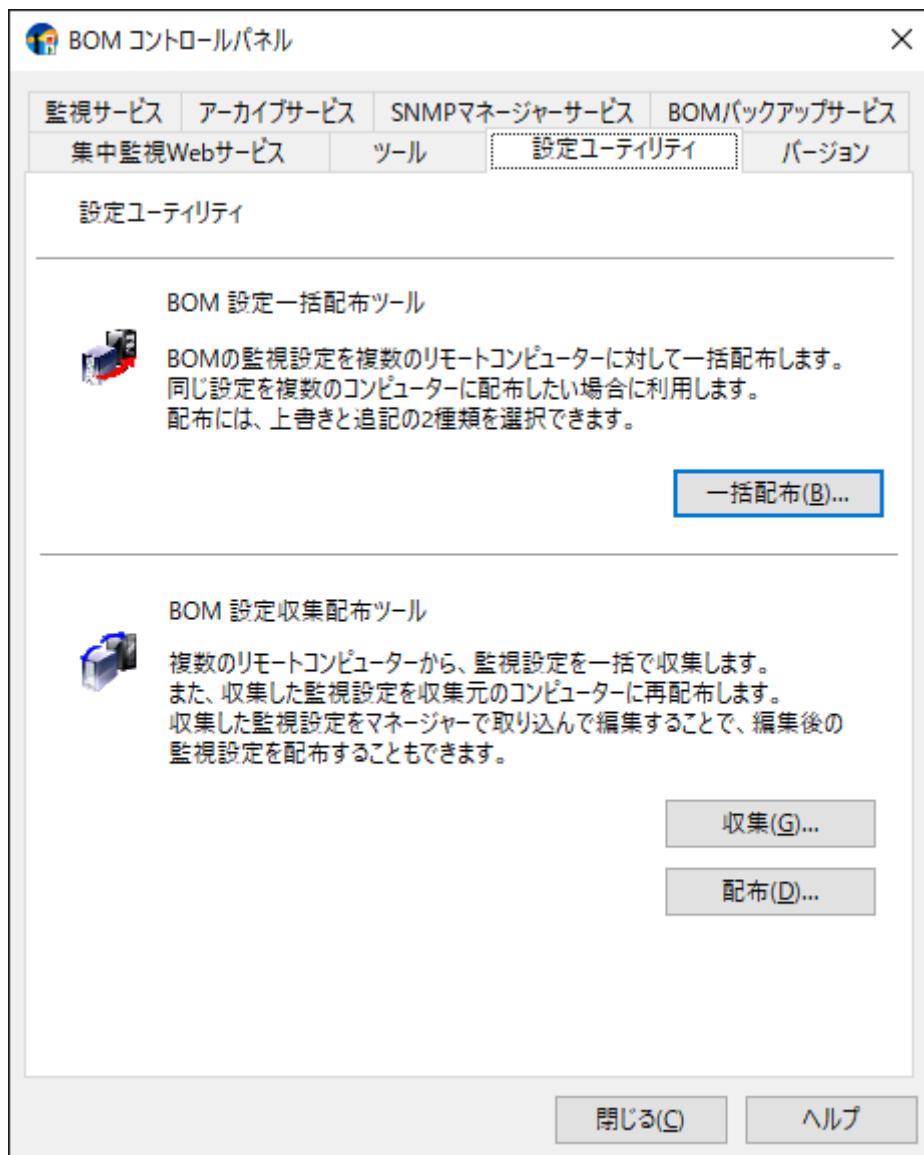
BOMコントロールパネルから、"BOM監視サービス"と"アーカイブサービス"の"登録"設定を行います。詳細は、'[BOM監視サービス ステータス](#)'および'[アーカイブサービスステータス](#)'を参照してください。

- インスタンスに対するライセンスキーへの設定

BOMマネージャーのライセンスマネージャーで行います。詳細は、'[ライセンス管理](#)'を参照してください。

6. 「設定ユーティリティ」タブ

BOM 8.0インストール時に、"設定配布ユーティリティ"を選択した場合、「設定ユーティリティ」タブが表示されます。



- BOM 設定一括配布ツール

BOM 8.0の監視設定を複数のリモートコンピューターに対して配布します。

[一括配布]ボタンをクリックすると、"BOM 設定一括配布"画面が起動します。

- BOM 設定収集配布ツール

複数のリモートコンピューターから、監視設定をまとめて収集し、監視設定を収集元のコンピューターに再配布するツールです。

- [収集]ボタンをクリックすると、"BOM 監視設定収集"画面が起動します。
- [配布]ボタンをクリックすると、"BOM 監視設定配布"画面が起動します。

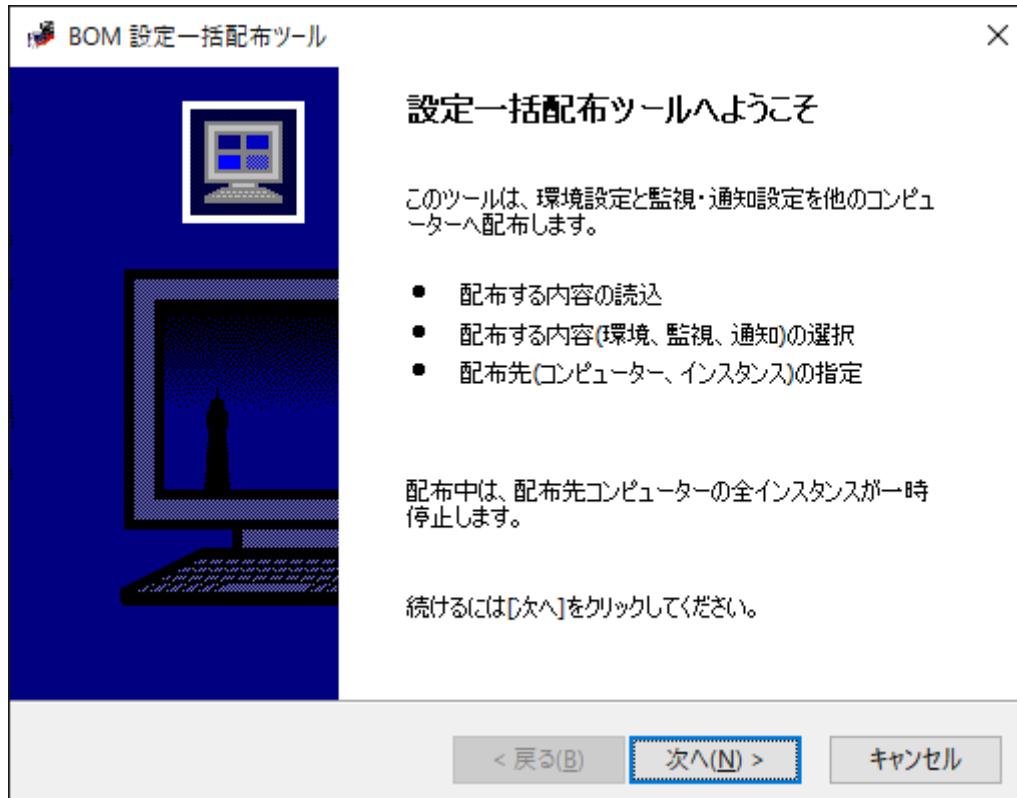
※ 設定一括配布ツール、および設定収集配布ツールの対象は、BOM 8.0のみです。

(1) BOM 設定一括配布ツール

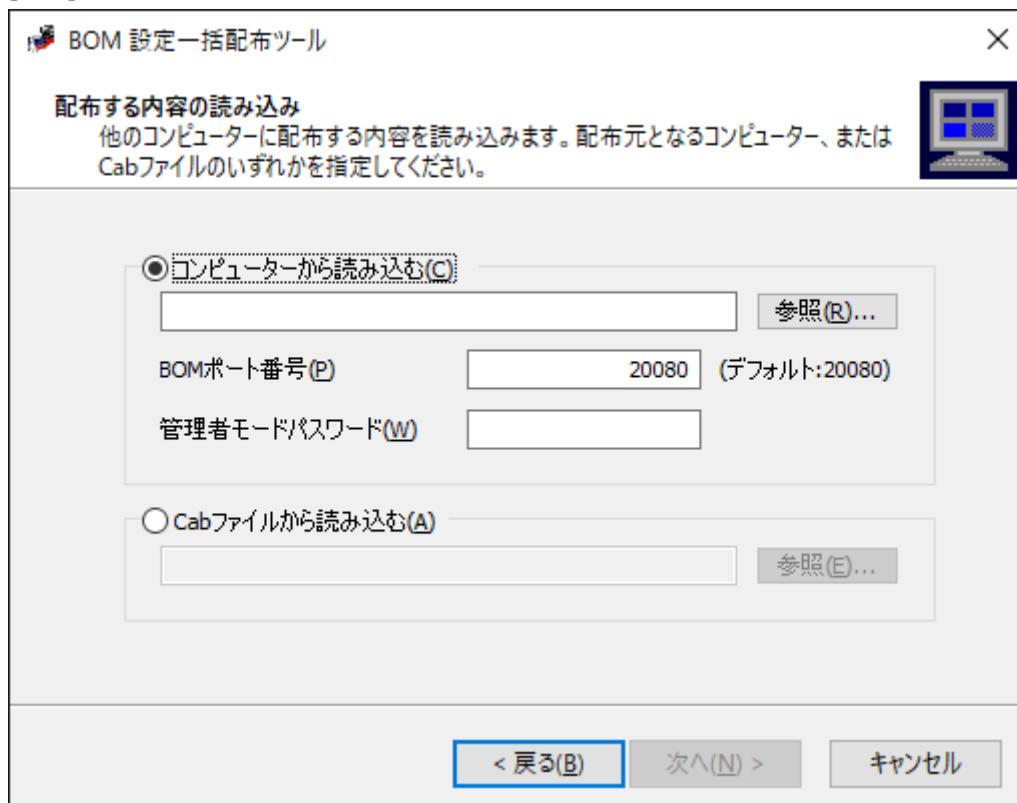
主に同じ設定を複数のコンピューターに配布したい場合に、BOM 8.0の監視設定を複数のリモートコンピューターに対して一括して配布することができます。

- バックアップファイル、ログファイルの領域確保の観点から、BOM 8.0を導入するハードディスクドライブには500MB以上の空き領域があることを推奨します。
- 本機能はLinuxオプション 8.0、VMwareオプション 8.0のインスタンスには対応しません。

1. [一括配布..]ボタンをクリックすると、BOM 設定一括配布ウィザードが開始します。



2. [次へ]ボタンをクリックすると、配布元の指定画面が表示されます。



3. 配布する対象を下記のどちらかより選択します。

- ・ "コンピューターから読み込む"ラジオボタンを選択した場合

BOM 8.0を導入しているコンピューターから、BOM 8.0の設定を読み込むことができます。対象の"コンピューター名"または"IPアドレス"、"BOMポート番号（既定値：20080）"、"管理者パスワード"を指定して、[次へ]ボタンをクリックします。

(BOMマネージャー等で、管理者モードの接続が行われている場合、配布設定を読み込むことができません。)

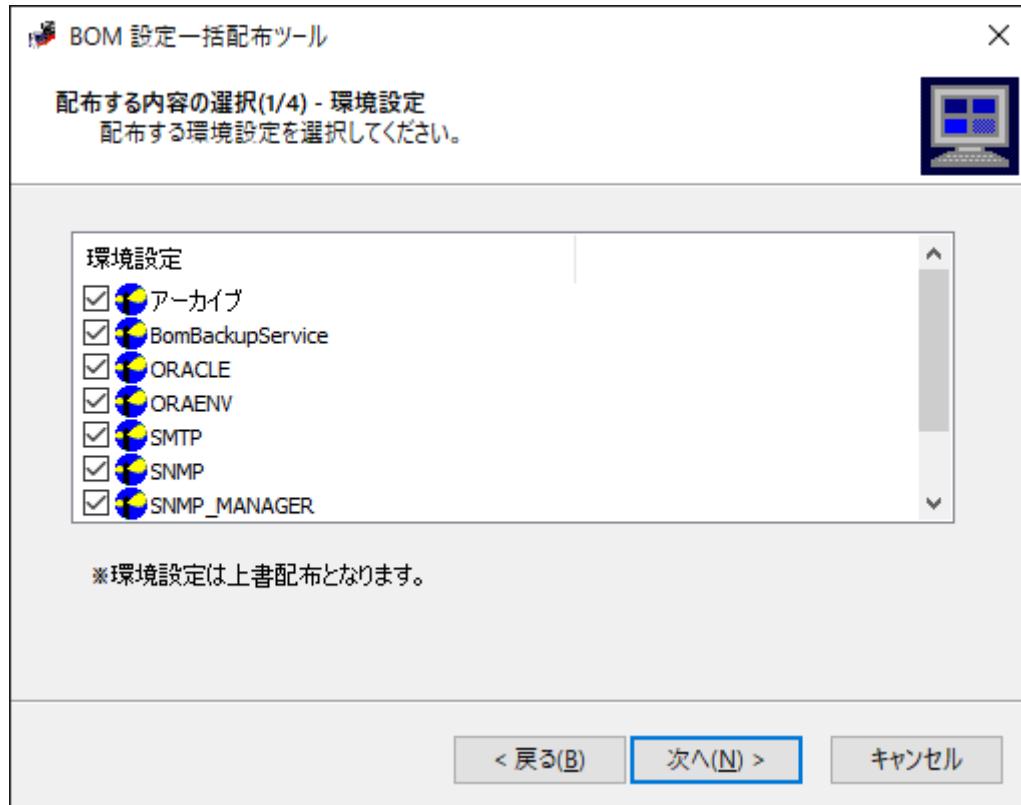
- ・ "CABファイルから読み込む"ラジオボタンを選択した場合

BOM 8.0バックアップファイルなどの監視設定ファイルからBOM 8.0の設定を読み込むことができます。

対象のCABファイルを指定して、[次へ]ボタンをクリックします。なお、バックアップファイルの作成時に、"インスタンスのパスワードとSMTP、SNMP、オプション製品のパスワードを削除"チェックボックスにチェックを入れた場合、該当箇所のパスワード情報がすべて削除されているため、必要に応じて配布先に対して'パスワードが削除されたバックアップファイルをリストアした場合の注意事項'を参考に設定を行ってください。

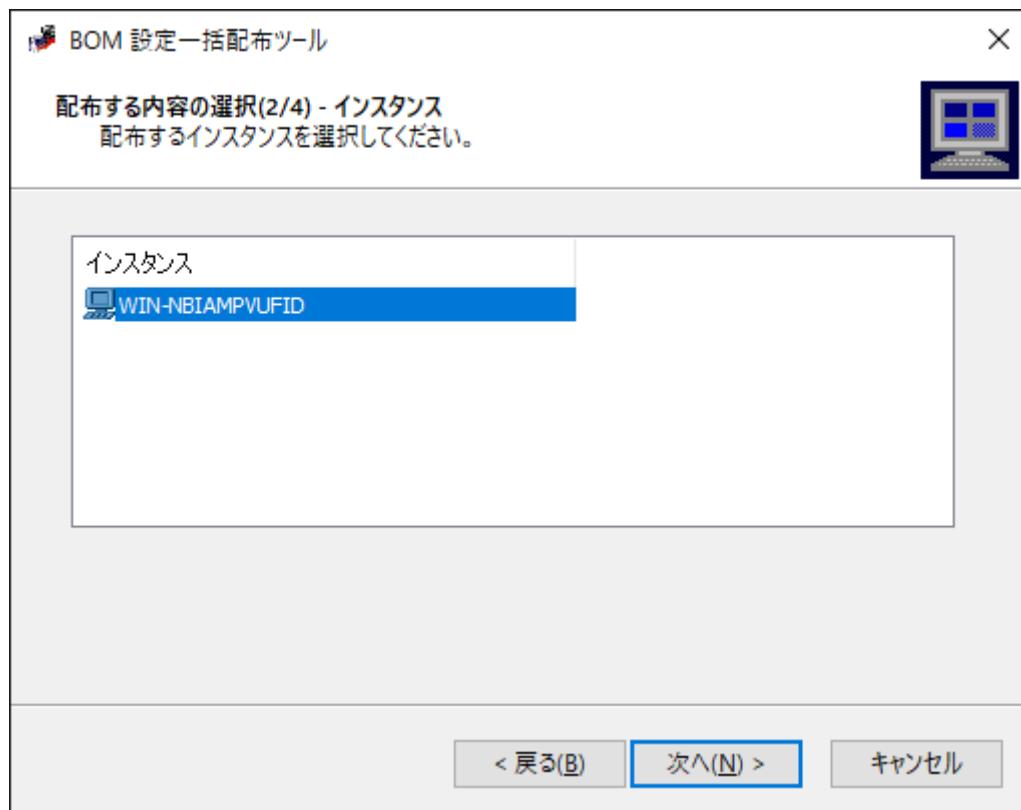
4. "配布内容選択の環境設定"画面が表示されるので、BOM 8.0の環境に設定に関する配布元の設定リストより、配布したい環境設定情報のチェックボックスにチェックを入れた上で、[次へ]ボタンをクリックします。

- ・ 環境設定は上書きされます。

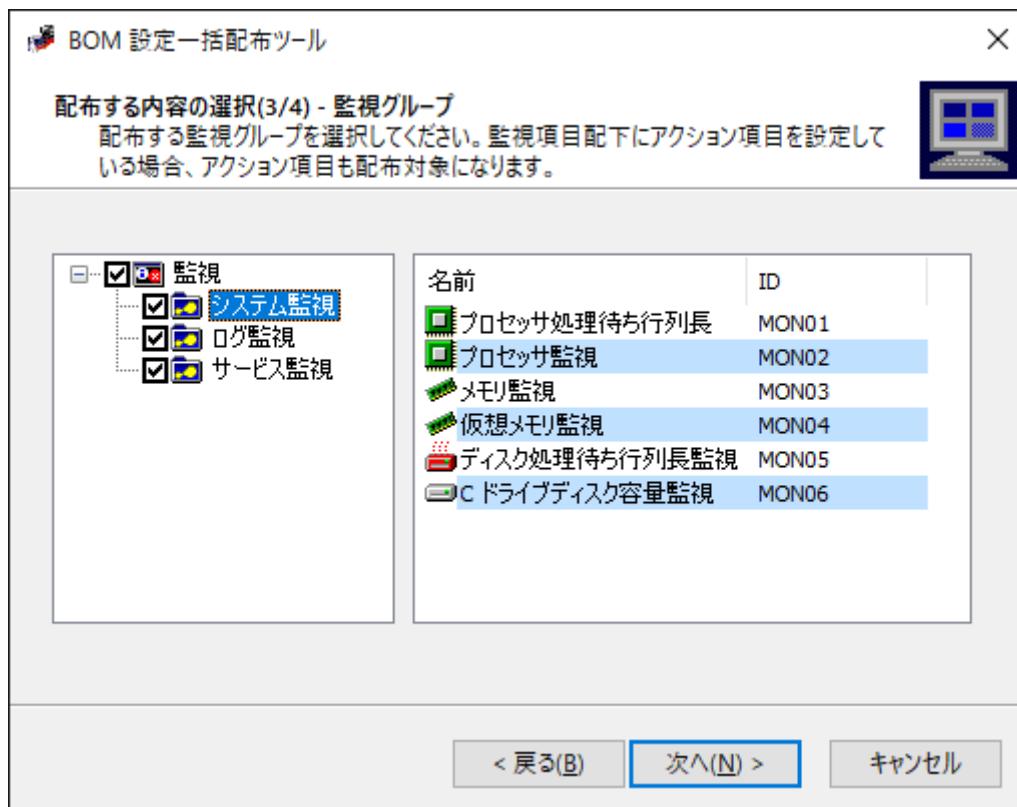


5. "配布内容選択のインスタンス"画面が表示されるので、配布対象のインスタンスを選択した上で[次へ]ボタンをクリックします。

- 監視設定CABなど、インスタンス情報がないファイル、またはインスタンスを作成していないBOM 8.0から設定を読み込んだ場合には、既定値インスタンスと表示されます。

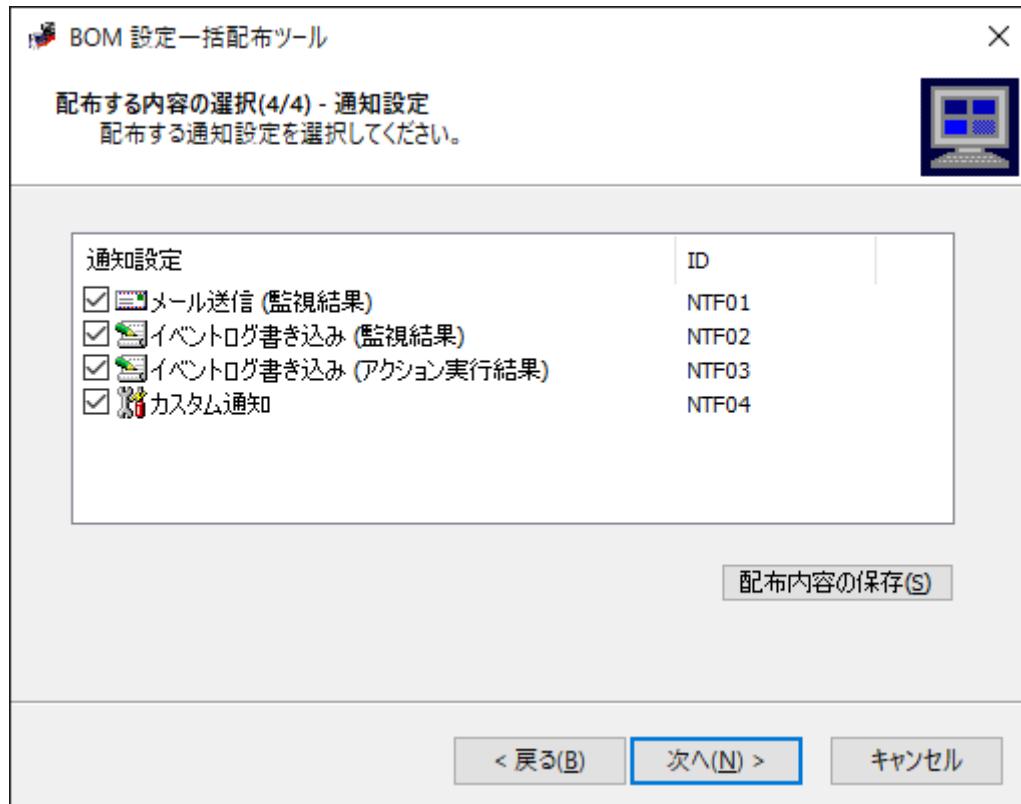


- "配布内容選択の監視設定"画面が表示されるので、配布したい監視グループを選択した上で[次へ]ボタンをクリックすると、選択した監視グループ配下のすべての監視項目と、すべてのアクション項目が配布されます。

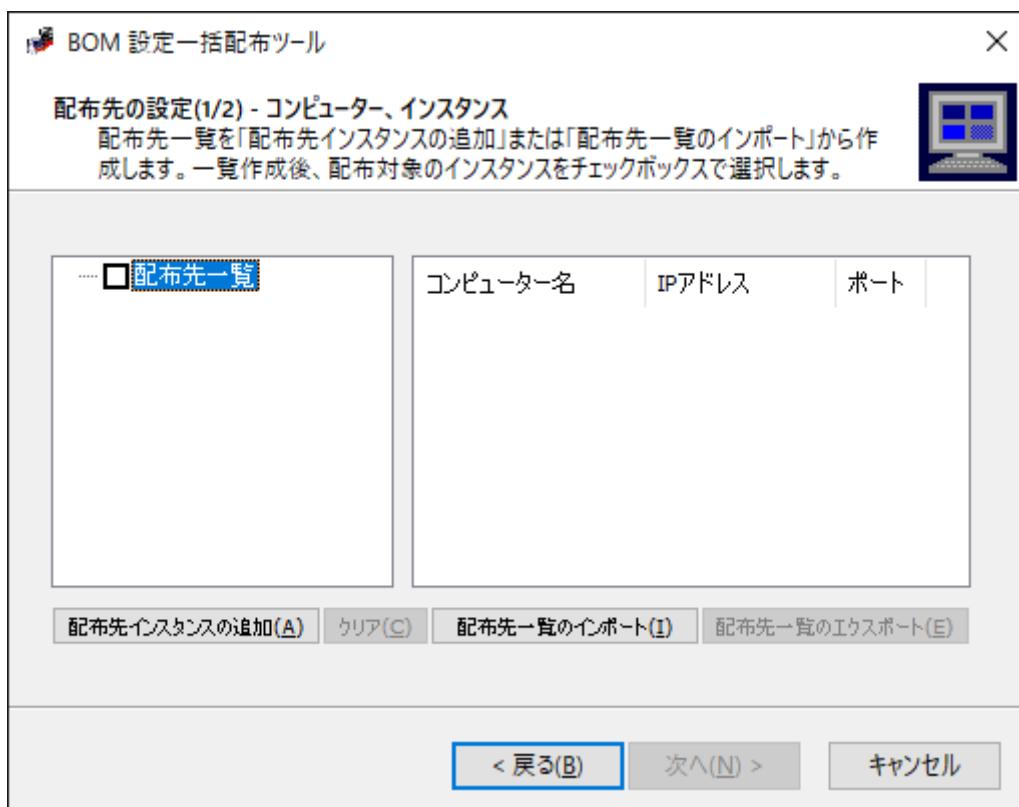


- "配布内容選択の通知設定"画面が表示されるので、配布したい通知項目を選択した上で、[次へ]ボタンをクリックします。

- [配布内容の保存]ボタンは、他のコンピューターへの配布時に手順3.の"CABファイルから読み込む"で再利用できます。



- "配布先の一覧"画面で、[配布先インスタンスの追加]ボタンをクリックすると、"インスタンス追加"画面が表示されます。



- "インスタンス追加"画面にて、配布先コンピューターの"BOMポート番号 (既定値: 20080)"と"管理者パスワード"を指定します。配布先コンピューターの指定は、下記のどちらかの手段で設定すると、コンピューターが配布先に追加されます。

- "自動探索"ラジオボタンを選択した場合

[実行]ボタンをクリックすると、自身のコンピューターを含めBOM 8.0を導入しているコンピューターのすべてを検索できます。

- "IPアドレス範囲から検索"ラジオボタンを選択した場合

ネットワークに接続しておりBOM 8.0を導入しているコンピューターを"IPアドレス"と"範囲 (ビット長)"から検索できます。

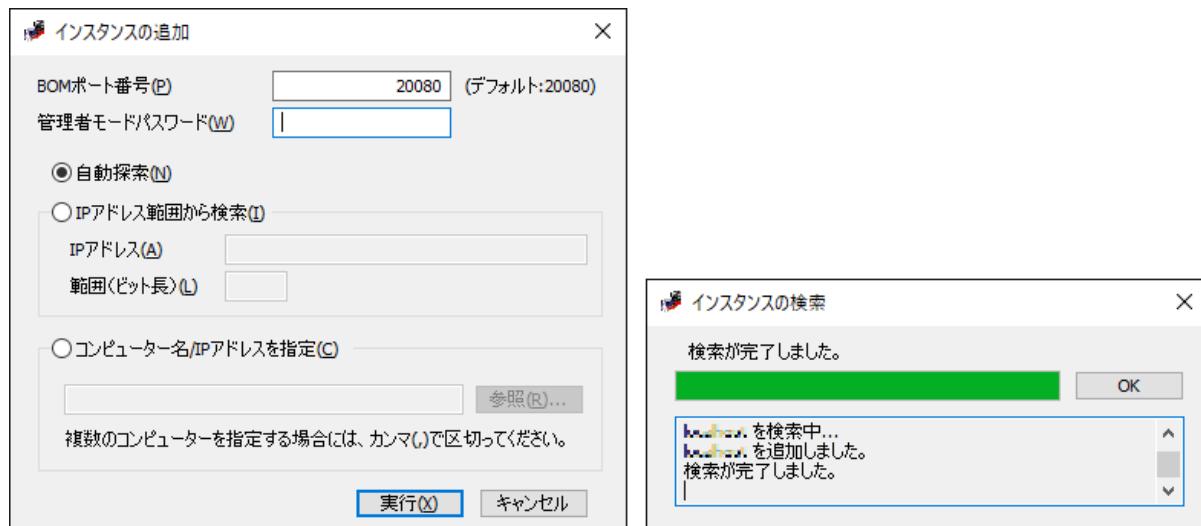
配布先の"IPアドレス"と"範囲 (ビット長)"を指定して、[実行]ボタンをクリックします。

"範囲 (ビット長)"の入力範囲は、IPv4アドレスの場合は16~32、IPv6アドレスの場合は112~128です。

- "コンピューター名/IPアドレスを指定"ラジオボタンを選択した場合

コンピューター名/IPアドレスを直接指定することができます。

配布先のコンピューターを[参照..]ボタン、または"コンピューター名"フィールドに入力して、[実行]ボタンをクリックします。



10. "配布先の一覧"画面にて、配布したくないコンピューターが検出された場合には、チェックボックスのチェックを外し、配布先一覧に問題がなければ[次へ]ボタンをクリックします。

- [クリア]ボタンをクリックすれば配布先一覧をすべて削除することができます。
- [配布先一覧のエクスポート]ボタンをクリックすると、配布先一覧を保存することができます。

保存したファイルは、[配布先一覧のインポート]ボタンを使用して読み込むことができます。

11. "配布方法設定"画面が表示されるので、"監視グループ"に対して下記のどちらかを選択します。

※ 配布の際、グループID (GRPID) は前詰めされます。

- "IDを変更する (追加)"ラジオボタンを選択した場合

配布先に事前に登録されていた監視グループを残して追加配布することができます。

- "配布する前に削除する"ラジオボタンを選択した場合

配布先に事前に登録されていた監視グループをすべて削除した上で、今回配布したものだけを設定することができます。



12. "配布方法設定"画面が表示されるので、"通知項目"に対して下記のどちらかを選択します。

※ 配布の際、通知項目のID（NTF）は前詰めされます。

- "IDを変更する（追加）"ラジオボタンを選択した場合

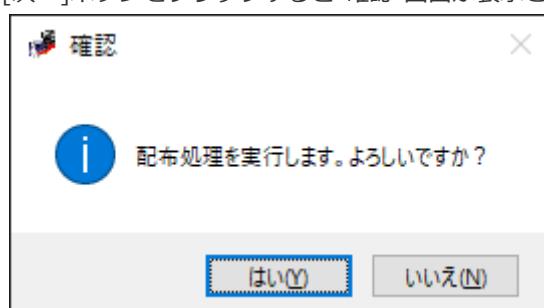
配布先に事前に登録されていた通知項目を残して追加配布することができます。

- "配布する前に削除する"ラジオボタンを選択した場合

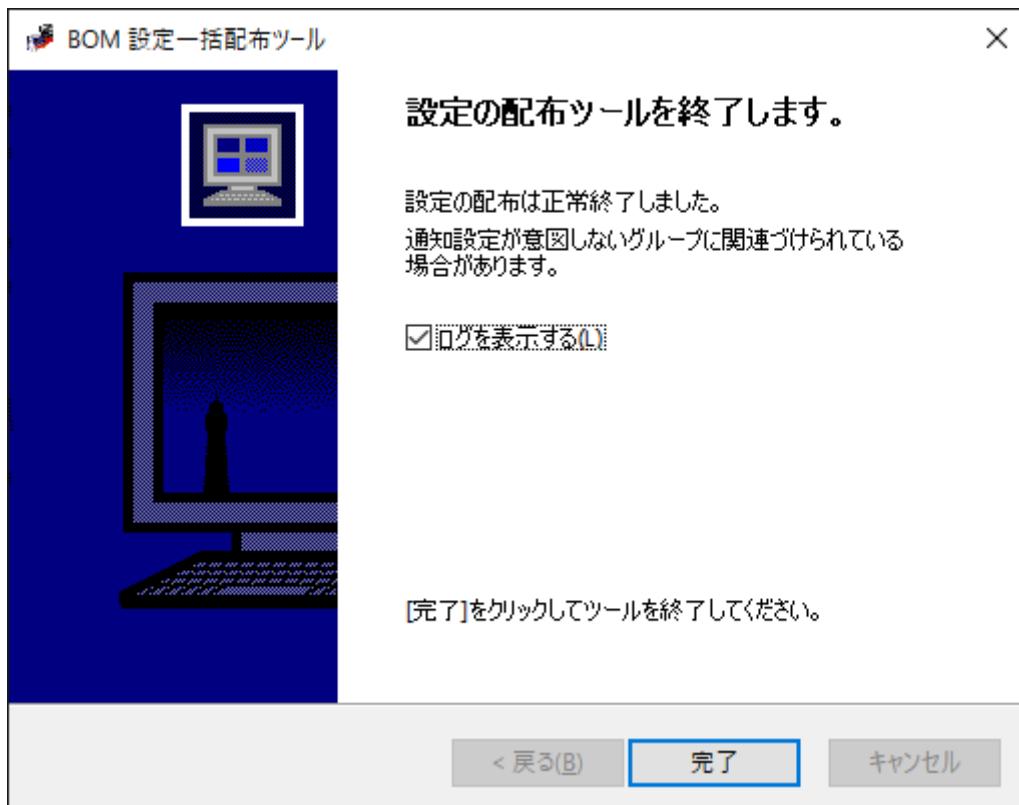
配布先に事前に登録されていた通知項目をすべて削除した上で、今回配布したものだけを設定することができます。

13. "バックアップを作成する"チェックボックスにチェックを入れると、配布先の現在の状態をバックアップすることができます。

14. [次へ]ボタンをクリックすると"確認"画面が表示されるので、[はい]ボタンをクリックして、配布を実行します。



15. 処理が完了するとメッセージが表示されますので、[次へ]ボタンをクリックし、[完了]ボタンをクリックすると終了します。



16. "ログを表示する"チェックボックスにチェックを入れると、配布完了時に配布状況を示すログを表示することができます。

(2) BOM 設定収集配布ツール

BOM 8.0の監視設定を複数のリモートコンピューターから収集、再配布する場合に使用します。

コンピューターごとに設定が違う場合、それぞれの設定を1度にまとめて収集後、下記の手順で設定内容を編集して再配布する場合に利用します。

1. ネットワーク上で起動するBOM 8.0の監視設定をBOM 設定収集配布ツールが起動したコンピューターで収集します。

2. 手順1.のコンピューター上で収集した設定をリストアし、変更したい内容に編集し、バックアップします。

- リストアの手順は、'リストア処理'を参照ください。
- バックアップの手順は、'バックアップ処理'を参照ください。

"監視設定のみ"でバックアップを行ってください。"監視設定およびログ"では、再配布を行うことができません。

バックアップ時に"インスタンスのパスワードとSMTP、SNMP、オプション製品のパスワードを削除"チェックボックスにチェックを入れた場合、該当箇所のパスワード情報がすべて削除されているため、必要に応じて配布先に対して'[「パスワードが削除されたバックアップファイルをリストアした場合の注意事項」](#)'を参考に設定を行ってください。

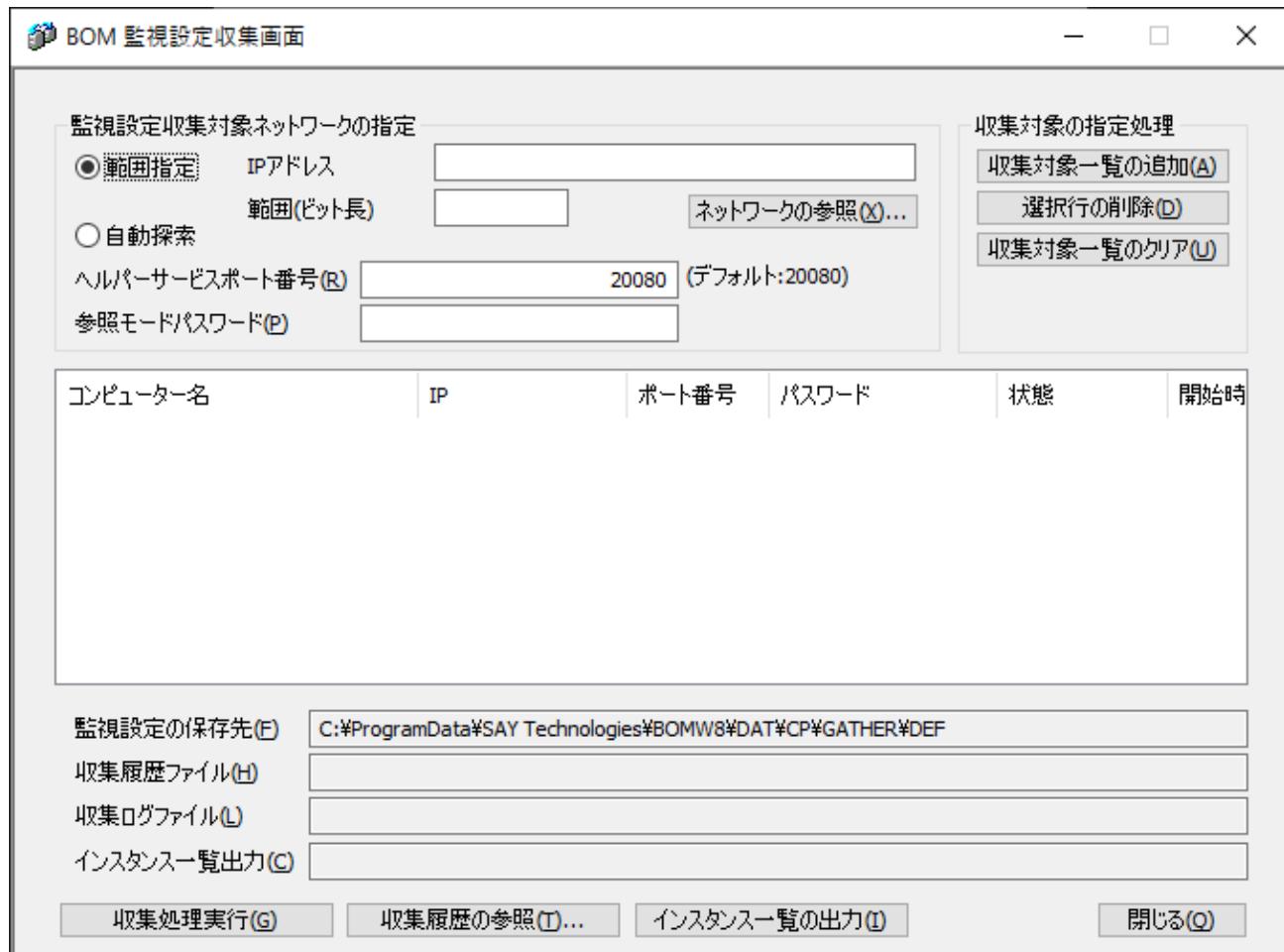
3. 手順2.でバックアップした内容を設定収集配布ツールで配布します。

Windows クライアント OSにはTCP接続の制限があり、監視設定配布ツールが動作するWindows クライアント OSのネットワーク接続状態がビギーで不完全なTCP送信接続が10以上ある場合にはタイムアウトエラーとなります。

- 本現象はWindows サーバー OSでは発生しません。

A. 監視設定収集

[収集]ボタンをクリックすると、"BOM 監視設定収集"画面が起動します。



- 監視設定収集画面では、BOM 8.0がインストールされている複数のコンピューターから監視設定を収集して保存することができます。
- 監視設定および収集履歴は収集処理が実行する度に保存されます。
- 監視設定はコンピューター別に収集され、CABファイルに保存されます。複数のインスタンスを持つコンピューターの監視設定は一つのCABファイルに保存されます。
- 収集履歴を参照して再度収集処理を行うことができます。

1. "監視設定収集対象ネットワーク"フィールドに、下記の設定を行います。

- "IPアドレス"フィールドと"範囲 (ビット長)"フィールドに、監視設定の収集対象となるコンピューターの"IP アドレス"と"範囲 (ビット長)"を指定します。入力範囲は、IPv4アドレスの場合は16~32、IPv6アドレスの場合は112~128です。
- [ネットワークの参照]ボタンをクリックすると、コンピューターにインストールされているネットワークカードの一覧が表示され、それらに割り振られているIPアドレスと範囲が自動的に設定されます。
- "ヘルパーサービスポート番号"では、BOMヘルパーサービスが使用する"ポート番号 (既定値: 20080)"を設定します。
- "参照モードパスワード"では、収集に用いる参照モードの"パスワード"を指定します。

2. "収集対象の指定処理"フィールドの下記を用いて、収集対象のリストを作成します。

- ・ [収集対象一覧の追加]ボタンをクリックすると、手順1.で指定した接続情報を用いてネットワークから参照モードパスワードで接続できるBOM 8.0がインストールされているコンピューターを検出し収集対象一覧に追加します。
 - 収集の対象となるコンピューター上のBOMヘルパーサービスが停止している場合、該当するコンピューターは収集対象一覧に表示されません。
 - 既に収集対象一覧に表示されている場合、状態欄は"エラー"となり、エラーとなつた監視設定は収集されません。
- ・ [選択行の削除]ボタンをクリックすると、収集対象一覧で選択した行（複数行も可）を削除します。
- ・ [収集対象一覧のクリア]ボタンをクリックすると、収集対象一覧で表示されている行をすべて削除します。

3. "監視設定の保存先"には、監視設定の保存先に関する下記情報が表示されます。

```
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\DAT\CP\GATHER\DEF\
ファイル名 : BCFG-yyyyMMdd-hhmmss-コンピューター名.CAB
(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)
```

4. "収集履歴ファイル"には、[収集処理実行]ボタンにより出力された履歴ファイルに関する下記の情報が表示されます。

```
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\DAT\CP\GATHER\DEF\BCFG-yyyyMMdd-
hhmmss-GATHER\
ファイル名 : BCFG-yyyyMMdd-hhmmss-GATHER.lsv
(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)
```

5. "収集ログファイル"には、[収集処理実行]ボタンでエラーが発生した場合に記録される収集ログファイルに関する下記情報が表示されます。

```
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\DAT\CP\GATHER\DEF\BCFG-yyyyMMdd-
hhmmss-GATHER\
ファイル名 : BCFG-yyyyMMdd-hhmmss-GATHER.log
(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)
```

6. [収集処理実行]ボタンをクリックすると、"IPアドレス"、"ポート番号"、"参照モードパスワード"で監視対象コンピューターに接続して監視設定ファイルを収集します。

- ・ 収集処理の履歴を手順4."収集履歴ファイル"に保存し、エラーが発生した場合は手順5."収集ログファイル"にエラー内容を記録します。また収集の"状態"は画面に表示され、各種ログファイルに書き込まれます。
- ・ 収集済：収集対象コンピューターに監視設定ファイルが正常に転送されます。
- ・ 接続不能：収集対象コンピューターに参照モードパスワードで接続できない。
- ・ エラー：上記以外に発生したエラー。

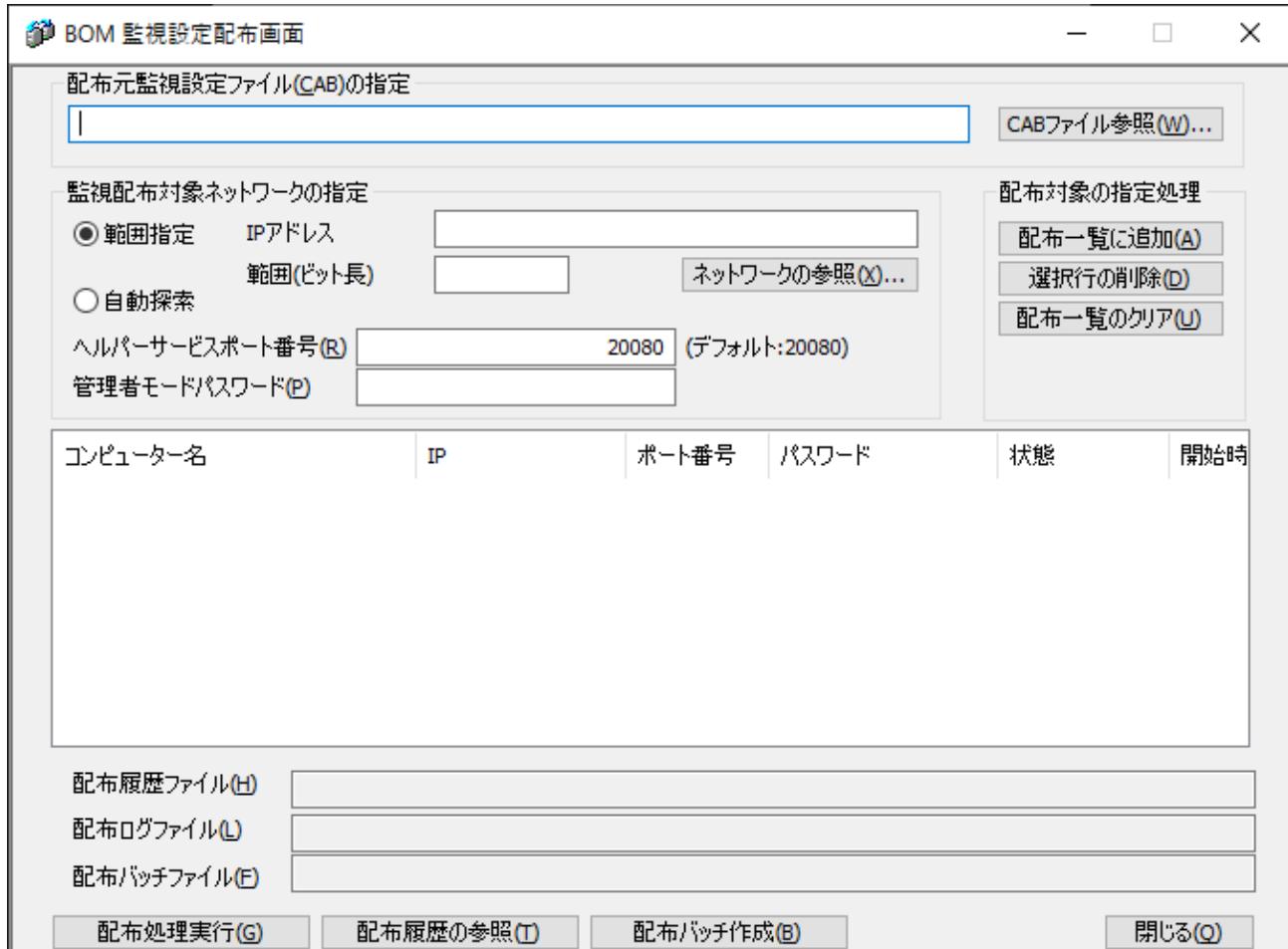
7. [収集履歴の参照]ボタンをクリックすると"ファイルを開く"画面が表示され、収集履歴ファイル (*.LSV) を選択することで、選択したLSVファイルに記録された収集履歴が収集対象一覧に表示されます。

8. [インスタンス一覧出力]ボタンをクリックすると、"収集対象一覧"のCABファイルからインスタンス一覧を取得して、集中監視コンソールにインポートできるCSV形式で出力します。

```
フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\DAT\CP\GATHER\INS
ファイル名 : BCFG-yyyyMMdd-hhmmss-INSTANCE-LIST.csv
(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)
```

B. 監視設定配布

[配布]ボタンをクリックすると、"BOM 監視設定配布"画面が起動します。



- 監視設定配布画面では、コンピューター別の監視設定ファイルを選択し、それぞれのコンピューターに配布することができます

配布先コンピューター上のインスタンス名とインスタンス数は配布の対象となるCABファイルの内容と一致する必要があります。

- 'BOM 設定収集配布ツール'で監視設定を収集し、それを編集した後の監視設定ファイルを配布してください。
- 配布処理は、画面上の[配布処理実行]ボタンをクリックして直ちに実行することができます。
- "配布バッチ作成"で作成したバッチは、OSのタスクスケジュールに登録して指定した時刻に実行させることもできます。

1. "配布元監視設定ファイル (CAB) の指定"フィールドにCABファイルの絶対パスを入力するか、[CABファイル参照]ボタンクリックして配布対象のファイルを選択します。

2. "監視配布対象ネットワーク"フィールドに、下記のとおり設定を行います。

- "IPアドレス"フィールドと"範囲 (ビット長)"フィールドに、監視設定の配布対象となるコンピューターの"IPアドレス"と"範囲 (ビット長)"を指定します。入力範囲は、IPv4アドレスの場合は16~32、IPv6アドレスの場合は112~128です。

[ネットワークの参照]ボタンをクリックすると、コンピューターにインストールされているネットワークカードの一覧が表示され、それらに割り振られているIPアドレスと範囲が自動的に設定されます。

- "ヘルパーサービスポート番号"では、BOMヘルパーサービスが使用する"ポート番号 (既定値 : 20080)"を設定します。
- "管理者モードパスワード"では、配布に用いる管理者モードの"パスワード"を指定します。

3. "配布対象の指定処理" フィールドの下記を用いて、配布対象のリストを作成します。

- [配布一覧に追加] ボタンをクリックすると、手順2.で指定した接続情報を用いてネットワークから管理者モードパスワードで接続できるBOM 8.0がインストールされているコンピューターを検出し、配布一覧に追加します。
 - 収集の対象となるコンピューター上のBOMヘルパーサービスが停止している状態、あるいはBOMマネージャーが管理者モードでBOMヘルパーサービスに接続している場合は、該当するコンピューターは配布一覧に表示されません。
 - 既に配布対象一覧に表示されている場合、状態欄は"エラー"となります。
- [選択行の削除] ボタンをクリックすると、配布一覧で選択した行（複数行も可）を削除します。
- [配布一覧のクリア] ボタンをクリックすると、配布一覧で表示されている行をすべて削除します。

4. "配布履歴ファイル" には、[配布処理実行] ボタンをクリックすることで出力された履歴ファイルに関する情報が表示されます。

5. "配布ログファイル" には、[配布処理実行] ボタンをクリックすることでエラーが発生した場合に記録される配布ログファイルに関する情報が表示されます。

6. [配布処理実行] ボタンをクリックすると、"IPアドレス"、"ポート番号"、"管理者モードパスワード"で監視対象コンピューターに接続して監視設定ファイルを配布します。

- 配布処理を実行する際、配布先コンピューター上のBOMヘルパーサービス以外の監視サービスおよびアーカイブサービスはすべて停止処理が実行しますが、Windowsのサービスマネージャーからサービスの停止要求を受けて約1分間に内に停止できなかった場合は、配布処理のタイムアウトとなり、配布処理が失敗になります。
- インスタンスに処理時間の長い監視項目が登録されている場合、該当インスタンスは事前に停止することを推奨します。
- 配布処理が正常に完了後、配布先コンピューターの監視サービス、アーカイブサービスの起動/停止状態は、配布処理が実行される前の状態に戻されます。
- 配布処理の履歴を手順4."配布履歴ファイル"に保存、エラーが発生した場合は手順5."配布ログファイル"にエラー内容を記録します。収集の"状態"は画面に表示され、各種ログファイルに書き込まれます。
 - 収集済：配布対象コンピューターに監視設定ファイルが正常に転送された。
 - 接続不能：配布対象コンピューターに管理者モードパスワードで接続できない。
 - エラー：上記以外に発生したエラー。

※ BOMの仕様として、ログファイル (BCFG-YYYYMMDD-HHMMSS-DEPerr.log) に以下のエラーメッセージが出力されることがあります。

出力メッセージ：

配布先のヘルパーサービス再起動に失敗しました(アクセスが拒否されました。)

このエラーメッセージは「監視設定の配布先でBOM ヘルパーサービスの再起動が実行できなかった」ことを示していますが、監視設定のみを配布する場合、BOMヘルパーサービスの再起動は必要ありませんので、本エラーメッセージは無視してください。

以下にあげた通信ソケットに関わる設定が変更される場合は、BOM ヘルパーサービスの再起動が必要です。これらの通信ソケットに関わる設定変更を含む設定を配布する場合は、配布後に配布先のコンピューター上でBOMヘルパーサービスを再起動してください。

- BOM に接続を許可する外部 IP アドレスやセグメントの設定

- BOM ヘルパーサービスが使用するポート番号（既定値： TCP/20080）

7. [配布履歴の参照]ボタンをクリックすると"ファイルを開く"画面が表示され、配布履歴ファイル (*.LSV) を選択することで、選択したLSVファイルに記録された配布履歴が配布対象一覧に表示されます。

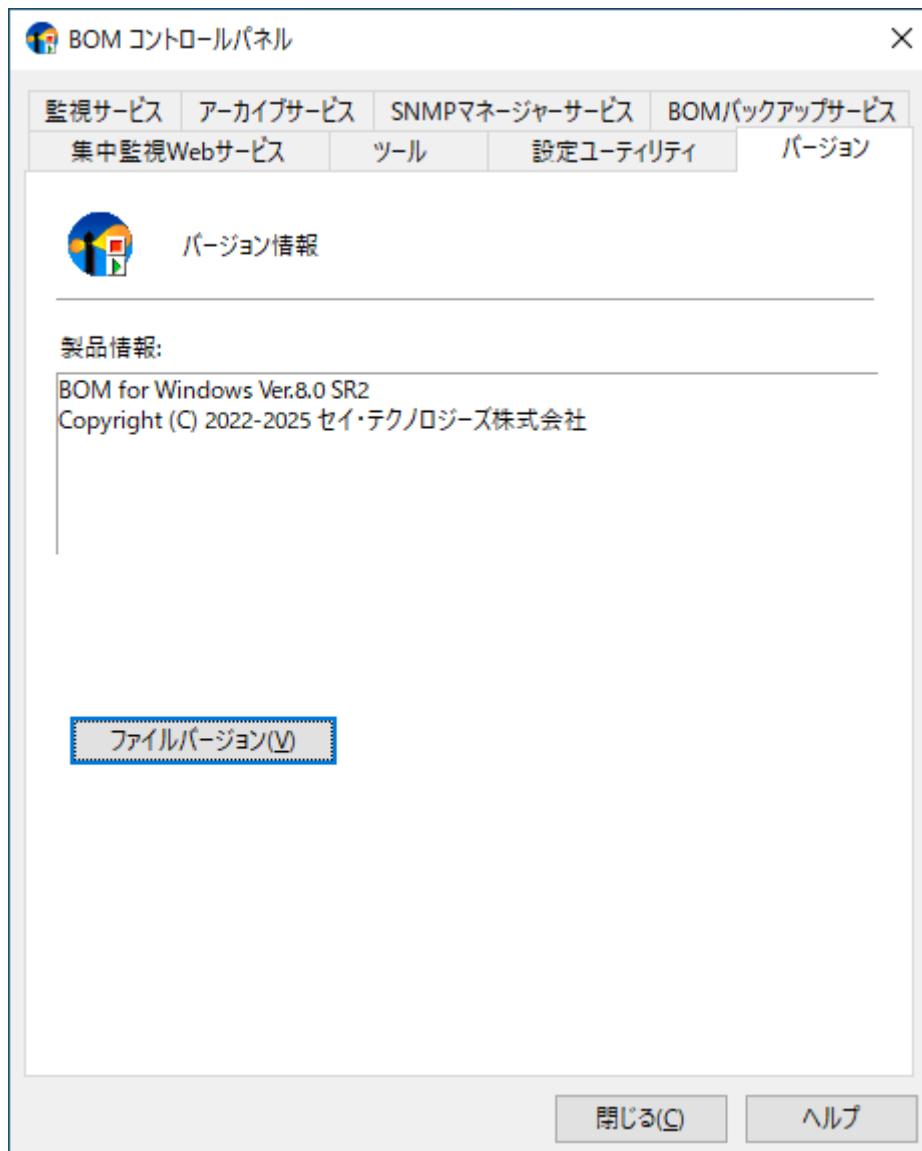
8. [配布バッチ作成]ボタンをクリックすると、配布対象一覧に設定されている配布情報で"配布バッチファイル"を作成します。

"配布バッチファイル"の情報は、"配布バッチファイル"フィールドに表示されます。

※ バッチファイルから監視設定の配布を実行する際は、GUIからの実行と異なり、成功した旨のログが出力されません。ログファイル (BCFG-YYYYMMDD-HHSSS-DEPerr.log) に手順6で示したメッセージ以外のエラーメッセージが出力されていなければ、正常に配布を終了できたと判断してください。

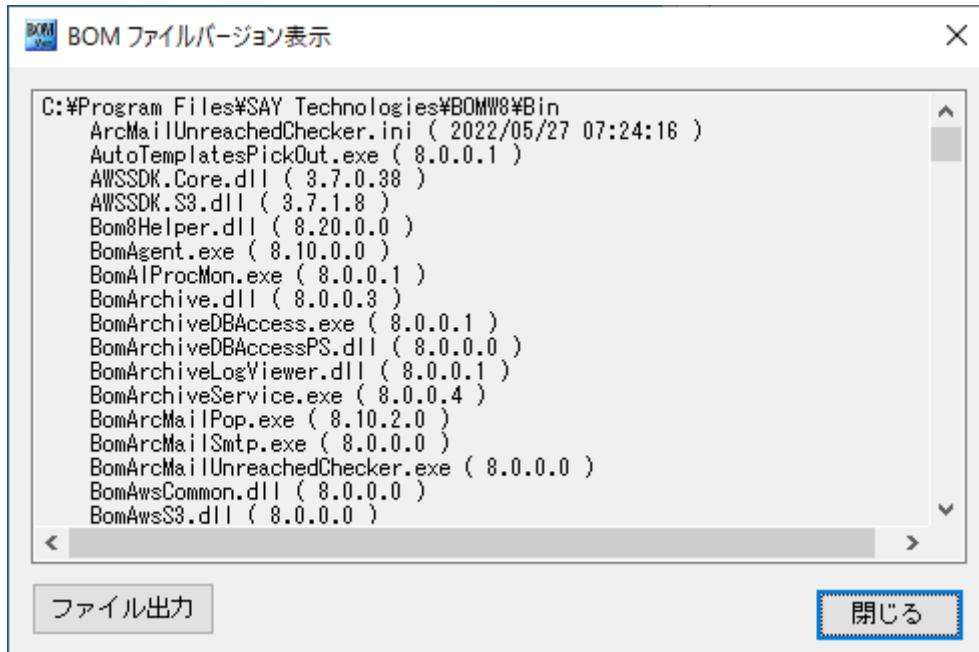
7. 「バージョン」タブ

バージONTタブでは、本製品のバージョンが確認できます。



1. [ファイルバージョン]ボタンをクリックすると、同梱されている各ファイルのバージョンが確認できます。

- 各モジュール単位に内部バージョンが表示されます。なお、下記画面はサンプルです。

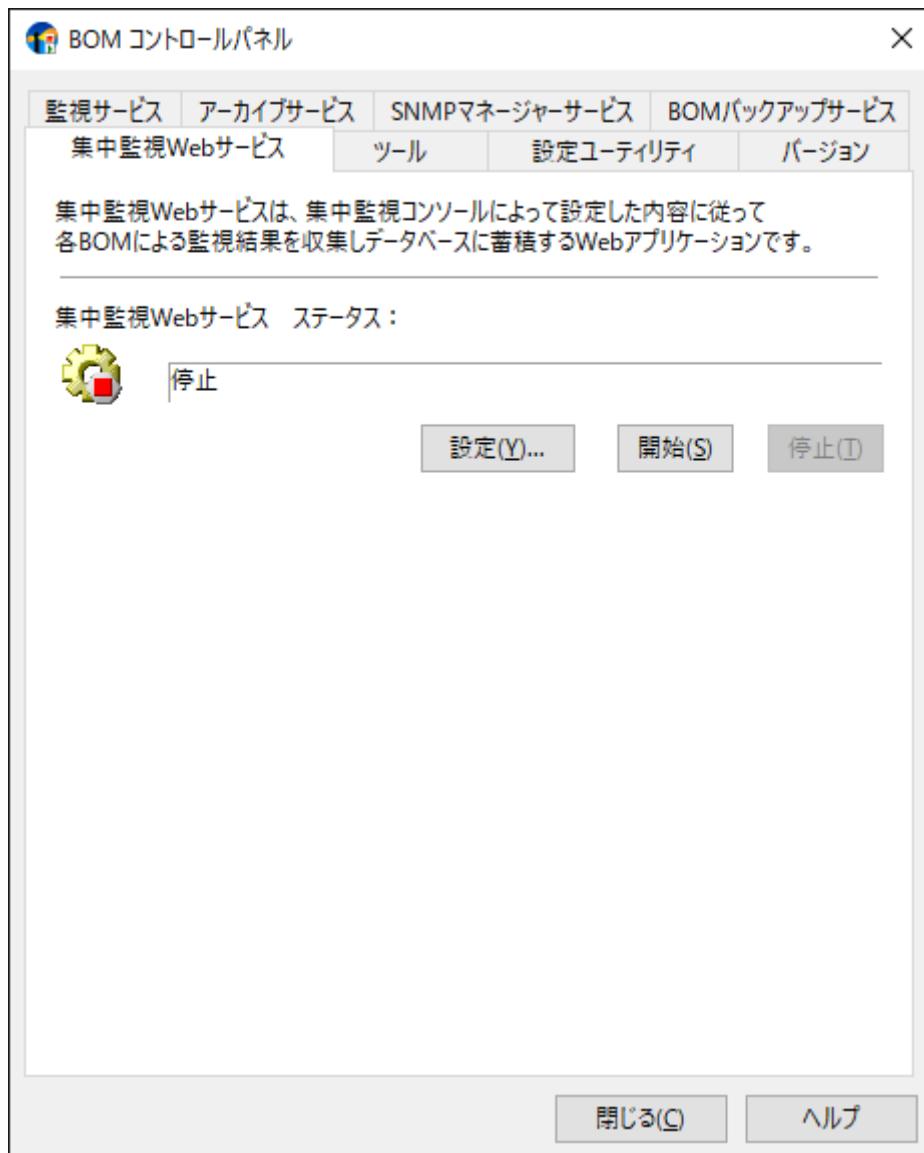


- [ファイル出力]ボタンをクリックすると、手順2.で表示されたバージョン情報をテキストファイルに出力することができます。

ファイル名 : VER-yyyyMMdd-hhmmss.txt
(yyyy:西暦年号、MM:月、dd:日、hh:時、mm:分、ss:秒を表します。)

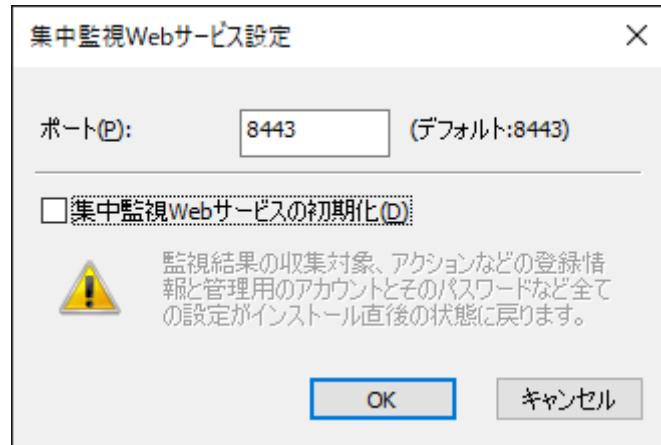
8. 「集中監視Webサービス」タブ

「集中監視Webサービス」タブでは、集中監視Webサービスの各種制御を行うことができます。



制御ボタン	説明
[開始]ボタン	集中監視Webサービスを"開始"させることができます。
[停止]ボタン	集中監視Webサービスを"停止"させることができます。
[設定]ボタン	"集中監視Webサービス設定"画面が表示されます。 集中監視Webサービスが"停止"状態でなければクリックできません。

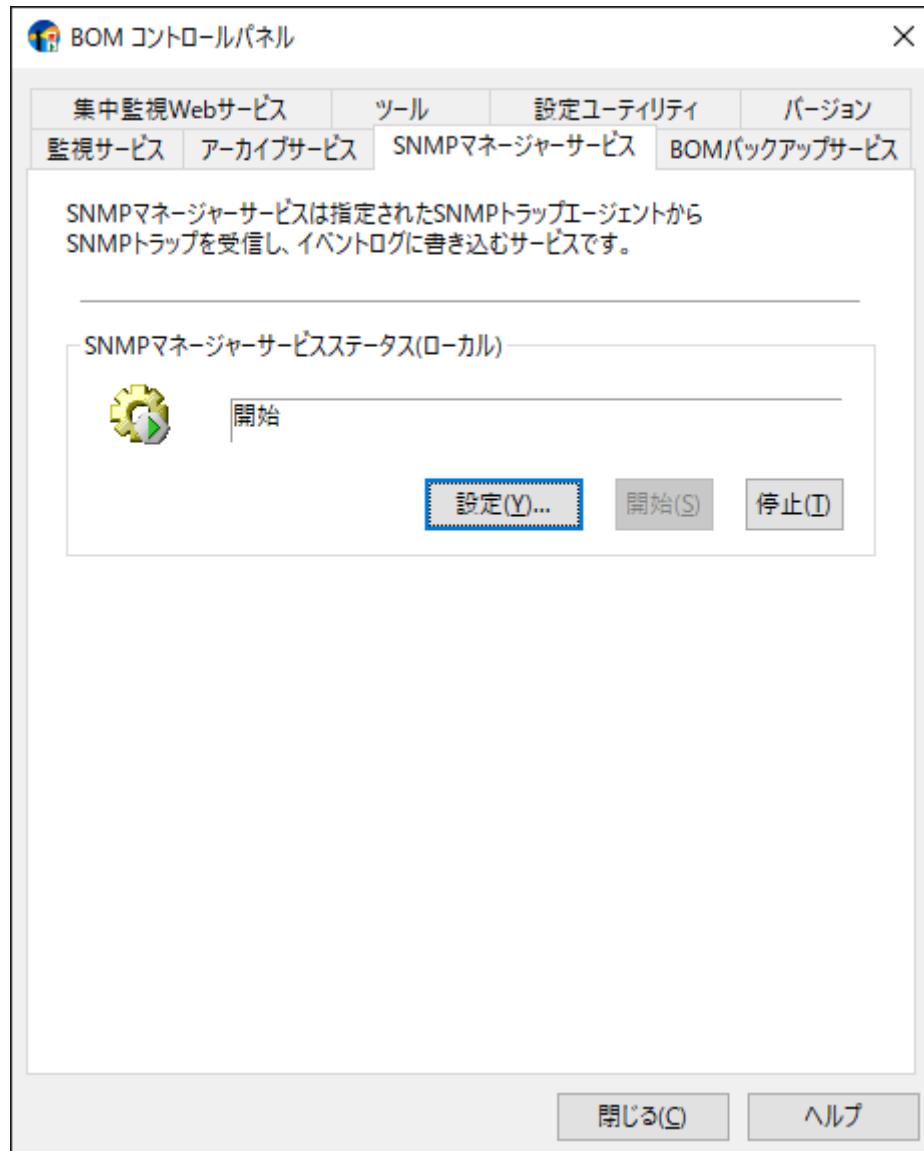
- "集中監視Webサービス設定"画面



- ・ "ポート" フィールドには、集中監視Webサービスが用いるポート番号を、"1"~"65535"の範囲で指定することができます。
- ・ "集中監視Webサービスの初期化" チェックボックスにチェックを入れて[OK]ボタンをクリックすると、BOM集中監視コンソールより行ったすべての設定をインストール直後の状態に初期化することができます。
- ・ その他詳細については、'BOM for Windows Ver.8.0 集中監視コンソールユーザーズマニュアル'を参照してください。

9. 「SNMPマネージャーサービス」タブ

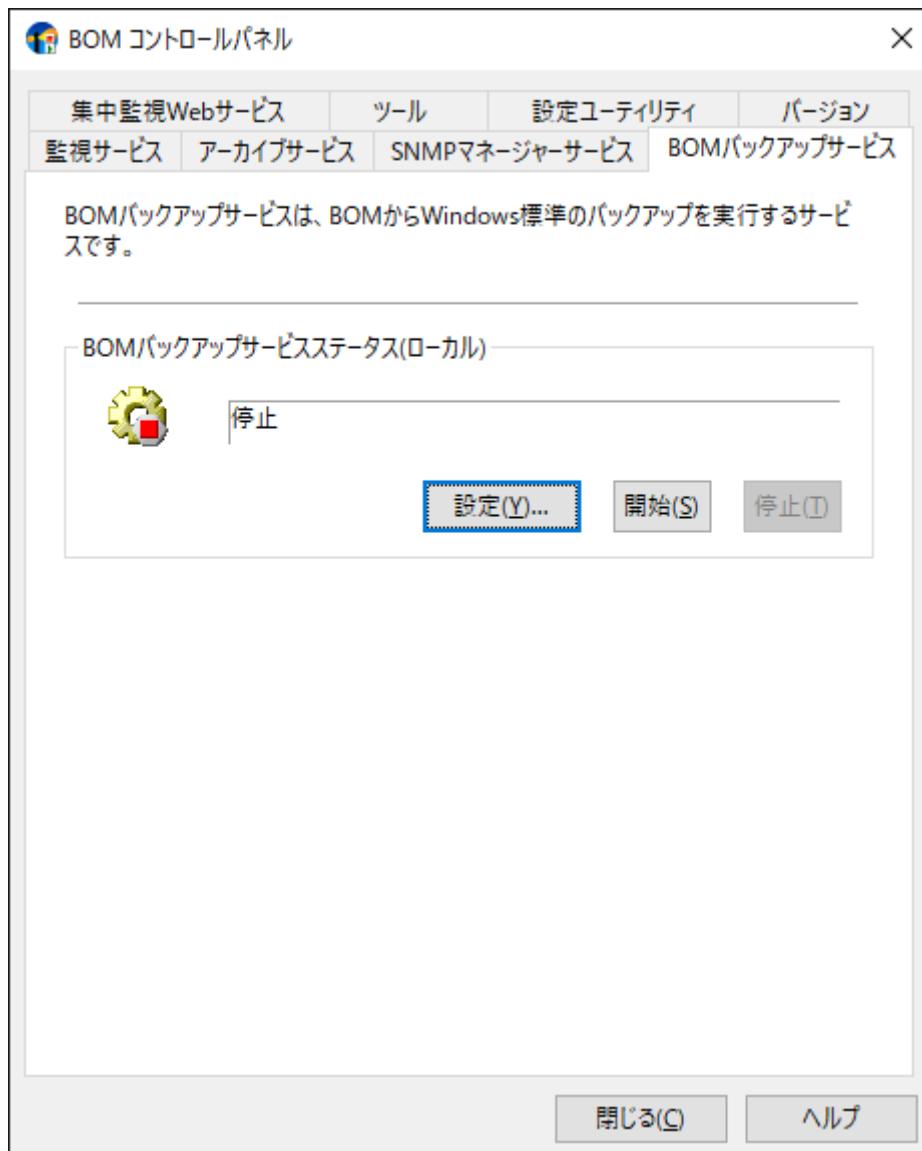
「SNMPマネージャーサービス」タブでは、SNMPマネージャーサービスの各種制御を行うことができます。



詳細については'BOM for Windows Ver.8.0 SNMPトラップ受信機能ユーザーズマニュアル'を参照してください。

10. 「BOM バックアップサービス」タブ

「BOM バックアップサービス」タブでは、バックアップサービスの各種制御を行うことができます。



詳細については'BOM for Windows Ver.8.0 バックアップ機能ユーザーズマニュアル'を参照してください。

第11章 障害リカバリ

1. バックアップとリストア

BOM 8.0インスタンスのすべての設定値をバックアップするには、BOMコントロールパネルを開き、バックアップ/リストアユーティリティを使用します。詳細は、'['バックアップ処理'](#)と'['リストア処理'](#)を参照ください。

2. コマンドラインツール

BOM 8.0インスタンスの設定データの保存と復元はコマンドラインからも実行できます。

- コマンドラインツールは、下記のフォルダーに格納されています。

[BOM 8.0 インストールフォルダー]¥BOMW8¥Bin

(1) BomCmd.exe

BomCmd.exeは以下の設定ファイルをインポート/エクスポートすることができます。

- 動作環境
- SNMPトラップ受信設定
- 監視設定

BomCmd.exeコマンド

動作	コマンド	引数	必須	説明
ヘルプ表示	BomCmd	-HELP	—	—
動作環境・ SNMPトラッ プ受信設定 のインポー ト	BomCmd ImportEnvironment	-h:ホスト名	○	接続先ホス ト
		-p:ポート番号	—	接続先ポー ト (省略時： 20080)
		-pw:パスワード	○	接続パスワ ード
		-in:入力ファイル名	○	—
動作環境・ SNMPトラッ プ受信設定 のエクスボ ート	BomCmd ExportEnvironment	-h:ホスト名	○	接続先ホス ト
		-p:ポート番号	—	接続先ポー ト (省略時： 20080)
		-pw:パスワード	○	接続パスワ ード
		-out:出力ファイル名	○	—

動作	コマンド	引数	必須	説明
監視設定のインポート	BomCmd ImportSetting	-h:ホスト名	○	接続先ホスト
		-p:ポート番号	—	接続先ポート (省略時 : 20080)
		-pw:パスワード	○	接続パスワード
		-in:入力ファイル名	○	—
		-i:インスタンス名	○	—
		-or	—	旧設定を上書きする
監視設定のエクスポート	BomCmd ExportSetting	-h:ホスト名	○	接続先ホスト
		-p:ポート番号	—	接続先ポート (省略時 : 20080)
		-pw:パスワード	○	接続パスワード
		-out:出力ファイル名	○	—
		-i:インスタンス名	○	—
		-type:ALL MON NTF	—	ALL:すべて/MON:監視/NTF:通知/省略時:ALL

(2) MxSysConf.exe

MxSysConf.exeはバックアップリストアを実行できます。

MxSysConf.exeコマンド

動作	コマンド	引数	必須	説明
バックアップ	MxSysConf.exe -backup	-file:バックアップファイル	○	バックアップファイルのパスを指定する
		-dlpw	—	パスワード設定除去オプション(※1)
		-keep	—	サービス状態保持オプション(※2)
		-log:ログファイル	—	バックアップ実行結果を保存するログファイルのパスを指定する
リストア	MxSysConf.exe -restore	-file:バックアップファイル	○	リストアするバックアップファイルのパスを指定する
		-log:ログファイル	—	リストア実行結果を保存するログファイルのパスを指定する

※1 本オプションを指定した場合、暗号化パスワードをバックアップから除去します。指定しない場合は、暗号化パスワードもバックアップ対象とします。

※2 バックアップの取得時、監視サービス、アーカイブサービスは停止しますが、本オプションを指定した場合、バックアップ完了後に各サービスを元の状態に戻します。指定しない場合は、バックアップ完了後もサービスを再開しません。

第12章 トラブルシューティング

制限事項、注意事項の最新情報については、リリースノートおよび弊社ホームページもあわせて参照してください。

A. BOM 8.0で監視が実行されない

- 対象のインスタンスの監視サービスが開始していることを確認します。
- BOM 8.0ツリー内で監視を実行した監視項目のグループと監視項目が有効になっていることを確認します。

この際、監視グループのスケジュールと各監視項目の有効の設定が両方有効にならないと監視が実行されないため注意が必要です。

B. BOM 8.0の代理監視が実行できない

代理監視に必要な設定は、'BOM for Windows Ver.8.0 インストールマニュアル'、もしくは本マニュアルの'[代理監視設定のポイント](#)'や'[代理監視設定が正しく監視できない場合のトラブルシューティング](#)'を参照してください。

C. BOM 8.0でリモートインスタンスの監視ができない

pingコマンドを使用してリモートシステムへのネットワーク接続を確認してください。

D. BOM 8.0から電子メールメッセージが送信できない

- "BOM for Windows"を右クリックし、コンテキストメニューのプロパティをクリックし、"プロパティ"画面のSMTPサーバー情報の設定値を確認します。
- メール送信アクション項目が有効になっていることを確認します。
- "メール送信のプロパティ"の「設定」タブに移動し、"宛先アドレス:"フィールドに正しい電子メールアドレスが入力されていることを確認します。

E. SNMPトラップが機能しない

'[SNMP情報の設定](#)'項目を参照し、SNMPの設定を行っているか確認してください。

F. TCP接続エラー

- BOM 8.0が稼働するコンピューターが正常にネットワークへ接続していることを確認します。
- 最低限スイッチまたはハブに接続し、ネットワークが機能していることを確認します。
- BOMマネージャーの"BOM for Windows Ver.8.0 (ローカル)"プロパティ画面と、BOMコントロールパネル→「監視サービス」タブ→"ヘルパーサービス設定"画面のBOMヘルパーサービスポート番号が同じであることを確認します。
- コンピューターのBOMヘルパーサービスが起動していることを確認します。
- 代理監視元コンピューターと代理監視先コンピューターの経路上にファイアウォールが設置されている場合や、代理監視先コンピューターのOSのWindows ファイアウォールが有効になっている場合には、'[認証、データ連携用ポートの開放](#)'で解説した通信をブロックしている可能性があります。

その場合には、経路上のファイアウォールやWindows ファイアウォールが必要な通信をブロックしていないか確認してください。

G. MMCハングアップによる強制終了後、同インスタンスへの接続ができない

何らかの要因でMMCがハングアップして強制終了した場合、BOMマネージャーに接続できない状態になります。この状況では、BOMマネージャーを起動して接続を試みても"管理者モードはすでに使用されています"というエラーメッセージが表示され、接続できなくなります。

このような状況になった場合は、コントロールパネルのサービスからBOMヘルパーサービスを再起動してください。

H. インストール時に"1607:InstallShield Scripting Runtimeをインストールできません"とポップアップができる

インストールを開始すると、InstallShieldより"1607:InstallShield Scripting Runtimeをインストールできません"というポップアップができるものの、インストール自体は進行します。

この原因は下記の問題が考えられるので、下記の該当する原因を取り除いた上で、再度インストールを行ってください。

- substコマンドを使用して作成した仮想ドライブからセットアッププログラムを実行している。
- インストーラMsiexec.exeが正しく登録されていない。
- ユーザーアカウントに、C:¥Windows¥Installerフォルダーにアクセスするためのアクセス許可がない。
- 古いバージョンのWindowsインストーラエンジンが、現在利用できなくなっているネットワークドライブからインストールした。
- コンピューターにソフトウェアをインストールするためのアクセス許可がユーザー アカウントにない。
- Msiexec.exeの別のインスタンスが実行されている。
- Windowsインストーラベースの別のセットアッププログラムが実行されている。
- Windows OSが破損している。

I. インスタンスの停止処理がタイムアウトした場合の動作について

監視実行中に監視サービスが停止した場合にはインスタンスアイコンが灰色になり、BOMマネージャーの操作ができません。監視が終了すると操作可能になりますが、インスタンスアイコンは灰色のままです。この際は、インスタンスの再接続あるいはBOM 8.0スナップインを選択して最新の情報に更新してください。

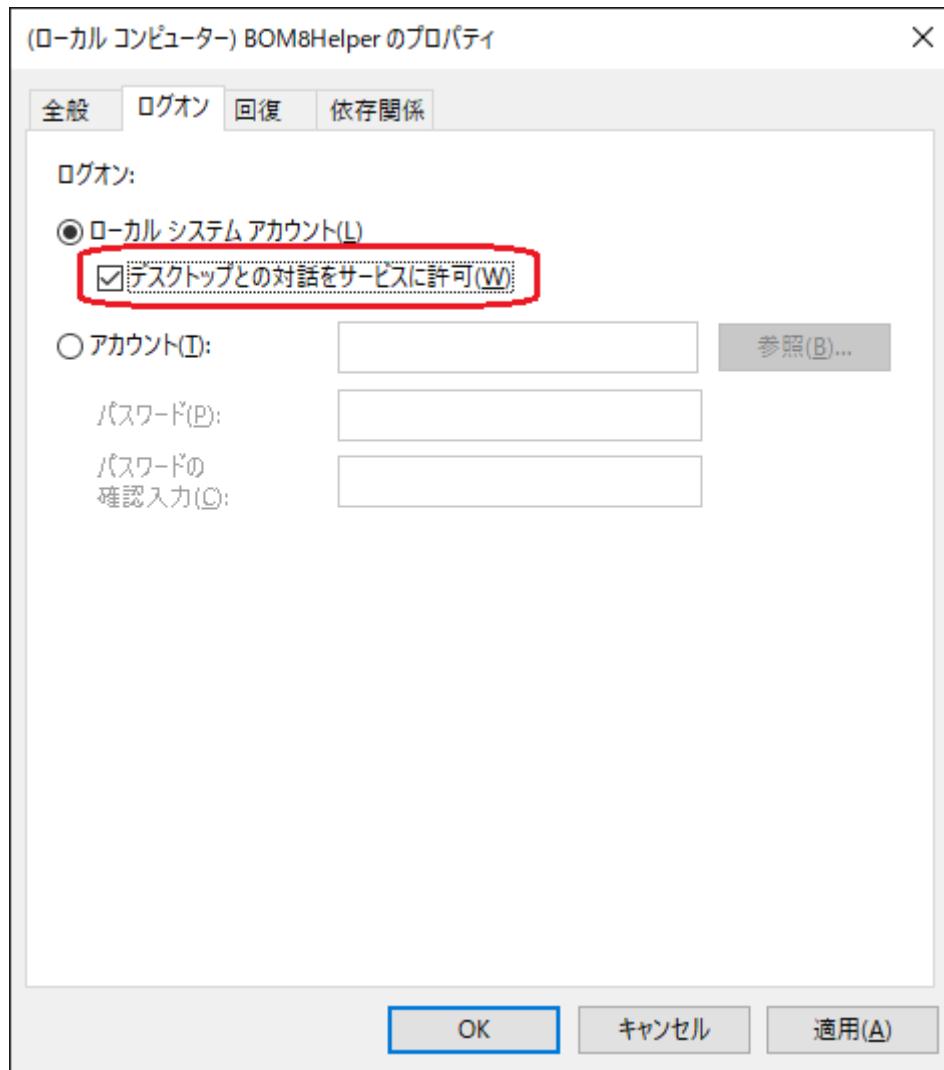
また本現象の後、テキストログ監視、イベントログ監視で次の監視が実行されない場合には、下記の対処を実行してください。

- 監視項目を再度新規作成する
- 下記のファイルを削除する

フォルダー : C:¥ProgramData¥SAY Technologies¥BOMW8¥Environment¥Instance¥WIN-NBIAMPVUFID¥PersistentData
ファイル名 : GRP[該当グループNo.]MON[該当監視項目No.]

J. カスタムアクション/カスタム通知でコンソールプログラム（メモ帳などのexeファイル）を指定した場合、指定コンソールプログラムが画面上に見えない。

ローカルシステムアカウントを使用するローカル監視の場合のみ、監視サービスとBOMヘルパーサービスの設定でデスクトップとの対話をサービスに許可をチェックいれることで対応できます。



この場合、監視サービスとBOMヘルパーサービスの再起動が必要です。ただし、代理監視の場合には、カスタムアクション/カスタム通知でコンソールプログラムは指定できません。

K. BOMヘルパーサービス通信での失敗のタイムアウト時間を変更したい。

BOMヘルパーサービスの通信タイムアウトは既定値3分になっています。

この時間を変更する場合は、下記のiniファイルの設定を変更してからBOMヘルパーサービス（BOM8Helper）を再起動してください。

- iniファイルの保存場所

フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config
ファイル名 : MxHelper.ini

- iniファイルの設定変更箇所

[Option]

ProcessTimeout = [数値]

- [数値]部分で秒数を指定して保存します。

L. ディスク容量監視での"前回の値"としきい値の関係

前回の値については端数を切り捨てて表示しています。

例えば、12.7GBの値であっても12GBと表示されます。

M. 代理監視時のSNMPトラップの送信元について

代理監視のSNMPトラップアクションの場合、代理監視先コンピューターではなく、代理監視元コンピューターのIPアドレスがSNMPマネージャーに送信されます。

あらかじめSNMPマネージャーには代理監視先だけではなく、代理監視元のコンピューターも登録してください。

N. プロセスタイムアウトのエラーが出る

多くの監視項目の設定を行っている場合など、その監視項目を複製しようとするときプロセスタイムアウトのエラーが出ることがあります。

このエラーメッセージが頻繁に出る場合には下記のiniファイルの設定を変更してからBOMヘルパーサービス(BOM8Helper)を再起動し、ヘルパーサービスのタイムアウト時間を延ばしてください。既定値は180(秒)ですが、この数値を大きくすることで現象が回避できます。

- iniファイルの保存場所

フォルダー : C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8\Environment\Config

ファイル名 : MxHelper.ini

- iniファイルの設定変更箇所

[Option]

ProcessTimeout = [数値]

- [数値]部分で秒数を指定して保存します。

0. Windows ファイアウォール等でTCPポートをすべて遮断した場合の現象

Windowsファイアウォールでポートをすべて遮断した場合、代理監視の設定/監視を行うことができないため、その際に一部の監視項目では監視項目のプロパティで、「設定」タブを押下したときにそれぞれ異なった問題が発生する場合があります。

対象	動作
システムのエラーメッセージ	OSが返すエラーメッセージはすべてそのままエラーメッセージとして表示されます。
ディスク容量監視	ディスク一覧が取得できない。 "ネットワークパスが見つかりません。"のエラーメッセージが出力される。
フォルダー・ファイル監視	[参照]ボタンをクリックした際に、ディスク情報一覧が取得できない。 "ネットワークパスが見つかりません。"のエラーメッセージが出力される。
サービス監視	[参照]ボタンをクリックした際に、サービス一覧が取得できない。 "RPCサーバーを利用できません。"のエラーメッセージが出力される。
プロセッサ監視	インスタンスが取得できない。 "ネットワークパスがみつかりません。"のエラーメッセージが出力される。
メモリ監視	Available Bytesの値が取得できない。 "ネットワークパスがみつかりません。"のエラーメッセージが出力される。
ディスク処理待ち行列長監視	インスタンスが取得できない。 "ネットワークパスがみつかりません。"のエラーメッセージが出力される。
ネットワークインターフェイス監視 ネットワークアダプター監視	インスタンスが取得できない。 "ネットワークパスがみつかりません。"のエラーメッセージが出力される。
プロセス監視	プロセス一覧が取得できない。 "ネットワークパスが見つかりません。"のエラーメッセージが出力される。
パフォーマンスカウンター監視	パフォーマンスオブジェクト一覧が取得できない。 "ネットワークパスが見つかりません。"のエラーメッセージが出力される。
テキストログ監視	[参照]ボタンをクリックした際に、ディスク情報一覧が取得できない。 "ネットワークパスが見つかりません。"のエラーメッセージが出力される。

- 影響のないもの

対象	動作
Ping監視	代理監視のインスタンスでも、pingを実際に実行するのは代理監視元であるためファイアウォールの影響を受けない。
ポート監視	代理監視のインスタンスでも、ポート監視を実際に実行するのは代理監視元であるためファイアウォールの影響を受けない。

P. エクスポート先の書き込み権限について

BOMマネージャーを操作してファイルに直接書き出す操作（監視設定のエクスポート等）では、必ずログオンしたユーザーが指定したフォルダーに書き込める権限があることを確認してください。もし書き込める権限がない場合には、エラーになります。

Q. リソース不足での監視サービス停止のエラーメッセージ

BOM 8.0以外のコンピューター環境の影響でBOM 8.0がリソースを確保できず、監視サービスが停止する場合には、BOMマネージャーの"ログ"→"ヒストリー"→"サービス"配下にメモリ容量不足というエラーメッセージが出力され、監視サービスは停止します。

上記のヒストリーのエラーメッセージの後、"ログ"→"ヒストリー"→"サービス"配下に情報メッセージが出力され、メモリ不足が原因で監視サービスが停止したことが確認できます。

第13章 エラーコード、エラー内容一覧

1. BOM 8.0監視サービスのヒストリー サービスログ記述内容一覧

カテゴリ	メッセージ内容	出力契機
情報	%1 サービスは正常に開始しました。 PID: %2 インスタンス ID: %3	サービス開始時
情報	%1 サービスは正常に停止しました。 PID: %2 インスタンス ID: %3 経過時間: %4 (ミリ秒)	サービス正常停止時
情報	%1 サービスは正常に動作中です。 PID: %2 インスタンス ID: %3 経過時間: %4 (ミリ秒) スケジューラ: %5 イベントハンドラ: %6 アクティブな監視ワーカーの数: %7 アクティブなアクションワーカーの数: %8	毎日24時に出力
情報	%1' でログオンしました。	代理監視 開始時（再接続時）
情報	%1 サービスは、メモリの不足またはエラーのため停止しました。 PID: %2 インスタンス ID: %3 経過時間: %4 (ミリ秒)	サービス異常停止時
警告	前回の監視が完了していないため、監視 '%1' はスキップされました。	前回の監視が完了する前に次の監視が実施された場合(監視輻輳時)
情報	監視 '%2' のステータスが %10 に変化しました。 ID: %1 実行時間: %6 値: %9	監視ステータス変化時

カテゴリ	メッセージ内容	出力契機
エラー	監視 '%2' はコード %8 で失敗しました。 ID: %1 オブジェクト名: %3 値名: %4 オプション引数: %5 実行時間: %6 メッセージ: %11 ソース: %12 説明: %13	監視失敗時
情報	アクション [%1] '%2' は成功しました。 ID: %1 プログラム名: %3 引数: %4 実行時間: %5 経過時間: %6 出力: %8	アクション成功時
エラー	アクション [%1] '%2' はコード %7 で失敗しました。 ID: %1 プログラム名: %3 引数: %4 実行時間: %5 経過時間: %6 出力: %8	アクション失敗時
エラー	アクション [%1] '%2' はコード %7 で失敗しました。 ID: %1 プログラム名: %3 引数: %4 実行時間: %5 メッセージ: %6	アクション実行失敗時
情報	アクション [%1] '%2' は開始しました。	アクション開始時
情報	通知 [%1] '%2' は開始しました。	通知アクション開始時
警告	アクション [%1] はスキップされました。 インスタンスが停止しているため、アクション [%1] '%2' はスキップされました。	サービス停止時にアクション実行中で あった場合
警告	アクション実行が輻輳しています。 この状態が続くとアクションの実行が遅延し、最終的に監視サービスが停止します。	アクション輻輳時
エラー	ライセンス情報の取得に失敗しました。%1	ライセンス情報取得失敗時

カテゴリ	メッセージ内容	出力契機
エラー	致命的なエラーが発生したためサービスを継続できません。%r%1	バグ(予想外のエラー)
エラー	メモリ容量が不足しています。 致命的なエラーが発生したためサービスを継続できません。	メモリ不足時
エラー	設定ファイルの読み込みに失敗しました。(0x80000403) XMLファイルの読み込みに失敗しました (MonitorItem)。	監視設定ファイルの破損を検知した場合

2. メール送信エラーコード

ErrorCode	日本語メッセージ	エラー内容
0	メール送信が完了しました。	送信成功
101	パラメーターが間違っています。 [%1!s!].	パラメーターエラー
102	パスワードの復号化に失敗しました。	パスワード復号化失敗
103	リフレッシュトークンの復号化に失敗しました。	暗号化されたリフレッシュトークンの復号化に失敗
201	ソケットの初期化に失敗しました。 %1!s! サーバー:[%2!s!]	Socket初期化工ラー(SocketStartup)
202	サーバーのIPアドレスが見つかりません。 %1!s! サーバー:[%2!s!]	サーバーのIP Addressが見つからない
203	ソケットの初期化に失敗しました。 %1!s! サーバー:[%2!s!]	Socket 初期化工ラー(Create)
204	ソケットの初期化に失敗しました。 %1!s! サーバー:[%2!s!]	Socket 初期化工ラー(CreateEvent)
205	ソケットの初期化に失敗しました。 %1!s! サーバー:[%2!s!]	Socket 初期化工ラー(EventSelect)
206	ソケットの接続エラー。 %1!s! サーバー: [%2!s!]	Socket接続エラー
207	ソケットの接続がタイムアウトになりました。 %1!s! サーバー:[%2!s!]	Socket接続タイムアウト
208	ソケットの接続エラー。 %1!s! サーバー: [%2!s!]	Socket 接続エラー(EnumNetworkEvents)
209	ソケット切断エラー。	Socket 切断エラー
210	ソケット読み取りエラー。 %1!s!	Socket Readエラー
211	ソケット送信エラー。 %1!s!	Socket Sendエラー
222	SMTP 接続エラー。 %1!s! %2!s!	SMTP 接続エラー
223	SMTP 初期化、ローカルホストが見つかりません。 %1!s!	SMTP 初期化 Localhostが見つからない
224	SMTP 初期化コマンドエラー。 %1!s! %2!s!	SMTP 初期化 コマンドエラー
231	-	Base64 Encodeに失敗
232	-	Base64 Decodeに失敗
241	POP3サーバー接続エラー。 %1!s! %2!s!	POP3サーバー接続エラー

ErrorCode	日本語メッセージ	エラー内容
242	POP3ユーザー エラー。 %1!s! %2!s!	POP3ユーザー エラー
243	POP3 パスワード エラー。 %1!s! %2!s!	POP3 パスワード エラー
251	SMTP認証 (CRAM-MD5)がサポートされていません。	SMTP認証 CRAM-MD5 未サポート
252	SMTP認証 (CRAM-MD5) に失敗しました。 %1!s! %2!s!	SMTP認証 CRAM-MD5 エラー
261	SMTP認証(PLAIN)がサポートされていません。	SMTP認証 PLAIN 未サポート
262	SMTP認証(PLAIN)に失敗しました。 %1!s! %2!s!	SMTP認証 PLAIN エラー
271	SMTP認証(CRAM-MD5, PLAIN)に失敗しました。	SMTP認証 (PLAIN CRAM-MD5共)エラー
281	SMTP認証(LOGIN)がサポートされていません。	SMTP認証 LOGIN 未サポート
282	SMTP認証(LOGIN)に失敗しました。 %1!s! %2!s!	SMTP認証 LOGIN エラー
283	SMTP認証(OAuth2)がサポートされていません。	SMTP認証 OAuth2 未サポート
284	SMTP認証(OAuth2)に失敗しました。 %1!s! %2!s!	SMTP認証 OAuth2 エラー
285	OAuth2アクセストークンの取得に失敗しました。 %1!s!	アクセストークンの取得に失敗
291	STARTTLSがサポートされていません。	メールサーバーがSTARTTLSに対応していない
301	メールアドレスが不正です。 %1!s!	メールアドレス不正
302	送信先アドレスがありません。	送信先なし
303	送信元表示名を設定できません。	送信元表示名エラー
304	ユーザー定義ヘッダー名とテキストの数は一致していません。	ユーザー定義ヘッダー不一致エラー (headname,headtextの数が一致しない)
305	ユーザー定義ヘッダーを設定できません。 %1!s!	ユーザー定義ヘッダー設定エラー
306	件名を設定できません。	件名設定エラー
307	本文メッセージを設定できません。	本文追加工エラー
308	メール送信が失敗しました。	メール送信エラー
351	添付ファイル名が不正です。	添付ファイル名が不正

ErrorCode	日本語メッセージ	エラー内容
352	添付ファイル名は予約デバイス名です。	添付ファイル名が予約デバイス名
353	添付ファイルが見つかりません。	添付ファイルが見つからない
354	添付ファイル名はフォルダーです。	添付ファイル名がフォルダー
355	添付ファイルはアクセスが拒否されました。	添付ファイルアクセス拒否
356	ファイルを添付できません。	添付ファイルを添付できない
357	添付ファイルを圧縮できません。	添付ファイル圧縮エラー
358	同名の添付ファイルが既に存在します。	添付ファイル名が既に使用されている
371	埋め込みテキストファイル名が不正です。	本文埋め込みファイル名が不正
372	埋め込みテキストファイル名は予約デバイス名です。	本文埋め込みファイル名が予約デバイス名
373	埋め込みテキストファイルが見つかりません。	本文埋め込みファイルが見つからない
374	埋め込みテキストファイル名はフォルダーです。	本文埋め込みファイル名がフォルダー
375	埋め込みテキストファイルはアクセスが拒否されました。	本文埋め込みファイルアクセス拒否
376	埋め込みファイルはテキストファイルではありません。	本文埋め込みファイルがテキストファイルではない
377	埋め込みテキストファイルオープンエラー。	本文埋め込みファイルオープンエラー
378	埋め込みテキストファイル読み取りエラー	本文埋め込みファイルリードエラー
391	ファイルサイズリミットを超えてます。	ファイルサイズオーバー
501	例外が発生しました。 %1!s! %2!s!	例外発生
502	メールデータの初期化工ラー。	CoCreateInstance Error
503	351又は371のエラーメッセージ	ファイル名不正
504	352又は372のエラーメッセージ	予約デバイス名
505	353又は373のエラーメッセージ	ファイルが見つからない
506	354又は374のエラーメッセージ	指定ファイルがフォルダー
507	355又は375のエラーメッセージ	アクセス拒否
601	パラメーターファイルエラー	パラメーターファイルの解析に失敗したとき
---	その他のエラー。	上記以外のエラーが発生し、エラーメッセージが定義されていない場合に表示される。

3. シャットダウンアクション時のエラーコード表

エラーコード	エラー内容
0	正常終了
100	パラメーターが間違っています。
101	セッションの取得に失敗しました。 (以下省略)
103	シャットダウンに失敗しました。 (以下省略)

4. SNMPトラップ送信のエラーコード表

MxTrap.exe ExitCode	Description	備考
0	Success	
1	snmptrap.exe 実行エラー	エラー詳細は、標準出力に表示されるため、BOM マネージャーのヒストリー参照
87	パラメーター エラー	エラー詳細は、標準出力に表示されるため、BOM マネージャーのヒストリー参照
1460	タイムアウト	snmptrap.exeの終了待ちタイムアウト
GetLastError値	CreateProcessエラー	CreateProcessの結果のGetLastError値
GetLastError値	snmptrap.exe終了コード取得エラー	snmptrap.exeのGetExitCodeProcess失敗時のGetLastError値

5. サービスコントロール時のエラーコード表

終了コード	エラー内容
87	パラメーターが間違っています。
1052	要求された制御はこのサービスに対して無効です。
1060	指定されたサービスはインストールされたサービスとして存在しません。
1460	タイムアウト期間が経過したため、この操作は終了しました。
1722	RPCサーバーを利用できません。

6. イベントログ書き込みアクションのエラーコード

イベントログに表示される イベントID	イベントログに書き込む エラーコードDefine	備考
5010	ERROR_INVALID_PARAMETER_LOG	コマンドラインパラメーターエラー -s もしくは --m は無い
3407	ERROR_PUT_EVENTLOG	イベントログ書き込みエラー
3408	ERROR_APPLOG_FULL	アプリケーションログが一杯
5011	ERROR_REG_CANT_OPEN	レジストリがオープン不可
5012	ERROR_REG_QUERY_VALUE	レジストリ読み出しエラー
5013	ERROR_REG_CANT_CREATE	レジストリキー作成不可
5014	ERROR_REF_SET_VALUE	レジストリ書き込みエラー

7. BomCmd.exeのエラーコード表

コード	メッセージ	備考
101	必須パラメーター (xxx) が有りません。	必須パラメーターがない場合
102	パラメーター (-xxx:xxx) で値のチェックエラーが発生しました。 : %s	パラメーター値が間違えている場合に発生する。 詳細メッセージも表示する。
104	監視エージェント (xxx) が稼動している為コマンドを実行できません。 全ての監視を停止してください。	
105	監視エージェント (xxx) が稼動している為コマンドを実行できません。 このインスタンスの監視を停止してください。	
111	レジストリアクセス (xxx) でエラーが発生しました。	
112	ヘルパー (%s) でエラーが発生しました。	xxxにヘルパーからのエラーメッセージが入る。
113	ファイル出力でエラーが発生しました。 : %s	
114	ファイル読込でエラーが発生しました。 : %s	
115	ファイルチェックエラーが発生しました。 : %s	
116	対応していないバージョンのBOMです。 : %s	IMPORT時のマニフェストチェックで、エラーになった場合。 マニフェストファイルが無い場合。 ファイルが壊れている場合。 バージョンが違う場合等
901	内部処理でエラーが発生しました。 : %s	

8. MxSysConf.exeのエラーコード表

エラーコード	エラーメッセージ	説明
5000	OpenSCManagerエラー。	SCMエラー
5005	CreateMutexエラー。(%1)	CreateMutexエラー
5010	BOMマネージャーを閉じてください。	バックアップ、リストア時にBOMマネージャーが起動している場合
5011	このプログラムはすでに起動されています。	多重起動チェック
5012	%1 処理が中止されました。	管理者モードが接続されている場合
5020	モジュールを初期化できません(%1)。	Bom7Helper.dll初期化確認
5021	インストールディレクトリが見つかりません。 (%1)	インストールディレクトリのチェック (HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\SAY Technologies\BOMW8\InstallDir)
		BINディレクトリのチェック (HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\SAY Technologies\BOMW8\BinDir)
5023	ファイルパスが正しくありません。	書庫解凍時エラー (-fileに指定したディレクトリが存在しない)
024	このファイルはバックアップファイルではありません。	バックアップファイル以外だった場合
5025	-	環境データをワークディレクトリにコピー時
		インスタンスデータをワークディレクトリにコピー時
		MANIFEST.MF作成時
		INSTANCE.MF作成時
		ワークディレクトリを圧縮時
5026	%1 上記のファイル名は無効です。	ワークディレクトリに解凍時
		-fileオプションのファイル名に使用不可文字『> < ? : / * "』いずれかの文字が含まれる場合。 または5文字未満の場合。
5027	指定したログ出力先のフォルダ ーは存在しません。	-logオプションで存在しないフォルダーを指定した場合
5100	-	AtatchConsole関数はWindows XP以降でないOSに非対応のため、本コマンドを実施しない。

5104	バックアップファイルが指定されていません。	パラメーターエラー (-fileの指定がない)
5105	インスタンスの列挙に失敗しました。	インスタンスEnum取得エラー
5107	バックアップファイル名とログファイル名が同じファイルになっています。 異なるファイルにしてください。	fileとlogの出力先+ファイル名が同じ場合
5108	リストアに失敗しました。 バックアップファイルが不正です。	バックアップファイルが不正 (MANIFEST.MFとINSTANCE.MFが両方存在しない)
5109	拡張子が間違っています。	ファイル拡張子不一致 (ログを含めない場合はCAB、ログを含める場合はZIPを指定する必要がある。)
5110	バックアップファイルのバージョンとBOMのイルのバージョンとBOMのバージョンが異なっています。	バックアップファイルのバージョン (MANIFEST.MFのMajorVersion) とリストア先のBOMのMajorVersionが異なる場合
5111	SMTPの設定ファイルがありません。 (%1)	バックアップでパスワードを消去しようとした場合にSMTP.xmlが存在しない場合
-2147024882	この操作を完了するのに十分な記憶域がありません	Windowsエラーコードコネクト作成時のエラー (メモリ不足時)
GetLastError 値	GetLastErrorメッセージ	バックアップ Execute時その他エラー

9. エラーメッセージが特殊なもの

監視項目	現象	エラーメッセージ
プロセッサ監視	インスタンスが取得できない。	ネットワークパスがみつかりません。
メモリ監視	Available Bytesの値が取得できない。	ネットワークパスがみつかりません。
ディスク処理待ち行列長監視	インスタンスが取得できない。	ネットワークパスがみつかりません。
ネットワークインターフェイス監視	インスタンスが取得できない。	ネットワークパスがみつかりません。
ネットワークアダプター監視	インスタンスが取得できない。	ネットワークパスがみつかりません。
イベントログ監視（除外指定）	ログファイルタイプや種類など、既定の情報がリセットされる。	ネットワークパスがみつかりません。
イベントログ監視（選択指定）	ログファイルタイプや種類など、既定の情報がリセットされる。	ネットワークパスがみつかりません。
ディスク容量監視	ディスク一覧が取得できない。	ネットワークパスが見つかりません。
フォルダー・ファイル監視	[参照]ボタンをクリックした際に、ディスク情報一覧が取得できない。	ネットワークパスが見つかりません。
サービス監視	[参照]ボタンをクリックした際に、サービス一覧が取得できない。	RPCサーバーを利用できません。
プロセス監視	プロセス一覧が取得できない。	ネットワークパスが見つかりません。
パフォーマンスカウンタ監視	パフォーマンスオブジェクト一覧が取得できない。	ネットワークパスが見つかりません。
テキストログ監視	[参照]ボタンをクリックした際に、ディスク情報一覧が取得できない。	ネットワークパスが見つかりません。

第14章 予約済み変数

BOM 8.0では以下の予約済み変数を定義しており、アクション項目や通知項目でこの予約済み変数を設定すると、実行時には実際の値に展開されます。

予約済み変数	説明
\$(TargetComputer)	監視対象コンピューター
\$(TargetObject)	監視対象オブジェクト
\$(CurrentTime)	現在時刻
\$(ElapsedTime)	直近の監視サービス開始からの経過時間 [ミリ秒]
\$(InstallDir)	BOM for Windowsのインストールフォルダー 既定導入時：“C:\Program Files\SAY Technologies\BOMW8”
\$(InstanceID)	インスタンスID
\$(InstanceName)	インスタンス名
\$(GroupID)	グループID
\$(GroupName)	グループ名
\$(MonitorID)	監視項目ID
\$(MonitorName)	監視項目名
\$(ActionID)	アクション項目ID
\$(ActionName)	アクション項目名
\$(Runtime)	監視サービスにより、監視またはアクションが実行された時刻
\$(Duration)	監視またはアクションの実行に要した時間 [秒]
\$(ResultCode)	監視またはアクションの実行結果を示す値
\$(Value)	監視値
\$(Status)	監視ステータス：(正常/注意/危険/失敗)
\$(DetectedDataDir)	検出されたデータの出力先フォルダー \$(DataDir)\Environment\Instance\\$(InstanceID)\DetectedData
\$(DataDir)	BOM for Windowsのデータフォルダー 既定導入時：“C:\ProgramData\SAY Technologies\BOMW8”
\$(ExitCode) [※1]	アクション終了コード

予約済み変数	説明
\$(Result) [※1]	アクション実行結果：(成功/エラー/失敗)
\$(ThresholdY) [※2]	注意のしきい値
\$(ThresholdR) [※2]	危険のしきい値

※1 "\$(ExitCode)"および"\$(Result)"は通知項目のみで使用でき、アクション項目では使用できません。

※2 "\$(ThresholdY)"および"\$(ThresholdR)"はBOM マネージャー上の予約済み変数の一覧に表示されません。これらの変数を使用する場合は文字列を手入力してください。

第15章 ライセンス表記

BOM 8.0はそれぞれのライセンス形態に従ってオープンソースソフトウェアを利用しています。各ソフトウェアを開発された開発者、および開発コミュニティの皆様に深く感謝いたします。

各ソフトウェアを開発された開発者、および開発コミュニティにより同梱が定められているオープンソースのライセンス条文については、以下のフォルダーに格納されています。

[BOM 8.0 インストールフォルダー]¥BOMW8¥Common¥Licenses

【BOM 8.0で使用しているオープンソースソフトウェアの例】

boost	OpenSSL
gSOAP	SQLite3
CPJNPOP3Connection	W3Mfc
CPJNSMTPConnection	SSLWrappers
CryptoWrappers	Net-SNMP
High-speed Charting Control	PicoJSON
PuTTY	AWSSDK.Core
AWSSDK.S3	Jersey
go言語	WTL
unzip	zip
AtIServer	FastReport.Net
nkf (ISO-2022-JP)	yaml-cpp
pugixml	plog
cpprestsdk	WebSocket++
zlib	curl
asio	A basic Windows service in C++ (CppWindowsService)
fmt	

BOM for Windows Ver.8.0 ユーザーズマニュアル

2022年5月11日 初版

2025年9月5日 改訂版

著者・発行者・発行

セイ・テクノロジーズ株式会社

バージョン 8.0.20.1

(C) 2022 SAY Technologies, Inc.